八重山歌謡の表現の研究
−植物を中心に−

佐々木 和子

沖縄県立芸術大学大学院

博士学位論文（論博７）

２０１９年

「八重山歌謡の表現の研究 -植物を中心に-」

目　　次

凡 例

はじめに　・・・

２．技巧としての植物表現 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
３．実景描写の植物表現 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
（１）実景描写の謡われる「場」による転換 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
（２）呪術性と実景表現 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
（３）主観的視点と客観的視点 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
４．まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
第２節　植物歌の表現事例 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
１．「大川原（うふんがーら）ぬぴんに木」－　ヒルギ　－
（１）「大川原（うふんがーら）ぬぴんに木」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
（２）「大川原（うふんがーら）ぬぴんに木」の歌の内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
（３） 歌の成立の背景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
（４） 歌の心意と「場」と表現様式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
２．「山樫木（やまかしに）あよう」－　オキナワウラジロガシ　－
（１）「山樫木（やまかしに）あよう」とその類歌 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
（２）「山樫木（やまかしに）あよう」とその類歌の内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
（３） 歌の成立の背景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79
（４） 歌の心意と「場」と表現様式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
３．「野底浜（ぬすくはま）ゆんぐどぅ」
－　ハマゴウ・ビロウ・デイゴ・イヌマキ・ソテツ・アマミヒトツバハギ　-
（１）「野底浜（ぬすくはま）ゆんぐどぅ」とその類歌 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
（２）「野底浜（ぬすくはま）ゆんぐどぅ」の歌の内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
（３） 歌の表現様式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
（４） 八重山の歌と宮古の歌にみる類似表現 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
（５） 歌の心意と「場」と表現様式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
４．「くくるだきあゆ」　－　ニラ・チョマ　－
（１）「くくる炊きアユ」とその類歌 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
（２）「くくるだきあゆ」の歌の内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 100
（３） 他地域の歌にみる風と航海の表現 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 106
５．「いきぬぶしじらば」－　オキナワウラジロガシ・タブノキ・オガタマノキ-

（1）「いきぬぶしじらば」とその類歌 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 112
（2）「いきぬぶしじらば」の歌の内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113
（3）「いきぬぶしじらば」とその類歌の先行研究 ・・・・・・・・・・・・・・・ 116
（4） 歌の背景 － 宮古と八重山の「死体植物化生」の詞章を中心に －・・・ 118
（5） 八重山歌謡の死体化生のモチーフ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 124
6．「ゆびが夜(ゆ)ゆんぐとぅ」 － ユウガオ・ヘチマ －
（1）「ゆびが夜(ゆ)ゆんぐとぅ」とその類歌 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 129
（2）「ゆびが夜(ゆ)ゆんぐとぅ」の歌の内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130
（3） 行動の心意を表現する植物の詞章 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
7．「やらぶ種あゆう」 － テリハボクの種子 －
（1）「やらぶ種あゆう」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 134
（2）「やらぶ種あゆう」の歌の内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 136
（3） 歌の心意と「場」と表現様式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 137
8．「南さこだじらば」 － ハマユウ・バショウ・クロツグ －
（1）「南さこだじらば」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 138
（2）「南さこだじらば」の歌の内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 140
（3）歌の背景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 143
（4）「島回りじらば」に見る類似表現 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 146
9．「たらまんにゆんぐとぅ」－ アダン・モンパノキ －
（1）「たらまんにゆんぐとぅ」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 148
（2）「たらまんにゆんぐとぅ」の歌の内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 149
（3） 歌の心意と「場」と表現様式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 152
（4）「んめーまゆんた」にみる類似表現 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 153
（5）「んめーまゆんた」の歌の背景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 154
第３節 まとめ 植物歌の表現の特徴 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 155
1．表現素材としての植物の特徴 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 156
2．具象表現と列挙の様式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 158
3．具象表現と列挙の様式の表現の心意 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 162
4．具象表現にみる普遍性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 165

第３章　稲作歌の表現

第１節　稲作歌の背景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 171

１．はじめに　史料と方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 171

２．資料に見る古琉球・近世の稲作事情 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 175

（１）古琉球の八重山の稲作事情 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 175

（２）古流球から近世への過渡期の稲作事情 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 181

（３）近世の稲作事情 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 191

３．まとめ －稲作歌の背景と本稿の視点－ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 198

第２節　稲作歌に謡われるイネ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 201

１.作物としてのイネ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 201

（１）「稲が種子あよう」にみるイネ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 201

（２）「たらまゆらじらば」にみるイネ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 205

（３）「まゆんがなしぃの神詞（かんふちぃ）」にみるイネ ・・・・・・・・・・・・・ 208

２．供物としてのイネ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 213

（１） 屋敷願の祝詞にみる供物のイネ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 213

（２） 神酒の材 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 215

３．米としてのイネ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 216

（１）「ご飯」の景二題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 216

（２）「山かしぃにあよう」にみるイネ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 218

（３）「生りや竹富」にみるイネ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 219

４．まとめ －稲作歌の概要－ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 221

第３節　稲作歌にみるイネの生育の表現 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 224

１．叙事歌にみる各期のイネの生育の表現 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 224

２．イネの繁茂の表現 －ススキ・チカラシバクサ－・・・・・・・・・・・・・・ 231

（１）ススキ･チカラシバクサの登場する歌 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 232

（２）農耕に関する歌とススキ・チカラシバクサ ・・・・・・・・・・・・・・・ 235

① ススキとチカラシバクサの登場する歌の内容 ・・・・・・・・・・・・・ 235

② ススキとチカラシバクサの詞章の解釈 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 238

③ ススキ・チカラシバクサの特徴的な表現の様式 ・・・・・・・・・・・・ 243

④ 琉球諸地域及び、本土の「田遊び」にみるイネの繁茂の表現 ・・・・ 246
（3）農耕に関する歌以外の歌とススキ・チカラシバクサ ・・・・・・・・・・・・ 257
① 八重山歌謡に見るススキの習俗 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 257
② 一般的なススキ・チカラシバクサの習俗 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 260
③ 農耕文化の中のススキとチカラシバクサ － イネを育てる植物 － ・・ 263
（4）ススキ・チカラシバクサの登場する歌の表現の特徴 ・・・・・・・・・・・・ 267
① ススキ・チカラシバクサの表現の様式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 267
② ススキ・チカラシバクサの表現の出自 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 269
③ イネの繁茂の表現の多様性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 271
3．イネの稔りの表現 － ジュズダマ － ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 272
（1）ジュズダマの登場する歌 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 272
（2）農耕に関する歌とジュズダマ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 274
① ジュズダマの登場する歌及び内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 274
② ジュズダマの登場する歌にみる作物の稔りの表現 ・・・・・・・・・・ 277
③ イネの稔りとジュズダマの実 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 279
④ 八重山以外の地域におけるジュズダマに関する表現の比較 ・・・・・ 280
⑤ まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 281
（3）牧畜に関する歌とジュズダマ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 282
① ジュズダマの登場する歌及び内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 282
② ジュズダマの登場する歌にみるウシ・ウマの繁昌の表現 ・・・・・・・ 283
③ ジュズダマの頸飾りの習俗 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 285
④ ウシ・ウマと貝とジュズダマ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 287
⑤ まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 289
（4）ジュズダマの登場する歌の表現の特徴 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 290
① ジュズダマの登場する歌にみる表現 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 290
② 琉球歌謡のイネの稔りの表現 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 291
③ ジュズダマに関する表現の出自をめぐる考察 ・・・・・・・・・・・・・ 294
第4節 まとめ － 稲作歌の表現の特徴 － ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 296
1．稲作歌の表現の多様性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 297
2．イネの生育の表現と農耕文化 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 298

第４章　総括

第１節 植物と表現　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 303
１．植物歌の植物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 303
２．具象表現と列挙の様式　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 304
３．稲作歌の植物と表現　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 307
４．口頭伝承の歌謡の表現と解釈　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 310

添付資料　＊＜参考文献＞

＊＜八重山歌謡の植物歌資料＞

＊＜八重山歌謡の植物写真資料　50 音順＞

凡　　例

1. 本論文の章・節の表記は、「第～章」、「第～節」とした。項の表記は、大項目「1.　～」、中項目「(1) ～」、小項目「①～」とした。
2. 文献を引用する際、引用部分の後に、典拠を原則として以下のように示した。

   例；天野鉄雄 1976『琉球列島　植物方言集』新星図書出版

   →　（天野　1976）

   なお、本論文で引用及び参考にした文献の書誌情報については、論文末尾の「参考文献」にまとめて記した。
3. 論文内で、「テキスト」と記しているのは、『南島歌謡大成　Ⅳ　八重山篇』をさしている。
4. 歌謡を引用する際、歌謡タイトル・謡われている地域名・テキストの記載頁等を、以下のように記した。

   例：「稲が種子あよー」石垣島大川村　p.～

   本稿の主要なテキストとした『南島歌謡大成　Ⅳ　八重山篇』に記載の歌については、文献タイトルは省略した。『南島歌謡大成』の八重山篇以外の歌を引用する場合は、（宮古篇　p.～）（沖縄篇　p.～）（奄美篇　p.～）と、各地域名を加えて記している。
5. 歌謡の詞章及び訳は、『南島歌謡大成』Ⅰ～Ⅴの各編に付された詞章と訳を引用している。特に、下線や記号を付す場合には、その旨記載した。
6. 引用が複数ページに亘るもの、または、内容をまとめて引用する場合のページ数の記載は以下のように記した。

   （ 著者　著作年（pp. ～　-　～ ）
7. 植物名の記載は、原則として歌の詞章に記されている方言名は平仮名で記し、和名をカタカナで示した。

八重山歌謡の表現の研究　–植物を中心に–

はじめに

八重山諸島に暮らす人々が、島の暮らしの中に起こる事象に対処するための願いや思いを、共同体の共有の表現として、島の言葉で謡い継いできた歌・唱え・呪言の総称が八重山歌謡である。それぞれの歌の言葉は、島の自然や社会、歴史、信仰、民俗等の様々な身の回りの事象を背景に生まれているものである。そして、さらに細かくいえば、島の自然には、歌唱者達の身の回りの植物がさまざまに謡われている。本稿は、八重山歌謡の中の植物を用いた文学の表現を考察の対象の中心にしたものである。

植物に関連する研究というと、植物学といった植物そのものについての観察や実証を基礎とした自然科学系の研究が真っ先に思い浮かぶ。しかし、植物の研究は、そうした研究ばかりではない。例えば研究の中には、一つの宗教世界や文学世界の中に用いられている植物を取り上げ、論じているものもある。例えば、『聖書の植物』(H&A モルデンケ　1981)・『仏典の植物』(満久　1985)は、聖書や仏典に用いられている植物の紹介をして、植物が教義や思想の説明等に用いられている例を論じている[1]。また、『古典の植物を探る』(細身 1992)では、日本の古典文学の『古事記』『日本書記』『万葉集』等の植物を紹介している。それらの書物は、宗教や文学の内容のより深い理解を目的として植物をとりあげているのである。上記の書物の考察は、その研究の経過で、植物自体の同定に必要な植物学の知識をはじめ、宗教書や文学書の著された時代・自然環境の背景、それを記した人々の立場や生活、神話や伝承・文化・習俗等々の研究を幅広く援用しながら、それぞれの書物が取りあげた思想を明らかにしている。何れの著書からも、思想や文学の世界において様々な植物を表現に用いていることや、植物と人の深い繋がりを知ることができ興味深い。

八重山歌謡にも、多様な植物が謡われており、それらの植物を含む表現を通して、植物と表現と人の関わりが覗える。八重山歌謡という歌謡文学の世界の表現における植物の表現の考察は、八重山の人々の文化や思想を解釈する方法の一つと考えられる。

---

[1] 一例をあげれば、『聖書の植物』の中の「聖書植物研究史」（H&A モルデンゲ　1981 p.177 ）によると、聖書の植物だけを扱って論じた最初の書物（1566 年）の表題には、「（前略）予言者達が植物の本性を観察して、自分たちの説教の例証となし、神の言葉を弁護する個々の箇所が解明される。」と記されているという。この記述をとっても、「説教」のより深い理解のために、聖書の中の植物の研究が行われていたことが明らかである。

本稿は歌謡の中の植物を、表現の問題として考察することを目的としている。八重山歌謡の多くは、共同体の農耕祭祀の儀礼の主題の願いを、言葉に表現する役割を担っている。また、そのような祭祀の中心的儀礼に関わる願いごとや感謝の思いだけではなく、共同体の日常生活に関連した出来事とその出来事に対する思いを伝えている歌も多くある。つまり、八重山歌謡のテーマは、共同体における祭祀の儀礼から、日常の島の生活全般に起きる人間模様を対象に含んでおり、簡単に言えば、共同体の社会的な活動全体をテーマにした歌謡が伝承されている。そして、それらの様々な人間の活動をテーマに謡う歌の表現に、野生植物や栽培植物を含む植物が関わっている。こうした歌に見る植物と表現の関係は、植物が人間の生活の基本に関わる存在であることからすれば、普通のことである。

一般的に、植物は、人間が生きることを支える実用性の側面を強く持っている。食料資源としての栽培植物の有用性は言うまでもなく、野生の植物もまた、農耕以前の狩猟・採取の時代以来、人間の衣食住にわたって生活を支えてきた重要な資源である。人間の歴史の順序からみれば、むしろ、野生の植物との付き合いの方が、長期に亘っており、栽培植物は、野生の植物から選ばれて集約的に育てられるようになった植物である。また、農耕と牧畜は一見異なる作業のようにも思われるが、主要な家畜の餌は植物に依存する等、ここでも植物は生き物を支える最も基本的な位置に存在している。植物は、そうした実用性の関わりの延長上で、人間の文化的な側面とも関わりをもつ。それは、先述した聖書や仏典、古典文学の思想の理解のため、それらの世界に取りあげられた植物を通して分析する方法が、洋の東西を問わず、共通して成立していることにも示唆されている。

八重山歌謡の世界においても、島に自生する植物やイネ他の栽培植物が取り上げられている。それらの野生植物・栽培植物を含めた植物一般は、人の暮らしの近くに存在し、その重要さを意識されてきたと同時に、歌の表現にとっても身近な素材となっている。八重山歌謡を継承してきた人々は、様々な島の植物の中から表現に用いる植物を選択していると思われる。そこには、農耕以前の生活から、日々の生活に必要なものとして島の自然の観察によって、植物他の自然の生態の性質をよく理解する知恵の蓄積が働き、巧みな表現を成立させていることが推測される。例えばヤマモモの採取を詞章に展開する歌が何篇かある。そこでは、山端の木の桃は「石桃」、山底の木の桃は「水桃」と謡われ、山仕事に入った土産にとして、家の妻には「石桃」乙女のみ

やげなら「水桃」をと謡っている。どこになる実がおいしいのかという採取の知恵が、家の妻と乙女のへの土産に差を付けたい男の心を謡う内容へと結び着いている。本稿が取り上げ考察するのは植物だが、八重山歌謡集のテキストをめくると、歌謡には、星に関わる歌や、雨や風を謡う歌、動物や魚が登場する歌もある。そして、星は播種の時期を伝え、雨は雨乞いの歌として謡われている等、農耕との関わりが深い。また、風は航海の時候を知る現象として謡われている。このように、古来、歌謡を伝承する人々が取り上げる自然は、毎日の生活にとって切実で必要とする自然の具体的な事象を中心に、歌のテーマに添ったものが選ばれている。

八重山歌謡を伝承する八重山諸島は、亜熱帯という気候条件と北上する黒潮の影響を受ける環境にある。この亜熱帯島嶼という環境下で、日常的に目にする植物の景観は、島に自生する植物と、鳥や海流に運ばれた種子から生育した植物や、様々な目的で人の関与により移植された植物等、島の気候に馴染んで繁茂する多種多様な植物で構成されている。しかし、歌謡に用いられている植物は、それらの植物の中から、古くから島の暮らしと強く結びつき、島人にとって生きるための生活の糧となり、また、島の文化を深く支えてきた植物と人の関係を明らかにする。

これまでの八重山歌謡の研究や歌集にも、各歌に謡われている植物について、歌の解説のために触れた記事は多くある。けれども、それらの記述は、八重山歌謡の表現と植物という全体像を思い描くためには、個別的で断片的な取り扱い方がされてきたものがほとんどである。そうした中で、歌に登場する植物とその詞章を総合的に取りあげ紹介している「八重山歌謡にみる植物」（山里　2008）のような研究は数少ない。そのような八重山歌謡の植物と表現を表現の文化として全体的に捉える研究はまだ充分におこなわれていない。歌の植物についての考察は、歌の解釈に欠かせないということだけでない。数百年に及ぶ口承の歌が明らかにするのは、古くから馴染み深い島の生活と島の自然と人と表現の文化の関係に触れる意味がある。

本稿では、植物が歌の表現に含まれている歌謡を抽出して、一つの歌謡群として研究対象とする。そして、八重山歌謡に用いられている植物について、どのような植物が素材となり、どのような形式で謡われ、何を表現しているか、歌に用いられている植物と表現の関係を通して八重山歌謡の表現の考察を深め、歌唱者達が歌に込めた心意を解釈する。

第１章　視点と概要

第１節　本研究の視点と概要

本研究は、八重山歌謡の言葉の表現という視点から、植物を含む詞章の表現を通して、歌謡の表現の特徴を明らかにする。歌謡の研究は、突き詰めれば島々で歌を伝承する人々（以下、「歌唱者達」と記す）が、歌に込めた心意を明らかにすることである。それを、研究の立場から言い方を変えると、歌から何を受け取ることができるかを明らかにすることでもある。そのための方法は、ひとつではない。ここでは、本稿の視点・方法と概要を述べたい。

自然の環境は、どんな時も人間の暮らしの土台となる。琉球列島は、日本列島の南に位置し、奄美・沖縄・宮古・八重山の４地域を含む。気候区分でいえば、亜熱帯に位置する島嶼であり、列島の周囲は、黒潮が北上する海洋に囲まれている。また、本土から奄美以南の島々を訪れると、一見して日本本土の景観とは異って見え、むしろ、東南アジアの海浜やミクロネシア他の太平洋の島々の景観に類似した印象を受ける。実際、琉球列島内には、生物地理学上の動植物相の南北の差異を示す境界があることが明らかにされている。それは動物分布の境界線であるトカラ列島の悪石島を境とする渡瀬線や、さらに南には、貝類や鳥類の分布の境界を示す蜂巣賀線等である。そうした琉球列島の中でも、八重山諸島は、南方に位置する地域であり、有人島では日本最南端の波照間島や最西端の与那国島などを擁している。

歴史的に見れば、琉球列島の4地域は、かつて琉球王国の文化圏を形成していた島々である。琉球王国時代は、中国との冊封関係にあり、大陸の大国からの文化の影響を強く受けている。現在では、日本の行政区の2つの県にまたがっているが、過去には、琉球、薩摩、日本の政治的な力関係によって、この地域の統治の境界は、しばしば変動を余儀なくされてきた。また、近代日本の戦争の後には、アメリカの統治の下で、日本本土とは国境で隔てられる等、複雑な歴史背景を持つ地域である。そのため文化的には、海で隔たる他地域との交流による様々な文化の受容の在り方が、琉球固有の文化を形成してきたものといえる。

琉球歌謡（南島歌謡とも呼ばれてきた）は、そうした自然・歴史の環境を背景に持った地域の人々によって伝承されてきた歌の文化である。それらの歌は、いずれも祭

祀、行事、芸能、労働等、島や村の共同体の集団の場において、それぞれの島や村の言葉により歌い継がれてきた。近接した島や村の自然環境や歴史には、共通性がある一方で、差異もある。それらを反映しながら、各地域の特徴ある歌謡を今に歌い継いでいる。八重山の自然と歴史を背景に、それぞれの島の生活と言葉を基盤にして謡い継がれてきた口承の歌謡（歌・唱え・呪言等）が、本稿が研究の対象とする八重山歌謡である。

琉球歌謡の多くに共通する性格の一つは、口頭伝承によって歌い継がれてきたことである。そして、八重山歌謡の伝承も、口伝えの無文字性に支えられてきた。口伝えの歌の性格を考える上で、同様に口伝えの歌である民謡の発生について、柳田国男が『民謡の今と昔』（柳田　1990）で、述べているところがある。

> 我々の民謡を発生せしめたのは、社会であり共通の空気であり場合であった。皆が一様に抱いている感情を、誰かが言い現わすだろうと思っているうちに、すなわち誰かが言い現したのである。口はたまたま一つであっても、作り出すまでには多くの者が参与している。（柳田　1990　p.317）

引用文からみると、柳田は民謡の発生の要素を、「社会」・「共通の空気」・「場合」の３つの言葉で指摘している。柳田の分析は、民謡には作者や歌い手がいるが、作者や歌い手個人の思いの直接的な独白ではなく、歌の思いを規定しているのは、社会であり、社会的価値を反映した共感の感情や意志である、と言う意味であろう。柳田が指摘した民謡の３つの要素は、人間の生活の事象のうちでも、社会的な価値という側面を強調して捉えている。柳田の言う民謡を歌謡に置き換えても、ほぼ同様のことが言える。

そして、本稿がおこなう八重山歌謡の表現の考察では、「自然」という側面も強調して付け加え、それを重要な軸として論を進めていきたい。それは、人間の暮らしの社会的価値の成立には、それぞれの暮らしが依って立つ自然環境も、重要な条件の一つだからである。そのため、歌の表現の要素としては、社会的価値の反映と同じくらい、自然的条件も強く反映すると考える。

しかし、一口に自然といっても抽象的である。島の自然を構成する要素は、天体・気候・大気・土壌・海・陸・植物・動物等他多数が、エネルギーの循環として密接な

関係にある。本稿は、そのような島の自然環境を構成する要素の中から、あえて植物を取り挙げる。八重山歌謡の文学表現として、島の植物環境がどのように歌謡の表現に活かされているかという植物と表現の関係を通して、文学表現にみる人と自然の関係を考察することが本稿の視点である。

八重山歌謡は、島に自生し、あるいは、栽培されている植物を様々な表現に用いている。そうした歌の世界にとりあげられた植物を知る意味は、単に八重山の植物について知ることではなく、島の生活と古くから密接に関わりがあった植物について明らかにすることである。

歌の世界に表現されている植物の考察で重要なのは、目に見える景観の問題や植物の自然科学的な理解とは、少し異なるところにある。文学の表現の研究という視点からいえば、歌にみる植物は歌の表現の素材の問題に関わる。仮に、よく観察されたありのままの島の植物描写が謡われていたとしても、歌の言葉の表現として受け取るとすれば、歌の中の植物の姿は、歌唱者達の認識が切り取った植物の姿だと考えられる。謡われている植物の姿は、意識的か無意識的かにかかわらず、歌唱者達が自らの思いを表現しようとした結果、選ばれ描かれた姿である。従って、歌唱者達がなぜその植物を取りあげ、どう植物の姿を謡ったのか、そして何を表現しようとしたのか、という分析が必要となる。歌唱者達の頭の中に浮かんだ思いを、表現の「対象」と呼ぶとすれば、対象を表現する「素材」としての植物がある。そして、「対象」と「素材」の関係を繋げて歌の表現に至るには、歌唱者達の発想が働いている。歌唱者達の歌の表現の発想には、普通、その土地の固有の歴史・経済・社会・習俗・信仰他が関与する観念や価値の認識が作用している。従って、歌唱者達の発想に、そうした風土の背景が活かされているとなれば、八重山歌謡にみる植物を含む表現は、八重山の風土の特徴を自ずと示しているものと考えられる。

例を言えば、沖縄島では、祝儀の席の喜びを表す歌に「かぎやで風」がある。「きゆぬ　ふくらしゃや　なうにじゃなたてぃる　苔でぃうる花ぬ　露ちゃたぐとぅ（今日の喜びは、何にたとえようか、花の苔が露に出会ってぱっと開いたようなうれしさ)」と歌われる。この琉歌に花の名は特定されていないが、「苔でぃうる花ぬ　露ちゃたぐとぅ」が、喜びの思いの表現として、人々に共有されている。一方、八重山には、座開きの歌とされる「鷲の鳥節」がある。アコウの木から若鷲が日の出に向かって巣立つ姿が、嘉例をつける表現となる。八重山の天然記念物になっているカンムリ

ワシを思い起こさせる。これらの歌は、祝い事や喜びを表現する言葉が、人々が馴染んだそれぞれの土地の文化や自然環境を取り込んだ表現をもっている例である。

また、沖縄でアコウやガジュマルの気根が、周囲の石を抱き込む姿や、他の樹木を被って絡み付く様子は、俗に「絞め殺しの木」ともいわれ、湿潤な亜熱帯以南の地では見慣れた景観である。八重山歌謡の「山樫のあゆう」には、アコウの樹木の気根が石を抱いて生育する姿を、土地に深く根を張って生きるという意味の「根下り」という言葉に重ねる象徴的な表現がみられる。一方、奄美歌謡の「とうばる節」（田畑他 1979　p.430)では、石を抱いて生育する植物としてソテツが謡われているが、この歌のソテツが石を抱く姿は、子を抱く包容力的な意図を表している。 その表現は奄美の生活とソテツとの深い関わりが反映して考えられる[2]。

上記の事例にみるように、琉球諸島内でも、表現の対象（思い）と素材（植物）の関係は、各地域それぞれの差異を示している。それぞれの地域における植物を含む歌謡の表現は、各地域の環境が歌に反映したものであり、また、歌の表現の伝承を通して繰り返し、繰り返し、地域の環境の固有性が人々の認識に深く刻み込まれるという相互の関係が推測できる。

このように植物（自然）と表現とは、相互に影響を及ぼしていることがわかるが、述べたい事柄を、植物他自然の描写をとおして表現する方法自体は、八重山歌謡だけにみる表現方法ではなく、文学の表現にしばしばみられる方法である。しかし、上記の事例にみたように、歌の中に登場する、具体的な植物と表現の関係を取り上げて論じることで、それぞれの土地の、様々な自然と生活・文化の関係が織りなす表現の固有性や共通性が明らかになる。

その他にも植物に注目する理由には、表現の研究の素材として、植物は便利な素材であることが挙げられる。それは、歌の中の樹木･草･花等の植物が、確かな像を持つ言葉であることによる。植物の分類も進んでいる現在では、植物辞典をみれば、多くの植物の和名と学名が明らかにされている。地域の言葉で謡われている歌の中の植物は、方言名（または、民俗語彙）が用いられているが、先行研究によって、方言名と和名が明らかにされた植物辞典や書籍がある。それらによって、植物の方言名→和名→学名という手順を辿れば、八重山の地域以外の者にとっても、歌の植物は、像を確

[2] ソテツについての奄美の人々の聞き取りについては、 『聞き取り・島の生活誌②　ソテツは恩人　奄美の暮らし』（盛口　他　2009）に詳しい。

認できる言葉として共有できる情報が整っている。植物を素材として取り入れている歌は、言葉の像を共有できる事により、歌の解釈において、言葉の違いという困難を越えやすくする条件を持っている。また、植物を通して、他地域との表現の比較の際にも有効な手段とすることもできる。

本稿の歌の表現の研究の方法は以上のとおりである。これらを基にした本稿の構成と概要を以下にまとめた。

第1章では、主として、本稿の研究の視点と概要について述べている。先行研究について記した後、本稿の研究の対象とする植物を詞章に含む歌(以降「植物歌」と記す)を明らかにしている。『南島歌謡大成　Ⅳ　八重山編』(外間　1979) から抽出した植物歌にみる植物の紹介とそれらの特徴、また、それらの植物を用いた表現の分類を行う。そこから推測される植物歌の性格の傾向等についても述べた。そして、本稿の表現の研究としては、歌唱者の思いを述べるために植物を用いる表現の様式が、重要なことを指摘した。また、八重山歌謡の解釈に必要と思われる八重山の歴史資料を取り上げている。

第2章は、始めに、植物歌にみる表現様式の概要を示した。次に、個別の歌謡の事例に添って、どのような植物が、どのような意図を表すために用いられているか、歌の内容・発想・様式等について具体的に分析し、植物歌における植物と表現の意味を考察している。それを基に、抽象的な観念語による表現と具象表現、列挙・反復の歌の表現様式との関係や、多様な具象表現を生む発想等、植物を用いた表現の構造的な特徴について論じた。

第3章は、稲作歌を中心に考察している。稲作歌は、植物歌の中でも稲作と深く関る歌謡群である。文学としての八重山の稲作歌も、稲作農耕文化の一画に位置づけられるものとし、はじめに、稲作歌に色濃く反映してみえる 15 世紀～18 世紀の八重山の稲作の技術・文化の多様性を、歴史史料に考察している。その八重山の稲作文化の多様性を考慮しながら、稲作歌の表現について、歌の事例を通して考察している。本稿の表現の考察の特徴の一つをあげると、稲作歌にみるイネの理想的な生育を、野草（ススキ、オヒシバ、ジュズダマ）を具象として表す慣用句に注目していることである。それらのイネの生育を野草の生育で表現する慣用句について、八重山以外の地域も含めた広域の稲作農耕文化の技術・儀礼や、呪的な民俗・信仰を背景にして考察している。

第 4 章は、上記の総括として、八重山歌謡の植物歌の表現の特徴をまとめ考察している。八重山歌謡の植物歌に共通する主題は、共同体の価値観を基準にした幸福や健康長寿等が主要な願いであり、稲作歌の主題は、作物の豊穣の希求、予祝にある。そうした歌が、島の自然と各時代の社会の価値観を反映しながら、歌唱者達によって、祭りや行事、作業の場等を表現の場として謡われてきたものである。歌唱者達は、謡うことによって、超自然や＜神＞や先祖と対峙し祈願する。また、共同体の人と人同士の共感の確認等を行ってきた。それは歌が持っている表現の機能である。

また、植物歌の表現様式についても考察した。中でも、歌の思いと機能と密接に結びついた表現様式の一つとしての具象表現を明らかにした。歌唱者達が、身の回りにある植物の属性を熟知し、それぞれの思いの表現の素材として植物の適格な選択を行い、共同体の人々と共感を共にする、そうした具象による表現の本質的な特質と意味について考察した。また、八重山歌謡の特徴とされる自然に対する観察力や巧みな表現は、植物歌にみる自然を素材とする具象表現の様式に負うところが大きいことについて言及した。

第２節　先行研究について

本稿は、八重山歌謡の表現の研究にあたって、どのような植物が、どのように謡われて、何を表現しているか、という植物と表現の関係の考察を通して、文学としての歌謡の表現の特徴について明らかにするものである。こうした本稿の目的に関わる内容を中心に、歌謡の先行研究から、歌謡研究の概要、テキストの性格、歌謡の植物に関する研究等について述べてゆきたい。

本稿が研究の対象とする八重山歌謡における植物の表現を含む歌謡を抽出するために、『南島歌謡大成　Ⅳ　八重山篇』（外間　1979）を主要なテキストとした。

本来、八重山歌謡は、祭祀、儀礼、労働などの場において唱えられ、謡われてきた口頭伝承の歌である。口頭伝承を基本にした歌について、本稿の様な表現の研究が成立するためには、先学による文字化された歌謡集の刊行という先行研究の恩恵に依るところが大きい。口承によって継承されてきた歌が、文字に記された歌謡集となることは、歌の伝承の歴史にも、研究史の成立にも、様々な意味の変化をもたらすことである。本稿のテキストの性格と本稿の考察の領域を明らかにしておくために、琉球歌

謡史における歌謡集の集成に至る概観を記しておきたい。

長い歌謡の伝承の時間から見れば、琉球歌謡に「研究史」の足跡が刻まれるのは、時間的には近い出来事のようにみえる。琉球歌謡研究における歴史の冒頭に、名が挙がる人物は田島利三郎だが、彼が『おもろさうし』を発見したことにはじまり、明治33年(1900年)、『国光』という雑誌に「琉球語研究史料」を発表したのが、琉球歌謡研究の始まりとされている。研究は、その後に、田島から伊波普猷へと引き継がれていく。また、田島に先立ち、明治 10 年代に、明治政府の命令でそれぞれの仕事の目的を携えて沖縄を訪ねた、田代安定や笹森義助等の先人がいる。歌謡の研究と直接結びつくというより、田代安定や笹森義助の報告等が、民俗学者の柳田国男の沖縄への関心を強め、その後の沖縄の研究者たちとを結ぶ力となっている。それにしても、琉球歌謡の研究史の幕開けは、それほど古くはないし、本流の歌謡の殆どは、口承の世界に属し、謡われる「場」の歌唱者達の「声」として立ち現れる基本的な性格を持続している。文字に記される歌と違うのは、口承の歌は、その「場」に立ち会わなければ知ることができない世界だということである。このことは、明治以前、非文字の口承の歌として継承されてきた八重山歌謡の研究史の展開の特徴にあらわれている。つまり、研究史は、口承の歌の採集、歌集の刊行と不可分な関係にある。

八重山歌謡の研究史上で重要な人物の一人に、喜舎場永珣が上げられる。喜舎場は、郷土史研究者として知られ、『八重山民謡誌』(喜舎場 1967)や、『八重山古謡』上下(喜舎場　1970)等に、八重山歌謡の歌と解釈を示している。喜舎場の八重山歌謡の採取は、文部省による日本全国の俗謡(民謡)や童話等の蒐集事業の命によって始まっている。石垣に在住していた喜舎場が、その事業の一環としての任にあたることとなり、八重山歌謡の採取に取りかかった事の顛末や著書出版の経緯が、『八重山民謡誌』の「まえがき」(喜舎場 1967 p.4)に紹介されている。また、文部省の事業の他にも、八重山歌謡が文字に記されてゆく初期の事情が次のように述べられている。

> 八重山歌集は数多くあるが、訳や解説や註釈などを施された歌集は一冊も見当らないが、ただ大正十三年版の民謡誌にだけ拙者が不本意ながら「大意」だけ発表したに過ぎない。(前掲書　p.7)

上記に記されている事情から推察されることは、喜舎場が満足する内容や形式の歌集

はなかったとしても、歌集という歌を文字に起こす行為は、「数多く」あったことが覗える。

本稿が主要なテキストとする『南島歌謡大成　Ⅳ　八重山篇』（外間他 1979）は、『南島歌謡大成』の奄美篇・沖縄篇（上下）・宮古篇・八重山篇の全5巻の内の一冊として、1979 年に刊行されたものである。テキストは、明治以降の八重山の歌集や著作、研究者や個人の採収した歌等で編集されている。『南島歌謡大成　Ⅳ　八重山篇』の刊行にあたり、出典となった歌謡集や著作、個人の採集者等 71 の文献名が、「出典文献解題」（前掲書　p.659）に上がっている。以下に上げる著書名は、出典となった歌集や著書の中から、テキストに収載された歌の数が多い歌集や著書を年代が古い順に配列して、参考までに記したものである。＜宮良当壮・宮良長包　1928『八重山古謡』第 1 輯・第 2 輯　＞、＜宮良当壮 1934『南島叢考』＞、＜新里和盛・池間栄三 1957『与那国島誌』＞、＜宮良当壮 1958『南島文学選』＞、＜新本米 1960『八重山民謡集』＞、＜黒島民俗芸能保存会 1968『黒島民謡集』＞、＜大浜賢扶 1969『石垣村ゆんた集』＞、＜喜舎場永珣 1970『八重山古謡　上下』＞、＜岩崎卓爾 1974『岩崎卓爾一巻全集』＞、＜小浜島民謡集編集委員会編 1975『小浜島民謡集』＞、＜上勢頭享『竹富島誌 1976<民話・民俗篇>』＞、＜川平村の歴史編纂委員会編 1976『川平村の歴史』＞等である。これらの著者を見ると、八重山歌謡の先行研究は、主として、地元の個々の研究者達や、村の歴史・歌謡集編参委員会や芸能保存会等の有志による個別な研究が広く行われていたことが窺える。そして、歌詞だけの歌謡集や、歌に注釈や解説が付されているもの、また、民俗、民俗芸能、歴史等の関係記事のなかに、歌が取りあげられているもの等様々である。

地元の人々の多数の研究成果のうえに、1970 年以降になって、琉球列島全域を対象にした琉球（南島）歌謡を明らかにする歌集の刊行へと続いている。『日本庶民生活史料集成　第 19 巻　南島古謡』（外間他　1971）、『日本庶民文化史料集成　第 11 巻　南島芸能』（芸能史研究会編　1975）、続いて『南島歌謡大成』全 5 巻（外間他 1978～1980）、そして『日本民謡大観（沖縄・奄美）』全 4 巻（日本放送協会編　1989～1933）等である。島や村々の祭祀や行事で謡い継がれていく口頭伝承の歌謡という伝統的継承の方法の世界と並行して、歌謡が文字に記録され、出版されていくという展開が、明治大正以降の個別な著作から、さらに、琉球歌謡全体についての著作を含めて、急速に開けていったことが窺える。それまで、歌は、伝承する各共同体の生活

の場における「今」にとって必要な解釈と共感の中に存在した。けれども、文字化された歌集は、直接伝承する共同体の人々以外の不特定多数の人の目に触れ、余所の地域と比較する研究の俎上にのぼる条件を広げていったことを意味している。厳密には、研究史と歌の伝承とは異質のものだが、以上にみるように、『おもろさうし』を除けば、口伝えで続いてきた歌が、文字に記されて残される流れは、琉球歌謡史の中でみれば一つの分枝点に違いない。

本稿が主要なテキストに上げた『南島歌謡大成　Ⅳ　八重山篇』は、琉球列島全域の歌謡を対象として編集された『南島歌謡大成』全 5 巻の内で、八重山諸島の歌が収載された歌謡集である。そして、琉球歌謡史、及び、八重山歌謡史の流れの中にあって、1970 年代後半までの研究の蓄積の成果に立って、外間守善他の編集者達の編集意図の下に刊行された歌謡集という性格のものである。

琉球歌謡研究を概観すると、琉球歌謡の全体を視野に入れた歌集の刊行と平行して、琉球文学、琉球歌謡等全体を対象とした研究の成果の蓄積へと続く。琉球文学の総論的な流れが、伊波普猷から、仲原善注忠、外間守善等へ受け継がれ、主流の『おもろさうし』の研究の他、池宮正治の『琉球文学論』(池宮　1976)、比嘉実の『古琉球の世界』(比嘉　1982)等にみる琉球文学の概観を論じるものがある。また、嘉味田宗栄は『琉球文学表現論』(嘉味田　1977）にみるような体系論的な視点も展開している。

歌謡の研究が、明治近代以降に始まっている事は、先にも記してきたとおりである。琉球歌謡・八重山歌謡の研究が蓄積している現在は、研究内容の分類がされているが、初期の歌謡の研究は、研究内容が細分化されているわけではない。伊波普猷が「沖縄学の父」と呼ばれたように、沖縄全体への多方面の関心の坩堝のような時を経て、研究内容が概論から、細分化していく流れは、研究の時間の経過に伴いおこる必然といえる。研究史の初期は、文字に残されていた『おもろさうし』の研究から始まっているが、先学の歌の採収と歌謡集の編纂に続く研究の広がりは、各歌の解説、文学史的な位置づけ、発生論、歌形論、表現論、歌唱法、構造論等々の様々な研究がおこなわれている。また、歌謡が関わる研究分野は、言語や文学の領域に限らず、民俗学や民俗植物学、歴史学や稲作の伝承の資料として等、他領域からのアプローチもみられる。

八重山歌謡との関係でいえば、特に古謡の研究で、2000 年を前にして、八重山の地元出身の研究者達の研究が成果となって現れている。波照間永吉の『南島祭祀歌謡の研究』(波照間　1999）は全体の頁の半数を、八重山の祭祀のフィールドワークを

基にした研究論文に割いている。祭祀と芸能を各島のフィールドワークの記録を記し、それらをもとに、八重山歌謡の形態として、歌唱法や「場」と歌の相関関係等を論じている。また、狩俣恵一の『南島歌謡の研究』（狩俣　1999）は、島の体験の基盤も色濃く、竹富島の祭祀・芸能・歌謡が有機的な民俗事象として考察されている。他には、同世代の研究者で、歌謡の表現を構造論的なアプローチで論じた、玉城政美の『琉球歌謡論』（玉城　2010）がある。

こうした地元の研究者達の一方で、琉球歌謡全体をジャンルによって体系化した歌謡集の刊行と、本土復帰(1972 年)などの政治的背景とも相まって、日本本土の文学者や民俗学者が古謡に触れた研究を展開している。本土の研究者によって、琉球と日本本土の関係性の中で琉球歌謡が論じられ、琉球歌謡の古代性を強調するものや、中世・近世の歌の繋がり等を論じる等、琉球歌謡研究に広がりを与えている。例えば、小野重朗の古謡の研究である「生産叙事歌謡」（小野　1995）の歌形論と表現論と神話性の混在等を指摘した研究がある。『南島の古歌謡』（小野　1995）に収載されている一連の論述は、藤井貞一の『古日本文学発生論』（藤井　1980)、古橋信孝の『幻想の古代−琉球文学と古代文学−』（古橋　1989）等ともつながっており、記紀歌謡の表現と琉球歌謡の古謡の表現とが対比されている。本稿も、稲作歌を論じる際には、小野の「生産叙事歌謡」（小野　1995）や「畦枕考」（前掲書　1995）からの示唆を受けている。また、吉本隆明の『初期歌謡論』（吉本　1994）では、八重山歌謡の「雨乞いチジィ」の事例が使われて、日本古代歌謡と琉球歌謡が「和語」の「基層」という対比で論じられている。

次に、本稿が八重山歌謡の表現の考察の方法とする植物と表現に関連する先行研究について、触れてゆきたい。これまでの研究や歌集でも、歌を解釈するにあたって必要な植物の知識や、植物にまつわる民俗等に触れているものがある。けれども、それらは個別で断片的な植物の紹介であり、八重山歌謡の植物と歌の表現の関係を総合的に取りあげた先行研究は少ない。八重山歌謡の植物を総合的に取り上げて対象とした表現研究には、山里純一の「八重山歌謡にみる植物」（山里　2008）がある。草本と木本という植物の分類を行い、50 音に添って、植物とその植物を含む詞章の紹介と解説が順次記されている。そして、論述の終わりに、植物の詞章の表現について「比喩表現」等の 5 項目の分類がなされて、八重山歌謡の植物の表現の傾向を明らかにしている。八重山歌謡にどのような植物が、どのように謡われているか、資料的な概要

として利用しやすくまとめられている。山里の研究には、動物についても「八重山歌謡に見える動物」（山里　2000）で同様な形式でまとめられている。また、大竹有子は『南島歌謡にみる“もの”と表現の研究 ： 『おもろさうし』を中心に』（大竹 2011）で、南島歌謡の「もの」（物質文化）という視点で、「もの」に関する修辞や文脈等を論じている。「もの」の中に、植物を数種挙げている。歌謡の中に用いられている「もの」を抽出する発想については、本稿とも類似するものだが、対比的に言えば、本稿は植物(自然)と表現の文化という関係を中心に考察している。

琉球歌謡の研究は、一般的には、歌謡という文学のジャンルに分類される。けれども、歌の内容の多くが島の人々の生活をテーマの基盤としている性格上、他分野の研究にも資料として利用されている。植物に関連して言えば、歌謡に頻出するイネは、その一つである。稲作に関連した歌謡の「天親田」「稲が種子あよう」等は、稲作を叙事的表現で謡う詞章が、南島の島々の稲作の事情を伝えるものとして、民俗学や稲作の伝播を探る研究者、自然科学の研究関係者達によっても取り上げられている。伊波普猷の「南島の稲作行事について」(伊波　1973)や、伊藤幹治の「日本神話と琉球神話」(伊藤　1977)、佐々木高明の「南島の伝統的稲作伝統技術」(佐々木　1984)等があげられる。また、玉置和夫の「沖縄の植物と民俗」（玉置　1979）にも歌謡がとりあげられており、その成果は『竹富町史　第五巻　新城島』（竹富町史編集委員会 2013）に紹介され、引き継がれている。また、植物に限定せずに自然という観点に広げてみると、近年刊行された渡久地健の『サンゴ礁の人文地理学』（渡久地 2017）は、「サンゴ礁の認識論」という視点からサンゴ礁を謡った歌謡が紹介されている。植物もサンゴ礁も、島で暮らす人間が依拠する島の自然の一つであり、広い意味でとらえれば、歌謡を通して人と自然の関係について考察をしている。これらは、植物に関わる詞章を含んだ歌謡について、文学と異なる分野の研究にとりあげられている事例の一部だが、歌謡の表現が、多面性を持っているという事を図らずも示唆しているものである。

そして、歌謡研究とは異なる分野だが、本稿の研究にとっては、植物辞典や図鑑は参考図書として欠くことができない。特に、植物の琉球方言名と和名との関係を調べる際に多く利用した図書が、天野鉄夫の『琉球列島植物方言集』（天野　1989）である。樹木や花・草の方言名は、島々、または村々によって違う呼称を持つが、天野の『琉球列島植物方言集』には、和名、学名とともに、琉球列島 4 地域の島々で違う植

物方言名が詳しく記されている。また、『図鑑琉球列島有用樹木誌』(天野　1989)も、樹木を中心に写真も添付されており、植物の和名の見極めは、この2冊の図書に多く依っている。その他に、『竹富方言辞典』(前新　2011)や『石垣方言辞典』(宮城2003)他の各島々の八重山方言辞典、『沖縄古語大辞典』(沖縄古語大辞典編集委員会1995)等でも確認できる植物名もある。また、地元の動植物を紹介している『海岸植物の本』(屋比久　2008)他の「おきなわフィールドブック」シリーズも、方言名と写真に加えて、植物の紹介や植物の民俗等が一般にわかりやすく付記されている。本稿の文学表現の研究には、これらの植物辞典は、欠くことのできない先行研究である。

第３節　八重山歌謡の植物

１．歌謡の植物の抽出について

（１）植物名を含む歌謡

八重山歌謡の植物と表現の考察に先立ち、植物名の含まれている歌謡を、テキストの八重山歌謡から抽出し、研究の対象となる歌謡の範囲を明確にしなければない。植物名の含まれている歌謡とは、単純に、歌謡の詞章の中に植物名が１つ以上含まれている歌のことである。本稿では、植物名を表現に含むという基準に基づいて抽出した歌を「植物歌」と呼ぶこととする。本稿において、植物歌とは、テキストに収載されている歌謡から選択した植物名を含む歌を指すと同時に、本稿が研究の対象とする植物というカテゴリーで抽出した歌謡全体を指す場合に用いる言葉とする。

植物歌を抽出する主なテキストとする『南島歌謡大成』全編は、編者の外間守善の琉球歌謡に対する基準の基に、分類され体系化されている。外間の体系化の基準は、次の言葉にあらわれている。

> 文学という立場から呪詞や歌謡を分析し分類していく私にとって、言葉と言葉を支えている文学的意識と文学的形態が分類のための弁別的基準になるものであり、(中略)八重山歌謡における多様な呪詞や歌謡を、神への「願い」という願望を基本的な原理にして発生したものである(以下略)　　(テキスト　p.641)

上記からみると、歌謡の分類における外間の基準は、「文学という立場」からの「意

識」と「形態」に注目し、神と人という関係において、人間の「願望」を原理として発生したもの、としている。それを基にした歌謡の分類が、各地域の歌謡の民俗語彙による呼称を用いて示されている。『南島歌謡大成』5 篇の歌謡集の編集は、こうした外間の考える基準に則って行われていると考えられる。『南島歌謡大成　Ⅳ　八重山篇』（外間他　1979）のテキストには、外間の分類基準に添って、カンフチ・ニガイフチ・フミシャギ・ヤータカビ・ジンムヌ・ユングドゥ・アヨー・ジラバ・ユンタ等の民俗語彙による基本的な歌謡の分類と、節歌・口説歌謡他形態的な分類との混合で構成されている。「表現と植物」という関係性の中で歌の表現を考察しようとする本稿にとっては、外間の基準と異なるが、口頭伝承の歌としての解釈と理解には、誰がどのような場で唱え、謡ってきたかという歌の「場」を知ることは重要になる。外間の用いた民俗語彙の歌謡の分類だが、歌の「場」の人の意識の目安として援用できる。そのため、以降の歌謡の引用の際には歌謡のジャンルを示す民俗語彙も附記している。

＜表１＞

	歌謡ジャンル	収載歌謡数	植物名を含む歌謡数
1	カンフチ	2　篇	2　篇
2	ニガイフチ	172	61
3	フミシャギ	18	13
4	ヤータカビ	9	5
5	ジンムヌ	46	7
6	ユングトゥ	69	44
7	アヨー	78	50
8	ジラバ	135	69
9	ユンタ	237	122
10	節歌	87　＊	38　＊
11	節歌補遺	46　＊	11　＊
12	トゥバラーマ	16　＊	5　＊
13	スンカニ	6　＊	2　＊
14	口説歌謡	23　＊	18　＊
15	念仏歌謡	24　＊	16　＊
16	雨乞いの歌	28	10
17	豊年祭の歌	32	10
18	節祭りの歌	7	3
19	種取り祭の歌	4	1
20	補遺	12	7
	合計	1,051	494

＜表１＞は、植物を詞章に含む歌を抽出しまとめた表である。植物歌の抽出の際、１つの歌に１種類の植物名が用いられているものもあるが、数種類の植物名が含まれているものもある。また、歌謡の言葉の場合、対句・対語が多用されるので、同じ植物についての言い換えなどによる２種以上の言い方を含む場合がある。けれども、それらの詳細な分析の前に、ひとまず、歌の中に一つ以上の植物名がある歌を抽出した。『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』に収載されている歌謡は、1,051 篇ある。それらが、カンフチ以下の 20 種のジャンルに分類されている。＜表１＞は、それぞれのジャンルごとの収載歌謡数と、その内の植物歌（植物名を含む歌謡）の数を示したものである。

植物歌の歌謡の内訳は表の通りだが、表の 10〜15 の＊印のジャンルの歌謡を考察

の対象から除外した。理由は、節歌については、三線の伝来以降の歌であること、また、「八重山の士族達の専有したもの」（テキスト p.652）であること等の理由による。それは、ここでは一般的に「古謡」と呼ばれる三線を伴わない八重山の歌という、同じ背景の基にある歌を考察の対象としたいと考えたからである。トゥバラーマ、スンカニについても、同様の理由で除外している。また、「口節歌謡」「念仏歌謡」等についても、これらの歌謡は「八重山固有の物ではなく、外来歌謡」（テキスト　p.658）ということが明確な歌謡群とされている。八重山歌謡の中でも、最も土台となる「古謡」の表現を中心に研究対象とすることで、こうした歌謡については、本論での考察の対象からは除外した。従って、表の 10〜15 の＊印の 90 篇を除いた植物歌を、主な考察の対象とした。但し、本稿の中では必要に応じて八重山以外の地域の歌謡も引用している。

（２）歌謡の植物とその詞章の抽出

植物歌に、どのような植物が謡われているか、詞章から植物名を抽出した。歌謡の中に登場する植物名は、八重山の島々の方言名で謡われている。方言名の植物を、和名で確認するにあたっては、主として、『琉球列島植物方言』（天野　1979)、『図鑑琉球列島有用樹木誌』（天野　1989）等を参考にした。『琉球列島植物方言集』には、奄美・沖縄・宮古・八重山の地域ごと、島ごとの方言名が多数記載されている。その記載で不明なものについては、『沖縄の都市緑化植物図鑑』（(財）海洋博覧会記念公園管理財団　1997)、＜沖縄フィールドブックシリーズ＞の『植物の本』（屋比久 2004)、『海岸植物の本』（屋比久　2008）等々の植物図鑑を資料とした。これらの図鑑は、和名の植物名とともに、琉球方言名を併記している。また、歌謡の文学表現として出現しているので、必ずしも植物学的な命名ではないものもあり、その場合には『宮良當壮全集８　八重山語彙　乙編・甲篇』（宮良　1980)、『石垣方言辞典』（宮城 2003)、『竹富方言辞典』（前新　2011）から植物名を検索している。その他に、生活に利用された植物については、『八重山古謡　上･下』（喜舎場 1970）の解説文、『八重山生活誌』（宮城　1982）の「住居編」「食編」に多く解説されており参考にした。また、『南島の自然誌』（山田　2012）は植物民俗学の立場から、波照間島、西表島、鳩間島の植物について調査されており、歌の背景となる植物と島の生活を知る際に参考となった。植物の和名の確認と同定には、以上の先学の研究を参考としている。

対象歌謡に 1 種、1 カ所しか用いられていない植物については、１種の方言名を和

名に置き替えることで植物の同定ができるが、方言による植物名は、それぞれの島や村の言葉の違いを反映している。また、わずかな音韻の転訛などもあり、同じ植物が歌によって異なる呼称で謡われていることがある。この場合、八重山諸島という単位で歌を見てゆく時、１つの植物が複数の方言名で謡われているため、それらが同じ植物を指していることを確認する必要がある。加えて、漢字表記の違いや、長母音の表記の違い等、文字におこされたテキストであるために起こる問題も混在する。

例えば、アコウという樹木の場合である。アコウが歌われている植物歌は、テキストに８篇ある。その中の１編で、今も民謡に謡い継がれている「鷲の歌」は、正月早朝の若鷲の巣立ちを謡い、めでたさを象徴的に表現する内容の歌だが、その冒頭は、鷲が巣作りをするアコウの木を謡うところから始まる。次の歌は　川平村の「ばしぃゆんた」冒頭部に謡われているアコウである。

「ばしぃゆんた」　石垣島川平村　　p. 292

1	大山(ふう)ぬ　内(ふち)なか	大山(おおやま)の内に
	長山(なあ)ぬ　側(すば)なか	長山(ながやま)の側に
	バシィヌ鳥 ユゥニ	バシィヌ鳥 ユゥニ
	カユナハバシィ　＜囃子、以下省略＞	カユナハバシィ
2	大(ふう)あこーぬ　むより	大(おお)アコウが生えていて
	実(な)るあこーぬ　さしよおり	実りアコウが生えていて
	（以下略）	

第 2 節に「大(ふう)あこー」「実(な)るあこー」という対句で示されているのがアコウのことである。接頭語の「大」「実」は「立派なアコウ」「実のなるアコウ」と言う意味の対句の形式を取っている。これは、一つのものを異なる側面から言い換えて表現する歌の言葉の様式である。引用の「ばしぃゆんた」と同じ内容の６篇の歌謡には、アコウは、「あこう」「あこー」「あつこー」等と表記されている。

「鷲の歌」のモチーフ以外の歌にも、アコウは歌の舞台を示す表現として冒頭部に用いられている。次の事例は、石垣島大川村「こいなーゆんた」に謡われているアコウである。

「こいなーゆんた」　石垣島大川村　p. 341

1　大岳(うふだき)ぬ　上(うい)なが	大岳の上に
2　大赤秀木(うふあこー)ぬ　萌(む)やりば	大アコウ木が生えていると
3　実赤秀木ぬ　差しゅりば	実りアコウ木が生えていると

（以下略）

引用歌の冒頭部は、「大岳(うふだき)」に「大赤秀木(うふあこー)」／「実赤秀木」が生えていると謡いだされている。この歌のアコウは、「大赤秀木(うふあこー)」「実赤秀木」[3]と漢字表記され「あこー」の読みがなが付されている。接頭語の「大」「実」は、「ばしぃゆんた」と同じ言い換えの対句である。この「赤秀木」という当て字については、『宮良当壮全集８　八重山語彙　甲篇』(宮良 1980　p. 158)によると、「アコーはアカホ（赤秀）即ち新芽の赤味を帯べるより云ふならむ」とある。宮良は、アコーの新芽の葉先が赤味を帯びているところに命名の由来を求めている。落葉樹の少ない亜熱帯の環境の中で、アコウは秋頃には一度落葉する木である。そうした季節的条件以外にも、不意の台風で葉を落とすことがある。その後のアコウは、暴風で葉を落とした枝先から、２～３週間もすると一斉に新芽を吹く。それらの新芽を包んだ葉も、深紅色をしている。従って、「赤秀木」という漢字使いで説明される命名の由来についての宮良の説明には合点がゆく。

もう一つの事例は黒島の「山樫のあゆう」に謡われているアコウである。次の引用歌には、「あかぼう木」は石の上に根を張って生長する、と謡う１節がある。

「山樫のあゆう」　黒島　　p. 180

（前略）

2　あかぼう木(きぬ)の　ヨホイ　シタリヨホ	赤ボウ木のヨホイシタリヨホ
根下や　ヨホ　シタリヨウホ	根下りはヨホシタリヨウホ
石(いし)や上(ばな)んど　根下る　ヨホ	石の上に根が下りるヨホ

（以下略）

[3]「秀」は、「象形。禾穀（稲などの穀物）の穂の部分が垂れて花が咲いている形」（白川 2003　p. 306）

「あかぼう木」という語形は、黒島のアヨー 「山樫のあゆう」にのみ、使われている語である。「アカボウキ」の語は、『琉球列島植物方言集』（天野　1979)、『石垣方言辞典』（宮城　2003)、『竹富方言辞』（前新　2011）のいずれにも記載がない。歌のためだけに生まれた言葉かもしれない。けれども、『竹富方言辞典』には、アコウの方言名は「ハーブ-キ ha：buki」とあり、このハーブキという語の語形の変化は、「アカウキ→アカブキ→アハブキ→ハーブキという変化をたどったとみられる語」（前新　2011　p.819 ）とある。黒島の歌謡にある「あかぼう木」という語形は、この転訛の過程のどこかに想定され、それが歌に残されたと推測する。語形の変化以外の判断材料として、「石(いし)や上(ぱな)んど　根下る」と謡われている「あかぼう木」の特性は、実際のアコウの生態と一致する。アコウは他の植物が生育しにくい石灰岩質の岩の上にも着生し、気根を発達させる。その姿はまるで根が岩を抱いて生長しているかのようにみえる。それは沖縄の暮らしの空間でしばしば出会う景観である。また、実景と歌の内容や同名の歌謡との比較などを総合して、「あかぼう木」をアコウとするのは妥当と思われる。

上記の例を含めて、テキストに収載された 8 篇の歌のアコウの方言名（テキスト語形）には、「あこう、あつこー、あこー、赤秀、あかぼう木」と様々な語形がみられる。「あこう、あつこー、あこー」は、語尾の 1 音の転訛や、主に旧仮名遣い等のテキストの長母音の文字表記上の差異の範囲で、これらは同じ木を指しているものと容易に解釈できる。けれども、「赤秀」や「あかぼう木」については、歌の内容と樹木の性質、漢字表記の漢字の意味、又、先人の著書等を総合的に判断して、アコウの木と同定することになる。以上は、アコウについての例だが、対象の歌謡に何種の植物が用いられているかは、様々なテキスト語形のケースを和名に照らし合わせて同定したものである。

このような植物歌全体を抽出して、詞章に含まれる植物名と植物に関わる詞章について表にまとめたものを、巻末資料[八重山歌謡の植物歌資料]として添付した。[歌謡にみる植物と詞章]と[分析]の 2 つの内容を 1 つの表に含んでいるものである。

歌謡に出現する植物とその詞章は、テキストに出現する植物とその出処となる詞章を明記したものである。歌謡に出現する植物とその詞章の表の作成にあたって設けた項目は、 [植物名]、[テキスト語形（方言名)]、[歌謡名]、[地域]、[テキストの収載頁]、[ジャンル]、[植物を含む表現の詞章] を転記して表に記している。[植物を

含む表現の詞章］は、植物を含んでいる詞章の部分を、短くテキストから転記したものである。「八重山歌謡の植物歌資料」は、本稿が八重山歌謡の植物歌の植物の表現について考察をするにあたっての基礎的な資料である。植物名については、和名を表の先頭行に置いている。表の植物名の並びの順序は、出現数の少ないものから順に表記した。また、出現回数が同じものについては、同じ出現数の植物のなかで、50 音順に掲載している。

［分析］は、歌の内容についての簡易なメモで、筆者の覚え書き的なものである。

２． 抽出した植物の概要

植物名と思われる言葉を含む歌の抽出の後、それらの植物歌にどのような植物が用いられているのか知るため、植物名を抽出し、出現数の多い植物の順にまとめたものが次頁の＜表 2＞である。

＜表 2＞には、78 種の植物を抽出した。さらに、それぞれの植物がテキスト歌謡の何カ所に用いられているのか、出現数を付記している。また、本稿では、「煙草」と「沈香」の 2 種も植物由来産品として、また、5 種の海藻類、2 種の菌類のあわせて 9 種を加えた。従って、合わせて 87 種の植物その他が、歌唱者達の意図を反映して、歌謡に用いられてきたこととなる。これらの植物を含む歌謡全体が、本稿の考察の対象となる植物歌である。そして、植物歌の考察の重要な点は、個々の植物についての分析が目的ではなく、歌として、これらの植物と表現の関係を考察することにある。出現数の多い植物の順にまとめた表から、出現している植物にみる一般的な特徴から述べてみたい。

＜表 2＞の植物は、実際に島に存在する野生植物と栽培植物である。それは、巻末資料に添付した［八重山歌謡に見る植物写真資料］で確認できる。

次に、＜表 2＞にみる出現数の多い植物の初めの 10 種から見てゆくと、イネ・アワ・サツマイモ･ムギ・キビ等、一般的に五穀と呼ばれる栽培植物の名が並ぶ。

＜表２＞　　テキストから抽出した植物名と出現数

NO	植物名	出現数	NO	植物名	出現数	NO	植物名	出現数	NO	植物名	出現数
1	イネ	151	26	ニラ	7	51	ヘチマ	2	76	ヤマブドウ	1
2	アワ	55	27	ニンニク	7	52	モヤシ	2	77	ヨモギ	1
3	チョマ	35	28	デイゴ	6	53	モロコシソウ	2	78	ラッキョ	1
4	サツマイモ	31	29	ビロウ	6	54	オオハマボウ	1	79	リュウキュウコクタン	1
5	カヤ　注１	29	30	ソテツ	4	55	オガタマノキ	1		〈藻類〉	
6	ススキ	29	31	テリハボク	4	56	カキノキ	1	80	ウミミズナ	1
7	ムギ	21	32	ハマゴウ	4	57	ガジュマル	1	81	オゴノリ	1
8	キビ	16	33	ヒルギ　注４	4	58	キノコ	1	82	ツノマタ	1
9	チカラシバクサ	16	34	ユウガオ	4	59	クチナシ	1	83	ササクサ	3
10	シークヮーサー	15	35	アデク	3	60	クロヨナ	1		〈菌類〉	
11	オキナワウラジロガシ	15	36	オオタニワタリ	3	61	グンバイヒルガオ	1	84	麹	2
12	タケ類　注２	14	37	ボタンボウフウ	3	62	ゲットウ	1	85	酒粕	1
13	マメ類　注３	14	38	マツ	3	63	コシダ	1		〈植物由来産品〉	
14	イヌマキ	12	39	モンパノキ	3	64	サトイモ	1	86	タバコ　注５	5
15	ジュズダマ	12	40	ユリ	3	65	シマミサオノキ	1	87	沈香　注６	1
16	マツリカ	12	41	アキノノゲシ	2	66	シュロ	1			
17	タブノキ	12	42	アシ	2	67	ダイコン	1			
18	アズキ	11	43	アブラナ	2	68	ダンチク	1			
19	モクコク	10	44	イボクサ	2	69	チャ	1			
20	ヤマモモ	10	45	ウラジロエノキ	2	70	ツタ	1			
21	シマグワ	9	46	クワズイモ	2	71	テリハノブドウ	1			
22	バショウ	9	47	トウツルモドキ	2	72	ノブドウ	1			
23	アコウ	8	48	野芋(又は山芋)	2	73	パパイア	1			
24	アダン	8	49	ハマユウ	2	74	ハリツルマサキ	1			
25	クロツグ	8	50	フカノキ	2	75	ホソバワダン	1			

注1 一般的には、カヤはススキやチガヤ等の総称である。但し、八重山歌謡では、内容的に見てススキとカヤの差異が認められる。
注2 琉球列島に自生するタケは数種ある。タケのテキスト語形からだけでは、種までは確認できないので「タケ類」とした。
注3 マメの種類の明らかなもの、ただ「マメ」と記されたものをまとめて「マメ類」とした。
注4 八重山諸島に生育するヒルギは数種ある。歌謡から厳密には種類が決定できないので、「ヒルギ」という総称で記した。
注5 栽培植物の「たばこ」とは異なる。タバコとして利用した植物をさす。野草名で確認できないので、実用名で記した。
注6 沈香は、沈香樹と呼ばれる仲間の樹木から作る香りの良い「香」のことである。植物由来の産品として加えた。

そして、五穀以外の植物も、チョマ（カラムシ）は布を織るための天然繊維を績む植物であり、ススキやカヤも、屋根を葺く材として無くてはならない植物である。シークヮーサー（ヒラミレモン）は、琉球諸島以南に生育するミカン科の植物だが、食用の他に、芭蕉布を洗う時に利用された事で知られている有用植物である。これらを一般的にみると、作物・衣食住の資材として人間の生活にとって必要不可欠な有用植物で占められていることがわかる。多く歌に謡われている植物は、日常生活上の必要性から関心が向けられてきた身近にある植物であると言える。その一方、有用植物という一般的な想定には当てはまらない植物名も取り上げられている。その一つが、チカラシバクサである。一般的にみると、衣食住に必要不可欠な植物という範疇には入らない植物である。けれども、登場する頻度が高い。生活上の有用性がある植物が頻出するとする点から言うと、特異な植物が混じっていることになる。歌に用いられている植物は、衣食住で利用度の高い有用植物が多いが、そうでない植物も含まれている。

その後に続く、出現数の多い順に並ぶ植物についても、同様な事が言える。表のno.20 番までに上がった植物は、一つの植物が複数の歌に用いられているが、ここでも、アズキ、マメ類の栽培植物と、木の実が採取できるヤマモモ等の食用となる植物と、タケ、イヌマキ、タブノキ、モクコク等の建築資材や船材として利用される樹木が並び、それ以外にマツリカという花が香る植物が加わっている。＜表 2＞のオオハマボウ以降の植物は、植物歌のなかに、一度だけ出現した植物が並ぶが、それら全体を見ると、資源・資材の生活上の実用性の高い植物が多くを占めるが、その中にそうでない植物も含まれている。

植物歌に用いられている植物は、概ね、生活上で実用的な利用度の高い植物とそうでない植物という大別ができる。出現数が多い植物には、一般的にいう人間の生命と生活を支える必需品としてなくてはならない五穀や、衣食住に関わる植物が出そろっていると言えそうである。このことから、歌謡の世界の表現が、生きていく上での重要度と直結していることが推測される。一方、歌には、一度だけ出現するオオハマボウ以降に並ぶ 50 種を越える植物がある。それらの植物には、八重山の自然の中にある植物から選ばれて用いられているという基本的な共通性の他に、八重山の人々と、島の自然環境の中で積み重ねた様々な関わりを持つ植物が、様々な歌のテーマと結び付き、実用性だけではない植物が表現に用いられているものと推測される。これらの植物が、どのような内容と表現で謡われているかは、次章以降で、各歌の事例に添って考察してゆきたい。

＜表 3＞に参考まで、天野の図書から南西諸島以南の自生植物の例をあげてみた。

〈表３〉　歌に見る南西諸島以南の自生植物　（歌謡出現数順）

植物名	出現数	主な分布	参考頁
シークヮーサー	16	台湾	p. 120
オキナワウラジロガシ	15	奄美以南　琉球列島固有	p. 45
シマグワ	9	屋久島・種子島以南、南中国	p. 64
アダン	8	熱帯アフリカ・ミクロネシア・ポリネシア	p. 339
クロツグ	8	トカラ列島　＊コミノクロツグ　台湾・フィリピン	p. 356
テリハボク	4	台湾・熱帯アジア・ポリネシア・マダガスカル	p. 216
ヒルギ	4	＊メヒルギ　鹿児島北限　＊ヤエヤマヒルギ　慶佐次北限	p. 231
モンパノキ	3	種子島・宝島・台湾・その他熱帯	p. 298
ウラジロエノキ	2	屋久島・種子島・南中国・熱帯アジア・ポリネシア	p. 60
オオハマボウ	1	屋久島・種子島・熱帯各地	p. 195
ガジュマル	1	屋久島以南・台湾～豪州	p. 58
シマミサオノキ	1	奄美以南・台湾・南中国	p. 330

［参考］『琉球列島有用樹木誌』（天野　1989）

植物歌の中では、イネ他穀物等の植物が、農耕と豊作の希求という人間の歴史のなかでの普遍的な活動と主題との繋がりが注目されるが、出現頻度が少ない植物も、歌の表現の世界をとおして、地域性の高い文化・習俗との繋がりを伝えていると思われる。八重山歌謡の植物という視点を中心に、八重山歌謡の表現の特徴を見ることは、八重山固有の自然と人と表現の関係の把握へと繋がるものと考えられる。

３．植物歌の背景

植物歌にみる植物の一般的印象を述べてきたが、ここでは、植物歌を背景に意識しながら、植物にみる特徴を述べてみたい。

（１）イネの特殊性

謡われている数が最も多かった植物は、イネである。イネ以外の雑穀（アワ・ムギ・キビ)、そしてサツマイモ等の農作物も、植物歌に多く出現する。歌謡に謡われる植物が、人々の関心を反映しているものとすれば、植物歌から言えることは、五穀全般に関心が向けられているということができる。けれども、イネは他の作物に比べて、その出現数が圧倒的に多い。では、なぜイネの歌が多いのかと言う疑問は、どのような内容のイネに関する歌が多いのかということを見ることで明らかになる。

イネを詞章に含む歌の内容を概観すると、「作物としてのイネ」「供物としてのイネ」を歌うものが殆どを占める。その一方で、人々の食の風景を謡う等「食材としてのコメ」に関する歌は極めて少数ない。これは、前項で一般的な植物の推測として述べたような、イネは人間にとって基本的な食を支える為の必要不可欠な有用植物の一つであるということとは少し異なる傾向を示していることになる。イネに関する歌は、人々の食料としてのイネ栽培を主要な内容として謡われていないのではないか、という印象である。これは、イネを歌う歌謡の性格を示唆している。

そこで、以下に「作物」「供物」としてのイネが謡われている歌謡の例を上げてみたい。はじめは、「作物としてのイネ」を謡う歌謡の一例である。

「稲(いに)が種(だね)あよう」　　石垣島大川村　　p. 159

１　稲が種(だに)ぬ　今日(きゆう)いでぃる　　稲の種の今日出る

きゃらまい　　キラ米＜イネの品種＞

ウヤキヨーヌ ケーラマイ ヒヨウ　　ウヤキヨーヌ ケーラマイ ヒヨウ

	（囃子、以下略）	（囃子、以下略）
2	今日ぬ日ば　むとぅいし	今日の日をもとにして
	黄金日ば　むとぅいし	黄金の日をもとにして
3	苗代田に　出しょうり	苗代田に出しなされよ
	種植る田に　出しょうり	種植える田に出しなされよ
4	打ちはらし　作りょうり	うち放り作りなされよ
	蒔きぃはらし　作りょうり	蒔き放り作りなされよ
5	打ちはらし　蒔きぃはらしぬ	うち放り　蒔き放りの
	今夜からや	今夜からは
6	下かいや　白根差しょうり	下には白根を差しなされよ
	上かいや　若芽たれー	上には若芽を出し
7	犬ぬ毛に　生しょうり	犬の毛のように生えさせてください
	猫ぬ毛に　生しょうり	猫の毛のように生えさせてください
8	うぬ願いどぅ　願う	この願いを願う
	うぬ果報どぅ　手摺りょうる	この果報を手摺りなさる

内容は第 1 節が播種の日の稲種の言挙げ、第 2 節では播種の日を誉めたたえ、第 3〜5 節では苗代に種子を蒔き、第 6〜7 節では種子から白根と若芽が、犬の毛や猫の毛のように生えなさり、と謡い、そして、最終節を「この願いを願う」という祈願を表す慣用句で結んでいる。歌の心意は、蒔いたイネの種子が立派に育つように、ひいては、作物の豊穣がえられるようにとの願いにある。祈願の歌であることは、最終節の言葉にも象徴されている。

この歌は、播種の儀礼で謡われる歌である。播種の儀礼は、八重山の稲作の新たな一年の初めの儀礼にあたる。テキストには「稲が種子あよー」は数編収載されているが、稲作の播種から刈り入れまでの全過程を謡うものと、播種の時期だけを謡うものとがある。上の事例は、その中でも、播種の時期だけを謡う短い構成の 1 篇である。稲作始めに、作物の順調な生育を謡うのは、言葉の呪力がイネの生育に働きかけ、謡ったとおりの豊穣を得ることができるとする言霊の信仰を背景に、播種の際に予祝の意味を込めているものとされている。短篇・長編のどちらも、信仰を背景としたイネの理想的な生育の順を追って謡う歌の様式は共通する。こうした稲の生長を叙事的に

謡う歌の様式については、小野重朗の先行研究によって明らかにされ、「生産叙事歌謡」と名付けられている。(小野　1977　pp.113-128)。

八重山の村々の御嶽を中心にした農耕祭祀が、稲作農耕の栽培暦を中心に行われてきたことは周知のとおりである。その祭祀の主題が言語化されているのが、稲作の祭祀歌謡である。こうした祭祀歌謡において、豊穣を得ることを目的とした呪術的表現は、五穀（アワ・ムギ・イネ・キビ・マメ）の栽培作物に関する歌には共通している。それでも、五穀の中で、イネが謡われている事例数が飛び抜けて多く、その多さは他の「雑穀」と比較にならない。やはりイネは特別な関心をはらわれてきた植物であることを表している。

では、「特別な関心」とはどのような関心なのか。個々人の「食料としてのイネ」ではなく、「作物としてのイネ」への関心である。「作物としてのイネ」が、植物歌に多いのは、共同体にとって稲作農耕が重要であることを示したもので、稲作農耕と祭祀と歌謡の関係の深さもそのためである。

一方、「作物としてのイネ」と並んで、「供物としてのイネ」が謡われている歌も多い。「供物としてのイネ」とはどのようなものか、一例をあげておく。下記の歌は、健康を願う祝詞の中に謡われている供物の次第である。

「胴肌願(どうばたにがい)の日待(ぴま)ち願(にがい)の祝詞(ふちかざり)」　石垣島登野城村　　p.46

（前略）

くむちぬしだいしさっりるんゆー	供物の次第を申しあげます
わかみどぅり、すりぱな　一(いっ)ちい	若緑　生気の花　一対
だいびしぬかんがんむち　いっつい	台にすわらせの　鏡餅　一対
みがきぱな、あらいぱな　いっつい	磨き米　洗い米　一対

（中略）

しらびぱな、ちかんばなぴとぅかざり	調び米　掴み米　一飾り

（以下略）

上記には、供物の名が並んでいるが、花や鏡餅などの他に、「みがきぱな／あらいぱな（磨き米／洗い米)」・「しらびぱな／ちかんばな（調び米　掴み米)」と謡われているのが、供物としてのイネ（コメ）の呼称である。供物のコメはいずれも「ぱな」

と称されており、美称辞が用いられていることがわかる。なかには、吉兆を占うコメも謡われる。祝詞の次第に添って名を唱え挙げているのは、名を声にだすことそれ自体が、讃えるという意味がある行為だからである。これらから、神と神へ捧げる供物に対する何らかの神聖な意識や、コメの霊性の意識があることが窺える。

供物は、農耕暦に合わせた一年の様々な折り目に、共同体の祭祀がおこなわれる際に捧げられる。農耕の収穫の感謝や祈願の儀礼には、新穂や米、それらを醸した神酒なども神饌の一つとして捧げられることが歌から窺える。そして、そうした共同体における農耕儀礼だけではなく、個人の人生の節目の行事や新築儀礼等の際にも、祖先や神に捧げる供物が用意される。それらの儀礼の供物の次第を唱える歌が、歌謡には数多くある。

以上は、イネに関する歌謡を中心に述べてきた。その他の五穀についても、「作物」、「供物」として謡われることは、イネに準じる。とはいえ、謡われる歌の数は、圧倒的にイネが多い。

付け加えると、出現数の多い植物の中には、ススキ、チカラシバクサという野生の植物が含まれている。ススキは、身近に見る植物であり、建築の材や民具の材、燃料等の実用に供される。また、様々な民俗的な用途も豊富なだけに、人々が接する機会も多く、歌の世界でも、生活場面と結びついた内容で謡われる。そのススキに対して、チカラシバクサは、先に事例に取りあげた「稲が種子あよー」等の稲作の歌謡で、イネの繁茂を表現する詞章にだけ登場する興味深い植物である。ススキの対語として用いられている。チカラシバクサという、一般的には「雑草」といってもよい野草が、歌に数多く謡われているのは、イネの繁茂を表す慣用句として、イネの祭祀歌謡に用いられている植物だからである。野草のススキ・チカラシバクサは、イネ(他穀物)の歌謡と強い関わりを持つ植物であるため、出現数が多くなっている。

イネに関わる歌の中で、「作物」と「供物」としてのイネが、多く謡われている。「作物として」のイネが謡われている歌は、儀礼の主題を表現している歌である。そこには、一心に豊穣の願いが表現されている。一方で、「供物として」のイネが謡われている歌は、＜神＞に神聖なものを捧げる祭祀や儀礼の様子を謡っているものである。そこには、「供物」の神聖さの認識が窺える。そして、八重山歌謡で、イネを用いた表現が含まれている歌をみる限り、日常に食べるための作物という認識のもとに謡われている歌が少ないのは、イネと人の関係の在り方を象徴している。以上は、植

物歌のなかに謡われているイネの特殊性を示唆しているものといえる。

（2）政治的背景

八重山歌謡の世界に見るイネと人の関係の在り方について、今度は、歌の背景を交えて考察してみたい。＜表 2＞から読み取れる 2 つめの特徴は、イネに続き出現数の多い植物のアワ・カラムシ(苧麻)によって示唆されている。イネ・アワ・カラムシの 3 種の植物は、一般的には、人の衣食に関わる有用植物とみられる。けれども、別の側面から見ると、琉球王府統治下の島々に課せられた貢納品と深く関わる植物である。アワの納税に関して、島の地形的条件により水田のできない低島では、アワが、イネに替わる主要な栽培植物であると同時に、イネと並んで、納税の為の主要な作物であったこと等が、得納により明らかにされている（得納 2007　pp. 211–249)。同じく、カラムシ(苧麻)も御用布の上布の糸を績むための植物である。これらのことを加味して考察すると、植物歌から抽出した出現数の多い 3 種の植物は、一般的には、衣食の為の栽培植物とはいえ、衣食への関心だけで、イネ・アワ・カラムシの 3 種の植物が、歌の世界に数多く謡われたとは思われない。なぜなら、先にイネについて述べたように、「食」という関心を中心にイネの歌謡が謡われているわけではない事と同じである。これらの 3 種の植物は、貢納品としての政治的な価値を持っていることで共通している。それは、次にあげる歌の内容などからも推察できる。以下に引用したのは、王府時代の貢布に関連している歌である。

「大本嶽(うむとうだき)あよう」　　石垣島新川村　p. 158

1	赤苧布(あかぶぬぬ)　二十桝(はたゆみぬ)ぬ　御用布(ぐいふ)[4]	赤苧麻の布　二十読〈極細上〉の御用布
2	許(ゆる)し　たぼうり　主ぬ前	許してください　主の前〈お役人さま〉
3	きむちゃ　給(た)ぼうり　目差主	肝痛〈不憫〉だと思ってください 目差主〈役職名〉
4	ばぬ女童(みやらび)　いまやらび　やりりば	私 乙女は今は子供であるので
5	くり女(み)どぅな 年ちぃなさ ありうりば	これ 女の子は年がおさなくあるので

[4]「赤苧布」は、「国王の妃あるいは王女等の高貴な王室内に納付される最高級の御用布」のこと。「二十桝ぬ御用布」は、「経糸も最細糸で二十桝の筬にいれる極細苧麻糸で、老練な婦人に該当する御用布である。」（喜舎場 1970a　p. 279）

歌の内容は「赤苧麻の布」「二十桝ぬ御用布（二十読＜極細上＞の御用布)」を、まだ技術の未熟な少女が織るように求められ、少女は、幼い自分には無理だと訴えている歌である。カラムシ（苧麻）を謡う歌謡を取り出すと、引用の歌にみるような、貢納品のための機織り労働を巡る、役人と女性の問答を謡った歌がみられる。カラムシに向けられる関心は、人頭税で女性達が中心的に担っていた御用布という政治的背景と深く繋がっているものと考えられる。

例えば、1858 年に布達された「翁長親方八重山島規模帳」には、御用布の糸を採るための苧の栽培を奨励する旨の文章（石垣市総務部市史編纂室　1994　pp. 70-71）が残されている。そして、その中に、「木綿花は御用布・御用物としてはもちろん、日常の衣類としても欠くことのできないもので、栽培には念をいれなくてはならず、（以下省略)」（前掲書　p. 71）と記されている。こうした規模帳の布達をみると、農民は日常着に、木綿の衣類を着用していたことがわかる。自らの衣食住に関心がないはずがない。けれども、テキストから抽出した植物歌には、木綿花を謡った歌は含まれなかった。琉球国の統治下では、イネがそうであるように、カラムシも島人自身の自給自足の目的より、貢納品として重要な社会的価値を持った植物なのである。又、このことから、植物歌が謡う主題の傾向が窺える。

もちろん、苧麻の機織りが、強いられた労働のイメージを謡うものだけでなく、石垣島平得村の「あらぐしくゆんた」（テキスト p. 356）には、織物の才に優れた女性が、自身で織った布を売って財をなす様をテーマにした歌もある。いずれにしても、女性達の手仕事を謡う歌謡の背景には、貢納という税制や社会の経済価値を生み出す政治的背景が反映しているとみることができる。

八重山の島の生活を伝える『八重山生活誌』（宮城　1982　pp. 14～16 ）には、各家の菜園に植える植物の記述がある。その中に、「糸芭蕉・苧いずれも繊維を取って布を織るために植えられるものである」（前掲書　p. 15)とある。どの家でも、屋敷近くで自家栽培されていたことを示している。カラムシを素材に用いる歌が多いのは、琉球王府時代以来、この植物が人々の身近にあり、必然的に関心度も高かったことを物語っている。 テキストの歌謡で素材に苧麻を取り上げている歌の事例の内容は、布織りに関する事だけではない。苧麻という植物自体の生育の特性を、思いや意図をあらわす素材として用いる等、苧麻が歌の素材としての多面性を持っているのは、この植物と人との日常生活での多面的な接点が反映してのことと思われる。

共同体におこる諸事を謡う歌謡のテーマは、歌唱者達の生活の関心事と密接に関係している。イネ・アワ・カラムシの３種の植物が多数謡われる背景には、王府統治下の貢納制度の影響が少なからずあると考えられる。そして、このテキストに収載された歌謡が、琉球王府時代の政治的社会を反映したテーマを多く伝承していることを示唆しているとも言える。

（３）イネ以外の植物と歌謡

出現数が多い植物のなかに、シークヮーサー（和名ヒラミレモン）がある。シークヮーサーは、歌の中では、「くにぶぎー」「ふにぶんきー」「九年母（くにぶ)」等という方言名で謡われている。次の歌は、「なさま屋ゆんた」（石垣島登野城村）の冒頭部である。

「なさま屋ゆんた」　石垣島登野城村　　p. 348

1	なさま屋ぬ　とぅんでぃなんが	なさま家の出口に
	かぬし屋ぬ　門(ぞう)なんが	愛しい者の家の門口に
2	九年母木(くにぶぎー)ば　植(い)べとぅし	九年母(くねんぼ)木を植え
	香(か)ばしゃ木ば　差しとぅし	香ばしい木を植え
3	うるじぃんぬ　なるだら	初夏がなったら
	若夏ぬ　いくだら	若夏がいったら
4	花や白るさ　咲(さ)かりようり	花は白く咲きなさり
	実(な)りぃや青(あう)さ　くぬみようり	果実は青くなっており
5	花折りば　名付きし	(その)花折りを口実に
	女童屋ゆ　見りくうでぃ	乙女の家を見て来ようと
	（以下略）	



自生のシークヮーサー　　国頭にて

愛おしい女性の家の門口に植えられている九年母が、うりずんを過ぎる頃に、白い花が咲きやがて実がなる。その花を折りにいくことを口実にして女性に会いに行く、というのが、第５節までの内容である。第５節以降は、花を折るという口実で、男性が愛しい女性に近

づきになり、恋のやりとりが歌われている。この歌のように、冒頭部で門口に植えられた九年母の花が咲くことを謡って、季節の情緒を表現し、男女の様々な出会いが展開する。喜舎場永珣は、この歌に、夜這いの習俗を見ている（喜舎場　1972 p.274）が、九年母の木を歌う「九年母／香ばしゃ木（香ばしい木）」という対語は、「うるじぃん／若夏」という季語と共に慣用句的な表現として用いられることが多い。季節の風情だけでなく、香り高い樹木が出会いの情緒を醸し出す。

他には「浦舟（うらふねー）じらば」（石垣島登野城村）では、九年母は、航海にでる風の吹く時候を表す。この歌に謡われた九年母は、植物が茎や芽を出す具体的な現象を用いて、季語的な意味と、風が吹き出る様とを表現している。

また、新築儀礼の歌である「あんがろーまあよう」（石垣島宮良村）のなかでは、九年母の実が家の礎石として謡われる。実を指す時は、「玉」という接尾語が付く。

「あんがろーまあよう」　石垣島宮良村　p.164

（前略）

4　ばらびん玉　ふだじぃばし　　蕨玉を踏み石にして

5　ふにぶん玉　礎（びしい）ばし　　九年母玉を礎石にして

（以下略）

家の建築に際して謡われる儀礼歌の中で、各建築構造の部位の名前を、様々な美称で列挙する歌である。これは、各々の名称を唱え挙げることが、物を寿ぐ意味を持つ表現行為だからである。「ふにぶん玉（九年母玉）」は柱を立てる礎石の美称辞として用いられている。小さな九年母の実が、実際に礎石に使えるとは思えないが、この背景には、九年母の実に対する霊性が、歌唱者達の意識に共有されていることが窺える。九年母の実の霊性については、頸飾りの習俗などからも考えられる。『八重山生活誌』（宮城　1970　p114）には、八重山の女性達が、様々な植物素材を用いて頸飾りにする習俗があったことが記述されている。元々、ノロや司が祈りの際に、玉を佩くことで霊性を身に請ける民俗にもみるように、「玉を佩くことは、単に装飾用だけでなく、魔除け」（前掲書　p.115）などの意味をもち、九年母の実を貫いて作る頸飾りにも、九年母の果実の芳香だけでなく、頸飾りの霊性が意識されていたことも考えられる。

九年母の実の実用性は、上布の洗濯の際に利用されることでも知られているが、歌

に用いられている九年母が指し示す内容は、八重山の古来の信仰や民俗を背景にした植物の霊性の認識や、あるいは、男女の恋のやりとり等の日常的な人間模様のテーマを謡う場面で、八重山の風土の景観や時候、情感を象徴し、様々な事象を表現している。共同体の人々にとっては、九年母はある種の情緒的で民俗的な情感を共有できる植物なのである。人々が日々の島の生活で身近な植物と接し、それぞれの植物のもつ生態や特徴等について誰もが経験的に知っているものを、歌の素材として用いている。身近で馴染みのある植物を、表現の具象に用いることは、共同体が認識を共有しており、歌唱者達の歌への共感を容易にすることでもある。

イネ以外の植物を謡う事例として、出現数の多い九年母の事例を取り上げた。出現数が少ない植物についても、九年母の事例と同様に、それぞれの植物が様々な自然の景観、風土、習俗、情感等の何かしらの歌唱者達の思いの表現の為に用いられている。＜表 2＞にまとめたイネを筆頭とした頻出する作物を謡う歌は、農耕祭祀・行事の主格や主題と深く繋がっているものが占めているが、多数出現する種目以外の植物が関わる植物歌の内容は、共同体の普段の生活の思いを基に生まれた様々な人間模様をテーマに謡っている。

（4）まとめ

植物歌とは、本稿が八重山歌謡の中から植物を表現に含むというカテゴリーで抽出した歌謡群である。

はじめに、植物歌に用いられている植物にみる一般的特徴を述べた。歌に多く用いられている植物は、一見して、人間の衣食住に関わる栽培植物や、資源･資材となる有用植物である。八重山の自然環境に実在する植物であると同時に、身近に存在して、島の生活と深く関わりを持っている植物が謡われている。こうした歌の植物の特徴は、植物歌の表現の生まれる基盤を示唆していると考えられる。

次に、八重山という固有な地域における植物歌として、歌の内容を考慮しつつ、歌に用いられている植物から推測できる植物歌の特徴を考察した。

その一つは、植物歌にみるイネの特殊性である。どのような特殊性かというと、まず、イネに関連する歌が多いことが挙げられる。そして、これらの歌の内容の殆どが、共同体の農耕祭祀の豊穣の希求や感謝を願う対象物として、歌の主格となる「作物としてのイネ」と、共同体の祭祀･行事や個人の儀礼で捧げる「供物としてのイネ」を謡っていることが注目される。特に、後者にはイネの霊性への認識が背景に窺える。

その一方で、「食の風景としてのイネ（コメ）」を謡った歌が極めて少ない。このことは、重要な食料の栽培という一般的なイネの認識と、歌の世界が表現するイネの意味づけが、少し異なっていることを示唆していると考えられる。

二つには、植物歌に頻出する植物に、琉球王府の貢納との関連が推察された。出現数の多いイネ・アワ･カラムシの 3 種の植物は、琉球王府時代においては重要な貢納品という共通性をもっている。その意味で、ある特定の時代の政治性を強く反映して、社会的価値を付加された植物である。そうした植物が歌に数多く用いられていることは、テキストの植物歌の性格と時代背景を示しているものと考えられる。

三つには、イネ以外の植物と表現の特徴について考察した。イネ以外の植物を謡う事例として、九年母の事例を取り上げたが、九年母は様々な自然の景観、風土、習俗、情感等の多様な表現の為に用いられている。このことは、その他の出現数が少ない植物についても同様である。それぞれの植物が、歌唱者達の何らかの思いに触れ、歌の表現に選ばれて用いられていると考えられる。そして、これは植物を用いて巧みに表現する植物歌の土台となる植物と表現の関係について示唆に富んでいる。＜表 2＞にまとめたイネを筆頭とした頻出する作物を謡う歌は、農耕祭祀・行事の主格や主題と深く繋がっているものが占めている。それらの多数出現する植物以外の植物歌の内容は、共同体の普段の生活の思いを基盤に様々な人間模様のテーマを謡っていて、歌の表現における植物の役割も多様性をもっている。

以上の抽出した植物からみた植物歌の概観についてのまとめを述べておきたい。

一般的に、歌の普遍的な主題は、人間の思いを表現することにあるとすれば、歌に用いられた多様な植物もまた、歌唱者達の様々な思いを表すために取り上げられていると考えられる。植物歌では、島の生活環境において身近に実在する植物が、表現の素材として用いられているものである。歌唱者達は、八重山の島の自然と密接な繋がりを持つ島の共同体の生活全般を歌のテーマの発生源として、様々な事象を取りあげて謡っている。その中でも八重山歌謡の植物歌は、歌唱者達の思いを、その思いによって選択した島に実在する植物を表現に用いながら、歌の言葉の様式で表現しているものと考えられる。そして、それらの植物の用いられ方には、様々な自然の景観、風土、習俗、情感等、八重山の固有の風土の発想が働いていることが考えられる。

しかし、そうした植物歌全体の中で、特異な印象を受けるのは、イネが関わる歌である。その理由の詳細は、前項までに（１）イネの特殊性、（２）政治的背景で、事

例を示して述べたとおりである。簡単に言えば、イネを謡う歌の数が多いことや、主題の内容が、イネの豊穣の希求や、農耕儀礼及び儀礼の供物に関わることが多くを占め、日常のコメと人の関係を謡う歌が極めて少ないという特徴がみられる。これらのことから、イネの関わる歌が、イネ以外の植物を表現に用いる歌の日常性の濃厚さと一線を画する歌謡群であることが考えられる。その特徴は、イネを謡う歌の中でも、稲作に関わる歌謡群に顕著に表れている。そこで、本稿では、植物歌の中の稲作に関わる歌謡群を、以降、「稲作歌」と呼ぶこととする。稲作歌は、植物歌の中にイネという植物を含む歌謡群があり、その歌謡群を特徴づける稲作というカテゴリーに注目したものである。

稲作歌とその他の植物歌の共通性は、先に植物歌は島の共同体の生活に起こる事象を基盤とした様々な主題を謡っていると述べたとおり、同じ土台の上にある。共同体の日常の時間の領域も祭祀の時間の領域も、いずれも島の共同体の生活に起こる事象であることに変わりはない。その意味では、稲作歌も、稲作歌以外の植物歌も、植物歌の基本的な基盤を同じくしている。

けれども、稲作歌以外の植物歌と稲作歌では、主題と植物の関係には差異がある。イネを謡う歌の数は多いが、それらの歌の主題とするところは、作物の豊穣の希求と感謝、そして、イネに向けられる霊性の感覚に集約される。イネが関わる歌の数の多さに反して、主題は集約されシンプルである。そして、稲作歌に謡われているイネは、イネの生長そのものを謡うことにあり、イネは歌の主格である。それと比べると、イネ以外の植物が関わる歌の主題は、九年母の歌の事例にみたように一通りではない点が対照的である。そして、イネ以外の植物が関わる歌の主題は多様であり、その多様さに、80 数種にわたる植物が表現素材となって対応していることを示唆している。これらの植物歌において、植物は人の思い、主題、又は何かを説明するための素材として用いられる。八重山歌謡が、多くの自然に対する情感を巧みに歌の表現に取り入れている[5]印象を与えるのは、イネ以外の植物を謡う歌の内容と表現の多様さに負うところが多いと推察できる。

植物の表現という点から考えると、稲作歌以外の植物歌と稲作歌の表現構造は異な

[5] 八重山歌謡の特徴として「八重山の歌謡の特徴には、まず第一に自然に対する観察力や情感に長(た)けている点が挙げられます。」（高教組教育資料センター　2008　p. 52）と指摘されている。

っていると思われ、内容的な対比で言えば、稲作歌を除く植物歌の主題は、普段の生活の場の領域に散見しているのに対して、稲作歌は、豊穣を希求する祭祀の領域の主題に集約している。こうした差異を、日常の時間と祭祀の時間という時間的空間的な違いとして、一般的な言葉で言えば、「ハレ」と「ケ」という違いと見ることもできる。稲作歌以外の植物歌は、家や個人、日常の共同体に起きる人間模様等の「ケ」の主題を幅広く取りあげ、稲作歌は、共同体が主催する祭祀や儀礼の目的、そして、各種の儀礼の供物等を唱え・謡う「ハレ」の主題を中心に扱っている。

こうした差異の想定に基づいて、本稿では、この後の「植物歌」を論じる際に、「植物歌」の中の別枠として「稲作歌」[6]という範疇を設けて論じることとする。第2章は、事例に添いながら、植物歌の表現の全体像として、植物と表現の関係を明らかにし、第3章で、稲作歌における植物と表現のより詳細な関係をみる。それぞれの歌について、表現する内容や、そこにみる発想や様式等の考察を通して、八重山歌謡の表現の特徴について考察する。

第４節　八重山歌謡の社会的背景

１．歌と歴史資料

口頭伝承の歌は、本来、祭祀や行事、労働の場で謡われてきた。「場」を共にした人々の記憶を頼りに、繰り返して伝えられてきたものである。時を隔てた「場」と「場」を繋ぐのは、人の記憶である。現在でも、八重山の豊年祭等の祭りで、歌謡は伝承されている。また、祭りでしか謡われない歌もあると聞く。そうした歌がどのように伝承されるのかということについてたずねると、祭りの 2、3 週間前から練習を始めるという話を聞く。

その一方で、現在は、多くの先学の力によって収集された歌が、文字に記録された歌謡集にまとめられている。本稿では『南島歌謡大成』という歌謡集をテキストとしている。また、採譜の記載があるものや、メディアで聴くことができる等、本来の共

[6] 「稲作歌」中には、アワなどの五穀も含まれる場合がある。たとえば、「稲が種子あよー」の類歌の中で、稲作が行われていない竹富島の歌のように、実体的にはアワの叙事歌謡だが、歌のタイトル及び様式、主題の構造等は、イネを謡う「稲が種子あよー」とほぼ変わりないものがある。イネの歌もアワの歌も、歌の表現の発想や様式を見れば差異がなく、作物の歌といってもよいかもしれない。従って、本稿が研究で注目する発想と表現様式という意味で、作物を代表させて「稲作歌」としたものである。

同体の集団の幻想の「場」を離れ、歌集の参照や、歌の鑑賞という新しい状態も生まれている。ただ、長い八重山歌謡の伝承の歴史からすれば、歌謡集として伝えられるという形は、ごく新しい出来事である。

そのような新しい形も含めて、既に数百年の歌の伝承を経ている八重山歌謡の解釈や考察をするためには、歌の背景として、歌が継承されてきた環境について知る必要がある。それは、一つには、歌唱者達が思いを表出する歌が、言葉を介しているものだからである。言葉の意味は、辞書的な概念の部分と、話し手や書き手の固有の体験から発する思いの 2 面性を持つ。これは､言葉一般の在り方だが、歌の理解についても、同様のことが言える。歌に表出された言葉と、その言葉の背後にある具体的な部分迄を含めて解釈しなくてはならないからである。具体的な部分というのは、場所や時であったり、歌唱者達の環境の固有性が反映する。それらは、時代とともに移り変わる。その移り変わる環境の一つに、歴史的環境がある。

しかし、口承の歌一篇一篇を、いつの時代から継承された歌という歴史時間に位置づける事は難しい。文字化された歌の解釈は、記されたある歴史の時点からの解釈を明確にしやすい。琉球歌謡のなかで、時代との関係が比較的明らかなのは、琉球王府が編纂した『おもろさうし』である。『おもろさうし』は、琉球歌謡最古のひらがなで記された歌集である。少なくとも歌集の編纂者と編纂時期は明確になる。けれども、口承の歌は、いつも「場」と「時」を共有する歌唱者達の「今」の解釈を謡っていると考えられ､「今」の繰り返しが数百年にわたる継承の形である。

こうした事情にある口承の歌の背景となる時代の設定は、研究者とその視点によって異なることになる。けれども、それぞれの研究の立場から必要とする歌の思いと表現の解釈の背景を明らかにし、知る必要にある事は同じである。

本稿では、テキストに収載された歌に用いられた植物から植物歌の特徴と傾向に、政治的背景の要素が強くあることを認めた。そのような要素が認められたことからも、歌謡が謡われた生活環境と歴史の接点をどこに求めるか、明らかにする必要がある。

そうした理由から、本稿では､『朝鮮王朝実録』と「慶来慶田城由来記」に注目したい。これらの史料は、15 世紀半ばから 18 世紀の古琉球と近世琉球の過渡期に位置する史料で、既に様々なところで取り上げられており、八重山研究ではよく知られた史料である。比嘉実は「文様に見る古琉球の思想−日輪双鳳雲文の成立を中心に−」(比嘉　1991)の冒頭で､「古琉球」の史料について次のように述べている。

古琉球研究にとっては、新資料の発掘は言うにおよばず、数少ない史料をいかに多くの視点から見るかが大きな課題となろう。（比嘉　1991　p.21）

そこで、本稿が2種の史料を取りあげる視点について述べれば、歌の背景となる歴史社会を、どのような社会と規定してみるかを明らかにするためである。具体的には、第2章で取りあげる歌謡の背景を知るための資料となる。

歌の背景を知ることがなぜ必要かといえば、考察の対象となる歌の性格による。歌の主題は、歌唱者達の思いを伝えている。けれども、ここでいう歌の歌唱者達とは、個々人というより、島の共同体の総意や共感で繋がる人々の集団である。それだけに、歌謡の主題の理解には、時代または地域社会の歴史的な背景の想定を欠くことが出来ない。そして、歌の背景としての歴史の史料を見る視点として、歴史史料にみる事象を、人々がどのように考えたかという「思い」に注目してみたい。少ない歴史史料とはいえ、『朝鮮王朝実録』[7]と「慶来慶田城由来記」から、その時代の歴史事象と人々の思いに関連する記述を取り上げて考察することが本稿の視点である。

２．『朝鮮王朝実録』にみる島民の暮らし

八重山の書かれた歴史史料は、それほど多くない。そのよう事情の中で、いつからともわからぬ口頭による歌謡を伝承し続けた社会的背景の実証はむずかしい。まして、そうした社会に文字と縁遠く生きた庶民の思いに直接触れることは、さらに困難である。

八重山の生活について記述された資料として、一番古い時代が明確に確認できる資料が、『朝鮮王朝実録』に記されている。八重山に漂着した朝鮮漂流民の八重山滞在の報告記録である。この古い文献資料は、十五世紀末の 1477 年、おおよそ 600 年程前に記されたものという[8]。この 600 年という数字をどう感じるかは、人それぞれの立場によるだろう。たとえば、歌謡の研究という点から見れば、日本文学史では、すでに 6〜7 世紀(1500〜1600 年前)に記述された記紀の歌謡があり、そこから記紀の記述以前の口承文芸も想定される。その記紀の年代から比べれば、600 年前という年代

[7]『朝鮮王朝実録』は朝鮮王朝（1392〜1910 年）の歴代の国王の事績を国家が編纂した編年体の記録『太祖実録』『定宗実録』等各国王の実録の総称である。（池谷他篇 2005 訳注篇 p.5）

[8] 1477 年は成宗 8 年 2 月（池谷他篇　2005　訳注篇 p.221）

は近い過去に思えるというのも、率直な印象である。けれども、口承の八重山歌謡の表現基盤となる生活の背景が、絶対歴史年代との摺り合わせが可能な時点という意味では、今のところ、『朝鮮王朝実録』にみる漂流民の報告のある 15 世紀半ばという時代を、一つの現実的な目安とするほかにない。八重山の歴史にとっては、一通過点に過ぎないとはいえ、ここでは、『朝鮮王朝実録』に残された十五世紀末頃、朝鮮漂流民の目を通して語られた八重山の生活についての報告記録に、八重山歌謡の背景となる当時の人々の生活意識を示すような記述をもとめてみたい。

以下に記す内容は、主に池谷望子・内田昌子・髙瀬恭子等（以下、池谷他と記す）による『朝鮮王朝実録琉球資料集　原文篇／訳注篇』(池谷他 2005)[9]と、伊波普猷の著した「朝鮮人の漂流記に現れた十五世紀末の南島」（伊波　1975 pp.57-112）等を資料としている。前者によると、『朝鮮王朝実録』の中には、琉球への漂流を余儀なくされた朝鮮人の帰還後の報告が、全部で 5 件程あることが指摘されている（池谷他 2005　訳注篇 p.96)。5 件の何れもが 15 世紀半ばの記録で、八重山だけでなく、トカラ、久米島等の漂流地と、漂流地から沖縄島に送られた時の経由地の民俗･習俗などが、聞き取りされている。その中で八重山の生活が詳しく報告されているのは、『朝鮮王朝実録』「成宗実録」中の朝鮮漂流民の報告[10]である。

一方、伊波は、「朝鮮人の漂流記に表れた十五世紀末の南島」の中で、この漂流民の報告について次のように評価している。

> 予備知識を備えて来琉した代々の冊封使が、かえってそれに禍され、随書や明史を引用したり、前使曰くなどといったりして、重(おも)に治者階級のことを説明しているに反して、予備知識なども毛頭なく、白紙同様な朝鮮人は、むしろ平民の生活を如実に観察している。(伊波 1973 p.103)

八重山漂流民の聞きとり報告は、他の聞き取りとあわせてみると、聞き取り役の官

---

[9] 本稿中で『朝鮮王朝実録』とするのは、『朝鮮王朝実録琉球資料集』(池谷　2005)の資料の記事を指す。また、『朝鮮王朝実録琉球資料集』(前掲書)からの引用については、原文の読み下し文である「訳注篇」の記載を主とした。その際の拠出を示す記述の中の［ ］の数字は、この資料集の通し番号であり、「原文篇」と「訳注篇」と共通している。

[10]『朝鮮王朝実録琉球資料集　訳注篇』『同　原文篇』（池谷他　2005）では、各実録の巻数は記載を省略され、通し番号が振られている。1479 年帰還の漂流民の報告の資料の所在は、［179］にあたる。

吏が順序よく問う項目に添って、漂流民達の答えが列挙されている印象を受ける。けれども、答える漂流民達の八重山見聞記は、伊波が評価したように、比較的客観的な観察によって、15 世紀の八重山の島々の実情のままを伝えている資料と考えてよいものだろう。

聴取された内容は、「漂流の次第、漂着した琉球国の様子、帰国に至る事情、経由した九州の様子など」（池谷他　2005 訳注篇　p. 240 ）が含まれている。その報告の「琉球国の様子」の聞き書き中に、先島の島々についての記事がある。漂流民が目にした島々に暮らす人々の衣食住、生活環境、その他習俗等について記したものである。朝鮮人漂流民が八重山諸島の与那国島に 1477 年に漂着し、朝鮮本国に帰還した 1479 年は、琉球王府でいえば、第二尚氏王統の三代尚真王の御代に入いった時代にあたる。八重山に対する王府による統治がより明確になるのが、オヤケアカハチの乱が起きた 1500 年をめやすとすると、この漂流民の滞在は、それより 20 年ほど以前の八重山及び宮古の南琉球地域が、強い独自性をもった文化・経済圏のなかにあった時期にあたる。漂流民が与那国島に漂着した際のことが、次のように報告されている。

> 島人、稲米粥及び蒜本を将て来饋し、其の夕より始めて稲米飯及び濁酒・乾海魚を饋す。魚名は皆知らず。留まること七日、人家に移置す。輪次、饋餉す。一里饋して訖(おわ)れば輒(すなわ)ち次里に逓送す。一月の後、俺等を三里に分置し、亦た輪次、饋餉す。凡そ酒食を饋すること一日に三時なり。（前掲書　p. 228）

漂流民達が島に漂着すると、島人はお粥や蒜の根を持ってきてくれ、その晩からお米の御飯と濁り酒と、魚の名は皆わからなかったが、魚の干物が振る舞われた。そこに留まること７日の後、人家に移された。島人は順番に、食事を振る舞ってくれた。１つの村がすむと、次の村に送られ、漂流者を三箇所に分けて、順番で食事の世話をしてくれた。大凡、一日に三回の酒食を振る舞ってくれた、とある。

漂流民が最初に漂着した与那国島の記事(前掲書　pp. 228-231)によると、衣食住の詳しい記載もある。米や餅、酒を醸し､苧で織った布をまとい、木と茅を材料とした簡単な家に暮らす様子等が記載されている。既に、冬作の水田耕作を行い、牛を使って牛踏も行われていたことがわかる。イネに関しては、漂流民が移動した島々のうち、水田のない黒島では「稲無し。稲米は所乃島より貿易す」（前掲書　p. 233)と観察さ

れている。(稲作に関しての記事については、次章で詳しく述べたい。ここでは、ごく簡略に記す。)　また、島の植物や生き物、家畜等生活の環境も含めて細かく観察され、民俗・文化・流通、島々の違いや共通性等興味深い事項が多い。漂流民の報告から受ける印象は、概して、島人達が順番に手際よく漂流民の世話をし、食物にも事欠かない暮らしを提供していたことが窺える。島に暮らす人々は、衣食住に特別困ることなく、互いに協調的で穏やかな暮らしを送っている様子に窺えるのである。そして、次の引用は、島の人々についての観察が述べられている。

> 俗に酋長無し。文字を解せず。俺等、彼と言語通ぜず。然れども、久しく其の地に処(ゐ)り、粗(ほぼ)言う処を解す。(前掲書　p. 231)

島には、首長がおらず、文字を使わず、朝鮮の人々と島の人達の会話は通じなかったが、長く滞在する内に、ほぼ言っている内容は理解できるようになったことが述べられている。それに続いて、島人と漂流民達のコミュニケーションのエピソードも記されている。

> 俺等、郷土を思念し常常涕泣す。其の島人、新稲の茎を抜き旧稲に比べて之を示し、東向して之を吹く。その意は蓋し『新稲、旧稲の如くにして熟すれば当に発還すべし』の謂いならん。(前掲書　p. 231)

上記には、見知らぬ島に漂着し、何時、国に帰ることが出来るのかもわからず、望郷の思いに涙する朝鮮の人々に対して、与那国島の島民が取った行動と、それに対する漂流民の理解が述べられている。今育っている稲(新稲の茎)に穂が稔る(旧稲)頃、東に向かう風が吹いて、故郷に向けて船を出す時が来る、という帰還の条件とその時期がいつ到来するかということを、物(稲)と動作(息を吹きかける)を交えて伝え、朝鮮漂流民もまたその行動を理解した様子が記されている。

この対話により、島人が、意味もなく朝鮮人を島に逗留させているのではなく、帰還に向けて船を出す風を待っているのだという事を、船乗りである漂流民達は了解したものと思われる。そのせいかどうか、八重山の島から島への移動を報告する記録に際しては、「凡そ留まること 6 朔、7 月晦に至り、南風を候ち、(以下略)」(前掲書

p. 231)、というような「南風を候ち」という言葉が必ず添えられている。

この『朝鮮王朝実録』の報告は、もっぱら漂流民側の理解を伝えているもので、島人が何を伝えたのか、本当のところは知る由もない。とはいえ、漂流民の報告からは、知りたい情報を充分に得たと感じたことが伝わってくる。言葉の通じない者同士の対話で、身振り、手振り、さらに身の回りにある具体的なものを利用して思いを伝える島人の表現方法は特別なことではない。けれども、漂流民と島人との対話には、よく似た稲作文化圏の者同士でイネという植物の生育の周期や、季節風をたよりにした当時の渡航の条件等への言葉以前の共通の理解があったことが効を奏していることもあるだろう。言語は違えども、伝える側と受け取る側の相互の理解の正確さが窺える記述である。伝えたいことの本質と伝えるために用いるものの本質を巧みに捉える表現の方法と、言葉以前の共通基盤とは、コミュニケーションの大きな力であるということを、与那国島民と朝鮮漂流民の対話のエピソードは示唆している。これから取り上げる口頭伝承の八重山歌謡の歌唱者達の発想と表現の特徴にも通じていると思われるので、ここに取り上げた。

以上は、朝鮮漂流民の報告のうちのごく僅かな引用だが、突然の外来者の目に写った与那国島他の八重山の人々は、現代風に言って、人道的で礼節にかなった人々にみえていた印象が感じられる。また、素朴な生活環境とはいえ、そうした振る舞いの背景となる衣食住にことたりた暮らしが報告から窺える。

３．「慶来慶田城由来記」にみる社会変化

「慶来慶田城由来記」（石垣市総務部市史編集室 1991）は、古くから西表島の有力家系であり、西表島を中心に勢力を持ち、王府統治下の八重山では、役人を勤めた錦芳氏の嫡子が書き残した記録である。以降「由来記」と略して記す。この「由来記」が書かれた目的については、「由来記」の文末に、著者の次の様なことわり書きがある。

> 雍正年間（一七二三～三五）以前のことは、むかしから伝えているものを、亡祖父慶田城筑登之が時どき話したのを書き記し、雍正より以後のことは、私が知っていることを書き記して、子孫が先祖のいわれを忘却しないようにこのように書き記しておく。
>
> （石垣市総務部市史編集室 1991　p. 22 ）

つまり「由来記」は、西表島を出自とする慶来慶田城家の初代から 10 代までの嫡子の視点で書かれた記録である。その内容は、二部に分けることができる。前半部（前掲書　pp. 2-17）は、10 代用州が[11]18 世紀前半を生きた祖父の 8 代用常の記憶の中の昔の伝承や回想を聞き取りまとめたもので、用常の記憶とそれを聞き取った用州の意識を通して再構成され、15 世紀後半からの西表島及び八重山の歴史と生活環境を書き留めた興味深い記録である。後半部（前掲書　pp. 17-22）は、9 代用憲時代以降の出来事を 10 代用州自身の体験と見聞から記したものと説明され、「由来記」という史料の性格が明らかにされている。

『朝鮮王朝実録』は、外来者が「平民の生活を如実に観察」（伊波　1973　p. 103）したものである。それに対して「慶来慶田城由来記」は、島の首長的位置にあった家系が、八重山地域が琉球国の統治下となってからは、在地の役人として士族の地位を得て、王府と平民(農民)の間に立たつ島役人階級の視点で、島の人々の生活を記したものである。

「由来記」に記された伝承と回想や体験の記事が、どの時期についてのものなのかは、記述されている内容からも比較的明確である。記事内容は初代用緒の代の出来事に始まり、文末は、八重山を襲った乾隆 36 年（1771 年）の大津波の記述で終わる。初代用緒の出生月日は 1457 年（天順元年）[12]とされており、およそ 15 世紀半ばから 18 世紀後半までの出来事が、「由来記」に記されていることになる。「由来記」には、主として西表島の民俗等が詳しく書かれている。それらの記事からは、どこか、強く懐かしんでいる印象を受けるのは、用常の昔語りのせいなのか、記録者の用州の思いなのか、定かにすることはできない。

ここでは、南琉球圏の独自の暮らしを守っていた八重山の共同体社会が、琉球王府の統治下に入り、さらに、薩摩藩島津の琉球侵攻を経て大和の役人の手による検地以降の社会の変化に晒されていく古琉球から近世への経過を、島からの視点で記している記事を特に取り上げてみたい。

---

[11]「由来記」の作者については、諸説あることが「由来記」の［解題］（石垣市総務部市史編集室 1991）に示されている。それによると、「由来記」の作者は、10 代用州とするのは、「亡祖父慶田城筑登之」を 8 代用常と比定した結果から導き出した宮地檀子の説である。
この他には、戦前に発刊された『南島』第一輯の解説を担当した比嘉盛章が、成立年代と制作者の考証を行い、比嘉盛章の説では、作者は 9 代「用憲」（1697 年生まれ　1746 年没）としている。（喜舎場 1977b pp. 278-279）

[12] 喜舎場　1977b　p. 280

前半部の初めには、「まだ、首里の支配下にならない時分」（前掲書　p. 4)、宮古の豊見親の命による「家の材」や「蔵の材」の切りだし作業(前掲書　p. 4)、オランダ船の漂着(前掲書　p. 5)など、八重山の外部との交わりの出来事が記されている。これらは、琉球国の統治下に入る以前の、南琉球圏の生活を窺わせるものである。

前半部の記事には「むかしは」で始まる記事が多くみられるが、用常の記憶によるものだとわかる。「むかしは」という言葉に始まる記事を幾つか抜き出してみたい。

三代嫡子祖納当の時分のこととして、次のように述べられている。

> むかし、年寄りがしていたことは無駄なことではない。村中の取り締まりがなくては、老若男女の気持ちがばらばらになり、いろいろなことを行うことも出来なくなるので、折目、きさり（キザリィ。キザル。行事）の時、それぞれが一か所に集まり、祝のついでに善悪の物語をすれば、若者や子どもまで、見習い聞き習いして、自然に善悪の次第がわかる。（中略）神を尊い、村の先輩に従い、父母兄弟に孝行し、尊う心がひとつになるような古例を取りもつようにしたということである。」（前掲書　pp. 11-12）

上記には、18 世紀を生きた用常の儒教的思想も含まれているとは思われるが、「むかし」は、時節の祭祀や年中行事が行われ、村の長老を中心に、その都度の教えに村中の者達が従い、共同体の暮らしが守られていたと捉えていることがわかる。さらに、石垣島に蔵元が置かれたことを伝える記事は、その当時の島の暮らしを伝えている。

> わずかな公事であったので、余分の日も多く、神遊び（祭りごと）を大事にして厳粛にし、その間に働いて、田地を耕し、農作したが、上納米も飯米も、神遊び２、３か月の分まで不足無く、ゆったりと続いてきた。」（前掲書　p. 14）

さらには「士族はおらず､百姓だけであった｡」（前掲書 p. 15）という簡単な言葉で、共同体の構成員についてわかりやすく記されている。そして、「イネばかり作って、上納米ならびに余米もゆったりとしていた」（前掲書 p. 15)というような記事が並ぶ。

しかし、用常は世の中の変化を、次の様な象徴的な言葉で伝えている。

> むかし、老人が言うには「この世は一生右のようにして暮らせると考えるのは勘違いで

ある。今から後は、世が栄えるということはない。人間は年ごとに増え、物事は次第に多くなり、次第次第に世の中は衰えていくので、いよいよこのことをわきまえよ」と言ったとおり、諸村ともに逼迫してきたことは間違いのないことだという伝えがある。（前掲書　p. 14）

上記の引用文中の「右のような」とは、 前の引用に挙げた蔵元が置かれた当時以前の村人が、協調しあいゆったりとした島の暮らしの事を指す。そのゆったりとした島の暮らしが、人口増加や、政治環境の変化の要因によって、「逼迫」してきたことを感じていることが窺える。

「由来記」前半期の用常が語る記憶の記録は、西表島の村の歴代嫡子のそれぞれの時代にみる人々の農作業の姿や農耕の習俗・信仰の具体的な話題が記事の中心だが、9 代用憲、10 代用州の代の記事には、貢納、夫役の調整等の記事が増え、後半時期の「由来記」からは直接的な農耕の話題は姿を消していく。在地の役人を務める用州や用憲は、田仕事や畑仕事から離れ、役人の立場から農業の仕事を記事にしている。「士族はおらず､百姓だけであった」（前掲書 p. 15)村の構造は、役人層と百姓層の分離が強くなり、用州や用憲らの在地の役人層が、王府と島人の間に立たされている様子が記事から推し量ることができる。

次の様な「由来記」の記事に、前半期と後半期の共同体社会の変化を追うことができる。たとえば、用常の回顧では、島の人々の「むかし」からの振る舞いについて、次のように伝えている。

村に何か事が起これば、村の年長者が老人のところへ行き、田ぶさ・世持まで、老人がいう善悪の判断により働き、田畑の耕し、時節時節の農作、年中の折目折目、または、自分自分の大きな仕事までも、村の老人のいうことを基本にして、田ぶさ・世持まで共同で相談のうえ、することになっている。そのため自然に心がひとつになり、(中略)人をそしり、わずかな盗みをする者が、ひとりいても、すぐさま、村中の人が罰するので、村中に悪心の者はいない。（前掲書　p. 13）

上記の記事は、『朝鮮王朝実録』に伝えられた与那国島の人々の様子についての「其の俗に盗賊無し。道に遺を拾わず。相詈罵喧闘せず。」（池谷他　2005　訳注篇

［179］p.231 ）という報告と重なる。島は異なるが、与那国島には盗人がおらず、道端の忘れ物も拾わない、互いに罵り合うこともない、と外部者の目で伝えている。用常は、自身の配下にある西表島の村人について、心持ち良く述べたい気持ちも働くと思われるが、縁もゆかりもない外国からの外来者の目にも八重山の島の人々が、協調的に温和に暮らしていると映っていたことと重ねて考えると、用常の身びいきの評価というわけではないといえるだろう。

一方、後半期の体験の書き手である用憲や用州の意識は、少し異なっている。1 つ項目の記事は「むかしは」「むかしから」という言葉で始まるが、きまって、後半に「しかし」や「ところが」という逆説の接続詞を挟んで、島人から見て不本意な現実が対比的に記されている。たとえば、次のような記述である。

> むかしから西表と慶田城の両村は並んでいたので、役人をはじめ心をひとつにし、村の取り締まりもできて、村中の士族、百姓の老若男女も心をひとつにしていた。公事や自分自分で用いる物も、すべて勝負のように思い、夜も昼も怠らなかった。(中略)しかし、今になって村が別々になり、心もばらばらになって諸事について不自由となり逼迫した世になった。(前掲書　p.18)　　(下線は筆者の加筆。)

上記は、「首里から御検使が下向し、八重山の村々の善し悪しを検分した時」(前掲書 p.18) に別れた「村建て」の前後を比べている記事である。記事では、村の構成員は士族と百姓の老若男女としている。「むかしから」西表と慶田城が並び立ち共同の苧績屋・おいかや等で働いてきたのだが、2 つの村に分村されて以降、それまで田仕事や、布織りの仕事、山仕事等熱心に行い、上納も自分自分の貯えも満足にゆったりとしていたものが、諸事が不自由に逼迫したと捉えている。その他、用憲と用州の記した「移り変わりのいわれ」(前掲書　p.17)は、上納米や飯米の不足の訴え(前掲書　p.17-19)、耕地の開墾の許可願い(前掲書　p.19)、新たな村の役職や夫役の増加(前掲書 p.20)、在番他役人の検分の際の馳走の負担増加(前掲書　p.20)等、琉球王府の支配下に入って以降の島の負担増を暗に伝えている記事が多い。そこには、「由来記」の前半期と後半期の島の社会の構造の変化に対する慶来慶田城家の嫡子達の立場からの思いがみてとれる。

４． まとめ

以上は、『朝鮮王朝実録』と「慶来慶田城由来記」に、15 世紀後半から 18 世紀後半にわたっての八重山における歴史環境の変化と、庶民及び在地の治者の立場からの思いを中心に見てきたものである。

『朝鮮王朝実録』の朝鮮漂流民の報告からは、15 世紀後半の八重山の人々の衣食住が窺えた。漂流民の見聞に記された八重山の島に暮らす人々の姿は、村や島々の協調のなかで、衣食の過不足無く暮らしており、報告からは、概して八重山全体が穏やかな暮らしを送っているように見える。そうした村の様子は、「慶来慶田城由来記」の前半部で村の農耕や、農耕文化の民俗、村の長老を中心とした合議により様々なことが決められ、老若男女がそれぞれの持ち場で心を合わせて暮らしていたこと等、西表島の暮らしの具体的な記事から受ける印象と共通するところがある。

そして、「慶来慶田城由来記」前半の記述の協調性を重んじる島の暮らしが、後半の記述では琉球王府の統治下に組み入れられることで起こる変化を記し、さらに、そうした変化が、代々の島の有力家系の嫡子の目には、前半期は「その時分は、村中の者が心をひとつにしていたせいか、我がちに物ごとの勝負をするように心掛けていた」（前掲書　p. 11）時代から、後半期は「村が別々になり、心もばらばらになって諸事について不自由となり逼迫した世」（前掲書　p. 18）という言葉に象徴される変化に映っている。歴史の＜発展＞を、当事者の記憶が、社会の衰退と捉えられていたことは興味深い。「由来記」が記述の対象としている 3 世紀の間に起きた国家の成立以前と以降という大きな歴史の進展は、古くからの島の治者階級からは、島の疲弊として多くが語られている。

以上の史料にみた事象を、簡単にまとめれば、穏やかに過不足無く、独自の小集団の原則に従って、環境に見合った暮らしをしていた島々の共同体が、琉球王府の制度に組み込まれ、社会構造も庶民の負担も大きく変わってゆく流動的な時代ということができる。 こうした背景のなかで、次節から取り上げる植物歌の多くが伝承されてきたものと考えられる。前節で述べた歌の背景の要素にも繋がる。

最後に、歴史史料の中の歌という点から注目される「由来記」の中の記事をここに記しておきたい。「由来記」は 15 世紀後半からの西表島の生活中心にした見聞が書き残されている史料である。その書き残された記事のなかに、二代嫡子の野底当の時代の記録に「あやぐ」を謡う場面が記されている。それは、「八重山がまだ首里の支配

下にならない時分に、宮古の豊見親が八重山をすべて支配し、何かと従わせていたとき」（前掲書　p. 4）、毎年所望される家の材木や蔵の材木の伐り出しのために、男女 2〜300 人でが「山宿り」して仕事をさせられていたが、命令を出した豊見親が死んだという知らせに、一同が材木の切り出しの仕事を投げ捨てて「山宿り」に帰った時のことを伝えている。

> 山宿りへ帰り、一夜一日あやく（アヤグ）を歌い、神酒、焼酎で遊んだので、山宿を構えた所を“あよはか”と名付けたと伝える。（前掲書　p. 4）

「慶来慶田城由来記」には、歌の内容などは記録されていない。「あやく」という語に、宮古の歌謡の一ジャンルの呼称を想像するが、当時、歌謡のジャンルという考え方は無かったことなので、 内容的に実際どのような歌が、誰によって謡い伝えられていたのかをこの史料に確かめることはできない。けれども、山仕事の終わった慰労の場で、酒を酌み交わしながら謡うという習俗をこの史料にみることはできる。従って、「あやぐ」はここでは庶民が謡う歌の総称くらいに考えることが妥当だろう。用常の記憶として伝えられている伝承が正しいとすれば、これは、八重山における文字による歴史資料（「慶来慶田城由来記」をさす）が、文字文化の枠外にある口承の歌の世界の記述を残していることになる。ここで注目するのは、歌のジャンルの如何ではなく、15 世紀半ばには、島の人々の労働の場で、歌を謡うという行為がおこなわれたことを記していることである。文字の文化の伝播に先立ち、または、古琉球の文字文化の外に、祭祀や儀礼の場でもない庶民の労働の場に歌があったこと伝えている史料から、15 世紀よりさらに、以前からの人々のあいだに広がっていた口承の歌の世界を慮ることができる。この節の冒頭に、古琉球時代を明らかにする八重山の歴史史料が極めて限られており、まして、その時代に生きた文字を使わない庶民の思いに触れることは、極めて難しい、と記した。けれども、「由来記」の「あやく」の記事は、古琉球時代以前の島の人々の生活の場に、非文字の口伝えによる歌が存在し、歌によって喜びを表わしていたということを明らかにしている。そして、歌は庶民の思いに直接触れるものだと考えられる。

第２章　植物歌の表現

第１節　植物歌にみる植物表現

はじめに、植物歌にみる植物をとおして、 表現の方法としての植物表現の特徴を考察し、その概要を述べる。但し、ここでは、イネに関わる歌「稲作歌」を除いたその他の植物を含む歌を中心にし、イネに関わる歌は、次章で考察する。

八重山において口承の歌が謡われていたことは、「慶来慶田城由来記」（石垣市総務部市史編纂室　1991）の記述に確かめることができる。「由来記」は、八重山がまだ琉球王府の統治下に入る以前の 15 世紀後半における西表島の村の様子が記されている。そこに、西表島の山仕事の現場で歌が謡われる出来事が記述されている。山中の宿泊所である「山宿り」で、「一夜一日あやく（アヤグ）を歌い、神酒、焼酎で遊んだ」（石垣市総務部市史編纂室　1991　p.5）という記事中に、「あやくを歌い」とある。これらの記事は、15 世紀以前から村の祭祀以外の仕事の場で、歌が謡い継がれていたことを伝えている。

植物歌が伝える内容は、家の行事、個人の人生行事、海・山・里の仕事、その他共同体に暮らす男女、夫婦、親族、近隣の人々の間に生じる日常の人間模様等の出来事に発している。共同作業の家造りや航海の祈りもあり、男女の情愛の問答等もある。それぞれの歌の主題は、多彩な人間模様に準じた様相を持っている。そして、それらの主題のもとに、歌唱者達の思いや観念が謡われている。

そうした植物歌の世界に用いられた植物は、前章の第 3 節の＜表 2＞に示した 87 種である。それらの植物は、無意識的、又は意識的に、歌唱者達が経験的に見覚え、聞き覚えた植物についての知恵を駆使して、述べたい事柄に適したものが取り上げられている。植物が関わる表現の内容は、歌の主題に直接関わっているものもあれば、部分的な一節の意図を象徴するだけのもの等様々である。それらの植物が関わる表現を、植物と表現の関係として捉えると、植物を素材に用いる表現の方法の特徴を、概ね３タイプにまとめることができる。以下に歌の事例を挙げて簡単に述べてみたい。

1. 植物による具象表現

植物歌には、八重山の人々にとって身の回りに育つ植物が主に用いられ、謡われて

いる。それらの植物が、歌唱者達の思いや観念を表現する素材として用いられる表現方法を採る歌がある。歌には、歌唱者達が選んだ植物が持つ何かしらの特質が謡われている。そうした表現の心意は、その植物自体を謡うことを意図したものではなく、植物の景を謡うことを契機に引き出された抽象的な歌唱者達の思いや観念を、具体的な植物の像により伝えることにある。そうした植物と表現の関係性からみて、植物による具象表現ということができる。

次の「山かしぃにあよう」は、植物による具象表現を含む歌の事例である。

「山かしぃにあよう」　石垣島新川村　　p. 158

1	山かしぃに　根下りや	山樫木の根下りは
	山どぅにどぅ　根下りする	山底に根下りする
2	本見りば　一本	幹を見たら一本
	枝見りば　むむ枝	枝を見たら百枝
3	むむさかりぃ　さかりようり	百栄え　栄えなされよ
	むむ枝　むたようり	百枝繁りなされよ
4	きゃら米ぬ　根下りや	キラマイ〈米〉の根下りは
	田のよる田に　根下りしようる	苗代田に根下りしなさる
5	むむさかりぃ　さかりようり	百栄え　栄えなされよ
	むむむたい　むとぅようり	百繁り　繁りなされよ
6	ばがけらぬ　根下りや	私達みんなの根下りは
	ちぃくでぃふちぃに　根下りす	作り口〈田・畑〉に根下りする
7	主ぬ前ぬ　根下りや	主の前の根下りは
	御座ぬ上に　根下りしようる	御座敷の上に根下りしなさる

冒頭 第 1 節～3 節は、「山かしぃに」（和名　オキナワウラジロガシ）について謡っている。「山かしぃに」は「山底」[1]に根をおろして育ち、一本の幹からたくさんの

[1]『日本国語大辞典』（北原保雄　2003）では「山底」は「山のふもと」とある。一方、『石垣方言辞典』（宮城　2003　p. 1153 ）によれば、「山底」は「山奥」と記されている。そして、『図鑑琉球列島有用樹木誌』(天野　1989 p. 45)では、「オキナワウラジロガシ」は「奥山の肥沃な河岸などに多い。」と生育地について記されている。これらの資料を参考に、本稿では、この詞章での「山底」は「山奥」の意と解釈している。

枝を伸ばし、繁茂してと謡われている。ここには、野生の樹木の特徴的な生育の場と生育の様子が示されている。第 2・3 節の「本見りば　一本(ぴとうむとう)」／「枝(ゆだ)見りば　むむ枝」、「むむさかりぃ」／「むむ枝」は、繁茂をあらわす対語･対句である。「むむ～（百～)」は、繁茂を誉めたたえる意を含んだ美称辞でもある。第 5・6 節の「きゃら米」（イネ）の繁茂の描写にも同じ表現が使われているように、植物の繁茂を表す象徴的な表現であり、植物一般に多用される慣用句である。次の第 4・5 節では苗代に根を下ろしたイネが繁茂する様子を歌い、続く第 6・7 節では農民は「田･畑」に、お役人は「お座敷」に根を下ろす、と村の人々の姿を謡っている。この歌の内容は、「山かしぃに」･「きゃら米」と「ばがけら」･「主ぬ前」が主格となって、それぞれの根を下ろす場所とその様が列挙され謡われている。

つまり、取り上げられた植物（「山かしぃに」･「きゃら米」）と人（「ばがけら」･「主ぬ前」）とは、「持ち前の場所に根をおろす」という主題のもとに、共通する特質をもった事象として列挙しており、歌唱者達が、植物の生態と人の事象を類似の事象と捉えていることがわかる。「根をおろす」という抽象的な主題の概念を、具体的な事象で表し、＜植物＞→＜人事＞という列挙の形式によって、主格を変えて同じ主題を繰り返し謡いあげる構造の歌である。

上記は、歌の内容とその表現の構造について述べたものだが、口承の歌の解釈には謡われる「場」の意図が反映することへの考慮が必要である。口承の歌謡が謡う「場」の意図を反映することについては、先行する歌謡の研究（波照間　1999）で指摘されている。その内容については、次節で詳しく述べる事として、先に進めたい。「山(やま)かしぃにあよう」は、婚姻、生年祝等の祝儀の席で謡われ伝承されてきた歌[2]とされており、祝儀の席に相応しい願いや喜びの意図を反映していると考えられる。

列挙された事柄には、歌の心意が託されている。素材の植物に託された心意は、持ち前の場所に「根下りする」という意味であり、その意味を象徴する具体的な像（具象物）としての植物が取り上げられている。八重山歌謡の歌唱者達にとって、持ち前の場所に「根下りする」ことは、共同体における望ましい人生の姿という意識を背景

[2] テキストの注(テキスト p.622)によれば、「このアヨウは、往古は庶民階級の人々の結婚式の時に祝宴に出席する人々によって謡われ、（中略）「みゆとぅあよう」といわれる。「みゆとぅ」とは夫婦の意である。「山樫木(やまかしいに)あよう」は、また、台所の火の神の前でも謡われた。この歌謡は生年祝の時にも庶民階級の人々が謡った。」とある。

にした言葉と考えられる。「山かしぃにあよう」の中に謡われた「山かしぃに」の野生の姿は、人が生活に根を下ろして繁栄する状態を表す具象として選ばれ、その具象表現には、人生の幸福の予祝が込められている。そのため、婚姻という人生の門出にふさわしい歌として謡い継がれてきたと考えられる。

八重山にかぎらず、祝辞をのべ、おめでたい言葉をつらねた祝儀の歌を謡うのは、祝の場の慣例である。本土の結婚式の宴なら、「高砂」が謡われるところだろう。「高砂」に縁のある樹木は、松である。「常磐木」や「相生の松」という植物の具象が、永遠にかわらぬ夫婦の契りを象徴する。八重山の「山かしぃに」の「根下り」という言葉を、類似した場の象徴的な表現として対比すると、それぞれの表現と風土を表していて興味深い。いずれも、歌の主題は、望ましい人間の在り方を表すことにある。

事例の石垣島新川村の「山かしぃにあよう」と冒頭部が同じ詞章で始まる歌が、テキストには6篇収載されている。何れも、同じ主題と構造をもった類歌といえる歌である。これらの歌が列挙する事象は、＜植物＞→＜人事＞と展開するだけでなく、＜植物＞→＜もの＞→＜こと＞→＜人事＞というように列挙される事象が加わっている。次の例は、その事象の一部を示したものである。

＜もの＞

「山かしぬあよう」　小浜島　　p. 168

5	やらぶばたす　みんぶいばたす	やらぶばたす　みんぶいばダス
		（以上酒器名）
	御膳ぬ上にと　根うりす	御膳の上に根が下りる

「山樫木あゆうー ＜結婚祝いの歌＞」　竹富島　　p. 171

5	台ぬ酒や　高台にどぅ	台の酒は高台に
	根下りる	根が下りる

＜こと＞

「山樫木あよう」　石垣島大川村　p. 160

2	首里加那志　御公事や	首里天加那志のご奉公は
	御座にどぅ　根下りしょうる	お座敷に根下りなさる

これらの類歌に列挙されている事象は、「山樫木」以外の植物数種、もの、こと等が用いられている。けれども、冒頭節に植物の「やまかしぃに」を謡い、最終節には人の姿を謡う構成は変化せず、それ以外の列挙される事象の変化や増減があっても、

「根を下ろす」という共通する特質をもった事象が列挙されている構造の歌であり、歌の主題に影響はない。

取り上げた歌の事例にみる植物と表現の関係についてまとめてみたい。

祝儀の「場」等で謡い継がれてきた「山かしぃにあよう」の歌の主題は、人が持ち前の場所に「根下り」するという言葉で、共同体における人間の理想の在り方を謡うものである。その「根下り」という抽象度の高い主題の概念を、類似した意味内容を示す具体的な植物や様々な事象を取り上げ列挙することによって、多面的に表現している。そして、歌の心意は、＜植物＞→＜人事＞という列挙の形式に象徴されているように、主題である人の在り方への思いが、植物の景を謡うことで、具体的な像を伴いながら引き出される。また、歌の理解においても、見慣れた植物という具体的な像により、歌唱者達の間でわかりやすく言葉を共有できる。

以上は、植物歌の植物が、歌唱者達の様々な姿や、心、思想、観念等々の人の意識の中にあって抽象度の高い概念や思考を表現する媒体素材として用いられている事例である。伝えたい思いや観念を、身の回りの植物の具体的な像によって表現する「植物による具象表現」ということができる。

２． 技巧としての植物表現

身の回りの植物を謡うことを契機として、主題の人事についての具体的で豊かなイメージを引き出す具象の表現の様式の事例に対して、次の事例は、植物が歌の技巧として用いられていると考えられる事例である。

事例は、説話や諺等で既に周知の内容を主題とする歌である。「木の曲がりは直せても、人の曲がりは直せない」という琉球諸地域に広がる諺を歌で伝えている。

「ぴんに木(ぎ)ぬゆんた」 竹富島　p. 425

１	ぴんに木(ぎ)ぬ　むいやよー	ヒルギの生えは
	川原(かーら)ぬ端(はた)　たゆりどぅ	川原の端を頼って
	むいやんせー	生えているよ
	フイヨーホーナー　＜囃子、以下略＞	フイヨーホーナー
２	まがり木(きー)ぬ　むいやよー	曲り木の生えは
	山(やま)ぬ端(はた)　たゆりどぅ	山の端を辿って

	むいやんせー	生えているよ
3	すんむとぅ木(きー)ぬ　むいやよー	大谷渡りの生えは
	木(きー)ぬはんた　たゆりどぅ	木の端を辿って
	むいやんせー	生えているよ
4	がじまる木(きー)ぬ　むいやよー	ガジマル木の生えは
	石(いし)ぬ上(うい)　たゆりどぅ	石の上を辿って
	むいやんせー	生えているよ
5	木(きー)ぬまがいやよー	木の曲りは
	しかりんでどぅある	聞かれるとがある
	やらびんけー	童たち
6	人(ひとう)ぬまがいやよー	人の曲りは
	のーらんてどぅある	直らないとがある
	御満人(うまんちゅー)	御万人

第1〜4節には「ぴんに木」（和名ヒルギ）、「すんむとぅ木」（和名オオタニワタリ）、「がじまる木」（和名ガジマル）のそれぞれの植物の生育の様が列挙されている。いずれも何かに添って生えている姿を謡っている点で共通している。末尾の第 5・6 節に諺の内容が謡われていて、同時に、この歌の主題である。前半部は、末尾2節の内容に即した植物の景が列挙されている。

形式的には前節の植物の姿の事象から、人に関する事象の列挙という形式で展開されており、先に記した「山かしぃにあよう」の様式と変わりなく見える。けれども、ヒルギ、オオタニワタリ、ガジマルという樹種の選択とその内容も、後続する諺に即して、周囲の植物環境から選ばれた植物名が挙げられているが、仮に、第 1〜4 節の植物の事象がなくても、歌の主題は伝えることができる。前節の第 1〜4 節の植物の列挙と、後節の第 5〜6 節の諺との間には、これらの植物を前節に謡うことによって、歌の主題に特別な効果を加えているという緊張関係は感じられない。

この歌の主題となっている諺について言えば、歌の形式を整える以前に、既に諺として完結している。琉球各地に広がっているものであり、諺の意味内容は周知されて

いるため[3]、歌を伝承する際にあえて具体的事物を用いて意味内容を補う必要がない。歌の形式を整える以外に、主題を伝えるための植物などの具象の助けを必要としていないと考えられる。もともと、歌の主題は明瞭で、＜植物＞→＜人事＞の関係はあくまでも形式的に整えられたものと思われる。

この事例にみる形式的な歌の発想の背景に考えられるのは、歌唱者達が、歌における＜植物＞→＜人事＞という具象表現の様式を、規程のものとして意識していたということである。その意味で、「ぴんに木(ぎ)ぬゆんた」の事例には、歌の表現の発想における問題というより、歌の技巧の問題をみることができる。

本土の近世の和歌の技巧には、本歌取という技法がある。本歌取とは、『日本国語大辞典』（北原保雄　2003）によると、「和歌、連歌などを作る際に、すぐれた古歌や詩の語句、発想、趣向などを意識的に取り入れる表現技巧。新古今集の時代に最も隆盛した。」とある。本歌取によって、自作の歌に古い歌からの語句や発想などを取り入れ、限られた字数の短い言葉に奥行きを持たせ豊かな表現にする技法である。

口承の八重山歌謡の世界の場合、過去の歌に積み重ねられた語彙・内容・発想も、人の記憶の中に在る。従って、文字を表現の媒体とする和歌の世界の「本歌取」のようにはいかないが、例えば、和歌が本歌を古い歌集の世界に典拠を求めたと同じように、文字に残されることがない口承の歌謡の世界の場合、＜古い歌集の世界＞に相当するのが、地域の人々が知恵として共有してきた諺や、説話などの世界ということもできる。事例に上げた歌の場合は、広い地域によく知られた諺が歌の主題となっている。よく周知されてきた諺であるため、現在でも、歌の主題の出自が諺からの典拠だということがわかる。この歌の場合の植物と表現の関係は、前半部に列挙された植物を素材として選び出す過程を経て、発想された表現というより、予め決まった主題を歌の形式を整えるという歌の技巧の意識が働いて、冒頭部に植物が取り入れられたものと言える。

---

[3] （参考）『小浜島誌』の「木のことわざ」（山城浩 1972）　には、「木のまーる(曲)ら、のーはり(直せる)ろの　ぴすと(人)ぬまーる（ひねくれ）らのーはらぬ」(山城 1972 p.124)とある。また、西岡敏『波照間方言のことわざ集−『波照間島の歴史・伝説考−仲本伸幸遺稿集−』を元にしての音声記号の試み−』には、波照間島に次のような意味の諺が伝わっていることが紹介されている。「キヌ　マガリヤ　ノウサリスガ　ピゥトゥヌ　マガリヤノーサラヌ（木の曲がりは直せるけれど、人の曲がりは直せない）」という諺である。また、それに対応する沖縄の諺として、「キーヌ　マガイヤ　チカーリユシガ、ククルヌ　マガイヤ　チカーラン」などと対応する。」

３．実景描写の植物表現

実際の環境にあるがままの植物の実景が、歌の中に景物として謡われているものがある。歌の内容に添う植物が取りあげられて謡われているが、生活を基盤にした歌の詞章の中に、島の自然環境を映す写実的な描写が含まれることは普通のことである。その意味で、自然環境を描写する植物素材といえるものだが、謡われている植物自体に、それ以上の意味はない。けれども、そうした環境的な意味で取り上げた植物が、亜熱帯の固有種である場合など、当の歌唱者達にとっては「当たり前の景色」としか意識されていなくとも、客観的には、八重山固有の自然環境の描写を歌が伝承しているという意義をもつ表現もある。基本的には、植物歌のモチーフは、島の生活であり、歌から島の人々が暮らしている環境の具体性を抜きにすることはできないため、歌の内容には、自ずと歌唱者達の目に写る八重山の自然や、その自然を活用する暮らしぶり等、人と自然の民俗・風土が織り込まれることになる。歌の舞台である周囲の環境を表す言葉の素材に、植物が織り込まれている事例は数多くある。

次の事例には、西表の海岸の植物の実景が謡われている。実景的な描写の植物表現を含んだ歌である。

「井戸(かぁー)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとう)」　西表島祖納村　p. 136

（前略）

5　ぷし木ぬ　下(しいた)らぬ　きぞがま	ヒルギの下方の二枚貝が
ぴーに下(う)り　ぎらなるけ	干瀬に降りてシャコ貝になるまで
ばがけらぬ生命	吾等皆の生命は
島とぅとぅみ　あらしょうり	島と一緒であらせてください
（以下略）	

引用部は、西表島祖納村に伝わる「井戸(かぁー)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとう)」の全 5 節の中の最終節である。この第 5 節の冒頭部に、「ぷし木」(和名ヒルギ)という植物名が謡われている。「ぷし木」[4]は、河口の汽水域(真水と海水が混ざる場所)に成育するマングロー

[4] 『琉球列島 植物方言集』（天野 1979　p. 108）によると、西表島ではオヒルギ、メヒルギ、ヤエヤマヒルギのいずれもが、「プシキ」という方言名で呼ばれていることがわかる。そのため、ここでは、ヒルギ科の総称として解釈する。

ブの仲間である。それらの「ぷし木」の樹林の根元の泥土を生息地としているのが、二枚貝[5]である。そのマングローブ林の湿地の先には、シャコ貝が生息する珊瑚礁の海が開けてゆく。ここに謡われている自然の景は、実在する南島の海浜風景が忠実に謡われている。こうした南島の自然環境が、引用部の歌の舞台となっている。二枚貝を謡うために、ヒルギの景観の描写が謡われるのは、ごく自然な文脈である。この歌では、ヒルギは生き物の生息場の景物として登場している意味以上のものはない。こうした表現の例が、わかりやすい「実景描写の植物表現」である。

全5節のこの歌全体の主題は、各節の後半部に繰り返される「ばがけらぬ命　島とぅとぅみ　あらしょうり（吾等の生命は　島と一緒であらせてください)」という詞章に表現されている。各節の後半部の、私達（島人）の命が、島と一緒にいつまでも続くようにという言葉には、「長寿」を願う気持ちが表現されている。その「長寿」の概念を、西表島に棲息する小動物や魚や貝を具象に用いて、歌唱者達の豊かなイメージを表現に展開している。引用した第5節は、2種の貝を用いて謡っている。長い時間という抽象概念の具体的なイメージに当たるのは、「河口の二枚貝が海のシャコ貝になる」という表現である。二枚貝とシャコ貝は異なる貝であり、歌にみるような貝の「変身」は、実在の自然界には起こり得ないが、歌の仮想の世界でこそ可能である。この歌は、膨大な時間という抽象的な概念を、具体的な生き物のイメージを用いて表す方法を採っている。歌の心意は「長寿」の願いにあり、「長寿」という抽象概念の言葉を用いる代わりに、小動物と島という具象の両側面のイメージによって、壮大に表現している歌である。

但し、先に述べたとおり、「井戸(かぁニ)ぬぱたぬ小蛙(あぶだーま)誦言(ゆんぐとう)」に謡われている植物の「ぷし木（ヒルギ)」は、歌の主題である長寿の表現とは関係が無く、あくまでも、歌の主格である小動物の住処の環境の描写として、取り上げられていた。実景描写の植物表現といえるものである。

こうした実景描写的な表現として謡われた植物は、この事例の様にわかりやすいものもあるが、実際には多面性を持ったものもある。以下にその事例を取り上げてゆきたい。

（1）実景描写の謡われる「場」による転換

[5] 西表島には、「シレナシジミ」という日本最大の2枚貝が生息している。

次の引用は、小浜島に伝わる「作法(さくほう)じらま」である。「作法」とは、「原山勝負(原勝負)の意。相互扶助で農耕するの意」(喜舎場 1970　p. 387)という。

「作方(さくほう)じらま」　小浜島　p. 245

1	うるじぃ（ん）ぬ	初夏が
	若夏ぬ	若夏が
	立つだら	立ったら
2	しぃとぅむでぃに	早朝に
	あさぱなに	朝まだきに
	うきやぶり	起きており
3	東(あがる)かい	東に
	ひんがしかい	東方に
	うがみば	拝む〈望む〉と
4	ずりぬ花	梯梧(でいご)の花
	あかるかいしゃ	明るく美しく
	さきゆりば	咲いており
5	ゆりぬぱな	百合の花が
	しるささき	白く咲いて
	さきゆりば	咲いていたら
6	うりばみり	それを見て
	きむさにしゃ	肝<心>嬉しく
	あるむぬ	あることよ

テキストには、上記以外にもほぼ同じ内容の歌が、ジラバ・ユンタ各１篇づつ収載されている。この詞章の第 4 節と第 5 節に「ずりぬ花」(和名デイゴ) と「ゆりぬぱな」(和名ユリ) の 2 種の植物が謡われている。この歌の全体の内容は、うりずんの頃、早朝に起き出し、(日の出の) 東の方角を望むと、真紅のデイゴの花が咲き誇り、白いユリの花が咲き乱れていて、それを見て、心から嬉しい思いであることだよ、というのが大意である。まるで叙景の歌のようである。実際、八重山ではうりずんの頃に、デイゴとユリは同時期に開花している。歌の詞章の内容を追えば、時候を謡うま

さに実景の描写である。また、最後の節は簡単に思いを述べて、叙情的表現で結んでいる。

しかし、この歌の「場」は、「小浜島結願と称する大行事の際に狂言（一）の時に謡うものである」（喜舎場 1970b p. 386）という。結願祭は、作物の豊作の感謝を捧げ、同時に、翌年の豊穣を祈願する祭りである。歌がそうした「場」の意図を受けている事を考慮すれば、この歌を通して表現される心意は、叙景の歌ではない。うりずんの頃のデイゴと百合の咲き誇る風景は、良好な気候がやがてもたらす作物の豊穣の予祝の幻視ととれる。このように詞章自体の内容は島の実景描写的だが、歌の心意は、必ずしも言葉の表面に表れないことがある。デイゴや百合の花の咲く風景がそれを愛でるためのただの実景描写の景物として謡われているとは思われない。

（2）呪術性と実景表現

次の事例は、新城島に伝わるジュゴン漁に関する歌である。この歌の中にも、植物が謡われている。

「ざんとぅりぃゆんた」　新城島　p. 450

1	ぱなり　若者（ばがむぬ）	離（ぱなり）＜新城島（あらぐすく）＞の若者
	ば島　ぎら者（むぬ）	我が島のすぐれ者
2	しるび山　まりゃあらぎ	しるび＜未詳＞の山を廻り歩き
	あだに山　まりゃあらぎ	アダン＜植物名＞の山を廻り歩き
3	あだなしば　きりとぅし	(アダンの)気根を切り
	よなかじば　ぱきぃとぅし	(オーハマボーの）表皮を剥ぎ
4	三日干（みいかふ）し　晒（さ）らしょうり	三日干し　晒しなさり
	四日干（ゆーかふ）し　晒らしょうり	四日干し　晒しなさり
5	さぎなさぎ　みりばどぅ	裂きに裂いてみたら
	なぎぃななぎぃ　みりばどぅ	薙ぎに薙いでみたら
6	大目網ば　くぬみょうり	大目網を作りなさり
	八爪（やちいみ）網ば　しだしょうり	八つ目網を作りなさり
	(以下略)	

上記の引用は、全 19 節の歌の冒頭部である。「ざん」とは、ジュゴンの方言名であ

る。全体の内容は、第１～16 節のジュゴン漁のモチーフを謡っている部分と、第 17～19 節以降は、捕れたジュゴンを見物に集まった人々の喧騒を面白おかしく謡うモチーフの部分とで構成されている。引用の冒頭部は、ジュゴン漁に出る若者を誉めたたえ、第 2 節～第 4 節は山で採取した「あだなし」（アダンの気根）や、「よなかじ」（和名　オオハマボウ）の樹皮を水に晒す様子を謡っている。第 5・6 節は晒した植物から繊維を裂き、漁網を編むところまでが謡われている。引用を省略した第 7 節以降から第 16 節までは、その漁網をもって出航し、ジュゴン漁をする様子が展開する。

この歌に用いられた植物は、アダンの気根とオオハマボウである。アダンの気根は、茎から地上にむけて四方に伸び、植物を支える役目をもつ根っこのようなものであり、タコノキ科の植物には顕著にみられるもので、「支柱根」という（清水　2001 p. 242)。その気根を裂いて繊維を利用する。オオハマボウの樹皮は、水に浸けて腐らしてから繊維を取り出すと、非常に強い縄が綯える。こうした利用法は、植物民俗学の聞き取りの報告（山田　2012　p. 215 ）によっても明らかにされており、この歌が、伝統的な網の製作方法に添って謡われていることが窺える。こうした網作りの正確な記述等から推し測ると、詞章は事実に即した内容を描写していることが推測できる。また、ジュゴン漁の有り様も、漁の経過の通りに謡っていることから、歌の表現の様式でいえば、漁労の叙事的表現の歌謡である。

喜舎場によると「新城島では「イシュ御嶽」を創建し、神に祈願して出帆したのである。」（喜舎場　1970ｂ　p. 295 ）とある。そして、「捕獲されたザン魚は「頭部」だけを「イシュ御嶽」に奉納しておく。」（前掲書 p. 296 ）と記されている。琉球王府時代、八重山のジュゴン漁は新城島に限って課せられ、島の貢納品としてジュゴンの肉を王府に納めるための漁だったという歴史背景があることが、『竹富町史　第 5 巻　新城島』（竹富町史編集委員会　2013）にも述べられている。そうした歴史と考え合わせると、「ざんとぅりぃゆんた」にみる叙事表現は、ジュゴン漁の豊漁の予祝的な意図をもった儀礼歌の表現様式からくるものと考えられる。儀礼歌の叙事表現は、述べた事実どおりのことが言葉の呪力によって実現するという言霊信仰の下に、理想の事実の描写がなされる表現様式である。そうであれば、この歌の心意からすると、網作りの描写の表現もただの実景的描写ではなく、呪的表現の一部と解釈できる。

このように、網作りの正確な実景描写とは、ジュゴン漁の事実を謡っている側面と、ジュゴン漁の予祝として謡われているという両側面の複合的な表現の解釈が必要とな

る。前者であれば、実際に行われていた漁の儀礼と民俗を伝えている実景的表現と考えられるし、同時に、後者のジュゴン漁の安全・豊漁儀礼の際に謡われる歌であるために、言霊信仰の呪的な機能を果たす叙事的表現として理想的な状態を謡った表現と解釈されるべきものである。

これは、八重山歌謡の表現が、詞章の内容とは別に、言葉や歌の「場」が呪術性を持つという特徴による。謡われる「場」の意図が反映することによって、歌の性格や目的の多面性を抱える口頭伝承の歌の表現の普遍的な特徴の一つと考えられる。

（３）主観的視点と客観的視点

事例としては、先に取りあげた「山かしいにあよう」の実景描写の事例に添って考えたい。「山かしいにあよう」は歌全体の発想と表現様式、そして謡われる「場」から見て、主題は歌唱者達の属する共同体なりの人間の在り方の理想を示す歌であり、「山樫木」（オキナワウラジロガシ）は、「根を下ろす」という人間の在り方の概念の具象となる植物といえる。しかし、詞章について言えば、「山樫木」が山底に生えていると謡う詞章は、植物の生態の事実を伝えているもので、人々が自然と向き合った体験から得た認識をもとにした実景描写でもある。そして、その実景描写は、歌唱者達自身には意識されていないことだが、琉球列島の固有種であるオキナワウラジロガシの生育を謡っている。眼の前の樹木を身近に感じて、樹木の実体を謡うということが、八重山の固有の自然と文化の環境を歌に表現していることになる。このように、自然と向き合う生活で得た正確な知恵と情報が伝えられていることが、歌の言葉には多々みられる。

文学としての歌の解釈は、一般的には、歌唱者達の思いに添う主観的視点での解釈が求められる。その点からすると、歌と自然環境との関係という視点は、歌唱者達ではない外部からの目線で、一般的な歌謡の歌の解釈からはみだした客観的視点ではある。歌唱者達にとっては、目の前に展開する自明の生活環境である。けれども、植物の表現の内容の解釈には、内部の目と、歌唱者達にはあまり意識されない外部の目線も必要である。数ある野生の樹木の中から、あえて「山樫木」を選び、歌の中に謡ったのは、他でもない歌唱者達の意識に関わる問題である。確かに眼の前の環境の中に「山樫木」が存在したから「山樫木」を謡ったには違いない。けれども、環境の中から、歌のために必要な景を切り取ったのは歌唱者達の意識である。謡われている景が、どれほど実景的ものだとしても、その実景は歌唱者達に選ばれた景である。実景描写

を切り取った意味や理由は、歌唱者達の中にあることは明らかである。「山樫木」によって人間の在り方を謡った表現を、外部の目から見ると、オキナワウラジロガシをそのような素材として取りあげる関係性に、八重山の風土に育まれた文化的な描写をみる。ちょうど日本人と桜の関係のようなもので、土地の人々と植物の自然環境が醸し出す固有の関係が表現されると思われるからである。

歌の表現の何に注目するかによって、実景描写の表現の解釈は異なってくる。従って、表現の分類も異なってくる。以上にみたように、植物の実景描写の表現の解釈には、歌唱者の意図と歌の場と歌の様式などの視点が絡み合い反映する。「井戸(かあー)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとう)」の「ぷしき（ヒルギ)」の例にみた、謡われている植物が明らかに景観の描写だと言えるものは、むしろそれほど多くない。これは、歌唱者達の発想・意識・表現と周囲の自然と自然物が、深い影響関係にあることを示唆している。

４．まとめ

八重山歌謡の植物歌の表現について、事例に添いながら３タイプの表現の概要を述べてきたものである。

１．植物による具象的表現は、歌に用いられた植物が、歌唱者達の思いや観念を表すための素材となっているものである。この場合、歌の心意は、言葉に表れた植物の特質と、本質的に同じ特質の歌唱者達の思いや観念にある。

２．技巧としての植物表現は、〈植物〉→〈人事〉という表現の様式が、歌の技巧として意識され、歌の形を整えるために、植物を用いたものである。説話や諺等、既に広く周知された内容を、歌の主題とする。

３．実景描写の植物表現は、生活環境に在るがまま、見たままの植物が謡われているものである。謡われている植物自体は、歌の中のただの景物として用いられているだけで、それ以上の意味はない。ただ、歌謡が謡われる「場」の意図、歌謡の言葉が持つ呪術性等に鑑みると、単純に事実を描写する表現と言えるものではなく、多面性を持つ言葉として解釈する必要がある。また、「植物歌」の植物は、島の自然環境に実在する植物がほとんどである。それは、歌の世界に切り取られた自然は、歌唱者達にとっては日々の「当たり前の景色」でも、客観的には、八重山の固有の自然環境の描写であり、それ自体が、文化的な風土の表現を意味する。他の土地にはない八重山歌謡固有の植物と人の関係が謡われていることになる。植物歌の実景表現の解釈は、

複合的である。

上記の何れも、八重山歌謡の植物歌にみられる植物の表現である。これらのタイプは、明確に分類できるものではないことも述べてきた。

植物歌は、島の自然環境の基盤に暮らす人々の生活・労働・人間模様の諸相を歌の題材としている歌である。そのため、植物歌に用いられる植物についても、島の環境に生育する植物自体の描写を基本に、植物と人の関わりが、多面的に歌の表現に展開されている。従って、「３．実景描写の植物表現」は、歌の表現の素材としての植物が持っている基本的性格である。そして「２．技巧としての植物表現」は、広義にとれば歌の表現の問題だが、狭義にみるとこれは歌の技巧的な問題である。

このようにみてくると、３つの植物の表現のタイプを示したが、植物歌の表現の問題として考察すべき重要な特徴は、「１．植物による具象的表現」ということになる。具象的表現にみる植物は、歌で伝えたい思いや観念を具体的なイメージで表現する（具象）素材として用いられているものである。「山かしいにあよう」の事例で考察した植物と表現の関係のように、植物のある特性と人の生き方、人の感情・行動等々、共同体の人間模様一般を結びつけ対応させる発想がある。植物を表現に用いる「１．植物による具象的表現」のパターンの表現様式は、歌の素材とされている植物の景と人間の景が対応した関係にある。加えて、植物歌は島の人々の共感が機能する「場」で、歌い継がれてきたものである。例えば、共同体の祭りや個人の人生行事、作業場などであり、従って、植物歌が表現する思いや観念とは、共同体の生活を共にする人々の社会性を帯びた内容となっていると思われる。簡単な言葉で植物と表現の関係を表せば、植物には歌の思いが表現されている。植物歌の表現の研究には、どのような植物が、どのような思いの具象として用いられているかという関係性を、詞章の内容、表現様式、「場」と心意の関係、社会的背景等も含めて、歌の事例一篇一篇にそって考察することが求められている。

第２節　植物歌の表現事例

各々の植物歌の事例に添って、植物と表現について考察する具体的な内容は、植物のどのような特性が捉えられているか、そして、素材としての植物の特徴はどのような歌唱者達の思いや観念の表現に用いられているか等、主として具象としての植物の

表現に注目したい。また、その植物素材と思いや観念を繋ぐ発想の考察もおこないたい。その際には、歌の発想が成立するための背景にある自然環境、風土、民俗、歴史等の研究も適宜援用する。そして、それらの総合の上に、植物歌の主題と表現様式、歌の心意等を明らかにする。

各歌のタイトルには、歌に含まれる考察の対象とする主要な植物名を付記している。

１．「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」　－ ヒルギ －

（１）「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」

テキストには、ヒルギを謡った歌が 4 篇ある。それらを、ここでは「ヒルギの歌」と呼ぶこととする。「ヒルギの歌」では、ヒルギは「ぴんに木」「ぷしき」の方言名で記されている。4 篇は以下の＜表１＞に示したものである。

＜表１＞

	歌謡名	テキスト語形	地域名	ジャンル	頁
1	ぴんに木(ぎ)ぬゆんた	ぴんに木	竹富島	ユンタ	425
2	大川原(うふんがーら)ぬぴんに木	ぴんに木	新城島	ユンタ	451
3	井戸(かあー)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとぅ)	ぷしき	西表島祖納村	ユングトゥ	136
4	かでぃかるじらば	–	石垣島大浜村	ジラバ	213

上記の 4 篇の、歌の中のヒルギの役割は、異なっている。ここでは、「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」、「かでぃかるじらば」を中心に考察する。他 2 篇については、「ぴんに木(ぎ)ぬゆんた」は「第 1 節　植物歌にみる植物表現」で、「２．技巧としての植物表現」の事例に取り上げた歌である。また、「井戸(かー)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとぅ)」のヒルギについても、「３.実景描写の植物表現」の中で考察しておる。


石垣島名蔵湾あんぱる

歌の事例の考察に先立ち、ヒルギという植物の特徴を簡単に述べておきたい。厳密に言えば、ヒルギ科の植物である。熱帯、亜熱帯の海岸や河口の汽水域(海水と淡水が交わる沿岸地域)に成育する植物の集団がある。それらの植物群を総称してマングローブという。そして、日本のマングローブを構成する主要

な樹種[6]に含まれるのが、ヒルギ科のメヒルギ、オヒルギ、ヤエヤマヒルギ等の植物である。メヒルギは鹿児島県薩摩半島の喜入に北限があり、オヒルギは奄美以南、ヤエヤマヒルギは沖縄本島の慶佐次が北限とされている。また、八重山諸島では、マングローブ林が西表島に最も多く発達している。ヒルギ科の植物は、花の咲いた後の枝に特徴的な種子を着けることで共通している。ペンシル型をした長い種子は、「胎生種子」とも呼ばれる。この種子は樹上から落下して、海水に流されながら、汽水域の泥土に刺さり着生する。亜熱帯の琉球諸島では、海岸線や河口の岸沿いに、ヒルギ科の植物を含むマングローブ特有の生育の景観を、しばしば目にすることができる[7]。ヒルギは、材木や、染め物に樹皮を利用するなどの生活資材としても人々の身近にある用材であり、その植物の生育の実体を間近に見ながらヒルギの姿を謡うことができる環境にあるのは、日本の中では、南西諸島地域に限られる。ヒルギは、八重山の自然の景観を特徴づける植物の一つである。

また、ヒルギの群落が広がる汽水域の泥地には、その環境に適する生き物が生息する。海岸や河口の泥地は、甲殻類のアナジャコやシオマネキ他のカニの仲間、そして、西表島には、シレナシジミと呼ばれる大型のシジミ貝等も生息し、人間にとってはそれらの採取地でもある。後述する歌には、ヒルギの種子の定着とカニの巣穴の関係が謡われている。その意味でも、ヒルギを通して亜熱帯八重山の自然や民俗を窺い知ることができる興味深い素材である。

（2）「大川原（うふんがーら）ぬぴんに木」の歌の内容

以下に取りあげる新城島に伝わる「大川原（うふんかーら）ぬぴんに木」には、ヒルギの生態と成育環境が謡われている。「大川原（うふんかーら）ぬぴんに木」と石垣島大浜村の「かでぃかるじらば」は、2 篇の歌を比較すると多くの類似がある。「かでぃかるじらば」にはヒルギという植物名は歌には表れてこないが、詞章を照らし合わせてゆくと両歌がヒルギを謡っているということは明瞭である。ここでは、事例として新城島の歌にヒルギがどのように謡われているかをみてゆきたい。

---

[6] 八重山に分布する主要な樹種として、ヒルギ科のメヒルギ、オヒルギ、ヤエヤマヒルギ、ハマザクロ科のマヤプシキ、クマツヅラ科のヒルギダマシ、シクンシ科のヒルギモドキの 6 種がある。（中須賀　1995　p. 4）

[7] ヒルギについての詳しい解説は、（天野　1989　pp. 230-232）（中須賀　1995　p. 4）、（中西　1994　p. 64）、（屋比久　2008　p. 99）等参照。

「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」　新城島　p. 451

1	大川原ぬ　ぴんに木	大川原のヒルギ＜植物名＞
	ぴんに木ぬ　生(む)いや	ヒルギの生えるのは
	みなとぅぱた　生(む)いさ	湊の端に生えるよ
	やらざぱた　生いさ	ヤラザ＜河口＞の端に生えるよ
2	うるじぃんぬ　なるだ	初夏がなると
	若夏ぬ　いきゅだ	若夏がなると
	花ゆ花 さちゅさ	花は花と咲くよ
	実(な)りゆなりぃ　なりゅさ	果実は果実と実るよ
3	ぱい風ぬ　うしゅだ	南風が吹くと
	ぶなばいぬ　うしゅだ	盆南風(ぶんばい)が吹くと
	花ゆ花　うちゅさ	花は花と落ちるよ
	実(な)りゆ実　うちゅさ	果実は果実と落ちるよ
4	ぴしぃすーに　いでぃゆた	干潮に出て
	ぴしぃすーに　さんがれ	干潮に引かれて
	ゆなら[8]くし　出でぃゆた	与那良(よならら)海峡を出て
	なんぬばだ　むまれ	波の腹にもまれ
5	さいなまに　むまし	小波にもまし
	んちぃすーぬ　入るだら	満ち潮が入(はい)ると
	んちぃすーに　さんがれ	満ち潮に引かれ
	ゆぬんなとぅ　入りなぎ	同じ湊に入り込み
6	ゆぬ川口　入りぃなぎ	同じ河口に入り込み
	ゆぬやらざ　ぺりなぎ	同じやらざ＜河口＞に入りこみ
	どるぬみーば　家(や)ばし	泥土の中を家にして
	かんぬみーば　家ばし	蟹の穴を家にして

『琉球列島植物方言集』(天野　1979　p. 109)によると、「ぴんにき」という方言

[8] 「西表島の地名。与那良。西表島の東部、小浜島と西表島の間の深海・ユナラトゥー(ユナラ澪)の対岸あたりの地。」（前新　2011　p. 1272）


メヒルギ種子

は、西表島古見でのオヒルギ（別名アカバナヒルギ）の呼称として記されている。また、詞章の内容から地理的な検討をすると、八重山諸島の中で、実際の地形として「大川原」と呼ぶことができる河川がある島は、石垣島か西表島の大きな島のどちらかである。加えて、この歌で種子が漂って行く様子が謡われている「ゆなら」は、小浜島と西表島の間に挟まれた海峡の名前である。歌にみる情報だけを考え合わせると、「ゆなら」海峡を挟んで、西表島の東海岸にある仲間川河口周辺他の幾つかの河川に見られるマングローブ林が、この歌の舞台だろうということが具体的に解釈できる。この歌は植物や舞台が、明確であることが特徴的である。

詞章の内容を少し詳しく追ってみたい。第 1 節では「みなとぅぱた／やらざぱた」にあるマングローブ林を描き出している。第 2～3 節ではヒルギの花が咲いて種子ができる迄を謡っている。「うるじぃん／若夏」「ぱい風／ぶなばい」は、琉球列島の時候を表す時に用いられる歌の慣用句であり、植物のよく生育する時期を示している。次の第 4～5 節に謡われているのは、河口に生えるヒルギの親樹から落ちた種子が、海流に流される様子である。そこには、マングローブの繁茂する河口の潮の干満によって、与那良海峡に種子が流されることなど、種子の行方が謡われていく。最後の第 6 節の「どるぬみーば　家（ぴ）ばし（泥の中を住家にして）／かんぬみーば　家ばし（蟹の穴を住家にして）」は、海を漂い再び元の河口の泥土に帰り着いたヒルギの種子が河口の蟹の穴に引っ掛かり根付く様子を謡って終わる。

この歌謡の全体を通してみると、ヒルギの周囲の環境を含めて、植物の生態を具体的に謡っている歌である。謡っているのは西表島の海岸の景観と季節の移り変わりの中で、幾度となく繰り返されている植物の生命の循環といえる。詞章は、ヒルギの生活史[9]を伝えている。

（3）歌の成立の背景

旧暦 2 月～3 月頃を、琉球歌謡の歌の言葉では「初夏／若夏」という対語でしばし

[9] 植物用語においての「生活史」とは、「個体或いは個体群の一生の過程を意味する。」（清水　2001　p. 253）

ば表現する。ヒルギの花が咲き、実がなることを歌った第 2〜3 節は、緻密な観察眼による表現というより、慣用句化した時候を表す対句を用いて歌が展開している。

一方、この歌謡の描写の中で注目されるのは、第 4 節以降に展開する八重山の自然環境のなかにあるヒルギを捉える眼差しである。ヒルギの生態の特徴を良く伝え、歌唱者達の観察眼の確かさが伝わってくる詞章である。自然科学の研究で種子の伝播には、風散布や海流による散布、鳥や動物によって運ばれるなど様々であり、それぞれの種子は散布に適応した構造を供えていることが明らかにされている（中西　1994 p. 61)。オヒルギは、通常 20〜30cm の棒状の幼根を付けた胎生種子と呼ばれる種子を樹上で結ぶ。潮間帯にあるヒルギの親木から落ちた胎生種子は、潮の干満に任せて海を漂い、あちこちに散布されるようにできている。実際、八重山の島々の海岸では、海を漂流した様々な熱帯植物の種子を拾い集めることができる。



波照間島、西浜の漂着種子
モクマオウ・ゴバンノアシ・アダン・ニッパヤシ・ミフクラギ・サキシマスオウ・サガリバナ・モモタマナ・シロツブ・ククイナッツ

この歌の第 4〜5 節では、ヒルギの種子が海流に乗って散布される様子を、図らずも伝えている。とはいっても、柳田国男が浜に流れ着いた椰子の実から、『海上の道』(柳田　1978)を構想したように、歌唱者達が、熱帯域に繋がる文化や生態系の中の琉球列島を構想して謡ったわけではなく、日々の暮らしの目線で島の自然に息づく野生植物と海の関係を忠実に述べた歌である。

加えて、この歌には植物だけでなく、繁茂するヒルギの樹林の生き物も登場し、それが歌の展開に不可欠な意味をもつ。ヒルギの生育している汽水域に堆積している泥地は、オキナワアナジャコやシオマネキ等の甲殻類他、多くの生き物の住処であり、ヒルギの根元には大小の巣穴が無数に開いている。歌の結びの第 6 節は、その穴の一つにヒルギの種子が刺さって根付くところを謡っている。この最後の詞章の光景は筆者も同様の場面を見たことがあり、ヒルギの実生の曲がりが蟹の穴の曲がりの形状にぴったりと合って刺さっていたことに興味を覚えたものである。この歌の詞章は、マングローブ林の中に息づく動植物について、実際の体験から紡ぎ出された言葉であることが伝わってくる。ヒルギに向けられた歌唱者達の観察眼は、意図したわけではなくとも、ヒルギの種子の散布の姿を捉え、島を取り巻く自然の摂理を謡っている。

以上は、この歌が謡っている西表のヒルギの生態と自然環境についてみてきたもの

である。歌唱者達の観察眼によって、ヒルギの生息地、種子散布、次世代の活着までの循環を謡う言葉は、八重山の植物と海の普遍的でダイナミックな関係を描き出している。

「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」は西表島の河川のヒルギを謡ったものと考えられるが、新城島の人々によって歌い継がれてきた歌である。なぜ、新城島の人々が、西表島のヒルギを謡っているのかという点には、次のような八重山の島々の暮らしの歴史が反映していると思われる。

「朝鮮人の漂流記に現れた十五世紀末の南島」(伊波 1973 p.74) や『朝鮮王朝実録琉球資料集　訳注篇』(池谷他篇　2005　p.233) によれば、古くは朝鮮済州島の漂流民(1477 年)が『朝鮮王朝実録』に残した報告で、すでに新城島の住民が、西表島に渡ってコメを入手していたことが語られている。また、首里王府と八重山の蔵元との間で交わされた布達と報告・問合せが書簡集として残されている「参遣状」には、新城島から西表古見への「通耕」についての遣り取りが残されている[10]。近年発刊された『近世八重山の民衆生活誌』(得能 2007)にも、新城島の島民が舟で西表島に「通耕」して開いた水田が仲間川の流域に多く在ったこと等が、詳しく明らかにされている(前掲書 pp.94-100)。また、明治時代に笹森儀助が著した『南嶋探険』(笹森 1893) に、南風見村の付近には、新城島や黒島の島人が小屋を建て、農耕をしていたことも記録されている[11]。

これらの 15 世紀から明治時代までの年代が隔たった幾つかの記録が明らかにしていることは、八重山の島々のうち、土地や水が不足する低島の島々と、山や川があり、土地と水源の豊かな西表島や石垣島との間の往来が、時代を超えて生活の常態であったということである。小さな 2 島からなる最高標高地が 20 メートルほどの平坦な新城島が、大量な水を必要とする水田稲作に不向きなことは容易に推測できる。そのた

---

[10]「康熙四十三年 (1704 年) 甲申
一.新城村は百姓の耕作地が狭く、定納米も飯米も続きかね逼迫しており、(中略) 古見村の南一里半のところにある大浦ヤラスという所は空き地が多いので、通って田畑を耕作し、定納米や飯米を続けたいとのお願いの訟が出され、(中略) 古見村には不都合がないので、通って働くよう申し渡しました。」(石垣市総務部市史編集室 1995a　p.56)　*引用文は、「参遣状抜書」の訳を記載した。

[11]「七月二十日　(中略)　南風見村ハ島ノ南端ニシテ、海面ヨリ数丈ノ高所ニアリ。南ハ波照間(はてるま)嶋ヲ八海里ノ沖ニ望ミ、海岸ニ接スル事二町。東ハ広漠タル原野・水田・泥沢・河川ヲ経テ、仲間村ニ達ス。又東方海浜ニハ、新城嶋・黒嶋人民ノ耕作小屋六、七軒有リ。二、三町ノ原野・沼田・泥沢ヲ経テ山岳ニ連ナル。(以下略)」(笹森　1893　p.219)

め、15 世紀以前から、新城島と西表島の東海岸地域では、人々が小さな島から大きな島へと耕地や材木、水等の必要生活物資を求めて、刳り舟で海を往来していた。西表島のヒルギを謡った歌が、新城島の人々の間に連綿と伝承されてきた背景には、生活の必要から生じた島と島の密接な関係が窺える。小さな刳り舟で海を渡れば、海上を漂う種子にも出会っただろうという推測も、島々の浜の漂着物を見ればあながち間違ってはいないだろう。

ところで、冒頭で「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」とよく似た石垣島大浜村に伝わる「かでぃかるじらば」があると述べた。両歌は類似の内容が展開しているため、同系の歌ということがわかる。けれども、「かでぃかるじらば」には、「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」のように海峡に揉まれるヒルギの種子の様子などは謡われていない。最終節の蟹の穴に着生する種子を謡っている詞章の共通性等から、２つの歌が、ヒルギを歌の素材としていることには変わりないが、海を渡り大きな島へ「通耕」することが常態であった島の人々の歌には、海を流れる種子の有り様がより詳しく謡われている。「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」と「かでぃかるじらば」は同じ植物のヒルギを謡う類歌ながらも、取りあげ方に違いが生じるのは、人々の生活圏の在り方の違いによるものと考えられる。このように 2 つの歌を比べると、類歌といえども、歌にはそれぞれの島の暮らしの現実的背景が率直に反映していて興味深い。

（4）歌の心意と「場」と表現様式

ヒルギは、亜熱帯の西表島の自然の景観を特徴づける植物の一つである。この歌は全篇を通して、八重山の島の住人でこそ観照できるヒルギについて謡った歌のようにみえる。しかし、この歌は自然を謡うことが目的だったのかという問いの下に、ここからは歌の心意について考察したい。それは、八重山歌謡の歌唱者達にとって、自然を謡うことはどのような対象として自然をみる行為なのか、という表現の発想に触れる事柄である。考察にあたって、口頭伝承の歌謡が伝承されてきた本来の形として、謡われる「場」と歌の心意の関係について述べておきたい。

八重山歌謡の「場」と歌の関係について、波照間永吉は八重山歌謡の形態に関する研究である「八重山歌謡の形態 －“場”と歌唱法を中心に-」（波照間 1999 pp. 529-658）に、次のような視点を提示している。

歌謡がうたわれるものである以上、その“場”の規制をさまざまに受けているはずであ

り、“場”的特殊性を反映しているはずである。それが個々のジャンルおよび歌謡一つびとつにどのようにあらわれてくるのか。このことが“場”を問題とする根本のところである。（前掲書　p.531）

波照間はこの論文で、祭祀の構造において、祭祀と歌謡の相関を明らかにした。波照間が示した祭祀と歌謡との諸相の緻密な分析を踏まえて、本稿では、具体的な歌謡の一つとして「大川原（うふんがーら）ぬぴんに木」について、歌の“場”との関係において歌の心意を考えてみたい。

本稿は、歌形についての研究ではないが、事例の歌は、全体的に音数や対語・対句など基本的な形式が、よく整っていることを付け加えておきたい。CD 版の歌唱集である「沖縄の古謡」(波照間 監修　2011)の「八重山諸島編　中巻　- 西表･波照間・新城島-」に、この歌も納められている。その歌唱方からは、この歌の整った各節ごとの対句形式の間に、「ヨルカヨーレ」「ヨールカヨー」[12]という囃子を挟んで、男女交互に村人達の集団によって謡われることがわかる。

歌の内容の展開については、前項までに記してきたとおりである。ヒルギの生活史の１サイクルを謡っていて、岸辺に繁茂する植物の生育の時間の順序に従って物語は進む。その意味では、ヒルギを主格にした叙事的な表現がなされている。そこで、この歌の叙事的な表現の意味から考えてみたい。

まず、同じように植物のイネの生育を謡う叙事歌謡「稲が種子あよー」と比較してみたい。(ただし、イネの叙事歌謡については、次章に詳しく記す為、ここでは、かいつまんで簡単に述べておく。)「稲が種子あよー」は、種子取祭という播種の儀礼で謡われる歌であり、播種の儀礼の主題と「稲が種子あよー」の歌の主題は同じく、豊穣を願うことにある。ヒルギの叙事歌謡と「稲が種子あよー」のようなイネの叙事歌謡との違いを取り上げるならば、イネの叙事歌謡は、人が手を掛けて育てるイネの理想の生長の過程を歌っている。そして、歌に込められた心意は、言葉に表したとおりのことが実現すると信じる言霊の信仰によって、詞章のすべてをかけて、作物である

[12]「ヨルカヨーレ」の囃子について、小野重朗は「このヨリは寄りで波に浮かんで岸辺によることを意味しており、島人の詩情がこめられている」(小野 1995　p.21)と説明している。（但し、小野の聞き取りでは、「ヨリカヨリ」となっている。）また、『竹富町史　第５巻　新城島』のこの歌の解説では、「「ヨルカヨーレ」は、方言で、「ぶらり、ぶらり」という意味」(竹富町史編集委員会　2013　p.598)がある、と野底宗吉の説を紹介している。

イネの豊穣を希求することにある。イネの生育の順序を追って謡うのは、理想通りの豊穣の実現の予祝として、呪的な叙事表現の様式を採るためである。

では、野生の植物の生育を謡った「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」はどうだろうか。歌の詞章だけを一見すると、ヒルギの生活史の 1 サイクルを叙事的に歌っている歌だが、イネと同じように、ヒルギ自体について良好な生育を祈ることが主題であるとは思えない。そこに、この歌の心意を、歌唱の“場”を含めて問い直す理由がある。

この歌を伝承してきたのは、新城島の人々であることは先にも述べた。小野重朗は、この歌の伝承について、次のよう記している。

> 新城島(あらぐすく)という小離島の節祭(しつまつり)（旧八月九日の頃）の時に今でも謡われている。節祭には神前や海辺で巻踊が行なわれ、徹宵で一軒一軒の民家を回り庭で踊り、その家に適したユンタやジラバを、例えば妊婦のいる家では子供の出生を歌ったユンタを、漁業の船では豊漁のジラバをといった風に歌い踊るのだが、この「ぴんに木」はその時によく歌い踊られるユンタである。」（小野　1977　pp. 117-118）

さらに 2013 年に発刊された『竹富町史第五巻　新城島』（竹富町史編集委員会 2013）に、「節祭の歌」の一つとして「よるかよーれ」（「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」の別名）が紹介されている（前掲書 p. 596）。また、同書の「１．節祭の歌謡」の項にある節祭の歌の歌唱の様子についての記述（前掲書 p. 587）によると、多くは巻踊りを伴って謡われ、歌唱は、アンツクヌフチヰ(音頭取り)によって先導され、アンツクヌフチヰの宰領で、次々と曲を換えてメドレーでつないでいくので、曲順、曲数はその場によって異なることになる、としている。これらの記載から、この歌は、新城島で共同体の祭祀である節祭の時に行われる巻踊りで、音頭取りに誘導された村人達によって歌われてきた歌のひとつであることがわかる。

新城島の節祭は、島の三大行事（豊年祭、節祭、結願祭）の一つで、「1 年の始まりでお正月と同じ意味がある。」（前掲書　p. 434)とされている。一般的に、新年の祝いは、晦日の一夜を挟んで毎年繰り返される生活の再生を意味する。「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」は、こうした意味を持つ節祭で謡い継がれてきたのである。

波照間永吉は先にも引用した論文「八重山歌謡の形態　－“場”と歌唱法を中心に－」（波照間　1999 pp. 529-658)で、「祭祀空間と歌謡の相関」について、「一つの祭祀

空間が祭祀の中心部と周縁部という形で構成されているのと見合う形で、歌謡も存在しているのではないかという問題(中略)である」(前掲書　p. 538)と指摘している。そして、白保の豊年祭を例に、「祭祀空間の、限定された聖域から日常生活空間の方向への場の移行・拡大は、司祭者の司から山人数へ、そして村人一般の参加という変化・拡大をもたらす。」(前掲書　p. 540)と整理し、説明している。

「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」は、先述した小野や『竹富町史　新城島』による歌の場の記述を総合すると、節祭の中で、音頭取りの先導で村人たちによって巻踊の際に歌われてきたものである。この歌が謡われてきた場は、波照間の指摘の言葉を借りれば、村人一般の参加する、祭祀の中の「周縁部」に位置する歌であることが窺い知れる。こうした節祭の巻踊の“場”の意味の反映のもとに、「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」のヒルギの生活史によって表現する歌の心意があると考えられる。

そこで、歌の解釈に際して、次の最終節に注目したい。

6　ゆぬ川口　入りぃなぎ	同じ河口に入りこみ
ゆぬやらざ　ぺりなぎ	同じやらざ＜河口＞に入りこみ
どるぬみーば　家(や)ばし	泥土の中を家にして
かんぬみーば　家ばし	蟹の穴を家にして

この最終節は、ヒルギの種子の活着を「どるぬみーば　家(や)ばし（泥の中を家にして）／かんぬみーば　家ばし（蟹の穴を家にして)」と擬人化して表現したものである。『日本国語大辞典』(北原 2003) によると、擬人法とは、「修辞法の一つ。人間でないものを、人間に見たてて表現する法。活喩法。」とある。この歌でいえば、上記に取りあげた第 6 節の詞章が、島の河川に育つヒルギを、人間になぞらえる発想の転換を示している。この歌では、冒頭部から、ほぼ自然の景物として植物を謡う内容が展開し、最終節で擬人的表現に転換している。それだけに、最後の擬人化されたヒルギの表現は、歌全体の流れの中で、多少の違和感を覚える部分である。けれども、歌唱者達の意識の転換の表出として、歌の心意に繋がる重要なヒントである。

喜舎場永珣は、『八重山古謡（下)』(喜舎場 1970b)の「大川原(ウフンガーラ)ヌピンニ木(新城)」の注釈に、「まるで人生行路はこのヒルギの一生とほとんど軌を一にしているようで、これを観察して、古謡に謡われているのである。」(前掲書 p. 300)という一行を書き

添えている。この喜舎場の評は、歌が示したヒルギの生育の自然の営みに、人間の人生の営みを投影し、両者の存在に同質のものを認める発想によって、生まれる評である。この「ヒルギの一生」に「人生行路」を見るという喜舎場の言葉は、新城島で長くこの歌を継承してきた多くの歌唱者達にも共通する思いだろう。この歌の詞章内には、人間の「人生行路」を謡っている手がかりとなる言葉は、最後の一節の擬人的な表現のみである。けれども、この最後の一節によって、この歌の言葉上には表れていない心意へと導かれる。植物の生活史は、植物の生命の循環を示しているもので、節祭という場に含まれている新しい年の「再生」という主題にも添っている。そうしたことを鑑みると、「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」の歌の心意は、植物の生活史を謡った裏にある人の「人生行路」ではないかという喜舎場が評した解釈に通じる。祭祀空間の「中心部」の聖域よりは、「周縁部」は日常生活空間へと広がり、それに連れて村人達の楽しみの色彩も強まると雖も、祭祀が意図する一定の文脈の中にある歌が、景観を愛でることだけを目的として、歌い継がれるものとも思われない。仮に、この歌の原初では、目の前の自然を見たままに謡ったとしても、村人の選択によって歌が繰り返し再生される長い年月の間には、共同体の祭祀という歌の“場”の意図の反映により、歌の社会的性格を受けて意味づけがなされてくると考えられる。そこに、「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」における謡われる場の「特殊性」の反映をみることができる。

先にイネの叙事歌謡が、栽培するイネの生育の時間の順序を追って謡うのは、豊穣の実現の予祝のための呪的な叙事表現の様式を採っていると述べた。同じく植物を謡っている歌でも、イネ、ヒルギを謡う 2 つの歌の叙事的な表現様式の持つ意味内容は異なっている。「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」において、野生のヒルギの生育の順序を追って謡うのは、植物自体の生育を願うものではない。「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」の歌の心意には、歌唱者達が、謡われているヒルギの生活史と人間の一生の営みを重ね見る自分たち「人生行路」への思いがある。目の前の自然の植物と人間の姿を結びつけ、同質なものを見出す発想が、ヒルギを具象として用いる表現の基となったと考えられる。

「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」は、詞章の表面上では、ほぼヒルギという植物の一生しか謡われていないが、それは、植物と人間のそれぞれの一生の営みに共通性を見いだす発想によって成立した寓喩的な表現ということができる。それが、この歌の表現様式の特徴である。

２.「山樫木（やまかしに）あよう」　－ オキナワウラジロガシ －

（１）　「山樫木（やまかしに）あよう」とその類歌

テキストには「山樫木」「山かしぃ」「山かし」という語を含む歌は 15 篇収載されているが、それらの樹木は、和名でオキナワウラジロガシのことである。その内この項でとりあげる歌は、以下の 6 篇である。

＜表１＞

	歌謡名	テキスト語形	地域名	ジャンル	頁
1	山樫木あよう	山樫木（やまかしいに）	石垣島川平村	アヨー	157
2	山かしぃにあよう	山かしぃ	石垣島新川村	アヨー	158
3	山樫木あよう	山樫木（やまかしに）	石垣島大川村	アヨー	160
4	山かしぬあよう	山かし	小浜島	アヨー	168
5	山樫木あゆー（結婚祝いの歌）	山樫木（やまかちに）	竹富島	アヨー	171
6	山樫のあゆう	山樫根（やまかしに）	黒島	アヨー	180

6 篇の歌はタイトルを同じくし、また、第 1 節冒頭が「山樫木」は「山底」に「根下りする」という同じ意味内容の詞章で始まる歌である。これらでは、歌唱者達の伝えたい思いや観念を、「山樫木」という植物の生育の姿を具象に用いて表していることで共通している。石垣島新川村の「山かしぃにあよう」は、「第 2 章 第 1 節 1.植物による具象表現」で取りあげた歌である。以降、本稿では＜表１＞に挙げた 6 篇について、「山樫木あよう」とその類歌として扱う。ここでは、「山樫木」がどのような表現の目的をもって歌に用いられているかを通して、植物と表現の関係について考察する。

『図鑑琉球列島有用樹木誌』（天野 1989）の「山樫木」（オキナワウラジロガシ）についての解説によると、この植物について、大凡次のように紹介されている。オキナワウラジロガシは琉球列島の固有種であり、各島の非石灰岩地帯の山地に点在する。特に、奥山の肥沃な河岸などに多く、高さ 20ｍに達する高木である。樹木の成長が早く、材質は剛硬であるため、建築材（柱）に供する。その他、堅牢性を必要とする機械、船舶材（艪や櫂など）に使われる。首里城の丸柱、守礼門の用材はオキナワウラジロガシの心材が使われていた。また、生活に身近に利用できる薪炭材として優れており、種子は加工して食用、豚の餌などにも適する。（前掲書　p. 45）

また、オキナワウラジロガシのドングリ(果実)が、日本で最大級の大きさといわれている。写真のオキナワウラジロガシのドングリは、本島北部のものだが、他のドングリと見比べても、存在感がある。こうした植物の特徴は八重山歌謡の中に活かされ


大きいドングリがオキナワウラジロガシの実

ている[13]。

オキナワウラジロガシのテキスト語形は、「山樫木あよう」とその類歌では、いずれも接頭語の「やま（山）」が付く。テキストでは、接頭語をとった「樫木」の部分の発音は、「かし」「かしぃ」「かしに」「かちに」等のふり仮名が表記され、それらは植物辞典によるオキナワウラジロガシの各地の方言名(天野　1976　p. 15)と一致する。けれども、方言辞典、植物辞典等に、オキナワウラジロガシの方言名として「やま」「山」の接頭語の付いた語形は見られない。従って、オキナワウラジロガシについた「やま」「山」の接頭語は、「山樫木あよう」とその類歌に見られる歌の言葉の語形と考えられる。

（2）「山樫木(やまかしに)あよう」とその類歌の内容

はじめに、「山樫木あよう」とその類歌の 6 篇の中から石垣島新川村の「山(やま)かしぃにあよう」の事例を挙げてみたい。

「山(やま)かしぃにあよう」　石垣島新川村　p. 158

1	山(やま)かしぃに　根下(にう)りや	山樫木の根下(お)りは
	山どぅにどぅ　根下りする	山底に根下りする
2	本見りば　一本(ぴとうむとう)	幹をみたら一本
	枝(ゆだ)見りば　むむ枝	枝を見たら百(もも)枝
3	むむさかりぃ　さかりようり	百(もも)栄え　栄えなされよ
	むむ枝　むたようり	百枝繁りなされよ
4	きゃら米ぬ　根下りや	キラマイ〈米〉の根下(お)りは
	田のよる田に　根下りしようる	苗代田に根下(お)りしなさる
5	むむさかりぃ　さかりようり	百栄え　栄えなされよ
	むむむたい　むとぅようり	百繁り　繁りなされよ
6	ばがけらぬ　根下りや	私達みんなの根下りは

[13]「鳩間ゆんた」鳩間島（p. 403）の以下の 1 節は、ドングリの殻斗(俗称　お椀・はかま等)で神酒を飲ませる、と謡っている。歓待できない客人に対するもてなしを、あしざまな言い方で表している。

13 ふのうら人(ぴとう)ぬ　走(ば)りくーば	船浦人がやって来たなら
あでぃんがーぬぐるに　みきぬまし	樫の実の殻で神酒を飲ませよ

ちぃくでぃふちぃに　根下りす　　作り口〈田・畑〉に根下りする

7　主ぬ前ぬ　根下りや　　主の前の根下りは

御座(うざ)ぬ上(うい)に　根下りしようる　　御座敷の上に根下りしなさる

この歌の各節の主格は、「山樫木」（第１～３節）→「キラ米（イネ）」（第 4・5 節）→人（第6・7節）と転じて、農民は「田･畑」に、お役人は「お座敷」と、役割に応じた居場所に「根を下ろす」様を列挙して謡っている。主格が植物から人に転じていく。植物と人について、それぞれの定着する（根を下ろす）場所の具体的な列挙で、「相応の場所に根をおろす」という同じ観念を表現している。ヒルギの歌と同様に、ここでも、植物と人の営みを同質に見なす発想は類似している。

さらに、次の事例は「山樫木あよう」の類歌の小浜島の歌の事例である。

「山かしぬあよう」　　小浜島　　p. 168

1　山かしぬ　根うりや　　山樫(かしき)木の根下(お)りは

山ぬとーにと　根うりす　　山の底に根が下りる

2　あさんぐる木ぬ　根うりや　　アサングル木の根下りは

山ぬ頂にと　根うりす　　山の頂きに根が下りる

3　ふちふきぬ　根うりや　　フチンの茎の根下りは

石ぬ上にと　根うりす　　石に上に根が下りる

4　ちるるびんぬ　根うりや　　つる瓶の根下りは

座敷上にと　根うりす　　座敷の上に根が下りる

5　やらぶばたす　みんむいばたす　　やらぶばたす みんむいばダス〈以上酒器名〉

御膳ぬ上にと　根うりす　　御膳の上に根が下りる

6　ばかけーらぬ　根うりや　　吾等皆の根下りは

たたみ上にと　根うりす　　畳の上に根が下りる

この歌には、前半 3 節に、「やまかし（山樫木)」のオキナワウラジロガシの他に、「あさんぐる木（アサングル木)」は和名フカノキ、「ふちふき（フチン)」は和名ヨモギの 3 種の植物が登場する。そして、その第 1～3 節までに野生の植物がそれぞれの生育場所に生えている姿が謡われている。続く第 4～5 節までは祝儀の際に使う酒

器が床の間や高膳に据えられている様を謡っている。そして最後の節で、「ばかけーら(吾等皆)」は座敷に腰を据えている、というのが文字通りの内容である。第1節の構造は植物名を挙げて、樹木が自生する場（立地）の特性を述べながら謡う。植物が「適所の場で根を下ろす」という意味内容である。次節以降も、「根を下ろす」という主題を繰り返し謡っていく。主格は変えても、それぞれの根を下ろす適所を謡う同じ構造が繰り返される。最後の第 6・7節は人についての事象を挙げて結んでいるが、節毎の詞章の内容は、「植物」が主格か、「酒器」が主格か、「人」が主格かの違いにすぎない。つまり、もの（植物･酒器）や人についても、同様の意味内容・表現の構造の詞章が列挙されている。これらの列挙された事象は、ものはあるべき所に「根を下ろす」という抽象的な観念を、植物・もの・人の具体的な描写を用いて表している。様々な具象によって、幾通りもの表現が見られるが、一つの観念を謡っている。

事例に挙げた歌全体に共通しているのは、各節に繰り返される「根下り」である。「根下り」つまり「根を下ろす」の意味は、『日本国語大辞典』（北原　2003）によると、「確かな位置を占める。揺るぎない者となる。不動の地位を占める。固定する。また、居すわる。」とある。加えて、『デジタル大辞泉』（村松 監修　2012）では、「草木がしっかり根を生やす。転じて、しっかりと位置を占める。定着する。」と解説されている。植物の生育と繁茂の具体像によって示される「根下り」の観念が、歌の主題である。「やまかしぃにあよう」（石垣島新川村）の例でいえば、各節の主格に取り上げられている、山樫木・イネ・農民・役人の共通点は、それぞれが「相応の場に根をおろして、揺るぎなく定着する」という観念である。歌の詞章でみると、「根下り」の結果として、しっかりと位置を占めることによって、「百(枝)繁り」・「栄える」がある。植物が根を下ろして繁茂する生育の姿と、人がそれぞれの場に集い栄える様を並立させて表現しているのである。ここには、前半2節で植物のそれぞれの生育の適所で繁茂する姿が、後部の節では、転じて、人間もそれぞれの生きる所を得て根を下ろし繁栄する姿が謡われている。歌では、人間社会の構造を映し、「農民」と「役人」という2種の身分のそれぞれの適所を対比させているが、この対比は、実際の共同体の身分の規範が反映している。

「根下り」の「根」は方言で「にー」である。従って、詞章では「にーうり」と発音する。『宮良當壯全集　8　八重山語彙　甲篇』(宮良 1980　p.428)によると、「ニー・ウリン」は「生ゆ、生ず、根下るの義」とある。「山樫木あよう」とその類歌に

見る「にー・うり（根下り）」の「にー」という言葉は、植物の山樫木の「根」という具体的な像を持っている言葉である。植物が根づくという具体像に重ねて、人が家や土地に根づく状態を思い謡っているものである。この歌において、山底の土地に根を張って生長する樹木の具体像や、苗床に根を張って繁茂する稲苗の具体像が、歌の「にー・うり」という語の発想の元にあり、その具体像を、人々が村に根づき繁栄する観念へと転じている。狩俣恵一は『南島歌謡の研究』(狩俣　1999)で、「ニーリ(根入り)」「ニール(根入る)」について述べている。

> ニーリ(根入り)やニール(根入る)の語は、作物が根づくという意味で使われるが、長居する客人などにも使う。植物が根づいたように、客が根づいて動かなくなったという意味で使うのである。それと同じようにニーリは、神がしっかりとその地に根づく事を期待しての呼称だと思われる。（前掲書　p. 207）

上記の説明は、宮古歌謡の「ニーリ」について、狩俣が「神」の根づきと関連させて説明しているものだが、ここでは「根づく」の意味において、八重山歌謡の「やまかしぃにあよう」の「にーうり」とは通じるところがある。「やまかしぃにあよう」にみる「にーうり」は、人が家や土地、そして共同体の慣習に根づき、不動の位置を確立する状態を、植物の根づきという具象をもって表したと考えられる。宮古語の「ニーリ」と、八重山の歌の中の言葉「にうり」は、神、または、人間がしっかりと土地や家に根づく「状態」を表現する歌の言葉として共通の発想が窺える。

（３）歌の成立の背景

「山樫木あよう」の冒頭部には山樫木が「山底に　根下りする」と謡われている。オキナワウラジロガシの自生する生育環境について、『図鑑琉球列島有用樹木誌』では、「奥山の肥沃な河岸」（天野　1989　p. 45）と記されている。歌にある「山底」とは、この図鑑に示されている植物の生育環境を指す言葉である。八重山の植物歌の言葉の多くは、日常の生活の経験に裏打ちされ、具体的な事例を持つ言葉という印象が強い。では、だれもが目にするわけではない西表島の山深くに育つ「山樫木」が、歌に取りあげられるまでに意識されるためには、島の人々がこの樹木と、どのような接点があったのか、興味深い点である。そこで、歌の歴史的な背景をみておきたい。

「慶来慶田城由来記」（石垣市総務部市史編集室　1991）の記事の中には、西表島の

有力者である慶来慶田城家の歴代の当主が残した 15 世紀後半からの島の生活が記されている[14]。その中には、用材樹木を切り出す八重山の人々の山仕事について伝えているものがある。以下がその記事である。ここでの引用は訳文を記す。

> 宮古島の豊見親という者は、八重山がまだ首里の支配下にならない時分に、宮古島の豊見親が八重山をすべて支配し、何かと従わせていた時、年々、きや木(キャーンギ)・おもと竹・いく木（モッコク）・桑木を家の材木として所望した。それらを取り揃えて積んでいって納めていたが、今度はまた、蔵の材木として、よし木（イスノキ）を六、七０本余り、長さ四、五間、太さ五、六尺回りのもの、かし木は一尺四、五寸角の木を所望してきた。やむをえず百姓らを集めて申し付け、仲良山あたりへ行き、山宿りして、御座岳の近辺から右の数を切り、木を山から切り出す人夫として、男女二、三百人余りを呼び寄せ、道筋の半分過ぎまで引き出した時、村から宮古島の豊見親が死んだとの早使いが来た。（以下略）　　（石垣市総務部市史編集室　1991　p.4 ）

引用の記事の場面は、宮古の豊見親の求めに従って、西表島の樹木を建築材等の利用の目的で伐りだしていたことが書かれている。そこから、その山仕事に集められた農民は 2〜300 人という大がかりな仕事の様子であることもわかる。その人々が、どのような気持ちで伐りだす樹木を眺めていたのかなど、容易にわかることではないが、つぎの歌には、造船材の伐りだしに山に入った人々が、山底に育つ木に向けた気持ちを率直に表出しているととれる詞章がある。事例は、新城島の「古見山(くんやま)じらば」の一節である。

「古見山(くんやま)じらば」　新城島　p.270

（前略）

3	山ぬ木ぬ　生(む)いや	山の木の生えようは
	底ぬ木ぬ　ふどぅびや	山底の木の生長は
4	人知らな　生いだ	人が知らずに生えた
	すじゃ知らな　ふどぅびだ	人間が知らずに生長した

[14]「慶来慶田城由来記」の解題（石垣島総務部市史編集室　1991）によると、「慶来慶田城用緒から十代用州にいたる間のさまざまな由来を記録したものである。」とされている。

（以下略）

「古見山（くんやま）じらば」は、造船材を求めて西表島の最高峰である古見山に入山し、木を伐りだし、船材を運びだし、造船の行程をモチーフに謡った全 23 節の叙事的歌謡である。引用はその冒頭部にある詞章で、山深くに立派に生えている樹木に向けられた言葉である。「山底」に生長しているという樹木の立地を述べた後に続く「人が知らずに生えて、人間がわからない間に生長している」という表現には、船材になるほどに大きく育った樹木への感嘆や畏敬の思いを含んでいるように感じられる。「山樫木」という樹木名は、この歌には謡われていないが、造船材を切りだす山仕事を謡う歌であることから、船材に向く樹木の中の 1 つである「山樫木」への思いにも同じことが類推して言えるだろう。

また、王府の統治下の八重山に関する資料である「規模帳」や「参遣状」のなかには、「樫木」の利用についての記事が見られる。例を挙げると、農民に対して「樫木」で家を建築することを禁じ（石垣市総務部市史編集室　1994　p.68）、杣山政策に定めた御用木を勝手に伐りだした者は重科に問われること（前掲書　p.75）や、首里城南殿の地覆に使う「御用樫木」として運搬する旨（石垣市総務部市史編集室 1995b　p.93）等の記録が残されている。樫木が首里城の用材に使われた樹木であることは、先述した『図鑑琉球列島有用樹木』の樹木の解説（天野　1989　p.45）とも一致する。

以上の記事を総合すると、人と「山樫木」は、建築・造船等の用途のための材木を伐りだす大がかりな山仕事を介して、西表島の山中において、古くから繋がりを持っていたことがわかる。「山樫木あよう」とその類歌の第 1 節で、山樫木が「山どぅにどぅ　根下りする」と謡う背景には、山仕事で実地に培った野生の植物への知見等が活かされ謡われてきたと考えられる。

（4）　歌の心意と「場」と表現様式

口承の歌は「場」の意図を反映するという点を含めて、歌の心意についての考察を続けたい。

「山樫木あよう」とその類歌の中から、すでに石垣島新川村と小浜島の事例を取り上げてきたが、それ以外の「山樫木あよう」の類歌の相互についても、簡単な比較をしてみたい。「山樫木あよう」とその類歌は、すべて一つの主題を繰り返す列挙の形

式で謡われていて、各歌の冒頭は山底に生える「山樫木」の詞章で始まることは共通している。けれども、その後に続く各節の主格となる具体物は歌ごとに異なっている。下記は、詞章の引用は略すが、各歌に謡われる主格と、主格が「根下り」して繁栄する（定着の）場所を取り出して表記した一覧である[15]。

「山樫木あよう」の類歌の主格と主格の定着の場所の列挙一覧

＊（　）内は、主格の定着の場所を示す。

事例１　山樫木（山底）→きら米（苗代田）→吾等皆（田畠）→主の前（御座）

事例２　山樫木（山底）→嫁（根母家）→吾達等(御座敷)

事例３　山樫木（山底）→アサングル木[16](山の頂)→フチンの茎(石の上）→つる瓶（座敷）→やらぶばたす[17](御膳)→吾等皆(畳の上)

事例４　山樫木（山底）→アサングル木(山の頂）→スンムトゥ木[18](石の上）→瓶の酒(御膳）→台の酒(高台）→ばがけーら（ざしきばな）→他の皆(四隅の座敷)→遊び・歓え

事例５　山樫根（山底）→あかぼう木[19]（石の上）→吾等皆（座敷）→祈願の慣用句[20]

事例６　山樫木（山底）→首里天加那志のご奉公(御座敷）→吾等皆(仕事口)→長寿の願い

上記に示した「山樫木あよう」類歌６篇は、次の様な表現様式をとっている。

山樫木（A）　→[　(B) 1　＋ (B) 2　＋ (B) 3…]→人 (C)

事例 1〜6 の間で、「根を下ろす」もの（B）には、内容のバリエーションがあり、列挙数の多少も異なってくる。細かく見れば次の様なバリエーションがある。

---

[15] 出典:事例１「やまかしぃにあよう」石垣島新川村　p.158、事例２「山樫木あよう」石垣島川平村 p.157、事例３「やまかしぬあよう」小浜島　p.168、事例４「山樫木あゆ−＜結婚祝の歌＞」竹富島 p.171 、事例５「山樫あゆう」黒島 p.180、事例６「山樫木あよう」石垣島大川村 p.160

[16] 和名は、フカノキ。九州南から台湾、中国、インドシナ、比島（バタン島）に分布。琉球では各島の低地〜山地に自生する、中高木。工作が容易。器具材（箱、椅子、下駄等）にする。(天野　1989　p.246)。 フカノキは、事例４小浜島と事例５ 竹富島にのみ出現する。

[17] つる瓶・やらぶばたすは酒器の名前（宮城　1969　p.35 写真資料）。「やらぶばたす」の「やらぶ」は（和名テリハボク）、テリハボク製の酒器の意。

[18] 「スンムトゥ木」（和名　オオタニワタリ）

[19] 「あかぼう木」（和名　アコウ）

[20] 八重山歌謡では、「此の果報ど、願ひよら　此ぬ願ひど　てじりよ」（「きょうが日あゆう」黒島）等、前節とは異なる主格の言葉で終わる慣用句が見られる。

a. 事例 2 は、山樫木（A）→人（C）の基本の形式である。事例 2 は嫁が根を下ろすのは根母家（にぬぶやー）と謡っている。「適所に根を下ろす」という主題を、シンプルな形式で表している。

b. 事例 6 も、山樫木（A）→人（C）の基本の形式をとっているが、(C) の人の役人と庶民の身分を「首里天加那志のご奉公(お座敷)」・「我等皆(仕事場)」という言葉で対比していることに明らかなように、「ご奉公」「仕事場」等の抽象的事柄の概念を用いて謡っている。

c. 事例 1・3・4・5 は、基本の形に[B]が加わり、(A)→[B]→(C)の形式をとる。[B]には植物・ものを主格にして、様々なバリエーションが展開する。この場合も、植物→ものという列挙の順序で展開する。例えば、事例 1 には、「キラ米　(苗代田)」が加わっている。事例 3･4 では、(山の頂)や(石の上)に育つ植物の列挙の後に、さらにものの列挙が加わる。「つるびん」、「やらぶばたす」お膳の酒瓶、高台の酒等の儀礼・行事用に誂えられた特別な器等が謡われている[21]。これらの酒器は、祝の席を象徴するものでもある。事例 4 の竹富島の「山樫木あゆー」は、タイトルに＜結婚祝の歌＞とあり、「根を下ろす」には、「根をおろして繁栄する」という抽象的な意味の表象だけでなく、人々が「祝の席に集う」という具体的な場の意味も含まれる。事例 5 は、「庶民の祝宴の席上で、最初に歌われた」（テキスト　注 p.622）とされている。何れも祝の席、又は、婚姻の席で歌われてきたという「場」の共通性がある。

さらに、下記の一覧は、列挙して謡われている主格だけを、取り出したものである。

主格一覧

＊＜自然物（植物）＞
山樫木
キラ米・アサングル木・フチンの茎・スンムトゥ木・あかぼうき
＊＜もの、(祝儀用具）＞
つる瓶・やらぶばたす・瓶の酒・台の酒・
＊＜こと＞
（首里天加那志の）ご奉公

[21] 『小浜島民謡集』（小浜島民謡集編集委員会　1975　p.38 ）によると、種子取祭の御嶽での祈願の後に、村の各戸を巡りながら数々のアヨーを歌うが、「普通「稲が種子アヨー」に始まって、「ヤマカシヌアヨー」「ヒャンダン嶽アヨー」「ウムトゥ嶽アヨー」「ククル嶽アヨー」と続く、と伝えられている。「ヤマカシヌアヨー」の主題である「根下り」が、苗代に蒔かれた種籾の活着を予祝する「稲が種子あよー」を、さらに補完する内容であると考えられる。

主格となっているのは、自然物、もの、こと等に分かれる。「山樫木あよう」とその類歌において注目される点のひとつは、人間の在り方を投影するのは、自然の植物に限らないことである。「山樫木あよう」とその類歌に列挙された主格は、植物・身の回りのものの他に、仕事等の抽象的な観念も取り上げられているのである。けれども、島別に歌の列挙内容のひとつひとつを見ると、自由なバリエーションのように見えるが、類歌と考えられる全体を集めてみると「持ち前の場を得て繁栄する（根を下ろす)」という概念によって共通している。

そして、これらの歌が謡い継がれてきた「場」は、島々によって異なっている。小浜島では、種子取祭の時の御嶽の祈りの後、各戸を巡りながらうたわれるという事例[22]と、その他の歌については、テキスト（p.622）によると、婚姻等の祝儀の場や、庶民の祝宴の席で謡われるとされている。祝宴に集まった人々が、祝福や喜びをあらわす祝儀の歌であることが窺える。人々にとって、祝宴の喜びに値する具体的事象が列挙された内容が表現されている。事例に挙げた小浜島の「山かしぬあよう」は、最初に植物の山樫木を配し、次に3種の植物を主格に謡っている。石垣島新川村の事例では、「苗代」に生えている「キラ米（イネ)」が、黒島の事例は、石の上に生える「あかぼう木」が、「山樫木」に続いて挙げられている。主格が植物以外の節では、ハレの日の調度品や、さらには、「ご奉公」という抽象的な事象も列挙されている。歌の詞章だけを追っていると、小浜島や竹富島の歌の例は、「山樫木」に始まる植物から、突然、祝の酒器が主格に転じる展開に違和感が生じるが、これらの歌が婚姻等の祝の席で謡われるとすれば、祝儀用の酒器や膳が謡われ、さらに、誇れる仕事という展開に納得がゆく。それらを見ると、「山樫木あゆう」とその類歌の主題は、「人」が揺るぎない存在として「生きる」場所・「定着する」場所・「根を下ろす」場所という観念が強く働いており、それが、歌に取り上げられた様々な主格が選択された意味

---

[22] 『竹富町史　第3巻　小浜島』（竹富町史編集委員会　2011）「やまかしぃにあよー」の解説（前掲書　pp.521-522）には、歌に列挙されている「山樫木」→「あさんぐるき」→「ふちん」→「ちるびん」→「やらぶばたしぃ」の各列挙事項に例えながら、「苗代の苗がしっかりと田に根を下ろし、丈夫に育つようにとの願いを込めてうたわれる」と、歌の心意が記されている。実際、小浜島の「やまかしぃにあよー」の歌の詞章には、石垣島新川村の「やまかしぃにあよう」の列挙事項のような「きらまい（イネ）」に関する詞章はなく、種子取祭という「場」の反映によって、小浜島の人々の意識では、稲の豊穣を予祝する歌として謡われている、という。
また、小浜島と類似した列挙事項の「ちるびん」や「やらぶばたしぃ」の併記があるのは、竹富島の「山樫木あゆー」である。こちらは、タイトルに「結婚祝いの歌」と明記されている。

である。

さらに、八重山歌謡が、こうした祝儀の「場」で植物の生育の適所、もの、ことの適所などを謡う意味について考えてみたい。

例えば、婚姻の「場」で謡われるとことについて、現代なら婚姻は、個人の人生の内に起きる行事ではある。けれども、近代以前の正式な婚姻の儀礼の「場」は、個々の男女の情愛の問題とは異なり、家と家、そして、あくまでも共同体の中の世帯の新しい一員として確かな位置を得て暮らしていく姿が、この歌の背景にある婚姻なのである[23]。歌の中に取りあげられた植物・もの・こと等は、社会的な慣習に則った暮らしに根付いた喜びごとを象徴する具体的な事象が、次々と示されている。

「山樫木あよう」とその類歌全体に見る列挙された内容は、植物、人、もの、ことを含めて、「持ち前の場所で繁栄する（根を下ろす適所)」という観点によって選ばれたものである。日々の経験の中から、選びとられた事柄は、同じ島の環境と伝統の中で暮らしてきた人々にとっては、ことさらに説明はいらない。それらは、共同体の社会生活の決め事に添って根を下ろし栄えることに直結し、その社会の全員の繁栄と喜びに繋がる出来事を指している。喜びに繋がる事例の具象を幾度も繰りかえし謡う、それ自体が「場」の喜びを共にする歌の心意といえるだろう。

終わりに「山樫木あよう」とその類歌にみる歌の様式についてまとめたい。

一篇の歌は数節で構成されているが、各節は同じ主題を繰り返し謡っている。歌の主題は、「持ち前の場所に根付き、繁栄する」という歌唱者達の観念を表現するものだが、主題の観念が、そのままの抽象的な観念の言葉で表現されるわけではない。主題の観念を、身の回りの植物・もの・こと等具体的な像によって表現する。また、6篇の類歌全体でみると、歌に取りあげられる具体的な事象は、＜植物＞にはじまり、最後に＜人＞と展開する形式を基本とし、歌によっては間に挟むようにして＜植物＞→＜もの＞→＜こと＞→＜人＞と列挙する様式を採る。こうした展開において重要なことは、様々な主格が用いられているが、主題の心意は人間について謡うことに集約されていることである。

各島に伝わる類歌に取り上げられた具体物は、どの歌も島ごとのオリジナル性を織り込みながら、全体の歌の表現の構造から見ると、主題の本質を変えることなく伝承

[23] 王府統治下の婚姻については、後述の「んめーまゆんた」の項で、農民層の婚姻･出産が細かく役人に管理されていたことについて記している。

されている。歌の主題は、一つの抽象的な観念だが、その観念を、その同じ本質の意味・内容を持つ具体的な幾つもの例示によって多面的に表すことを、具象表現は可能にしている。そして、身の回りから適切な素材を選んで具体的に例示する表現方法は、歌唱者達にとって、観念を表現する常套的な表現様式となっていることが窺える。加えて、具象のはじめに、植物(自然)をとりあげることも、常套的な表現様式ということができる。そして、「山樫木あよう」とその類歌の具象物の中でも、常に冒頭に謡われる「山底」に自生する「山樫木」は、「根下り」という主題を表現するために選ばれた象徴的な植物である。

３.「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」

－ハマゴウ・ビロウ・デイゴ・イヌマキ・ソテツ・アマミヒトツバハギ　－

（1）「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」とその類歌

男女の愛情がいつまでも続くことを願う感情は、時代や地域が異なろうとも普遍的なものである。また、豊かな暮らしが永久（とわ）に続くようにという願いも誰しもが持つ共通した思いである。植物歌には、そうした感情や願いを、島々に自生する植物（又は、小動物）を表現の素材に用いて謡っているものがある。

事例は、＜表１＞に示した「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」とその類歌３篇である。それぞれの歌には、「かねーら木（ハマゴウ)」「くば（ビロウ)」「じぃぐ（デイゴ)」「いしゃらむとぅ（蔦)」「うぶきゃんぎ（イヌマキ)」等の植物が謡われている。

＜表１＞

	歌謡名	テキスト語形	地域名	ジャンル	頁
1	野底浜ゆんぐとぅ	かねーら木	石垣島大浜村	ユングトゥ	134
	〃	くば	石垣島大浜村	ユングトゥ	134
2	野底浜ゆんた	かねーら木	石垣島大浜村	ユンタ	374
	〃	くば	石垣島大浜村	ユンタ	374
3	野底ぱまあゆ	じぃぐ	波照間島	アヨー	184
	〃	いしゃらむとぅ	波照間島	アヨー	184
	〃	うぶきゃんぎ	波照間島	アヨー	184

上記３篇の中から、「野底浜ゆんぐどぅ」（石垣島大浜村）を引用して取りあげたい。この歌は 5 節からなる列挙形式の歌だが、5 節の内に「かねーら木」・「くば」・「青葉」の 3 種の植物が用いられている。「青葉」は、植物の葉一般を指す普通名詞である。まず、これらの植物について、簡単に述べておきたい。

「かねーら木」は、和名をハマゴウという。写真の植物が、「かねーらら木」である。強い日差しの浜の景観の中に、淡い青紫色の小さな花が点々と並ぶ涼しげな姿を見つけることができる。『海岸植物の本』（屋比久 2008 p.22）によると、砂浜を這うように生長する高さ 30〜80cm ほどの低木であり、生の葉や乾燥した実が薬用[24]になる、と紹介されている。歌との関連では、この植物が大木にはならないことが重要である。


ハマゴウ

「くば」は、和名はビロウである。ビロウはヤシ科の高木に分類されている。「くば」は神聖な植物とされ、御嶽に多く植えられるなど、文化的にも琉球諸地域の暮らしとの繋がりは強い。生活用具にも利用されており、その葉は、クバ扇やクバ笠等の民芸品として、今でも親しまれている[25]。加えて、歌の中には、「青葉の和物」とあるのだが、この「青葉」は、特定の植物というより、青葉さえ和物にして食べなければならない生活を象徴的に表したものと考えられる。

（2）「野底浜（ぬすくはま）ゆんぐどぅ」の歌の内容

次の引用には、上記の植物が謡われている、「野底浜（ぬすくはま）ゆんぐどぅ」（石垣島大浜村）である。

「野底浜（ぬすくはま）ゆんぐどぅ」　石垣島大浜村　p. 134

1	野底ぬ浜に　生いたる　かねーら木[26]ぬ	野底（のそこ）村の浜に生えた浜（はま）ゴウの木が
	船ぬゆむ胴（どう）　取らりとぅんよーな	船の船体に取られても
	夫婦（みゆとう）ぬき　かなさぬき　しらるぬ	夫婦の別れ　愛（いと）しい者の別れはできない
2	野底ぬ頂（ちいじい）に　生いたるくばぬ	野底村の頂上に生えた葵蒲（くば）の木が
	船ぬ体（どう）なるとんよーい	船体になってもね
	夫婦ぬき　かなさぬき　しらるぬ	夫婦の別れ　愛しい者の別れはできない
	（中略）	

[24] 漢方では蔓荊葉・蔓荊子と表記される。（多和田他　1985　p. 296）

[25] 『八重山生活誌』（宮城 1970 p. 10） には、葵蒲と生活との関わりについて詳しく記され、民具として利用されている写真資料も掲載されている。

[26] 喜舎場によると、「かねーら木」は石垣市ではこの木を「浜カニン」と称しているが、和名では「浜ごー」と称せられている（喜舎場 1970b　p. 466）、と説明している。

5　青葉(あうば)ば　すないし　食(ふあ)いうるとぅん　　青葉を和物にして食べていてもね
よーい　泥水なんが　泥添いてぃ　　泥水に泥を添えて食べていても
食(ふあ)いうるとぅん
夫婦ぬき　かなさぬき　しらるぬ　　夫婦の別れ　愛しい者の別れはできない

*類歌「野底浜ゆんた」石垣島大浜村　p. 374、「野底ぱまあゆ」波照間島 p. 184

詞章の内容は、次のようなものである。第 1 節では、浜辺に生える「かねーら木(ハマゴウ)」が大きく生長し、船材に取られるようなことになっても、夫婦が別れることはない。さらに、第 2 節でも山の頂に生える「くば(ビロウ)」が、船材になっても、夫婦が別れることはない、という内容である。これらの植物については「かねーら木」も「くば」も、元来、船材には適さない植物だが、あえて取り上げられている。同様に、第 5 節では青葉の和物を食べていても、夫婦が別れることはなない、というのがその内容である。引用を省略した第 3 節と第 4 節には、「妹の袴を舟の帆にし」、「兄の褌を舟の手綱にしても」、「無人島に錨をおろしても」と、困窮と苦難の様を謡っており、第 3〜5 節までは詞章の言葉の表面には表れないが、たとえどんな苦難や貧しさにも、夫婦の絆はゆるがないという意味を含んだ詞章である。歌の主題は、夫婦の強い絆への願いが謡われている。先に、類歌として歌謡名だけ記した石垣島大浜村の「野底浜ゆんた」は、上記に引用した「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」とほぼ同じ内容である。

（3）歌の表現様式

次に、表現の構造を中心に考察したい。始めに、石垣島大浜村の「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」の第 1 節を参考に示す。

〈A〉野底ぬ浜に　生いたる　かねーら木ぬ　〈A〉野底(のそこ)村の浜に生えた浜(はま)ゴウの木が
船ぬゆむ胴(どう)　取らりとぅんよーな　　船の船体に取られても
〈B〉夫婦(みゆとう)ぬき　かなさぬき　しらるぬ　〈B〉夫婦の別れ　愛(いと)しい者の別れはできない

上記は、<A>浜に生えるハマゴウが船材になったとしても、<B>夫婦の別れ　愛しい者のわかれはできない、という内容である。「かねーら木(ハマゴウ)」は低木で、船体を作る様な材になることは現実的にはあり得ない。従って、<A>は起こり得ないことが起こる、または、どんなことがあっても、という概念を示すために、よく知られ

ている植物の生態を具体的な像の例示として言い表している。しかも、起こり得ないこと、という逆説的な仮定として取り上げられているため、〈A〉の具象による表現が、衝撃的な例示であればあるほど、歌の主題である〈B〉「夫婦ぬき　かなさぬき　しらるぬ（ 夫婦の別れ　愛しい者のわかれはできない)」とする夫婦の絆の強さを強調することになる。小さな植物のハマゴウが選ばれた理由も頷ける。

整理をすると、歌の主題は、どんなことが起ころうとも、夫婦は別れることができない、という内容である。歌の各節がこの同じ主題を、〈A〉と〈B〉という構成で、繰り返している。〈A〉は、どんなことが起ころうとも、という主題の概念を、具体的な形の在るもので説明する表現の様式を採っている。具象に選ばれるものは、各節ごとに異なっており、身近な数種の植物等の素材が用いられている。〈B〉は、夫婦は別れることができない、という主題の観念の内容そのままの言葉が、各節に反復されている。「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」の全体の構造は、歌の主題を各節毎に[〈A〉具象表現＋〈B〉主題の言葉の反復]で表現し、そうした節を列挙して謡っているものである。各節は〈A〉と〈B〉の異なる主題の表現方法の混在によって成立している。そして、先に挙げた 3 篇の「野底浜ゆんぐどぅ」とその類歌に、この構造は共通する。

ただし、構造は同じだが、詳しくみると、類歌の中の波照間島の「野底(ぬすく)ぱまあゆ」は〈A〉の概念の内容が、少しニュアンスが異なるところがある。

「野底(ぬすく)ぱまあゆ」　波照間島　　p. 184

1	(A) ぬすく浜(ばま)　むいたる	(A)野底(のそこ)村の浜に生えている
	じぃぐば　かちゃば三(みー)ぱ	梯梧を角材三本が
	とぅらりるまでぃん	とれるまでも
	(B) んぞとぅばんとぅ　ぬがらるぬ	(B)あなたとわたしとははなれられない
2	古見(くん)あがいしに　むいたる	古見(こみ)村の赤い石に生えた
	いしやらむとぅぬ　うやばしぃぬ	イシャラムトゥ〈蔦(つた)〉が公用船の
	うどぅとぅらりるまでぃん	竜骨材にとれるまでも
	んぞとぅばんとぅや　ぬがらるぬ	あなたとわたしとははなれられない
3	南(ばい)ざらに　むいたる	南(ばい)サラ〈地名〉に生えている
	うぶきゃんぎぬ　うやばしぃぬ	大槇の木が公用船の
	うどぅとぅらりるまでぃん	竜骨材にとれるまでも

んぞとぅばんとぅや　ぬがらるぬ　　あなたとわたしとははなれられない

（＊下線と記号(A)(B)は筆者が加筆）

「野底(ぬすく)ぱまあゆ」の歌の構造は、先述した「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」や「野底浜ゆんた」と変わりがない。〈A〉は具体的なもの(植物など)の事例が歌われているし、また、〈B〉は、どの節にも、「んぞとぅばんとぅや　ぬがらるぬ（あなたとわたしとは離れられない)」という主題が反復して謡われる。主題の「んぞとぅばんとぅや　ぬがらるぬ（あなたとわたしとは離れられない)」という言葉は、「男女の堅い絆」という意味を表している。各節毎は、[〈A〉具象表現　＋〈B〉主題の言葉の反復]で構成されている全3節の列挙の形式を採る歌である。

「野底(ぬすく)ぱまあゆ」が「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」と異なるのは、主題の主格が「夫婦」ではなく、「んぞとぅばん（あなたとわたし)」である点と、取りあげられている植物が、「かねーら木(ハマゴウ)」、「葵蒲」、「青葉」ではなく、「じぃぐ(デイゴ)」、「いしゃらむとぅ(ツタ)」、「うぶきゃんぎ（イヌマキ)」の3種に変わっている点である。

また、もう1点異なるところは、〈A〉の各節の植物が生長して船材になることを謡う詞章の末尾の「までぃん（まで)」という語がある。「までぃん」という方言は、共通語では「〜まで」だが、起こった出来事の時間的・空間的・数量的限界を示す働きをする副助詞である[27]。従って、この歌に添って訳せば、「デイゴの木から３本の角材がとれるまで」「蔦が公用船の竜骨材に使えるようになるまで」「槇が竜骨材につかえるようになるまで」となり、それぞれの植物が、船材に使えるまでに生長する長い年月という時間的概念を、植物の生長の様を用いて具体的に表現していると解釈できる。ここでも歌が取りあげた植物の実際は、デイゴは、材質は軟らかく粗い目の樹木なため、細工を施す漆器などの材には利用されても、堅牢さを求められる大きな建築資材には元々適さない樹種であり、ツタ等は船の構造上で重要な軸となる竜骨材[28]にはなり得ない。また、イヌマキは、船材より良質な家屋の建築材として利用される樹木である。何れも、船材には向かないことが知られている植物を、あえて取り上げて

[27]「迄」とは、『日本国語大辞典』（北原　2003）では、「体言・活用語の連体形・助詞などを受けて、事態の至り及ぶ時間的・空間的・数量的限界を示す。」とされている。

[28]『日本国語大辞典』（北原　2003）によると、竜骨とは、「船底の中心を船首から船尾へ通した材で、船体構成の基礎となるもの。」とある。

いる。こうした否定的な例示をすることによって、それらの植物が、船材に使えるほど大きく生長する迄とすれば、よほどの長い年月がかかるのだ、ということを逆説として表現している。そのような具体的な例示が、「永久（とわ)」の時間を象徴的に示唆し、男女の仲が続くことへの思いを強く表出したものと言える。ちなみに、本土の言葉では、結納や結婚式の挨拶の際には、「幾久しく、おつきあい願います」や、「末永く、お幸せに」等の慣用句が頻繁に使われる。「幾久しく」や「末永く」という時間的に表現する発想は、「野底(ぬすく)ぱまあゆ」の男女の関係がずっと別れることがないという思いの発想と同じものである。けれども、抽象的な言葉を用いて表現するか、具体的な事象を用いて表現するか、用いる言葉の違いは明らかである。

この様に考察してくると、八重山歌謡の「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」とその類歌には、夫婦、又は、男女の強い絆を表すために、不条理な逆説的な対比によって強調する表現と、「永久に」とういう長い年月をあらわす時間の概念の表現とがみられ、そのそれぞれが植物を用いて具象的に表現している。

（4）八重山の歌と宮古の歌にみる類似表現

「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」とその類歌の表現の構造と、大変良く類似した表現構造の歌が、宮古歌謡にも謡い継がれている。次の例は多良間島に伝わる歌の詞章の一節である。

「くまらぱぎ豊見親」　　多良間島　（宮古篇　p. 383）

（前略）

3 石にむい　しゅたつぬ	石に生えている蘇鉄が
かたにしゃす　かな木ぬ	石山に根をさしたカナ木が
まーれん柱(ばら)　とらりけー	馬艦船(まーらん)の帆柱程に成長するまで
ういかん夫婦　て、んさい	動じない夫婦といわれたいものだ
たいかん夫婦　て、んさい	変わらない夫婦といわれたいものだ

（以下略）　　＊類歌　「小真良波按司豊見親のアヤゴ」　（宮古篇　p. 330）

上記の宮古歌謡では、長く変わらない夫婦でいたいという主題に見る強い絆と時間的概念を、「しゅたつ（ソテツ)」や「かな木（アマミヒトツバハギ)」が船の帆柱になるまで、という植物の生長によって示している。もちろん、謡われている植物の生

長は、現実の植物には起こりえないことを前提として謡っている。


アマミヒトツバハギ

沖縄では、野生のソテツを見ることも珍しくない。海岸線の崖などに自生しているところもある。一方、アマミヒトツバハギは、先述した「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」に謡われていたハマゴウと同じように、海岸の珊瑚の砂地や石灰岩の岩地に生える低木である。写真の「かな木（アマミヒトツバハギ)」の生育していた恩納村の海岸では、数m離れた場所に自生するハマゴウも見ることができた。この 2 種の植物は、似た立地環境に育つ植物だということがわかる。そして、これらの植物は、船の帆柱に利用できるほどに生長することはなく、また、帆柱の役目を果たすような幹の組織もない。それでも、これらの植物が歌に取りあげられ、決して起こり得ないことが起こるとする程の永久に続く男女の強い絆を、逆説的に表現している。

引用した宮古の歌に見る植物の選択と、造船の資材を結びつける表現の発想と展開は、先に考察してきた八重山歌謡の「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」とほぼ同じである。

さらに、この宮古の「くまらぱぎ豊見親」の歌には、第 4 節以降の続きがある。植物の観点からは少し離れるが、類似の主題の概念の具象として、小動物を素材に用いて謡っていることは興味深い。それが次の引用部である。

「くまらぱぎ豊見親」　多良間島　　（宮古篇　p. 383）

（前略）

4	石ぬみーぬ　みみずぬ	石の穴のミミズが
	くびぬみーぬ　やーずみぬ	壁の穴のやもりが
	にすぬ海(いん)　うりてよ	北の海に下りて
	しゅわらぴだ　下りてよ	潮洗う浜〈渚〉に下りて
	なんかぷか　出(いで)てよ	波の外〈沖〉に出て
	さいかぷか　出てよ	海の外〈大海〉に出て
	大(うぶ)しゃばん　なりきしよ	大きな鮫に成長して
	一〇尋(びる)しゃば　なりきしよ	十尋の鮫になって
	くがきずーゆ　ぬんけん	ふとい釣針をのむまで

ふしゃいずーゆ　ぬーんけん	大魚用の釣針をのむまで
ういかん夫婦　て、んさい	動じない夫婦といわれたいものだ
たいかん夫婦　て、んさい	変わらない夫婦といわれたいものだ

ここに謡われているのは、陸にいる「みみず（ミミズ）／やーずみ（ヤモリ）」が、海の「大(うぶ)しゃばん（大きな鮫）／一〇尋(ぴる)しゃば（十尋の鮫）」になって、釣り針にかかるまで、と展開する。小動物の物語が、夫婦の変わらない関係と永久の時間という概念の具象となっている。この歌の「くがきずーゆ　ぬんけん（太い釣り針をのむまで）」「ふしゃいずーゆ　ぬーんけん（大魚用の釣針をのむまで）」という詞章に用いられている「〜けん」という方言は、共通語で言えば「〜まで」という副助詞の働きをする。先出の「野底(ぬすく)ぱまあゆ」で述べた「〜までぃん」に同じである。従って、第4節の引用部は、ミミズやヤモリが大海の鮫になって釣り針に掛かるまでという、現実にはありえない物語だが、夫婦の関係が変わりなく、永久に続くという主題の概念のイメージを言い表している。

この歌において、表現に用いる素材が植物から小動物に変わっていても、表現の発想は同じである。歌唱者達は、陸と海という対照的な環境を捉えて、よく知っている身の回りにいる生きものを巧みに選択し、陸の生き物が海の生き物に変わるという連続性で、歌の主題が持っている「永久」の概念を表している。海･山の小動物を取りあげる表現と、灌木が船材になるという植物による表現とは、想像による世界を楽しむことにおいても同じである。「くまらぱぎ豊見親」の表現は、植物でも小動物でも、素材の用い方の発想に差異は意識されていない。

八重山歌謡にも、小動物を素材とした表現で同様な事例がある。「節じらば＜おーぱんや＞」は、「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」と同様に、主題は夫婦はどんなことがあっても別れないという願いだが、「どんなことがあっても」という概念を、生き物の変身で表す事例である。以下にその一部を引用する。

「節じらば＜おーぱんや＞」　石垣島川平村　p. 189

（前略）

5	〈A〉たーぬあざぬ　あうだぬ	〈A〉田圃の畦の蛙が
6	ふーどぅんで　ふーさばなるとん	大海に出て大鱶になっても

7　〈B〉うらばんぬ　みゆと　　〈B〉あなたと私との夫婦

8　　みゆとぬけ　ならぬ　　夫婦の別れはできない

9　〈A〉たーぬくむるぬ　さいぬ　　〈A〉田圃の小堀のエビが

10　　まいぬとぅんで　ふういぴぃなるとん　　前の海に出て大エビになっても

〈B〉（中略　11・12節　は7・8節に同じ）

13　〈A〉西（にしぃ）ばたぬ　ゆうざんぬ　　西端のトウゴロウイワシが

14　　西ぬとぅぬ　大（ふう）しぃちなるとん　　西の海の大ダツ魚になっても

〈B〉（中略　15・16節は　7・8節に同じ）

17　〈A〉まーちぃ底（すく）ぬ　しぃだみぬ　　眞地（まーじ）〈地名〉底の蝸牛（かたつむり）が

18　　西ぬぴぃぬ　玉んななるとん　　西の干瀬の玉になになっても

（以下略　19・20節は　7・8節に同じ ）

＊下線と記号（A）(B)は筆者が加筆

上記の歌も、先に述べたように[〈A〉+〈B〉]という一節が繰り返される列挙の形式の構造の歌である。主題は、歌の中に繰り返されている並線を引いた反復部〈B〉の「うらばんぬ　みゆと　みゆとぬけ　ならぬ（あなたと私との夫婦　夫婦の別れはできない)」に言葉で表現されている。そして、(A）は「田圃の蛙が海の大鱶になっても」「田圃の小エビが海の大エビになっても」「トウゴロウイワシが大ダツ魚になっても」「カタツムリが干瀬の玉になになっても」といった具体的な生き物の変身の例示は、「どんなことがあっても」という抽象的な概念を海と陸の小動物・魚類の様を具象として表現している。謡われているような生き物同士の関連と変身は、実はあり得ないことだが、そのようなとんでもない事が起きようとも、夫婦の絆は揺るがないことを願っているという意味なのである。

比較してみると、「節じらば＜おーぱんや＞」は「野底浜（ぬすくはま）ゆんぐどぅ」と主題が同じで、普通では起こりえない状況という概念を、身の回りの具体的なものを用いて表す構造も全く同じである。「野底浜（ぬすくはま）ゆんぐどぅ」が植物で表現したことを、「節じらば＜おーぱんや＞」では、小動物に置き換えている点が異るだけである。表現に用いる具体物に共通する注目点は、植物の生長(これもある意味で植物の「変身」である)と、対をつくる小動物の「変身」という関係づけの発想である。「対」をなす小動物の関係は、現代の自然科学的には異なる分類の生き物同士である。けれども、例えば、陸

と海の境界を越えて小動物から大魚への「変身」という発想による関係づけは、歌唱者達の普段の観察と直感によって、形態の似たもの同士を組み合わせて分類する思考に裏打ちされている。

もう一つの例として、「野底ぱまあゆ」で検証した「永久に」という抽象的な時間の概念を、小動物の変身という具体物で表す歌を挙げることができる。西表島祖納村の「井戸(かあー)ぬぱたぬ小蛙(あぶだーまゆんぐとぅ)誦言」も、表現の構造は先に取り上げてきた歌と同じだが、主題は「吾等皆の命は島と一緒にあらせて下さい」という言葉に込められている祈りである。

「井戸(かあー)ぬぱたぬ小蛙(あぶだーまゆんぐとぅ)誦言」　西表島祖納村　　p. 136

1	㈀井戸ぬぱたぬ　あぶだーま	㈀井戸の端の小蛙が
	ぱにばむい　とぅぶけー	羽根が生えて飛ぶまで
	㈁ばがけらぬ生命(いぬちい)	㈁吾等皆の命は
	島とぅとぅみ　あらしょうり	島と一緒であらせてください
2	家(やー)ぬまあるぬ　ぶなちぃめーま	家の周囲のとかげが
	すーなうり　魚(いず)なるけ	海に降りて魚になるまで
	（中略　(B)を反復）	
3	やどぅぬさんぬ　ふだちぃめま	雨戸の桟のやもりが
	うぶどぅうれー　さばなるけー	大渡(海)に降りて魚になるまで
	（中略　(B)を反復）	
4	森々ぬ　山亀(やまがみ)ま	森々の山亀が
	うぶどぅ下(う)り　海亀(うみがめ)なるけ	大渡(海)に降りて　海亀になるまで
	（中略　(B)を反復）	
5	ぷし木ぬ　下(しいた)らぬ　きぞがま	ヒルギの下方の二枚貝が
	ぴーに下(う)り　ぎらなるけ	干瀬に降りてシャコ貝になるまで
	（中略　(B)を反復）	

＊下線と記号（A）（B)は筆者が加筆

上記の歌は、西表島祖納村に伝承されてきた歌である。この歌は5節からなる列挙形式で、各節は、(A）は「いつまでも」という時間の概念を、西表島の陸と海の小動物による具象を例示し、(B)では主題を「ばがけらぬ命　島とぅとぅみ　あらしょう


西表島のセマルハコガメ

り（吾等皆の命は　島と一緒であらせてください）」という言葉で反復する。そして、(A) にあたる詞章は、「子蛙に羽が生えて飛ぶまで」「とかげが海におりて魚になるまで」等々、山の生き物と海の生き物から選んだ一組の小動物や魚の変身が列挙されている。

これらの詞章は、「いつまでも」島と共にありたいという概念が、西表島の幾種類かの小動物や魚を素材に用いて具象的に謡われている。その表現の様式は、「節じらば＜おーぱんや＞」に同じである。ただ、「井戸(かぁニ)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとぅ)」の生き物たちの変身が表現するのは、「起こりえないこと」ではなく、むしろ、起こり得ないことが起こる「壮大な時間」の概念を表現している。陸と海の生き物を「変身」という関係性で一対に繋ぎ、その「変身」にかかる時間を想定することで「悠久」を表現する。各節の「とぅぶけー」「魚になるけ」「さばなるけー」「海亀になるけ」「ぎらなるけ」の語尾についている「け」または「けー」は、「までに」と訳されているように、「時間的・空間的・数量的限界を示す」副助詞である。この副助詞の働きからみて、この歌の（A）の表現の発想の元にあるのは、時間の把握の方法であると考えられる。喜舎場永珣は、この歌を評して、「比喩の鴻大さには驚く程である」（喜舎場　1970b p. 481）と述べた。こうした評が生まれるのは、この歌が、海と陸を連続的に捉える思考や、「ばがけらぬ生命　島とぅとぅみ　あらしょうり」という詞章にみる、限りある命の人間と「永久」に在り続ける島との対比の関係を表現に取り込んでいること等に起因しているものと考えられる。「比喩の鴻大さ」だけに、人間が普遍的に抱く長寿の願いが、よりいっそう悲願に見える。

（５）歌の心意と「場」と表現様式

「井戸(かぁニ)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとぅ)」について、どのような「場」で謡われてきたか、考察してみたい。テキストによると、「井戸(かぁニ)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとぅ)」は、「種子取祭の時に、稲の種蒔きをした三日目に、集合した農業民の豊穣祈願後の慰労の宴席で謡われる。」（テキスト p. 621 ）と述べられている。また、喜舎場の解説にも、「慰労会には、大抵座興的なユーモアたっぷりなものを選んで謡い、大衆を哄笑させて大いに酒を飲ませる。」（喜舎場 1970b p. 481）とある。これらを参考にすると、この歌の「場」は、共同体の農耕祭祀儀礼の種子取祭の中で、祭り空間の「周縁部」（波照間　1999

p. 538)に位置することを意味している。この歌と「場」との関係で注目するのは、「慰労の宴席で謡われる」「座興的なユーモア」を求められているということである。

では、この歌の何が、「ユーモア」であり、「大衆を哄笑させ」「酒を飲ませる」歌となるのだろうか。各節末尾の反復句の「ばがけらぬ生命　島とぅとぅみ　あらしょうり」は、喜舎場の評の言葉を借りれば、「この古謡の誦言は長寿を神に祈願する」(喜舎場 1970 下 p. 481)意図を含んで謡うものである。従って、「井戸(かあニ)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとぅ)」の歌詞にみるユーモアは、「子蛙に羽が生えて飛ぶまで」「とかげや、やもりが海におりて魚になるまで」「山亀が海亀になるまで」「二枚貝がシャコ貝になるまで」等の詞章にこそ、この歌の「場」に相応しいおかしみが工夫されていると考えられる。歌唱者達なりの体験からくる直感を基に、小動物の形やイメージの類似等を駆使して、陸と海の生き物を結びつけ、歌の世界が創作した生き物の「変身」は、慰労の場に集まった歌唱者達には「座興のユーモア」と感じられていたということだろう。この歌が謡う小動物たちの「変身」は、現代科学の「進化」の知識から見れば荒唐無稽でも、日々の暮らしの周辺で出会うありふれた生き物達について、そうであったら面白いと納得を覚える想像的な発想が働いている。歌の世界でこそ表現できる、島の人々が自然や生物に向けた視線と想像の巧みと、その巧みさを共有する島の文化を象徴している歌である。「井戸(かあニ)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとぅ)」の他に、この歌と同じ主題の下に、小動物による表現が見られる歌が、竹富島の「命果報(ぬちがふ)ゆんた」(テキスト p. 432) である。タイトルに率直に表れているが、歌の主題である長寿の願いを、「我等皆(ばやけーら)ぬ命(いぬち)　島(しま)とぅ共(とうむ)にあると願(にが)い　国(ふん)とぅ共(とうむ)にある願(にが)い(我等皆の命は島と共だという願い　国と共だという願い)」という類似の表現を用いて謡っている。また、歌に用いられている素材となる具体的な小動物は、先に事例に挙げた「節じらば<おーぱんや>」(石垣島川平村) に同じである。

以上の考察を通して、この項で取りあげた歌の様式、歌の場と関係する心意、歌に用いられた植物と表現の関係等について次の様にまとめられる。

「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」とその類歌の基本的な形式は、各節が男女の絆が永久に続くことの願いを主題に、永久にという抽象的な概念を様々な具象を用いて表している。その具象に、島の植物が用いられているが、幾つかの例示に共通しているのは、浜辺の低木やビロウ等のいずれも船材に向かない植物を選んで、それらの材が生長したら、船を作るという想定を謡う点である。あり得ない想像を述べる事で、逆説的に永久と

いう時間や絶対にないという抽象的な概念を表現している。具象には幾つかのパターンがあるが、具象と主題が同じ内容と構造にある数節を列挙・反復する表現様式が基本の歌である。

そして、具象となる植物が異なっているだけで、同様な表現の構造を持った歌は、宮古歌謡にもみられた。さらに、八重山、宮古の両地域で、具象となる歌の表現の素材は、植物だけではなく、小動物・魚類等の生物も構造的に同様の役割を果たしている。

それらの類似した表現様式で謡われている歌の心意は、歌の場と絡めて考えられる。「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」とその類歌は、共同体の人間模様である男女の絆を主題とするもので、歌の心意には、男女の絆の強さを謡う教訓的な意図だけではないものも含まれると考えられる。小さな灌木が、船材を取れるほどの大樹になるまで、という詞章の具象となる植物の選択には、あるはずがない現実の植物の姿を承知していてこそ伝わるある種の諧謔が隠れていると見ることができる。夫婦の絆や男女の仲が、それほど永遠のものではない、という一般的な暗黙の了解も含んで、「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」の「夫婦の絆」や「男女の仲」の関係の強さを、船材にはなり得ない、浜辺の小さな「かねーら木（ハマゴウ)」や「かな木（アマミヒトツバハギ)」等の植物を選んで謡うことで、おどけたおかしみも含んだ歌の心意が伝わる。表面的な教訓の意味だけでなく、そうしたおかしみを共感できるのは、歌唱者達が、海浜に生育する小さな植物の実像を通して、歌に謡われた事象とのギャップを容易く理解できてこそ可能と考えられる。また、小動物を用いた歌の事例に取り上げた「井戸(かあー)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとぅ)」は、種子取祭後の慰労の宴席で謡われる歌である。そうした祭祀空間の「周縁部」にある歌には、祭りの参加者達への慰労や座興としてのおもしろさが歌に求められる。「井戸(かあー)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとぅ)」で、海と陸を視野に入れ、そこに活きる生き物を取り挙げて展開する想像的な表現には、歌唱者達の自然観と同時に、歌の表現の工夫の楽しみを共有する歌唱者達が窺える。「井戸(かあー)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとぅ)」の評として、喜舎場が、「比喩の鴻大さには驚く程である」（喜舎場　1970　p. 481)と述べた「鴻大さ」については、「比喩」という修辞的な技法としての一般的な説明に留まることなく、こうした表現を生み出す歌唱者達の発想や意識について注目したい。この歌の表現にみる想像や発想の感覚は、歌唱者達の海・山の自然との向き合い方と暮らしの思想といえるものと考えられる。そして、「井戸(かあー)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとぅ)」が慰労の席で謡われる事

実からは、庶民である村人達の歌の世界が、そのような表現の想像や発想、思想を共有し、さらにそれを楽しむ文化の伝統を継承する場であるということが窺える。素材こそ植物や小動物の違いがあっても、「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」や「井戸(かあー)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとぅ)」等々の類似した表現の構造を持つ歌の世界を通してみると、島の植物や小動物等、具体的な眼に見える素材を駆使しする方法が、村人達が表現の発想や想像の感覚を共有し、楽しむ文化の伝統に果たす役割は大きい。

もう一つ加えるならば、歌の伝承についてである。この項では、8 篇の関連する歌を取りあげたが、これらの歌は、歌の主題と構造を変えることなく、宮古･八重山の両地域に亘って、よく類似した歌が伝承されている。個別にみれば、各々の歌は植物や小動物の各素材の用い方や組み合わせは、島々によってバリエーションをみせている。こうした構造を同じくしながら、島固有のバリエーションを見せる歌の在り方は、前項の「山樫木あゆう」においてもみることができる。それぞれの村の歌唱者達が、歌の本質を変えることなく、しかも、部分的な素材の独自な置き換えによって島の個性を主張しながら、「村の歌」とする伝承のあり方は、興味深い。

4.「くくるだきあゆ」　－　ニラ・チョマ　－

（1）「くくるだきあゆ」とその類歌

海に囲まれた八重山では、島の人々と航海とは生活上で密接な関係にある。『朝鮮王朝実録』に残る 15 世紀半ばの朝鮮漂流民の報告の中にも、漂流民が八重山の人々の連携で、沖縄島まで船で送られる経緯が述べられている。また「慶来慶田城由来記」には、八重山が王府の支配下に入る以前から、海を越えて宮古諸島との関わりが窺える。さらに、王府時代になれば、貢納物を運ぶ航海が毎年の公事として行われたことが『八重山島規模帳』や『八重山島諸村公事帳』等の記述に確かめられる。そうした事情を背景にして、航海安全の祈りの歌がある。

ここに取り上げるのは、航海の安全を祈る歌である。その歌の中にはニラが登場し、航海にかかせない風という自然現象の把握と関連する。

ニラは、食材として利用されている周知の植物である。テキストの中にニラが登場する歌は７篇あるが、ここで取り上げる歌は、その内の３篇である。＜表１＞の歌に謡われているニラは、航海の祈りとむすびついて謡われている。航海の祈りとニラがどのような発想で結びつき、何を表現しているのか、見てゆきたい。

＜表１＞

	歌謡名	テキスト語形	地域名	ジャンル	頁
1	くくる嶽あよう	まびら	小浜島	アヨー	169
2	くくるだきあゆ	びら	波照間島	アヨー	182
3	とぐるだぎでらば	びら	与那国	ジラバ	284

（2）「くくるだきあゆ」の歌の内容

次の事例は風を謡った歌だが、詞章にニラが用いられている。

「くくるだきあゆ」　波照間島　　p. 182

1　くくるだき　にさく山ぬ	ククル岳　ニサク山[29]の
にーぬ風（かじ）	根の風
2　さんぬふあぬ　ぴちぃぬふあぬ	申（さる）の方角の　未（ひつじ）の方角の[30]
むとぅぬ風	元（もと）の風に
3　わが親（うや）ぬ　いびやる	わたしの親が　植えてある
まぶんだき	真苧麻のよう
4　なしゃるあぶぬ　やとぅいある	生みの親が移植してある
びらだき	韮（にら）のように
5　むとぅんずさある　にきひずさる	元が強い　根が強い
真南風（まはいかじ）	真南風

＊　類歌　「くくる嶽あよう」（小浜島）　p. 169

歌の内容は、南風を謡ったものである。この歌の各節の詞章は、第 1〜2 節には風が吹いて来る方角を謡い、第 3〜4 節ではその風の状態を謡っている。そして、第 5 節の「真南風」という名詞止めでおわる。他にも歌の中で「風」を表す語は、第 1 節と第 2 節の「にーぬ風(根の風)」／「むとぅぬ風(元の風)」という対語がある。どの語にも「むとぅ」「にー」「真」の接頭語が附されていることからも、この歌が風に特別な意識を払っていることが窺える。「真南風」の「真」は美称辞で、この歌の風に

[29] 喜舎場によると、「くくるだき」は「古見連峰の古称」、そして「にさく山」はその対句と解説している（喜舎場 1970ｂ p. 562）.
[30]申の方角は「西から南へ 30° 寄った方角。西南西。」　未の方角は「南から西へ 30° 寄った方角。南南西。」（北原　2003）。

対する思いを象徴する言葉である。第 3〜4 節の風の状態の説明には、ニラとチョマの 2 種の植物が用いられている。これらの植物は、「むとぅんずさある　にきひずさる（元が強い　根が強い)」という、眼に見えない「風」の状態を表す観念的な表現を、具体物(植物)による例示するために取り上げられたものである。ただ、この歌だけの詞章からは、なぜ風を謡っているのかわかりにくい。

そこで、同じくニラを詞章に含み、風を謡う与那国島の「とぐるだぎでらば」をみると、なぜ風を謡っているのか、その理由が歌の詞章に明らかにされている。次の事例は、「とぐるだぎでらば」の全 17 節の歌のうちの前半部である。

「とぐるだぎでらば」　与那国島　　p284

1	とぐるだき	トグル嶽
	いしやらだま	石原山の
	まういがら	真上から
2	さんぬはぬ	申(さる)の方角の
	ひつぬはぬ	未(ひつじ)の方角の
	うりかでよ	下り風よ
3	にだいすな	根絶えするな
	むとだいすな	本絶えするな
	やるかで	和風
4	はたぎやぬ	畠小屋の
	つくりやぬ	つくり〈農作〉屋の
	あぶぬ	おばあさんが
5	うびてある	植えてある
	さしてある	差してある
	びらだき	韮(にら)のように
6	かでがにや	風の根は
	ういがにや	上〈天気・風〉の根は
	ぬりくむどむと	乗り雲がもと
7	くぬかでに	この風に
	くぬんに	この船

	いださば	出せば
8	にだいすな	根絶えするな
	むとだいすな	本絶えするな
	やるかで	和風
9	くぬかでに	この風に
	いださば	出せばと
	とうぬういにむたさば	海の上にもたせば
10	にがいやひり	願ってくれ
	てでりやひり	手摺って〈祈って〉くれ
	ぶはまきやん	おばさん達
11	うぶんとや	大渡(海)は
	さばんみで	茶碗の水（のように）
	んきやして	澄んで
	（以下略）	

歌全体の内容は、与那国から石垣島への航海を謡っているものである。引用した前半部の内容の大凡は、海に出ようとする者達が、南西から吹き下ろす順風を願って風に語りかけ、女性達には、航海の無事の祈りを求めている様を謡っている。そして、引用を省略した後半部の第 12〜17 節の内容は、与那国島を出て、穏やかな海を西表島を見ながら夜通し航海して、石垣島に到着するまでの船旅の様が謡われている。

前半の内容を、少し詳しく追うと、与那国島の「とぐるだぎでらば」には、波照間島の「くくるだきあゆ」には謡われていなかった風を待望する理由が詞章に謡われている。それは、第 7 節の「くぬかでに　くぬんに　いださば（この風に　この船　出せば)」が、風を謡う理由を明確にしている。歌の主格は、これから航海に出る船の乗り手たちに設定されている。雲の根からたえず吹き続く風に送られ、「あぶ」や「ぶはまきゃん」の女性達の祈りに守られ、無事に目的地の石垣島の港に着く迄を謡っている。第 10 節の「にがいやひり　てでりやひり　ぶはまきやん」と祈りを乞われている女性達は、船乗り達を守護する「をなり神」とも考えられる。歌の前半では、順風が吹くように風に向かって「にだいすな　むとだいすな（根絶えするな　本絶えするな)」と、禁止を意味する終助詞「〜な」が使われ、命令調の言葉を投げかける

一方で、親族の「をなり」[31]の霊力による守護も謡っている。そして後半部は、その順風を受けた良好な航海の様を時間的な順を追って展開する。引用省略部の叙事的表現の詞章も含めて、この歌の目的は、航海安全の予祝的な歌とわかる。良好な航海を謡うことが、無事な旅を呼び寄せる言霊信仰の呪的世界を展開する儀礼歌の様式である。歌の詞章には、方位を示す言葉（第 2 節）等の外来の文化の受容も混在してみえるが、歌全体としては、古くからの島の信仰の習俗を伝えている。風に直接訴える言葉にはアニミズム的発想が見られ、さらに加えて「をなり」に守護を求めるシャーマニズム的発想も混在する。

表現の問題として、歌の中で「かで（風)」自体がどのように言い表されているかに注目したい。ここに、風と植物の関係が表れる。第 3 節と第 8 節の「にだいすなむとだいすな（根絶えするな　本絶えするな)」とは、意訳すれば「風よ吹き続けよ」という意味である。吹き続ける風のことを、「根絶えしない風」「元絶えしない風」と認識し表現するところに、この歌の世界の「かで（風)」の発想がみられる。そこから次に、風が吹き出すところを「かでがに（風の根)」とする発想に繋がっていく。上記に引用した 2 篇の歌では、この「かでがに（風の根)」という抽象的観念を、「びらだき（韮のように)」と謡っている。

ニラについては、『八重山生活誌』によるとどの家の家庭菜園でも栽培していた植物であったようである（宮城 1970 pp. 14-17)。その栽培の経験を通して、ニラの根からは、ニラの葉が何度でも伸びてくることは周知されていたと思われる。歌唱者達は、ニラの栽培で経験している途絶える事なく葉を繁茂させる力がニラの根にあることを直感し、風を間断なく吹き出す力の源泉である「風の根」を表す素材に相応しい植物として、ニラを選んだと考えられる。ニラの根の力への直感が、風を吹き出す力の源泉となる「風の根」という発想と結びついている。そして、ニラの葉や風を絶え間なく発生させ続ける目には見えない超自然的な力を言葉に表すことで、航海に及ぼす力となることを期待した。そうした航海の安全への期待が歌の心意にあることは、後半部に叙事的に航海を謡っている「とぐるだぎでらば」の歌の全体から押し測ることができる。

---

[31] 『沖縄古語大辞典』（沖縄古語大辞典編集委員会 1995 p.750）によると、「をなり」とは、「琉球諸島では、一般に兄弟に対する姉妹の霊的な優位、つまり「ゑけり」に対して「をなり」はその霊力でもって庇護を与えるという信仰がある。（中略）「をなり神」（姉妹の霊)は、旅に出る兄弟を守る働きをする(以下略)」とある。

「くくるだきあゆ」が謡う「風の根」のモチーフと、「とぐるだぎでらば」の冒頭第1〜6節の「風の根」のモチーフが通底しているとすれば、「くくるだきあゆ」の風を美称辞で表現する意図には、「とぐるだぎでらば」と同様の超自然的な力についての発想があると考えられる。

「とぐるだぎでらば」は、「風の根」と「韮の根」の関係からさらに発展して、風の根の所在を謡っている。第 6 節で、風の根は「ぬりくむぬむど（乗り雲[32]がもと）」にある、と歌は説明している。風の方角、風の状態に加えて、風の出処を謡っているのである。風の出処が雲にあると謡った歌は「とぐるだぎでらば」だけでなく、竹富島の「風が根あゆー」にもみられる。この歌には植物は関係しないが、4 節のみで構成された短い歌なので、参考までに記しておきたい。

「風(かじ)が根(にー)あゆー」　竹富島　　p. 174

1	風(かじ)が根(にー)や　何(なゆ)どぅ根(にぎ)やる	風のもとは何がもとである
	雲(ふむ)どぅにぎーやる	雲がもとである
2	上(うい)が根(にー)や　何(なゆ)どぅ根(にぎ)やる	上のもとは何がもとである
	ぬりどぅにぎーやる	乗り雲がもとである
3	旅(たび)かいしゃ　宮良(めーら)ぬ主(しゅう)ぬどぅよう	旅の美しいのは宮良(みやら)村の主(しゅう)が
	かいしゃんてんどぅ	美しく〈りっぱで〉あるそうだ
4	嘉利吉(かりゆし)かいさー　川平(かびら)ぬ主(しゅう)ぬどぅよう	嘉利吉〈船〉の美しいのは川平村の主が
	かいさーてんどぅ	美しく〈りっぱで〉あるそうだ

＊類歌「風が根あゆう」黒島 p. 180

前半 2 節では、風はどこから吹いてくるか、空の雲から吹いてくる、と問答の形式で歌っている。後半 2 節は、旅と航海の内容に転じて、役人たちと船を誉め讃える対句が列挙されている。この歌の内容は、風と航海のモチーフで構成されている。そして、このモチーフは、15 世紀には既に、海の往来が島々の生活と深く関わっていた八重山の暮らしの背景を彷彿とさせる。そして、かつての帆船と航海技術では、つつがなく海上の旅を進むためには、どれほど風を読むことに注意が払われたかというこ

[32]「乗り雲」につて、宮良によると「ヌリィ・フム」は、「積雲、夏雲、乗り雲の義。山などに乗れるが如き故に云う」（宮良 1980 p. 442 ）としている。

とも想像される。

上記の竹富島の歌も参考に加えて総合してみると、歌唱者達なりの自然現象の把握の方法が窺える。島々を吹きわたる風が、雲にある「風の根」に由来し、そこから絶え間なく風は送られてくる。目を移せば、しっかり根付いたニラやチョマに、葉を絶やさない同じ力の存在がある、と歌唱者達には映っているといえる。そこには、風も身近に生える植物も、同じ自然の摂理の中に把握する発想が働いている。雲に風の吹き出す根があると見るのは、現代の知識からすると科学的ではないと映る。けれども、歌に表出した雲と風とニラの関係は、雲を眺め、風を感じ、畑のニラの生育に不思議な力を感じた人々の総合的な直感から組み立てた繋がりといえるものであり、歌唱者達の発想した自然の摂理の解釈が示されている。そして、取り上げた歌は、波照間島、与那国島、黒島、竹富島の各島々が伝承してきた歌である。少なくとも、これらの島の人々が、この歌が示す雲と風とニラを繋ぐ自然把握の発想を、共有してきたことを歌の伝承の事実は示唆していると考えられる。

さらに、こうした風の把握は、同時に時候の把握でもある。「さんぬはぬ（申の方角の）／ひつぬはぬ（未の方角の）」からの風とは、西南西から南南西の風で、いわゆる南からの季節風のことである。次の歌は黒島の「旅ばいあゆう」の第 3〜5 節の引用である。

「旅（たび）ばいあゆう」　　黒島　　p. 177

（前略）

3	上（ぬぶ）るて　ヒヤヨウホ　シタリヨウホ	(沖縄に)のぼるとヒヤヨウホシタリヨウホ
	真南風（まばいかじ）に　うさいらり　ヨウホ	真南風におし遣られヨウホ
4	浮（うき）るて　ヒヤヨウホ　シタリヨウホ	(船を)浮けるとヒヤヨウホシタリヨウホ
	真後風（ましるかじ）にど　うさいらり　ヨウホ	真後ろ風におし遣られヨウホ
5	沖縄旅（うきなたび）や　ヒヤヨウホ　シタリヨウホ	沖縄旅はヒヤヨウホシタリヨウホ
	一夜（ぴすゆ）くみど　夜（ゆ）くみど　ヨウホ	一夜を経て夜を経てヨウホ

（以下略）

この歌も、南風に送られて進む沖縄島への船旅を謡ったものである。全 7 節の短い歌だが、最後の節は「此（く）の願（ぬ）い（にがい）ど　てじりようら(此の願いを手摺り＜祈願＞しまし

ょう)」という祈りの慣用句で結ばれていることから、旅の成就を祈願する歌である。歌には「真南風（まぱいかじ)」／真後風（ましるかじ)」という対語が使われるが、ここでも「真」という接頭語には、沖縄旅はこの風に乗って成就する、という強い呪性がこもった願意が表現されている。

また、「真南風」という言葉は、ただ観照的に季節風を指す慣用句でなく、航海に出るという行為の指標となる言葉である。たびたび資料に取り上げられるが、『朝鮮王朝実録』に残された朝鮮漂流民の八重山に関連した古い文字記録にも、与那国島から沖縄島まで島から島へと移送される際、それぞれの島の船出に際しては、必ず「南風を候ち（まち)」船を出した、と記されている(池谷他編　2005　訳注編 p.231・p.232・p.233 他)。十五世紀の当時から、既に「南風」が、島人にとって、航海の時節の到来を知らせる言葉であったと思われ、風を謡うことは航海という人々の活動と密接に繋がっている。

風の由来を雲にある「風の根」に求め、風を吹き出し続ける風の根の力も、畑のニラの根から繰り返し伸び出す葉にみる繁殖力も、自然の同質な力によるものだとする発想を、歌唱者達の自然把握にみることができる。そうした自然把握が、単に自然をみることを目的にした行為ではなく、航海という島人にとって重要な活動や、日々の畑の植物の栽培作業の中で形成されたものであり、表現に活かされている。

（３）他地域の歌にみる風と航海の表現

海に囲まれた琉球諸島では、いずれの地域でも海を渡ることは生活に必要な技術である。ここでは、八重山以外の地域の歌の航海の風の表現についても、簡単に触れてみたい。次の引用は、宮古の歌の１節である。

a.「舟(ふに)んだき 司(つかさ)のタービ」 仲嶺元　　（宮古篇　p.44）

（前略）

60	とぅらぬぱぬ　かじぬ	寅の方角[33]の風が
	かんぬにーぬ　かじぬ	神の根の風が
61	やーら　やーら　オしゅりば	柔(やわ)ら柔らと押し吹くと
	だうだう　オしゅりば	和(な)ご和ごと押し吹くと

[33] 寅の方角は、「東から北へ 30° 寄った方角。東北東。」（北原　2003）

62　かじがままだらよ　　風のままだろうよ
　　なゆイままだらよ　　柔風のままだろうよ
　　（以下略）

b.「仲宗根豊見親初めて年貢を捧げて上国せし時のアヤゴ」（宮古篇 p. 298）

　　（前略）
　　風待ち居れば　オリ待ち居れば　　風を待っていると折を待っていると
　　真南根（まぱいね）の真風　やりき根の南風（まぱい）の　　真南根の真風がやりき根[34]の南風が
　　軟々（やばへ）と押したれば　和々（なごへ）と押したれば　　軟々と吹いたので和々と吹いたので
　　（以下略）

c.「狩俣祖神（うやがん）のニーリ」 狩俣　 五　 （ 宮古篇　p. 130 ）

　　（前略）
23　かじう　まちうりば　　風を待っていると
　　うしてぃ　まちうりば　　押手＜追風＞を待っていると
24　ゆからでぃ　やりば　　良いことであるから
　　んさらでぃ　やりば　　勝れたことであるから
25　シくなばい　ぱいや　　初南風　南風は
　　なぐなぐどぅ　うしゅりば　　和々と押すと
　　（中略）
28　いだし　ぴゃりば　　出して走らすと
　　にがい　ぴゃりば　　願って走らすと
29　ゆピとぅゆや　くみだ　　夜一夜を過さないで
　　ゆふたゆーや　くみだ　　夜二夜を過さないで
　　（以下略）

上記に引用した風の表現は、何れもが島から船が出帆する時の風を表わしている。

[34]『宮古の歌謡 付･宮古歌謡語辞典』（新里　2003　p. 347）によると、「やらき(柔ら気)」おだやかな風。春風。「なくかじ(和風)」「やはうりゃ(和風)」とある。これを参考にすると、「やりき根」の「やりき」は「やわらかい」という意味に解釈できる。

「寅の方角」「南風」等が吹いてきた方角と時期を示すものや、「軟々」「和々」「追い風」等の風の状態を謡っているものがある。こうした詞章は、慣用句的に他の宮古歌謡にも使われている。そして、これらの詞章と八重山歌謡の航海の風の表現を比べると、違いがみられる。宮古歌謡の航海の風の表現は、あくまでも船を走らせる風の方向と状態を形容する抽象的な言葉で表わされており、上記の表現を見る限り、八重山歌謡が、航海の風をニラの繁茂で表現したような、風を植物の在り方という具象で述べたり、雲の風の根を説明する自然の摂理を把握する発想とは異なっている。

では、沖縄島の歌についてはどうだろう。次に示す「ヤラシイ」という歌は、「やくみい（兄さん)」が公務で大和旅を命ぜられ、その出立から帰還するまでを細かく謡っている。テキストではクェーナに分類されていて、言霊信仰やをなり神信仰を基層に、旅の祝いと安全の予祝を意図して謡われる長編の叙事形式の歌である。以下の引用部は、全 652 節という長詞形の歌の中にある航海の風を謡った詞章である。

「ヤラシイ」　（沖縄篇 p. 202）

（前略）

451	くんであゝち	組手合わせて
452	むすびあゝち	結び合わせて
453	南風（はい）の風	南の風を
454	まとも風	真艫風を
	〈大和は　北（にし）の風　まとも風〉	〈大和は　北（にし）の風　真艫風を〉
455	やは〳〵と	柔々と
456	うら〳〵と	うらうらと
457	じに給（たばう）れ	実に下さい
458	かねたばうれ	こう下さい

（以下略）

上記に示した引用部の第 451～458 節は、姉妹が手摺りして、「航海を無事に成就させる風が、柔々と吹くようにして下さい」という祈りの行為を謡っている詞章である。こうした詞章は、この歌の背景にある姉妹が兄弟を守る「をなり神信仰」を表し、八重山の歌の事例に共通している。そして、航海の風は「やは〳〵と（柔々と)」「うら

へと（うらうらと)」という状態の抽象的な言葉で表現されている。

公事等の航海の無事を祈る歌は前記の通りだが、「海神祭」で謡われる歌の中には、祝女が呪物の「たまがぱら(玉珈玻羅)」を買いに海を渡る様を謡った模擬儀礼の歌が伝わっている。その歌には、凪の海を漕ぎ渡る様が謡われている。タイトルの「タマガーラ」は、勾玉のことである（沖縄古語大辞典編集委員会 1995 p.404）。この歌の詞章では「たまがぱら(玉珈玻羅)」と記されるが、同じ物である。

「タマガーラ買いに大和旅」国頭村比地　（沖縄篇　p. 296）

（前略）

19　エーヨー

ざんぷぶー　ひきうるち　　ざんぷ帆を引き降ろして

エイヤー　エーヨー　ホーライ

20　エーヨー

どろうみん　はいくまち　　瀞海も走り込ませて

エイヤー　エーヨー　ホーライ

21　エーヨー

どろうみん　わきんぢて　　瀞海も分け出て

エイヤー　エーヨー　ホーライ

22　エーヨー

やまととまいん　ちちゃびたん　　大和泊にも着きました

エイヤー　エーヨー　ホーライ

（以下略）

この歌全体は 29 節で構成されている。歌の概要は、山から木を伐りだして出来上がった船は美しく、その船で大和に「たまがぱら(玉珈玻羅)」を求め航海に出る。行きは穏やかな海を渡ったが、帰路には外洋の荒い海となり、大事な「たまがぱら(玉珈玻羅)」を濡らしてしまった、さて帰って祝女に何と申し上げようか、という物語になっている。造船の叙事のモチーフと呪物を求める航海のモチーフで構成されている。この歌を伝承している比地のウンジャミの祭祀及び歌謡については、『山原の祭りと神歌』(名護市史編纂室 1997)に、祭祀の変遷を含めて詳しく考察されている。

筆者が見学した時は、比地の小玉森のアサギの前庭で行われる神遊びの儀礼で、祝女によって始めにこの歌が謡われていた。本稿のテキストと『山原の祭りと神歌』に取り上げられている歌では、航海の風に関しての詞章が若干異なるところがあるが[35]、凪いだ海上を走る美しい帆船の姿を幻視する心意は同じである。造船、凪いだ海を走る美しい帆船、祝女の霊力の象徴のガーラ玉等、どのモチーフも祝女と霊力を誉め讃えることにつながる神歌である。風は、船の走向を支える条件の一つである。この歌に謡われている「どろうみん(瀞海)」とは穏やかな海を表す言葉である。沖縄島の歌の航海を謡う場面は、「凪」の海の表情を表現するモチーフが目につく。こうした歌は、神女が謡うもので、幻視の呪術性を強く表出していると考えられる。

上記の2篇にみた風の表現が中心的な沖縄島の歌の中で、次の歌の詞句は、趣が異なっている。

「シマノーシの唄」　渡名喜島　（ 沖縄篇　p. 445 ）

1	いずくむとはみや	いずく〈船〉むと神は
2	みゆにかにらち	御船を囲いさせて
3	くもかにーぬたるー	雲の根の太郎
4	かじかにーぬたる	風の根の太郎
5	なはへーかじになたる	真南風になった
6	いとかじになたる	糸風〈穏風〉になった

（以下略）

「シマノーシ」は、渡名喜島の祭祀で謡われる歌[36]である。ここでは、第3節と第4

---

[35]『山原の祭りと神歌』「9 国頭村奥間・比地のウンジャミの神歌」に引用されている歌には、海の様子が以下の様に謡われている。

るるうみに　ぱいさがてぃ　　凪ぎの海に走りさがって
るるうみん　わきんじて　　凪ぎの海に分け出て

（名護市史編纂室 1997 p. 292　抜粋）

[36]「シマノーシ」は、『沖縄古語大辞典』によると、「島直し」「①島を平和にし、穏やかにするための祭祀。(以下略)②渡名喜島で行われる祭祀名。旧暦の四月下旬から五月朔日、隔年毎に行われる四日間の行事。海の彼方からの旅の神を迎えて、豊作、豊漁、航海安全、村の人々の健康を祈願する。「シマノーシの唄」[古 ウ 二八二]は、最初の「トン」(御嶽)をでる時と最後の四ツ目のトンを出る時のもので、テンポが速い。」とある。（沖縄古語大辞典編集委員会篇　1995　p. 331）

節で「くもかにー(雲の根)／かじかにー(風の根)」という対句が成立し、次の節で「なはへーかじになたる（真南風になった）／いとかじになたる（糸風＜穏風＞になった)」と謡っている。琉球歌謡の対語・対句の成立の仕方は、一般的に同じ意味の言葉の繰り返しが多いとされている点から鑑みて、対句が成立しているということは、この歌の歌唱者達は、雲の根と風の根に、共通性を見出していると考えることができる。航海に良い風と海の様を謡う他の歌に比べると、風の由来を謡った八重山の歌に近い発想がある。とはいえ、風の吹く様を植物の固有の形態を取り上げて説明する具象的な表現は見られない。

八重山以外の地域の歌の表現も交えて、ニラと風の表現について考察してきた。八重山の歌もそれ以外の地域の歌も、航海安全の祈願の歌では、航海の為の風が吹くことを取り上げて謡っている。風を表現する言葉には、地域を越えた共通性と地域ごとの差異がある。風に美称辞を用いること、風が吹き出す「根」があると発想すること等は、各地域に共通してみる事ができる。一方、同じ航海の風を表現する言葉には、地域毎に個性が見られる。宮古や沖縄の歌は、「柔々／うらうら」「凪海」等の目に見える海の状態を形容する抽象的な言葉を用いて、航海に良い風がどのような風であるか表現されている。

けれども、八重山の歌においては、航海に必要な風の吹き続ける理由を、「風の根」という眼に見えない不思議な力に認めている。風の由来を雲にある「風の根」に求め、風を吹き出し続ける風の根の力も、畑の植物の根から繰り返し伸び出す葉にみる繁殖力も、自然の同質な力によるものだとする自然観は、八重山の歌唱者達の自然把握の発想である。風と植物という一見異なる自然の事象の間に、類似の見えない力の共通性を見出した歌唱者達は、身近にあるニラが繁茂し続ける様子で、風が吹き続ける眼に見えない超自然の力を説いた。

そうした「風」という大気の現象と植物の生長を説明する壮大な自然観が、島人にとって避けられない生活の必要から生まれている。単に自然をめでることを目的にした行為なのではなく、航海という島人にとって重要な活動や、日々の畑の植物の栽培作業の経験世界の言葉を用いて、「くくる嶽あよう」「くくるだきあゆ」「とぐるだきでらば」の植物歌の表現の世界が展開されている。あくまでも、歌唱者達の生活に必要な理解によって歌の表現が成立している。

５．「いきぬぶしじらば」

－　オキナワウラジロガシ・タブノキ・オガタマノキ　－

（1）「いきぬぶしじらば」とその類歌

神話の世界では、神々や人の祖先の死体から様々なものが発生するという、物事の始原を伝える話は「死体化生型」の神話といわれ、世界各地にその伝承が広がっている[37]。

八重山歌謡には、女性の死体から樹木が生え、その材木から船を造るという展開を謡った歌がある。ここで取り上げる「いきぬぶしじらば」とその類歌には、女性の死体から生えたとされる樹木３種が、謡われている。「樫木」または「樫に木」（和名オキナワウラジロガシ）・「とぅむぬ木」（和名タブノキ）・「どぅすぬ木」（和名オガタマノキ）である。「樫に木」が謡われる歌は、テキストには15篇あるが、その内の５篇が、死んだ女性から生えた由来を持つ「樫に木」によって、船を造るというモチーフを含む歌である[38]。「樫に木」と同様に、死体から生えて船材になる樹木としてうたわれているのが、「とぅむぬ木」と「どぅすぬ木」である。この２種の樹木は、「樫に木／とぅむぬ木」「とぅむぬ木／どぅすぬ木」と、それぞれ対語をなして用いられている。その２種を謡う歌も加えた７篇を、ここでは「死体化生」の植物を謡っている「いきぬぶしじらば」とその類歌とする。

＜表１＞

	歌謡名	テキスト語形	地域名	ジャンル	頁
1	いきぬぶしじらば	樫に木／とぅむぬ木	石垣島大浜村	ジラバ	224
2	いきぬぶす	樫に木／まとぅむぬ木	石垣島宮良村	ジラバ	226
3	んでぃみやーぼーすぬじらば	樫に木／とぅむぬ木	小浜島	ジラバ	251
4	出でみや節ゆんた	かしに木／とぅむぬ木	小浜島	ユンタ	412
5	いとぅぬぶでぃ（どぅんた）	かちんぎき／とむぬき	与那国島	ユンタ	463
6	ぱいさきよだじらば	とぅむぬ木／まとぅむぬ木	波照間島	ジラバ	277
7	いきぬぼうじぃゆんた	とぅむぬき／どうぅすぬ木	石垣島平得村	ユンタ	365

[37] 死体化生については、『稲作の神話』（大林太良　1973　pp. 8-10）参照。

[38] その他の 10 篇の内、6 篇は、祝儀の席などで謡われる「山樫木あゆう」とその類歌である。これらの歌は第２章第２節１「山樫木あゆう」で取りあげた。残りの３篇のうち、２篇は山仕事を謡う歌（「たなとりじらば」石垣島白保村 p. 23）と、祭りの船を寿ぐ歌（「出船の歌」西表島　p. 610）で、船と関係している。他１篇にはオキナワウラジロガシのドングリの殻斗が歌の素材となって謡われているもの（「鳩間ゆんた」鳩間島 p. 403）　がある。

歌に用いられている「樫に木」「とぅむぬ木」「どぅすぬき」の樹木について、『図鑑琉球列島有用樹木誌』(天野　1989)の記述を参考に、始めに、簡単に紹介しておきたい。

これらの樹木自体の特性については、「樫に木（オキナワウラジロガシ)」は琉球列島固有種であり、建築材（柱）に供する外、堅牢を必要とする機械、船舶材（艫や櫂など）に使われるとある(前掲書　p.45)。用材として優れた性質を持っているので、造船の為に伐り出す材木として歌にも謡われているのも頷ける。「とぅむぬ木（タブノキ)」も、建築材・器具材の外、薪・炭材に使われる(前掲書 p.85)。歌では、オキナワウラジロガシと同じく船材[39]として謡われている。また、「どぅすぬ木（オガタマノキ)」は琉球では貴重な建築材で、各種用材に利用されるとある（前掲書　p.73)。いずれの樹木も、大木に生長する。

上記からわかるように、この3種の樹木は、船材として用いられる実用性のあることで共通している。

（2）「いきぬぶしじらば」の歌の内容

次の引用は、石垣島大浜村の「いきぬぶしじらば」である。

「いきぬぶしじらば」　石垣島大浜村　p.224

1　いきぬぶしよー、てぃゆみやーがよー　　池の大按司　豊見親
　てぃんぶしぃよー、てぃゆみやがよー　　豊見大按司　豊見親が
2　まりてぃうる、うちぃながよー　　生まれているうちに
　てぃんぶしぃよー　てぃゆみやがよー　　豊見大按司　豊見親が
3　しぃでぃてぃうる、　うちぃながよー　　孵で＜生まれ＞ているうちに
　てぃんぶしぃよー　てぃゆみやがよー　　豊見大按司　豊見親が
　　はやし（曲調が変わる）

[39] タブノキについては、『琉球列島有用樹木誌』（天野　1989）や文化人類学の調査報告のある『南島の自然誌』（山田　2012）の記事には、船材に使ったということは書かれていない。また、『近世八重山の民衆生活史』（得納　2007 p.23）によると、刳り船の記載に詳しいが、用材として挙がっている種目名に「松木」「樫木」「赤木」のみが記されている。
そこで琉球の事例ではないが参考として、『タブノミハ　ムギヲ　イッピュ　クイダス−タブノキと人との交渉をめぐって−』(川野 2008)によると、南九州のタブノキの民俗として、タブノキが刳り船の材に利用されていた事や、この木に対する神聖な意識等が明らかにされている。そうしたことから鑑みて、琉球においてタブノキが船材として認識されていたことが無いとは言いきれない。

1	サア〈以下略〉あまぬかいしや まりばし 「ティンパンヌードゥルゲーマヨー」 ＜囃子、以下略＞	サア　あまりに美しい 生まれをして ティンパンヌードゥルゲーマヨー
2	どぅきゃぬ美(ちゆ)らさ、しぃでぃばし	甚だしく美しい孵で＜生まれ＞をして
3	みざし主に、ぬずまれ	目差＜役職名＞主に望まれ
4	主ぬまいに、みぬされ	主の前＜御役人様＞に指命され
5	みざし主や　うかさんどぅ	目差主は恐れ多いよ
6	うやうやや　あこーさんどぅ	親＜御役人様＞々は恐れ多いよ
7	うむとぅやま　ぬぶりようり	おもと山＜岳名＞にお登りになり
8	てぃらしやま、ぬぶりようり	照らし山にお登りになり
9	月三月(ちきみちき)、なるまでぃん	月の三月(みつき)になるまでも
10	百日(むむか)　二(はちか)(十)日　なるまでぃん	百二十日になるまでも
11	ばぬとぅみる人(ぴいと)、ねーぬ	私を探す人はない
12	くりとぅみる人、うらぬ	これ＜自分＞を探す人はない
13	あまぬ水(みじい)、ふさんどぅ	あまりに水の欲しさに
14	どうきゃぬやーさぬ、うらるぬ	甚だしくひもじくて居られぬ
15	かーらぬすば、はりやいき	川の側に走って行き
16	いきぬすば、はりやうり	池の側に走り下り
17	水(みじい)ぬむんで、うすぶけ	水を飲もうと伏せている間に
18	片耳(かたみん)から、とぅむぬ木	片耳からトゥムヌ木＜植物名＞(が生え)
19	片耳から、樫(かしい)に木	片耳から樫の木(が生え)
20	とぅむぬ木や、どぅうとぅり	トゥムヌ木は(船の)胴体にとり
21	かしに木や、かじぃとぅり	樫の木は(船の)舵にとり
22	みざし主に、乗(ぬ)らりてぃ	目差主に乗られて
23	主ぬ前に、乗らりてぃ	主の前に乗られて
24	舟なりてん、ゆぬ乗(ぬ)らり	船になっても同じ乗られだ
25	命(ぬちい)ぬあるけん、乗(ぬ)られーりや	命ある間にのられていたなら

この歌の内容の構成は、次のA〜Cの3部に分けられる。

A　前説　言挙げ、又は、池の大按司豊見親の御代という時代を示唆する。

B　女性を主人公にした物語り

a. 役人が、島の美しい女性に求婚する。

b. 女性はその請いを断ってて、山に逃亡する。

c. 山の中で一人でひもじい思いをして過ごすが、やがて水を求めて向かった川原で死亡する。

d. 女性の死体から、樹木(オキナワウラジロガシ･タブノキ)が芽生え育つ。

e. 命を受けて、造船のための船材を求めて山に入った村人達によって、その木が伐り出され、船が作られる。

f. 船の姿に女性の姿が重ねられる。

C　後説　・・・死んだ女性に対する世評

石垣島大浜村の「いきぬぶしじらば」の内容の展開を記すと上記のとおりになる。A・B・C の展開は、「いきぬぶしじらば」の他の 6 篇にも、概ね共通する基本的構成である。ただし、詳細に見てゆくと、A・B (a.b.c.d.e.f)・C、のそれぞれの項目には、欠如やバリエーションがみられる。大凡の共通点と相違点を簡単に記してみたい。

A の冒頭節にある「池の大按司　豊見親」は宮古島の首長の呼称で、首長の言挙げ的な役割を果たしていると考えられる。この「池の大按司豊見親」は、引用事例の歌の場合は、大按司を讃える様に謡われている。また、前説のようにとるとすれば、こうした冒頭部は、この歌の背景にある宮古と八重山の関係を示唆している。そして、囃子を挟んで、一人の女性を主人公にした物語が歌に展開していく。引用以外の歌では、そうした前説は欠如して、宮古との関係を示す詞章は物語の中に吸収されてしまっているものもある。

B はこの歌の中心となる物語の部分である。a～f の内容は、概ね次のモチーフで構成されている点はどの歌にも共通している。始めに、主人公の女性が、理不尽な求婚から逃れるために逃走し、山に籠もる (a.b)。次に、女性が山奥にこもったまま死亡し、その死体から樹木が生える、という山中の女性がたどる物語 (c.d)。最後に、女性の死体から生えた樹木を材木に使って、女性のような美しい船体が作られた、という造船にかかわる物語 (e.f)である。以上の３つのモチーフを基本にして、歌ごとに詞章のバリエーションが展開する。バリエーションは次のとおりである。

a. で、村の娘が役人から求婚される内容は、どの歌もほぼ同じである[40]。

b. では、女性が役人の求めを拒む理由が謡われるが、「恐れ多い」「島の男と結ばれたい」「役人の求めに応じたが、周囲からの非難に、山に逃れる」等のパターンがある。

c. は、山中に逃れた女性が、孤独に彷徨い歩いた後、水を求めて川原におりるパターンと、川に流されるパターンがあり、また、女性の死亡が明確に詞章に示されたパターンと、死亡が明確に表現されていないパターンに分かれる。

d. の死んだ女性から樹木が生えるモチーフについては 7 篇の内、詞章に明確に謡われているもの 5 篇、曖昧なもの 2 篇に分かれる。また、死体からの樹木の発生場所は、乳、耳、目などそれぞれ異なり、発生した樹木は、「樫に木（オキナワウラジロガシ）「とぅむぬ木（タブノキ)」、「どぅすぬ木（オガタマノキ)」の 3 種である。

e. の死体化生の植物を伐り出して得た材木で、船の棚板や竜骨板が作られる。美しいできあがりと船を讃えるものと、ただ航海を謡うものとある。

最後に C. は 4 篇に、死んだ女性に対しての歌唱者達の世間評が盛り込まれている。これにも、いくつかのバリエーションがある。女性は、生前役人の請いを拒んで、山に籠もり死亡したが、その役人が、その女性の死体から生える材木で作った船に乗っているよという客観的な評で留めているものと、さらに、同じ主に乗られるのなら、命のある間に乗られていたならなあという主観的な評になっているものがある。以上が「いきぬぶしじらば」とその類歌の意味内容の概要である。

（3）「いきぬぶしじらば」とその類歌の先行研究

この歌謡群についての先行研究に、砂川哲雄の「南島歌謡における祝女の山ごもりと造船」（砂川　1976）がある。それは八重山の「池ぬぶしぃジラバ」や宮古の「池のぷーヅとぅゆみゃーぬアーグ」の構造をとおして、〈祝女の山ごもり〉という古俗を論じたものである。

砂川は始めに、山ごもりの意味と造船の結びつきについて考察している。伊波普猷が『おもろさうし』に謡われている祝女の山ごもりという祭祀的な古俗の考察につい

---

[40] 宮古の池間島の「池の大按司鳴響み親のアーグ」（宮古篇　p. 269）では、この物語の主人公的女性は、「鳴響み親」を父として生まれたことになっている。身分ある女性を主人公としている。

て、「祝女のセジ獲得のためである、という以上に展開することはできなかった」（砂川　1976　p.278）ことを取り上げている。それについて砂川は、「「山にこもる」「山に登る」という発想は『おもろさうし』の、特に「ゑとおもろ」に数多く出てくる。そして、これらのほとんどが造船と結び付いている。」（前掲書　p.278）と指摘し、祝女の山ごもりと造船との関係という点から、「八重山の「池ぬぶしぃジラバ」や宮古の「池のぷーヅとぅゆみゃーぬアーグ」を中心にして、（中略）構造的に捉えなおすことにしたい。」（前掲書　p.278）としている。

砂川の結論の概要は、次のようなものである。この歌に登場する女性は祝女であり、男性（役人）の請いを拒否して山へ逃走するのは、日常から聖域（山）への移転を象徴している、としている。そして、山に長期間籠もった「女性（祝女）の川辺での（山中死）とその（化生）」（前掲書　p.294 ）について、宮古島の狩俣や島尻地方に伝わる「祖神祭」での新しい祝女の誕生までの経緯を事例に、俗から聖、聖から俗への往還の間に、（水）が復活（化生）の媒介となり、（死）と再生という構造のなかで、祝女の死体から化生する樹木を再生の象徴、と説明している。

「祝女を崇べて航海安全を祈るという直接表現ではなく、山ごもりを経たあとに化生して船になるという、神話的な時間と空間をからませて構成されているところに特徴がある」（前掲書　p.321）と述べ、この歌が祭式との深い関係（反映）を歌謡構造に潜在させた「古代人の心性の記憶を歌謡構造にもっている」（前掲書　p.325）点を特徴と指摘した。さらに、「そこに、時代を経るにしたがい、その時代の言葉や発想などが付着したりして、いかにも悲劇的な歌謡としてつたわり、うたのわすれられたところでは、地上的な伝説の物語として残ったものと思われる。」（前掲書 p.324 ）としている。

こうした解釈は、新里幸昭も『宮古の歌謡』（新里　2003）で、「イキヌプージトゥユミャーヌ（池の大按司鳴響み親の）アーグ」（前掲書　p.192）を取りあげ、「死と再生、造船を謡ったアーグ」と端的な表現で指摘しており（前掲書　p.192）、砂川のこの歌に対する解釈とほぼ同じ理解を提示している。両者が、この歌の持つ祭式との関係に強く注目していることがわかる。

また、死体化生の樹木のモチーフについては、船材をめぐる宮古と八重山の関係の中で触れている。それは、16 世紀初頭以前から「人々は船を造り、漁に出かけ、あるいは漂流を機縁として他国との交易を行うために航海した。（中略）したがって、

船材としての良木を探し求めることは重要なことであった。」（砂川 1976　p. 314）とし、「この造船のための良材を求めて深い山に入り、伐木して船を造り、航海に出るという土壌があるからこそ、女性の死体からは穀物では無く、船材としての大木が化生するという発想が現れてきたと考えていいだろう。」（砂川　1976　pp. 314-315）と述べている。砂川は、樹木の死体化生という神話的発想を、祝女のセジという観念に焦点をあてて考察し、死体化生の樹木の再生はセジの獲得を象徴するものとして解釈している。（砂川　1976　p. 315）

砂川の注目する点は、「池ぬぶしぃじらば」の歌の中の、基層としての「古代の心性」の考察に向けられ、「池ぬぶしぃじらば」の「死体化生」の神話については、論ずる中心の目的とは異なるとして、詳しくは触れない立場をとっている。

（4） 歌の背景　-宮古と八重山の「死体植物化生」の詞章を中心に

植物と表現の関係を中心的に考察する本稿にとっては、「いきぬぶしじらば」とその類歌に注目する点は、この歌の「死体化生」の植物と表現にある。八重山と宮古を対比することで、八重山歌謡の死体化生の植物の具体性に注目して考察したい。

両地域の歌に登場する死体化生のモチーフの樹木についてみると、八重山歌謡には、死体化生した樹木は具体的な樹木名が謡われている。「樫に木」と「とぅむぬ木」、そして「どぅすぬ木」である。こうした八重山歌謡に謡われている樹木について、宮古の歌と比較すると、宮古の「池の大按司鳴響み親のアーグ」（宮古篇 p. 269）では、具体的な樹木名には触れられていない[41]。

はじめに、宮古の「池の大按司鳴響み親のアーグ」の事例を取り上げたい。この歌は全詞章 57 節に及ぶ長編の歌である。その詞章の中で、死体化生の樹木について触れている詞章は、第 49 節である。以下は、その 1 節を含む前後の詞章を引用したものである。

「池の大按司鳴響み親のアーグ」　池間島　（宮古篇 p. 269）

（前略）

45　やまがらぬ　はたんどぅ　　山川の側で

[41] 類歌の「山のマツサビ」狩俣（外間他、1978　宮古編　p. 349）も、樹木名はないことは同様である。けれども、「池の大按司鳴響み親のアーグ」と比べると、体から植物が生える詞章や、造船を歌う詞章等は、詳しく謡われているほか、物語の展開は整っているのが特徴である。

	とぅびみジぬ　かたんどぅ	飛沫をあげる側で
46	かたや　かたシチにゃーし	(真白美は) 肩を片方下にして
	かたみーだま　シチにゃーし	片方の目玉を下にして（死んでいた)
47	ばが　やーまぬシまやーや	わが八重山の島々は
	なみじゃやふジまりば	並み細工の島だから
48	みどぅんまとぅん　ぬくらん	女も残らず
	ゆしじゃやふジま　やりば	寄せ細工の島だから
49	かたみーからや　きーゆうい	(真白美の) 片目からは木が生え
	かたみーから　シっさにゃーうい	片目からは白い根が生え
50	ななうとぅじょ　まりゅシどぅ	7 人の姉妹が生まれていたが
	たシきーふぃー　シとぅーにゃーん	助けてくれる人はいない
51	いチうとぅじゃ　ありゅシが	五人の姉妹があったが
	ゆるきふぃーシとぅー　にゃーん	助けてくれる人はいない
52	やまとぅから　くだたイ	大和から伝わってきた
	うふぶーぬーや　まかなし	大帆にまかせ
53	いチチんな　いらまーん	五棚船もほんとうに
	てぃんまがみ　はぎゆらし	伝馬船までも建造して
54	てぃびから　みーてぃが　いらまーん	後から見るとほんとにまあ
	まっさびが　しるてぃびよー	真白美の白い美しいお尻のようだ
	（以下略）	

＊下線は、筆者が加筆

引用部の第 47〜48 節は、八重山の造船技術の誉れを歌っていると取れる詞章であり、それに続く上記引用の下線を記した第 49 節が、死んだ真白美の体から樹木が再生したことを謡っている詞章である。死んだ女性から発生する植物の描写は、「木が生え」「白い根がはえ」という対句表現で表されているが、こうした対句は「木」を「若葉」に換えてみると、一般的な植物・穀物の生長を表す場合にも用いられるいわゆる歌の慣用句である。この歌の主題ともいえる「セジ」が船材となる樹木に憑く転換点であり、死体化生の神話である「死」から「再生」への重要な場面にしては、さりげない表現の印象を受ける一節である。その上、第

50〜51 節をみると、物語の前後関係が入れ違い、詞章の断片が継ぎ接ぎされたかのような混乱がみられる。八重山の歌と比較すると、宮古の歌は、造船のための特定の樹木が意識されている詞章とはいえないし、死体から樹木が生えるという神話的な空間を、衝撃性を放つ表現として謡っている印象は薄いと言わざるを得ない。また、第 53〜54 節の詞章をみると、歌唱者達の関心は、具体的な船材や船の構造についての興味ではなく、「いちちんな(五棚船)」、「てぃんま(伝馬船)」等の出来上がった船の景を謡っている。

一方、こうした宮古の歌と比べると、八重山歌謡の死体化生の植物を取り上げる詞章は、より具体的である。今度は、石垣島宮良の「いきぬぶす」の事例をみてみたい。

「いきぬぶす」　石垣島宮良村　　p. 226

（前略）

21	かーらぬばた　うすべょーり	川原の端に臥しなさり
22	いきぬかた　うすべょーり	池の方に臥しなさり
23	かたちから　かすにきー	片乳から樫の木
24	かたちから　たむぬきー	片乳からタブの木（が生える）
25	かすにきーや　たなとり	樫の木は棚＜船板＞に取り
26	とむぬきーや　どゆとり	トゥムヌの木は胴＜船体＞に取り
27	たなとるぬ　かいしゃぬ	棚＜船板＞取りの美しいことよ
28	どゆとるぬ　ちゅらさぬ	胴＜船体＞取りの美しいことよ
29	とむぬきーや　どゆびし	トゥムヌの木竜骨にし
30	かすにきーや　たなうき	樫の木は棚にし
31	ゆぬうやに　ぬらりて	同じ親に乗られて
32	ゆぬしゅーに　ぬらりて	同じ主に乗られて

（以下略）

上記は八重山の石垣島宮良村の「いきぬぶす」全 32 節の内、山に籠もった娘が死亡する所からの引用である。第 23・24 節で死体化生の植物名が謡われ、その後の第 25〜30 節ではそれらの樹木を伐りだし、その樹木から取った材を「たな(棚)」「どゆ

（胴）」等の具体的な船の構造名も交えながら、造船作業の描写を歌っている。宮古の歌と比較すると、八重山の歌は造船作業においても、具体的作業の様子を歌に取り入れている。

この 2 地域の歌の詞章の表現の差異は、2 つの点から考えられる。それは歌唱者達の現実の造船に関わる立場の違いと、歌の「場」による違いである。

一つめの歌唱者達の造船に関わる立場の違いについて考えてみたい。「慶来慶田城由来記」には、この歌謡の背景を彷彿とさせる記事が載っている。この記事は、前節で取り上げているので、少し重複するが大凡の内容をここに記す。記事の内容は、宮古島の豊見親の求めに応じて西表島の仲良山あたりに行き、「山宿り」して御座岳の近辺から木を切り出す人夫として、男女 200〜300 人余りを呼び寄せた。ところが、作業途中、豊見親の死の知らせにより、山仕事を放棄して「山宿り」へ帰り、「一夜一日あやく（アヤグ）を歌い、神酒、焼酎であそんだ」（石垣市総務部市史編集室 1991　p. 4）というものである。この「あやく」がどのような歌か、細かいことはわからないので、歌の総称くらいにとらえておくほかにないが、この記事で注目される点は、宮古と八重山の関係や、八重山の島人が樹木を伐り出す山仕事の人夫として駆り出されている時の思い等を率直に伝えているようにみえることである。さらに、「山宿り」で「一夜一日あやく（アヤグ）を歌い」「あそんだ」という記述からは、山の仕事場も歌の「場」になっていたことがわかる。

こうした記事から考えられるのは、宮古と八重山の関係において、2 地域の「造船」にかかわる立場と認識は異なっていた、ということである。取り上げた「慶来慶田城由来記」の記事は、15 世紀中頃前後の宮古と八重山の関係を伝えている。八重山の「いきぬぶしじらば」の歌の冒頭部には「いきぬぶしぃよー　てぃゆみやよー（池の大按司　豊見親）」という宮古の首長名の言挙げと思われる詞章が残されているが、そこには、この歌の背景の宮古と八重山の関係性が表出されている。けれども、その後の 18 世紀初頭の琉球王府の時代にはいって、建築や造船の資材となる大樹の資源は不足がちとなり、杣山統制などにより山の資源は管理されるに至っている[42]。その時にはすでに、宮古が八重山の山林資源や、島人達を自由に使役する関係は成り

[42] 18 世紀初頭の用材の不足や杣山の管理の事情については、『参遣状』乾隆三午年四月十二日（石垣氏総務部市史編集室　1995b pp. 24-25）の記事や、新城による「近世八重山の新村設置と杣山統制」（新城 2014　pp. 223-234）等参照。

立たなくなっていたはずである[43]。そう考えると、南琉球圏が造船という関係で繋がり、宮古が主導権を行使して、八重山の人々に造船のための労働の夫役を自由に課すことができたのは、琉球王府統治以前の時期である。そこから判断して、宮古の「池の大按司鳴響み親のアーグ」と八重山の「いきぬぶしじらば」の両歌の背景には、宮古が八重山に主導的立場を採っていた時代が強く反映していると考えられる。

低島の宮古島には、造船材となる大木が無い。そのため八重山の石垣島か西表島に造船材を求めるほかはない。造船という事業に必要な資源の受容と供給の関係性が、南琉球地域の関係の側面にあった[44]。そして、「慶来慶田城由来記」の記事が伝えているのは、八重山と宮古の関係性において、八重山の農民の側にとっての造船は、地域外の強い領主の命による、材木の伐り出しに始まる造船の作業行程に、多くの人々が駆り出される現場の様であったわけである[45]。先の「慶来慶田城由来記」の記事には、山の木の切り出しの目的は、「家の材」「蔵の材木」（石垣市総務部市史編集室 1991　p. 4）とだけ記され、船材については触れられていない。けれども、歌の世界には、宮古側に「四島の主のアヤゴ」[46]（外間守善･新里幸昭　1978　p. 304）の叙事歌があり、宮古から造船のために派遣される役人の旅が謡われている。これまでみてきたとおり、植物歌は身の回りの事象や事物を歌のモチーフや素材としているという点から考えて、宮古の歌も、こうした歌の環境は類似していると思われ、宮古の按司達が八重山に船材を求めた歌があることから、西表の山中から船材が伐り出された歴史事実はあったと考えることは妥当である。

いずれにしても、宮古の造船の所望は、労働力を提供する立場の八重山の人々に、実際に山底深く山入りし、樹木の伐りだし作業等の現場作業を要求する。そうした仕事の現場の経験が背景にある八重山の歌は、宮古の歌に比べて、より具体的な植物名

---

[43]八重山の 17 世紀後半の『参遣状』には、宮古船を造る時に材木の伐り出しの夫役を請け負う百姓に「手間米」を払うことを勘案して欲しい旨等の記事が見られる(石垣市総務部市史編集室　2015　pp. 99-102)。

[44]『近世八重山の民衆生活史-石西礁湖を巡る海と島々のネットワーク-』(得納 2007　p. 37)参照。

[45] 八重山と宮古の造船に関することは、得納によって、宮古船の造船に関する件が詳しくまとめられており、宮古の家譜には、船の建造のために、役人が宮古から八重山に公務で派遣された記事が残されている事例（得納 2007　p. 196 ）も指摘されている。

[46] 「四島の主のアヤゴ」（外間他 1978　宮古篇 p. 304）の内容は、狩俣の真屋の四島の主が仲宗根豊見親の命によって八重山に造船のために旅に出る物語である。八重山に着いて、八重山の乙女から船材を取る樹木の生育・管理の知恵を教えられ、大和の鉄器で木を切り倒し、八重山で新造船をつくる様が謡われている。この歌の詞章内で、八重山の乙女との問答には、具体的な船材となる植物名が謡われている一方、死体植物化生のモチーフは含んでいない。

や植物の生態、船の構造名等が歌われるという詞章の差異をもたらしていると考えられる。

宮古側の造船にまつわる歌の思いは、良い航海とそれを保障する良船を得ることを意味し、そのためには、船のセジ高さが求められる。宮古歌謡の死体植物化生のモチーフは、神女の霊性が宿る特別な造船材(女性の死体から生えた植物)という構造を強く表現できれば、 具体的な樹木の像によらずとも、美しく建造された船を讃え、航海の安全を守るという歌の予祝の祈願は達成される。その限りでは、砂川が指摘する祝女の山籠もりに始まる古代的心性と造船の関係を謡う事を特徴とする間接表現の儀礼的歌謡という解釈は相応である。

けれども、八重山側の造船にまつわる立場から謡い継ぐ心意には、宮古側とは異なる思いが混入しているものといえる。造船作業で、山仕事を直接担う人々にとっては、造船材を伐り出すために深山に分け入り、目のあたりにする山底に自生する大樹の景に、神話的な物語を展開する心の働きがあっても、不思議ではない。むしろ、深山で出会った大樹に霊性を感じ、心を動かされる人の思考は、樹木信仰などにみられる普遍的な人間の思考の領域のものと解することができる。

八重山の「いきぬぶしじらば」や宮古の「池の大按司鳴響み親のアーグ」の両歌は、一見、類歌と言えるような構成である。けれども、この歌の物語の中に含まれる植物の表現に神話的モチーフを見ると、八重山と宮古とでは、歌に異なる景を表現しているのではないかということが言える。それは、歴史時間でいえば、同時代の空間だが、一つの事象を、異なる立場と異なる体験を背景に持つ言葉の世界を展開することによって、歌に表現する心意に差異が生じていると考えられる。

立場の違いによって生じた差異だけではなく、他にも差異がうまれる理由についても挙げてみたい。宮古の「池の大按司鳴響み親のアーグ」の歌の心意には、航海安全の祈願の性格が強くある。儀礼の心意の表現が、砂川が述べているように、「祝女を崇べて航海安全を祈るという直接表現ではなく、山ごもりを経たあとに化生して船になるという、神話的な時間と空間をからませて構成されているところに特徴がある」（砂川　1976　p.321）のが「池の大按司鳴響み親のアーグ」なのである。その延長で、砂川は「古代人の心性の記憶」が時を経て薄れて行き、「その時代の言葉や発想などが付着し」、「地上的な伝説の物語として残ったものと思われる。」（砂川　1976　p.324 ）とし、「石垣島・宮良の「池ぬぶしぃじらば」をその典型」（前掲書

p. 323）とみなしているが、対比として考えるならば、むしろ、宮古の同じ背景を持つ、宮古のクイチャーで「山のマツサビ」（狩俣）（外間他　1978　p. 349）の事例が、庶民的な伝説の物語仕立てに展開した歌にみえる。

八重山の「いきぬぶしじらば」と類歌は、例えば、「慶来慶田城由来記」の記事にも見たように、夫役にかりだされた百姓達が「山宿り」の仕事の慰労の場で歌い継いだような歌であるとすれば、 それらは、共同体の労働の生活を基盤にもっている歌ということができる[47]。そのことも加えて考えると、八重山歌謡の「いきぬぶじじらば」とその類歌について言えば、航海安全の儀礼歌という心意よりも、木材の伐りだし等の現場作業の「場」に近い作業者達の思いが、歌の心意に強く反映していると考えられる。八重山の「いきぬぶしじらば」とその類歌は、歌に組み込まれた死体化生のモチーフを通して、大樹を前にした時、樹木と人間の関係に起こる普遍的な霊性の思考が表現されたものとみえる。そこで、八重山の歌に見る植物の死体化生の神話について、さらに詳しく考察したい。

（５）八重山歌謡の死体化生のモチーフ

死体化生型神話のモチーフは、東アジア、東南アジアの広い地域に見られるものである。ここで、死体化生神話の詳細を扱うことは、本稿の目的ではないので、八重山歌謡の死体化生のモチーフを含む「いきぬぶしじらば」とその類歌の解釈を深める意図で考察を進めたい。

大林太良は、『稲作の神話』（大林　1973）で、典型的な死体化生とは、「原古の存在の死体から作物発生というモチーフ」（前掲書　p. 66 ）と述べている。穀物の起源を語る死体化生のモチーフは、日本神話でいえば、大気都比売神（おおげつひめのかみ）の死体から五穀が生じたという説話等の例を挙げられている（前掲書　p. 44）。

けれども、宮古・八重山の歌の死体化生の植物は、造船材として使われる共通性をもった大樹であり、山深くに自生するオキナワウラジロガシやオガタマノキ、タブノキである。栽培作物の起源を明らかにするモチーフではないという意味で、死体化生の主流となる穀物起源説のモチーフとは異なる展開が八重山歌謡の世界にはみられる

[47] テキストによるジラバとユンタの定義は、次の通りである。「ジラバは、アヨー同様、カンフチ、ニガイフチの持つ呪的心性や予祝的機能を受けつぎつつ、人々の生活に深いかかわりをもつ農耕、家造り、船作り、航海、井戸掘り等々を主題にして謡われる叙事的歌謡である。」「ユンタはジラバとともに作業労働を主題とする叙事的歌謡である。」（テキスト pp. 649-650）

ということになる。

しかし、大林の著書には、「穀物起源伝承の形式をとらず、昔話化している」（前掲書　p. 66 ）死体化生が伝えられている事例が記されており、「その一例は、福建省の閩中閩南一帯に広がっている水仙の起源伝説である。」（前掲書　p. 66 ）としている。先に取りあげた砂川論文も、大林が『稲作の神話』で紹介している「水仙の起源伝説」に触れている。けれども、砂川は、「わたしたちの歌謡の「死体化生」も、その起源においてどこか結びつくものがあるかもしれない」（砂川　1976　p. 313）としながら、それを論じることは「南島歌謡における祝女の山ごもりと造船」の目的ではない（砂川　1976　p. 313）として退けている。しかし、歌謡に謡われている植物と表現について中心に考察する本稿にとっては、ここで水仙の起源伝説に触れるのは、むしろ目的にかなうものである。南琉球圏内の類歌とみなされる宮古の「池の大按司（いきぬぶーじ）鳴響み親（とうゆみやー）のアーグ」と八重山の「いきぬぶしじらば」とその類歌では、両歌が類歌の関係にあると見える構造部分もある。けれども、宮古と八重山の歌唱者達の「立場」からすると歌に異なる背景があるとする本稿の見方からすると、「水仙の起源伝説」は興味深い事例である。紹介されている「水仙の起源伝説」をそのまま引用してみたい。

> むかし、福建省の漳州竜渓県に癸貞という娘がいた。鄙にはまれな容色よしだったので、隣村の張某という男に求婚された。しかし、この張某は性質の悪い男で、附近の人々から小閻王と綽名されているほどの人物であったから、娘の気にいらなかった。しかし、娘の父は張某の富財に目がくらみ、むりに婚約させたので、娘は結婚式の朝、自ら首を刎ねて死んでしまった。やむなく娘の死骸を後の山に葬ったところ、清明節のころになると、その墓石の間から緑葉の美しい芽が生えはじめ、だんだん生長してついに美しい清楚な花が開いたのを見て、人々は癸貞が仙人になり、その霊魂が草花になったのだといって、この花を水仙と名づけた。（大林　1973　p. 66）

上記の「水仙の起源伝説」の物語の内容を整理すると次の様に物語が展開している。

a. ある村に美しい娘がおり、隣村の富裕だが、性質が悪いことで有名な男に求婚される。
b. 娘はのぞまなかったが、父親に無理矢理に婚約させられる。

c. 娘は、結婚式の朝、自殺する。

d. 娘の死骸を山に葬った。

e. やがて、墓石の間から清楚な花（水仙）が生えた。

f. 人々は、娘は仙人になり、その娘の霊魂が草花になった、と言い伝えた。

ここには、理不尽な求婚と死に方をした娘の物語があり、その娘の霊魂が、植物（水仙）の発生の起源と繋がって、福建省の水仙の由来伝説となっている。この福建省の「水仙起源神話」は、先述の「いきぬぶしじらば」（石垣島大浜村）の引用に際して、歌の展開を記したものと比べると、「仙人」という中国の道教固有の思考が含まれる等の差異もあるが、幾つか共通する点が見受けられる。

物語の発端となる、美しい娘が金持ちに求婚され、望まない結婚を強いられるモチーフは、八重山歌謡では、求婚者は島の役人だが、両事例とも、娘に結婚の無理強いをするパターンは共通している。次は、その要求を娘は拒み死に至るモチーフである。「水仙起源神話」では、「婚姻の朝の自殺」だが、八重山歌謡では、山に逃れ、数ヶ月の後、水欲しさ、ひもじさで死亡する。直接の死の理由と死に方は異なるが、何れも娘は死に至る。そして、最後は、娘の「霊魂」が水仙になったというモチーフである。これに対して、八重山歌謡では、娘の死体から、「セジ」の移った樹木が生えたとなる。こうして見ると、韻文と散文の違いを超えて、物語の展開は類似する。

さらに、植物という点からみて両者に共通している点は、野生の植物の由来譚ということである。大林は、エバーハルトの説として、水仙起源伝説の伝承の理由を、「そこだけが水仙の産地だから」（大林　1973　p. 67）と紹介している。野生の水仙の由来譚は、福建あるいはその付近だけに咲く水仙について、中国福建省の閩中閩南一帯の人々が、目の前の植物の事象の解釈に、水仙の起源伝説を伝承しているものである（前掲書　pp. 66-67）という。同様に考えれば、「樫に木（オキナワウラジロガシ）」は、琉球諸島の固有種であることは興味深い。そして、八重山の「樫に木」や「とぅむぬ木」「どぅすの木」についての死体植物化生のモチーフを謡い継ぐことは、山の野生の樹木を伐り出しに行く人々が、山深くに自生する目指す樹木の由来について、山中で理不尽に死んだ女性の魂を宿し生えているものという神話的な解釈で捉えたものといえる。さらに付け加えれば、砂川が指摘した、樹木に死んだ女性の魂の再生をみるセジの理解は、琉球諸島に共通する文化の一面である。それは、「水仙起源神話」における「霊魂」が中国の道教を背景にしていると同様に、「セジ」は八重山

の信仰を背景にして生まれた表現である。両地域の文化的な背景の差異が反映している面もあるが、植物の由来譚という点では、よく似た構造で物語は展開している。

次に、八重山と宮古の対比から、死体植物化生の神話的要素の表現の違いについて考えてみたい。

八重山で、船材に適した樹木の伐採のために深山に分け入る人々にとっては、死体植物化生の神話は、山底によい樹木があるという自然の事象について、なぜそこに樹木が在るのかについて知ることを意味している。そして、本稿が八重山歌謡の表現の問題として注目することは、死体から植物が生じる物語の神話的展開が、抽象的に表現されているのではなく、具体的な樹木の像や、具体的な船体の構造名を伴って表現されていることである。一方、宮古側の人々にとっての死体植物化生の神話は、具体的な樹木で示されること無く、「きーゆうい（木が生え)」「シっさにゃーうい（白い根が生え)」というように、一般的に歌の中で用いられる植物の生長を表す用語を用いて、死体から樹木が生えたという抽象的な表現に留まっている。八重山と宮古の歌の表現には、八重山が具体的であるのに対して、宮古は抽象的であるという、差異が見受けられる。具体的な植物の由来譚という点においては、宮古の死体植物化生についての表現より、八重山の死体植物化生の表現のほうが、水仙起源説話と類似しているとみることができる。

最後に、八重山の死体植物化生と水仙起源説にみる死体植物化生の伝承の関係についても気になるところである。大林はエバーハルトの論述を紹介し、水仙の起源伝説の事例にみる不法な死に方をした少女の死体から、ある植物が発生した説話が、江南から広東にかけての地域のものの公算が大きい（大林　1973　p. 70）と指摘している。水仙の起源伝説の死体植物化生型の説話によく類似したモチーフが、「いきぬぶしじらば」とその類歌にみられるからと言って、直ちに、中国の江南・華南等の文化と八重山の文化の繋がりを云々することにはならないが、死体植物化生型の水仙起源伝説が、「中国福建省の閩中閩南一帯に広がっている」という点は、興味深い。なぜならば、琉球王国に中国から招かれ外交や航海の実務を手がけた職能集団といわれる「久米三十六姓」は、別称「閩人三十六姓」といわれている。「いきぬぶしじらば」とその類歌にみる死体植物化生型のモチーフの伝承に、これらの大陸からの人々が関係していたか、そうでないかについては、時代的考証他、さらに様々な考察を経なければ明らかにすることはできない。けれども、各時代の折々に、海を越えた直接・間接の

交わりが、南琉球になかったとは言い切れない。類似した展開を見せる死体植物化生のモチーフの伝承関係の有無を明らかにするのは、本稿の目的とも大きく異なる課題であり、ここでこれ以上には触れることはできないが、中国福建省の水仙の起源伝説と八重山の「いきぬぶしじらば」とその類歌との類似性を伝承の問題として捉えることは興味深い問題である。

表現の問題として、植物と表現の関係や、歌と説話の物語の展開における類似には、つぎのことが指摘できる。

事例に挙げた八重山の歌と福建省の伝説の素地には、自分たちの生活の空間に在って、そこだけにしかない植物の理由について知りたいとする、人間の思考の共通性がある。また、理不尽な求婚や、そこから逃走し、又は、悲嘆の末に死に至る女性の物語のモチーフについて言えば、どんな地域にもこうした出来事は、実際に起こった出来事として、一つ、二つ庶民の記憶に留められていそうな話題であろう。また、大樹と相対した時に、その場に霊性を感じ、又は、神聖なものとして樹木を祭る樹木信仰等は、人間の心性の反映であり、世界中に広く見られる。死体化生という神話的思考は、上記の各要素を繋いで物語をスムーズに展開する要となり、一つの歌や説話を構成する役目を果たしている。

山底という人里から離れた環境に自生する大樹と、歌唱者達の暮らす共同体に起こる理不尽な娘の物語が、死体化生という神話的な思考で結ばれる歌の世界の表現は、人間の普遍的な発想を基にしたものと思われる。ものの発生を解釈する死体化生の発想は、神話研究者達によって、世界各地に見出され認められ、広く共通して存在する人間の発想の一つである。従って、歌の類似性は、伝承関係を云々するより、どこにでも有り得る人間にとっての普遍的な思考を基に起こるものとしてと捉えることができる。八重山の「いきぬぶしじらば」とその類歌は、特定の在所に自生する植物と身近な日常に起こる物語のモチーフが、歌唱者達の神話的な発想によって結びつけられた表現の構造を持った歌である。アジアの一画にある八重山歌謡の歌唱者達が、そうした発想を抱いて歌に表現したとしても不思議はない。このように考えると、植物歌としての「いきぬぶしじらば」とその類歌は、人間の普遍的な思考を内包している歌と捉えることができる。

そして、「いきぬぶしじらば」とその類歌に謡われている船材に用いられる 3 種の大樹の中で、オキナワウラジロガシはどの歌にも共通して謡われている。「樫に木

（オキナワウラジロガシ)」は、琉球諸島の固有種とされている。歌唱者達が、「樫に木」を当地域の固有種として意識して選んだ訳ではないとしても、歌唱者達の山底に生える大樹に対する思い入れは、オキナワウラジロガシという固有の植物のたたずまいとの出会いを通して、普遍的な思考が引き出されたものである。そして、単なる普遍的な思考の表現ではなく、固有性をもった表現の側面となるために、植物の環境が一定の役割を果たしている。

６.「ゆびが夜(ゆ)ゆんぐどぅ」　－ ユウガオ・ヘチマ －

（1）「ゆびが夜(ゆ)ゆんぐどぅ」とその類歌

植物歌では、人の行動について、植物の特徴などを用いて言い表している。どのように植物の特徴を用いて人の行動を表しているか、歌の事例にみてゆきたい。

「しぶる（ユウガオ)」と「なべら（ヘチマ)」が、歌の中の登場人物の行動を表現する時に使われている。

＜表１＞

	歌謡名	テキスト語形	地域名	ジャンル	頁
1	ゆびが夜(ゆ)ゆんぐどぅ	しぶる／なべら	波照間島	ユングトゥ	152
2	ばがたろまじらば	しぶり	石垣島大浜村	ジラバ	214
3	ゆびが夜(ゆー)じらば	しぶる	波照間島	ジラバ	274
4	ばがたるまゆんた	ちぶる／なべら	石垣島白保村	ユンタ	383

「しぶる（ユウガオ)」と「なべら（ヘチマ)」が謡われている歌は、＜表１＞の 4 篇である。そのうち「ゆびが夜(ゆー)じらま」を除いた１･2・4 の歌は、「しぶる[48]」や「なべら」が生えている様子が、人のある行動を表すために用いられていることで共通している類歌である。「ゆびが夜(ゆー)じらま」の「しぶる」は、他の 3 篇とは異なる用い方がされている。「ゆびが夜(ゆー)じらま」では、「しぶる」は水を運ぶ為の水筒として、実用の道具に使われている様が謡われているものである。ここでは、この歌を除いた 3 編

[48] 『琉球列島植物方言集』によると、「しぶる」はトウガン（天野　1976 p.153）。「ちぶる」はユウガオ（前掲書 p.155）を指す。けれども、「ゆびが夜じらば」の「しぶる」は水入れとして使われている様子が謡われており、ユウガオの果実（ヒョウタン）と考えられる。『八重山古謡』に収載されている「ユビガ夜(ユー)ジラバ」（喜舎場 1970b p.586）には、「シブル水」の解釈として、「夕顔の大水筒」と訳されている。本稿では、テキストの「しぶる」「しぶり」「ちぶる」については、「ユウガオ」と解釈している。

について取り上げる。

（２）「ゆびが夜(ゆ)ゆんぐどぅ」の歌の内容

次の歌は、波照間島の「ゆびが夜(ゆ)ゆんぐどぅ」である。

「ゆびが夜(ゆ)ゆんぐどぅ」　波照間島　　p. 152

1	ゆびが夜(ゆ)や　なうちゃむいどぅヨーイ	昨夜は何を思って
	おうらなーだる	おいでにならなかったの？
2	いくだ夜や　いかちむいどぅ	去った夜は如何に思って
	おーらなーだる	おいでにならなかったの？
3	ゆびが夜や　雨(あみ)ぬふるんでどぅ	昨夜は雨が降ったので
	ふなだるヨーイ	来なかったよ
	いくだ夜や　風ぬすぎどぅ	去った夜は風吹いたので
	くなだるヨーイ	来なかったよ
	（中略）	
9	しぶるにし　ふくたどぅり	夕顔のようにでこぼこを辿って
	なべらしに　ましぃたどぅり　おれらば	へちまのように垣を辿っておい
		でになったら
	（以下略）	

この歌は、男女の問答の形式で謡われている。第 1〜2 節は、女性から男性に、夕べはどうして来てくれなかったのかと問いただすと、第 3 節では男性が、昨夜は雨風がひどかったので来なかったのだよ、といった具合である。第 4 節以降も前夜に訪れなかった男性の不実を問い詰める女性と、男性のその場しのぎの言い訳の問答が続く。その問答の中で、第 8 節には闇夜で石に躓いて来られなかったのだ、という男性の言い訳に対して、第 9 節で「しぶる（ユウガオ）」や「なべら（ヘチマ）」は石垣のでこぼこをたどって蔓を這わせている。植物の蔓のように凸凹した石垣を辿ってでもおいでになればよかったのに、と女性が言葉を返すのである。全編がどこにでもありそうな男女の会話の


石垣を伝うヘチマの蔓　波照間島

応酬だが、暗闇を手探りで石垣を伝ってでも尋ねてきて欲しかった女性の気持ちが表れていると同時に、石垣伝いにやってくる男性の姿をユウガオやヘチマの蔓の伸びる様子にイメージする表現は興味深い。

島の家々は、石灰岩の塊を積んでできた伝統的な石垣に囲まれている。ヘチマが石垣を辿って蔓を伸ばし、実を付けているところに実際出会うことがある。まるで歌に謡われたヘチマの景であるかのような光景である。別の石垣には、ヒハツやドラゴンフルーツなど様々な利用可能な植物が育ち、屋敷回りの土地利用の様子を知ることができる。この歌が謡い継がれて現在に至るまでには、島の生活は激変していると考えられる。けれども、島の生活には、変わったところも、変わらないところもあり、家の周りの石垣を伝ってヘチマが育つ風景は、ずっと変わらずに続いてきた島の風景の一つなのだろう。そうした日常の身の回りの植物との当たり前の関わりが、歌の表現にいかされていることが窺える。

（３）行動の心意を表現する植物の詞章

上記の事例の他にも、ユウガオやヘチマが謡われる歌がある。ユウガオやヘチマは、どこか気恥ずかしい気持ちを抱えた道中を表す時に選んで使われているようである。次の事例は、石垣島白保村と大浜村に伝わる歌の一節である。

「ばがたるまゆんた」　　石垣島白保村　　p. 383

（前略）

3	ちぶるてに	夕顔の蔓のように
	ぱいな〳〵	進みに進み
	ぱや行き	進み行き
4	なべらてに	ヘチマの蔓のように
	ゆりな〳〵	寄って寄って
	ゆり行き	寄って行き
5	いきやる家ぬ	行った家の
	ぱりやる家ぬ	行った家の
	そば行き	そばに行き
6	三味線引き	三味線を引き
	うたばゆみ	歌を詠み〈歌い〉

眺みより　　謡っている

（以下略）

「ばがたろまじらば」　石垣島大浜村　p. 214

（前略）

8　なべらてぃぬ　　へチマの蔓のように

はいなはいな　はりやいき　　這いに這い　這っていき

9　しぶりやてぃぬ　　ユウガオの蔓のように

ゆりなゆりな　ゆりやいき　　寄りに寄り　寄っていき

10　まいぐすく　　前垣

しんそーまぬ　ういから　　しんそーま〈石垣〉の上から

11　ぬびすらし　　頸を反らして

ふびすらし　みりばどぅ　　首を反らして見たら

（以下略）

両歌とも、思い焦がれている相手の様子をのぞき見るために忍んで出かける道中を謡っている。「ばがたるまゆんた」では、第3〜5節で女性との逢瀬に向かう男性の足取りを、ユウガオやへチマの蔓のように進んで、と謡っている。第6節以降は嫁ぎ先が決まった女性への、もはや手遅れの男性の恋の告白と、それを女性が上手になだめる男女の問答[49]が展開する。

ユウガオやへチマ他、一般的に生長期の蔓の先端の様は、急に長さを伸ばし、伸びる先を探りながら蔓の先が定まらない。その動きは、人が頸を伸ばしてきょろきょろ周囲を見回す様な動きと言われてみれば確かに似ている。歌がユウガオやへチマの蔓の伸びる様で、覗き見や伝い歩きを表現しているのは、日々に出会う植物の細かい観察から得ている言葉だとわかる。そして、石垣に添って生育を進める蔓の様は、目指

---

[49] 八重山歌謡には、こうした男女の場面で、気持ちをなだめるための慣用句のような表現がある。以下は その事例である。

「ばがたるまゆんた」石垣島白保村　p. 383

13　いかぬ手に　十手迄　待ちおーり　　烏賊(いか)の手が（十本あるように)十年間待ってください

14「たくぬ手に　八手迄　待ちおーり　　蛸の手が（八本あるように）八年間待ってください

す家の周囲を石垣に添って歩みを進める歌の主人公の状況をよく表現する。

「ばがたるまゆんた」で引用は省略した第 1〜2 節の詞章から判断すると、男性が逢いに向かう女性は、「みしゃる家ぬ　為ばし（よい家の為をして)」という詞章から、すでに家の意向で相手の決まっている娘のようである。明治期以前の八重山の婚姻の形態については、『八重山生活誌』(宮城　1972)に大正期までの士族の婚姻についての記述がある。宮城によると、当時の士族の縁組みは、親同士が取り決め、とくに娘には、相手が誰であるか等は一切伝えられなかった（前掲書 p.345）という。また、結婚の適齢期は、古くは女性は「十三祝い」を過ぎた頃で、男性が 15 歳過ぎた頃であり、明治 35 年以降になっては、女は 15 歳、男は 17 歳と定められていた(前掲書 p.347)とある。特に士族の場合、あらかじめ親同士が決めた相手と歳頃になった時に結婚するという習俗が普通であり、婚姻前の娘が男性と会うことは世間体として堅く禁じられ、仮に密会等の行いはとりわけ女性に厳しく、悪評を招いた（前掲書 p.346 ）とも伝えている。

「ばがたるまゆんた」の内容をこうした社会背景の中でみると、植物歌には、もうあしびや夜這いの習俗とされる庶民のおおらかな男女の情愛を思わせる歌も多くある一方で、身分ある生まれであればあるほど、人目を避けた逢瀬の様を謡う対比的な歌である。この歌の中の「ユウガオやヘチマの蔓のように」とは、忍ぶ出会いの心理と様子を言い表す時に好んで使われる言葉にもとれる。

続く事例の「ばがたろまじらば」も、男女の密会をモチーフに扱った歌である。色香のある娘の覗き見する動きを、「ユウガオやヘチマの蔓のように」と謡っている。上記の事例 2 篇では、人目を避ける行動の意図は、厳密にいえば異なってはいる。とはいえ、いずれも、男女の密会のモチーフに関連があり、石垣の壁に添うヘチマやユウガオの様が、どこか決まりの悪い行動の様子の具象の表現となっている。冒頭の事例の波照間島の「ゆびが夜(ゆ)ゆんぐどぅ」でも、男性が女性を訪ねる際の行動の様の表現に使われていた。どんなごつごつした石垣でも辿って伸びていく植物の蔓と、色々と理由をつけて来ない男性との対比が、その意を物語る。恋人同士の男女の問答では、「ヘチマやユウガオの蔓のように石垣をたどって」には、夜目がきかないのならば、手探りででも訪れて欲しかったと思う女性の心持ちと、来なかった男性への揶揄の意も籠もって感じられる。

そのように解するのは、この歌が、「ゆんぐどぅ」だからである。「ゆんぐどぅ」に

は、人前で演じる歌という「場」の性質が反映する。それを考慮するならば、男女の何処にでもありそうな応酬にも、どこかにおかしみの要素が加えられていてよいはずである。「ゆびが夜(ゆ)ゆんぐどぅ」は、全編がよくある男女の痴話喧嘩的なモチーフを問答の形式で展開する歌なので、それだけでも面白みがあるが、「ヘチマやユウガオの蔓のように石垣をたどって」という詞章は、必死で女性の下に訪れる男性をヘチマやユウガオに例える女性の感情も、聞き手のおかしみを誘う表現である。

いずれにしても、歌唱者達は、人目を避ける密会に向かう行動の様をおかしみと共に、日常的にみる石垣に蔓を這わして生長するヘチマやユウガオの姿に重ねみて謡っていたと考える。

7．「やらぶ種あゆう」－ テリハボクの種子 －

（1）「やらぶ種あゆう」

娘を他家に嫁がせる親の心に様々な思いがよぎるのは、古今東西に共通する感情である。そうした親の思いを、娘に伝える歌が八重山歌謡にはある。その親の思いを伝える表現のために選ばれている植物が「やらぶ」である。



テリハボクと種子

「やらぶ」は和名でテリハボクのことである。テリハボクは、琉球諸島各地に自生しており、海岸には「やらぶ」の防風林も見かけることがある。また、現在では、町中の街路樹などにも多く見られる。テリハボクは、白い花の後に写真に見るようなまん丸い果実を数多く結ぶ。直径 2cm ほどの比較的大きな実である。そして、街路樹などでも、熟して果皮が剥げたたくさんの丸い種子が親木の根元を埋め尽くしているのを見ることができる。

＜表１＞は、テキスト中で詞章に「やらぶ（テリハボク）」を含む歌である。

＜表１＞

	歌謡名	テキスト語形	地域名	ジャンル	頁
1	世果報(よがほ)（豊年）	やらぶ（ばだす）	石垣島大川村	ユングトゥ	126
2	網取(あんとうりい)ゆんぐどぅ	やらぶ（皿）	西表島網取村	ユングトゥ	139
3	やらぶ種子あゆう	やらぶ（種子）	黒島	アヨー	181
4	うふな星	やらぶ（種子）	黒島	ユンタ	443

4 篇の歌にみる「やらぶ」がどのような内容で謡われているか分類すると、3 種のモチーフがある。上記の「世果報（豊年)」と「網取りゆんぐどぅ」の 2 篇は、収穫後の豊年の祝いを謡っている。その詞章中に、「やらぶ」の名があがるが、祭りの供物や神酒の容器の用材名となっている。「うふな星」は島の主要な作物名を上げて、その豊穣を謡った歌である。その中でアワの豊かに稔った様子を「やらぶ」の種子に例えて謡っている。そして、残りの 1 篇の「やらぶ種子あゆう」では、娘を嫁に送り出すときの親の思いを表すために「やらぶ種子」が用いられて謡われている。本稿の考察の中心はこの「やらぶ種子あゆう」の歌だが、その他のモチーフについて、簡単に書き添えておく。

以下の引用は、「網取ゆんぐどぅ」の「やらぶ」を含む詞章である。

「網取ゆんぐどぅ」　　西表島網取村　　p. 139

（前略）

9	親がなし　かんがなし　ちぃかいし	親加那志を　神加那志をご招待して
10	台ぬ皿　やらぶ皿ゆ　出だしょうり	台の皿　ヤラブ＜樹木名テリハボク＞の皿を出しなさり
11	上かいむち　下かいむち　うやいしょうる	上に持ち　下に持ちおあがりになる
12	んまんまとぅ かばかばとぅ うやいしょうる	うまうまと香ば香ばと召しあがる

（以下略）

引用部は、網取村に伝わっていた豊年祭の行事の様子を謡った歌である。その中で、神を迎え神酒を特別な酒器に注いでいただく、祝いの所作の様子を謡った詞章である。石垣島大川村の「世果報（豊年)」にも同様に「やらぶ」製の「ばだす」という酒器に神酒を注いで祝う様が謡われている。

テリハボクについては、『図鑑琉球列島有用樹木誌』（天野 1898）に「テリハボクの材は、高級用材として指物・挽物に用い琉球紫檀の名がある」（前掲書 p. 216）と紹介されているが、歌の詞章に用いられている「やらぶばたす」は、供物の神酒を入れる為の、注ぎ口の付いた木製の器のことである。「やらぶ皿」も、祝の席の神酒を

盛る器である[50]。そして、「やらぶ」が古い時代から暮らしに役立つ有用植物であったこと[51]も歌は伝えている。

もう 1 篇の「うふな星」に謡われている「やらぶ種子」は、よく稔ったアワを表すために用いられている。

「うふな星」　黒島　　p. 443

（前略）

4　粟作り　見りばど　　粟を作ってみたら
粟の実りや　やらぶ種子とん　　粟の稔りはヤラブの種と
例いらり　　たとえられ
（以下略）

「やらぶ種子」の粒は、直径２cm ほどもあり、アワの粒とは比較にならないほど大きく、まん丸である。それだけに、粟が豊かに実るようにという強い思いが、誇張された象徴的な表現を生んできたのだろう。

いずれにしても、「やらぶ」や「やらぶ種子」が、実用面の利用や、また、文化面の思考にも、島の暮らしの身近に意識されている植物であるということが、これらの歌を通して窺える。

（２）「やらぶ種子あゆう」の内容

「やらぶ」を詞章に含む 4 篇のうち、本稿が注目する思いを表す具象として謡われている「やらぶ種子」が、「やらぶ種子あゆう」の中に登場する。

「やらぶ種あゆう」　黒島　p. 181

1　やらぶ種子にん　転び来　一人子　　テリハボク<植物名>の種子のように転がって

[50]「やらぶばたす」「つのざら」等祝儀、儀礼に使われる器の写真が『八重山生活誌』(宮城 1970　p.44)に収められている。また、酒器の解説は「第 3 編　第 5 章　種類」（前掲書 p. 263）に詳しい。

[51]「やらぶ」について、「翁長親方八重山島規模帳」の布達（石垣市総務部市史編集室　1994 p. 72）によると、次の様なことが記されている。「櫨紫椿とヤラブ木を屋敷内に場所を見立てて植え、油・ろうや髪油を製造すれば、島中が便利になるので、今後は手広く植付け、それぞれ製油に念を入れ使用分を調達できるよう取り計らうこと。」とある。布達が島の人々によって何処まで実行されたかは定かでないが、王府の諸物の育成に関する条項にも取りあげられ、様々な有用性が認められていた植物ということがわかる。

きなさい　一人っ子よ

2　転び種子にん　廻り来　一人子　　転がる種子のように廻って来なさい　一人子よ

3　さいやまにん　廻り来　肝の子　　サイヤマ〈糸車〉のように廻って来なさい　肝の子よ

4　巻ふだにん　まき来　産の子　　巻き札〈紙〉のように巻いてきなさい　（私の）生みの子よ

5　笠のはうにん　廻り来　一人子　　笠の縁のように廻って来なさい　一人っ子よ

6　廻り見にん　巻き来　一人子　　巻き貝のように巻いて来なさい　一人っ子よ

上記は、6 節からなる列挙形式の歌である。列挙された事項に共通するのは、詞章の中に繰り返されている「まわってきなさい」という意味の動詞の命令形である。冒頭部の第 1〜2 節は、このテリハボクの種子が転がるところを謡うことから始まっている。第 3 節以降も糸車、巻き札、笠の縁、巻貝というように、取り上げられたものは、みな球や丸い円の形で共通している。そして、ぐるりと一回りする動線をもっているものである。「転び来」「廻り来」「まき来」「巻き来」と、様々な言葉は用いられているが、いずれも、「ぐるりと廻ってくる」という意を表すことで共通している。この「ぐるりと廻ってくる」が各節に反復され、各節の主題となる動作を意味している。前項までにも述べてきたように、植物歌の列挙形式は、同じ主題を、様々な具体的ものやことによって、幾通りにも表し反復する表現様式である。この歌では、「ぐるりと廻ってくる」という行動を、様々な丸い物の例示を用いて具体的に表している。そして、各節に、「一人子」「肝の子」「産の子」と何度も子供に謡いかけているのも特徴的である。子供に対して様々に呼びかけている思いが、「ぐるりと廻ってきなさい」という語に表出されている。

（3）歌の心意と「場」と表現様式

この歌が謡われる「場」は、結婚の際に謡われる「婚礼の儀礼歌」とされている[52]。嫁ぐ娘に対して、送り出す親の心持ちとして、嫁いだ後も親の家にも廻ってきなさいとの意を含んで謡われていると解釈できる。様々な立場の思いが錯綜する婚姻の席だが、嫁に出す親の立場からの歌として、「場」の特殊性を詞章に反映している内容の

[52]（波照間監修　2012b　解説　p. 27）

歌である。

嫁ぐ娘に対して思う親の本心は共通していても、口をついてでる言葉や教訓は、それぞれの家柄、土地柄、文化、宗教などによる違いがある。例えば、本土ならば「嫁いだからには、実家の敷居を二度とまたがせない」や「女三界に家無し」などの教訓や故事などがある。古い時代の儒教的家族制度や仏教の世界観などを背景にして、現代では、全く意味をなさない傾向にあるものだが、ある時代なりの結婚観と送り出す親と娘の覚悟を促す贈る言葉と考えれば、本音と建前の錯綜する親心の一面を表現しているといえる。それらと対比してみると、八重山の黒島で嫁ぐ娘に贈る歌である「やらぶ種あゆう」は、生み育てた親元も忘れないでいるのだよ、という子供を手放す親の本音の気持ちを率直に表明している。

この歌の表現の特徴は、育ての親も忘れないでいて欲しいという親心を、廻ってくるようにという表現に託し、「廻る」という抽象的な概念を表すために、丸くてころころ廻るテリハボクの種子を始めとして、廻るものを選んで具象として用いている。その際、具象の冒頭では、植物の「やらぶ」が謡われ、そして「もの」へと転じてゆく。同じ意味内容をもった様々な具体的な事柄を、＜植物＞→＜もの＞の順に連ねる形式に則った列挙によって、主題を反復する表現様式は、先述した「山樫木あゆー」と同じ構造である。1 つの主題、又は観念を、その本質を同じくする具体物を幾つも例示し、幾通りもの表現を可能にする。植物歌に見られる抽象的な概念の具象的表現の構造のもとに、身の回りのものへの自由な発想による表現の工夫が示されている。「やらぶ種あゆう」の場合には、歌の冒頭に選ばれたのが、丸い形状のテリハボクの種子である。八重山歌謡の歌唱者達は、植物を取り上げる際にも、一つの植物の生態・色彩・形状他、様々な側面の中から、歌の心意に適した側面を取り出して用いる。この歌からも、植物の様々な面をよくみている歌唱者達の観察の細やかさを窺い知ることができる。

8．「南さこだじらば」　－　ハマユウ・バショウ・クロツグ　－

（1）「南さこだじらば」

植物歌には、人間の身分や個性を表す際に、植物を具象として表現に用いている歌がある。はじめに取り上げるのは、「美しい生まれ」と表現される人の出自の良さが、植物の色彩の「白さ」で表現されているものである。歌唱者達が、どのような植物を

用いて、人間の身分や個性を表現しているか、事例を通して考察したい。

＜表１＞

	歌謡名	テキスト語形	地域名	ジャンル	頁
1	南さこだじらば	はまさき	小浜島	ジラバ	249
2	ばそーやびちじらば	ばそー／まーに（やびち）	石垣島大浜村	ジラバ	220
3	いんだれゆんた	芭蕉（ばそう）／まーに（ふきぃ）	石垣島石垣村	ユンタ	336

歌唱者達が生まれの美しさを「白さ」という観念で捉え、その「白さ」のイメージをあらわす素材に幾つかの植物を選んでいる。それらの植物が、「はまさき（ハマユウ)」「ばそう(バショウ)」「まーに（クロツグ)」である。

「はまさき（ハマユウ)」は、海岸線の砂地に自生する植物である。波状に波打つ長い葉が砂地を這うように広がっている。また、花壇に植栽されているハマユウを市街地でも見ることがある。花の咲く時期になると、太い花径が 5～60cm 立ち上がった先に、たくさんの花を付ける。花は、白くて細い花弁が反り返る様にして咲き、やがて花の根元が脹らんで種が出来る。自生地の浜辺では、砂浜に落ちた種から根が出ている種子をしばしば見かける。テキストにはハマユウが登場する歌が 2 篇あるが、ここで取り上げるのは、＜表１＞に記した小浜島の「南さこだじらば」である。他の 1 篇の歌には、頭に物を乗せる際に使う用具の材という実用面でのハマユウの利用が謡われている。

「ばそう（バショウ)」は、テキストの 9 篇の歌にみられるが、人の生まれの「美しさ」を象徴する「白さ」を謡う素材として用いられているのは 2 篇であり、ここでは＜表１＞の 2 篇の歌を考察の対象とする。テキストには、「ばそーふきぃ」「ばそーやびち」と謡われているが、「ふきぃ」は茎のこと、「やびち」は新芽である。歌にはバショウの茎の白さ、新芽の柔らかさが謡われている。

2 篇以外のバショウを含む歌では、厄払いの目的で獅子舞が行われる祭祀儀礼の際の歌の中で、獅子の住む「ばそー山(バショウの山)」と謡われていているものと、バショウの繊維から綱を作るとうたわれているもの、そして、山に入ってバショウの葉を採取することが謡われているもの等である。バショウはこの他に、奄美の歌謡の「芭蕉ナガレ」（田畑 他 1979　pp.196-202）で知られているように、芭蕉布を織る糸を取る植物である。ただし、王府時代に御用布であった「八重山上布」を織る素材は、苧麻(カラムシ)の繊維を績んだものであり、八重山の布織りに関連する歌とバショウの関係は薄い。

「まーに（クロツグ)」は、テキストには 8 篇の歌に謡われている。人の生まれの「美しさ」を象徴する「柔らかさ」を謡う表現の素材として用いられている「まーにぬふきぃ」「まーにやびち」は、そのうちの 2 篇である。その他は、クロツグとサトイモの色の類似によって心が１つという抽象的な観念を具象する対句に用いられているものと、残り５篇については、建築材や、船を引く縄の材料につかわれた「まーに」を謡ったもの、女性の体の形象に用いている歌等がある。

（2）「南さこだじらま」の歌の内容


ハマユウ

八重山の植物歌は、人の生まれの「美しさ」を、「白さ」という概念で表現する。その「白さ」のイメージの具体的素材となるのが、上記に述べた植物である。「南さこだじらま」の中で、「はまさき」（ハマユウ）が謡われている詞章が下記の引用部である。

「南さこだじらま」　小浜島　　p. 249

1	ぱいさこだ	パイサコダ<地名>の
	むむすりぬ	ムムスリ<山名>の
	しからさ	寂しいことよ
2	まりるかい	生まれる甲斐ある
	古見浦（くんのら）に	古見（こみ）の村に
	生れらば	生まれてあれば
3	しでぃるかい	生まれる甲斐ある
	みゆすくに	美与底＜地名＞に
	しでぃらば	生まれてあれば
4	古見ぬ主ぬ	古見の村の主の
	まかないゆ	賄（まかない）女に
	なれらば	なってあれば
	（中略）	
13	はまさきぶ	浜木綿のような
	さびしかぬ	まっ白い

	生りやだそ	生まれであったよ
14	いかぬさやぬ	烏賊の鞘<甲>のような
	さびしかぬ	まっ白い
	しでぃやだそ	生まれであったよ

歌の全体の内容は、第 1 節で辺鄙な村に生まれた身を嘆き、第 2 節～4 節までは、「古見／美与底」に生まれていれば役人の賄女になれたのに、と現実をなげく詞章に始まる。続く第 12 節までは、娘にとって「生まれた甲斐もない」不本意な現実を述べたて、最後の 2 節で、生まれは「真白な」生まれであったのに、と本来の我が身と現実の不遇を悲嘆する。

ここで問題なのは、「真っ白い生まれ」が、どのような意味を指すのかということである。娘が本来の「我が身」の生まれを述べるのが、第 13 節と第 14 節の「はまさきぶ　さびしかぬ（ハマユウのような　真っ白な)」、「いかぬさやぬ　さびしかぬ（烏賊の鞘＜甲＞のような　真っ白な)」の対句である。「ハマユウ」や「烏賊の甲」は、その「白さ」という理由で用いられている。甲を持つ烏賊はコウイカの類だが、コウイカの甲は、炭酸カルシウムの白い板状の塊のことで、浜辺に打ち上げられているのを見ることがある。そして、ハマユウ(別名ハマオモト)は花も白いが、葉の付け根は幾重にも重なり太い茎の状態（偽茎）で白い。『南島の自然誌』（山田　2012 p. 254）によると、鳩間島では、種取祭の行事の際には、この茎を割り、飯初（イバツ）を乗せるために使うとある。ハマユウは、こうした実用に使う機会のあることからも、ハマユウの白さは誰もが認識していたと思われる。そして、この歌の詞章の流れに沿って考えれば、「生まれが美しい」という出自の良さを、具象的に表現する言葉がハマユウの「白さ」である。事例の歌の詞章に添って意味を追っていくと、「真っ白い生まれ」という詞章にみるように、歌唱者達の社会の約束事として、「白さ」が「美しさ」や「清らかさ」をイメージさせる言葉としてある。そうした社会的な共感のもとに、ハマユウや烏賊の甲等「白い」ものによって「生まれの美しさ」が表現されている。

次の歌も、美しさの表現として、「白」又は「白」と関連する植物を具象に用いて謡っている。

「いんだれゆんた」　石垣島石垣村　　p. 336

1	ざらごう森（むりい）　いんだれ	ザラゴウ森のインダレ〈男の名〉
	うやきやぬ　いんだれがま	富裕家のインダレ
2	いんだれぬ　生（ま）りや	インダレの生まれは
	芭蕉（ばそう）ぬふきぃ　白（しる）さ生り	芭蕉の茎ような白い生まれ
3	烏賊（いか）ぬさやぬ　白るさ産（しい）で	烏賊の甲羅のような白い生まれで
	まーにぬ茎（ふさい）ぬ　やふぁらさ生（ま）れ	黒次（くろつぐ）の茎のような柔らかい生まれで
	（以下略）	

上記の事例で、「白い生まれ」と言われているのは「富裕な家」の男子である。第3節に続く、省略した第4節から最終節の第7節迄には、着物を着ても、帯を締めても、字を書かせても美しいと、インダレを誉めたたえる内容が続く。着物や帯、そして、文字を書くという列挙された事柄からも、身分のある家の者を歌っていることがわかる。この歌でも「白い生まれ」とは、身分の高い家（役人）の生まれという人間の出自を意味していると解することが順当である。そして、先述の美しさを意味する「白」が、ここでは「身分の高い」の意味も加わって、「芭蕉の茎」や「烏賊の甲羅」を具体物として表現に用いている。この場合、「芭蕉の茎」と「烏賊の甲羅」の間に特別な関係を認めがたいので、素直に「白」を連想する具体物として手近なものの中から選んだ言葉であろうと考える。ここでいう「芭蕉の茎」とは、茎の芯が白いという意味である。芭蕉の茎は、芯に近いほど白く柔らかい繊維が採れ、上等な布を織るために使う糸が採れる部分である。白い植物は他にもあると思われるにも関わらず、「ハマユウ」も「芭蕉」も歌唱者達が目を付けた所は、植物の茎の白さという類似性がある。いずれも、生活に活かされている植物の細部が取り上げられているのは興味深いことである。

「白さ」は、先述した「南さこだじらま」「ぱいさきよだじらば」では主人公の女性の美しさを表していたが、「いんだれゆんた」では、男性の美しさに対して使われている。八重山歌謡において、女性・男性共に「美しさ」の誉め言葉は、「白さ」という表現が1つの要素となっている。

けれども、「生まれ」の良さへの誉め言葉は「白さ」だけではない。「いんだれゆんた」の第3節では、「黒ツグの茎のような柔らかい生まれ」の「柔らかい」という意

味の具象が加わっている。クロツグの事例をもう1篇取り上げておきたい。

「ばそーやびちじらば」　石垣島大浜村　p. 220

1　ばそーやびち　しるさ生(ま)りばし	芭蕉の新芽は（色）白い生まれをし
ヨーンホ（囃子　以下略）	ヨーンホ
2　まーにーやびち　やふわさまりばし	マーニ＜黒ツグ＞の新芽は柔らかい生まれをし
3　主ぬ子や　主にどぅにしやまりし	主＜役人様＞の子は主に似た生まれをして
4　親ぬ子や　親にどぅにしやまりし	親＜役人様＞の子は親に似た生まれをして

この歌の内容は、芭蕉の新芽は色白く、クロツグの新芽は柔らかいように、役人様の子供は、親と同じように色白で、(肌触りが）柔らかであるよ、と謡っている。

全4節だけの短い歌は、2組の対句で構成されている。前の第１・2節ではバショウとクロツグの 2 種の植物が、「白い生まれ」と「柔らかい生まれ」という観念を表現する具体物である。前半2節の植物を具象とした「白い生まれ」と「柔らかい生まれ」は、後半の2節の役人の子供を表象する言葉である。百姓と役人の対比がこの歌の背景にあるとすると、「白い」と「やわらかい」という言葉は、役人の家の生まれを象徴する表現ともいえる。

ここに取り上げた 4 篇の歌の事例は、何れも人の出自について「白い生まれ」「柔らかい生まれ」という表現を用いた詞章を含んでいる。「白い生まれ」は、男女問わず、育ちの良さや身分の良さを象徴する表現であり、それらの具体物には、「白い」特性を持つ植物やものが当てられていた。ハマユウやバショウの茎の芯であり、烏賊の甲である。また「柔らかい生まれ」を表現する具体物にはクロツグの新芽が選ばれている。

（3）歌の背景

小浜島の「南さこだじらば」では、出自の不遇を嘆く女性が主人公であった。これに対して、波照間島の「ぱいさきよだじらば」は、冒頭部のモチーフが「南さこだじらば」とほぼ類似している。波照間島の「ぱいさきよだじらば」は、2 種のモチーフで構成された歌である。前半分は「南さこだじらば」と同様の出自の不遇を嘆く女性のモチーフで、後半には「死体化生」と造船のモチーフが結合している。二つの歌の

冒頭部のモチーフを比べてみると、呼応するような物語の展開がみられるので、ここに挙げておきたい。

「ぱいさきよだじらば」　　波照間島　　p. 277

	カンザラー	カンザラー
1	ぱいさきよだ	パイサキヨダ〈地名〉
	むむすでぃぬ	百生まれの
	しかさま	シカサマ〈女名〉
2	生(ま)りかいしゃ	生まれが美しく
	産(しいでい)　かいしゃ	孵で〈生まれ〉が美しく
	生りやぶり	生まれており
3	古見ぬ主ぬ	古見(こみ)の主(しゅ)の
	みやらび 妻(とうじい)	乙女妻に
	なりやぶてぃよ	なっていて
4	原(ばら)ぬ主ぬ	村(むら)の主(しゅ)の
	ゆばいゆみ	夜這い〈妾〉嫁に
	なりやぶりて	なっていて
	（以下略）	

波照間島の「ぱいさきよだじらば」では、「シカサマ」という「美しい生まれ」の女性が、古見の役人の「ゆばいゆみ（夜這い嫁）」になってというのが、主人公の女性についての冒頭のモチーフである。小浜島の「南さこだじらま」の冒頭部では、名も無い女性として登場する主人公の女性は、最終節では独白のように、生まれは美しかった自分が、古見の村に生まれていれば、古見の役人の「まかない（賄女）」にもなれたものを、と嘆いた。不遇を嘆く無名の女性に対して、波照間島の「ぱいさきよだじらば」の主人公「シカサマ」とは、対局の立場にある。「シカサマ」は、美しく生まれ、古見の役人の妾になることを実現した女性の物語を展開する。これらは歌の世界のことである。両歌は、特定の実名を持った女性がいたというよりも、片方に賄い女の身分を得た女性がおり、もう一方に、望んでも賄い女になれない女性がいる「賄い女」という共同体の社会事情を巡って、表裏の関係にある歌である。両歌を対

比すると、「はまさきぶ　さびしかぬ　生りやだそ（ハマユウのような　真っ白な生まれであったよ）」と「生(まり)かいしゃ　産(しいでい)かいしゃ　生りやぶり（うまれが美しく孵で〈生まれが〉美しく　生まれており）」とは同じ意味と考えられる。「美しい」が「真っ白い」と同義語となり、その白を表現するための具象が「ハマユウ」と「烏賊の甲」といえる。ハマユウや烏賊の甲の「白い」は、ここでは「美しい」の表現でもある。「南さこだじらま」（小浜島）の最後の 2 節にみる「白かったのに」という表現は、「生まれは美しかった」と納得する多くの無名の女性の心情を象徴している。また、「生まれ」の美しさを「白さ」で表現する発想は、「役人の身分」の特別さも、同じく「白さ」で表現している。

さらに、「ぱいさきよだじらば」の「シカサマ」は、古見の主の「夜這い嫁」になったが、その後半の物語は、「シカサマ」の山の中の死と、その死体から生えた樹木で船が造られるという「死体植物化生」の話と結び着いて展開する。後半のモチーフに関しては、「死体化生」の項を参照いただきたい。

以上に取り上げた歌における「美しさ」「生まれの良さ」の内容は、単に容姿の良い女性や男性を指す意味ではなく、「賄い女」を巡る女性達の立場や役人の身分への憧れ等、共同体の社会的な価値を反映している表現である。そして、その「美しさ」「生まれの良さ」という抽象的な価値の表現を、八重山の共同体では「白さ」や「柔らかさ」という概念で共有し、その概念を「ハマユウ」「バショウ」「クロツグ」の植物の茎の白さを具象として用い、「白さ」「柔らかさ」の像としているのである。

（4）「島廻りじらば」にみる類似表現

次いで、島々の女性の個性を、形状や色彩他の植物の特性を用いて多面的に表現しているものを取り上げたい。事例は、島々の女性の品定めをする歌の中にある。

囃子などの違いを除けば、ほぼ同じ詞章が、黒島と竹富島の歌に伝承されている。ここに取り上げたのは、黒島の歌である。

「島廻りじらば」　　黒島　　p. 263

1	ヒヤンザ竹富(たきどんぬ)の　ぎらいち　ヨホ	ヒヤンザ竹富島のギライチ＜女名＞
	なかだきぬ　乙女(みやらび)ヨ	仲嵩(なかだけ)の乙女
2	ぎらいちの(ぬ)　生(うま)りや　ヨホ	ギライチの生まれは
	乙女(みやらびぬ)の　う産やヨ	乙女の生まれは

3	私ぷらし　生ばしヨホ	私を惚れさせる生まれであり
	とぬぷらし　う産ばしヨ	殿を惚れさせる生まれであり
4	ヒヤンザ黒島の　かまどま　ヨホ	ヒヤンザ黒島のカマドマ〈女名〉
	さふ島の　乙女ヨ	サフ〈黒島の異称〉の乙女
5	かまどまぬ　生りや　ヨホ	カマドマの生まれは
	乙女の　う産やヨ	乙女のお生まれは
6	竹床　生ばし　ヨホ	竹床のような生まれであり
	うふ平　生ばしヨ	うふなだば〈未詳〉[53]の生まれであり
7	ヒヤンザ新城なは　ぬしきやま　ヨホ	ヒヤンザ新城島の中のヌシキヤマ〈女名〉
	下地なは　乙女ヨ	下地島の中の乙女
8	ぬしきやまの　生りや　ヨホ	ヌシキヤマの生まれは
	乙女の　う産やヨ	乙女の生まれは
9	池の水　生ば(し)	池の水のような生まれであり
	青だまり　う産ばしヨ	青溜まりの生まれであり
10	ヒヤンザ波照間の　いちやまに　ヨホ	ヒヤンザ波照間島のイチヤマニ〈女名〉
11	下八重山の　乙女ヨ	下八重山の乙女
	いちやまにの　生りや　ヨホ	イチヤマニの生まれは
12	乙女の　う産やヨ	乙女の生まれは
	くにぶ玉　生ばし　ヨ	九年母のような生まれであり
	貫目美　う産ば　しヨ	貫いて美しい生まれであり
	（以下略）	

*類歌「竹富ぬぎらいちぇーまゆんた」黒島 p. 444

上記の歌は、「ヒヤンザ」の囃子で始まる 3 節を 1 組とし、村・島の女性の特徴を評している。冒頭部は、竹富島のギライチという女性は「私」／「殿」を「惚れさせる」女性だ、と歌い出す。竹富の女性に対しては、第 4 節以降の詞章で、他の島々の女性に対して述べているようなものによる具体的な表現による女性評はない。

[53] 竹富島の「竹富ぬぎらいちぇーま＜ゆんた＞」（テキスト p. 441）の詞章には、「うぶなだが　産でぃばし」と記され、「同じ高さの生まれをして」と訳されている。

歌に評されているのは、竹富島、黒島、新城島、波照間島、古見村(西表島)、小浜島、西表島の7カ所の女性達である。以下に記したのは、島の女性評に用いられた具象の表現を抜き出したものである。

黒島	竹の床のよう／うふ平(なだば)(未詳)
新城島	池の水のよう／青溜まり
波照間島	九年母のよう／貫いて美しい
古見村	割れた薪のよう／縛られない
小浜島	黍の茎のよう／だらりだらり
西表島	焼けソテツ／黒こげ

それぞれ対語が成立していて、新城島を除いて、対素の一つに植物が用いられている。対語で歌われていることによって、意味がわかりやすくなっているものもある。例えば、「黍の茎のよう」は、「だらりだらり」という擬態語を加えて評されている。「焼けソテツ」は、「黒こげ」と言い直して、色が黒い女性という評価を加えていると解釈できる。肯定的な評価より、否定的な評価の印象をうけるが、はっきりしないものもある。黒島の「タケの床のよう」の対句となる「うふ平(なだば)」はテキストの訳にも未詳語とあり、どのような女性のことなのか不明である。一般的に「タケを割った様な性格」というときには、さっぱりして曲がったことができない性格を意味する。けれども、歌の表現は「タケの床のような」である。機能的に考えると、風通しが良いとか、しなやかで柔軟性がある等だが、どのような女性評なのかよくわからない。また、古見村の女性評が「割れた薪のよう」という評についても同様である。

上記のような内容を表現するために歌に用いられている植物は、九年母、キビ、ソテツ、タケである。九年母は、歌謡の世界にしばしば出現する。庭木や頸飾り等では、その果実の香りにも注目されて謡われている。キビは作物であるし、ソテツも救荒作物であることや、葉は農耕に利用され、葉を編んで作る虫かごのような玩具も伝わっている。また、床材のタケ、薪も実用材として生活に利用されている植物である。

この項で取り上げた歌についてまとめると、植物が、人の持っている社会的価値や個性を表現するために、用いられていることがわかる。「南さこだじらま」「いんだれゆんた」等では、人の出自の良さや身分の高さを表す時に、「白さ」「柔らかさ」と表現し、その具象にハマユウやバショウ、クロツグが選ばれている。いずれも、植物の茎の白さ、やわらかさで共通性がある。八重山の共同体において、「白さ」が社会的

な出自の良さや身分の高さと言う価値を象徴することがわかる。また、「島廻りじらば」では、女性の月旦評に多くの植物が取り挙げられ、島々の女性の個性の表現に一役かっている。女性の品定めの歌が謡い継がれるには、その評価に共感する共同体の価値が成立している。そのため女性の月旦評も、ある種の社会的価値の反映と見ることもできる。そうした価値の表現に、竹や九年母、黍、ソテツなど身近な植物とその利用形態も含めた植物の特徴の具体性を取り上げることにより、それぞれの島の女性の個性のイメージをつくりあげている。

９.「たらまんにゆんぐとぅ」　－　アダン・モンパノキ　－

（1）「たらまんにゆんぐとぅ」

植物の情景描写が、主人公の境遇や心理を表現する場合がある。次の植物歌の事例に、どの植物の情景が、どのような境遇や心理を表しているかを見てゆきたい。

八重山歌謡には、継子を主人公にした歌が数篇ある。ここに挙げる「たらまんにゆんぐとぅ」の事例も、継子が歌の主人公である。この歌の情景描写には「あだん（アダン)」と「そうぎ木（モンパノキ)」が謡われている。アダンやモンパノキは琉球諸島の海浜でしばしば見ることのできる亜高木である。


アダン(右)



アダンは海浜に面して多く自生し、樹形やその実も特徴的な形態をしている。枝は多数の支柱根が絡み、自然の防風林や防潮林の役目を果たしている。アダンの実は遠目から見ると大きなパイナップルのような形状と色彩をしているが、堅い種子があつまってできたものである。ヤシガニの好物ともいわれている。アダン葉の両脇と裏側に鋭い棘があり、扱いには注意が必要である。けれども、この葉は、茹でるなどの処理の後、敷物、手提げ、玩具等の工芸品等の材料に使われる。かつては、アダンの気根から繊維を取り、綱を綯う等に利用されたが、今では、工芸品として、筆などに加

工されているものもある。また、昭和初期には、アダン葉の繊維で編んだ「パナマ帽」が、沖縄の産業を賑わしたことは知られている。

モンパノキも海岸沿いの砂浜や岩地などで生育しているのを見かける樹木である。葉は白い細かい毛が密生しているため、銀白色に見える。花は小さな白い花が枝先に集まって咲く。また、木の枝は薄く加工がきくので、この木をくりぬいて、漁師達は水中メガネをつくる材としたことで知られ、「ガンチョーギー」（眼鏡をつくる木）の呼称もある。

（2）「たらまんにゆんぐとぅ」の歌の内容

八重山歌謡の継子を主人公にした歌には、女性の継子が主人公のもの[54]と、男性の継子が主人公のもの[55]に分かれるが、内容的には、継親に朝早くから水汲み、家事、畑仕事を言いつけられ（女性の場合には機織り、男性ならば山仕事などが加わる）、一日を過ごす様が謡われる。そして、歌の結末のモチーフにはバリエーションがある。一つは、産みの親や血のつながった兄弟がいてくれれば、道具も使い易い道具を与えられ、蓑も雨風をきちんと防ぐものを与えてくれたろうに等々、身の不幸を嘆いて終わるモチーフである。別のモチーフは、継親が婚姻の準備をなかなかしてくれなかったが、最後にめでたく嫁を娶るか、又は、出会った男性と結ばれて幸福になるというモチーフがある。

ところが、こうした展開の他に、異色な継子いじめのモチーフがある。ここに取り上げるのが、その少し異なるモチーフが展開する継子の物語である。次の事例は石垣島石垣村の「たらまんにゆんぐとぅ」である。

「たらまんにゆんぐとぅ」　石垣島石垣村　p. 124

(a) 多良間嶺（たらまねー）　真嶺に（まーんに）　登（ぬぶ）り	多良間嶺（たらま）　真嶺（まみね）に登り
はとぅむぬ　まいなし　坐（び）りばし	はた織り機を前にして座り
五（いつ）ぬ子や（ふぁー）　乳（ついー）ふぁー　乳（ついー）ふぁー　しりどぅ	五歳の子は　乳を飲みたい　乳を飲みたいと

[54]「まぺらちじらば」黒島　p. 264 、「まへらちぃゆんた」波照間島 p. 455、「まへらつ」石垣島石垣村 p. 321 等の「まへらち」の語をタイトルに含む類似の歌謡 7 篇、「南風が星」黒島　p. 150

[55]「うんだまり〈ゆんた〉」竹富島 p. 431 、「いだふん〈ゆんぐとぅ〉」竹富 p. 144、「しぃむばれーゆんた」石垣島平得村 p. 368

七つぃぬ子や　御飯　御飯食あ　食あ　　七歳の子は御飯 御飯を食べたい

しりばどぅ　　食べたいと

(b) 継親ぬ　しなだぬ　　まま親のようすが

産さんすぬ　しなだぬ　　産まない者のようすが

前ぬ浜　親泊　ぱりおうり　　前の浜　親泊に走って行かれ

みどぅま主ぬ　おうるんだら　　ミドゥマ主がいらっしゃるよ

男主ぬ　おうるんだら　　男主がいらっしゃるよ

前ぬ浜ぱり　見や一来う　　前の浜に行って見ておいで

みどぅま主ん　ぐどぅま主ん　おうらなーた　　ミドゥマ主も　男主もおられなかった

刳舟ぬ　前高さ浮きばし　　刳船が前高く浮き

(c) ありに手持ちゃし　足持ちゃし しーうる　　あれに手を持たせ　足を持たせして

けーどぅ　　いるうちに

継親ぬ　染みぴびり　分し名付きばし　　まま親が染めぴびり〈束糸〉分けにことづけて

船ぬ綱　艫ぬ綱　うしとぅばし　　船の綱　艫綱をおしとばして

岩礁ぬ外、波ぬ外　うし出し　　岩礁の外、波の外に押し出して

(d) 風ままに　んな島にかかり　　風のままに無人島にかかり

筵でぃすや　そうぎ木ぬ枝　筵ばし　　筵というのは　ソーギ木の枝を筵にして

枕でぃすや　阿檀蔓　枕ばし　　枕というのは　阿檀の蔓を枕にして

うるじぃんぬ　若夏ん　なりょうたら　　初夏の　若夏になったら

蝶なり　蜻蛉じぃなり　飛びいかるばー　　蝶になり　トンボになって飛んで行けたなら（よいのに）

＊(a) (b) (c) (d) 等の記号は、筆者が加筆

この歌は「ゆんぐとぅ」の語りの形式なので、テキストには節番号は記されていないため、便宜的に、内容を（a）～（ｄ）の４場面に分けて記している。

「たらまんにゆんぐとぅ」の継子の物語は、(a) 機織り仕事をする継母の側らで、小さな幼児が、御飯をせがむ様子で始まる。(b) 継母がうるさい子供達に対して、浜にお役人様がいらっしゃるから見ておいでと嘘を言って外へ追いやる。(c) 継母に促さ

れ、騙されて浜に出かけた子供達は、浜にある刳り舟で休んでいる内に、継親の悪巧みにあって、そのまま孤島に流されてしまう。(d) 無人島に流れ着いた子供達は、浜にある「そうぎ木（モンパノキ)」を敷物にし、「阿檀蔓（アダンの蔓)」を枕代わりにして野宿を強いられる。そして、うりずんの頃になったなら、蝶やトンボになって飛んでいきたい、という子供達の思いで謡いおさめられている。

モンパノキもアダンも、琉球諸地域の海浜ではごく普通に見られ、亜熱帯の浜辺を特徴的に示している風景である。それらの樹木自体には、なんの悲惨な情感が入り込む余地はない。けれども、「そうぎ木」と「阿檀蔓」の繁茂するなかに、子供達が野宿し、横たわる姿が歌の中で謡われたとき、海からの風や波しぶきの打ち寄せる環境の具体性がおのずと伝わり、厳しい環境に置かれた子供達の心情が推察される。棘をもつアダンの葉や蔓や、砂浜に育つモンパノキ等の実景は、孤島に流された継子の悲惨さを増幅する役目を果たしているといえるだろう。

また、歌の最後の詞章は「うるじぃんぬ　若夏ん　なりょうたら 蝶なり　蜻蛉じぃなり　飛びいかるばー（うりずんの頃になったなら、蝶やトンボになって飛んで行けたならよいのに)」と謡う。この詞章には、実際の植物と蝶の世界がうまく反映している。実際に、モンパノキは蝶の食草であるため、周辺には蝶が集まっている光景を見かける。特に、マダラチョウ科の蝶の食草だという。そうした実景を表している一方で、八重山歌謡の中には、蝶やトンボが謡われている次のような歌がある。小浜島の「豊年祭の時の神歌」の「（４）赤また・黒またが黒島家を訪れる時の歌」である。

「豊年祭の時の神歌」「（４）赤また・黒またが黒島家を訪れる時の歌」　小浜島　p. 414

1　あけじのまいや	蜻蛉の舞いは
はにさんどぅまゆ	羽で舞う
おぼよ　ひるよむちえ	大世　広世持ち神は
かたなまゆさ	刀で舞うよ
2　はびるのまいや	蝶の舞いは
うでさーにどまゆ	腕で舞う
おぼよ　ひるよもちえ	大世　広世持ち神は

かたなせたさ　　刀で飾ろう

（以下略）

この歌は「豊年祭の時の神歌」とあるので、「神」を迎える儀礼歌である。その中に蜻蛉や蝶が謡われている。この歌の「おぼよ／ひるよ（大世／広世）」は、「果報」や「豊穣」と同義である。豊穣の神を迎え、神が舞う姿を謡ったものである。形式的には、「蜻蛉の舞い」「蝶の舞い」と「大世／広世持ち神」は、「舞う」という語で語呂合わせのような形式にあるが、神の来訪を迎える明確な儀礼歌であれば、「蜻蛉の舞い」や「蝶の舞い」は形式的な語呂合わせでなく、儀礼歌の呪的な言葉でその場を寿ぎ、「神」の居場所にふさわしい華やぎを添える意味合いを持つと考えられる。つまり、蜻蛉も蝶も「神」に近い景のなかにいる生き物で、異界のものとの繋がりが認識されている。

上記の「豊年祭の時の神歌」の「(4) 赤また・黒またが黒島家を訪れる時の歌」と「たらまんにゆんぐとぅ」とでは、歌の目的が異なっているとはいえ、歌の世界の蜻蛉や蝶に、神歌に見たような背景を考えると、「たらまんにゆんぐとぅ」の最後の節の「蝶（ぱびる）なり　蜻蛉（あげー）じぃなり　飛（とう）びいかるばー（蝶になり、蜻蛉になってとんでゆけたら）」という詞章の意味は、この世の外である異界を暗示させる詞章である。この点で、「たらまんにゆんぐとぅ」に謡われている主人公の継子の物語のモチーフは、他に多くある継子に関する歌の中でも、悲惨な状況のモチーフとして謡われているものであろう。モチーフの結論からみると、最終部の継子の一人称風に謡われている蜻蛉や蝶になって飛んでゆけたらな、という詞章の直前にあるアダンやモンパノキの海浜植物の景は、継子達の置かれた厳しい環境を思わせる描写に役立っているだけでなく、実際に、周囲にたくさんの蝶が集まって舞うモンパノキが取り上げられることで、異界との境界を越える蜻蛉や蝶の舞う姿を、ごく自然にイメージとして歌の中に引き出す効果もみせている。

（3）歌の心意と「場」と表現様式

「たらまんにゆんぐとぅ」は、テキストで「ユングドゥ」の形式に分類されている。「ユングドゥ」について、喜舎場によると、「八重山のユングドゥには二種ある。その一つは島や部落の方言そのままで謡うものである。その二つは、「ユングドゥ調」と称する曲調で謡うものである。その何れも早口で、ユーモラスな言葉を織りまぜて

言うところが特徴である。」（喜舎場　1970a「八重山古謡の語源についての卑見」）としている。また、歌の「場」で言うと、「種子取行事や家屋の新築落成祝などの余興としてよく行われる。一同の苦笑と手拍子で新屋を祓い清める意にもなっている。」（前掲書）のが「ユングドゥ」である、としている。喜舎場の指摘に沿って、「たらまんにゆんぐとぅ」も何かの余興の際に語り謡われる歌と考えると、この歌は一同の涙を誘う歌ということができるだろう。その場に集まった人々が、「ユングドゥ調」で語る（または謡う）物語によって、なんらかの共感に包まれることにおいて、笑いでも、涙でも同じことである。むしろ、ギリシャ悲劇や、シェイクスピアを例にとるまでもなく、喜劇より悲劇が好まれるとはよく言われることである。継子に関連した歌の中でも、「たらまんにゆんぐとぅ」の結末の特異性は、こうした「ユングドゥ」という歌謡の様式の演者と聞き手という関係のなかで、悲劇性を増幅させていった一面が考えられる。

（4）「んめーまゆんた」にみる類似表現

続けて、主人公の境遇と心理を、具体物の性格が表現する歌も取り上げたい。次の＜表１＞に示した２篇の歌では、キノコや麹の菌類が、主人公の境遇と心理を表現している。

歌に取り上げられている「なば」はキノコ類の総称である。「ぱな」・「こーじぃ」は麹カビ、「さきぃぱな」は酒粕のことである。

＜表１＞

	歌謡名	テキスト語形	地域名	ジャンル	頁
1	んめーまゆんた	なば／ぱな	石垣島平得村	ユンタ	367
2	かどぅかーれゆんた	さきぃぱな／こーじぃ	石垣島新川村	ユンタ	311

ここでは、次に挙げる石垣島平得村の「んめーまゆんた」を事例とする。

「んめーまゆんた」　石垣島平得村　　p. 367

（前略）

2　んめーまめぬ　生（ま）りや　　ンメーマの生まれは
　　女童ぬ　うしぃでや　　乙女の育ちは
3　十九（とうくぬ）ちぃ　なるまでぃ　　十九歳になるまで
　　親や夫（ぶどぅ）　知らさな　　親は夫を知らせずに

4　ばが二十歳（はたちい）　なるまでぃ　　私が二十歳になるまで
　あぶや殿（とぬ）　知らさな　　母親は殿御を知らせずに
5　むんすむん　やりばどぅ　　下味噌（げ）であれば
　ぱなばむや　うらりる　　麹かびが生えても居れる
6　馬ぬふしゆ　やりばどぅ　　馬の糞であれば
　なばば生（む）や　うらりる　　きのこが生えても居れる
　（以下略）

上記の歌の全内容は、引用した第6節までが婚期の遅れた娘の境遇を謡った詞章で、第7節以降には、娘が役人と行き会って恋愛に展開するモチーフが結合した内容が謡われている。

前半部の婚期の遅れた娘を主人公に、娘の一人称の表現も交えて、娘自身の立場を「麹黴のはえた下味噌」や「キノコの生えた馬の糞」といった具体物を用い、辛辣で自虐的とも思える表現で捉えている。「むんす（下味噌）」[56]の「ぱな（麹）」と馬の糞に生えた「なば（きのこ）」である。馬の糞に生えた「なば（きのこ）」というのも、「八重山の馬の糞には灰白色の茸がよく生える」（喜舎場　1970　p.398）という具体的な指摘がある。こうした指摘から、これらの取り上げられた事例は、いずれも、日常的に身近に見受けられたものだったことがわかる。それにしても、「麹黴のはえた下味噌」や「キノコの生えた馬の糞」という具象は、女性の婚期の遅れが、社会的に厳しい目で見られる境遇であることを伝えるに十分すぎる表現ではある。

歌の後半の第7～15節までは、娘自身が出会った「目差主」に見初められ、やがて仲睦まじくなろうとするところで終わる。この後半部は、「んめーま」と「目差主」の出会いが問答歌の形式で展開し、歌によくみられる男女の出会いのモチーフが付加されている。

（5）「んめーまゆんた」の歌の背景

前半は、主人公「んめーま」の婚期の遅れを謡っている詞章である。「んめーま」

[56]喜舎場の（註）によると、「むんす」は「醤油粕の原料の麦の意」とあり、「この醤油粕に糠や豆類を混ぜ、麹黴を発生させて塩を加え製造したのがいわゆる俗に言う下味噌（ギミシュ）」であり、それに対して、「上味噌は米と豆で作った」（喜舎場　1970a　p.398）とある。一方、『石垣方言辞典』によると、「むんす」は「麦のもろみ。」「水、塩をすくなくし、発酵させた茶請け用のもろみ」で「これからは醤油はとらない。」（宮城 2003 p.1115 ）と記されている。

は 20 歳になるまで自分の許嫁について親から知らされなかった、と謡っている。こうした詞章の背景には、結婚の適齢期が、古くは、女性は十三祝いを過ぎた頃で、男性が 15 歳過ぎた頃とされ、大正期までの士族の縁組みは、親同士が取り決め、とくに娘には、相手が誰であるか等一切伝えられず（宮城 1972 p.345)、という事情がある。そうした古い婚姻の習俗に鑑みると、歌の主人公の女性「んめーま」が 20 歳になるまで、親から許嫁について何も伝えられなかった境遇は、当時の社会的な常識からすれば、婚期を逃してしまったと考えてもおかしくなかったのだろう。

また、琉球王国時代の王府による人頭税の政策は、百姓層の婚姻、出産にまで影響を及ぼしている。村役人の仕事として、村人の婚姻、懐妊、出生から流産まで個人名を明記して在蕃に報告する制度が設けられていた（新城　2014　pp.37-38）という。新城によると、国は表向きには「夫婦を人倫の大本とし、年頃になったら結婚し、子孫を設けることが、家を治めるために必要なことである」とした後、「一般論から八重山の人頭税へと論を転じ､」「八重山は頭懸上納（人頭税）の地域であるから、適当な年頃になったら結婚し、子を産み人居を繁栄させるように､」との人頭税を念頭においた政策の一環として、百姓層の婚姻から出産に至るまで、生活全般にわたり規定し、届け出の報告を義務づけていた（新城　2014 p.39）とされている。また、「百姓の男は四十五歳、女は十八才以上四十歳までに婚姻すること。」と決められており、遅延した場合、本人のみならず親族等にまで寺入りや科米の罰則規定までが用意されていた（新城　2014　p.37）というのである。

これらの指摘から言えることは、婚姻は、男女個人や、家と家の問題では済まされされない。国家の税制に関わる問題なのである。このような社会事情の背景の中でみると、「んめーまゆんた」で、主人公の娘の婚期の遅れを、「麹黴のはえた下味噌」や「キノコの生えた馬の糞」という、辛辣なまでの具象を選んで表現したとしても、無理からぬ事情が反映してのことと言えるのである。歌の背景とともに、歌の詞章の表現をみてゆくと、植物歌の具象的な表現が、人々の状況と思いを詰め込んで、率直に表現していることがよく窺える。

第 3 節　まとめ　植物歌の表現の特徴

植物歌は、テキストから抽出した植物名を含む歌の総称で、本稿が考察の対象にし

た歌謡群である。第 2 章は植物歌について考察した。第 1 節では、植物歌の表現の概要を述べ、表現の問題として、本稿が特に注目する植物歌の表現を明らかにした。第 2 節で、歌の事例を挙げて、それぞれの歌に見られる表現と植物の関係を中心に考察したものである。

その具体的な考察内容は、次の事項が挙げられる。どのような植物が用いられているかにはじまり、植物のどのような特性が捉えられているか、そして、取り上げられた素材としての植物の特性は、どのような歌唱者達の思いや観念の表現に用いられているか、また、その植物素材と思いや観念を繋ぐ発想についての考察も行った。その際には、歌の発想が成立するための背後にある自然環境、風土、民俗、歴史等についての分析を適宜加えた。そして、それらの総合として植物歌の主題と表現様式の関係等について述べた。その上で、口承の歌の伝承の条件である歌の「場」の意図等を考慮しながら歌の心意について本稿の解釈を加え、植物と表現の関係について明らかにした。

上記の事項は、歌によっては、適宜に前後したり省略した事項もあるが、第 2 節において、一篇一篇の歌の事例に添って行った考察過程の概要である。ここでは、引用した歌それぞれに行った考察を、植物歌全体として整理してみたい。

１．表現素材としての植物の特徴

植物歌に用いられる植物の特徴は、八重山諸島に自生する、または、栽培されて実際に生育している植物であるという点である。一般的に、植物は人の生命と衣食住に不可欠なものであり、民俗、文学、歴史他にも広く関わっている。土地々々の文化には、自然環境の条件が反映している。従って、八重山の文化の一画にある八重山歌謡が、島の自然環境の中にある植物を取り上げているのは当たり前のことで、あえて、特徴と言うまでも無いことのように思われる。

けれども、このことについて文学一般の表現の問題として考えてみると、八重山歌謡という歌の世界には、人の思考が創造した世界が開かれているのであり、歌に用いられる植物が、想像上のものであっても、実在するものであっても、人の思いを表す事において、表現と素材の関係は同じである。必ずしも、自然科学的に植物を捉えなければいけないわけでもなく、実際に島にない想像上の植物を用いる表現が混在することがあっても不都合なことはない。けれども、八重山歌謡の植物歌という表現の世

界に用いられている植物が、ほぼ島の自然環境の中に生育の実体がある植物であるということは、植物歌の表現の基盤の特徴として、記しておくべき事柄と思われる[57]。

植物歌の中に謡われている植物の特性等の内容については、実体験に基づく知恵を背景に持つ歌の言葉が表現されていると思われるものが多い。歌の表現の多くが、実像を共有する言葉である点は、植物歌の表現の性格を特徴づけている。

事例に添って言えば、「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」に歌われた「ぴんに木（ヒルギ)」の姿は、花が咲き、実がなり、その種子が海流に流され、棒状の種子が海浜の泥地に着生する、という見たままを歌の言葉にしている。また、「やまかしぃにあよう」の冒頭節で、「山樫木（オキナワウラジロガシ)」は山底に育つ、と謡う短い詞章は、実際のオキナワウラジロガシの生育立地の特徴を正確に伝えている。詞章にある「山底」とは、石垣方言では「山の奥」（宮城　2003　p.1153）の意である。山深く生育するオキナワウラジロガシの生態については、造船の作業過程を謡う「古見山(くんやま)じらば」と共に鑑みると、深山の材木の伐り出し作業の実体験が、歌の言葉の背景に活きて共有されているものと推察できる。そして、「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」で謡われた「かねーら木（ハマゴウ)」は、決して巨木にはならないという事実認識のもとに、歌の表現にうまく使われている。また、「くくるだきあゆ」では、歌唱者達は、畑の「びら（ニ

---

[57]本稿が植物歌の抽出の際、対象から除外した節歌や口説には、同じ八重山歌謡でも、梅や桜が謡われている。

古見の浦節　p.482

2　桜花ほなりやま	桜花のようなブナリヤマ〈女名〉
梅の花宮童	梅の花のような乙女
いつんはなやさかり	いつも花は盛り

黒島口説(くるしまくどぅき)　（黒島）　p.554

4　ちんと 心(くくる) は　梅 桜(んみさくら)	実に心は梅桜
匂(にうい) ひかさり　袖 衣(そでごろも)	匂いにひかされて　袖衣
花(はな)の乙女(mmiyarabi)　押連(うしちり)て	花ぬ乙女　押連て
いやいや	イヤイヤ
廻(みぐ)て六月　今ど走来(なま　はしりふ)る	（季節は）巡って六月　今は走ってくる
穂利(ふりぬあしび)の 遊 びや　老(おい)て 若(わかさ) ん　袖や引連(すで　ひきち)れ	豊年祭の遊びは　老いも若きも袖を引き連れ

テキストの分類によると、節歌や口説は、三味線を伴い、八重山の役人（士族達）が占有したもの（テキスト　p.652 ）とあり、上記の事例は、植物歌の抽出の際、その理由により本稿の植物歌としての考察の対象から除外した歌謡群である。琉球諸島のサクラは、沖縄島では寒緋桜がよく知られているが、ウメは、現在でも庭に植栽されたもの以外に出会うことのない珍しい樹木である。士族に関係の深い歌の詞章に、梅や桜が用いられている事は、歌の言葉の出典をを示唆している。植物歌には、ウメ･サクラは用いられていない。

ラ)」の葉が根から次々に伸びる景と、雲から（と考えた）吹き続ける風の景に、超自然な力の源を、同じ「根」と言う言葉で表現した。そこには、目の前の畑の植物の現象と天空で起きている見えない現象とを、同じ自然の摂理として把握する発想が窺える。その他にも、謡われている植物については、「はまさき（ハマユウ)」や「ばそー（バショウ)」の茎の芯の白いこと、「よなかじ（オオハマボウの表皮)」や「あだなし（アダンの気根)」を漁網の材にする手順等、野生の植物の観察ばかりではなく、植物の日常の活用によって得た実体験を反映した言葉が、歌の言葉へと転換されていく。

上記は、前節に事例とした歌で取り上げた中の数例だが、植物歌に謡われている植物は、いずれも島の自然に実体のあるものが用いられており、その実体を根拠として、歌の言葉が生まれているという関係にある。

２．　具象表現と列挙の様式

植物歌に謡われる植物が、島に生育している植物である事は、表現の素材自体の特徴である。次にそれらの植物を含む詞章の表現の問題とは、植物がどのように用いられ、何を表現しているのか等、歌の言葉としての植物の表現の様式の特徴をみることにある。本稿が注目してきたのは、植物歌に謡われる植物の多くが、歌唱者達が歌に表現したい思いや観念を、抽象的な言葉を用いて説明する代わりに、植物の具体的な像を用いて表していることである。本稿はそうした具体物による表現を「具象表現」と言い、そうした表現のなかの植物を「具象物」、時に平易に「具体的なもの・こと」等の言葉で示してきた。

ここで具象表現について、辞書で言葉の意味を確認してみたい。『日本国語大辞典』（北原保雄　2003）の具象の定義では、「ものが実体を備え、固有の形体を持っていること。また、そういう形。」とあり、さらに、具象化とは、「実体として現われること。また、無形のものが、固有の形体を持つようになること。またそのようにすること。具体化。形象化。」と説明されている。この辞書にある言葉の定義に添って、植物歌の具象表現について、改めて述べてみると、「歌唱者達の思いや観念というそれ自体では無形なものを、植物という実体を通して言葉に表現すること」である。

そして、歌唱者達が、思いや観念の表現に、どの植物を用いるか選択する過程には、思いや観念と具体物を繋ぐ発想が介在する。『日本国語大辞典』（前掲書）によると、

発想とは、「どう取り扱い、どうまとめるかという考えが浮かぶこと。また、その考えのもとになる思いつき。」と定義されている。歌唱者達が、思いや観念の具体的表現に、島の環境下にあるたくさんの植物の中から、どの植物のどのような特性を適切に取りあげるかという選択にあたって、無意識、あるいは意識的に働く思いつきが、発想である。歌唱者達の頭に浮かんだ表現したい対象である思いや観念も、音声や文字として言葉に表出されなければ＜見えないもの＞だが、思いが表現されたとしても、思いと表現を繋ぐ役目の発想それ自体は、内にあって言葉の表面に表れない。けれども、表出された言葉の背後にある見えない発想は、植物歌の表現の固有性や普遍性等の表現の特徴を醸し出す重要な要素である。そのため、慣習・信仰・歴史・経済などの資料と様々な歌の事例の総合的な推察から、見えない発想を読み取る他はない。思いから具象による表現に至る過程には、こうした見えない発想の働きが含まれている。

ただし、八重山歌謡の歌唱者達が、身の回りの植物の景に何を見て、どう組み立てて表現するかという植物歌の発想は、個人的なものというより、共同体において長年かけて作り上げてきた歌唱者達の総意に基づく感性である。それは、同じ景色に同じ印象をみる、言葉以前の共同体の共感といえるものである。その共感には、共同体として経験してきた自然観や人生観、世相の解釈他の諸々が反映している。

こうした具象表現を用いて謡われた歌の様式を、数篇の歌の事例にみた。

例えば、「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」は、一見すると、「ぴんに木（ヒルギ)」の生活史を謡うことに終始して見える。けれども、「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」の謡われる節祭の「場」の状況を絡めてみると、巻踊りの一つとして謡われるこの歌の心意は、植物のヒルギの景を謡うことにあるのではなく、ヒルギの生活史を通して、人の人生の思いを表現するところにある。詞章の表面に表現されているのは、具象に選ばれた植物の姿だけである。その意味で、植物の生育を叙事的に表した擬人法といえる。また、現代的な修辞として表面的に捉えれば、寓喩的な表現が採られた歌とも言える。そうした人と植物の具象の関係を成立させるのは、共同体の総意として積み上げてきた人生観と、植物と人間を同じ摂理の中に見る自然観の発想が、歌唱者達の表現の基にあるためである。

「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」に見る植物の具象の様式に対して、1 篇の歌の中で、具象表現を列挙する様式の歌がある。主題を同じくする短い節の列挙によって構成されている歌である。列挙される各節の主格は、主題の本質を表現するものやこと等の具象が

選ばれる。事例でいえば、「山樫木(やまかしに)あゆう」とその類歌では、すべての歌の冒頭の節で、主題を象徴的に表現する具象として選ばれた植物の「山樫木」が謡われる。第 2 節以降に、第 1 節と同様な主題と表現の構造を同じくする詞章が、様々な主格に置き換えて列挙される。「山樫木(やまかしに)あゆう」とその類歌全体を含めてみると、主格となる事柄は、植物、もの、こと、そして人等、多様である。しかし、第一節は、「山(やま)かしぃに　根下(にう)りや　山どぅにどぅ　根下りする」という短い一節に始まる。歌に込められた「あるべき場所に根下りする（繁栄する)」という主題の心意を表す具象として、植物の「山かしぃに(オキナワウラジロガシ)」の生育する姿が取り上げられているのである。様々な具象の中でも、「山樫木」という植物が、主題と最も重要な関係にある。

「山樫木(やまかしに)あゆう」とその類歌の詞章を例として、様々な具象を主格とする節の列挙の表現を図式化すると下記のようになる。

＜ A 植物（山樫木）→B(もの・こと)[B1（植物）+ B2（もの）＋B3（こと）＋・・] →C 人（吾等皆他）＞

そして、列挙される（B1･B2・・）は、即興的に、さらに連ねることが構造的には可能である。このように、具象表現と列挙の様式の表現の特徴的な点は、一篇の歌のなかで、同じ一つの主題(または観念)を、幾通りもの具象によって、多面的に表現できるところにある。同じ主題を反復する列挙の様式は、この具象表現を用いる方法により、容易に可能となっている。また、そうした具象表現の列挙による様式は、島ごとの謡われる「場」の違いや、歌唱者達の発想が取り挙げる素材の自由さに対応できる。そのため、それぞれの島の固有性を示しながら、歌全体の表現の本質や心意の共通性を保ち伝承されてきている。歌唱者達が、それぞれの風土に馴染み深い表現の工夫を楽しむことができるのも、具象表現と列挙の様式の特徴である。

第 2 章では、これと同じ構造の表現の歌の事例を数多く取り上げた。「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」とその類歌は、男女の絆は強いという主題の思いを、「かねーら木（ハマゴウ)」「くば（ビロウ)」「じいく（デイゴ)」「いしゃらむとぅ（蔦)」「うぶきゃんぎ（イヌマキ)」等の植物を具象に表現している。いずれも造船材には不向きな共通性を持つ樹木を選び出し、それらの樹木によって船を作るという想定を示して、逆接的に「おこりえない」または「悠久の時間」という抽象的な観念を、具象の像を用いて表現している。また、同様な表現の構造は、小動物や魚類を駆使した表現の事例にも

見られる。西表島の「井戸(かあニ)ぬぱたぬ小蛙(あぶだーまゆんぐとぅ)誦言」、石垣島川平村の「節じらばおーぱんや」、竹富島の「命果報(ぬちがふ)ゆんた」等である。さらに、八重山にかぎらず、宮古の多良間島の「くまらぱぎ豊見親」等も同様な表現の形式をとっている。「やらぶ種子あゆ」は、ころころ転がる丸いテリハボクの種子によって、嫁になる娘への親の思いを表現する。嫁いだ後も、実家を訪れるようにと願う親の切ない思いは、次々と列挙する丸いものや転がるものを具象として、繰り返し謡われる。

そして、もう一つ、具象表現の様式の重要な点が、植物を取りあげ人事を謡う＜植物→人＞という表現の定形化をみることである。さらに、小動物や魚類の例も加えて一般化して考えれば、＜自然→人事＞という定形化ということもできる。それは、「山樫木(やまかしに)あゆう」の例で言えば、最終節は、人が主格となる内容で終わることに示唆されている。「山樫木(やまかしに)あゆう」の各節には、「根下りす」という言葉が反復され謡われていくが、反復するのは、その言葉が歌として述べたい一番重要な主題だからであり、そして、どの類歌も最終節の主格が「人」で終わるのは、人の「根下り」を謡うことが重要だからである。１つ１つの節の主格は、歌の主題の観念を表現する具象として存在し、様々な具象を主格とした構造の節が列挙されているが、その全体の展開をみると、＜植物→もの→こと→人＞という具合に、人の姿を謡うことに集約されていく。

ここに、これまで述べてきた具象表現と列挙の様式の成立の条件について、記しておきたい。

① 思いを表すための具体物は、身の回りの見慣れたものの中に、適切な歌の素材を求める。何が適切な素材かを選ぶのは、歌唱者の発想だが、概して、そこには共同体に蓄積した経験的知恵が活かされる。

② 列挙の様式を成立させている具象表現がある。植物歌にみる具象表現は、一つの概念（思いや観念）を述べるために、抽象的な概念語を用いるのではなく、表現したい対象の思いと同じ本質を持つ事物や事象によって、具体的に表す。そのため一つの対象を、多面的に表現することができる。

③ 歌唱者達は、同じ言葉（島の方言）の文化を共有し、共感を共にしている共同体の構成者である。

同じ環境と体験からなる知恵を共有している人々の間では、言葉以前の合意が共有されている。そのため、身近なものと経験を歌の言葉の出処とする具象表現の歌は、多くの説明の言葉を要せずとも、具体的なものやことを示すことによって、理解と共

感をすみやかに引き出すことができる。それが、植物歌の具象表現と列挙の様式を成立させている要素である。

３．具象表現と列挙の様式による表現の心意

本稿では、一つの概念を＜もの（植物）＞を用いて表現する具象表現と、同じ主題を列挙して反復して謡う歌の形式を、具象表現と列挙の様式と呼んできた。一般に、歌の様式の成立には、様々な要素が複合的に働くが、歌の様式を表現の問題として考える時、その様式と心意の関係も一つの要素として明らかにすることが必要である。それは、稲作の歌が、理想どおりの耕作過程を謡う叙事表現の様式と、言霊信仰と、豊穣の願いの心意との関係を基にした表現であるように、ここでは、具象表現と列挙の様式は、どのような歌の心意のもとにある表現なのか考察したい。

先行研究をみると、池宮正治は『琉球文学論の方法』（池宮 1982）の「序論及び古謡論」で、琉球歌謡の表現の特徴の一つとして、「羅列と反復」の修辞について論じている。池宮は、琉球歌謡が「なぜ、反復と羅列に執着したのか。反復、羅列へのエネルギーは何だったのか」（池宮 1982　p.57）という問いの下に、宮古の狩俣の雨乞いのクイチャー・アーグに取り入れられている神名の羅列や、『おもろさうし』巻 10 の 44 の地名や聖地等の羅列の事例を取り上げ考察している。また、『古事記』の神名列挙である「神名の言挙げ」等の本土古代文学についての所見も加えられている。その考察の結論部分を簡単に言えば、「羅列や反復は、言葉の修辞ではなかったのか」（前掲書　p.61）とし、「羅列と反復することにより呪力を強化することに役立った」（前掲書　p.63)、「それは古代（原始）の人たちにとっては、言霊を発揮し自然を克服する手段であった」（前掲書　p.63）としている。上記の池宮の指摘は、羅列と反復は、歌の呪力の強化を意図した表現だということを述べている。この指摘は、本稿の具象表現と列挙の様式とその心意の関係についての考察にとって、興味深い示唆を含んでいる。

植物歌の具象表現と列挙の様式は、一つの主題を様々な具象によって表し、同じ主題を一篇の歌のなかで何度も反復して謡っているものである。では、植物歌の具象表現と列挙の様式の反復の成立の心意には、呪力が意識されているのか、そして、植物の具象表現と列挙の様式の心意のもつ呪力とは、どのようなものか考えたい。

琉球歌謡の表現の様式の一つとして、叙事的表現については、歴史的な英雄の事績

を謡う英雄叙事と作物の豊穣を願う等の生産叙事があることは、先学の研究によってすでに明らかにされている。そのうち、先に述べたように、八重山の祭祀や行事で謡われる生産叙事歌謡の叙事表現の様式は、言葉に示したものが、形になって現れるという言霊の信仰が生み出した呪的な表現の様式である。作物の豊穣をテーマに、強烈な豊作の希求の一点に集中しており、その歌の心意には、呪術性や予祝性が含まれている。

では、植物歌の具象表現と列挙の様式は、どのような歌の心意によるものなのか。第2章で取り上げた植物歌の具象表現と列挙の様式の歌が取り扱うテーマは、共同体の日常の事象や、共同体内に発生する人間模様等、生活実感を基盤にした多様性を持っている。そして、それらの多様性のある歌のテーマに、共通性を求めるとするならば、「果報」や「弥勒世」等の言葉が象徴するように、共同体の暮らしの順調と安定と幸福、長寿等の希求といってもよいだろう。植物歌は、普通の人々が当たり前の生活のなかに抱く幸福感等の＜思い＞を、共同幻想として謡っているものである。具体的な表現は八重山の風土の固有性に色づけされてはいるが、基本的には、誰もが抱く普遍的な願いの類とも言える。

例えば、本稿に取りあげた事例の歌のそれぞれの主題を見れば、そのことは明らかである。「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」「山樫木(やまかしに)あゆう」「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」「井戸(かあー)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとう)」「やらぶ種子あゆう」等は、人生への思いや、共同体の暮らしの幸福や、男女の仲むつまじさ、長寿の願い、親子の縁の深さ等を主題としている。その主題の意図を表す具体物として、適格に選ばれた植物（又は、小動物等の場合もある）の属性を用いて表現し、主題の思いを何度も繰りかえして謡うところに、植物歌の具象表現と列挙の様式の心意がある。「ぱいさこだじらば」「いんだれゆんた」他、また、「たらまんにゆんぐとぅ」「んめーまゆんた」など、主人公の不幸をテーマに謡う歌も、それは表裏一体の幸不幸を、不幸の側から謡っているもので、こうありたい・こうありたくないも、歌の心意としては同根のものである。事例として、一つ一つの歌の引用は行わなかったが、「ふぅぬだきあよう」石垣島川平村（p. 156）・「霧下(きるり)あゆー」竹富島（p. 171）・「さしにがんあゆう」黒島（p. 181）・「浜崎の千鳥あゆう」黒島（p. 181）等も、いずれも、身の回りの具体的な＜もの＞を取り上げて、多様にあらわすことができる具象表現を用いて、島人が求める幸福感や祈りを謡っている。

これらの歌にみる生活実感に基づいた歌唱者達の思いや観念を、身近にある具体的

な形あるもので表し、念入りに繰り返す歌の様式の心意は、島や村ごとの小さな共同体の＜思い＞の総意である共同幻想を、より強く、歌唱者達が自ら確認することにあるといえるだろう。それは、超自然や＜神＞に対して呪力を期待する祈願とは少し趣を異にし、村中に満ちた自分達が謡う言葉によって得られる共同体の共感を、幸福を引き込む呪力に変えるところに、歌の心意があると思われる。

例えば、祭りの見学をする時に、そのような感覚を覚える事がある。八重山に限らず沖縄島と周辺離島の各地の祭にも、ミルク神の出現場面がある。出現したミルク神の道行きの際、今ではたいてい三線の伴奏を伴ってミルク節が謡われる。その歌に合わせるように、ミルク神が手にした扇をゆったりと動かしながら歩む所作は、村人でもない只の見学者でさえ、列について歩いているうちには、本当にミルク神が沿道の人々を寿ぎ、そこかしこに「世」を蒔き広げる姿に、不思議と見えてくる。歌によって、その「場」一帯に、「世」の言葉（音声）が満ちる、そして、言葉の呪力というのは、ちょうどそのような時に覚える感覚である。祭りのミルク神は、五穀豊穣や健康や子孫繁栄など、村人の幸福全般を村の隅々に振りまき歩むが、ミルク神の幻視を欠いた巻き踊りでは、参加者達自らの謡う言葉が、自らの生活の場を、擬似的に庶民の＜思い＞である幸福感や一体感で満たす。植物歌の主題は様々とはいえ、喜びや幸福感や豊穣等を中心に展開する。何れの歌のテーマも、同じ島や村に暮らす誰もが求める日常のごく当たりまえな願望であり、同時に、ある時代の共同体の社会生活を円滑にめぐらす、倫理観や生活観や人生観、自然観等を混在させた共同体の共感が成立する内容である。

波照間が「八重山歌謡の形態」（波照間　1999　pp.529-662）で、祭祀と歌謡を体系的に捉え論じたことを参考にすると、ここで取り上げてきた植物歌の具象表現と列挙の様式の歌の多くは、祭祀の体系の中の歌の相関でいえば、村人の参加者がうちそろって謡う祭祀の「周縁部」（前掲書　p.538）にあたる歌である。歌唱者達が、祭りの「周縁部」の場において、巻踊り等で自ら謡う行為は、祭りの全体の文脈としては＜神＞に願うという側面を含んではいるが、参加者達の行為により、共同体の理想とする人間模様の実現の願望を皆で謡う確認的な要素が強い。植物歌にみる具象表現と列挙の様式は、そうした願望の反復により生じた歌の言葉の呪力が、直接的な人と人の関係に反映することを信じる心意で成立すると考える。

４．具象表現にみる普遍性

まとめの最後に、具象表現そのものは、表現一般の問題としてどのように位置づけられるのかということと、また、八重山歌謡が自然を巧みに謡っているといわれている印象と具象表現の関係について、先学の論述も交えながらまとめてみたい。

植物歌の歌の表現の特徴として、具象表現と列挙の様式を多く取り上げてきたが、植物と具象表現については次の様に言うことができる。

「山樫木(やまかしに)あゆう」「野底浜(ぬすくはま)ゆんぐどぅ」「やらぶ種あゆう」等の歌は、一つの主題を異なる具象の列挙で表現し、主題を反復する様式を採る歌の事例である。そして、その主題を象徴する具象に植物が用いられている。また、事例に挙げた歌の中には、主題や主人公の物語として展開する歌が含まれる。例えば、「大川原(うふんがーら)ぬぴんに木」は、ヒルギの生長を擬人的な解釈の下に物語が展開している歌であり、「南さこだじらば」「いんだれゆんた」「たらまんにゆんぐとぅ」「んめーまゆんた」等、主人公の幸・不幸をテーマに物語る歌もある。それらの歌は、共同体社会の価値観や共感を基にした羨望する人生への思いを、幸・不幸の表裏から謡っている。様々な社会的な価値という抽象的な概念についても、植物を具象に用いて表現している。そして、「いきぬぶしじらば」では、歌の中の死体植物化生という神話的なモチーフの展開に、山深い河原に生長する大樹が欠かせない役割を果たしている。また、「くくるだきあよう」の航海のために重要となる良好な風を祈る歌では、風が吹き続くという自然の事象に超自然の力を探る歌唱者達は、畑で栽培する植物の生長の力に同様な力を捉え、具象として用いている。歌唱者達は、日々の体験から得る生活の必要に応じた知恵の蓄積を通して、一見関わりのない風と植物という 2 つの事象の中に、超自然の力の本質的な共通性を認める独特の自然感を表現している。その他には、「ゆびが夜(ゆ)ゆんぐとぅ」「ばがたるまゆんた」では、人間の動作や仕草等と共に、心の機微を含んだ表現の具象にも、植物の繊細な観察を活かして表現に用いている。

以上は、第 2 章で取り上げた事例の一部だが、全部の事例を繰り返して振り返るまでもなく、植物歌の多くが、主題やモチーフの主要な事象を表現するために、身の回りの植物の実体の観察から得られる特徴を、具象として巧みに用いている。

具象表現の目的を単純化すると、植物を描写し、それによって人についての思いや観念他の様々な事象を表現する様式である。先には＜植物→人＞と記した。さらに、「井戸(かあニ)ぬぱたぬ小蛙誦言(あぶだーまゆんぐとぅ)」「くまらぱぎ豊見親」他で、小動物や魚などが具象の一

つとして、植物と同様な構造で用いられている例に示されているように、植物、動物等を広義に捉えて、自然の描写をもって人の心を表す表現の様式とすれば、＜自然→人＞と記すこともできる。

こうした具象表現の様式は、日本文学に枠を広げてみると八重山歌謡だけの特徴ではないようである。

例えば、吉本隆明の『初期歌謡論』の「歌の発生」（吉本　1994　pp. 7-83）では、次のような記述に行き当たる。上代の和語（記紀歌謡・『風土記』）の特性について吉本によると、「少なくとも、この時期までは、和語は大陸の漢語にくらべて、遙かに地を這うような具象性を特徴とする言語だった。言い換えれば、具体的な＜物＞の比喩を用いてしか抽象的な概念をあらわせなかった」（前掲書　p. 83）としている。そして、そうした結論に至る分析の途上で、「上代和語の本性にもう少し近づく方法として、（中略）和語の言いまわしを純粋に保存しているわが南島の歌謡を見てみることだ。この場合『おもろさうし』よりも、八重山のような南方の辺境の歌謡のほうが適切であろうとおもわれる。」（前掲書　p. 35）という評とともに、喜舎場永珣の『八重山古謡』の中から雨乞いの際の歌を紹介している（前掲書　p40）。また、同書の「歌体論」（前掲書　pp. 295-387）では、「はじめに景物の描写や事象があるとすれば、それと構造を同じくする叙心が、あとにつけ加えられるという様式は、初期歌謡論を組織するにたりる唯一の原則だといって過言ではない。」（前掲書　p. 297）とも記している。

これらは、日本文学史の中の上代文学の研究の基調の中で論じられている表現の特徴である。しかし、上記の引用部に対する本稿の関心は、文学の表現として、抽象的な概念を具体的な＜物＞によって表す特徴が認めら、景物の描写や事象のあとに、同一の構造の心を述べる様式について指摘していることである。この指摘により、八重山歌謡の植物歌の具象表現が、6～7 世紀に記された記紀歌謡や風土記等の日本の上代文学以来の表現の一つの在り方であり、「具体的な＜物＞によって表す」表現と共通した特徴を持っているということができる。ただし、本稿が注目しているのは、日本の上代文学以来の表現と八重山歌謡の表現の類似が、ほぼ 10 世紀ちかい時間を隔てている[58]、という時間の問題ではない。あくまでも、その類似を表現の基本の問題

[58] 10 世紀の隔たりとは、八重山歌謡の背景として書かれた歴史と交差が確かめられる『朝鮮王朝実録』「慶来慶田城由来記」等の 15 世紀前後の記録との大凡の時間差を述べたもの。

として受け取ることができるということである。

『初期歌謡論』（吉本　1994）では、上代文学に始まる日本文学史に重心が置かれる中で表現について論じているため、八重山歌謡等の表現については、「上代和語の本性にもう少し近づく方法」（前掲書　p. 35）として位置づけられている。言い換えると、八重山歌謡の中に、表現の古代性を見るともとれる。けれども、八重山歌謡の表現の研究を目的としている本稿では、発生も作者も不詳である口承の八重山歌謡の性格からしても、八重山歌謡の表現は明らかな時系列のなかに考察するのは、むかない分野と考える。また、異論はあるかもしれないが、琉球諸島では、細かい解釈の部分で変容は在るとしても、実際に祭事や行事等の生活の場面で、今も願いを持って謡われる歌の伝承は色濃く続いていると考える。それらを加味して考えると、本稿は、八重山歌謡の表現を上代文学の表現へと引きつけて考える立場にない。

そのため、本稿にとっては、八重山歌謡の植物歌の具象表現の様式と日本上代文学に位置づく表現の様式の構造の類似は、文学表現の様式の一つということに重要さがある。そのことが示唆するのは、具象表現は、言葉の表現の様式としては、普遍的な思考の生み出す表現の一つのパターンということである。また、それは、歌の事例の中にもみられた抽象的な言葉を用いる表現に対する、確かな像を持つ言葉を用いる表現の対比という、言葉の表現の問題ともいえる。確かな像を持つ具象表現を支えるのが、言葉の背景にある基本的な環境の条件の共通性であり、具象表現は、その共通性に基づいて使われる言葉と表現の在り方である。基本的な環境条件とは、先の項で記している具象表現と列挙の様式の成立する条件としてまとめた 3 つの条件である。その条件で、現在まで島々で継承されて謡われている歌の現状も含めて考えることができる。

植物歌にみてきた具象表現の特徴は、身近にある身の回りの具体的なものや、蓄積された体験に繋がる確かな像を持つ言葉を用いて表現している点にある。また、それらの言葉の背景には、超自然や＜神＞の把握や、目に見えない力を言葉の呪力として取り込んできた人々の信仰や発想等々の共同体の文化が、歌の言葉の本質に関わっていることを事例の歌を通して考察した。

まとめに、八重山歌謡の植物歌における具象表現と、八重山歌謡全体の印象との関わりについて述べておきたい。八重山歌謡は、琉球歌謡の中でも、自然を巧みに謡っているという印象はこれまでも言われてきたことである。本稿は、自然を植物に特化

し、植物を表現に含む植物歌の事例に添って、実際に様々な植物がどのような表現に用いられているのかを分析し、植物と表現の関係の考察を重ねてきた。その考察は、結果的に、八重山歌謡の植物を用いた表現の実際を通して、一般的に言われる八重山歌謡が自然を巧みに利用しているという印象の理由を明らかにする事に繋がっている。八重山歌謡の歌唱者達が、思いや概念を歌の言葉に表す際に、抽象的な観念の言葉を用いる代わりに、具体的なものの像によって表現する具象表現の方法をしばしば用いていることを繰り返し述べてきた。その様な歌の表現の基本的な構造が、先に述べた八重山歌謡が特に自然を巧みに謡っているという印象を持たれることに大きく関与していると思われる。思いや概念を表す際に、その具象として、まず、身の回りにある自然を表現の素材に多く利用しているのである。本稿では、島の自然の中の植物に特に注目し、具象となる植物と表現の関係を中心に示してきたが、歌の具象の素材となっている自然には、植物の他に、動物・魚・菌類等の生物や、天体その他の自然事象等も含まれている。歌唱者達の具象となる植物の選び取り方は、植物の様々な側面の内から、生態や立地、色や材質等から、表現したいことに最も適した側面を選択する。そこには、歌唱者達の生活の必要と経験によって磨かれた細かい、正確な選択眼が活かされていることは、それぞれの歌の事例で明らかにしてきたことである。

八重山歌謡が、自然を巧みに表現していることを強く印象づけるのは、八重山諸島が、豊かな海と島の自然に恵まれており、その自然を描写する歌が多くあるからだけではない。そうした環境の優位性の問題ではなく、八重山歌謡の表現の構造そのものに、自然の巧な表現を多く生む理由がある。歌唱者達は、生活の必要の求めに応じた島の自然の緻密な観察と豊富な経験を土台に、吉本の指摘するところの言葉でいえば「地を這うような具象性を特徴とする言語」(吉本 1977 p.75)で、歌に思いを表現した。しかも、自然は、人間と異なる時間と空間の物差しを持っている。そのため、「井戸(かぁニ)ぬぱたぬ小蛙(あぶだーまゆんぐとぅ)言」では、「ばがけらぬ生命　島とぅとぅみ　あらしょうり（吾等皆の命は、島と一緒であらせてください)」というように、一人の人間にとっては永遠のような島の存在によって、人間の長寿の願いを表現し、「ぷし木ぬ　下(しいた)らぬ　きぞがま　ぴーに下(う)り　ぎらなるけ（ヒルギの下方の二枚貝が 干瀬に降りてシャコ貝になるまで)」というような自由で壮大な想像力も、自然の素材を用いることで、容易に表現の幅を広げていくことができた。一方では、「たらまんにゆんぐとぅ」の、浜の「あだん（アダン)」や「そうき木（モンパノキ)」を用いた表現が、孤

島に流された継子の悲壮な状況を十二分に表現する助けとなっている。壮大な人生訓から緻密な情緒の表現に至るまで、表現の素材として植物(自然)が用いられているといってよいだろう。

植物歌にみる歌唱者達の自然の把握の方法は、農耕や漁労、その他の協同作業や村の暮らしの求めを土台にしている。そして、歌の思いも、また、それらの暮らしの中から湧き出る思い以外の何物でもない。植物歌のどれも、それぞれ実際の生活の場面が浮かぶ様な生活の歌である。八重山歌謡に見る具象表現からは、生活の具体から生まれた思いと表現が伝わってくる。そして、文字を持たなかった頃からの歴代の歌唱者達が、壮大な人生訓から緻密な情緒の表現に至るまで、共同体としてぶれることなく歌の内容を謡い継ぐことができるのも、島の生活を共にする誰もがわかるものの像を以って表す具象表現の構造の関与が大きいと考えられる。

第３章　稲作歌の表現

第１節　稲作歌の背景

１．はじめに　－ 史料と方法 －

第 3 章では、植物歌の中のイネが関わる歌を取り上げる。そして、特に稲作農耕と深い関係にある歌を稲作歌と呼ぶこととして、その表現を中心に考察する。はじめに、稲作歌を考察するに当たっての本稿の方法について述べておきたい。

イネが歌謡の世界の植物の中で特殊な位置にあることは既に述べてきた。その理由に、歌に謡われているイネの出現数は多いが、稲作農耕に関わりイネの豊穣を願い感謝する歌と、供物としてのイネを謡う内容がほとんどを占めていることや、稲作歌はその内容が一様であること、そして、日常の食の風景としてのコメ（ごはん）が謡われている歌は数篇にすぎないことなどを挙げてきた。こうした特徴は、八重山のイネに関わる歌及び稲作歌が、イネ栽培の農耕暦を中心に行われてきた共同体の祭祀・儀礼と、極めて密接な関係にあることを示唆しているものと考えられる。

農耕と儀礼の一般的な関係について、『稲作の神話』（大林　1973）の中で大林太良が次の様に述べている。

> 未開社会や古代社会においては、農耕は単なる技術的営みでない。農耕を基礎づける神話や豊作を確保すべき儀礼も、農耕の本質的な一部を為していることが普通である。
>
> （前掲書　p. 89）

稲作歌を伝承する八重山社会が未開社会や古代社会かどうかは別としても、基本的には、八重山の農耕と農耕祭祀儀礼の関係も、指摘されているような関係にあると考える。すると、農耕の本質的な一部を為す農耕祭祀儀礼のなかで、その儀礼の主題を言葉によって表現する役割を担う稲作歌もまた、農耕の本質的な一部と位置づけられる。そこで、稲作歌の考察にあたっては、単なる表現の考察ではなく、儀礼と分かちがたい関係にある農耕の技術的営みの側面を、歌の背景として詳しくみる必要がある。具体的に言えば、八重山の稲作の歴史や稲作を行う共同体の社会の構造、信仰等々の様々な事象が、歌の表現の背景として分析の対象に含まれる。とはいえ、本稿

の目的は、稲作の歌の表現の研究にあり、稲作の技術の歴史等の考察については、稲作技術そのものが研究の目的ではなく、歌の背景として本稿がどのような理解にたって稲作歌の考察にあたるかを明らかにするためのものである。

分かちがたい関係とすれば、稲作農耕あっての稲作歌であり、稲作歌の背景の考察の早道は、いつから八重山の稲作が行われてきたかを知ることである。しかし、八重山の稲作について、文字に記述されて残された資料は極めて限られており、八重山の稲作がいつからどのように行われてきたのかは、考古学など他分野を含めても研究途上の課題である。

そのような研究事情にある現在、八重山でどのような水田稲作が行われてきたかということについて記された最も古い文字資料は、『朝鮮王朝実録』に残された15世紀半ばの朝鮮漂流民の報告にみられるものである。この報告については、後の項で詳しく触れるが、朝鮮漂流民が漂着時に見た与那国島では、すでに、ある程度の水田耕作の農作業の経験を積み上げていたことが窺えるのである。ただし、与那国島の例を以って、八重山全体の水田稲作について、同様なことが言えるわけではない。

例えば、考古学での近年(2016 年)の成果に、以下のような報告がされている。石垣島の名蔵地区の浦田原地点のトレンチ(掘削)調査で、イネやオオムギなど栽培植物の炭化種子が検出された。それに対する所見で、次のように記されている。

> 「仮に、炭化材の年代値が沖積土壌の形成年代で、炭化米や炭化オオムギの年代値が谷戸水田の稲作と丘陵地の畑作の開始時期だとすると、周辺の照葉樹林が開墾され、空き地となった丘陵から浸食土壌が流入することによって、1000–800 年前以降に谷戸内の沖積化が進行し、400 年前には水田稲作も適した環境が整ったと考えることができる。」(山口徹・小林隆太編 2016　p. 92)

上記に記された年代を世紀に置き換えると、11 世紀～13 世紀以降の土地の沖積化を経て、環境的に水田耕作が可能になる時期は 17 世紀ということである。石垣島の一地域の陸稲・水稲の稲作の環境を巡る年代の示唆としては興味深い。けれども、『朝鮮王朝実録』の漂流民の報告[1]に見る 15 世紀後半（1477 年）の与那国島では、

[1] 本稿で、『朝鮮王朝実録』と記し、特に断りがない場合、池谷望子・内田昌子・髙瀬恭子篇　2005『朝鮮王朝実録琉球資料集　原文篇／訳注篇』榕樹書林　の参照によっている。

すでに水田稲作が行われ、島人は米を好んで食べていたことが明記されている事と比べると、与那国島の水田耕作は、石垣島名蔵地区の水田としての土地利用より遥か以前に始まっていることになる。こうした例からも、八重山の稲作の事情は、島により、また、地域によって個別に異なっている。また、農耕栽培の変遷で一般的に言われているような水田稲作に至る変遷過程を想定すると、水田稲作以前の何らかの農耕が考えられるが、15 世紀以前に、いつ、どのような稲作及び穀物栽培の変遷を辿ってきたかということについても、あくまでも想像はできても知ることはできない。

しかし、本稿では、現在の時点でという条件で、稲作歌の理解に必要な背景として八重山の稲作についての考察の起点を、15 世紀半ばの朝鮮の漂流民の報告にみる八重山の共同体の暮らしとして、その時期前後からの八重山の共同体の稲作事情を、稲作歌の背景に想定して考察する。21 世紀の今から遡って、遠くても 600 年前後以降の歴史時間の上で、八重山の稲作と稲作歌について考えたい。このような歌の背景としての歴史史料については、八重山の 15 世紀から 18 世紀の古琉球と近世の２期の区分を念頭においたものである。これらの時期の史料を取り上げるのは、以下の理由がある。

一つに、現在まで続いている農耕祭祀の長い歴史の中で、儀礼の伝統は変わらなくとも、生活の変化に合わせて、儀礼の具体性には変化が生じるのはよくあることである。また、古謡の一般的な性格として、歌唱者個々人の思いを表すわけではなく、歌唱者達が属する共同体の総意を表出していることが想定できる。15 世紀から 18 世紀の時期は、島民の多くが農耕に従事している環境下にあって、農耕祭祀の豊穣の祈願が、共同体全体の人々の総意として、生活の実体の願いと重なるものだったと考えられる。また、現在まで農耕祭祀の歌が伝承されてきた期間において、作物の豊穣の祈りと儀礼の言葉の機能とが、直接的な表現で結ばれている時期と考えられる。それは、現在も村々で行われる種取祭や結願祭・豊年祭等を例に比べれば、明らかである。現在の農耕儀礼は、村々で実際に農耕が行われている、いないにかかわらず、農耕歴に添った折々の年中行事として、地域の繁栄や人々の幸福と健康の祈願を目的として継承されている。

もう一つの理由は、八重山歌謡の稲作歌が、農民のための作物の豊穣を願う本来の意味だけを背景に謡われている様相にはみえないことである。その要因として、第１章で述べたように、テキストに収載された稲作歌の背景には琉球王府の影響が考えら

れる。それは、共同体社会として豊穣を希求することは同じといっても、琉球王府統治以降の百姓と役人という立場の異なる社会構成員の出現による目的の多様さが想定される。そのため、稲作歌の考察には、琉球王府の支配下の共同体が、どのような社会であったのか、また、その時期に島の社会がどのような変遷を辿ってきたか等の事象について、歴史資料を通して確認する必要がある。

史料としては、主に『朝鮮王朝実録』、「慶来慶田城由来記」の 2 篇の史料から、古琉球時代の 15 世紀～16 世紀の八重山の稲作に関する技術的記述と、稲作にともなう共同体社会の信仰、習俗等の文化的記述、そして、それらの変化等の事象を中心に取り上げる。次に、古琉球に続く、近世琉球の王府統治下の稲作の資料は、王府や蔵元から布達された「農務帳」や「八重山島農務帳」等の近世農書と「規模帳」、王府と八重山との往復書簡等々の史料の中から、稲作の歌の解釈と理解を目的に、必要な資料を取り上げたい。それらの資料から、技術的な側面としては八重山でどのような稲作が行われていたか考察する。そして、稲作の思想的な側面として、八重山の稲作が行われるにあたって、基層の農民層の他に、どのような立場と見識をもった人々が混在し、共同体としての共同性の思考にどう折り合いを付けていったか、何が変化していったのか等を歴史の史料に考察する。

稲作と稲作の文化の考察には、稲作の伝播という問題も、広域で考えなければならない側面をもつ。けれども、稲作の伝播の問題を取り上げるのは、大幅に本稿の目的の域を越えるので、ここで 15 世紀の八重山の近隣地域と広域の状況について、簡単に触れておきたい。

八重山に一番近い島嶼である宮古との関係について、文字に残されたこの時代の資料は、両地域ともに少ないが[2]、八重山側の記録である「慶来慶田城由来記」によれば、八重山が琉球王国の統治下に入る以前から、宮古の豊見親（族長）の命に応じて建築材や船材に使う樹木を切りだすなど、八重山の資源が注目される関係にあったことがわかる記事等(石垣市総務部市史編纂室　1991　pp.4～5)が残されている。15 世紀後半の宮古が、既に船を持ち、外の世界との交流を持っていたことが推測できる。次に沖縄島では、13 世紀から 15 世紀の間に各地域に按司が台頭して、三山（中山、

[2] 新里によると(新里　2003　p.11)、「宮古の最古の文献資料は、1705 年(康熙 44 年・宝永 4 年)に、首里王府にあてた報告をもとに編集された「御嶽由来記」である。（中略）勲功ある人物等について記している。」とある。

南山、北山）の動乱の時代を経て、15 世紀初頭（1429 年）の琉球国の成立に至る時代である。宮古・八重山は、まだ王府の支配の外にある。琉球国成立後は、国家として、中国との冊封関係をはじめ、薩摩や日本へ向けて琉球紋船や商船を送って関係を取り結び、朝鮮とは王府からの遣使や、漂流民の相互返還等の交流が行われていた。また、東南アジアの南方諸国とは海を越えた交易、交流が盛んに興っていく。そして、日本本土との関係で言えば、日本の足利氏の室町幕府時代にあたり、東アジアの海域で、「倭寇」と呼ばれる海賊・私貿易の集団が横行し、幕府が倭寇を禁じて明との勘合貿易を開始した（1404 年）時代である。また、李朝朝鮮は倭寇の根拠地と考えた対馬を襲撃するが（応永の外寇　1419 年）、その後になって朝鮮と足利幕府の交易が定まっていく。

上記のような周辺地域と海洋で繋がる八重山諸島は、様々な漂流民のような偶発的で意図せざる交流があっても不思議はない状況にあったことがわかる[3]。『朝鮮王朝実録』にある朝鮮漂流民の八重山の記録も、そうした状況の中の一例であろう。15 世紀前後の周辺の環境を含めて八重山諸島を見ると、たとえ文字記録には残されていないとしても、 八重山の人々が島内の暮らしの情報だけに閉ざされていたと考えることは、現実味に乏しい。

以上が稲作歌の表現の研究にあたって、農耕全体の普遍的な農耕技術と農耕儀礼の関係の中に稲作歌を位置づけ、歌の表現の背景となる八重山の稲作の歴史や稲作を巡る共同体の社会の構造・信仰等々の様々な事象の考察も含める理由や、参考とする主要な資料等、研究方法の概要である。

２．資料に見る古琉球・近世の稲作事情

（１） 古琉球の八重山の稲作事情

八重山の稲作についての古い資料は、15世紀末の朝鮮王朝の文献に見られる。『朝鮮王朝実録』の中には５件の琉球への漂流記録が残されている。その内で、八重山の稲作が詳しく記事になっているのは、『朝鮮王朝実録』の「成宗実録」中の朝鮮漂流

[3] 17 世紀の「参遣状」には、異国船の漂着に関する記事が載っており、異国船の漂着がなくなるよう御嶽に立願する祭事を行いたい旨の訴えが、たびたび出されている（石垣市総務部市史編集課 2015　pp. 103-104）。

民の報告[4]である。朝鮮漂流民達が八重山諸島内で滞在した島々は、伊波が「朝鮮人の漂流記に現れた　十五世紀末の南島」（伊波　1975）のなかで比定している。それによると、漂流民は与那国、西表島、波照間島、新城島、黒島、多良間島、伊良部島、宮古島を経路として、与那国島に「六か月滞在した後、島から島へと順々に送られ、さらに六か月もかかって、南島文化の中心なる沖縄まで来ることが出来た。そして、そこには三か月滞在した後、日本を経由して、ようやくその本国に送還された。」（前掲書　p. 59）としている。漂流民が漂流したのは二月の事である。滞在中の漂流民達は、当時の各島の人々の食料事情や、農耕、稲作の方法、作物の保存方、稲作に伴う禁忌、その他島々の民俗・習慣についての観察を伝えている。記録は稲作に関して、かなり詳細に触れている。以下に、稲作・農耕に関する記事を中心に漂流民の報告を見てゆきたい。

『朝鮮王朝実録』による報告によると、彼らが最初に漂着した与那国島の人々の食に関する記事の中には、「一、専ら稲米を用う。粟有りと雖も種うるを喜ばず。」（池谷他　2005　訳注篇［179］ p. 228 ）、また、「酒は濁有りて清無し。米を水に漬け女をして嚼ましめて糜と為し、之を木桶に醸す。」（前掲書 p. 229）とある。これらの記事からは、与那国島で稲作が行われ、食べるコメが充分にあったことを伝え、コメを材料とした口噛みの酒が造られていたこともわかる。その他にも、コメを搗き餅にし煮て食べることも書かれている。また、粟や稲の耕作の様子について次の様に述べられている。

> 一、(ア)鉄冶有り。而どれも耒耜を造らず。小鍤を用て田を剔り草を去りて以て粟を種う。(イ)水田は、則ち十二月の間、牛を用て踏ましめ播種す。正月の間、移秧す。鋤草せず。二月、稲方に茂る。高さ一尺許り。四月、大いに熟す。早稲は四月刈るを畢り、晩稲は五月方に刈るを畢る。刈るの後、根荄復た秀で、其の盛ること初めに愈る。七月、八月、収穫す。(ウ) 未だ穫せざるの前、人皆謹慎す。言語すと雖も亦た厲声せず、口を蹙めて嘯を為さず。或いは草葉を捲きて之を吹く有れば、杖を以て之を擬して禁ず。収穫の後は乃ち小管を吹くも、其の声甚だ微細なり。（前掲書 p. 230）
>
> ＊引用内の記号（ (ア) ・ (イ) ・ (ウ) ）は、筆者の加筆。

[4]『朝鮮王朝実録琉球資料集　訳注篇』『 同　原文篇 』（池谷他 2005）では、八重山漂着について記されている 1479 年帰還の漂流民の報告は［179］である。

上の記事には、与那国島で行われていた耕作の様子と、加えて、稲の生育する時期の禁忌についても書かれていることは注目される。それぞれについて内容を確認してみたい。

（ア） と（イ）は、耕作について記されている。

（ア）は粟の畑作について触れている。畑作で鍛冶はあるが、「耒耜（らいし）」[5]は造らず、小さな鍤で畑を削り草を取って、そこに粟種子を播く、と記している。朝鮮漂流民の目には、大きな鋤でなく、小さな鍤のみで行う作業が本国の畑作との差異と映ったのだろうか。

（イ）は水田稲作について伝えている。水田は 12 月の間に牛に踏ませて田拵えをして、播種する。正月には鋤で草取りはせず、田植えをすると、2 月には一尺（30cm）ばかり生長し、4 月には熟して、〈早稲〉の稲刈りは 4 月に終わり、5 月には〈晩稲〉の収穫をことごとく終わる。収穫後の稲の根株から再び旺盛に育つたイネは、７・8 月に収穫する、と伝えている。

上記には、稲作についての次の重要な情報が含まれている。

①「冬作」がなされていたこと。

②田拵えは牛に田を踏み固めさせて行っていたこと。

③「移秧す」とあるのは、「秧」は苗のことなので、「田植え」がおこなわれていたこと。

④早稲、晩稲があったこと。

⑤刈り取りの後のヒコバエ[6]が、利用されていたこと。

この記録は 15 世紀末の与那国でおこなわれていた稲作の播種から収穫までを伝えており、①～⑤までの稲作の事情を見ると、道具は素朴だが、亜熱帯の島の自然環境にあわせた農耕が行われていたことが窺える。細かい事を言えば、漂流民の滞在期間から考えて、直接見た事と想定した事の区別等、漂流民の報告に若干の疑問がないわけではないが、漂流民も自国で稲作の体験や知識があると考えられるので、言葉が通じないとは言っても、おおよそのことについては正しい観察がなされたものと思われ

[5]「耒」は鋤（すき）の柄、「耜」は鋤の刃。農具の一つ。鋤。（北原　2003）

[6] 伊藤によれば、ヒコバエ利用の稲作は、「二番稲法」と呼ばれて、稲の野生の頃からの性質に由来するのか、稲の品種によるものか、あるいは風土の力、耕作慣習の結果にもとづくのかは明らかでないが、15､6 世紀ごろ沖縄の島々で、この慣行は、かなり広く存在していたらしい（伊藤 1974 p.17）、とある。

る。

次に、漂流民の報告は、稲作に関わる習俗にも触れている。

（ウ）稲の実入りの頃の人々の禁忌について、人々が皆、大きな音を立てることを慎み静かに振る舞い、互いに話言葉も声をはりあげたりしないで口笛も吹かない、と観察している。また、草を巻いて音を出す行為をしたものがあれば、むちで打つなどの刑罰もあったことが述べられているのである。こうした禁忌からは、与那国島の島民の間に、稲霊の信仰が強く信じられていた事が窺える。イネに関わる習俗が漂流民達の客観的な目撃の記録として残されていることは興味深い。

稲作に関する記事は、その他にも刈り入れの方法、農耕に用いる道具、保管場所や方法などについて、細かな観察をとおした報告が記述されている(前掲書　pp.230-231)。

また、漂流民達は、沖縄に送られる迄に通過した与那国島以外の島々の稲作の様子も伝えている。西表島祖納の様子として、「稲と粟とを用う。粟は稲の三分の一に居(あた)る。収むる所の禾は居に近き閑地に積む。高さ俱(とも)に二丈許り。同里の人、一処に聚積す。多き者、或いは四、五十余所に至る。」(前掲書　p.231)と記している。イネについての記事があるのは、与那国・西表島祖内と宮古島で、低島の波照間島については、「黍・粟・牟麦有り。水田無し。稲米は所乃島より貿易す。」(前掲書　p.232)と記し、黒島や新城島等の島々についても、稲作は行われず、他島（祖内や「余所」）から「貿易」していたことを伝えている。宮古諸島については、多良間島は黍・粟・麦が有り、稲は無しと見られている。伊良部島には少ないが稲もあり、そして、宮古島は稲・黍・粟・麦もあり、炊飯の鉄釜などが在り、琉球国との貿易によっていること等(前掲書 pp.234-235)が記され、宮古諸島は、低島の島々といえども、貿易を行い、多少八重山と異なる環境にあることが窺えることは興味深い。

上記に挙げた以外にも、琉球の他地域の農耕・農作物等の様子などが報告されており、限られた地域と期間ではあるが、15 世紀半ばの琉球地域の島々の稲作の違いなどの情報を客観的な目を通して知ることができる。

以上は、『朝鮮王朝実録』に残された 15 世紀半ばの南琉球の稲作と米食の事情、加えてイネに関する民俗について取り上げてたものである。

この報告について八重山の稲作に関連して重要と思われる点を、以下の３点にまとめられる。

一つは、稲作の技術に関することである。当時、12 月の播種に始まる「冬型」の水田稲作の農法が行われていたことである。15 世紀末の八重山諸島の稲作は、すでに、八重山の風土に添った稲作を行っていたことになる。ただし、それが例えば、与那国島では、どれほどの年月をかけた試行錯誤の結果に獲得した経験的な農耕技術なのか、又は、いつ頃かに他所から伝授された知恵なのかは、漂流民の記録からは読みとることはできない。けれども、与那国島や西表島のイネの収穫の様子や米食の様子をみると、島の人々の食を満たす稔りと、さらには、稲作のできない低島に暮らす人々にも、分け与えることができるコメが収穫できていたことが記述からは読み取れる。当時の八重山諸島の人口がどれほどのものかわからないとしても、余剰のコメが収穫可能な耕作の技術が、一朝一夕で確立できるとは思われない。その点からみると 15 世紀半ば以前から、文字が伝わる以前の八重山に、稲作技術と稲作にともなう文化は、受容されていたことが想定できる。

次に、八重山の農耕全般と、島々の暮らしの連携についての記述である。与那国、西表島では、水田稲作が行われていたこと、そのほかの小さな島々では、イネでなく、アワ・キビ・ムギ等畑作物の栽培が中心であったこと、米がない島は余所から「貿易」していこと等を伝えている。漂流民の観察には、島の人々が米を好み、他島から交易して食していた日常が窺える。これらから、八重山諸島では、水田稲作が中心的な農耕というわけではなく、畑作の穀物栽培との両方が、それぞれの島の環境にあわせて行われていたと理解できる。そして、環境の違いによっておこる日常の物資の過不足は、八重山諸島内の近隣の島々で、物資をやりとりする往来が、既にあったということも覗える。こうした島同士の繋がりを可能とする、海を渡る船の製作技術や航海術もすでにあり、それによって、朝鮮漂流民を八重山の島々を転々と送り届けるなど、共同体同士の連携も可能にしていたと推察できる。

報告にみるもう一つの興味深い点は、15 世紀後半の八重山の稲作に関連する習俗の様子である。それは、与那国島の記録に、島の人々のイネに向けられた信仰とそれにともなう禁忌等の習俗を垣間見る記述が含まれていたことである。イネの実入りの頃、人々は大きな音を立てる行為を慎む慣習があり、犯した者は杖で罰されるとも記され、厳重に守られていた慣習であることが窺える。ここには、何らかのイネに対する神聖の観念や稲霊の信仰が、島の人々の習俗に反映していると見ることができる。

伊波普猷は、同じ漂流民の報告から、稲作の伝播について想像を巡らし、「稲は最

初その原産地に近い与那国に輸入されて、漸次南島に伝播したような気がしてならない。」(伊波　1973　p. 82)と述べている。これは、漂流民の観察が残した与那国から宮古にいたる稲の分布と度合いとを比較して、伊波が得た印象を述べたものである。そして、低島の宮古島のコメについて、「多分沖縄本島から輸入されたであろう。或は島民自ら馬来半島辺にいって貰って来たと考えられないこともない。」(前掲書 p. 83)と想像を述べている。この伊波の発想の背景として、古琉球時代の沖縄本島の稲作について、「稲は最初或いは与那国を経て来たかもしれないが、(中略) 海外貿易を開始していたから、或いは印度支那および福建あたりから輸入して繁殖させたのではないかとも思われる。」(前掲書　p. 83)と述べている。伊波の発想が古琉球時代の琉球人がタイのアユタヤやマレーシアのマラッカ等との交易を盛んに行っていたことを思ってのことか正確にはわからない。けれども、伊波のこの指摘に関連して、稲作の儀礼に注目してみると、マレー半島の部族の稲米儀礼の事例が数多く調査されている『マライシアにおける稲米儀礼』の「発育と成熟の儀礼」(宇野　1941 pp. 292-307) に、稲または稲霊に対する敬愛を表す習俗と、それにともなう禁忌が数々報告されていて参考になる。そこに記された稲霊に対する敬愛を表す習俗は、朝鮮漂流民の報告にある与那国島の島人達が、刈り入れ前に音を立てない様に振る舞う習俗と通じてみえるものがあり興味深い。しかし、朝鮮漂流民の八重山についての報告には、信仰的な行為について触れているだけで、祭祀・儀礼的な記録は含まれていない。漂流民が漂着した時には、農耕儀礼祭祀がまだ共同体の伝統として熟していなかったのか、もしくは、外来者の目には触れなかったか、短期的な滞在だった等、その理由は不明である。しかし、稲作が稲作の周辺文化を伴って伝播するという普遍性を考えれば、漂流民達が見た与那国島の稲の収穫時の習俗は、朝鮮・中国・マレー半島等の広範囲な稲作農耕にともなう文化の一画にある習俗であることには違いない。

以上、『朝鮮王朝実録』にみる 15 世紀後半及びそれ以前の八重山の稲作について特に注目される事項を、稲作の技術について、農耕と暮らし、稲作の儀礼的習俗の 3 点にまとめて記した。これらを見ると、琉球国の統治下に組み込まれる以前から、八重山・宮古の南琉球地域では、イネ他穀物の農耕栽培が行われ、島々の連携もあり、すでに「未開・原始」、或いは「狩猟・採取」という語に象徴される様な、人々がそれぞれの島の中だけの自然に依拠した自給自足の生活をする状況にはないことは明らかである。そして、島の人々の稲作の精神風土には、共同体の祭祀の様式が成立していた

かどうかは不明だが、イネの稲霊等、アニミズム的な信仰が強く守られていたと考えられる。これらが、15 世紀後半の凡そ１年間、八重山に滞在した朝鮮漂流民の眼を借りて明らかになる、琉球王府による統治以前の島の社会と稲作を巡る人々の姿である。

（２） 古琉球から近世への過渡期の稲作事情

八重山の古い記録に「慶来慶田城由来記」がある。『朝鮮王朝実録』が古流球の記録を残す資料とすると、「慶来慶田城由来記」は、古琉球から近世への過渡期を映している資料と位置づけられる。本稿では『石垣島史叢書 １』（石垣市総務部市史編集室 1991）に収められている史料を用いる。その「解題」によれば、「「慶来慶田城由来記」は、八重山の有力な家系の錦芳氏（きんぽううじ）の先祖とされる慶来慶田城用緒から 10 代用州にいたる間のさまざまな由来を記録したものである。」と記され、「当時の八重山における政治・社会・経済の状況や習俗・伝承を知ることができる貴重な史料である。」とされている。「慶来慶田城由来記」の内容は、慶来慶田城家の先祖代々の当主の言い伝えが後代の当主によって書き残されている。従って、史料の性格としては、土地の有力者の立場から見た、当時の島の人々の意識等を読み取れることが特徴である。

この「慶来慶田城由来記」（以降、略して「由来記」と記す）から、稲作に関連した記事を取り上げてゆきたい。記事の内容にみる稲作農耕に関する事柄としては、稲作の方法、神遊び・種々の農耕習俗、儀礼・星見・種子取り儀礼・収穫儀礼等、農耕の技術と儀礼にまつわる島の人々のしきたり等の記事がある。

「由来記」の前半部の慶田城筑登之用常の記憶の語りを聞き取った記述は、かつての農耕の技術や習俗をよく伝えている。イネについては、共同体の儀礼や供え物等、また、播種の日撰り、イネが熟する時期の民俗、稲刈りの作業の仕方や注意事項と習俗等が、「何月何日頃」と期日も仔細に記されている（前掲書 pp. 8-9）。その一方で、サツマイモの伝来やイネ以外の穀物についての耕作、焼畑のこと等の記述（前掲書 p. 15・p. 19）の記載もある。その記事からは雑穀・豆類を沖縄から招き寄せている事がわかる。特に、サツマイモの栽培方法の伝来(八重山への伝来は 1694 年)は、農民にとっては自身の食料と直結する重大な関心事であったはずである。ただし、それらのイモ・豆類の栽培については、１項目の記述が当てられているにすぎない。イモや雑穀とイネに関する記事を対比してみると、栽培植物の中で稲作に関連している事項

が多く取り上げられているところに、イネの特殊性、もしくは回想者・記録者の視点が窺われる。

ここでは、とくに注意を払われていると思われる稲作の技術、稲作農耕祭祀、稲作の習俗等に関するものを中心に取り上げたい。なお、以下に記載する「由来記」の引用文は、「由来記」（石垣市総務部市史編集室　1991）に付されている訳文を主に記している。

稲作の技術

種取りと播種は、1 年の稲作農耕の始まりの重要な作業過程である。「由来記」（前掲書　pp. 1-24 ）には、農作業のなかでも、種子取りと播種について、次の様に詳しく伝えている。

> （ア）むかしは暦もなく、いろいろな草木の芽の出るさまを見て、これで春夏秋冬の四節を分け定めた。もっとも、種子取りも八月の秋分から六一日目頃がよい。また、その頃は冬の季節に入る時分で、立冬前の夏水につけ、立冬後の冬水に蒔き入れる考えであるが、いつも六一日目に夏水につけ冬水に蒔くとは限らない。十月一日から十月二五、二六日の間に、稲が早いものか、遅いものかをよくよく考え、壬寅の日に蒔き入れる考えでいる。また、もり星（群れ星。スバルのこと）が六一日、冬の節に入る時分に、入相時分に月が寅の方から上り、おね橋の上へ上がる頃、夜明けに戌の方へ五、六ひろの間に見える時分に種子取りをするのが良い。これは、むかし、農耕に詳しい人が考えて定めおいたものと伝える。（前掲書　pp. 9-10）
>
> （イ）十月一日より同十五日、閏年には同二五、二六日に日延べする。この時分は稲の蒔き入れなので、種子取りとして戌己甲乙壬癸の日取りでせいら（シラ。稲叢）から稲種子をとる。（前掲書　p. 10）　　＊記号（ア）（イ）は筆者加筆。

上記の引用文（ア）の内容には、播種の時期の決め方の変化が語られている。引用文冒頭部が伝えている内容は、むかしは暦もなく草木の芽の出るさまで、四季を決めたというものである。ここには、播種の時も日々の自然の移り変わりの観察による経験則を活かしていたことを伝えている。動植物の季節変化を基にした自然暦である。けれども、そのあとに続く「種子取りも八月の秋分から六一日目頃がよい」という記事以降には、暦、二十四節気、十干、十二支等の干支等の用語が使われている。また、

「星見」や「月齢」など天体の方位等も組合わせながら、種子取りの日取りを選んでいることがわかる。（イ）の種子取りの日撰りの決定に際しても「閏年」という暦の知識が使われている。（ア）の引用にみた、自然歴の知恵に従っていた農耕に加えて、天体の複雑な知識・暦等が受容された農耕の技術の変化が窺えるのである。しかも、これらの農耕の知恵と知識を、「むかし、農耕に詳しい人が考えて定めおいた」と表現し、一般的な伝承のように述べている点は興味深い。18 世紀後半に在地の役人の職分を生きた用常が、すでに暦を初めとする様々な知恵・知識のすべてを、既知のものとして受け入れている語り口は、稲作技術の変遷の時間を感じさせる。歌との関連で見ると（ア）の種子取り時期を説明する「夏水」「冬水」という用常の語りに使われている言葉は、稲作歌の詞章にも用いられており共通する。

中鉢良護は「王府の暦をめぐる諸問題」（中鉢　1993　pp. 18-77）で、琉球王府に暦がどのように伝来し、周辺社会への暦の波及によって、社会にどのような変化をもたらしていったか等について論じている。暦について中鉢は、中国暦（官暦）を、「一日と一月と四季（一太陽年）のそれぞれの周期を調和させるための工夫をこらした厳密な構造を持っており、(中略)十干十二支の宇宙論的な意味づけが与えられている。」（中鉢　1933　p. 18）としている。それに対置する「「暦以前」の〝こよみ〟」を、「自然のなまの直接性を長い時間をかけて体内に刻む「自然観察者の眼」」（前掲書　p. 18）と説明している。中鉢によれば、王府に暦が導入されたのは、察度が明に入貢した 1372 年に、「冊封のシンボル」（前掲書　p. 21）として、活用を度外視して与えられたことに始まるが、暦の実用化の欲求が王府の内部に高まるのは、それから凡そ半世紀以後、尚巴志の時代 15 世紀に入ってからのこととしている（前掲書 p. 22）。また、八重山への暦の波及は、さらに後で、王府の役人と在地の役人の関係をとおして、家譜などの生年月日の記載をみるようになる 16 世紀後半のこと、という(前掲書　p. 40)。そして、「暦の個人的かつ非公式的な利用は、在地役人がおこなう祭祀の内容にも影響を与えたであろう」（前掲書　p. 41）と指摘している。

以上の中鉢の考察をもとにすると、「由来記」引用部の用常の回想にみる 16 世紀後半前後の農作業の技術は、「暦以前」の農耕を基盤にしているところに、「暦」の「厳密な構造」の影響が混じってゆく過渡期の記述とみえる。

また、歌との関係で言えば、稲作歌の冒頭部の日撰りを謡う詞章[7]と関連させてみると、興味深い指摘である。

「由来記」前半部の用常が語った西表の稲作農耕は、島の気候風土にそった冬作の農耕システムをおこない、後に、暦や天体の運行などの知識も､在地の役人らは受容し活用して行われていることがわかる。また、田の草取りの指示や、刈り入れの作業の注意点他、農作業の指示についても怠りない、としている。島の有力者の稲作に対する認識には、作物の生育を島の自然の観察による経験則にゆだねていた「暦以前」の知恵と、星見・月齢の動き、暦等の当時の外来知識の混在が著しいことが窺える。

そして、ここで注意すべき点は、上記の記述が西表島の有力者の家系の回想の記録だということである。星見の方法や暦を扱うのは、文字が使える島の有力者層であったことは想像がつく。暦が暦としての利用以前に、「冊封のシンボル」であったことがよく示しているように、一般的に、暦は権力の発現の一つの形である。そうした性格を持つ知識を島の有力者層は、自然暦に従ってイネの栽培にあたっている同時代の普通の農民層に、どのように広げたのだろうか。その点を考えるに当たっては、経験則と外来知識の技術の両方が、実際の農耕に生かされるためには、どのような共同体社会が成立していたのか窺える記事がある。用常の回想録は、島の共同体の合議の方法について、次の様に述べている。

> 村に何か事が起これば、村の年長者が老人のところへ行き、田ぶさ・世持まで、老人がいう善悪の判断により働き、田畑の耕し、時節時節の農作、年中の折目折目、または、自分自分の大きな仕事までも村の老人のいうことを基本にして、田ぶさ・世持まで共同で相談のうえ、することになっている。（石垣市総務部市史編集室　1991　p.13）

この記事は、島在住の古老を筆頭において、在地の役人を中心に、村に必要な様々な問題が合議されていたことを伝えている。同時に、村の実情を知り抜いた人々の合議を経て、自然暦と星見や暦などの新しい知識が農民達にも伝わり、農業技術の変化

---

[7] 代表的な稲作歌に「稲が種子あよー」の歌謡群がある。その詞章の冒頭部には、日撰りを意識していると思われる慣用句が共通する。以下は、石垣島川平村「いにがたにあよう」の例である。

（前略）

二　きゆなーぴぃーば　　今日の日を
　　くがにぴーば　むとぅいばし　　黄金日をもとにして
（以下略）

をもたらしていったことが「由来記」を通して推測される。それは、この後に取り上げる近世の琉球王府が『農務帳』を基にした合理的な農業振興策と、それを妨げる習俗の禁止令などの布達の方法と比べると、好対照である。

稲作農耕祭祀

「由来記」には、稲作の技術的な側面だけでなく、稲作農耕の祭祀の側面についても記されている。以下は、「神遊び」について書かれた記事である。

> むかし、神遊びという祝いがあって、老若男女がとねもと（トゥニムトゥ。宗家）の家々を定めて、その家に集まり、（中略）二、三カ月間も祝ったという。また、田地が荒れても踏みとおして稲作すれば、ことごとく実り、二、三カ月神遊びしても豊かな世の中であったと伝えている。（石垣市総務部市史編集室 1991 pp. 5-6）

冒頭部の「むかし」については、いつのことか正確なことはわからないが、記述からは 8 代目当主である用常から遡って、3 代目当主の祖納当[8]の間までのことと推察される。また、引用中の「神遊び」が何月に行われたかも、具体的に記されていない。冬作が行われていたことや、現在に伝承されている祭祀行事から推し図ると、収穫後から次の耕作期の播種までの間に行われる、豊年祭や結願祭等にあたると思われる。「神遊び」の伝承を伝える用常の関心の中心は、二、三ヶ月を神遊びに費やせるほど「豊かな世の中」であったということを伝えたかったように窺える。豊かさは、基準が相対的か絶対的かで、捉え方が異なるものである。用常は、18 世紀の近世八重山に生き、それ以前の暮らしを「豊かな世の中」と捉え、その豊かさの具体的事象を「二、三ヶ月を神遊びに費やせる」という言葉で表している。この用常の捉えた豊かさと、先の『朝鮮王朝実録』の漂流民の報告にみる、八重山の人々がコメを好み、自分の島にコメがなければ、他島から買って食べていたという、交易に用いられる余剰のコメの示唆の記述とが重なる。客観的な視点でみると、18 世紀前の八重山の島々は、農具に用いる鉄器も充分になく、生産性が低い貧しい島と見がちだが、生産性と人口とが釣り合い、自給の栽培作物で充分に食べていくことができ、余剰の作物もあり、また、合議で成り立つ小さな単位の共同体に暮らす人々の主観的な視点からは、

[8]「由来記」によれば、「三代の嫡子は祖納当、役名は西表首里大屋子、その時分の次第を左に記す。」（石垣市総務部市史編集室 1991 p. 5）ということわり書きがある。

自らの島の生活を「豊か」と感じたとしてもそこに矛盾はない。

「由来記」には、その他に稲穂が熟した際の初穂の儀礼、種取りの儀礼、刈り入れの儀礼等について記されている(石垣市総務部市史編集室 1991 p. 8、p. 10、p. 12)。特に、種取りにともなう行事は、次の詳しい記述がある。

> 種取りの日は、稲種子を蒔き入れ、苗代田から帰宅して神酒といはつ（イバツ。飯初）を頂戴し、村中の老人ならびに役人衆、おはま（ブバマ。おば）、うなり（ブナリィ。姉妹）が揃い、田ぶさ・世持が役人衆のお供をして始終めいめいで祝う。夜になると男女のうち、三、四人が、いはつこいとり（イバツコイトーリ）といって各家をまわる。（前掲書　p. 10）

そして、家々を回る男女の中の一人が「福の主」となり唱える「祝詞」[9]がある。以下に原文で記した。

> ㋐ 此殿内之苗ハ惣様犬の毛、まやの毛之事ニ出来、植時分ならハ苗代田取離引直、大まし、長ましあふし持行まきはうれ、いへとて差なてせより者、其夜ニ神の水、主之水あまさはういかいはか葉いて、すたかい白根うり、おるちんのならハ、よしけ竹本入、いはい草ニさかい入、穂出時分ならハ大穂たね、長穂たねまさらせ、実入時分ならハ石の実、かねの実入まさらしの願持参り申候間、 ㋑ 祝ひ物之品々、神酒・御五水・いはつ・味噌・まそ・蒜本・魚からもの・たくからもの被下度言葉をかさり懸候得ハ、＜以下略＞（前掲書 pp. 10-11）　　＊記号㋐（㋑）は筆者加筆。

上記の「福の主」の言葉には、（ア）の作物の成長への祝福の言葉と、（イ）の祝い物の品を求める言葉の 2 つの内容が含まれている。「由来記」の記述は、上記の「福の主」の言葉に続いて、家の主人が求めに応じて、「御酒・いはつ・味噌・塩・蒜本・魚の塩辛・タコの塩辛」等祝い物の品々を渡す様子が述べられている。そして、播種の日の祝いは、それらの品々を村中の家から集め料理をして、「宗家（トゥニム

[9] 読み下し文では「祝詞を奏上する」と訳されているが、原文では「言葉をかさり懸候得ハ、」と記されている。「祝詞」は、一般的には、人から神への願いを意味する。「福の主」が「言葉をかさり懸候」という原文の意味を「祝詞」と捉えるかは考慮の余地がある。

トゥ）」に老若男女が集まり祝う様がさらに続いて記されている。「由来記」に述べられているのは、播種の日の村の儀礼と直会の様子である。

ここで、各家を訪ね歩く「福の主」の言葉には、注目する点がある。「犬の毛、まやの毛」「大まし、長まし」「ういかいはか葉いて、すたかい白根うり」「よしけ竹本入、いはい草ニさかい入」「大穂たね、長穂たね」「石の実、かねの実」等、これらの詞章は、「福の主」の祝詞のなかに用いられた対語である。歌の呪的表現の一つとされる対語・対句の様式が用いられている。そして、これらの対句は、後述する八重山歌謡の稲作歌の「真世（まーゆん）がなしいのカンフチィ」や「稲が種子あよー」の詞章とよく類似している。この引用の文からは、石垣島川平村の年の暮れの儀礼に訪れる来訪神の「真世の神」が村の各戸を回って唱える「まーゆんがなしぃの神詞（かんふちい）」（外間他 1979　pp. 19-34）を彷彿とさせる類似性がある。もちろん、類似性ばかりではない。儀礼の主題の違いがある。川平村の「まーゆんがなしぃの神詞（かんふちい）」は、年の瀬の節祭に訪れる「神」の唱えであり、「由来記」に記された「祝詞」は、播種の日の行事の「福の主」が唱える言葉とされていて、そして、「由来記」に記された「祝詞」の内容は、イネの生育だけに限られた祝福の言葉である。「由来記」の記録には、川平村の「真世の神」の唱えのような、村、五穀、健康長寿、牛馬等、村人の生活の全般に亘っての果報が唱えられたとは伝えられていない。

「由来記」は、18 世紀の文字文化に触れている人の記憶を通して記されたものである。人の記憶は、事実というより、その人自身の意識や体験によって再構成されていることが普通である。用常が、過去の聞き伝えの記憶を語る際も、18 世紀を生きている用常の意識によって構成された記憶の記録である。そのため、記憶の語りに見る類似点等をどう解釈するかは慎重を要する点はあるが、「由来記」にみる西表島の祭祀と、その中の「祝詞」の言葉等が、口伝の歌以外に在地者の言葉によって記録に留められている興味深い史料である。

稲作の習俗

用常の回想では、農耕技術、種子取りや播種等の農耕祭祀の他に、イネの生育を妨げない配慮から生まれる日常生活上の様々な習俗も語られている。以下は、「由来記」に記されている禁忌の事例である。

（ア）三月一五日から五月に稲が熟して刈り始め、ほうれ（プーリィ。豊年祭）をする間は、女は月のさわりを持っているので、「持なこつ」「磯下り」「海よくせ」をし

てはいけない。若草が萌え立つ時分はよくよく慎み、自然の法則を恐れること。

（前掲書　p. 8）

（イ）四月一五日頃から、イネの穂が出て熟して、刈り取り、穂礼(プーリー。豊年祭)をする間は男女ともに磯下りをしない。四月十五日から五月始め頃は、穂が出て実がなる時分で、雨風は、ますます差し支えるので、磯下り、湊あさりなどをすれば、雨風は激しくなり、稲穂にさわり不熟となる。また、この時分は、魚が孕み、子を産む時期で、孕み魚を大小ともに取り絶やすことになる。（前掲書　p. 8）

＊記号(ア)（イ）は筆者加筆。

上記は、イネの熟す時期から刈り入れ迄の期間の禁忌について述べている。（ア）の例では、女性の「月のさわり」を理由に、「磯下り」他の行為をしてはいけないという戒めを述べている。女性の生理に対して、不浄という観念が働いている。また、（イ）では、同時期に男女共に「磯下り」してはいけないとし、その理由に、この時期に「磯下り」すると、雨風が激しくなる。雨が激しくなると、イネの成熟のさわりになると説明している[10]。また、「魚が孕み、子を産む時期」なので、産卵期の漁は控える為に「磯下り」しないように伝えている。

（ア）（イ）の同時期の禁忌は、海での行為を戒めている事で共通しているが、ひとつの禁忌の背景には、様々な側面からの異なる要素が混在している。仏教的な不浄の観念があり、龍神の祟りという信仰もあり、魚を捕り絶やす事がないように産卵期の漁を控えるという自然暦の知恵もある。「磯下り」という一つの行為の禁止に対して、様々な角度からの理由が混在して説かれていることは興味深い。これらには、宗教・信仰、そして、島の生活から得た経験則など様々な認識の混在が窺えるが、当時の人々にとっては、信仰を背景にした知恵も自然から得た経験則も暦や暦注の知識も、上手に撚りが掛かった一本の糸のように繋がり、問題の予防や解決方法として、自然なかたちで受容されていたものと見受けられる。

さらに、そうした一定の限られた時期の「磯下り」を、様々な理由を挙げて控えるよう伝えている大本の理由として、次の記述に続く。

---

[10] 「由来記」には、人間が「磯下り」すると「風雨が激しくなる」天候の変化の生じる理由は説明されていないが、喜舎場によると、「竜宮の神の祟りにあい、風波が荒れて稲を害する」（喜舎場 1977a pp. 232-234）という説明を加えている。

(ゥ) この時、田畑の草を取り、田の畦払い、田の垣、苧畑の垣などを築く時期で、子や孫まで油断なくかれこれ努め、稲が熟してき次第、間違いないようにしなければならないからと伝えている。（前掲書　p. 8）　　＊記号(ゥ)は筆者加筆。

（ウ）の引用に述べられていることで明らかなように、様々な背景の下に言われる戒めは、「磯下り」に時間を費やさず、稲の収穫に総力を尽くすようにという意図に集約され、それが数々の禁忌の理由のなかで一番重要なことだということが窺える。従って、（ア）（イ）に取り上げた禁忌の全体は、稲作に関わる習俗の問題として映る。（ア）（イ）で述べられていることは、もともとは、磯下りの行事も、同時期の魚類の繁殖も、また、この時期の強くなる雨風も毎年繰り返される島の季節の風物に属する事柄であろう。それらに対して、女性の不浄の観念や、龍神の畏れ、産卵期の漁の禁止等の戒めによって、人と自然の間のバランスをとる働きが、禁忌にみる先祖伝来の知恵である。けれども、「由来記」の記述では、それらの禁忌の理由の先に、稲作農耕の奨励が結び着けられていく。稲作の奨励のための稲作の習俗となる巧みさは興味深い。

以上のようなイネの生育に関わる生活上の禁忌は、「由伝有之候事（という伝えがある）」という結びの語を伴いながら「由来記」の中に記されている。

次に、稲の刈り入れに関わる儀礼と呪いについての「由来記」の記事を挙げてみたい。以下は、「神仏」に初穂や初米を供える儀礼について記されている。

初穂がでて熟してくると、日を選び、甲、丙の日にすこま（シィクマ。初穂をあげる儀礼）をし、戊、庚の日をあるん出（アルンダシ。初穂の籾をむいて供える）と名づけ、米の初を御嶽（ウタキ）の神仏へ供える。（前掲書　p. 8）

文中では、初穂や初米を御嶽の神仏に供える儀礼を「すくま」「あるん出」と呼んでいる。ここには、稲作の儀礼に、人と＜神＞という関係が発生していることが窺える。「すこま」「あるん出」の行事の日撰りは、十干によって決められていることが期日の表記からわかる。けれども、このように「暦」によって、儀礼の日撰りをすれば、その儀礼の日取りが、イネの稔りの最良の状態で刈り入れる日とずれが生じることは容易に想像される。作物栽培は、毎年異なる天候に左右されるのは珍しいことで

はない。そこで、初穂を供える儀礼の日取りの前にイネが早く熟して、刈りいれなくてはならなくなった場合の対処を、「由来記」は次のように伝えている。

> 蓑笠をかぶり、ひそかに口もきかず慎み、刈り取って結び、畦に上げておく。すこまの間は水を浴び、手、顔を洗い、湊を渡り人に行き会っても挨拶もせず慎み、すこまの日に、さっそく西泊・前泊へ舟で持って行き干し拵えすれば、何事も支障はないと伝えている。（前掲書　p. 9）

ここに示した引用部の内容は、イネの生育次第で決まる農民達の実際の農作業が、儀礼の日撰りにうまく合わない時に感じる神への畏れや罰の不安を回避し、実作業に支障をきたさないようにする呪（まじな）いのような決め事が説明され、四方が上手く収まる問題解決の方法が示されている。

イネの生育に必要な降雨量や日照や気温他、稲作をめぐる様々な自然条件は、毎年同じではない。そうした条件の変化を判断しながら、最良な収穫を得るまでに至る方法が、先祖伝来の経験則の知恵にはあることが普通である。とはいえ、月齢による旧暦が、自然のサイクルとよく適合しているとはいっても、年や場所によって異なる条件にすべて対処することは困難である。そのため、暦に添って決まった日撰りで行わなければならない＜神＞への祈願との間には、問題が生じて当然である。しかし、「蓑笠をかぶり、ひそかに口もきかず慎み、（以下略）」（前掲書　p. 9）という呪い的な振る舞いによって、問題を回避する方法が示されている。それを呪いと言うのは、現代的な見方の表現である。神罰の信仰の中に暮らす人々にとっては、災いを避ける現実的な術（すべ）である。神への儀礼に合わせることができない場合でも、呪（まじな）いによって、収穫作業の差し障りや農民の心の負担が起こらないよう考えられた共同体の柔軟な配慮が窺える。

ところで、先述した朝鮮漂流民の与那国島の報告には、イネの実りの時期には、大きな物音を立てることを慎む習俗が報告されていた。それはイネの実入りと稲霊の信仰の存在を示唆したものと考えられたが、よく似た習俗が、「由来記」では稲霊信仰を背景にした禁忌ではなく、神罰に対する不安の予防的対処の行為とされているのである。

「由来記」の記述には、稲霊への古い土着の信仰に加えて、収穫の感謝を捧げる神

の登場が見られる。また一方では、「暦」の知識とイネの生育という自然に左右される植物のサイクルとの間に生じるが矛盾等があり、それらのすべての混在を許容し、上手く融合してゆく知恵を記事に読み取ることができる。「由来記」の記述には、これらの例の他にも禁忌や呪いの習俗の記事が記されている。多くの百姓の人達の暮らしを律するのは、祖先から積み上げてきた経験則の知恵や信仰である。それらの知恵や信仰との関係を否定する事なく、むしろ媒介にして、村人にわかりやすく新しい知識や観念世界が開かれてゆく道筋には、島の古老や在地の役人達等、島のことをよく知り抜いた知識層による共同体の合議制が、柔軟な工夫を可能にする大きく調整の役割を果たしていたことが記述から考えられる。

ここまでの「由来記」の前半部にみる農耕関連の記事について、まとめてみたい。これは、在地の役人の立場から記録された西表島の記事である。しかし、「由来記」の記述からは、一般の農民の暮らしをよく心得ていることが窺える。稲作の技術的には、暦以前の自然の様から学ぶ知恵と、暦以降の外来の知識を融合させていく農耕の展開が記されている。また、その農耕を支える思想には、生活を取り巻く超自然の信仰・禁忌の意識と、御嶽の＜神＞の観念とが混在している。これらの記事は、共同体の人々の農耕を巡る日常の意識の世界をよく伝えているものである。「由来記」の前半部からは、農耕祭祀の主題を言語化する稲作歌の背景となる世界の一面を確認できた。こうした背景の基盤が稲作歌に、どのように見え隠れしているかということが、次節の稲作歌の解釈の視点の一つといえるだろう。

（3）近世の稲作事情

「由来記」は、15 世紀〜18 世紀にわたる在地の有力者が見た八重山の暮らしを記したものだが、その内容の後半部は、9 代用憲、10 代用州が在任した 18 世紀の八重山について記したもので、記述は明和の大津波の時で終わっている。「由来記」の後半部には、直接的な農耕に関する記事は減る。先祖伝来の地に暮らす慶来慶田城家の当主達が実際の農耕から離れ、在地の役人としての身分で、次々と発せられる政策に対応し、島の暮らしの変化について述べている。そこには、南琉球が王府の政治体制に組み入れられ、近世琉球へ変容する歴史のなかで、王府統治下の島の暮らしが、豊かになっていったとは決して感じていない記述内容が見られることは興味深い。けれども、この項では在地の役人層の思いはさておくとして、王府の統治の意図を強く反映して成立する「農務長」「八重山嶋農務帳」等の農書を通して、八重山の農業事情への

影響を中心に考察する。

史料の引用は、主に、『日本農書全集　34』(山田他　1983)から取り上げている。『日本農書全集　34』には、琉球列島の近世農書とされる 7 篇の資料が収載されている。この著書の福仲憲による＜解題 2＞によると、7 篇の資料は内容・性格・著者の立場で分類すると、役人による農書・農民による農書・その他の農書（筆者の性格がまだあまりしられていない農書）に分けられる、とされており、「農務帳」・「八重山嶋農務帳」は、役人の農書に分類されている（前掲書　p. 192）。また、蔡温が著した「農務帳」が各間切の番所を通じて示されるときは、それぞれの間切の農業や実情に応じて補足、付加され配布されるもので、その一つが八重山の「八重山嶋農務帳」である、とされている（前掲書　p. 197）。

薩摩の琉球侵攻（1609 年）以降の琉球列島の庶民は、人口増加や税制等の政治的要因で徐々に厳しい生活を強いられ、疲弊していった。そうした疲弊の状況を改革しようとうする指導者が輩出する。蔡温は、経済の安定のためには農が基本になると定め、農業の振興と安定、治山・治水等を徹底する目的で「農務帳」(1734 年)や「林政八書」(1731～1751 年)を配布している。それを基に八重山の実情に即して書き変えられた農業の指南書が「八重山嶋農務帳」である[11]。

また、「由来記」と「八重山嶋農務帳」の特徴を対比してみると、次の様に言える。「由来記」の記載事項は、1771 年明和の大津波で終わっている。すると、9 代用憲、10 代用州の時代を記した「由来記」後半と、1768 年に作成された与世山親方の布達した最初の「八重山嶋農務帳」は、社会的立場の異なる書き手が、同じ 18 世紀後半の八重山の農業事情を伝えているものといえる。「由来記」が、八重山在住者の内側からの視点で、古琉球から近世の共同体へと変遷する過渡期の稲作農耕の事情を書き伝えたものとするならば、「八重山嶋農務帳」は、八重山の農耕の実態の変革を目指す立場から、王府の農業の振興策の流れを汲んだ、稲作･畑作の作業手順等が細かに解説されている。

「八重山嶋農務帳」の全体の構成は、蔡温の「農務帳」に順じている。田畠の土地

[11]「八重山嶋農務帳」は、18 世紀半ばの 1768 年（乾隆 33 年　明和 5 年）に与世山親方に作成されたもの、1857 年（咸豊 7 年　安成 4 年）に翁長親方によって、不要部分の削除や、必要な事柄を新たに加筆して、八重山島頭に申し渡されたもの（前掲書 p. 164）、さらに、1874 年(同治 13 年　明治 7 年)にも、冨川親方が加筆して布達したものがある（前掲書 p. 197）とされている。『日本農書全集　34』所収は、最後の「八重山嶋農務帳」である。

の管理の仕方を記した「農地の保全」にはじまり、「作物の手入れ」「毎月の農作業」など細かく指示し、指導に当たる役人の心得までが書き加えられている。耕作に関していえば、イネとその他の雑穀、イモ類、マメ類、野菜類等の作付けについて、また、救荒作物としてのソテツ、織物のためのカラムシ、藍、芭蕉等それぞれの植物についても、植え方、育て方、自然の山野の刈草を利用する肥料、耕作地の管理等が事細かに解説されている。さらには、堆肥を作る牛・馬・豚等家畜の世話についても述べている。

ここでは、それらの中から、イネに関して述べている部分だけを抜き出してみたい。以下の引用は訳文を記している。

「一、農地の保全について」

（前略）

○田のあぜを広くつくるのは、水もれを防ぎ田の水を溜めておくためで、大切なことである。田ごしらえのときに、あぜ草を切り落として、あぜを狭くしないようにすること。

（以下略）　（山田他　1983　pp. 118−119）

「四、毎月の農作業」

一月中にすべきこと

○稲を植えつけること。

二月中にすべきこと

○一月に植えた稲の最初の草取りをすること。

○おそ植えの稲を植え付けること。

三月中にすべきこと

○一月に植えた稲の二度目の草取りをすること。

○二月に植えつけた稲の最初の草取りをすること。

四月中にすべきこと

○二月に植えつけた稲の二度目の草取りをすること。

○田のあぜ草を刈ること。

五月中にすべきこと

○前年十二月から一月までに植えつけた稲を刈り取ること。

六月中にすべきこと

〇稲、粟を刈り取ること。

〇田の荒起こしをすること。

七月中にすべきこと

〇田の二度目の打ちかえしをすること。

八月中にすべきこと

〇田の三度目の打ちかえしをすること。

九月中にすべきこと

〇田の四度目の打ちかえしをすること。

十月中にすべきこと

〇苗代へ時期をずらして種籾を播くこと

〇田の五度目の打ちかえしをすること。

（前掲書　pp. 126–131）　＊上記引用は、各月のイネについての記載のみ引用。

また、イネについての記載の無い十一月・十二月は省略している。

「七　肥料のつくり方と施し方」

〇天水田ではかねがね水に気を配り、ところによっては池を掘っておくこと。稲刈りが終わったらすぐに　あぜをしっかりとこしらえ、水を溜めておく。

〇普通の田では六月の土用のうちに一番耕起をすること。

〇稲の刈り上げ後、魚や　うなぎなどを獲ったりして　あぜをこわすと、水田が乾燥して耕すことができず、作業適期を失うことになる。けっして　あぜはこわさないこと。

〇苗代の肥料には、おおはまぼうやくろよなを踏み入れるとよい。種籾を播いてから湿りすぎて芽生えにくいときは、灰や豆づるなどを入れるとよい。湿りがとれてすぐに芽生えるものである。

北風が通らないところへ苗代をつくり種籾を播くとよく育たないから、こういう場所はさけること。

〇下々田の肥料には、さつまいものつる、浜かつら、草木の青葉などがよい。

（前掲書　pp. 139–142　＊稲についての記載のみ引用）

上記の記述をみると、田拵えや肥料の注意点や農作業として月ごとに分けて順次行

うべき作業が示されているのは特徴的である。ここに引用としてとりあげた作物はイネだけだが、粟、麦、黍、豆類、サツマイモ、野菜類、綿花等の諸作物も月ごとの作業が示されている。八重山、その他の琉球列島の農耕について、イネの単作ではなく、多種にわたる作物の混作が奨励されている。実際、島の人々の食料事情を支え、琉球列島を飢餓から救ったのはサツマイモの伝来によるという話はよく知られている。各農務帳だけ見ていれば、各島の土壌や自然条件、生活様式の条件等に基づいて、地域の農業として当時において合理的な農法が伝授されており、そこに呪術的な禁忌等が差し挟まれる余地はない。そして、農書が稲作の手順を、各月を明記して合理的に記述しているのをみると、沖縄島の稲作の叙事歌謡「天親田（あまうぇーだ）」の詞章を思い起こさせる。こうした記述の仕方は、『日本農書全集　34』に収載されている各種資料に、ほぼ共通している。

農書の中に、あえて農耕に関する呪術的禁忌についての記述を探すと、それはごく僅かである。農民の農書[12]に分類されている「西村外間筑登之親雲上農書」（1838 年）の最後の項目にあたる「二十、竹木類の仕立て方」（前掲書　pp. 111−113）の内容には、「枯焦日」「種樹凶日」「天福日　種子蒔の吉日」「地福日　上同日」「母倉日」などの暦や陰陽道の教えにそった言葉が並ぶ。また、樹木の植え付けや播種によい日、いけない日、木を伐ってはいけない日等が、十干十二支による禁忌とみられる言葉で、まとめられている。内容は呪術的とはいえ、その表現は暦以降の認識によっている。これは主として農書は、農民を指導する立場の役人や、農耕の経験を積んだ人達によって記されており、基礎にあるのは蔡温の『農務帳』の目指した農業改革を奨励する立場にある。対する一般の農民達の間には、農耕に関する合理的な知識だけでは説明できない知恵や禁忌の価値は、様々に混在しながら生きていたと考えられる。王府から農業の改革案が布達されるということは、王府の視点からみて、合理的な改革を早急に必要としている現実を、農耕の基層に見ていたことを示していることに他ならない。各村の「稲作歌」の伝承は、こうした社会背景のもとで行われて来たと考えると興味深い。

では、新しい農業をめざす政策は、農民にどのように反映されていったかについて

[12] 福仲によれば、「農民の農書」とは「農民とくに農事に経験深く学識もある者が、自らのあるいは周りの農巧者の体験からまとめあげたもの」（山田他　1983　p. 192）としている。

は、「八重山島規模帳」[13]の記述等に探ることができるものがある。

例えば「慶来慶田城由来記」の記事と「翁長親方八重山島規模帳」の記事とに、同じ習俗に対して、八重山の農民の実情と王府の役人の見方を比較できる事例がある。始めは、「由来記」の記述である。用常の語りによる3代祖納当の時代のこととして記されている。

一、仲良、浦田へ、二月七日から五月までの間は、さじ（サジ。手巾）を頭にかぶって行かず、また、火や飯も持って行かないことは、むかしから忌み嫌っていることである。

一、手巾をかぶっていると、神や仏が人間に拝まれない。神仏にいきあうこともあり、その時は無礼になるので、嫌うのである。

一、火を持って行かないのは、火を持って行って不用心に田のあふし（アブシィ。畦）や畦の側面に火をつけ、大火になり、煙を立て、若稲が萌え立っている時には悪霊が作用して、不出来になるので嫌うのである。

（石垣市総務部市史編集室　1991　p.6）

次は、「由来記」に記された習俗に対して、「翁長親方八重山島規模帳」布達のなかで「上原村の内浦田原での習俗について」と明記している申し渡し事項である。

一、上原村のうち浦田という田地は、三月から五月の初め頃まで、仕事に行く時はサージなど外し、飯米や火も持たない習慣なので、浦田原の入口で食事をして時間を取り、半日の仕事もしないという。何のいわれもなく良くない習慣なので、以前から禁止されているが今以て止まない。今後は時間を無駄にせず耕作に精出すよう申し渡すこと。　（石垣市総務部市史編集室編　1994　p.111　363項）

上記の文章をみると、西表島の現地の有力者と琉球王府から派遣された役人とでは、禁忌の習俗に対する理解が異なっている。「由来記」では、農民達が手巾を被らず、

[13] 「八重山島規模帳」は、王府から派遣された上級官吏が、派遣時の八重山の実情を視察し、問題点を把握して王府に報告し、それに基づいて布達されたものである。八重山に現存する「規模帳」は、1768年（乾隆33年）布達の「与世山親方八重山島規模帳」・1858年（咸豊8年）布達、そして、1874年（明治7年）布達の「翁長親方八重山島規模帳」・「冨川親方八重山島規模帳」の3種という（石垣市総務部市史編集室　1991　解題）。

火や飯を田に持ち込まないのには、神仏に対する畏敬や、焚き火がもとで大火になり、煙や悪霊によりイネの生育に悪い影響があることを避ける考えがあることが記されている。一方、翁長親方には、それらの西表島浦田原の習慣は、何のいわれもなく良くない習慣で、耕作の時間を無駄にするものと写っていることがわかる。

このように、八重山の習慣に対してやめるよう申し渡している項目は、他の「規模帳」にも数々見られる。それらを取り上げていくことは、本稿の目的から外れるので、ここに多くを取り上げることはできないが、特に、八重山の祭祀と信仰についての王府の見方とその変遷については、歌の背景として意味あることなので、簡単に記しておきたい。

現存する「規模帳」の中で、一番古いとされる 1768 年（乾隆 33 年）の「与世山親方八重山島規模帳」によると、「種子取り祝い」「米粟の初の為の祭」の供え物、もてなしを質素にすること、平久保・桴海・川平・崎枝の「節祭りのマユンガナシ」や、古見・小浜・高那の「豊年祭のアカマタ・クロマタ」について、「異様な出で立ちの神のまねなど」「良くない風俗なので今後は止めること」、「八月十五日の夜」に男女が「磯辺にいって楽しく遊ぶのは、風俗の乱れ、無益な手間なので、今後は止めること」等、申し渡しが記されている(石垣市総務部市史編集室 1992a p. 64、213-215 項)。

けれども、この件について、時代が下った 1858 年（咸豊 8 年）の「翁長親方八重山島規模帳」で、次のような王府の方針の変更が伝えられている。

> 昔から老若男女が節々の祈願や祭りを行ない、野原や浜辺へ出て遊び、楽しみとしていたが、与世山親方が御検使の時禁止された。しかしながら百姓は、どこの百姓も同様に苦労の多いものであるから、右のような行事をまったく禁止してしまえば、かえって節目もなくだらだらと怠け、農業の励みにならない。その上、昔からの習慣を禁じられることによって、みな不安を感じている。そこで乾隆五八年（一七九三）すべて前々どおり免除され、これまで行なってきた祈願・祭事・遊事など大袈裟にならないよう執り行い、農務その他それぞれの職業に精を出すよう申し渡すこと。
>
> （石垣市総務部市史編集室 1994　pp. 82-83　256 項）

上記の文章は、王府が態度の変更を余儀なくされた事を示している。合理性を求め

る為政者側と、慣習に伝統と安心を見いだす島の人々との間の価値観の葛藤が記事に現れている。

その他にも、大阿母、ツカサのタカベの省略や、エラビンガネの信仰の禁止、トキ・ユタの禁止などは、1874 年（明治 7 年）「冨川親方八重山島規模帳」の布達に至るまで、何度となく繰り返し禁止が申し渡されている。禁止が繰り返されるということは、明治初期に至るまで、途絶えることなく八重山の人々の生活の中にエラビンガネの信仰や、トキ・ユタを頼む呪的な世界が継続していたことを示唆している。

先に、農書は役人によって書かれたものと、農民によって書かれたものと分類される（山田他　1983　pp.192-193）という指摘については述べたが、視点を少し換えると、両者は文字をあつかう人々の著書という意味では共通している。それに対して多くの農民は、文字を持たない人々である。王府の農書の配布の内容が、農耕に実際に携わる文字にかかわらない農民に直接的に届くのではなく、下級の役人や共同体の有力者を介して口頭で行われたことは、容易に推測される。各農書の文中には「諸役の勤めかたと取り締まりの方法」という項目が設けられているのは、改革案の伝達の在り様を物語っている。「八重山嶋農務帳」には、役人が農村を巡回するときには「馬などには乗らずに歩いて回村し、畑や一軒一軒までもいちいちみまわること」「もし過失があれば罰し、働きの格別によい者には上申書を出した上で報償を与える」（山田他　1983　p.144-145)等、細かく指示をしているのも、農書の耕作方法を広める役目を役人達が担っていたためであろう。前項の「由来記」の前半部にみた村での出来事への判断を村の古老を上に頂いた合議でおこなう共同体のシステムが、ここには見られない。王府からの命令の上意下達よって、新しい農耕技術を広め、よく従う者には報償を、従わない者には罰則を与えるという、国家の権力の意志が明らかにされている。

以上の近世の八重山の村々の環境と変化を背景に、共同体の祭祀・行事、そしてその主題を表現する歌が受け継がれてきたことは興味深い。

３.まとめ

第３章では、八重山の稲作をめぐる歴史の考察に多くのページをあててきた。それは、この章の冒頭にも記した「農耕は単なる技術的営みでない。農耕を基礎づける神話や豊作を確保すべき儀礼も、農耕の本質的な一部を為していることが普通であ

る。」（大林　1973　p. 89）という指摘に則して考えてみたからである。稲作歌の多くは、稲作の祭祀儀礼の主題を言葉に表現しているものであり、まさに、稲作歌の表現は、農耕の本質の一部といえるものである。そのため、八重山の稲作の歴史を知ることは稲作歌の考察にも必須と考えられる。けれども、本稿は、あくまでも稲作歌の表現の研究を目的とするため、ここでは八重山の稲作の技術そのものの歴史的な考察ではなく、技術的側面を巡る稲作を支えた人々の認識の在り方に重点を置いて考察した。それが、稲作歌を支えた人々の思考の在り方と基盤を同じくするものと考えるからである。こうした動機のもとに、15 世紀～18 世紀の稲作農耕にまつわる事象を伝えている史料を、主として取り上げてきた。15 世紀～18 世紀は、島民の大多数が農耕を生業としている環境下で、農耕祭祀の豊穣の希求は、島人の誰にとっても具体性と現実味を持った切実な言葉として、表出していた時期と考えられる。同時に、琉球列島に成立した国家の影響が色濃く島の暮らしに影を落とし、立場の多様化によって豊穣の希求の目的も、単純な様相ではなくなる過渡期にあたる。

史料の考察によって、15 世紀～18 世紀の稲作を巡る島の共同体は、琉球王府の統治以前と以降とで差異がみられた。たとえば、古流球から近世への過渡期の八重山を記している「慶来慶田城由来記」の前半と後半の記述の内容に、農耕の技術と思想の変化が見られる。その変化は、王府の暦の問題を論じた中鉢の指摘に重ねれば、「暦以前」と「暦以降」の対比(中鉢 1993 pp.18-19)と言う言葉で言い表せる。八重山の農耕全体の基層は、島の人口の多数を占める農民たちの日常の農耕作業であり、それは、星の出入りや、月の満ち欠け等から季節を把握して、自然から得る経験則に基づいた技術と、古くから伝わる禁忌の形をとる呪術的な心性とが、変わることなく受け継がれていた。それらは「暦以前」の農耕技術と思想である。そこへ外からもたらされる「暦以降」の合理的な知識が、農耕技術の変化と様々な思惑の混在をもたらし、八重山の農耕の環境が変化していったことが窺えた。その具体的な内容は、「農務帳」「規模帳」「参遣状」等にたびたび見られる、稲作を巡る諸注意等にあらわれている。諸注意は裏を返せば、注意をしなければならない実情を示唆しているものであり、島の農耕が、変化を求められた事象を具体的に指している。八重山の稲作の技術的・思想的な変化の多くは、国家の体制下に組み込まれていく過程と無縁ではない。

また、稲作の技術的・思想的な変化は、共同体の性格の変化にも繋がる。稲作の作業そのものが、各個人で行えるものではなく、少なくとも、水や土地利用に始まり、

折々の作業過程で、近隣が協力して行う性格を持つ。従って、稲作と共同体の在り方も切り離し難い関係にある。暦以前の島の共同体は、村の長老を中心にした合議制によって、伝統的な習俗と新しい知識を上手く繋ぎ、穏やかな変化の受容が考え抜かれた集団であったことが窺えた。例えば「磯下り」を巡る様々な禁忌を、稲作の作業の奨励に何気なく繋げる説明や、初穂の儀礼の日撰りと実際の収穫の日取りの違いを障りなく処理する方法等、伝統的な習俗を活かしながら新しい知恵の受容に繋げる工夫の事例を見る事ができた。そこに見える共同体の自然との対峙の姿は、自然の驚異や気まぐれによる豊穣や災厄を、ただ受け身でいるだけの社会でもなく、完全に原初の呪術的世界だけを信じきる社会でもない。また、超自然との関わり方を失った社会でもない。身の回りの自然全体を必要な限りにおいて把握してきた先祖からの知恵が蓄積し、災厄に対しては、共同体全体で禁忌や呪術等による事前や事後の対処方法を、習俗と結んで活用していた集団であることが窺われる。

それに対して、国家の体制下に組み込まれた共同体では、新しい階層が生まれ、農民、在地の役人、王府の役人という様な島の共同体の人の構成が変化していく。それに加えて、王府や海を越えて伝わってくる新しい知識の受容に晒されるが、暦以降の共同体は、王府の統治の上意下達の構造へと変化する。そのことによって、様々な立場の階層の人々の思惑は、懲罰で押さえられても、調整されないまま潜在する社会となり、それぞれの立場の人々の持っている稲作に対する知恵も知識も、そして利益も一通りではないことが、限られた史料からでも窺えた。それをよく表す事例として、「翁長親方八重山規模帳」にみる、長きに亘って禁止の布告が度々なされてきた農耕祭事や習俗の復活を認める記事がみられ、国家と共同体の葛藤を示している。

以上が、本稿が稲作歌の背景と考える 15 世紀〜18 世紀にかけての環境である。第 3 章で取りあげる「稲作歌」は、その多くが共同体の稲作農耕の祭祀儀礼に関わる。農耕の祭祀儀礼の主題である豊穣の希求は、歌唱者達が属する共同体社会の総意として、祭祀歌謡に表出されているものと考えるのが普通である。けれども、歌謡の背景となる共同体を注意深く見ると、その総意は、稲作をめぐる様々な技術的立場とその技術に伴う様々な意識が混在する上に成り立っていることが窺えた。そうした様々なものごとの混在を、稲作歌の表現が抱えていないはずがない。共同体の「総意」とされる表現の言葉の中に、様々な立場の認識がどう反映しているのか、特に、イネの栽培をするうえで、農民の経験に発する具体性を持った言葉が稲作歌の表現にどう反映

しているか、という点を意識して、イネと稲作歌に用いられる植物を通して表現の考察にあたりたい。

第２節　稲作歌に謡われるイネ

本稿が「稲作歌」と呼ぶ歌は、イネを詞章に含んだ歌の中でも、特に稲作に関わり深い歌を総称する呼称である。稲作歌に取りあげられている植物は、イネが主要な位置を占めているのはいうまでもない。その他の植物は、イネ以外の穀物(アワ・ムギ・キビ・マメ・イモ)と、ススキとチカラシバクサ、ジュズダマ、テリハボク等の数種が含まれている。この第２節では、稲作歌に謡われている主要な植物のイネが、どのような側面で歌に取り上げられているのか、その概要をできるだけ簡単に述べておきたい。

１．作物としてのイネ

歌に登場するイネの多くは、栽培作物として謡われている。琉球の祭祀は、農耕暦を中心におこなわれており、作物の栽培・生長の折り目にあたる播種・苗・繁茂・稔り・収穫等の各期に即した儀礼の歌があり、その他には、「節」（一年の折り目）の儀礼に謡われる歌がある。歌は各儀礼の主題に添っている。

（１）「稲が種子あよう」にみるイネ

八重山の島々の「種子取祭」は、稲作栽培の初めに籾を取り出して播く作業に伴う播種の儀礼である。種取り・播種は、その年の収益を決める重要な作業である。その祭りである「種子取祭」の時に、村人達によって歌われるのが「稲が種子あよう」である。テキストに収載されている「稲が種子あよう」「種子取りあよう」という類似または同タイトルの歌謡は 13 篇ある。同タイトルの歌謡が、各島のそれぞれの村の祭に謡われてきたことも、「稲が種子あよう」の特殊性を示唆しているといえるだろう。次の事例は、石垣村の「稲が種子あよう」である。

「稲が種子(いにたに)あよう」　　石垣島石垣村　　p. 159

1　稲(いに)が種子(たに)　今日(きゅ)ぬ日(び)	稲の種(播きは)今日の日
黄金日(くがにび)ば　むとぅいしようり	黄金日をもとにしなさり

2	苗代田ば　種蒔田ば	苗代田を　種下ろす田を
	くさようり	拵えなさり
3	米種子ば　稲種子ば	米種を　稲種を
	いだしようり	出しなさり
4	うちぃ散りぬ　蒔き散りぬ	うち放りの蒔き放りの
	今夜から	今夜から
5	下かいや　白根さし	下には白根が差して
	上かいや　若葉いで	上には若葉が出て
6	犬ぬ毛い　猫ぬ毛い	犬の毛のように　猫の毛のように
	生らしようり	生えさせてください

この歌は、全6節で完結している。歌の内容は、播種の日の日柄を選び、苗代を拵え、稲の種子を取り出して苗代に蒔くと、白根／若葉が発芽する、犬／猫の毛並（のよう）に生えそろいます、という播種の作業と発芽の理想的な様を簡潔に謡ったものである。次の事例は、長編の「稲が種子あよう」である。

「種取りのあよー」　石垣島白保村　　p. 165

1	今日ぬ日ば　·黄金日ゆ　本ばし	今日の日を　黄金の日をもとにして
	ウヌカフド　キヤラヌマイ	ウヌカフド　キヤラヌマイ
	（囃子、以下略）	
2	いにがだね　ゆすぬ種　うるしより	稲の種　米の種を下ろしなさい
3	ぶなり手　かぬしや手し　むみより	姉妹の手　愛しい者の手でもんで
4	日にちしらべ　してしらべ　おーり	日を調べ　(時)節を調べなされよ
5	苗代田に　つむり田に　むちおーり	苗代田に　積もり田に持ちなさり
6	びぎりや手　かぬしや手に　うるしより	兄（愛しい人）の手で　愛しい者の手で下ろしなさり
7	まりかいしや　びりかいしや　ありより	生まれが美しく　坐りが美しくありなさり
8	下かいや　白ねうれ　上かいや　若葉とんで	下には白根が下り　上には若葉が飛びだして
9	犬が毛に　猫が毛に　たらしより	犬の毛のように　猫の毛のように垂らせてください

10	つむりかいしや　みとみ美しや　ありより	見積もりが美しく　認めが美しくありなさり
11	月夜ざり　日むやざり　あたりより	月夜ごと　日ごとに　当たりなさり
12	取る月ぬ　いびる月ぬ　なりよたら	取る月に　植える月になったら
13	大田　長田に　むちやおーり	大田圃に　長田圃に持ちなさり
14	ないば　ぱかり　しまば　ぱかり	長さを測り　幅を測り
15	下かいや　白根うれ　上かいや　若葉とんで	下には白根が下り　上には若葉がとびだして
16	いばん本　山ゆすきに　むてい栄い	力芝草　山薄のように生え茂り
17	うるじんぬ　若夏ぬ　なりよたら	初夏に　若夏になったら
18	色ばくめ　葉かいしや　とんでおーり	色つやをこめ　葉が美しくとび出しなさい
19	若夏ぬ　なりよたら　大ぷー出んで	若夏になったら　大穂が飛び出して
20	石ぬぐ　金ぬぐに　なうりより	石のように　金のように稔りなされよ
21	取りしきぬ　かり時分ぬ　なりよたら	取る月に　刈る時節になったら
22	若者ぬ　びら者ぬ　かりとーし	若者が　若い者が刈り倒し
23	大家　とーらん　んちやしより	大家　台所もみたしなされよ
24	神くむち　御主上納ゆ　うさめおーり	神供物を　御主上を納おさめなされよ

上記の引用の歌の内容を簡単に追うと、第 1〜9 節までが播種と苗代の早苗の成長、第 10〜14 節までは田植え、第 15〜19 節が本田のイネの成長、第 20 節はイネの稔り、第 21〜23 節は刈り入れの様子、24 節は収穫を感謝する儀礼、という稲作の全過程を謡っている。

長編の「稲が種子あよう」は、イネの成長と農作業の一周期を克明に謡っている。「稲が種子あよう」は、長編の叙事表現の形式をとおして、注目されている歌謡でもある。先行する研究者の小野重朗は「生産叙事謡をめぐって」（小野　1995　pp. 176-202 ）で論じて、「稲が種子あよー」のような、実際の栽培過程の順序通りを追って、理想の生育の姿を表現する歌を「生産叙事歌」と総称している。こうした歌の様式の成立の背景には、歌の言葉が現実のイネの生育に働きかける力を持つとする言霊の信仰が指摘され、歌の心意は豊穣の予祝にあることは周知されている。

八重山の生産叙事歌である「稲が種子あよー」の主格は、イネである。しかし、この「稲が種子あよー」で謡われている「イネ」について、少し付け加えておかねばならないことは、八重山列島の中には、島の自然環境条件により、低島で充分な水を得

られないため水田稲作が行えずに、粟等の畑の耕作が中心の島々もある。その場合は、詞章の水田苗代が畑に変えられて謡われるなど、島の実情に即した細かな詞章の変化が見られる。例えば、黒島の「種子取りあゆう」は、明確に粟作を謡っている例である。

「種子取りあゆう」　黒島　p. 178

1	今日(きゅ)が日(びぬ)の　シタリヨ	今日の日のシタリヨ
	吉日(はいび)よりの(ぬ)　御願(おにが)い	美しい吉日の御願い
	イドバイコメへー　トラデスウユ	イドバイコメへー　トラデスウユ
	＜囃子、以下略＞	
2	種取(たにど)りの(ぬ)　シタリヨ	種取りのシタリヨ
	初種子(はちだに)の　御願(おにが)い	初種のお願い
3	大粟種子(うふあーだに)ば　シタリヨ	大粟種をシタリヨ
	丸粟種子(まるあだに)　取(とり)りや持(む)ち	丸粟種を取り持ち
4	大へら(うふびら)ば　シタリヨ	大釬をシタリヨ
	長へら(ながびら)ば　取(とり)や持(む)ち	長釬を取り持ち
5	我畑(ばばる)に　シタリヨ	私の畠にシタリヨ
	地(じぬ)のたゆに　持(むち)や出(いで)	地の底部に持ち出て
	（以下略）	

上記に引用した歌の冒頭部の詞章は、見るとおり粟の播種を謡っている。しかし、引用を省略した第6節以降の形式・内容の展開・詞章は、前に示した「稲が種子あよー」のイネの耕作過程とほとんど変わらない。この他にも、川平村の「真世加那志のカンフチィ」では、ムギ・アワ・キビについても、イネの唱えとほぼ同一の経過と表現が繰り返される。そうした意味では、 八重山の農耕の生産叙事歌は、実際は、五穀を対象とした作物の生長と耕作過程を祈願しながら、表現はほぼイネの歌と同じ形式で伝承されてきたと理解できる。

こうした理想の生産過程を謡う様式の歌は、イネや他の穀物はもちろんのこと、布織り･家づくり・造船のモチーフにも見ることができる。このことは、八重山だけではなく、 琉球文化圏の他地域にも共通していることは、すでに明らかにされている。

（2）「たらまゆらじらば」にみるイネ

川平村に伝わる歌に、「たらまゆらじらば」「東(あがる)かーら」がある。この歌に登場するイネ(及びアワ)は、種子の出自が謡われている点が注目される。以下に引用したのは、石垣島川平村の「たらまゆらじらば」である。

「たらまゆらじらば」石垣島川平村　　p. 190

（前略）

3	あがるんかい	東に
	うふぁるんかい	うふぁる＜東＞に
	うがみばどぅ	拝めば
	しぃまんきゃーまん	小島も
	ふんきゃーまん	小国も
	うがまり	拝まれる
4	しぃまんきゃーまでぃ	小島だと
	ふんきゃーまでぃ	小国だと
	うもうだらや	思ったら
	しぃまんきゃーまや	小島では
	ふんきゃーまや	小国では
	やらんだら	あらぬよ
5	かたくちや	片方は
	まぎじりゃどぅ	米叢を
	つみゃおうる	積んで来られる
	かたくちや	片方は
	あわじりゃどぅ	粟叢を
	ぬしゃおうる	載せて来られる
6	まぎでぃすや	米というのは
	たばりしく	田原底(たばるすく)に
	おはらしよう	お連れして
	あわでぃすや	粟というのは
	まじしくに	真地底(まーじすく)に

	ちぃかいし	お招きして
7	まぎでぃすぬ	米というものの
	ぷゆちぃくり	穂を作り
	うがみばどぅ	拝めば
	やましぃだま	山数珠玉の
	なりぃんぐとぅ	実の如く
	うがまり	拝まれる
8	あわでぃすぬ	粟というものの
	ぷゆちぃくり	穂を作り
	うがみばどぅ	拝めば
	ならいしぬ	なら石の
	ぱなぬぐとぅ	花の如く
	うがまり	拝まれる
	（以下略）	

この歌の冒頭部の引用は省略しているが、イネについての実質的な歌の内容は引用部分にある。東を拝むと、「小島／小国」と間違う程の米叢と粟叢が船にのってやってくる。その「米／粟」の種子を田に迎える（蒔く）と、米は穂を山数珠玉の実のように稔らせ、粟はなら石の花のように稔り、と謡っているのが第 7・8 節である。この後、再び省略した第 9〜12 節までには、米や粟から作った神酒を酒器に盛って供え、親族を招き祝い、豊穣を祝う祭りの描写までが謡われている。

「たらまゆらじらば」では、「あがるんかい／うふぁるんかい」（東に）の方角から米叢・粟叢を積んだ船が漂流してくる様を謡うが、東は「異界」を指す表現である。そうした言葉の出自の背景には、琉球諸地域に見られるニライカナイの信仰が窺える。それは、異界から漂流してきた船で運ばれてきた種子の超自然な出自を述べ、その霊性にあやかった種子を蒔き育てることで、豊穣を招くという発想のもとに歌が展開している。この歌で興味深いのは、東から来る船に稲叢・粟叢が満載されてくる情景を幻視して謡っているが、詞章の表現上は、誰が運んでくるとも、＜神＞に賜ったものとも、述べられてはいない。けれども、次の歌は、漂ってくる船についてさらに踏み込んで明らかにしている。大浜村の「東節（あがりぶし）」には、やってくる船の船主について次

のように謡っている。

「東節（あがりぶし）」　大浜村　p. 372

1	東（あがり）から来（く）る御船（ふうに）	東から来る船は
	エシタアレ＜囃子、以下略＞	エシタアレ
	ばが上（うい）ぬ　すんけーら[14]	吾が上の　スンケーラ
	エウシタアレ＜囃子、以下略＞	エシタアレ
	すうみやよ　すうみやよ	スウミヤヨ　スウミヤヨ
	ユウバナウレ＜囃子、以下略＞	ユウバナウレ
2	うはらから来（く）る御船	ウハラ〈東〉から来る御船
	ばがういぬ　すんけーら	吾が上の　スンケーラ
	すうみやよ　すうみやよ	スウミヤヨ　スウミヤヨ
3	なゆしゃる御船ぬど	どんな船が
	ばがういぬ　すんけーら	吾が上の　スンケーラ
	すうみやよ　すうみやよ	スウミヤヨ　スウミヤヨ
4	いかしゃる御船ぬど	如何なる船が
	ばがういぬ　すんけーら	吾が上の　スンケーラ
	すうみやよ　すうみやよ	スウミヤヨ　スウミヤヨ
5	主（ぬし）やねん御船ぬど	主（ぬし）はない船が
	ばがういぬ　すんけーら	吾が上の　スンケーラ
	すうみやよ　すうみやよ	スウミヤヨ　スウミヤヨ
6	勢頭（しど）やねん御船ぬど	船頭はない船が
	ばがういぬ すんけーら	吾が上の　スンケーラ
	すうみやよ　すうみやよ	スウミヤヨ　スウミヤヨ
	（以下略）	

東から、主のいない船が来港すると謡っているのである。省略した第 7 節以降の内

[14] テキストの「東節（あがりぶし）」の「すんけーら」は、『八重山古謡 上』の「東（アーリイ）カラ」では「スンキャラ」と記載され、喜舎場によると「ス」は八重山全体（総称）の意で、「ンキャラ」は「召し上がりなさい。」と解説されている。（喜舎場　1970a　p. 440）

容は、「たらまゆらじらば」と同様に、船には粟や米が積まれて大浜村にやってくる様が幻視されている。この歌は、海の彼方の異界の観念の信仰と、そこから船に積まれて来るイネやアワの由来とを、そのままの言葉で率直に謡っている。一般的に言えば、ニライカナイは、海の彼方や海の底、地の底など、生ある人間の世界に対比される異界の概念で、祖先・神・害虫他、生物・無生物の一切のものが異界にあり、果報も災いもそこからもたらされるという超自然的な世界観を表現している。異界という超自然的で霊的な場に由来する種子という出自を明らかにして、それらの種子の霊性によって豊穣が得られることが謡われている。霊的な場所に由来する種子という、神話的で呪的な価値を付加している。

「たらまゆらじらば」「東(あがる)かーら」は川平村の歌であり、大浜村の「東節(あがりぶし)」もほぼ同じ内容の歌である。また、新川村の「とんぎゃーら」は、東方から「弥勒世」や「神ぬ世」を載せた船がやってくる、という抽象的な表現に変化しているが、この歌も類似した内容を謡っている。

テキストには、「たらまゆらじらば」は「石垣島の川平村で、種子取祭の「いにがだにあよう」がトゥニムトゥヤーで全員によって謡われた後、引き続きうたわれるものである。」（テキスト　p. 622）という注釈がなされている。また、『川平村の歴史』（川平村の歴史編纂委員会　1976）には、内容的には上記の大浜村の事例とほぼ同じ「東カーラ」が掲載され、豊年祭でも､各嶽で豊年満作の感謝の儀礼のあと、「御嶽より神本家の道唄」となっていることが記されている（前掲書 p. 299 ）。種子取祭の歌は呪的な予祝的思いを心意としているものとすれば、豊年祭は、結果を得た豊作の喜びや感謝の思いを心意としていることになる。同様の内容だが、祈願と感謝の目的の異なる場で謡われているのは興味深い。

（3）「まゆんがなしぃの神詞(かんふちい)」にみるイネ

川平村の「まゆんがなしぃの神詞(かんふちい)」は、八重山の昔の正月行事の一環の中にある。年越しの夜に＜神＞が「世」を播き広げに村を訪れ、家々を訪ね、来る年の繁栄を唱えによって保障する意図で、村人の演じる＜神＞が唱える呪的歌謡である。（こうした目的等についての「まゆんがなしぃの神詞(かんふちい)」の研究は、これまで様々になされており[15]、ここでは内容や目的の詳細について述べることは割愛したい。長編なので、

[15] 喜舎場による「川平村の「マヤヌ神」に関する覚書」（喜舎場 1977a　p. 391）他

以下にイネの唱えの冒頭の一部だけを引用する。

「久場川村のまーゆんがなしぃの神詞（かんふちい）＜上の村＞」石垣島川平村　　p.23

きらまい（米）

うーとぉーどう、くぬとぬつ、ふうしゅまい、ぐすたれまいぬ、きらまいしぬぐで、すーや、なしるたー、たにうりたー、くしらいとぉーり、きゅぬぴい、ゆかるぴいに、むちんで、ふうーいびり、なかいびり、さしとーり、ふういびり、なかいびり、むとばし、うゆべーてい、とうーまたていぬ、ういかーら、ふつぽーる、まきぃぽーるし、ふかば、ふちゃいてん、しくさだみ、にゃんぐとにいんぬきー、まやぬきー、ぬんぐと、くいりなー、くいり、すぬかふーで、かんかざる、びんとぉーどう。

ああ尊　この殿内の大主前、グスタレー前のキラ米、シヌグ米〈稲の品種〉と言うのは、苗代田、種下り田を拵えなさり、今日の日、よき日に持ち出て、大イビリ〈呪的苗〉、中イビリを差しなさり、大イビリ、中イビリを基（もと）にし、御指手、十又の手の上から、うち放り、蒔き放りしておくので、重なり合いとも、底積りもないように　イヌの毛、ネコの毛のように、太く、固くなる果報だと、こう唱えます、尊

（以下略）

（＊下線は、筆者が加筆）

ここに引用したのは、「きらまい（キラ米）」の第1節の播種の唱えだが、これに続いて、第2節以降、早苗の成長、田植えと本田のイネの成長、稔り、刈り入れ、貯蔵に至るまでの全 11 節に、稲作の全過程が実際行われる通りの順序で唱えられている。＜神＞が唱えるという発話の様式をとっている。その具体的な詞章の展開とフレーズについては、先に記した「稲が種子あよー」とも同様なものが多く用いられており、よく類似している。

引用部の内容の概略は、苗代を拵えて、日柄を選び「キラ米／シヌグ米」（イネの種子のこと）が重なり合うこともなく播かれて、種子がしっかり発芽する、と唱えている。「ふうしゅまい／ぐすたれまいぬ（大主前、グスタレー前の）」は、儀礼の行われる主人の田を指している詞章と思われる。 この事例の下線部（筆者が加筆した）は、 日取りを選んで行われる播種の作業の前に行われる行為を示している。テキストには、この下線部の「大イビリ／中イビリ」の対語について「呪的苗」という

訳が加えられているだけで、詳しい解釈は述べられていないが、何らかの播種儀礼に関わっていると思われる。歌の中によく謡われている稲作儀礼は、「をなり」を迎えて豊作を感謝し祝う収穫の儀礼が多いが、ここには、播種儀礼の様も謡われていることになる。イネの栽培の全過程を辿っていく詞章の中に、イネの生育過程と稲作の作業過程や稲作の儀礼も加わっていることは、農耕の技術と文化が一体のものである以上自然なことである。

そうした播種儀礼について、次の事例は興味深く参考となる。石垣氏の「八重山地方の稲作儀礼」（石垣 1976）、「四、播種儀礼　（四）イネの播種と精進祓い」のなかに、種子籾を播く前の「儀礼」が記されている。種子籾を播種する時、「手初じめに、苗代の「水口」に『アリシン・マニ・ブヤ（東の国から来たマニという名の祖父の）・フキ（茎）・サスンユ（差すよ）』と唱えてススキの茎三本を差し播種する。その 3 本は、それぞれ田の神、農耕の神、アリシン・マニ神の三神を意味するという」（石垣　1976　p. 124）とある。石垣氏の述べている儀礼の事例と、「まゆんがなしぃの神詞」の中に表現されている播種儀礼とが、同一事例でないにしても、播種の前に呪文や、植物を植える（ここではススキ）呪的儀礼があることを、これらの事例から、具体的に知ることができる[16]。このことから、「まゆんがなしぃの神詞」に唱えられている内容は、現実に行われる稲作とその儀礼を反映していることを窺わせている。

このカンフチに取り上げられているイネは、栽培作物としての姿が謡われている。そして、この唱え全体には、イネ以外の作物も同じようにとりあげられている。＜神＞がその豊作を予祝する対象としている作物の項目は、ムギ、アワ、イネ、キビ、イモ、アズキという順序で唱えられている。作物が異なっても、各作物の作付けから始まり、収穫後には人々にうらやましがられるほどの豊かな収穫がもたらされる、と唱える内容の大筋は、ほぼ同じである。ここでも、八重山の島々では穀物の中でイネだ

[16] 同様な播種儀礼は、伊波普猷の「南島の稲作行事について」の＜種子取＞（伊波 1973 p. 299）のなかにも、沖縄島、奄美大島で行われていることが示されている。「『琉球国由来記』によると(中略)久米の年中祭祀の条には、まず稲の種子を三粒だけ苗代に蒔く（中略）これが多分古式で、アマーオェーダーの謡われたのも、この時であったろう」（前掲書 p. 299）。また、奄美の喜界島では、「薄を立てて、その葉を蒔く籾と一緒に殿結(とのむすび)にして小屋を作り、その中に種を播き下して、バシ（ウバシ即ちくはず薯(いも)）の葉で掩い、その上に王石(めいいし)（根石(ねいし)）を置く。(以下略)」（前掲書 p. 299）といった事例が記されている。

けが突出して扱われていたというよりも、五穀の中の１つと認識する実態がそのまま、唱えの項目に反映していることがみてとれる。そして、それら自体が「果報」の具象物として表現され、五穀の豊穣が村に「果報」をもたらすと観念されていることが窺える。

また、前唱えの項目は、農作物だけではなく、「長寿」「ウシ・ウマの繁昌」「貢布」等、村の人々の生活に幸福をもたらす条件として欠かせないものが列挙されていると考えられる。けれども、貢布等の項目が含まれているところをみると、普遍的な項目というより、歴史上の政治的な力によって農耕儀礼が整えられていったある時期の村の繁栄に欠くことができない項目が、カンフチに反映していると推測する。それらの項目の理想的状態を＜神＞が唱える。そして、以下の言葉が、カンフチの各節の結びに反復される。

すぬかふーで　　（その）果報だと
かん、かざる、びんとぉーどう　　こう唱えます　尊

ここでは「果報」という概念の語は、＜神＞の寿ぎの結果得られる豊穣や幸福を指す語である。興味深いのは、カンフチは、＜神＞が唱えるという発話の様式をとる儀礼歌であり、その様式の成立は、果報が＜神＞という存在を通して与えられるという発想によるものといえる。とはいえ、＜神＞の唱える言葉も、植物のイネの生育の過程を順次述べる叙事的表現の形をそのまま残している。唱えは言霊の信仰に＜神＞が加わった形式である。

以上、作物としてのイネを謡っている歌の事例３種を取りあげた。何れも八重山の共同体の農耕祭祀と折り目の儀礼で、謡い、唱えられてきたものである。ここで、（１）（２）（３）の共通性と異質性についてまとめておきたい。

それぞれの発話の「場」については、（１）と（２）は祭祀に参加する村人によって謡われるもので、（３）は村人演じる＜神＞が、大晦日の夜、各戸をまわり唱えるものである。

そして、歌の心意と表現の様式の関係は、それぞれ異なる。（１）「稲が種子あよう」のイネの理想的な生長を具体的に謡う様式は、言霊信仰を背景に、歌の言葉が直接的に植物に働きかけるという関係の中で成立している。次の（２）「たらまゆらじらば」は、琉球諸地域において海の向こうの異界からすべてのものがもたらされ、又、帰って行くところと観念されているニライカナイの信仰をそのまま歌のモチーフとし

た物語を謡っている。作物の種子が異界に由来することを明らかにし、その特別な霊性を持った種が、人々に豊穣をもたらすという観念を言葉によって幻視的に展開しているのである。従って、（1）と（2）は、目には見えない信仰と目には見えない異界という超自然の観念を、歌の言葉で幻視させるという方法で、歌の様式が成立している点では、共通性がある。（3）「まゆんがなしぃの神詞」は、見えない観念の把握から転じて、村人が演じて擬人化されて目に見える存在となった＜来訪神＞が、村に「果報」を保障するという発想のもとに成立している、＜神＞の唱えという様式である。

言葉の形式について、歌と唱えの差異を脇に置いてみると、「稲が種子あよー」と「まゆんがなしぃの神詞」の詞章は、よく似た対語・対句・対文が用いられ、叙事的展開がほぼ類似し、予祝的な言葉の機能への期待も同じである。けれども、前者の「稲が種子あよー」のイネの生育の叙事的な言葉は、言葉自体にイネの生長に働きかける呪的な力を期待する言霊の信仰の下に発せられた言葉である。一方、後者の唱えは、＜神＞の行為というやや宗教的な観念を経由する、神の力が加わった言葉によって、イネの生育の理想が叶うという意味合いが強くなっている。両歌には、豊穣を得たいと願う歌や唱えの心意は同じだが、望む豊穣を得るために、言葉の力のみを信じる発想と、それに加えて神という畏敬の存在を創出し、二重の力に頼もうとする発想の異いがある。

事例の歌 3 種は、農耕暦の折り目に村の行事として行われる播種の儀礼や節祭に謡い、唱えられる歌である。それらの農耕の祭祀の主題は、どれもイネ(作物)の豊穣の希求に集約されて、その表面上の主題は共通してシンプルにみえる。けれども、各歌の様式の成立には、様々な思想・信仰と発想を経由していることが窺える。それはそのまま、前節にみたような歌の基盤となる社会の様々な思想･観念の混在を、稲作歌の詞章が実際に示唆しているものといえる。

付け加えて、3 種の歌・唱えが何れも農耕の奨励という共通性を持って見える。例えば、「たらまゆら」で、船いっぱいに流れつくイネ・アワの種子は、蒔いて育てる種子として歌われている。そこに、米・粟の食料が、流れ着くという発想は、歌から感じられない。「たらまゆら」に謡われている種子が流れ着くという物語の展開は、神話的である。例えば、どこかからやって来る米という展開で見ると、川野和昭の『竹の焼畑と稲作儀礼–竹林文化論への試み–』（川野　2009）の中に、ラオスの「飛

んでやってくるコメ」というタイプの神話が紹介されている。タイプアン族やタイル−族というタイ系の人々の間に伝承されている神話には、「稲米が川上から下ってくるもの」また、「米倉を綺麗にすると、米が森からひとりでに流れてきて、米倉がいっぱいになる」と伝承されていることが紹介されており、川野によれば、「−稲作以前の稲米−」と分類されている(川野　2009　pp. 93−94)。コメ（富)が飛んでやって来ると観念する稲作の文化の存在を頭の片隅に置くと、八重山で謡われているイネは、種子の方からやって来るという神話的発想は類似しているものの、「たらまゆら」の歌の全体の展開を見ていくと、流れ着いた種子は、田に播いて育てて増やす種子としてみる稲作農耕の発想にとらわれている。

２．供え物としてのイネ

供物を捧げる行為は、世界中の人間が古来行っている普遍性のある習俗といっていいだろう。それだけ常態化しているということは、供物となるものも意図も、供物の数だけあると考える。また、一般的に、供物を捧げる作法には細かい決まり事がつきものである。本来、それぞれの供物を捧げる由来と結び着いている決まり事は、原則としては違えてはならない。けれども長い伝承の間には、その原則を守れず、環境や社会の変化に対応して、意識的、又は無意識的に作法を変える場合も現実には普通にある事である。そうした様々な祭祀・行事に捧げられる供物のような柔軟な対象のすべてを、その意図や由来で分類することは困難であり、むしろ供物の意図を無理な分類に当てはめることになりかねない。しかし、この項では、抽出した歌の中にみる供物としてのイネについてという限定のもとで、事例を取り上げるものである。

（１）　屋敷願の祝詞にみる供物のイネ

共同体の祭祀及び家行事や個人の人生儀礼などの際に、様々な神饌が供えられる。イネやコメも供え物の中の一つで、どのような言葉で唱えられているか、ここに挙げた唱えの例は、石垣島の「屋敷願いの祝詞」である。

「屋敷願の祝詞」　石垣島新川村　　p.41

（前略）

くむちぬしだいしさるなーら	供え物の次第を申しあげます
ばがみどぅりすりばないきぱな一(いっ)ちー	若緑の生気のある花　活花を一対

だいびしぬかんがんむちーちー　あらいぱなみがきぱなーちー　あからぱたらとうーみょーいちー　あーむりざきーちー　うまちゃー、かばちゃー、うちゃどーーちー　しんぐく、まんぐくからちじいらび、ぴてぃじんしらびせーり、ちかんばなしらびぱなぴとぅかざり、ちょっきぴとぅしき、こーばぬかんくむちかざり、ちぃちぃまちりむぬ、ぬぬたん九（きゅー）たん、ぶーまる九（くくぬ）まる、かにまる九まる、まいだーら九（くくぬ）たーらかざーれーんゆー。

（以下略）

台にすわらせた鏡餅を一対　洗い米磨き米を一対　赤々と明かるい灯明を一対　泡盛酒を一対　うまいお茶　香ばしいお茶　お茶湯一対　千石　万石から粒選び　一つ選びをした掴み米　調べ米を一飾り茶請（ちゃうけ）を一式　これだけの神供物を供え　土（つち）祭りのものに 布反（物）九反　芋丸を九まる 金丸を九まる　米俵を九俵を飾って〈供えて〉ございます

＊下線は筆者が加筆

上記は、「屋敷願いの祝詞」の中で供物を捧げている部分で、下線部がイネ（コメ）に関する供え物が唱えられているところである。

「あらいぱな／みがきぱな」は、白米の供え物を美称辞で表現している。「ちかんぱな／しらびぱな」も同じく供え物のコメだが、神女が占いに使うコメである。また、「まいだーら（米俵）」を供えることが唱えられている。

次の事例は、波照間島の節祭の祈願の事例である。

「しぃちぃびぬしぃさりぐち」　波照間島　p. 101

うーとーとぅ　きゆぬ　ぴんや　しぃしぃん　うごんに　あたりき　うごんあぐば　うぎとぅろーりぃたぼーりかんぬ　くむつぁー　ぐしぬ　くんごう　びぃん　はなくみぬ　くんごうぱな　くぱぁーん　くくぬちぃむりぃみしゃぐぬ　いっちん　かつぁりちぃうごんさば　しぃまぬゆーや　しぃ

ああ尊（とうと）　今日の日は　節祭の祈願にあたりますから　祈願を上げますから　お受け取り下さい　神の供物は　お酒の九合瓶　花米の九合花米供饌（くばん）を九つ盛り　神酒（みき）の一対を供えて　祈願しますから　島の世＜豊作＞は　島中にくださり 雨の果報は　五日廻り　十日廻りにいただき

まぬめー　たぼらり　あみがふや　い　　島の世〈豊作〉は島中　国中にく
しぃかまりん　とぅかまりん　たぼら　　ださい
り　しぃまぬゆや　しぃまぬめ　ふん
ぬめ　たぼらり

＊下線は筆者が加筆

上記の事例は、多くの供物の名前が並んでいるわけではないが、「はなくみ（花米）」の呼称で、美称辞「はな」を接頭語とした米の供物が唱えられている。

先の事例の「屋敷願の祝詞」は、共同体の儀礼というより、個人の家の儀礼の際の供物である。また、後者の「しぃちぃびぬしぃさりぐち」の例は、節祭という新年の祭で、村全体の行事の性格が強い。いずれにしても、祈願には、何らかの供物が捧げられている。この他にも、盆、生まれた時から死ぬまでの個人の人生儀礼、屋敷願い、個人の家の「火の神」への祈願等に唱えられる祝詞（ニガイフチ･フミシャギ・ヤータカビ）は、テキストに数多く収載されている(テキスト pp.35-113)。それらの祝詞は、唱え言の主旨の口上に続いて、供物の名の次第を読み上げ、豊穣や家族の健康他の願いを唱えるという形式が多い。そしてコメは、様々な祭祀の祭壇に、供え物や呪物とし用いられていることをこれらの呪詞は伝えている。

（２）神酒の材

次に、農耕祭祀では、一般的に、お初のコメ･アワから神饌の神酒を作って、感謝と祈願を込めて神に捧げる。祭りと神酒は古来つきものであり、コメを原材料とした重要な供物である。農耕祭祀に限らず、様々な祭祀、年中行事の祭壇には、コメ･アワを材料とした神酒が供えられる様が歌われている。神酒は現在の祭でも、参加者や見学者に振る舞われる。祭りの神酒造りの始終を見せて頂いたことがある。祭祀の前日から翌日の祭りに備え、村の当番に当たった人々が、御嶽の「あしゃぎ」で、村の人々から集めたコメを炊き、麹を混ぜ、ゲットウの葉を蓋にして一晩寝かせて発酵を待つ。翌日に、＜神＞と参加者とその家族全員に振る舞い共に頂くための神酒を、手間暇をかけて用意していた。そうした神酒造りが、全部の祭りで行われているわけではなく、米粉を溶いた簡易な神酒の場合も見られるとはいえ、祭りに神に供える神酒は重要な供物である。次の事例に取り上げる小浜島の「みんだかはらまいぬじらま」は、祭り行事に参加する村人達に割り当てられる芸能や役割を、それぞれの魚たちに

わりふって擬人化した歌謡である。その中の詞章にも、米・粟から神酒を造ると歌われている。

「みんだかはらまいぬじらま」小浜島　　p. 254

（前略）

4　米ぬ穂(ぼー)ば　食(ふぁ)いむちうりき　　米の穂を食い持ち降(お)り来て

5　粟ぬ穂ば　食いむちうりき　　粟の穂を食い持ち降り来て

6　米ぬ穂や　みしゃくばまらひ　　米の穂は御神酒を作り

7　粟ぬ穂や　あわむるまらひ　　粟の穂は泡盛を作り

（以下略）

上記の歌の擬人化された魚たちが行う祭礼の様子は、村人達の祭りの振る舞いを写し出したものである。

先に述べたように、様々な祭祀･行事に捧げられる供物のすべてについて、その意図や由来を性格にしることは難しいと思われるが、テキストの稲作歌に謡われた供物としてのイネ・コメの呼称は多数あり、その考察については、機会を改めることとしたい。

３．米としてのイネ

歌謡の世界で、食の風景（コメの御飯）が謡われている例を挙げてみたい。植物歌からイネを含む歌を抽出すると、稲作と関係の深い稲作歌と稲作以外のイネの関係を謡う歌も含まれる。但し、農耕と関係が薄いイネの歌は、農耕に関連するイネの歌と比較すると、数は少ない。コメを謡った歌の数が少ないということ自体が、イネと歌の関係の性格を表している。

（１）「ご飯」の景２題

生活の中でのイネといえば、コメ・ご飯として、食の景と無縁なはずがない。けれども先述してきているように、八重山歌謡には人々の食べものとしてのご飯の場面を謡った歌は極めて少ない。御飯の景を謡っている歌の一つに、「まにむるぬいしきまゆんた」がある。

「まにむるぬいしきまゆんた」　波照間島　　p.457

（前略）

8	まつこんぬいんかい　そだんばし	ヤシガニの洞穴に（行く）相談をして
	ばしよちぃぬいんかい　だんがんばし	バショウチィの洞穴に（行く）談合をして
9	むぎぬんぼんば　なりむち	麦のご飯を盛り持ち
	あこんぬんぼんば　なりむち	芋のご飯を盛り持ち
10	むぎぬんぼんぬ　かちむぬ	麦のご飯のおかずは
	びるかちぃどぅ　かちむぬ	蒜(ひる)漬けがおかず
11	あこんぬんぼんぬ　かちむぬ	イモのご飯のおかずは
	みしゅますどぅ　かちむぬ	味噌と塩がおかず

（中略）

18	ましびらや　いらぶちぃちひちんし	真勢兄はイラブチィ魚を釣り
	かにびらや　にばらじんちぃんし	加那兄はニバラ魚を釣り
19	いらぶちぃ魚(いず)　なましし	イラブチィ魚は膾にし
	にばる魚　ぬにばし	ニバル魚は潮煮をして

この歌は、マニムル家のイシキマ（女性）が、恋人と島の洞穴の隠れ家で過ごす一日の快活な気分が伝わってくる歌である。事例として取り上げたが、実は、この歌にはコメの御飯は謡われていない。イシキマが用意して持参するご馳走に、「むぎぬんぼん（麦のご飯）」「あこんぬんぼん（芋のご飯）」、蒜の漬け物、味噌と塩、そして恋人が海で釣った魚等が挙げられている。歌では「んぼん（ご飯）」といっても、コメのご飯ではなく、麦やイモの混じったご飯が庶民の日常の食事であったことが窺える歌である。

コメのご飯が歌に登場するのは、次の「猫ゆんた」である。

「猫ゆんた」　石垣村　p. 331

（前略）

15	うふや下　そふかれぱり	大家のもとに引かれて行き
16	なかぱらーに　ふんさまられ	中柱に組縛られ

17　米(まい)ぬんぼん　食(ふぁ)しよーたら　　米のご飯をたべさせなさると
18　魚(いず)ぬする　食しよーたら　　魚のお汁(つゆ)をたべさせなさると
（以下略）

子持ちの猫（婦人）がおっぱいが出ないので、蛸を狩りに出かけたところを、無理矢理に役人の大家に連れて行かれて、コメのご飯や魚の汁を振る舞われたが、残してきた子らのことを思う母猫は、食事が喉を通らないという物語である。この歌からは、乳が出ない母親猫は、海の蛸を狩猟しているのに対して、大家では、コメのご飯が振る舞われている。この歌でもコメのご飯が庶民の食卓の風景ではなく、特別なことであることが擬人化された詞章から窺える。喜舎場は、この歌のモチーフとなっているのは、士族と平民の階級制度が厳しかった折の女性の酷使であり、猫を擬人化して歌ったもの（喜舎場　1970a　pp. 74-82）と述べている。

（2）「山かしぃにあよう」にみるイネ

前章の植物歌で、自然の事物の姿を素材にして、人の在り方についての思いや観念を具象する表現法について考察してきたが、新川村の「山(やま)かしぃにあよう」もそうした歌の一つであった。その中で、イネの苗の様子を、そうした表現の素材として取り入れていた。詳しくは、前章で述べているので、ここでは簡略に記す。

「山(やま)かしぃにあよう」　石垣島新川村　　p. 158

（前略）
4　きゃら米ぬ　根下りや　　キラマイ<米>の根下(お)りは
　田のよる田に　根下りしようる　　苗代田に　根下(お)りしなさる
5　むむさかりぃ　さかりよううり　　百栄え　栄えなされよ
　むむむたい　むとぅよううり　　百繁り　繁りなされよ
6　ばがけらぬ　根下りや　　私達みんなの　根下りは
　ちぃくでぃふちぃに　根下りす　　作り口<田・畑>に　根下りする
（以下略）

苗代に根付く早苗の生育を祈り、同時に田･畑で働く吾等（村人達自身）の姿をそこに重ねている。この歌の冒頭部は、歌のタイトルにもある「山かしぃに（オキナワ

ウラジロガシ）」が山中に「根下り」する様子からはじまる。引用部の前の節は、「山かしぃに」が根を下ろし、枝が繁茂することを歌っている。人事を表現するために、自然物を引き合いに歌う構造の表現がしばしば見られるが、そうした自然物のひとつとして、上記の事例ではイネが取り上げられたのである。その表現に活かされているのは、作物を育てる農民の目線で、植物も人も根ざして活力を得るという共通の本質に共感を示す感覚によるといえる。喜舎場のこの歌についての解説によれば、「ムタヨウリ」は、繁茂するの意であり、「人間の肥え太っているのにも「ムタエ」ているといっている。」（喜舎場　1970a　p. 37）と解説している。言葉自体が、植物と人とに境界を設けずに使われていると捉えることができるだろう。

（3）「生りや竹富」にみるイネ

竹富島の「真栄（まさかい）ゆんた」と石垣島登野城の「生りや竹富」は、竹富島で稲作が出来ない為に、島を出て西表島の田をひらいて働くことになり、別れ別れになった男女が、それぞれの島の上に白雲が立つのを見て、互いの事を思いあって謡う掛歌の形式をとっている。

「生りや竹富」　石垣島登野城村　　p. 355

1	生（ま）りや　たきどぅん	生まれは竹富（たけとみ）島
	すだてぃや　なかまぬ　まざかい	育ちは仲間（なかま）村の真栄（まざかい）＜男名＞
2	なゆぬゆん	何の故に
	いきゃぬちぃねゃんど	如何なるわけで
	なかまくいだ	仲間村へ越えた
3	うはら田ぬ	大原（おおはら）田圃の
	みなぐちぬ	ミナグチ＜田地名＞の
	ゆやんどー	故に
4	しる米（ごめ）ぬ	白米の
	むち米ぬよー	餅米の
	ゆやんどー	故に

（以下略）

引用部は、故郷の竹富島を離れて、西表島に暮らす理由が謡われている。それは、西表島の大原の田圃やミナグチの田んぼを耕し、白米や餅米を収穫するためである、

と謡われている。この4節には、米が貢納物であった歴史的背景も窺えるが、作物としての「イニ」や「マイ」や「クミ」等の呼称ではなく、食物としての「しる米（白米）／むち米（餅米）」という意味を込めた呼称を用いている点が注目される。この詞章には、貢納物を栽培する強制された労働と恋人との別れというモチーフだけではおさまらない、庶民の日常食ではないコメへのある種の憧憬や、そこから派生する霊性を認める気持ちが表出されているといえるだろう。竹富島を舞台にした二つの歌には、食の嗜好としてのコメへの思いを受け取ることができる。

もう1篇、無くてはならない程欲しい物という意を表現する具象にコメが用いられている事例も加えておきたい。次の「ちんだ入りぬじらま」では、問答形式で、男女の恋の成り行きをモチーフに謡っている。以下の詞章は、女性に恋をした男性が、どれほど女性を恋しいと思っているかと問われた時の問答である。

「ちんだ入りぬじらま」小浜島　p. 247

（前略）

3	みやらびふさ	乙女の欲しさは
	なゆどだき	どれほど
	ふさるかよ	欲しいか
4	いざまふさ	乙女の欲しさは
	いかどだき	如何ほど
	ふさるかよ	欲しいか
5	なちぃ水	夏の水が
	ぴらぎ水	冷たい水が
	ふさそーに	欲しいように
6	ぴらぎ水	冷たい水は
	夜ぬ入りだら	夜になると
	あてぃやねぬ	あてがない
7	くみとだき	米のように
	あわとだき	粟のように
	ふさぬなよ	欲しいよ

（以下略）

上記の歌では、「乙女」をどれほど「欲しいのか」という問いに対して、男性は「夏の冷たい水ほどに欲しい」「米や粟のように欲しい」と、娘に対する思いを訴えている。ここで女性への気持ちを表すためにコメやアワが用いられたのは、コメやアワが大切な欲しい物だという人々の共通観念があって、歌に用いればわかりやすく共感を引き出すことができるからである。ここにも、コメ（アワ）が無くてはならないもの、そして憧憬に値するものであるという認識が表れている。

ここに取り上げてきた野外のお弁当の風景を伝えるような日常生活の食の風景にみるコメを謡う歌は、稲作歌のなかでは数としては多くない。そして、耕作者が移住の地で、故郷に残した人を思いながら稲作に込める思いは、海で隔たる八重山の島嶼の環境や強制的な村分けの歴史や、貢納の状況を背景に負っている。また、与えられたコメのご飯が喉を通らない猫の物語の歌も、八重山の役人と女性の間の理不尽な強要が背景に重なる。加えて、なくてはならない大切な人という意味を表すために米（と粟）を用いて謡っている歌があるのは、女性に恋い焦がれる気持ちに匹敵するほどの憧れが米や粟にも向けられていることが認められる。そして、これらの事例は、イネ（コメ）という植物を謡う歌にも、前章に取りあげた日常の人間模様をテーマにした植物歌と同様なテーマでの歌があるということである。ただその数は少ない。一般的に古謡は、特定の個人の思い等を歌うことを目的にしていない、とされ、共同体の共感が歌の伝承の基盤にある。そうした意味では、たとえば、「生りや竹富」の田を求めて西表島に移住した「真栄」の物語の背後には、これに似た体験を共有し、共感する多くの島の人々の存在があり、その人々の総意がこの歌の心意である。生活の景としてコメが謡われている歌の背後にも、コメに込めて謡われている思いを共有している多くの島人がいる。従って、イネを含む歌の全体のなかで、日常の生活に関わるイネの歌の数の稀少にかかわらず、八重山の貴重な歌である。

４． まとめ　-稲作歌の概要-

イネを詞章に含む歌について取り上げ、１.作物としてのイネ、２.供物としてのイネ、３.コメとしてのイネ という特徴的な 3 つの内容に分けて記した。それぞれの内容を簡単にまとめると次の様になる。

＜1.作物としてのイネ＞とは、共同体の稲作儀礼の主題と深く関わって謡われるイ

ネのことである。そうしたイネを謡う歌として、「稲が種子あよー」「たらまゆらじらば」「まゆんがなしぃの神詞（かんふちぃ）」の 3 篇の歌の事例を取り上げ比較した。「稲が種子あよー」「たらまゆらじらば」の 2 篇には、言霊やニライカナイ等の異界の信仰が歌の発想に窺える。歌唱者達が謡うイネの生育と豊穣の表現の背後に、目には見えない超自然的な力に対する信仰の世界があり、それらを基にして歌の叙事形式や超自然な神話的物語の幻視が展開している。もう 1 篇の「まゆんがなしの神詞（かんふちぃ）」は、人格化した目に見える＜神＞という発話者が創造され、言霊の呪力と＜神＞の予祝という 2 重の呪術的形式の唱えである。

いずれの歌の主題も、イネの豊穣を希求する一点に集約されるとはいえ、イネの稔りの実現をもたらすことを目的とした歌の表現は、発想や思想・観念の多様性をを持って成立している。

つぎに、＜２.供物としてのイネ＞を謡う歌は、 作物のイネを謡う歌と同じく多数存在する。そこでは、供物の次第を唱え上げる形式をとっているものが多い。捧げる供物の種類は様々だが、その中の供物の 1 つに、イネ・コメ、そして、米から作る御酒がある。歌にみる供物を捧げる儀礼は、稲作儀礼に関連したものだけではない。共同体や家、個人の各行事等様々であり、供える対象も超自然や＜神＞や先祖等様々である。稲作儀礼でイネやコメを供える理由は主に、豊穣の祈願や感謝だが、その他には、卜占の目的で用いられる呪術的なものもあることを、テキストの歌にみる様々なコメの呼称は伝えている。敬語や美称辞を用いて表される種々の供物の中の一つとなるイネ・コメに対する憧憬や畏敬は、稲作文化の中に見られる稲霊等の関連だけではなく、食べる米に向けられる感情に発する発想も抜きにできないと考えられる。

それは＜３.米としてのイネ＞は、食の風景に代表される、日常の暮らしと関連するイネ・コメを謡っているものである。事例では、食事の景を謡う歌の他、イネ・コメを用いて思いを表現する歌等を取り上げた。これらについては、イネと関わる歌のなかにも、第 2 章の植物歌で考察した具象表現の構造と類似したものが在ることを示している。ただ、テキストに収載された歌の中で、こうした表現の構造に用いられるイネ・コメの歌は少ない。

＜１＞・＜２＞・＜３＞の関係は、植物歌の中のイネという植物を含む歌謡群である。そのうち、＜１＞と＜２＞は、主として稲作等の農耕儀礼と深く結びついたイネを謡う歌であるのに対して、＜３＞は、前章の植物歌で考察した島の日常の暮らしと

人間模様をテーマを主とした歌の中で用いられ謡われるイネである。口頭伝承の歌の性格として、謡われる場が無ければ伝承できないとすれば、祭祀の主題となる儀礼歌が残りやすいのは、当然としても、テキストのイネにかかわる歌の多くが、稲作に関連した歌(稲作歌)であることは、イネにかかわる歌の性格を示唆している。

こうした稲作歌の性格を、前節で考察した歴史的背景に照してみると、15 世紀の朝鮮漂流民の見た与那国島をはじめとする八重山の島々のイネ・コメ事情では、人々はコメを食することを好み、コメがない島人は、他島にコメを求めていたことが記されていた。それを念頭においてみると、テキストに収載されている稲作歌及び生活の景のコメを謡う歌から受ける島の人々とイネの関係は、朝鮮漂流民の見た 15 世紀半ばの八重山とは少し異なる世界が展開している印象を受ける。テキストの稲作歌の世界は、食べるためのイネ・コメとして耕作技術と稲作文化を受容していた共同体から変容してみえる。それは、王府統治によって貢納のための農耕の奨励という新しい社会的価値が付加され、王府の奨励に伴う様々な稲作の祭祀儀礼も、国家の政治と宗教の側面からの整備がなされていく社会を色濃く反映して、人とイネとの関係の変化を歌が示しているものと考えられる。そして、これは、テキストに留められた稲作歌の性格というべきだろう。

そして、＜1.作物としてのイネ＞で取りあげた 3 篇の事例の歌について、1 篇1篇の歌の表現様式を成立させている発想は一通りではないことを明らかにした。このような稲作歌の表現の多様さは、歴史資料を通して 15 から 18 世紀の稲作事情にみたように、古くから八重山の共同体が信仰してきた意識と、国家の統治や新しい知識や社会構造の変化を混在して受容する八重山の共同体の柔軟な有り方と重なる。稲作歌という範疇の全体を捉えるとすれば、農民と在地の役人、国家とその役人という、共同体内の立場のちがう構成員の思惑等、歌にみるイネと表現の関係には、稲作の祭祀を支える多様な関わりの反映が考えられる。

藤井貞和は、『古日本文学発生論』（藤井　1980）の中で「今、前節に「このこと(=祭祀歌謡の成立)は祭式の外側にも、民衆生活のなかのうたの発達をうながしたであろう」と述べたとき、私は八重山のあよー、じらば（でぃらば）、ゆんたのたぐいを漠然と思い浮かべていた。」(藤井　1980　p.127)としている。本稿がイネという植物の歌の表現に特化して考察している立場からいえば、イネの祭祀歌謡と祭式の外側のイネの歌について次のようなことが言える。人間にとってイネという特別な植物

が歴史の中に登場して以来、イネを栽培する過程で、様々な側面のイネとの触れあいがあり、植物自体の特徴はもちろんのこと、栽培に関わる周囲の自然環境や時候の把握、そして植物の利用にまつわる様々な知恵の蓄積がある。それらの蓄積を表現のストックとし、一方では、イネの豊穣の希求が、共同体の総意としてイネの祭祀歌謡の言葉へと結実し、特別な儀礼の場で伝承されてきた。また、他方に祭祀の外側では、農民にとって稲の耕作は日常に繰り返される労働の情景に他ならない。その日常感覚で捉えるイネとの関わりは、植物歌の表現に見るような人間模様の思いの具象表現にイネを活用する歌の言葉の成立があっても不思議はない。このように考えると、様々な思惑を背景に持つ稲作歌が、「ハレ」の儀礼歌としての表現の中にも、「ケ」の農民の発想による表現がどのように混在しているかみることが、イネの歌全体の考察の課題として浮かぶ。

第３節　稲作歌にみるイネの生育の表現

作物としてのイネを謡う歌は、主題は豊穣を願うことに集約されているが、その表現の発想においては一通りではなく、そのことが歌の様式の違いに関係していることを述べてきた。そのように異なる発想の混在は、歌全体の表現様式だけではなく、一篇の歌の１節１節ごとにも見ることができるのではないのかと考える。

ここでは、イネの叙事歌からイネの生育の表現を主に取り上げる。イネの叙事歌は、播種から刈り入れに至るまでのイネの生長、そして、刈り入れ後の豊作の感謝や祈願の村人の祭りの様迄を含んで謡っている。それは、歌全体としては、イネの豊穣を願って呪的な信仰のもとに、稲作の１周期の全過程を謡う表現様式をとっているものだが、その歌の中の各期のイネの生育がどのような意図の表現様式で謡われているか検討してみたい。

１．叙事歌にみる各期のイネの生育の表現

イネの生育の表現について取り上げている先行研究に、小野重朗の「畦枕考」（小野　1995）がある。「畔枕」は「奄美・沖縄の南島の歌謡にしばしば見られる言葉で、稲の穂がよく稔って、風が吹くと、畔（アブシ）をまくらにすること。イネの豊作を表現していう語である。」（前掲書　p. 203）とし、イネの稔りを表す慣用句の一つと

指摘し、表現の出自を考察している。沖縄・奄美・石垣の「畔枕」の表現の事例を挙げている。また、本土の田植え歌に「稲の豊作を象徴する畦枕（いうまでもなくアブシ枕、アゼラ枕でなく、アゼ枕、クロ枕であるが）が、本土の隅々まである」（前掲書　p.217 ）と述べている。そして、南島の歌謡の「畔枕」という語の出自は、日本本土の十七世紀後半から十八世紀はじめにかけて、「畔枕」が本土から南島に伝わったもの、と説いている（前掲書　p.218-219）。小野によると、本土歌謡ではそれと並んで「十七娘と寝る畔枕」という語が多くあり、「畔枕」は本土の抒情歌小唄の世界と引き並べて謡われていたものだったろうとしている(前掲書　p.217-218)。そのことから小野は、言葉の伝播の際の南島における受容の在り方についての考察を行っている。それは、日本本土の小唄に使われている個々人の心情を歌う抒情的な歌の言葉がこばまれ、南島の歌謡が受容する時には、イネの稔りの表現にみる「畔枕」だけの受容となっているという論を展開している。その理由は、「南島はその頃、(中略)祭祀と信仰に裏づけられた、長編の叙事歌中心の世界であった」（前掲書 p.219 ）とし、「南島の古代歌謡が、本土の近世歌謡の一部を拒否した」（前掲書　P.219）という見解で結んでいる。小野の指摘の興味深い点は、「畔枕」という詞章を通して、本土の近世文学と「南島歌謡」のつながりを指摘したことと、「古代性」という表現は用いているものの、本土の「抒情」と「南島歌謡」の呪的心意の異質性を同時代の歌謡として指摘していることである。

「畔枕考」で小野が取りあげた「畔枕」を用いたイネの生育の表現は、イネの生育の過程のなかの稔りの時期のイネの姿である。けれども、八重山歌謡のイネの生育を表す慣用句は、稔りの時期を表す詞章だけではない。たとえば、長編の「稲が種子あよー」には、イネの全生育段階の生育各期を表す言葉が盛り込まれている。前節で述べたように、「まゆんがなしぃの神詞（かんふちぃ）」と「稲が種子あよー」に見る詞章の表面上の叙事的展開、及び、用いられている対語・対句等の慣用句はほぼ類似する。以下の歌は小野が引用した八重山島石垣の「まやぬ神の宜り言」（小野　1995　p.208）である。

「まやぬ神の宣り言（かん　の　ごと）」　　八重山島石垣

南風（ばいかじ）ぬ、押（う）しゅらば　　南風が吹くならば
北（にし）ぬ畔（あじら）、枕（まふあ）ばし　　北の畔を枕にし
北風（にしぃかじ）ぬ、押しゅらば　　北風が吹くならば

南ぬ畔（ぱい　あじら）、枕ばし　　南の畔を枕にし

そして比較のために、テキストから石垣島宮良村の「種子（たに）どりあよう」を記しておきたい。

「種子（たに）どりあよう」　石垣島宮良村　　P. 163

（前略）

19 ぱいふきあぬ　うしよらば　　南風が吹き押せば
にしぬあぶんば　まいらし　　北の畦を枕にして
20 やまふきあぬ　うしよらば　　山風が押せば
ぱいぬあぶんば　しきにばし　　南の畦を敷根〈枕〉にして
（以下略）

上記の唱えと歌の 2 篇の事例を比較すると、ほぼ同様の詞章である。

本稿では、まず、稲作の叙事歌から主要なイネの生育の表現を取り出してみたい。次の長編の石垣島白保村の「稲が種子あよう」を事例に、イネの生育の各期の表現を確認してゆきたい。

「種取（たにどう）りのあよー」　石垣島白保村　p.165

1　今日ぬ日ば　､黄金日ゆ　本ばし　　今日の日を　黄金の日をもとにして
ウヌカフド　キヤラヌマイ　　ウヌガフド　キヤラヌマイ
（囃子、以下略）　　（囃子、以下略）
2　いにがだね　ゆすぬ種（だに）　うるしより　　稲の種　米の種をおろしなさり
3　ぶなり手　かぬしや手し　むみより　　姉妹の手　愛しい者の手でもんで
4　日にちしらべ　してしらべ　おーり　　日を調べ　(時)節を調べなされよ
5　苗代田に　つむり田に　むちおーり　　苗代田に　積もり田に持ちなさり
6　びぎりや手　かぬしや手に　うるしより　　兄〈愛しい人〉の手で　愛しい者の手で下ろしなさり
7　まりかいしや　びりかいしや　ありより　　生まれが美しく　坐りが美しくありなさり
8　下かいや　白ねうれ　上かいや　若　　下には白根が下（お）り　上には若葉がと

	葉とんで	び出して
9	犬が毛に　猫が毛に　たらしより	犬の毛のように　猫の毛のように垂らせてください[17]
10	つむりかいしや　みとみ美しや　ありより	見積もりが美しく　認めが美しくありなさり
11	月夜ざり　日むやざり　あたりより	月夜ごと　日ごとに　当たりなさり
12	取る月ぬ　いびる月ぬ　なりよたら	取る月に　植える月になったら
13	大田　長田に　むちやおーり	大田圃に　長田圃に持ちなさり
14	ないば　ぱかり　しまば　ぱかり	長さを測り　幅を測り
15	下かいや　白根うれ　上かいや　若葉とんで	下には白根が下り　上には若葉がとび出して
16	いばん本　山ゆすきに　むてい栄い	力芝草　山薄のように生え茂り
17	うるじんぬ　若夏ぬ　なりよたら	初夏に　若夏になったら
18	色ばくめ　葉かいしや　とんでおーり	色つやをこめ　葉が美しくとび出しなさい
19	若夏ぬ　なりよたら　大ぷー出んで	若夏になったら　大穂がとび出して
20	石ぬぐ　金ぬぐに　なうりより	石のように　金のように稔りなされよ
21	取りしきぬ　かり時分ぬ　なりよたら	取る月に　刈る時節になったら
22	若者ぬ　びら者ぬ　かりとーし	若者が　若い者が　刈り倒し
23	大家　とーらん　んちやしより	大家　台所も　満たしなされよ
24	神くむち　御主上納ゆ　うさめおーり	神供物を　御主上納をおさめなされよ

この第 1〜24 節までの詞章は、イネの生長という点からみてゆくと、Ⅰ.播種･早苗期（苗代）第１〜11 節、Ⅱ.繁茂期（本田）第 12〜18 節、Ⅲ.稔り期 第 19〜24 節、という３期に分けられる。さらに各期を細くみてゆくと、どのような内容が歌われているかは、次の①〜⑦の項目に整理できる。①日撰り（第１節）、②種まき（第２〜７節）、③早苗の生長（第８〜11 節）、④田植え（第 12〜14 節）、⑤稲の生長（第

[17] テキストの語訳は、この第９節は「垂らせて下さい」と言う祈願の言葉となっている。けれども、「稲が種子あよー」の叙事表現は言霊信仰と予祝の呪術的心意の表出を基本とする形式であるとすれば、早苗が生長している事実を歌っていると捉えられる「垂れなさり」が適切であろうと考え、変更した。第 18､23､24 の各節も、同様である。

16〜18 節）、⑥稲の稔り（第 19〜20 節）、⑦刈り入れ（第 22〜24 節）となり、稲の生長と農作業が順序よく歌詞に盛り込まれている。下の＜表 1＞は、イネの生長の各期ごとに謡われている内容をまとめたものである。

＜表１＞

Ⅰ 播種･早苗期	①日選　②種まき　③早苗の生長
Ⅱ 繁茂期	④田植え　⑤稲の生長
Ⅲ 稔り期	⑥作物の稔り　⑦刈り入れ

Ⅰ〜Ⅲの各期に対応して、稲の生長を表す対語・対句表現を含んでいる。そこで、各期のイネの生長を表す対語・対句表現に、特に注目しながら内容を追って見てみたい。以下の文中の「／」は、「／」の前後の語または句、文が対の関係にあることを示すこととする[18]。また、「・」は、「・」以下が対語の述部とする。

＜Ⅰ 播種･早苗期＞の内容には、日撰りをして種子が取り出され、苗代に蒔かれ、播かれた種子が苗代で生長していく稲の姿が歌われている。まず、「いにがだに／ゆすぬだに」というイネの種子名が示されている。穂で保存してあった稲種子を女性達の手でしごく作業が謡われ、吉日を選んで男性達によって種子が苗代に蒔かれる。案配よく播かれた種子からは、白根と若芽が発芽する。ここでは、苗代で生長していくイネの姿が歌われている。この時期の苗代と苗代に育つ稲苗の姿は、以下の 4 種の対語・対句が表している。

a「まりかいしや／びりかいしや・ありより」　第 7 節

b「下かいや　白ねうれ／上かいや　若葉とんで」　第 8 節

c「犬が毛・に／猫が毛・に・たらしより」　第 9 節

d「つむりかいしや／みとみ美しや・ありより」　第 10 節

上記の a・d は苗代の景の美しさを誉め、b・c が稲の生育を表す対語、対句である。

＜Ⅱ 繁茂期＞では、良好に育った早苗を本田へ移す田植えと、そこでの稲の生育する姿を歌っている。この時期の稲の繁茂を表す句は次の 3 種である。

[18]波照間は、「八重山歌謡の歌形の諸相」で、対句法に使われる語の定義を述べている。「対語とは単語のレベルで意味的に対応、並列する二つの語を指し、対句とは文節および連語のレベルで意味的に対応、並列する二つの語句を指すこととする。対文は文のレベルで意味的に対応、並列する二つの文、あるいは文的構造を有した語句の連続を指す。そして、対語、対句、対文を「対(つい)」という語で総称する。対を構成する一つの語、句、文をそれぞれ対素と呼ぶ。」（波照間 1982 p. 108）。本稿もこの定義に添って用語を使うこととする。

e「下かいや　白根うれ／上かいや　若葉とんで」　第 15 節

f「いばん本／山ゆすき・に・むてい栄い」　第 16 節

g「色ばくめ／葉かいしや・とんでおーり」　第 18 節

e は、＜Ⅰ 播種･植え付け期＞のｂと同じ表現が混入しているが、こうした例は西表島祖納の例にもみられる。

＜Ⅲ 稔り期＞は、稲の穂の稔りの時期である。よく稔った穂と、豊かな収穫で家が満たされる様を歌っている。イネの穂の稔りを表すのは、以下の名詞と対語である。

h「大ぷー・出んで」　第 19 節

i「石ぬぐ／金ぬぐ・に・なうりより」　第 20 節

先に述べた小野の指摘した「畦枕」の表現は、この事例には用いられていないが、＜Ⅲ 稔り期＞の詞章で用いられる慣用句であり、大浜村、宮良村、黒島の３地域の「稲が種子あよー」に伝承されている[19]。

テキストに収載されている「稲が種子あよー」12 篇についても、稲の生育の表現を取り出しまとめたのが、次頁の＜表＞である。＜表＞から各期のイネの生育の主要な表現のパターンは、下の a～i の対語を基にした対句表現にまとめられる。

＜Ⅰ 播種・早苗期＞ a「白根／若葉」

b「犬が毛／猫が毛」

c「うまれが美しい／坐りが美しい」等

＜Ⅱ 繁茂期　＞ d「ススキ／チカラシバクサ」

e「大穂／長穂」・「大葉・中葉」・「出穂・撫で穂」等

f「色つやをこめ／葉が美しく」

g「白根／若葉」

＜Ⅲ 稔り期　＞ h「石の実／金の実」

i「畦枕」

19　黒島の「種子取りあゆう」の稔り期の「畔枕」の詞章の例。

「種子取りあゆう」黒島　p. 178

（前略）

22　北の風（にしぬはじ）　シタリヨ　　北風にシタリヨ

なりよらば　南畦枕（はいあざまくら）し　　なりなさったら南畦を枕にし

23　南の風（はいぬはじ）　シタリヨ　　南風にシタリヨ

なりよらば　北畦枕（にしあざまくら）し　　なりなさったら北畦を枕にし

＜表＞「稲が種子あよー」にみる生育表現

	歌謡名	播種	早苗期１	早苗期２	早苗期３	早苗期４	繁茂期１	繁茂期２	繁茂期３	繁茂期４	稔り期１	稔り期２
1	いにがたにあよう 石垣島川平村	いにぬたに／きらまい	うふいぴりぃ／なかいぴりぃ	いぬがきーに／まゆがきーに くいりなーくいり　くいりしい	－	－	－	－	－	－	－	－
2	稲が種あよう 石垣島石垣村	－	下かいや　白根さし／上かいや 若葉いで	犬の毛い／猫の毛い　生らしょうり	－	－	－	－	－	－	－	－
3	稲が種子あよう 石垣島大川村	米種子ば／稲種子ば	下かいや　白根さし／上かいや 若葉いで	犬の毛い／猫の毛い　生らしょうり	－	－	－	－	－	－	－	－
4	稲が種子あよう 石垣島登野城村	－	下かいや　しい（白）すびに／ 上かいや　若葉いゆ　まらしょうり	犬の毛／猫の毛　生らしょうり	－	－	－	－	－	－	－	－
5	稲が種あよう 石垣島平得村	－	②しい(下)たんかいや　しるね （白根）さ（差）し／うい （上）かいや　ばかば（若葉） たれ　　＊１	①いぬがき（毛）に／まゆ （猫）がき（毛）　生れおーり	－	－	うるじぃんや　やまば薄 にむとぅようり	－	－	－	－	若夏（ばがなちい）ぬ　盆南 風（ぶんばい）うすらば　北 （にしい）畔枕（あぶしまく ら）ばし　稔（みの）り　た ぼり
6	稲が種子あよー 石垣島大浜村	稲が種子／きら稲	下かいや　白根うれ／上かいや 若葉いで　たぼらるよう	犬の毛／猫の毛　に　たぼら るば	－	－	やまゆしき／さとばいぬ さといしょーり	－	うふぶうむち／ながぶう むち　たぼらば	－	いしぬみいり／かにぬみ いり　たぼらば	南風ぬ　ぶなばいぬ　うしゅ かば　にしあぶしば　まくら しょうり
7	種子どりあよう 石垣島宮良村	－	下かいや　しるんばうり／うい がいや　ばがばいいで	いんぬきーに／まやぬきーに まらしょうり	－	－	やまはたぬ　ゆしきに／ みちはたぬ　さとばいに	①なかむらし／はたむら し　まらしよーり	③うふばー／ながばーぬ たぼらば	－	なんざみー／くがにみー ば　たぼらり	ばいふきあぬ　うしよらば にしぬあぶんば　まいらし／ やまふきあぬ　うしよらば ばいぬあぶんば　しきにばし
8	種子取りのあよー 石垣島白保村	いにがだに／ゆすぬだに	②下かいや　白根うれ／上かい や若葉とんで	③犬が毛／猫が毛に　たら しょうり	①まりかいしや／びり かいしや　ありより	④つむりかいしや／みと み美しや　ありより	②いばん本／やまゆすさ に　むてい栄い	①下かいや　白根うれ／ 上かいや　若葉とんで	③色ばくめ／葉かいしや とんでおーり	－	②石ぬぐ／金ぬぐ　なう りより	①大ぶー
9	稲が種子あよう 西表島租納村	稲の種子／生きでそ　けら米	下かいや　白根うり／上かいや ばが葉むい	いんぬきに／まやぬきに　ま さらし	－	－	②ゆしきぃだき／いばい 草　むとぅようり	①下かいや　白根うれり ／上かいや　若葉むい	③いでぃぶりやぬ／な でぃぶりやぬ　すゆらば	－	石ぬ実／金ぬ実　たぼら り	－
10	稲が種子 竹富島	－	－	犬が毛に／猫が毛に・根生い	－	－	－	－	－	－	－	－
11	種子取りあゆう 黒島	種子取りぬ／初種子の御願い 大粟種子ば／丸粟種子　取り やむち	ういかいや　若葉出　たぼらば	－	－	－	やまゆすき／いばん本 たといらり	ういかいやよ　大葉出 たぼらば／したかいやよ 白根さし	大葉ばし／ながばばし ばしはら	おおぶーばし／ながぶー ばし	石や実入り／金や実入り たぼらば	北の風（にしぬはじ）なりよ らば　南畔枕（はいあざまく ら）し／南の風（はいぬは じ）なりよらば　北畔枕（に しあざまくら）し
12	いにがだにあゆ 与那国島	－	－	いぬがき　できらしょうり／ まゆがき　できらしょうり	－	－	どしきだき　できらしよ うり／いひやだきできら しようり	－	－	－	いしぬみ／かにぬみ　で きらしょうり	－

＊１　比較しやすいように同種の対語・対句を同じ列に配列したため、実際の詞章での出現順とは異なっている。
そのため、対語対句の前に付けた①・②…の番号は、同期間内の出現順を示している。

生育の表現は、対語を基にして、何れも対句、対文の形式をとっているものである。対語のパターンを手がかりにみると、イネの生育の表し方は、大きく２種に分かれる。

ア．ａ・ｃ・ｅ・ｆ・ｇ・ｈ・ｉ……イネの生育の状態を時期に応じた実体（状態、色、形態等）を形容する言葉で説明している。イネの「生まれが美しい、すわりが美しい」と田に蒔かれた稲種子の景を誉めることにはじまり、「白根が根を下ろし、若葉が芽を出す」「大きな穂、長い穂」「色つやの美しい葉」「石や金のように固く､重い実」「穂を垂れて、畦に寄りかかるように風になびく穂」等は、理想的に生育し手ゆくイネの姿を、その目にみえる実体から得た形質の印象として表している言葉である。

イ．ｂ・ｄ……イネとは別の動物、植物という具体物をもって言い表している。苗床期のイネの発芽をあらわす具象が「犬の毛／猫の毛」であり、イネの繁茂をあらわす具象は「ススキ／チカラシバクサ」である。これらは、イネの生育を、動植物の何かの属性によって表そうとしている点で、ア.の分類とは異質の表現方法をとっている。

このように、「稲が種子あよー」にみるイネの生育の表現様式には、抽象的な語を用いて表す様式と、具体的な対象物を用いてその属性であらわす様式との２種が混在している。そして、後者の表現は、第２章で、植物歌の植物を具象的に用いた表現について考察してきたものと同じ表現様式である。稲作歌の数ある生育の表現の中でも、イネの生育を、イネとは異なる植物であるススキ／チカラシバクサという具象によって表現している。そこで、その表現にみるイネとススキ／チカラシバクサとの関係について考察したい。

２．イネの繁茂の表現　　–ススキ・チカラシバクサ–

ここでは、イネの叙事歌謡全体についての考察から踏み込んで、歌の詞章の一節の背景にある信仰や思想の混在について考察したい。方法としては、数あるイネの生育の表現のうちで、歌に謡われている植物という本稿の関心と、前章で明らかにしてきた植物を具象的に用いる表現という観点から見て、イネの繁茂する姿を他の植物の中に類似性を見つけて用いる表現が、考察の対象の中心になる。ススキ、チカラシバク

サ[20]は歌の中での植物の方言名（の一例）を、「ゆしき」「いばん」という。これらの植物は、イネの繁茂を表すときに用いられる慣用句の対句をつくる植物である。イネの生育の表現のうち、イネの繁茂をあらわすススキ／チカラシバクサの表現について、それらの植物のもつ文化的な背景を通して、表現の発想や様式等の特徴を考察する。

（1）ススキ・チカラシバクサの登場する歌

はじめにススキ・チカラシバクサを含む歌にどのようなものがあるかとみると、テキストの中には、次頁に付した＜表 1＞の 29 篇の歌に、ススキとチカラシバクサが含まれて謡われている。その 29 篇は、筆者の見たところ、農耕との関わりをもって謡われているススキ・チカラシバクサを含む歌と、農耕以外の内容で謡われている歌に大きく分けることができる。＜表 1＞の分類の項はその内容を記したものである。

29 篇のうち、農耕に関連した歌は 20 篇（1～18、27、28）ある。その中の 18 篇は、いずれも作物の繁茂を表現するために用いられているものである。内、ススキ・チカラシバクサの対語を含むのは 16 篇ある。琉球歌謡では、チカラシバクサは、イネの繁茂を表す植物として、ススキとの対語を作るという形でのみ登場する。その意味で、稲作歌をとおして稲作文化と密接で特殊な関係を持つ植物である。

農耕に関連した歌の残り 2 篇（27、28）は呪文である。呪文は、農作物の生長を妨げる猪の厄払いの文言等だが、広い意味では、こうした厄払いも、最終的には農作物の豊穣を求めてのことなので、農耕との関わりのある歌とも考えられる。

農耕以外の内容の歌は、主に実用や習俗など、農耕以外の日常の景のなかの人とス

---

[20] 「チカラシバクサ」という名は、「いばん」に対するテキストの訳語である。けれども、筆者紙高桐で植物図鑑等に、「チカラシバクサ」という和名はない。「チカラシバ」又は「チカラグサ」の名で記載されている。八重山各地ではイバ・イバイフサ・イバンムトゥ・イバングサ他、チカラグサ（沖縄）、チカラシバ（宮古）という方言名の植物は、ひっくるめて、和名「オイシバ」（天野　1976　p.176）とされている。「チカラグサ」は「ネズミノオ」の方言名（沖縄）にも記されている（前掲書　p.188）。いずれも、イネ科の植物である。また、『原色牧野植物大図鑑』（牧野 1982）によると、「チカラシバ」（前掲書 p.655)は、日当たりのよい草地に生える多年草で、抜くのが難しい程丈夫な株となる。一方、「チカラグサ」（前掲書 p.648)は別名「オヒシバ」ともいい､向陽地に生える 1 年草である。夏の激しい日にさかんに繁茂するので、雄日芝の漢字が当てられていると記され、「チカラシバ」と「チカラグサ」は、異なる植物である。喜舎場は『八重山古謡　上』で、「サトゥバイ」を「イバイ草」「力芝の義。」と記している（喜舎場 1970a p.459）。従って、テキストで「チカラシバクサ」と記されている植物は、本来は「オヒシバ」､別名「チカラグサ」と思われるが、混乱が起こらないように、本稿内では、あえて歌の用語として、テキストの訳語のまま「チカラシバクサ」という言葉で表記する。

スキの関係を示す事象が謡われている。

＜表１＞ ススキを含む歌謡

	分類	テキスト語形	歌謡名	地域名	頁	ジャンル	備考	キーワード
1	作物の繁茂	ゆすき	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞 かんふちい ＜上の村＞むん　（麦）	石垣島川平村	20	カンフチィ	チカラシバクサと対	農耕、畑作・ムギの発育
2	作物の繁茂	薄	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞 かんふちい ＜上の村＞あわ（栗）	石垣島川平村	22	カンフチィ	チカラシバクサと対	農耕、畑作・アワの発育
3	作物の繁茂	ゆすき	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞 かんふちい ＜上の村＞きらまい（キラ米）	石垣島川平村	23	カンフチィ	チカラシバクサと対	農耕、イネの発育
4	作物の繁茂	ゆすき	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞 かんふちい ＜上の村＞きいん（黍）	石垣島川平村	24	カンフチィ	チカラシバクサと対	農耕、畑作・アワの発育
5	作物の繁茂	ゆすきぃ	内原村の真世加那志の神詞 うちいばれむらぬまゆんがなしぃぬかんふちぃ 〈下の村〉 きらまいしぬぐぅ（稲）	石垣島川平村	31	カンフチィ	チカラシバクサと対	農耕、イネの発育
6	作物の繁茂	ゆしいく	種取りぃぬ神願い たにどうりぃぬかんにがい	石垣島平得村	49	ニガイフチィ		農耕、作物の発育
7	作物の繁茂	薄（ゆしき）	種取いの願い たなどういぬにがい	竹富島	86	ニガイフチィ	チカラシバクサと対	農耕、畑作（・アワの）発育
8	作物の繁茂	やまゆしき	うらふね〈ゆんぐとぅ〉	石垣島登野城村	131	ユングドゥ	チカラシバクサと対	農耕・イネの発育
9	作物の繁茂	やまば薄（ゆしいきい）	稲が種あよう いにがだにあよう	石垣島平得村	161	アヨー		農耕・イネの発育
10	作物の繁茂	やまゆしき	稲が種あよう いにがだにあよう	石垣島大浜村	162	アヨー	チカラシバクサと対	農耕・イネの発育
11	作物の繁茂	ゆしき	種子どりあよう たにどりあよう	石垣島宮良村	163	アヨー	チカラシバクサと対	農耕・イネの発育
12	作物の繁茂	山ゆすき	種子どりのあよー たにどうりぬあよう	石垣島白保村	165	アヨー	チカラシバクサと対	農耕・イネの発育
13	作物の繁茂	ゆしきぃ	稲が種子あよう いにがたにあよう	西表島租納村	167	アヨー	チカラシバクサと対	農耕・イネの発育
14	作物の繁茂	山ゆすき	種子取りあゆう	黒島	178	アヨー	チカラシバクサと対	農耕・イネの発育
15	作物の繁茂	どしき	いにがだにあゆ	与那国島	186	アヨー	チカラシバクサと対	農耕・イネの発育
16	作物の繁茂	薄	田植びじらー たうびじらー	西表島租内村	240	ジラバ	チカラシバクサと対	農耕・イネの発育
17	作物の繁茂	薄（ゆしき）	にーういぬゆんた	竹富島	420	ユンタ	チカラシバクサと対	農耕・イネの発育
18	作物の繁茂	ゆしき竹	銭太鼓	竹富島	617	その他　補遺	チカラシバクサと対	
19	叙景	ゆしき	いだふん〈ゆんぐとぅ〉	竹富島	144	ユングドゥ		生活、景観・継子　物語
20	叙景	ゆしぃきぃ	なかまいじらば	波照間島	280	ジラバ		生活、（出会いの）場、民俗男女
21	叙景	ゆしぃきぃ	あかんにゆんた	石垣島登野城村	350	ユンタ		生活、実用、民俗・男女
22	叙景	ゆすき叢	あかんに田ゆんた	石垣島登野城村	358	ユンタ		生活、実用、民俗・男女
23	燃料	枯薄（かりすすき）	ばなりー焼あよー	竹富島	176	アヨー		生活・実用（燃料）、ものづくり・焼き物
24	燃料	薄	ゆうねんぶしじらば	石垣島大浜村	225	ジラバ		生活、実用（燃料）、民俗・男女・
25	燃料	ゆしぃき	しやがむやー	石垣島石垣村	337	ユンタ		生活、実用（燃料）、民俗・男女
26	燃料	どしき	ゆなはら	与那国島	618	その他　補遺		
27	厄払い・呪物	すすき	猪の呪文	竹富島	120	ジンムヌ		農耕、厄よけの呪物・猪
28	厄払い・呪物	すすき	種子まきの呪文	竹富島	120	ジンムヌ		農耕、厄よけの呪物・鳥
29	食材・具象	山薄	我びぎりゃ〈吾が夫〉 ばーびぎりゃ＜わがせ＞	石垣島大川村	127	ユングドゥ		生活、実用（食用）、民俗・男女・絆

＊漢字表記されたテキスト語形に、ふりがなの付されているものは、（）で記した。

＜表１＞のススキとチカラシバクサの各植物のテキスト語形については以下の通りで

ある。ススキは、漢字表記の「薄」、「ゆすき」「ゆしき」「ゆしいく」、そして与那国方言の「どしき」の４種が、歌に用いられている植物方言名の基本的呼称である。その語に接頭語がついて「山ゆすき」となり、接尾語「だき（たき）」がつくと「ゆすきだき」「どしきだき」と展開する。チカラシバクサも、漢字表記の「力芝草」、「いばい」「いばん」「いひや」「さとばい」が方言名だが、歌の中では、「さとばい」を除き、語尾の「だき」「ふさ」「もと」と共に、「いばいだき」「いばいふさ」「いばんだき」「いばんもと」と五音の句となって謡われている。

「ふさ」「だき」「たき」「だけ」は、ススキ、チカラシバクサのどちらにも共通する接尾語である。「フサ」は草の意[21]。「だき」「たき」「だけ」は、「程度」や「丈」の意[22]を含んでいる。

柳田国男は「野草雑記」（柳田　2011）の中で、植物の命名について述べている。「郷土の人達の付けた名はたいていはもっと実際的である。歌にもうたわれず文句の口拍子にものらぬような草の名は、生まれたかも知らぬが承認せられていない。というよりむしろ、歌や文句の中から、孕まれたろうとおもうものが多いのである」（前掲書 p.24）とある。チカラシバクサの方言名「いばいだき」「いばいふさ」「いばんだき」「いばんもと」も、そのような野草名の一つではないのだろうか。柳田は先の引用文に続けて、次のような指摘もしている。「これは統計の上にも多分現れることと思うが、今までもっともふつうであったのは 3 音節、クサの語を下に添えて、5 字の一句をなすもの（中略）が多い」（柳田　2011　p.25）としている。ススキもチカラシバクサも、歌に謡われる方言名は、「ゆしき」「いばい」という植物名に、接尾語の「だき」や「ふさ」がついて、「ゆしきだき」「いばいふさ」と 5 音で謡われている。琉球方言でも語呂の良い口拍子に叶う名前なのだろうか。

ススキとチカラシバクサはどちらもイネ科の植物であり、農耕の歌で対語をなし「いばん本／やまゆすき」「どしきだき／いひやだき」等々の慣用句を作っている。興味深いことに、チカラシバクサという野草は、稲作歌の中でススキとの対語としてだけ用いられている。後述するが、ススキは、農耕の文化以外でも、広く様々な習俗

[21]「フサ」とは、「１.草。雑草。２.まぐさ。3.塵」の意がある。（宮城　2003　p.924）

[22]「たき」とは、「１.高さ　２.程度　３.身の丈」の３種の意味がある。（宮城　2003　p.610）。＜表＞には、テキストの訳語のまま記載したが、「銭太鼓」（テキスト p.617）の「ゆしき竹」「いばん竹」の「竹」は、内容的に見ても、漢字を当てる際の誤訳であろうと思われる。

と結びつき、霊性をもった植物として扱われる。一方のチカラシバクサは、一般的には、根が強靭で厄介な「雑草」の範疇にはいる野草として知られるが、チカラシバクサが生活習俗と結びついて呪性をもった植物だと認識されているとする事例はあまり多くはない。けれども、強靭で繁殖力が旺盛なイネ科の植物は、他にも多く自生している中から、八重山の歌唱者達に選ばれて、八重山の稲作の歌の文化の中に、ススキの対語として数百年に亘って[23]稲作に関わる植物としてその名を謡い継がれてきた植物である。

（2）農耕に関する歌謡とススキ・チカラシバクサ

①　ススキとチカラシバクサの登場する歌の内容

先の＜表１＞に上げた歌の中から、農耕との関わりを持って謡われている歌の事例をみてゆきたい。農耕に関わる 21 篇の歌の中には、「生産叙事歌」と呼ばれる「稲が種子あよー」8 篇がある。これらの歌の内容はイネの生長と稲作過程を歌ったもので、島々の播種の祭で謡われる。その歌の心意は、この歌が謡われる祭りの主題に同じくして、イネの豊かな稔りと収穫を得ることにあり、歌の中心となる植物はイネである。次の歌は、テキストに収載されている「稲が種子あよー」の中の１篇である石垣島大浜村の「稲が種子あよー」の例である。

「稲が種子（いにだに）あよー」　石垣島大浜村　　p. 162

1 稲が種子生（だにい）くですよー	稲の種　生き生きとする
きら稲ぱじようり	キラ米〈稲の品種〉発芽の
かいしゃ石（いし）な子（く）ふうよ	美しいイシナグ〈稲の品種〉よ
2 苗代田（なしるた）ば　種（たー）のる田ば	苗代田を　種下ろす田を
しらびよおり	調べなさり
ゆしなしようり　びきらま	よく調和して下さい兄弟よ
3 今日（きゆ）が日（びい）ば　黄金日（くがにびい）ば	今日の日を　黄金の日を
しらびよおり	調べなさり
ゆしなしようり　親神（うやがな）しよう	よく調和して下さい親加那志
4 びぎりや手（てい）ぬうび	兄弟の手の指

[23] 「慶来慶田城由来記」の種取りの祝の際の記述に、「いはい草（オヒシバのこと）にさかい入り」（石垣市総務部市史編集室　1991　p. 11）とある。

とゆぬ　ばしゆから	十指の間から
うち下(うる)しうかばどよう	打ち下ろして置くから
5 今日ぬ夜(にかゆう)に　ゆうさぬゆうに	今夜に　夜去り夜に
かなみよううり　まぶやしよううり	叶えてください　守って下さい
うかまんがなしよう	御竈加那志〈火の神〉
6 下(した)かいや　白根(しるに)うれ	下には　白根が下り
上(うい)かいや　若葉(ばがばい)いで	上には　若芽が出て
たぼらるよう	ください
7 犬(いん)ぬ毛猫(きいまや)が　毛(きい)にたぼらるば	犬の毛 猫の毛のようにしてくださると
ちくりやそうぬ	作った者が
さにしやしよううる	嬉しくなるさ
8 いびほうれ　とるほうれぬならば	植える時節　取る時節になったなら
びきらりやけーらぬ	兄弟達皆が
さにしやしよううる	喜びなさる
9 うふまし　ながましに　むちなし	大桝　長枡に移し
ぴきなしより　うかばどよう	引きなさって置いたなら
10 まどぱかり　きどぱかり	間隔を測り　幅を測って
やといしょおり	移植しなさり
いらようまぬ　びきりやまよ	ああ嬉しい兄弟よ
11 うるじんぬ　ばがなちぬなるだら	初夏が　若夏がきたなら
ぶなりけーらぬ　さにしゃしょるよ	姉妹皆が喜びなさる
12 やまゆしき　さとばいぬ	山薄(やますすき)　力芝草のように
さといしょーり	栄えてくださり
いでば　ふびだがいしょうりよ	出穂したなら首を抱かせてくださり
13 うふぷうむち　ながぷうむちたぼらば	大穂を持ち 長穂を持ちくださったなら
びきらりやけーら　さにしゃしょるよ	兄弟達皆がうれしくなさるよ
14 いしぬみいり　かにぬみいり　たぼらば	石の稔り　鉄(かね)の稔りをくださったなら
うやかみぬど　さにしゃしょうるよ	親神が嬉しくなさる
15 南風ぬ　ぶなばいぬうしゅかば	南風が　盆南風(ぶんばい)が押し吹いたら
にしあぶしば　まくらしょうりよ	北の畦を枕にしなさり

16 かるぽーれぬ　とるぽーれぬなるだら　　刈る時節に　取る時節になったなら
　びきりやけーらぬ　さにしゃしょるよ　　兄弟達皆が嬉しくなさるよ
17 ちきやとり　ぴゆまとりたぼらば　　月を取り〈調べ〉日を取り〈調べて〉
　　くださったなら
　ばがけらぬ　さにしゃしょるよ　　吾等皆が嬉しくなさる

＊下線は筆者が加筆

前項では、白保村の「稲が種子あよー」の事例を取り上げているので、余り詳しい説明は省くが、両歌を比較すると、詞章の多少の差異は見られるが、全体の内容の展開としてみれば、ほぼ同じといってよい。上記をもとに簡単に、「稲(いに)が種子(だに)あよー」に歌われている稲作農耕の流れをまとめてみると次の項目の構成にまとめられる。

Ⅰ播種･早苗期　①(第 1～3 節)日選　②(第 4～5 節)種まき
　③(第 6～7 節)早苗の生長
Ⅱ繁茂期　④(第 8～10 節)田植え　⑤(第 11～13 節)稲の生長
Ⅲ稔り期　⑥(第 14～15 節)作物の稔り
　⑦(第 16～17 節)刈り入れ

稲の生長と農作業が順序よく歌詞に盛り込まれている。また、イネの生育の表現に注目して、その表現を具体的に見てゆくと、＜Ⅰ播種･早苗期＞には、白根と若芽の発芽(第 6 節)まで、苗代で生長していくイネの姿が歌われ、この時期のイネ苗の若葉の成長は「犬(いん)ぬ毛(きい)　猫(まや)が毛(きい)」という「犬」・「猫」の毛並み（第 9 節）が表す慣用句を用いている。次に、＜Ⅱ繁茂期＞は本田に移されたイネの生長の繁茂の様を謡うときに用いられるのが「やまゆしき　さとばいぬ」(第 12 節下線部)というススキとチカラシバクサの繁茂である。＜Ⅲ稔り期＞には、稲穂の稔りを表現するために、「いしぬみいり　かにぬみいり」(第 14 節)と、「石」・「金」を用いて穂の充実を象徴的に歌い、また、「畔枕」(第 15 節)によって、豊穣の田の景を表している。上記の歌は、「稲が種子あよー」の稲の各時節の生長を表す主要な慣用句が含まれている一例である。

「稲が種子あよう」の＜Ⅱ繁茂期 ⑤稲の生長＞にススキとチカラシバクサというイネ科の草本類が登場する。これらの野草は、琉球諸島内に自生する植物で、ほぼ一年中目にすることができる植物だが、歌では本田に植え付けられた稲が繁茂し、やが

て穂が出ようという繁茂期の場面で謡われている。

農耕の歌の中のススキ、及び、チカラシバクサは、琉球諸島の初夏・うりずんの頃のイネの繁茂の様子を謡う詞章に用いられているものである。初夏・うりずんといえば、亜熱帯といえども幾分の寒さを感じる冬が過ぎて、野生の植物が生き生きと緑の色を増し、琉球列島の本格的な長い夏の猛暑の到来を予感させる季節である。本土の文化の傾向では、ススキは穂花を付けたススキが始めに思い起こされる秋の情緒をともなう植物である。四季のない沖縄でも、11 月・12 月頃になると、それまで一面緑だった野原に白い穂が溢れ、ススキの存在に気付かされる。けれども、それは、琉球歌謡が取り上げているススキの景にはあてはまらない。八重山歌謡の農耕の歌に謡われているススキの景観は、穂花のススキの景ではなく、手を切る鋭利な青葉が野原に勢いを盛り返し始める頃のススキの景である。

チカラシバクサも、ススキと同様である。夏は他の緑の葉に紛れて、その所在がわかりにくいが、穂が付く頃になると見分けやすく、道路脇などにも見かけることがある植物である。けれども、こちらのほうも、歌が取り上げているのは、うりずんの頃、青葉が繁茂する時期のチカラシバクサである。

② ススキとチカラシバクサの詞章の解釈

テキストに収載されているススキとチカラシバクサの語を含む農耕に関する歌は、「稲が種子あよー」「まゆんがなしぃの神詞（かんふちぃ）」が主要なものである。この 2 篇の歌全体の表現様式の発想としてみた時、一方は言霊の信仰の発想による表現様式であり、もう一方が、言霊の信仰に加えて＜神＞の寿ぎの言葉という発想による表現様式をとっており、両者の類似した叙事様式は、発想の点で異なっていることは既に述べた。こうした歌における様々な信仰や思想の発想の混在は、本章の第 1 節で稲作歌を伝承してきた背景にある共同体内の思考の多様性の反映であり、あって不思議はない。また、歌の個別の詞章の表現の方法としてみると、イネの生育のあらわし方には、抽象的な表現方法と具象的な表現方法との混在が認められた。

そこで、そのような混在があるという問題意識のもとに、さらに、具象的な表現方法であるイネの繁茂をススキとチカラシバクサで表す詞章について、伝承されている島々の表現をさらに具体的に検討していきたい。

テキストに収載の 13 篇の「稲が種子あよー」には、イネの＜繁茂期＞の表現にススキ／チカラシバクサが対語で使われている歌が 8 篇あり、対語を作らずススキだけ

で表現されているものも１篇ある。これらの９篇のススキ／チカラシバクサの詞章が、どのように歌われているか、テキストの事例で原歌とその訳とともに検討してみたい。歌のなかで、ススキは、「やまゆしき」「薄（ゆしきい）」「ゆしき」「ゆしぃき」という方言名で謡われている。また、チカラシバクサの方言名は、「さとばい」「いばい草」と謡われており、これらの植物名には下線を記した。

ア.「稲(いに)が種子(だに)あよう」　石垣島大浜村　　アヨー

12　やまゆしき　さとばいぬ　　山薄(やますすき)　力芝草のように
さといしょーり　　栄えてくださり
いでば　ふびだがいしょうり　　出穂したなら首を抱かせてくださり

イ.「稲(いに)が種子(たねー)あよう」　石垣島平得村　　アヨー

10　うるじぃんや　やまば薄(ゆしいきい)に　　初夏には山葉薄(やまはすすき)のように
むとぅようり　　しげりなさり

ウ.「種子(たに)どりあよう」　石垣島宮良村　　アヨー

14　やまはたぬ　ゆしきに　　山端のすすきのように
みちはたぬ　さとばいに　　道端の力芝草のように

エ.「稲が種子あよう」　西表島祖納村　　アヨー

13　ゆしぃきぃだき　いばい草(ふさ)　　ススキのように　力芝草のように
むとぅりょうり　　分蘖してください

オ.「久場川村のまーゆんがなしぃの神詞(かんふちぃ)＜上の村＞きらまい」石垣島川平村　カンフチ

3　ゆすきたきぬんぐと、いぱいたき、　　ススキのように、力芝草のように、
ぬんぐと、むとい、さかい　　繁茂する

カ.「種取(たなどぅい)いの願(ぬにが)い」　竹富島　　ニガイフチ

根降(にーう)い　元降(むとぅう)いぬ　上(うい)や　　根降り　元降りの上は
力草(いばん)だぎ　薄(ゆしき)だぎに　　力芝草のように 薄のように
栄(さかい)し給(たぼ)うり　　栄えさせて下さい

キ.「うらふね＜ゆんぐとぅ＞」　石垣島登野城村　　ユングドゥ

5　やまゆしき　さとばいんや　　山薄　力芝草のように
さかいより　くなつゆや　　栄えてください　来夏(来年)の世は
みりくゆば　たぼらる　　弥勒世を いただきましょう

ク.「田植(たう)びじらー」　　西表島祖納村　　ジラバ

7　ゆしぃきぃだき　いばい草(ふさ)　　ススキのように力芝草のように

むとぅようり　　分蘖してください

ケ.「にーういぬゆんた」　　竹富島　　ユンタ

2　薄程栄(ゆしきだきさか)りょりが芝程元(ばんだきむとう)りょり　　薄の様に栄えよ　力芝の様に栄えよ

ア.～エ.に示したのは、「稲が種子あよー」の中から撰んだ 4 編にみるススキとチカラシバクサの対語が表わすイネの繁茂の表現である。うりずん・初夏の頃のイネの良好な生長を、２種の野草が表している。 そして、作物の繁茂を表すススキとチカラシバクサの対語の表現は、 アヨーに代表される生産叙事歌だけに限った表現ではなく、農耕に関する他のジャンルの歌謡においても、同様に慣用句として用いられている。事例のオ.～ケ.迄は、アヨーとは異なるジャンルの歌＝カンフチ、ユングトゥ、ジラバ、ユンタの事例である。「訳」はテキストのものを記した。

ススキやチカラシバクサの様子は、「むとい　さかい」「さかいより」「さといしょーり」「むとぅより」等の動詞で結ばれており、野草の繁茂を丁寧語・敬語[24]を用いて謡っている。その詞章についてのテキストの訳は、ススキやチカラシバクサの「ように」「栄えてください」「繁茂してください」「分蘖してください」「栄えよ」と祈願の形式に解釈されている。これは、歌全体の祈願の意が解釈に反映してのことである。「～ように」という訳語が使われていることで明らかなように、テキストは、ススキやチカラシバクサの繁茂の表現に、修辞的にいう比喩の発想を捉えて解釈している。これらの訳文では、目に写るやがて豊かな穂を稔らせる野草の繁茂の姿は、イネの理想の繁茂の姿の喩辞とみなされているようである。このように、イネと「ススキとチカラシバクサ」の関係性を比喩表現としてみることは、現代語的にはわかりやすい。けれども、生産叙事歌の歌の言葉のように、理想的な生育の様を謡うことにより、言葉が呪力を発揮する様式や、＜神＞の発する寿ぎの言葉が、イネの良好な生育を保障するという言葉の呪的な機能は、比喩的解釈の発想とは本質的に異なる

[24]『沖縄古語大辞』（沖縄古語大辞典編集委員会　1995）によると、「しょうり」は、動詞「為」（す）の基・連用形「し」、「し-おはれ」（しょうり）＜しなされよ＞の意味（前掲書　pp.350～351）とある。「おはれ」は、補助動詞の「おはる」の命令形で、連用形接続系について、尊敬を表す。「～し給う」の意（前掲書 p.145）。

発想ではないだろうか。

そこで、原歌の詞章に添って比べてみたい。（ ）の訳は筆者が、付したものである。

ア. やまゆしき　さとばいぬ　さといしょーり　　（ススキ　力芝草が　栄えなさり）

イ. 薄（ゆしきい）に　むとぅようり　　（ススキのように　繁茂なさり）

ウ. やまはたぬ　ゆしきに　みちはたぬ　さとばいに

（山端のススキのように　道端の力芝草のように）

エ. ゆしぃきぃだき　いばい草　むとようり　　（ススキほど　力芝草　繁茂なさり）

オ. ゆすきたきぬんぐと、いぱいたき、　ぬんぐとに、むとい、さかい

（ススキの丈のように、力芝草の丈にように、生え、さかえ）

カ. 力草だき　薄だきに　栄し給うり　　（力芝草ほど、ススキほどに、繁茂なさり）

キ. やまゆしき　さとばいんや　さかいより　　（ススキ　力芝草は、栄えて）

ク. ゆしぃきぃだき　いばい草　むとぅようり　　（ススキほど　力芝草　繁茂なさり）

ケ. ゆしきだきさかりょりが　いばんだきむとうりょり

（ススキの丈にさかえなさり　力芝草の丈に繁茂なさり）

上記の「むとぅい」「さかい」等は、何れも動詞で、植物が「よく茂る」「よく繁茂する」[25]の意である。注目するのは、「ゆしき」「さとばい」（ススキとチカラシバクサ）と動詞を繋ぐ助詞である。助詞は、表現者の主観的な感情や意志による意味づけ・関係づけを表す働きをする品詞である。従って、使われている助詞が、ここでは詞章の主部の植物と述部の動詞を繋いで、表現者の考える関係性を明らかにする。便宜的に、「ゆしき(ススキ)」／「さとばい(チカラシバクサ)」の主部を S、「繁茂する」を動詞 V として構文を書き出してみると、以下のような助詞で文が成立している。

	主語		助詞		動詞
ア.	S	＋	「ぬ」	＋	V
イ.	S	＋	「に」	＋	V
ウ.	S	＋	「に」	＋	V
エ.	S	＋	－	＋	V

[25]「ムトゥイルン（動） 作物が茂る。よく分蘖して繁茂する。樹木が繁茂すること」「ムトゥイ （名)作物や樹木がしっかり根付いてしげること。「元生い」の意。」（前新透 2011 p. 1186 ）。「サカイルン(動)栄える。繁茂する。」サカイ(名) 栄える。繁茂する。」（前掲書 p. 441）

オ.　S　＋　「ぬんぐと」　＋ V

カ.　S　＋　「に」　＋ V

キ.　S　＋　「や[26]」　＋ V

ク.　S　＋　－　＋ V

ケ.　S　＋　－　＋ V

上記から、助詞の働きで4通りの文に分けられる。

Ⅰ　「ススキ／チカラシバクサ」のように「繁茂する」

イ.ウ.カ.（～のように繁茂する）　名詞＋「に」で副詞的な意味を表す

オ.（　〃　）　「ぬんぐと」は、現代語の「のように」と同じく、同類のものを挙げて性質･状態を表す（比喩）

Ⅱ　「ススキ／チカラシバクサ」が「繁茂する」

ア.　（～が繁茂する）　主格を表す「ぬ」

Ⅲ　「ススキ／チカラシバクサ」は「繁茂する」

キ.　（は､繁茂する）　係助詞の「や」で標準語の「は」にあたる。

Ⅳ　「ススキ／チカラシバクサ」＿「繁茂する」

エ.ク.ケ[27].　助詞がない。

上記は、イネの繁茂の表現である「ススキ／チカラシバクサ」を用いた表現について、そのパターンをテキストの原歌に添って取り出したものである。これらの文は、何れも繁茂するイネの姿を述べているのである。従って、それぞれの文の前に､詞章の表現にはあらわれていないが、主格として存在する「イネの繁茂は（が）」という句を置いて考えてみるとわかりやすい。

こうして原歌をみると、イネの繁茂を表す「ススキ／チカラシバクサ」を用いた表現が、修辞法の「比喩」的と解釈できる原歌は、Ⅰのタイプの4篇である。このⅠのタイプは、イネの繁茂とススキ／チカラシバクサの繁茂の関係は、「ぐとぅ（～のように）」という語に表れているように、「イネの繁茂は」「ススキ／チカラシバクサ

[26] 「んや」（～のように）という解釈もできるが、「んや」は、副助詞(宮城　2003　p.1230)で、用言に関係ある語につく助詞である。ここでは植物名についている助詞なので、「や」という解釈をとっている。「や」（係助）大和語「は」にあたる。（宮城　2003　p.1121）

[27] ケ.については、「たき」という語の解釈に「1.高さ　2.程度　3.身の丈」(前新 2011　611)の3種の意味があり、2.と解釈すると「ススキほど、チカラシバほど　繁茂する」という意味にとれる。

のように繁茂して」と、理想的なイネの繁茂を、他の植物の繁茂の様子によってよりわかりやすく言い表している被喩辞と喩辞の関係として表現されている。

それに対比されるⅡ･Ⅲ･Ⅳのタイプは、自生の野草の繁茂自体を謡い、その冒頭に「イネの繁茂は（が）」という句を置いてみると、「イネの繁茂は」「ススキ／チカラシバクサが繁茂する」となり、現代語的に解釈するには意味がわかりづらい。イネの繁茂とイネ以外の植物の繁茂との何らかの関わりを説明できるような解釈が求められている。

「ススキ／チカラシバクサ」を用いたイネの繁茂の表現には、以上のように異なる2 種の発想がある事が特徴である。ここに取り上げた農耕に関わる稲作歌は歌全体として、呪的な心意を共通としており、その中の１フレーズであるススキ／チカラシバクサのイネの繁茂の表現も当然呪的な意図を反映して用いられていることは確かだが、「イネの繁茂の表現」という一節にも、各歌の詞章の背景の発想については、一様ではないことが上記の事例から窺える。

③　ススキ・チカラシバクサの特徴的な表現の様式

前項でみたイネの繁茂を表すススキ・チカラシバクサの表現の特徴の 2 種の内、明らかに「比喩」的解釈ができるⅠのタイプの表現を除いて、ⅡとⅢとⅣのタイプの表現の特徴について、この項でさらに検討したい。

まず、前項のⅡとⅢとⅣのタイプの中でも、構文の形式についてみると、これらは2 種のタイプに分けられる。ⅡとⅢのタイプは、主部と述語が助詞によって結ばれているため、「ススキ／チカラシバクサが繁茂する」という現代語に置き換え易い構文である。それでも、（イネの繁茂は）「ススキ／チカラシバクサが繁茂する」という文は意味的にはわかりにくい。

つぎに、Ⅳのタイプには、助詞はなく、主部と動詞のみの詞章である。この様な詞章が八重山の稲作歌の歌の表現としての特徴なのか、または、助詞が恣意的に伝承の間に欠落したものなのか、2 通りの判断が考えられる。

この点について、吉本の『初期歌謡論』に興味深い示唆がある。まず、表現形式の面から考察したい。『初期歌謡論』で考察の対象としているのは、記紀や万葉集など、既に文字に定着している本土の古典文学を中心に論じているものだが、その中に和語のいいまわしの「未明」の「面影を残している」として、喜舎場永珣の『八重山古謡上』に収載された「雨乞い歌」を事例に取り上げ、助詞の存在しない構文について述

べている。ここに、その「雨乞い歌」の一部を引用する。原歌は、吉本が引用した喜舎場の『八重山古謡　上』の歌に添って記している。（但し、冒頭の引用は略した）歌の訳は、両者の訳を並べて記した。

「雨乞いチィジィ」　登野城村　吉本隆明『初期歌謡論』　p. 40

喜舎場永珣『八重山古謡』上　p. 319

	原歌	吉本　訳	喜舎場　訳
	（前略）		
4	黒ミヤガリ	黒き雲	黒い雨雲よ
	給ボウラレ	給われ	雨を恵み給え
5	白ミヤカリ	白き雲	白の叢雲よ
	給ボウラレ	給われ	水を給わるように
6	海ナラシ	海鳴らし	海鳴りのする程の
	給ボウラレ	給われ	大雨を恵まれるように
7	山ナラシ	山鳴らし	山鳴りする程の
	給ボウラレ	給われ	豪雨を給わるように
8	バガ島ヌ	我が島の	わが八重山島の
	上ナカ	すべて	全体に
9	親島ヌ	親島の	親島の
	チイヂイナガ	頭のうえ	頭上に恵まれるように

*下線は筆者が加筆

上記の歌の事例を通して、吉本は次のように述べている。「この農耕祈願の行事にうたわれた歌は、すこしも上代語とおもわれないが、わが古代歌謡よりも古いとおもわれる語法のあとがある。」（吉本　1994　p. 41 ）として、歌の「助詞のつかい方、切りつめ方は詩的な省略の限度をこえている。」（前掲書　p. 41 ）ことに注目している。どのような「助詞のつかい方、切りつめ方」があるかは、吉本は、喜舎場の訳を取りあげて説明している。原歌の直訳に近い吉本自身の訳と喜舎場の訳を比べることで、下線部の喜舎場の訳が、言葉の切り詰めを明瞭に示している。「雨乞いチイジィ」の事例にみる吉本の訳と喜舎場の訳の違いには、多くの示唆が含まれている。原

歌が、言葉を切り詰めて成り立っているということが解ると同時に、喜舎場の訳語が、「〜のように」や「〜ほどに」、そして呼びかけの「よ」等、説明的な言葉を補い訳している点が解かる。両訳を比べると、吉本の直訳には、助詞が略されていること、この唱えでいちばん重要な祈願の「雨を恵み給え」という目的語が省略されていることがわかる。また、喜舎場が唱えの訳に補い足した言葉は、先のイネの繁茂の表現で取りあげた「ススキ／チカラシバクサ」の対句に対する現代語の訳の幾つかのパターンに類似している。

上記を含めて、登野城村の「雨乞いチィジィ」の事例で取り上げた助詞を切り詰めた「古いと思われる語法」の構文についての吉本の推論は、「たぶん和語は基層のところでは、名詞と名詞の重ねとおなじように主語と述意の言葉があれば、助詞が存在しなくても文脈にのっとって適切な意味をたどれるものだった。」（前掲書　p. 41）というものである。続いて、「八重山の「古謡」に、和語の未明であった時間の基層が面影をのこしているとすれば、この基層は、おなじように未明の共同体の村落人が参加した農耕神事のおもかげをのこしていよう。」（前掲書　pp. 41-42）とも書き加えている。「主語と述意」だけの構文が、＜未明＞の基層かどうかという論点は別にして、助詞のない「主語と述意」で成立する構文が広く存在するという指摘は、本稿の注目する点である。なぜなら、八重山歌謡のイネの繁茂の表現に見る「（イネの繁茂は）　ススキ／チカラシバクサ　繁茂しなさり」という表現は、「雨乞い」等の呪術的唱えと共通する一つの表現様式と見ることができるからである。口頭伝承を常態としてきた歌謡は、数百年の間、数百回の伝承の場の「今」を繰り返して継承されて、テキストに記されている歌の今も在る。そうした伝統の継承のなかで、特定の作者が明確になるでもない口伝の過程で、助詞一つの欠落が、恣意的な変容なのか、そうでないのかを見分けることは困難である。しかし、助詞の欠落した表現の形式が、本土の 6・7 世紀以来の表現の世界にも相通じる普遍性があると考えられるならば、恣意性という判断は、ここでは一旦除外して考える事ができ、歌の表現にみる一つの思考のパターンと見ることができる。

次に、そのような構文の形式は、どのような場の発想のもとに成立する特徴があるのだろうか、という表現の意味的側面から考えてみたい。「雨乞いチイジィ」の吉本の直訳に感じるように、現代語として考える時のわかり難さの部分に、表現の一つの特徴がある。そして、吉本はそれを「農耕神事のおもかげ」（前掲書　p. 42）と表して

いるのも興味深い。吉本は「助詞のつかい方、切りつめ方」が「詩的な省略の限度をこえている」語法の成立には、「文脈にのっとって適切な意味をたどれるものだった」（前掲書　p. 41）と、「文脈」という言葉で指摘している。

では、この「文脈」とは何か、もう少し吉本の文を追ってみる。登野城の「雨乞いチイジィ」の場合、「灌漑水は、東南アジアから南中国のどこかにある想像上のパイナーラの島に水元があり、天にかかった石の戸をあけ鉄の戸をあけると雨が天から降ってくると、八重山の村落人たちは信仰していた。」（前掲書　p. 41）というのが、吉本の言う「文脈」のようである。とすれば、八重山歌謡を中心にして、八重山歌謡に添った言葉で「文脈」を言い換えるとすると、具体的には「口頭伝承の場」、または祭祀儀礼の主題とその背景となる信仰や思想のことと言い換えられるだろう。八重山の雨乞い歌は、「パイナーラの水元」の信仰や思想を背景に、雨乞いという明確な儀礼の「目的」を持った場で発せられる唱えである。雨乞いの行為も根拠となる思想も「場」と共にある。そうした「場」と共にある言葉が「切り詰められた」表現であっても呪的に機能するという状況は納得できる。

遠回しになったが、ここではススキ／チカラシバクサの繁茂の表現の特徴について考察してきたものである。以上のことから、助詞のない形式の詞章が、表現の普遍性を持っていることと、ススキ／チカラシバクサの繁茂の表現にそうした様式の構文で示される特徴があるのは興味深い。

④　琉球諸地域及び、本土の「田遊び」にみるイネの繁茂の表現

八重山歌謡のなかのススキ／チカラシバクサを用いたイネの繁茂の表現を見てきたが、八重山以外の琉球地域、及び日本本土における歌のイネの繁茂の表現について簡単にみておきたい。

沖縄島

以下にあげるのは、沖縄島の農耕の歌謡、ティルクグチ（テキストの収載事例 30 篇）にみる繁茂の表現の事例である。ここにあげた a. 〜e. のパターンは、各地域のそれぞれのイネの繁茂の表現だけをとりあげたものである。

a. 「テルクロ」　田名村　p. 562　　他 4 篇
34　かやの葉の稲なり　　茅の葉の稲になり
35　せぎの葉の粟なり　　セギの葉の粟になり

b. 「テルクロ」　田名村　p. 562　　他 16 篇

36　壱本(ひともと)か弐本(たもと)　　一本が二本に
37　二本か拾(とう)本　　二本が十本

c.「諸見村てるこ口」　p. 564　　他 6 篇
45　はゝたり〳〵たて　　葉は垂れ垂れて

d.「テルクグーチ」　伊是名島　p. 581　　他 4 篇
33　なかむらち　かふすさ　　中盛らして果報している
34　はたむらち　あまゆさ　　端盛らして余るよ

e.「てるくぐち」　伊平屋村田名　p. 584　　他 10 篇
39　畦形(あぶしかた)　わからん　　畦の形がわからない
40　あじらてちゆ　しらん　　畔というものを知らない

ティルクグチの中には、a.「かやの葉／せぎの葉」という植物を指す言葉が含まれている。「かやの葉の稲なり」の「の」は格助詞で、「が」と訳すことが可能である。これは、他の植物の具象によって、繁茂を表しており、八重山歌謡のイネとススキ／チカラシバクサの表現の詞章に類似する表現方法である。

そのほかの b. 〜e. のパターンは、ｂ. 増殖、ｃ. 葉の状態、d. 器に何かをなみなみと盛る時に使われる琉球歌謡の慣用句で、田を入れ物と見立て、イネが繁茂する様子を盛り上がっていると表している、e. 作物が生い茂る状態、である。ｂ〜e は、いずれもイネの生長の目に見える実体を形容する言葉である。ティルクグチについては、繁茂の表現は、別の具体的植物を用いて表現する a. パターンと、イネ自体の様子を示す抽象的な観念語によって表現する b. 〜e. のパターンの 2 種に大別でき、八重山歌謡の稲作歌の表現の世界と同様である。

次の事例のミセゼルでは、「繁茂」はそのまま「もたへ（栄える・盛る）」という語が使われている。

「毎年二月中、田植祝おりめの時、あむがなし御殿、並、
伊是名城にてのみせぜる＜昔の神託敷＞　伊平屋島伊是名村」　（沖縄篇上　p.26）

（前略）

81　あまたねは　　甘種を
82　しらたねは　　白種を
83　ぬきをへやへ　　貫き植えて
84　さし植へやへ　　差し植えて

85　げにあもの　　実にあるから

86　だにあもの　　誠にあるから

87　御守やへ　　見守って

88　やしなやへ　　養って

89　もたいらしやへ　　茂り栄えさせて

90　あまへらしやへ　　歓(あまえ)えさせて

（以下略）

「89 もたいらしやへ」は「もたえらす」と丁寧語の「やべり」の複合語である。「もたへらす」は「繁栄させる」という動詞であり、引用の前部で略した第 75、76 節にある「大男が　群れ合い人が」、農作業によってイネを「茂り栄えさせる」という内容になっている。イネ自体の生育を表すより、育てる人間の作業が主体となる内容が展開している。

次は、沖縄島の稲作歌であり、しばしば取り上げられる「天親田」の例を幾つかみてみたい。

a.「田の祝のクェナ」　国頭村安田　　（沖縄篇上　p. 259）

（前略）

20　くぬらべのふきば　　くぬら南風が吹くと

21　くば色ぬぐと　　蒲葵色のように

22　わかむいしち　　若々と萌え付き

（以下略）

b.「玉城仲村渠の天親(アマーウエーダー)田　〈ミントゥンのクェーナ〉」　（沖縄篇上　p. 264）

（前略）

26　五月になりば　　五月になれば

27　繁(しぢ)々とぅ盛(む)い上てぃ　　繁々と萌え上がって

（以下略）

c.「種子取(たんとり)の時のアマーオェーダー」　真和志間切識名村　（沖縄篇上　p. 307）

（前略）

22　二月（にんぐわつ）もなたんだう　　二月もなったよ

23　よらり草かきやよれ　　寄らり草を掻きなさい

24　三月（さんぐわつ）もなたんだう　　三月もなったよ

25　ぬるり南風（ばえ）も和々（やはゝゝ）と　　ぬるり南風も和々と

（以下略）

a. b. は、イネの繁茂を色彩や「若々」「繁々」等の情景描写的に謡っている。また、c. には、作物の繁茂のかわりに除草作業が歌われている。

以上のことから、沖縄島のイネの歌で謡われているイネは「石清ら／菩薩花」等[28]の美称で呼ばれ、「種子」や育った「穂」、そして「実入り」する収穫期のイネを表す言葉は並ぶが、概して、繁茂するイネを表現する言葉は限られている。とはいえ、八重山歌謡のススキ・チカラシバクサの表現に通底する表現は、ティルクグチの「かやの葉の稲なり／せぎの葉の粟なり」という繁茂の表現にみることができる。

奄美

奄美の歌謡の繁茂を示す表現としては、次のようなものが挙げられる。

「親（うや）ノロナガネ」　　大島名瀬市　　（奄美篇　p.187）

（前略）

38　つむとぅ　うちうるしば　　一本うちおろせば

39　やちむとぅが　ちむとぅなてぃ　　八本が千本になって

40　あをば　だれだれとぅ　　青葉垂れ垂れと

41　あをみんね　あをぐまし　　青みも青々となって

（以下略）

上記は、歌の冒頭部で、神が作ったイネを鳥が盗んで人間界に広まった、というイネの神話的由来から始まる歌の中に歌われている一節だが、沖縄島の歌のイネの繁茂

[28] オタカベ　「右同時［宇根真謝作物為浜おれ之時］浜ニ而御たかへ言」仲里間切宇根、真謝村（沖縄篇上 p. 72）他、マジナイゴト、クェーナ、ティルクグチなどにも多数使われている。

と類似した（ b. c. のパターン）言葉が使われている。また、「あをば　だれだれとぅ」という形容はイネだけに使われるのではなく、「芭蕉ながれ」の中の詞章でも、美しく育つ芭蕉の葉にたいして繰り返し使われる言葉でもある[29]。

宮古

低島の宮古島はもともと粟作が中心である。従って、他の 3 地域に見るような稲と稲作の生産叙事歌というのは多く見られないが、次の事例には、アワの発育の様子が順次歌われており、厳密に言えば、粟と粟作の生産叙事歌だが、内容の流れは、稲作の歌とおおかた変わらない。生産叙事歌は、種子取祭の際に村人によって歌われる五穀の生長と生産労働を謡う予祝の歌と理解すると、粟の事例の歌も「稲が種子あよー」と同じ類型の歌である。

「上城金殿（ういぐすくかにどうぬ）がニル（多良間島）　（ロ）パイドニの歌詞」　（宮古篇　p.150）

（前略）

12	なうるたに　ゆたんだに	直る＜めでたい＞種子　豊かな種子を
	むちわーり	持ってきて
13	まキぷーり　うチぷーり	蒔き放り　打ち放りして
	うわちゅい	植えて
14	うチぷーり　まキぷーりぬ	打ち放り　蒔き放りの
	みしゅかん	三十日目に
15	いでぃまーり　ぴゃイまーり	出で廻り走り廻って
	みーりばゆ	みると
16	あうまがり　ゆぷしゃがり	青々とするほど　良いほどに
	うわりば	植わっているので
17	みぱだくしゃ　ゆぱだくしゃ	三度の草取り　四度の草取りを

[29] 奄美歌謡の事例　「芭蕉（ばしゃ）ナガレ（６）」　大島大和村恩勝　（奄美編 p. 200）

1	てぃんと　したに	お天とのもとに
2	むぇたる　きょらばしゃや	生えた美しい芭蕉は
3	おむぇまつぃがねが	思松金が
4	うぃたる　きょらさ	植えた芭蕉で、（その）美しいこと
5	おむぇまつぃがねが	思松金が
6	うぃたる　きょらばしゃや	植えた美しい芭蕉は
7	あをばだれだれとぅ	青葉も垂れ垂れと

＊下線は筆者加筆

	うしゃーぎ	終えて
18	くしゃとぅりぬ　うしゃぎしぬ	草取りの　草切りの
	みチキん	三月目に
19	いでぃまーり　ぴゃイまーり	出で廻り走り回って
	みーりばゆ	みると
20	なうらがり　ゆたんがり	直るほど　豊かなほど
	うわりばゆ	植わっているので
	（以下略）	

上記事例は、全 41 節の長詞形の歌である。紙面の関係上、引用を省略している冒頭部は上城金殿（ういぐすくかにどうぬ）という＜農業神＞が畠を開墾し、畠の土作りをする様子が謡われている。その次に続くのが引用部の詞章である。粟種子を直蒔きする様子（第 12〜13 節）から、芽が出た様子（第 14〜16 節）、草取り（第 17〜18 節）、そして、粟の生育の様子（第 19〜20 節）までが、2 節毎にほぼ同じ５・５・３のリズムで歌われている。引用を省略した後半部の第 20〜41 節までには、刈り入れ、粟積み、貢納、神酒造り、祭りの様子を謡い、最後は神を讃えて終わる。農作業の歌の構成は、「稲が種子あよー」と同じである。また、粟作が農業神の作業によって始まるという神話的な由来譚を冒頭部に付加している点は、沖縄島の歌謡の「天親田（あまーうぇーだー）」などの歌謡群とも共通する。

この詞章を「稲が種子あよー」と同様の分類にならえば、種まき・草取り・粟の発育という順に謡われており、この中に粟の発育を示している表現は 2 つある。１つは、第 16 節の「あうまがり　ゆぷしゃがり　うわりば（青々とするほどに　良いほどに植わっているので）」という詞章が生育の様子を示している。「稲が種子あよー」でいえば、本田に田植する苗の生育を「犬の毛／猫の毛」と具象した詞章に対応する。もう一つは、第 20 節の「なうらがり　ゆたんがり　うわりばゆ　（なおるほど　豊かなほど　植わっているので）」で、さらに生長した粟の様子を歌っている詞章であり、「稲が種子あよー」が「ススキ／チカラシバクサ」で表現した稲の発育の場面に相当する。従って、このニーリでは、アワの発育を表す時、「青々とする　良いほど」「なおるほど（めでたい）　豊かなほど」という何れもアワ自体の状態を表す抽象的な語によって表現しており、八重山の歌のような具体的植物を用いて、粟の繁茂を

謡うといった発想の表現はみられない。さらにもう一つの事例を挙げてみよう。

「アーピツアアゴ　＜粟摺り歌＞」　伊良部島　（宮古篇　p.336）

1　ことすまつ　あわのどよ　　今年蒔く粟が
　じゅうがつまつ　たにのど　　十月蒔く種が
　　サア　サア　ヨウヤナオレ　サア　サア　（囃子　以下略）
2　ばがまかば　においるよ　　わたしが蒔いたら根は茂るよ
　ふさとらば　さかえるよ　　草をとったら栄えるよ
3　においたむ　やーてがよ　　根が茂ったならば
　さかいたむ　やーてがー　　栄えたならば
　　（以下略）

引用したのは、この歌謡の冒頭部の 3 節である。ここでは、1.種を蒔き、2.根付き・草取り、3.根がはる様子が歌われ、省略した第 4 節からは、稔りの様子を歌い、粟刈り・粟摘み・貢納・祝いと、全 10 節の短い詞章に「上城金殿がニル(多良間島)（ロ）パイドニの歌詞」と同様の粟作の全過程が謡い込まれている。異なる点は、冒頭部の農業神に関する内容がないことである。「アーピツアアゴ　＜粟摺り歌＞」では、粟が繁茂する様子を根が茂ると捉えている。次も、同じような表現事例である。

「イキャー家(ぺ)のチョラホイ」　狩俣　（宮古篇　p.345）

（前略）
2　あわ　まきば　　粟を蒔いたら
　にば　ふみ　　根が生え
　むギ　まきば　　麦を蒔いたら
　むとぅ　うい　　根本が繁茂し
3　にうい　　根の生え方が
　かぎかりば　　美しいので
　むとぅい　　根元の繁茂のしかたが
　かぎかりば　　美しいので
　　（以下略）

この事例でも「根本が繁殖し」、それを「美しい」と表現しているのである。粟の発育を示す言葉は「にうい(根生い)」「むとぅい(元生い)」で表される表現の類型がみらえることがわかる。

粟の発育を示す表現は、他にもある。

「今蒔く種(なままきたに)」　池間島　（宮古篇　p.381）

1	なままキ　たにぬどぅ	今蒔く種が
	ずーぐぁチ　まキ　あわぬどぅ	十月蒔く粟が
2	たにぐーふだ　うゆりば	一つ残らず生える種を植えたから
	シずぐふだ　うゆりば	一粒も残らず生える種を植えたから
3	ふさとぅりゃーぬ　ふーてぃがー	草取りの季節が来ても
	あわたてぃぬ　んみゃいてぃがー	粟立る時節が来られても
4	ういが　ふさゆ　とぅゆさぎ	これの草を除いてある
	あわぬ　ふさゆ　とぅゆさぎ	あわの草を除いてある
	(以下略)	

この事例においても、全体の内容構成は同じである。しかし、この歌では粟の繁茂をあらわすのは第 3 節の「ふさとぅりゃーぬ　ふーてぃがー（草取りの季節が来ても）」「あわたてぃぬ　んみゃいてぃがー（粟たてる時期が来られても）」にあるように、粟が「立てる」と表現されている。

宮古島の歌謡に見るイネ(アワ)の繁茂の表現についてまとめると、3 通りあった。a.アワの発育を表す時、「青々とする」「良いほど」「なおるほど(めでたい)」「豊かなほど」というアワ自体の色彩、形状、状態等を抽象的に観念語を用いて表現する。そして、b.繁茂を「根が茂」ると捉え、 c.粟が「立てる」と謡う。以上 3 通りの表現によって作物の繁茂を言い表している。これらは何れも、粟の実体からその状態を言葉にして表現している。

以上は、八重山以外の琉球地域におけるイネ(アワ)の繁茂の表現について考察したものである。それらをまとめると、八重山の稲作歌のイネの繁茂の表現に見られたと同様に、大きく 2 通りのパターンに分けられる。１つは、目に見える形態（状態・色・形態等）によって、よりわかりやすくあらわす表現と、もう１つは、イネとは別

の具体物を取り上げ、そのものが持つ目には見えない何らかの属性（事物が本質的に持っている性格）との関係性で、繁茂をあらわす表現である。繰り返しになるので、事例を挙げないが、前者には様々な表現があった。後者は、ティルクグチだけに見る表現で、「かやの葉の稲なり／せぎの葉の粟なり」という、「かや」と「せぎ」等の野草により、イネの繁茂期の姿を表しているものである。具体的に挙げられた植物名の「かや」も「せぎ」もススキと同じイネ科の植物である。

日本本土　−「田遊び」に見る繁茂の表現−

次に、イネの＜繁茂期＞が、日本本土の稲作に関する歌謡に、どのように歌われているかを比較したい。

以下に取り上げるのは、日本本土の稲作に関連する儀礼のうち、「田遊び」の芸能で謡われる歌のイネの繁茂を表す詞章である。「田遊び」の定義は、『農と田遊びの研究　上・下』（新井　1981）によれば、「春の耕作始めの儀礼とそれを前提とした遊び、特に御供田作りを中心にしたそれにほかならない。」（新井　1981　p.5）とある。従って、ごく大雑把な把握になるが、気候の違いなどによる時期の違いはあるものの、「種子取祭」も「田遊び」も、稲作農耕の耕作始めの儀礼という点では共通する。日本本土の各地に広がる「田遊び」だけに、その儀礼は一様ではないが、「田遊び」の儀礼が展開する芸能の中には、農耕の一年を表現した歌が謡われる。ここでは、筆者が見学したことのある東京都板橋区徳丸町の北野神社で行われる「田遊び」の歌の事例に、イネの発育がどう謡われているかをみてゆきたい。

2 月（旧暦正月）に、北野神社の境内に拵えられた「もがり」と呼ばれる 2 間四方の仮設舞台の上で、大きな太鼓を田に見立て芸能が繰り広げられる。『農と田遊びの研究　上・下』（新井・1981）も参考に、「稲が種子あよー」の内容の分類に倣って、東京板橋北野神社の「田遊び」の芸能に伴う歌の各期の内容を、＜Ⅰ播種･植え付け期＞・＜Ⅱ繁茂期＞・＜Ⅲ収穫期＞にあてはめると次のようになる。

Ⅰ 播種･植え付け期	①調歩調べ　②苗代田打　③苗代かき　④肥草入れ
	⑤種子蒔き　⑥鳥追い　⑦田廻り　⑧植田打ち
	⑨植田代かき　⑩肥草入れ、エブリ指し、
Ⅱ 繁茂期	⑪田植　⑫米坊･太郎次・ヤスメ　⑬田の草取り
Ⅲ 収穫期	⑭田廻り（穂孕み）　⑮稲刈　⑯倉入れ

次に、下記は先述した「稲が種子あよー」の各期の内容である。

Ⅰ 播種･植え付け期　①日選　②種まき　③苗の成長

Ⅱ 繁茂期　④田植え　⑤稲の成長

Ⅲ 収穫期　⑥作物の稔り　⑦豊作の祝い

上記項目の比較では、「田遊び」に設けられた各期の項目(演目)の方が、「稲が種子あよー」のそれよりは詳細な項目が設けられている。しかし、何れも一年を通して行われる田仕事の流れが、順を追って謡われていることに変わりはない。

稲の＜繁茂期＞に絞って、「田遊び」の内容を見ると、稲の＜繁茂期＞にあたる時期の歌は、⑪田植え、⑫米坊･太郎次・ヤスメ、⑬田の草取りの 3 種の内容に分けられている。⑪田植えでは「もがり」の上で、稲苗に扮したお稚児さんを、田んぼに見立てた太鼓の上に乗せ、簡単な所作と歌を田の神に捧げる。次の⑫米坊･太郎次・ヤスメは、「もがり」の外の境内に場所を移し、米坊･太郎次・ヤスメや、獅子・矢持・駒が次々に登場しては、観客の間を練り歩き祭りを盛り上げる。例えば、おひつを抱えた女性による田植えの昼飯の有様が芸能に表現されたり、孕んだ女性に扮した男性のセクシュアルな所作等、稲の穂ばらみなどを促す呪術的と思われる内容が含まれている。そして、再び「もがり」に戻って、⑬田の草取りの芸能が行われる。そこで謡われる歌謡は以下の通りである。

「田の草取り」

「よー、よなんぞう殿。“よう”。じんでたも植ゑてす。じんでたから田の草を取り申す。昔ざっとあったとさ　ぢいにばあ（爺と婆）と揃ったとさ」

（新井 1981 上 p. 122）

ここで謡われる歌について、新井によると「田の草取りだが、その所作はなく、言葉と一首の歌のみである。歌意は下赤塚のと合わせてみてもわかりかねる」（前掲書 p. 122)とある。

『農と田遊びの研究』(新井・1981)に収められた各地の「田遊びの」報告事例を見ていくと、＜Ⅰ 播種･植え付け期＞の耕作のはじめから田植えまでを歌ったものと、終盤の＜Ⅲ収穫期＞の穂が稔り、稲刈を謡う歌は、一般に、項目や歌謡の詞章が量的にも多い。それに比して、＜Ⅱ 繁茂期＞の稲が本田で育つ様子を歌った歌謡の項目は少ない。北野神社の例では、本田の＜Ⅱ 繁茂期＞は⑪田植、⑫米坊･太郎次・ヤス

メ、⑬田の草取りの３項目だが、他の地域の歌謡には＜稲見＞などという項目が＜Ⅱ繁茂期＞に加わるものもある。しかし、関心の中心は、穂が出そろうことに向けられている傾向がみえる。実際の農作業の過程には、本田に植えられた後の稲の見守りは、草取りや虫払いなどの作業に付随した儀礼もあるだろう。しかし、「田草取り」の項目は見られるが、新井の北野天神の「田遊び」の事例の指摘にあるように、詞章の内容がよくわからないものや、所作だけという記録が目につく。そうした傾向のなかで、「北陸道の田遊び」（前掲書 p. 641）の中にある「草取り」の詞章が含まれた事例を挙げておきたい。

福井県敦賀市野坂　野坂神社　ナリハイ[30]

＜草取＞

夏田に成て草取さうらへ、ハヤシ　水かきまうせ、ハヤシ　御らんのふれば、ハヤシ大このいけ(池)の、ハヤシ　こも(菰)草にぞ（に）似たり、ハヤシ　秋ほ(穂)に出て、 ハヤシ　尺のほたけ(穂丈)、ハヤシ　寸の稲つぼ、ハヤシ いつよりもすぐれし、ハヤシ　五尺の丈に、ハヤシ　いできてそうろ。ハヤシ　ゆらりやしゃらり、ハヤシいできてそうろ。ハヤシ　　（前掲書 p. 759）

この歌の内容は「夏の田んぼの草取りでございます。水の掻きだしをいたします。ごらんになれば　大この池(地名か)のマコモに似ています。秋の穂が出て、穂丈の長さ、寸の稲つぼ（稲の収穫量の単位）は例年より優れて、５尺もの穂丈が出てまいってございます。ゆらり、しゃらりと出てまいってございます」（筆者　訳）といったものであろう。この事例で興味深いのは、「御らんのふれば、ハヤシ大このいけ(池)の、ハヤシこも(菰)草にぞ似たり、」という詞章である。菰草というのは、マコモのことであろう。ちなみに、マコモも、ススキやチカラシバクサと同様にイネ科の大型多年草で、本土では沼や川や田んぼの水路など水際に自生し根を張り、分蘖して繁茂する。イネを大きくしたような形状で、草丈は１～２m以上になることもある植物で

[30] ナリハイとは、「田遊びの用語は、佐渡において室町期に使用されていた史料がみいだせるが、「御田植」とも呼んでいたようである。能登を含めて越前ではすべてナリハイと呼んでいた。“田畑なりはい二十四つの物作り”と言い、(この詞は東海道・近畿に見いだせる)、養蚕祝なども含むので、農あるいは生業といった字を当ててもいる。」（新井・1981・上 p. 641）

ある。マコモは、『万葉集』にも謡われている景物で[31]、古くから親しみを持たれている植物のようである。現在の沖縄では、マコモの茎の肥大した部分をマコモダケと呼んで、食べる野菜として一般に知られている。

福井の「田遊び」の歌の中でマコモを謡う事例では、真夏の稲の生育する姿に、水辺の野草のマコモを連想している。巨大なイネのような野草の名をあげ、イネの生育の実体を遙かに超えるマコモを歌に謡っている。その心意には、単なる比喩というよりも、大きなマコモの繁茂する力がイネにもあやかることを願い、呪的な言葉の力を期待する発想を思わざるをえない。「田遊び」という一年のうちの稲作初めの儀礼で謡われる歌だけに、ここには「稲が種子あよー」と類似の予祝的発想が当然ながら含まれているだろう。

こうしてみると、八重山のイネの繁茂の表現でススキ／チカラシバクサを用いた表現のうち、類似しているとみられるものが、琉球の他地域にも、また、日本本土のイネの生育の表現にも点在している。

（3） 農耕に関する歌謡以外の歌にみるススキ・チカラシバクサ

八重山歌謡において、農耕以外の歌の中でススキ・チカラシバクサが、どのように謡われているか考察し、さらに、八重山以外の地域や歌以外の世界にも広げて、一般的にススキ・チカラシバクサがどのような信仰・習俗等に関連する植物なのかをみてゆきたい。

① 八重山歌謡にみるススキの習俗

ススキとチカラシバクサのうち、チカラシバクサは、農耕の歌の中でススキとの対句以外には登場しないが、一方のススキは、農耕に関連した歌以外にも登場する。それらの歌に謡われているススキからは、歌の世界でススキという植物が、八重山の人々にどう認識されているのか、ススキと人の関係が窺える。それは、「稲が種子あよー」等の農耕に関する歌でイネの発育をあらわす表現に使われる理由とも関係するはずである。

八重山歌謡の中には、農耕に関する歌以外に 11 篇の歌にススキは登場している。下記の＜表１＞に挙げた 11 篇の内、詞章にススキという語が含まれているのは 3～11 の 9 篇である。また、1・2 の 2 篇は、呪文(ジンムヌ)を唱える際の呪物としてス

[31] 『万葉集』の事例　「真菰刈る　大野川原の水隠りに　恋ひ来し妹が　紐解く我は」『万葉集』第 11 巻　2703　作者未詳

スキを伴う事例がテキストに紹介されている。

＜表 1＞ススキを含む八重山歌謡

	歌謡名	テキスト語形	地域名	ジャンル	頁
1	猪の呪文	すすき	竹富島	ジンムヌ	120
2	種子まきの呪文	すすき	竹富島	ジンムヌ	120
3	我びぎりゃ〈吾が夫〉 ばーびぎりゃ＜わがせ＞	山薄	石垣島大川村	ユングトゥ	127
4	いだふん〈ゆんぐとぅ〉	ゆしき	竹富島	ユングトゥ	144
5	ばなり一焼あよー	枯薄（かりすすき）	竹富島	アヨー	176
6	ゆうねんぶしじらば	薄（の松明）	石垣島大浜村	ジラバ	225
7	なかまいじらば	ゆしぃきぃ	波照間島	ジラバ	280
8	しやがむやー	ゆしぃき	石垣島石垣村	ユンタ	337
9	あかんにゆんた	ゆしぃきぃ	石垣島登野城村	ユンタ	350
10	あかんに田ゆんた	ゆすき（叢）	石垣島登野城村	ユンタ	358
11	ゆなははら	どしき	与那国島	その他　補遺	618

はじめに、9 篇の歌に登場するススキについて簡単にまとめて述べておきたい。9 篇の内、ススキの生えている場所の利用を表現しているのは、「いだふん〈ゆんぐとぅ〉」「なかまいじらば」「あかんにゆんた」「あかんに田ゆんた」の 4 篇である。次に挙げる「いだふん〈ゆんぐとぅ〉」は、八重山歌謡に見られる継親に育てられ、不遇な生活を強いられる継子の生活をテーマにした歌のなかの一篇である。「いだふん」は主人公の名前である。

「いだふん＜ゆんぐとぅ＞」　竹富島　　p. 144

（前略）

畠（はてー）んじてぃ　雨ぬ降（あみ ふ）りたらーどぅ　薄（ゆしき）
ぬかたんが　蘇鉄（すでぃち）ぬかたんが　居（ぶ）りて
ぬ思（うむ）いぬどぅ　いじゃーて　おうれら
ばらー　あんまーて　おうれらばらー
今日（きゅ）や雨ぬ降（あみ ふ）りば　風ぬ吹（かじ す）がば　はん
なて　あんじ　おうれたんだりゃー

畠に出て雨が降ったので　薄（すすき）のそば
に　蘇鉄のそばにいての思いが　イ
ジャーがおられたらなあ　母親がお
られたらなあ
今日は雨が降るから　風が吹くから
行くな　とそう言われただろうに

（以下略）

この引用部は、主人公の「いだふん」が畠で雨に降られ、ススキの下で雨宿りしながら実母を思う場面である。ススキが占有する野原と侘しい心が重なって主人公の哀れがよりいっそう表現されている。一方、他の 3 篇は、ススキの生い繁る野原が、男女の密会の場であることがわかる歌である。これらの歌には、ススキの繁茂する野原が、島の人々のごく普通の日常の生活空間のなかで、馴染み深い場所であることが垣間見える。

ススキが燃料や松明として使われていたことが謡われているのは、次の 3 篇の歌である。「ぱなりー焼きあよー」「ゆうねんぶしじらば」「しやがむやー」「ゆなははら」が上げられる。「ぱなりー焼きあよー」は、ぱなり焼きを焼く作業で燃料にススキが使われていたことを伝えている。他 3 篇のジラバ・ユンタはほぼ同じ内容を謡っている歌で、男女の密会の場の暗がりを照らす松明の明り、篝火として利用されているススキが歌の一節に謡われている。

また、ススキの和え物が謡われているのは、「我びぎりゃ＜わが夫＞」である。これは、ある抽象的な観念を植物を用いて具象で表現する形式である。歌の主題は、どんなことがあっても、夫婦の絆はきることができないとするところにあり、その強さを「強さ」という抽象的な観念語を用いて表すのではなく、具体的な像であらわす表現である。このようなテーマを具象による表現で謡う歌がある事は、すでに植物歌で取りあげたが、夫婦の愛情の絆の強さを率直に表現するタイプのものと、あり得ないことを取り上げて逆説的に絆の強さを表現するタイプとがある。「我びぎりゃ＜わが夫＞」は後者に属する。ススキの和え物という､凡そおいしそうでもない素材をあえて示して、逆説的に、如何なる困難があっても夫婦の別離はないことを訴える歌である。

以上の通り、ススキの登場する 9 篇の歌の内容は、3 種に分類できた。一つ一つのススキの場面は、歌の中のほんの一節に過ぎない。ススキという植物で一つのカテゴリーにまとめてみると、島の環境や暮らしのなかのススキと人の風景が、率直に謡い込まれていることがわかる。歴史書にはあえて記録されることがない、 庶民の気取りのない日常生活と思いが、詞章の一節に伝えられている。文字文化の制約を受けない庶民の口伝えの歌という形式であればこそ、皆が思い当たる日常的な共感のフィルターを通って残されてきたものである。これは、八重山歌謡の表現の重要な特徴の一つと言える点である。

ススキが謡われている歌の 11 篇のうち、ここまで取り上げた 9 篇はいわゆる謡う歌だが、残りの 2 篇は呪文である。八重山歌謡のジャンルの用語では「ジンムヌ」呼ばれる。一般に、呪文とは唱える言葉をさすが、所作物がともなうことがある。次の呪文では、言葉にはススキという用語はつかわれていないが、呪文を唱える時の行為に、ススキの葉が意味を持って使われている例である。

竹富島の「種子まきの呪文」と「猪の呪文」の 2 篇は、畑の作物を鳥や猪の害から守ることを目的としている。そして、その呪文を唱えるときに、ススキの葉を使うことがテキストには記されている。事例は「種子まきの呪文」である。

「種子(たね)まきの呪文」　竹富島　p. 120

七福長寿(しちふくちょうじゅ)　泣(な)きからす　山(やま)ぬ七頂(ななしじ)にど	七福長寿の泣きカラスは山の七頂に
ぅ居(びい)る　此畑(くぬはて)にや来(くう)らしたぼんな	こそ居る　この畠には来させなさるな
うーとうとぅ　うーとうとぅ	ああ尊(とうと)　ああ尊

この呪文を唱える場面の解説によると、「畑に種子をまいた後、ススキの葉を結んで畑に立て、息を三回吹き、この呪文を唱える。そうすると、鳩やカラス、スズメ等が畑に来ることがなく、種子は全部発芽するという。」(テキスト p. 120)とのことである。


多良間島にて。

「ジンムヌ」は、過去の習わしとばかりいえない。現代人の生活にも、思いあたることのある普遍的な＜言葉と行為＞である。写真は、畑に立てられていた結んだススキである。他所でも、畠にススキが結ばれている光景を見ることができる。また、市街地で家を建てるために整地がすんだ土地に、結んだススキが置かれているのを見ることもある。これらのことからススキは農耕の呪文以外に、その他の一般的な厄除けに役割を果たす植物とする意識は、現代にも続いていると言える。

②　一般的なススキ・チカラシバクサの習俗

ススキとチカラシバクサは、イネ科の草本類である。これらの野草は琉球諸島に限らず、日本本土他、周辺アジア地域に広く分布し、生活の身近で目にする植物である。水田のような湿潤な土地よりも、陽の当たる開けた土地に株立ちして繁る。特にススキは、開けた土地の何処にでも自生する植物だけに、各地で生活上の有用植物として

利用され、又、様々な伝統文化と結びつきの強い植物である。

生活上のススキの利用は、茅葺屋根の資材[32]や燃料、カゴなど日常用具の製作資材など様々である。時には、ススキを利用した民芸品などを見ることもある。上江洲均の『伊平屋島民俗散歩』（上江洲　1986 ）には、沖縄でのススキの様々な利用の事例が記されている。例えば、四枚鍋（シンメー）のハマンタと呼ばれる蓋は、「ススキを枯らして竹ひごで巻いてつくった円錐状のもの」（前掲書　p. 38・p. 40 に＜写真資料＞）であり、ススキの穂はほうき代わりに（前掲書　p. 37）、夜釣りの漁の照明は「ススキの枯れ茎を 10 本ばかり束にしたものを使った。これをテーという。」（前掲書 p. 78）等々、多くの事例が散見できる。また、琉球王府時代に著された農書には、畑の肥料としての利用や、水害予防の為にススキの植栽を奨励する記事等も見られ[33]、日常的に多方面で利用されていた植物であることが窺える。また、小野重朗は、南九州の事例を挙げて、ススキの実用について「カヤと竹の文化」（小野 1994　p. 488）を指摘して、茅葺屋根の資材としての利用はもちろんだが、綱の材のほか、「カヤ（マカヤ、チガヤ）で作られた民具が実に多彩に見られる」（前掲書　p. 488 ）と述べ、蓑やカヤ製の民具を紹介している。こうした、有用植物としてのススキの側面は、広範な地域に数え切れないほどの事例を挙げることができるだろう。

そして、ススキの持つ要素で見落とせないのが、ススキに霊性を認める信仰である。ススキに霊性を認める文化を持った地域も広範囲にわたる。

前項で、呪文に用いられるススキの例を取り上げたが、沖縄では、結んだススキを魔除けとする習俗は今でもしばしば目にすることができる。「さん」・「げーん」等という呼称がある。食べ物の上に置いたり、玄関の門口に付けられたススキを見ることがある。日常生活だけでなく、神祭りの際にもススキが登場している例がある。上江洲によると、田名のウンジャミの神祭りの事例で、祭りの夜に縁起物としてノロが「オー」（ダンチク。本来はススキ）と呼ばれる葉をもって、各家に配る事例があっ

---

[32] 沖縄では、屋根を葺く材として、チガヤが多く使われる。

[33] 農書に見るススキを肥料として扱う例として、次の様なものがある。「耕作下知方並諸物作節附帳」に、「農民は、毎日の野良仕事から帰るとき、牛馬、山羊用の草、かや、すすきの類、木の小枝などを運ばなければならない。（中略）腐ってきたら豚小屋に入れ、豚に踏ませたのち肥料小屋に積んで貯えておき、使用すること。」（山田他　1983　p. 20）と記されている。ススキを肥料として使用するよう述べる記述は、「西村外間農書」「寒水川村金城農書」等に見られる。また、「八重山嶋農務帳」には、水害から畑地を守るためにススキの植栽を奨励する記事（山田他　1983　p. 121）が見られる。

た（上江洲　1986　p. 106）、ということである。

ススキに呪性を認める文化は、 琉球列島、そして近隣の諸地域にも共通している。奄美の折り目の行事の「しばさし」では、ススキを家々の軒にさし、厄よけとする。また、ノロの祭りでススキが使われている例は、映像にも残されている[34]。



日本本土に目を移せば、古くは『古事記』のイザナキ、イザナミの「神生み」の話の中で、風・木・山の神々に次いで生まれる「鹿屋野比売神（かやのひめのかみ）」は、その名に「鹿屋（かや）」とある（次田 1977 p. 50）。「かや」は「茅」で、ススキやチガヤの総称であり、野の神の表象として神話に登場する。また、『万葉集』にも出現する[35]。本土の文化の傾向では、ススキといえば、秋の風情を象徴する穂花の印象が強いことを既に述べたが、古くから生活に馴染みのある植物であったことは確かである。

野本寛一の『軒端の民俗学』（野本　1989）には、日本各地に伝わる蘇民将来の伝説[36]の中で疫病を防ぐ呪物として出現する小さな茅の輪や、厄よけのために神社に用意される茅の輪くぐり[37]など、茅を使った民俗や伝統行事が多く報告されている。

こうしたススキと人の関係は日本に留まらず、植物学者の湯浅浩史の『植物と行事』（湯浅　1933　p. 184 ）や『瀬川孝吉　台湾先住民写真誌　ツオウ篇』（湯浅 2000　p. 29 ）には、台湾のヤミ族､ツオウ族他で、農耕儀礼等種々の儀礼にススキを使う事例、中国貴州省のミャオ族の田植え儀礼に使うススキの事例等が多数示されている。

---

[34] 1980 年代迄続いた奄美の名瀬大熊のノロの儀礼の映像にも残されている。海岸で祈る神迎えの祈りを行う神聖な場に、ススキが依り代の様に活けられている映像がある。（「奄美のノロのまつり（２）」民俗文化映像研究所　映像民俗学シリーズ「日本の姿」第 23 巻）。

[35] 『万葉集』　巻 1-7「秋の野の美草苅り葺き宿れりし宇治の都の仮廬し思ほゆ」額田王
＊「美草」は　ススキの美称(斉藤 1938　p. 7)。

[36]「北海の武塔天神が南海の女のところへ通う途中、日がくれてきたので将来兄弟のところで宿を求めることになった。弟の巨旦将来は富裕であるのにもかかわらず、この神に宿を貸さなかった。それに対して貧しい兄の蘇民将来は精一杯歓待した。のちにこの神が八柱の神を伴って立ち寄り、恩返しに蘇民将来の妻と娘の腰に「茅の輪を以て腰の上に着けしめよ」と秘伝を告げる。その夜の内に疫病が発生し、蘇民一家を残して他は皆死んでしまった。」『備後国風土記』（疫隈<えのくま>の国社の縁起譚）（野本 1989 p. 69）

[37]「夏越しの行事として日本本土各地の神社で広くおこなわれており、チガヤやススキによって厄災や穢れを祓う。」（野本　1989　p. 70）

ススキを巡る呪的な文化は、古くから生活上の利用に伴うススキの認知と並んで、様々な伝統的行事、説話、歌謡、多くの民俗的な信仰に多面的に展開されてきているものである。稲作文化との関係もその中の１画に在ると考えられる。

一方、チカラシバクサは、八重山歌謡では「稲が種子あよう」のススキとの対語でのみ出現する植物である。ススキほど呪的な文化との関係を示す資料は、多くはみられない。けれども、『万葉集』にも「しばくさ」という名で謡われているところを見ると[38]、古くから人里に自生していることが人々に認知されていた植物の１つのようではある。沖縄でいえば、上江洲は、赤ん坊の名付けの儀礼の際として、「軒下には力草やウジム(一本銛(もり))またはトゥジャ三本銛)、機具のヒジキ（杼(ひ)）が置いてあり、男女別によってそれぞれ触れさせる。」という一例を記している（上江洲　1986 p. 212）。また、喜舎場は、西表島祖納村の「田植びじらー」の農耕の歌の注釈で、播種の日の帰りには、「必ず薄木の株を切ってきて仏壇や座本神の花瓶に活ける。なお力芝草までも併せて活けることもある。」（喜舎場　1970b　p. 497）と記している。一般的に琉球歌謡の対語が同義語を用いる特徴があるとされることなどを考慮に含めると、ススキとチカラシバクサの関係は、「口拍子」の具合の良さだけでなく、文化的な意味においても同義であると考えてよいだろう。

以上、八重山歌謡の農耕以外の歌の世界と一般的習俗に見るススキとチカラシバクサについての事例を挙げてきたが、特に、ススキの事例は豊かにあることがわかる。ススキとチカラシバクサが、人々の生活の身近にある植物で、日常の実用に供されているだけでなく、厄除け他、その霊性を認識されて文化的に人との関わりを持つ植物だということが確かめられた。

③　農耕文化の中のススキとチカラシバクサ　－ イネを育てる植物

人の生活一般にわたって、ススキやチカラシバクサのかかわる習俗の広がりがあることをみてきたが、ススキ／チカラシバクサの繁茂の表現もそうした文化・習俗の一画に位置するものである。特に、八重山歌謡の慣用句であるススキ／チカラシバクサは、農耕の文化の習俗を背景に成立しているものといえるだろう。そこで、この項では八重山から枠を広げて、農耕文化の習俗一般という点から、ススキ／チカラシバクサの繁茂の表現について検討してみたい。

---

[38] 『万葉集』巻 6-1048「立ち易り 古き都と なりぬれば　道のしば草 長く生ひにけり」 詠み人知らず

伊波は、15 世紀末の『朝鮮王朝実録』にみる朝鮮漂流民の報告の解読のなかで、沖縄や宮古の人々が穀物の種子を得るに当たって、「島民自らが馬来半島辺にいって貰ってきたと考えられないこともない」（伊波　1973 p.53）という推測を述べているところがある。これは、15 世紀には琉球における海外貿易がさかんだった歴史を背景に、推測していることと思われる。また、伊波の言葉の背景で、琉球の稲作栽培が南方から伝わった可能性を意識していたともいえるだろう。

そこで、時代は異なるが、南方の稲作儀礼が報告されている事例を、宇野圓空の『マライシアに於ける稲米儀礼』(宇野　1941)にみてみたい。この著書にはマレイシア・フィリピン・ボルネオ他の東南アジアに暮らす様々な部族の開墾から播種、生育、収穫などの稲作の過程で、イネの生育各期に行われる儀礼や呪言、歌等の調査がまとめられている。それらの中で、特にイネの発育を見守る儀礼の一環に、＜イネの生育を促す＞植物について記されている興味深い記述が見られる。

一つは、イネの生育を支え、または助けると考えられている植物があることである。それらの植物が単にイネの周囲にあるのではなく、イネの耕作地の決められた場所を撰んで差し植える植物であり、それらの植物が儀礼に用いられることや、その植物が強い生活力を持っていて、それが共感的にイネの成長を促すと考えられていることなどが報告されている記事[39]がある。また、イネの間には特定の植物を植えて悪霊を除き、稲の成長を助けさせる事例[40]や、イネの発育に特殊の効果があると考えられている植物を挿す事例[41]などがある。その中には、呪術的なものもあるが、「lupo(ココ椰子の葉)は稲に強い日光のあたるのを遮る」(前掲書　p.216)等の実効性が理解できるものも含まれている。そして、イネが細長くのびないで低く花をつけるようにする為に、地上近く実を結ぶ樹を植え、また、イネが動物に食い荒らされないよう、動物の食わない樹を植える[42]等、様々な事例を見ることができる。その多くは、現代か

---

[39] 宇野の調査の報告にみると、カロバタック人の例<事例89>（宇野　1939　p.191）・シアク河上流タプン河辺のオランタプン人の例＜事例94＞（前掲書　p.195）・ミンダナオ島のバゴボ族の例＜事例121＞（前掲書　p.216）等がある。また、各事例には、実際の植物名を現地語で記してあり、「これらの植物は強い生活力をもっていて、それが共感的に稲の成長を促すと考えられている」（宇野　1939　p.191）と記されている。

[40]事例 94　シアク河上流タプン河辺のオランタプン人。特定の植物としてあがっている植物名は、sapuli(fimbristylis asperrima)とある。（前掲書　p.195）

[41]事例 121　ミンダナオ島のバゴボ族　（前掲書　p.216）

[42]事例 82　マラッカ半島ベラク州のサカイ人（前掲書　p.184）

らみれば、呪術的な思いによるものとみえるものもあるが、経験的な蓄積の中から活かされる知恵の中には、ただの信心とばかりは言えない理にかなっていて、当時としては農耕の技術といえるようなものも、儀礼として行われていることが考えられる。以上は、播種の際に行う儀礼の一部から、ごく簡単に事例に挙げたものである。何れもが、イネの生育のために有効な働きをすると見なされる植物という考え方が、農民の間に存在していたことを示唆している。

また、同様な中国の例もある。『アジア稲作文化紀行』（森田　2001）の著者森田によると、中国貴州省の苗族の田植えの際の事が次のように記されている。

「田植えの植え始めの儀式に茅と稲を一緒に植える。これは稲が茅のように育つようにとの願いからである。」（前掲書　p. 116）という事例や、「とくに雷山地方では、活路頭が田圃の真ん中にまず茅３～5 本を植えその周囲に稲と茅を植える、これを活路と呼ぶ。こうしてから田植えすると、苗が茅のように強く育つといわれる。」（前掲書　p. 116）という事例を取り上げている。これらの田植えの例をみると、広い地域でイネとカヤを一緒に植えて、カヤの力でイネがより強く育つ事を願う「活路」という儀礼があることが述べられている。儀礼や呪術の信仰が重視されなくなった現代にあっては、趣を変えて、植物同士が生育の力となるような植物の組み合わせを、農業や園芸では＜コンパニオンプランツ＞という。科学的根拠が実証されるものから、理由は明確でないが経験に導き出された組み合わせまで、様々に含んでおり、ある種の植物を育てる技術である。

上記のような事例をあえて示した理由は、一つ一つの植物の効果の有無や、効果の実証が問題なのではなく、イネの生育を守り育てる植物があると信じる発想が、稲作の技術と文化に受け継がれているという点に注目したからである。

本項で、「作物としてのイネ」を謡う歌について考察をした際に、事例に取り上げた石垣島川平村の「まゆんがなしぃの神詞（かんふちぃ）」の詞章には、播種期を謡う詞章の中に「大イビリ／中イビリ」という対語で表わされる「呪的苗」（テキストの訳語）が謡われ、何らかの播種儀礼が表現されていると先述した。それに関連して、石垣繁の「八重山地方の稲作儀礼」（石垣　1976）に記している播種儀礼を取りあげた。石垣によると、その儀礼は「水口」にススキ 3 本を差し播種するというものであって、その 3 本のススキの意味は、「田の神、農耕の神、アリシン・マニ神の三神を意味する」（前掲書　p. 124 ）　とある。マレイシアや中国の事例と合わせてみると、石垣の

示した事例も、八重山の播種儀礼で謡われる歌のなかにある「ススキ／チカラシバクサの繁茂」の事例も、イネの近くに、イネの生育に何らかの力を与える植物を配置するのは、豊穣を得るための農耕儀礼がもつ呪的発想の一つとして共通性を持っている。イネの生育に力を与える具体的な植物の選択は、稲作を行うそれぞれの土地の自然環境や習俗の固有性が反映して、異なる植物が用いられる。ただ、中国の苗族の田植えの儀礼である「活路」（森田　2001ｐ.116）と石垣の指摘している八重山の播種儀礼が、ススキを呪物に用いている共通性は、先に述べたススキを呪的植物と認識する文化が、広い地域にまたがって存在していることを示唆している。

以上に取り上げたわずかな事例ではあるが、それらが時代も地域も異なるだけに、稲作に伴う文化の中に、他の植物の生命力の影響によってよりよくイネを育てるという共通の呪的発想が根底にあると捉えることはできる。中には、実効性があると思われるものや、実効性は不明だが呪的な植物と植物の関係を認識されているものが混在する。あえて分ければ、前者が稲作の技術とするならば、後者は稲作の呪的文化ということができる。そして、稲作の技術とそれを支える儀礼も共に、農耕の本質をなすものとすれば、稲の繁茂に、ススキやチカラシバクサの野草としての生命力が力を与えるという認識には、稲作の技術と呪術が混沌としていた時代以来、伝統的に引き継いでいる一つの発想が窺える。農耕文化の文脈の中で、豊穣の予祝を意図したイネの「生産叙事歌」は、言葉の呪力への信仰の下に、イネの生育の叙事的表現を成立させている。その全体性の中にみる生育期の表現では、イネの繁茂を生命力豊かな野草の繁茂を具象として表す慣用句が成立している。それはただ目に映る像としての野草の繁茂をイネの良好な繁茂の姿として置き換えた表現に留まらず、イネを守り育てる植物という農民の発想の下に、イネの繁茂とススキ／チカラシバクサの繁茂を並記して、植物同士の生命力の交感という呪術的な関係を促す慣用表現ということができる。

そして、イネの繁茂の表現である、イネの繁茂とススキ／チカラシバクサの繁茂の並記の詞章の解釈の違いは、目に映る像としての野草の繁茂をイネの良好な繁茂の姿で表現していると解釈するか、植物同士の生命力の交感という見えない呪術的な関係で繁茂の姿を表現したものと解釈するかの違いによるものと考えられる。イネを守り育てる植物という植物同士の共生関係を呪的に捉える発想には、突き詰めればすべてのものが霊魂を持つと考えるアニミズム的な発想の傾向が強くある。そうした発想に対する歌唱者達の立ち位置は、時代や地域、または個人によって一様ではない。その

違いによって、口伝で伝えられる内に歌の解釈が少しづつ変容を繰り返していたとしても、その経過はわからないのが口頭伝承の歌である。ある時は、意味がそれほど明解に分からなくても古来の伝統のままに歌の様式を謡い継ぎ、また、ある時には、歌唱者達の「今」の解釈によって、思いや願いを歌の言葉に表す等の受容の多様性が、結果として、繁茂を表す詞章の表現や解釈の多様性に繋がり、先述した助詞の使い方の違い等にみたそれぞれの村の歌の違いにあらわれているものと考えられる。

（4）ススキ・チカラシバクサの登場する歌の表現の特徴

この項で考察してきたイネの繁茂の表現に用いられるススキ／チカラシバクサの慣用句について、その表現という点から特徴をまとめてみたい。

①　ススキ・チカラシバクサの表現の様式

ススキとチカラシバクサは、テキストから抽出される植物のなかでは、出現数の多い植物である。歌の内容的には、ススキは大きく分けて 2 つの側面で歌われていた。一つは、農耕に関する歌の中で、作物の生育を表す表現に用いられているもの、もう一つは、雨宿りの場や燃料等の、人々の日常生活との関わりが具体的に窺える表現である。一方のチカラシバクサは、植物歌の世界に出現数は多い植物だが、チカラシバクサは単独で謡われることはなく、ススキの対語として作物の生育を表す表現にのみ用いられている。歌の世界の植物として、むしろチカラシバクサは特別な植物であることは述べてきた。

八重山歌謡の農耕に関わる歌の中では、イネ（作物）の生育の播種・早苗期、繁茂期、稔り期の各期に、その生育を表す様々な表現がみられるが、イネの生育の表現を全体としてみると、2 種の表現の様式がある。

一つは、イネの色や形、生態等の実体や、植物の生えている景等々の目に見える特徴を捉えて、イネそのものの状態を表す抽象的な観念語を用いながら、良好な生育を表現する方法である。それに対してもう一つが、イネの繁茂をイネ以外の野生の植物の繁茂によって表す方法がある。繁茂期のイネと、イネ以外の植物であるススキとチカラシバクサの関係は、繁茂という共通性で結ばれている。別の植物の具体物の例示で、イネの理想の繁茂を表現している。従って、この表現の方法をとるススキ／チカラシバクサの慣用句は、前章でも、中心的に考察した具象表現に類するものである。

こうしたイネの繁茂を、イネ以外の野生の植物であるススキ／チカラシバクサの繁茂であらわす慣用句は、「稲が種子あよう」「まゆんがなしの神詞（かんふちい）」等の歌にみら

れる。まず、これらの歌１篇を全体としてみると、前者は言霊信仰を背景にして、イネの発育の順を追って謡うことで、言葉の直接的な働きによって豊穣を期待する発想をもった叙事表現様式の歌である。そして、後者は、類似した叙事表現の様式ではありながら、言霊の直接的な働きだけでなく、＜神＞が寿ぐ言葉として発話者の霊性という発想が加わった表現である。作物の豊穣を得るための呪的な言葉に頼る心意は両者に共通しているが、同じ言霊信仰を背景に持った叙事表現でも、言葉の呪術性の機能の仕方は、2 篇の歌を対比してみると一様ではない。

次に、一篇の歌全体の表現の様式の対比ではなく、それらの歌の１節にあたるイネの繁茂の表現だけを取り上げて対比しながら、表現の様式とその背景について考察した。方法は、テキストに収載されている各島々に伝わるススキ／チカラシバクサの繁茂を具象とするイネの繁茂の表現について、詞章の表現と解釈等の違いに注目したものである。その結果として、現代語にも通じる比喩的な修辞と解釈できる表現の詞章と、主部と述部が並列するような構文の詞章があることを確かめた。前者におけるイネとススキ／チカラシバクサは、被喩辞と喩辞の関係にある。後者は、具体的な構文の様式でいうと、助詞が、在る無しの差異が注目される。詞章の「イネの繁茂は、ススキ／チカラシバクサ　繁茂する」というような構文は、現代語的には、解釈しづらい。けれども、ススキ／チカラシバクサの繁茂の表現には、そうした特徴的な表現が含まれている。そのような表現が成り立つ背景としては、祭祀や行事の「場」、或いは、労働の「場」等の「場」の意図が明確であり、その意図を共有できる人々の関係が存在することが考えられる。そして、そうした特徴的なススキ／チカラシバクサの繁茂の表現は、場の文脈を理解している共同体の人々にとっては、説明に多くの言葉を尽くす必要のない表現なのである。それは、言葉の共感において、歌の言葉以前の合意が、重要な役割を持っていることを示唆している。植物歌全般に、歌唱者達の日々の生活で共有する体験が、ほぼ歌の言葉を生み出す基盤となって表現を支えている。そのような歌の環境は、稲作歌についても同様であり、ススキ／チカラシバクサの繁茂の表現の成立を支える背景の一つといえる。

類似した表現について、八重山以外の琉球諸地域と本土の「田遊び」の歌の表現についても事例を挙げて考察したが、それぞれの地域に、八重山の稲作歌と同様な表現が含まれる例があることも示した。

②　ススキ／チカラシバクサの表現の出自

次に、ススキ／チカラシバクサの繁茂の表現の様式を支える信仰や思想の文脈とは何か、具体的に考察するために、広く一般的なススキとチカラシバクサの習俗についても取り上げた。ススキとチカラシバクサのうち、特にススキと人の関係は、生活の実用及び文化的側面に亘って、親密な関わりをもっている事例を多く見る事ができる。そして、様々な習俗に関連する中でも、ススキやチカラシバクサが呪的な霊性をもった植物として認識されていることは注目される。また、これらの野草と人の関係は、琉球にとどまらず、日本本土、アジア等でも、同様な文化的な傾向を持っていることを先学の報告にみた。

そうした背景をもつススキとチカラシバクサだが、歌の一節にあるイネの繁茂をススキ／チカラシバクサの繁茂で表す表現を成立させている信仰や思想について、農耕文化という面から考察した。

結論からいえば、ススキ／チカラシバクサの繁茂の表現の呪的性格は、稲作文化の中に見られるイネの生育に力を与える植物という呪的思考が、発想の基にあると思われる。播種の儀礼において、イネの周囲に別の植物を植える事例を八重山、マレイシア、中国等の稲作の文化の事例に見た。植物同士の中で共存、繁栄する組み合わせが自然界にあるという経験的知恵は、イネの栽培にも呪的に応用されて、それが儀礼等の中に組み入れられながら、イネ栽培の文化の中に継承されてきていることが窺える。稲作農耕を行う大きな文化圏を考えると、八重山の歌にみるイネの繁茂をススキ／チカラシバクサの繁茂で表す詞章も、その一画に位置していると考えられる。この章の冒頭に、神話研究の大林が「農耕は単なる技術的営みでない。農耕を基礎付ける神話や豊作を確保すべき儀礼も、農耕の本質的一部を為していることが普通である。」（大林　1973　p. 89 ）と述べている言葉を記した。八重山に稲作が伝承されてきたのが、いつの事なのか、現段階では正確な歴史時間の決め手はない。そして、ラオスの「米倉に飛んでくる米」の伝承と比較すると、八重山の稲作歌の「たらまゆら」などに見る異界から漂流してくる船に満載されたイネ（コメ）に対する発想は、異なっており、八重山の人々の歌は、蒔いて育てる種子としての認識のもとに謡われている。けれども、イネの自生地でない八重山では、稲作農耕の技術と文化はいつからか、どこからか伝播してきたことは確かであり、八重山の人々が意識するとせざると、伝播してきた稲作農耕自体が持っている思想・信仰は、八重山の稲作農耕文化にも受容さ

れているものと考えられる。

本稿では、イネの繁茂を表すススキ／チカラシバクサの繁茂の慣用句の背景にあるイネを育てる植物という発想を中心に考察した。ある植物の生育に何らかの効果を持つ、または、逆に害をもたらす植物の組み合わせがあるという発想は、植物が育つ現場にいる人々や、作物を栽培する人々にとっては、それほど突飛な発想ではないと思われる。例えば、蔡温の『農務帳』を基にして、各間切りの実情に添って配布された各地の『農務帳』の中には、ソラマメはサツマイモの脇に播き風を防ぐことで、サツマイモの生育を助ける(山田他　1983 p.89)、ムギやアワの畑に、虫よけのためにダイコンを混植する(前掲書　p.90)等々、ほぼ実効性のある事例ばかりだが、混植を奨励するように書かれた種々の記事が見つけられる。現代で言えば、共生植物という言葉や、今日の農業や園芸の世界で用いられるコンパニオンプランツという言葉にも、同様な発想をみることができるだろう。その様な実際の植物の観察や栽培の試みの工夫は、それぞれの耕作者がいつも行っているものである。そのように考えると、イネの繁茂を表すススキ／チカラシバクサの繁茂の具象は、イネの繁茂に何らかの影響関係にある植物が選ばれているとしても、実際の農業に携わる農民からでた言葉としては、特別なことではないと考えられる。ただ、ススキ／チカラシバクサの繁茂の具象の選択には、呪的な効力が強く期待されていると思われる。なぜならば、歌全体としても、呪的な予祝を意図して謡われている表現様式の中で、イネの繁茂を表すススキ／チカラシバクサの繁茂の対句が、単に繁茂の姿を別の植物の良く繁茂する姿に言い換え、見た目のわかりやすさで説明する喩辞と被喩辞の関係という修辞上の形式だけで、歌の言葉が選ばれるはずがない。そのように考えると、ススキやチカラシバクサが、呪物として霊的な力を持つ植物と一般的にも広く認識されていることは重要である。そうした呪的な力を認められた植物の中から繁茂を具象するに相応しい植物として的確に選ばれているのである。

前章までの植物歌の事例の考察を通して見てきたとおり、八重山の歌唱者達が、具象の表現に用いる素材を身の周りの物から選び採る眼力は、極めて機智に富み優れている。歌唱者達が、野生のススキやチカラシバクサの姿に着目している属性とは、うりずんの頃に葉を茂らせる姿の中にみる野生の植物の生命力である。その生命力がイネの良好な生育に影響を与えるという呪的な力の関係を認める自然把握と、農耕という技術と儀礼の一体化した表現が、ススキ／チカラシバクサの繁茂の慣用句を成立さ

せていると考える。イネを育てる植物をイネに寄り添わせるという、稲作の文化の根底に伝えられている思想・信仰の表現でもある。

稲作歌の生育の表現の一つであるイネの繁茂をススキ／チカラシバクサの繁茂で表す慣用句は、言霊の信仰によって叙事的な表現の様式の展開をみせる歌の中にあって、実際に農作業に向き合う人々の言葉として農耕の技術と儀礼の信仰の下に謡われる呪的な思考の混在する詞章である。以上は、イネの生育の表現の中の繁茂期のイネを表す表現についての考察の結果として、表現様式と表現の出自について特徴をまとめたものである。

③　イネの繁茂の表現の多様性

イネの繁茂とススキ／チカラシバクサの繁茂の表現の特徴を総合的にみて、歌の全体の表現様式と、イネの繁茂とススキ／チカラシバクサの繁茂の詞章の関係についていえば、歌全体を被う言霊信仰という共通性の他に、農耕の文化に広がる思想・信仰や、実際の田畑で農耕栽培に当たる農民達の実体験が歌の言葉のストックとなって生まれた表現によって稲作歌が成立していることが窺えた。本稿では、イネの繁茂とススキ／チカラシバクサの繁茂という歌の例に添って、植物が植物を守り育てるという発想の基に考察したが、農耕の技術や文化の持つ信仰や思想はもっと多様なものが複合していると考えられ、詞章の考察も多面的に行えることを示唆している。

多くの歌が文字に残されたものと異なり、祭祀や行事他の毎年くり返して行われる歌の「場」と、人の記憶と各島々の歌唱者達を主体とした口頭による伝承が表現のすべてである。その為、歌が受容した変化の過程は、歌集とは異なり留められることがない。常に、謡われる時と場で、歌唱者達の解釈を通して謡われる一篇の歌に、経過のすべてが混在して表現される。そのため、時代や環境の変化は、それぞれの小さな共同体ごとの、歌の言葉の解釈にも反映する。それが、一つの詞章の解釈にも、微妙な差異となって知らず知らずのうちに、累積していくのが口頭伝承の言葉の表現の特徴であろう。

近代以降に歌謡集が刊行されることによって、島や村ごとの小さな共同体で謡われ続けて来た一篇の歌の「今」が集められたとき、一篇だけではわからなかった長年の伝承で受け継いで来た歌の変化の紆余曲折が明らかになる。ある時点の、同時代に並存する歌の多様性として捉えることができる口頭伝承の歌の表現は興味深い。

３．イネの稔りの表現　–ジュズダマ–

イネの生育の表現で、イネの繁茂を表すために用いられたのは、ススキ、チカラシバクサだが、イネの稔りの表現に用いられたのは、ジュズダマである。ここでは、そのジュズダマを用いた表現について考察する。

（1）ジュズダマの登場する歌

はじめに、ジュズダマ[43] が謡われている八重山歌謡において、どのような背景のもとで、ジュズダマという植物が歌われているか、また、ジュズダマを含む歌謡の表現の発想を、自然・社会・歴史的環境等と照らしあわせながらジュズダマを含む詞章の表現の特徴を明らかにしていきたい。

＜表１＞に示した 12 篇は、ジュズダマが登場する呪詞及び歌をテキストから抽出したものである。

＜表１＞

	歌謡名	テキスト語形	地域名	ジャンル	頁
1	久場川村のまーゆんがなしぃの神詞（かんふちぃ）＜上の村＞ きらまい（キラ米）	やましだま	石垣島川平村	カンフチ	23
2	久場川村のまーゆんがなしぃの神詞（かんふちぃ）＜上の村＞ うしぃ、んま、まりばんじょー	しだま	石垣島川平村	カンフチ	27
3	内原村の真世（うちいばれむらのまゆん）がなしぃの神詞（かんふちぃ）〈下の村〉 きらまいしぬぐぅ（稲）	やましだま	石垣島川平村	カンフチ	31
4	内原村の真世（うちいばれむらのまゆん）がなしぃの神詞（かんふちぃ）〈下の村〉 ふし、んま、まり、ばんじょう	しだま	石垣島川平村	カンフチ	34
5	夜雨（ゆあみ）	千玉（ちだま）	石垣島大川村	ユングトゥ	125
6	たらまゆら	山しぃだま	石垣島川平村	アヨー	155
7	たらまゆらじらば	やましぃだま	石垣島川平村	ジラバ	190
8	東（あがる）かーら	山すだま	石垣島川平村	ユンタ	292
9	のーりぃゆーゆんた	やまちぃだま	石垣島石垣村	ユンタ	338
10	月出ぬ花むね	ちだま	石垣島大川村	ユンタ	344
11	ふな一節	しだま	石垣島大浜村	ユンタ	372
12	うふな星	しいし玉	黒島	ユンタ	443

テキスト語形には「し(ぃ)だま」「しぃしだま」「ち(ぃ)だま」「すだま」等の各

[43] ジュズダマは、熱帯インド原産で、イネ科のジュズダマ属ジュズダマ。インド、東南アジア、東アジアに分布している。多く川辺などに自生し、人里にも成育する。漢名で薏苡仁（ヨクイニン）として知られるハトムギは、ジュズダマの栽培種で、食用、薬用としてよく用いられている。ジュズダマもハトムギの代用でお茶や漢方として使われる。（多和田他　1985）

種の表記がみられるが、いずれも抽出した歌に使われているジュズダマの方言名[44]である。「し」「ち」「す」と 3 種の音の違いについては、地域ごとの転訛の範囲と解釈でき、それぞれの歌の内容と照らし合わせて、いずれもジュズダマを指していると判断した。また、テキストの表記には、「千玉」という漢字があてられている例がある。このような漢字表記の例についても、「ちだま」という発音に漢字が当てられたものと考えられ、これらの語もジュズダマを指していると解釈したまた、「やましだま」「やまちぃだま」「むかしぃしだま」というように、「やま（山）」、「むかしぃ（昔）」という「しだま」を修飾する接頭語が付いて複合語の語形をとるものがある。ジュズダマに「やま」の修飾語が付く語形は、石垣村の 1 篇と川平村の 5 篇である。琉球方言による植物の呼称の中には、「やま（山）」という接頭語が付くことで、異なる植物を指す場合もあるが[45]、「やましだま」「山ちぃだま」等の場合は、「やま」が付くことで異なる植物をさす事例が、他にみられない。そのため本稿では、「山しだま」「山ちぃだま」も共にジュズダマを指す語と解釈している。

「むかしぃしだま」の「むかしぃ」という修飾語は、「内原村（うちいばれむら）の真世（まゆん）がなしぃの神詞（かんふちぃ）＜下の村＞（うしぃ、んま、まりぱんじょー）」（石垣島川平村）の 1 篇だけに使われている。この「むかしぃ」という語については、後述の牧畜に関する歌とジュズダマの事例の中で記すこととする。

上記のジュズダマの登場する 12 篇の歌の内容は、農耕に関連した歌と、牧畜に関連した歌との 2 つに大別できる。 そこに謡われているジュズダマは、この植物の２通りの側面が取り上げられていることになる。以下に、ジュズダマを用いた詞章の事

---

[44] 『竹富方言辞典』によると、ジュズダマの方言語形は、竹富方言では「シンシン-ダマ」とあり、「石垣方言チィダマ。首里方言スィスィダマ」（前新　2011　p. 549）と記されている。又、『琉球列島植物方言集』によれば、ジュズダマは「奄美　シーシーダマ、宮古　スダマ」(天野 1976　p. 175)である。これらの辞典からも、本稿でとりあげた謡に使われているテキスト語形の「しだま」「ちだま」「すだま」等は何れもジュズダマの方言語形と考えられる。

[45] 琉球語による植物の呼称には、「やま（山）」の修飾語が付くと、異なる植物を指す例がある。例えば「くにぶ」と「やまくにぶ」がある。『琉球列島植物方言集』（天野 1976）によれば、「くにぶ（九年母）」は、ミカン科のシークヮーサー（ヒラミレモン）　を指し、「やまくにぶ」は、モロコシソウのことである。「九年母」は、八重山、沖縄、宮古の歌にも登場する。九年母は良い香りのする木として歌われ、その実を糸で貫き頸飾りとして、男女の情愛を交わす歌に登場する。「やまくにぶ」は、乾いた葉がスパイシーな匂いを発し、虫除けに使う植物である。「ひゃんだんだきあよう」(小浜島)に「山乙女の匂いは、山九年母のにおい」と歌われている。川平村のカンフチィの「やましだま」の「やま」という接頭語については、歌の内容からみてイネ科のジュズダマと考えられる。

例に添いながら、表現の特徴をみていきたい。

（2）農耕に関する歌とジュズダマ

① ジュズダマの登場する歌及び内容

前項の＜表１＞に示したジュズダマに関する表現を含んだ歌謡 12 篇の内、10 篇が、農耕の特に五穀の豊穣を願う意図を持つ歌謡である。10 篇は内容的には次の 2 通りに分けられる。

１つは、アワとイネの種子の由来を謡い、作物の稔りを願い、予祝する歌である。「久場川村のまーゆんがなしぃの神詞（きらまい）＜上の村＞」（石垣村川平村）、「内原村の真世がなしぃの神詞（きらまいしぬぐ）＜下の村＞」（石垣島川平村）、「たらまゆら」（石垣島川平村）、「たらまゆらじらば」（石垣島川平村）、「東かーら」（石垣島川平村）の 5 篇がある。 もう１つは、作物の稔りの様子と豊穣を祝い喜ぶ様子を謡う歌である。「夜雨」（石垣島大川村）、「のーりぃゆんた」石垣島石垣村、「月出ぬ花むね」（石垣島大川村）、「ふなー節」（石垣島大浜村）、「うふな星」（黒島）の 5 篇である。

これらの歌の内容に、ジュズダマがどのように謡われているのか、「東かーら」と「夜雨」の 2 つの事例に添ってみていきたい。

「東かーら」石垣島川平村　p. 292

（前略）

6	粟でぃすや　まじぃしくに	粟というのは真地底〈地名〉に
	ちかいしより	お招きして〈植えて〉
	ウヤキ世バナフレ（囃子）[46]	ウヤキ世バナフレ（囃子）
7	米ですや　田原しくに	米というのは田原底〈地名〉に
	うはらし	ご案内して〈蒔いて〉
8	粟ぬ穂ゆ　作りてぃ	粟の穂を作って
	拝みばどぅ	拝むと〈見ると〉
	ならひしぬ花たらし	なら石の花のように
	うがまり	拝まれる

[46] 囃子は、テキストでは「東かーら」の第一節に記されており、第 2 節以降は省略されている。引用部は第 6 節からなので、＜囃子＞は省略されているが、筆者が書き加えている。

9	米ぬ穂ゆ　作りてぃ	米の穂を作って
	拝みばどぅ	拝むと
	山すだま　実ぬんぐと	山数珠玉の実のように
	うがまり	拝まれる
	（以下略）	

この引用は「東かーら」全 14 節の歌詞のうちの第 6 節〜9 節の詞章である。紙面の関係上、前後を省略して引用しているが、歌謡全体の大意は次のようなものである。東方（他界）から「世」の船がやってくる。粟叢と米叢がいっぱいに積まれている。その粟の種子、米の種子を田畑に案内して（蒔いて）、お世話をする（育てる）と、穂の稔った様子は、粟の穂は＜なら石＞[47]のように、米の穂は山数珠玉の実のように拝察する。収穫を祝い、粟では粟酒を、米では米神酒を作って、（をなり神の）叔母達や親戚皆をお招きする、という内容である。

この歌の全体は 3 部で構成されている。引用を略した冒頭部の第 1〜5 節に歌われている粟と米の種子を積んだ船とは、豊穣は海の彼方からもたらされるとする観念、人々のニライカナイの信仰が描き出した情景である。つぎに続く引用部は中間部の第 6〜9 節で、粟や米の種子が豊穣をもたらすものとして謡われ、「東かーら」全体では、種播きから収穫までの全過程を謡っている。この中間部に、ジュズダマは稲の豊かな稔りを表現するものとして登場している。興味深いのは、粟と米を「蒔く」などの農作業の動作を表す言葉に、「うがまり」という語を使っている点である。「うがまり」は「拝まれ」で、神仏に祈る時や「見る」の謙譲語である。「拝まれ」「見る」対象は、ここでは粟や米である。粟や米にこうした謙譲語の動詞が使われていることは、八重山歌謡全体の敬語の表現の中において考察するべき問題を含んでいるが、ここでは一つの特徴として上げるに留め先に進めたい。最終部も引用を省略したが、第 10〜14 節では、神饌の御酒と神女の登場で、収穫を祝う村の祭りを簡潔にあらわして歌は終わる。この「東かーら」のテーマは、簡単に言えば、歌の中で繰り返される囃子詞「ウヤキ世バナウレ」に象徴されている。豊作の予祝を謡いあげることがこの歌謡の心意と解釈できる。「世バナウレ」については、本稿の主題ではないので、

[47]「ならいし」とは、「サンゴ石の砂利で細長く、指のような円筒形をしている石」「ナーラギイシ」「ナーライシ」「ナーラサイシ」などと同じ。（宮城　2003　p. 675）。

詳しくは波照間永吉の「「世ば稔れ」考」(波照間　2013)を参照されたい。上記の「東(あがる)かーら」に類似した歌謡には、農耕に関する 2 篇のカンフチィ（石垣島川平村）と「たらまゆら」（石垣島川平村）、「たらまゆらじらば」（石垣島川平村）がある。

次にジュズダマが登場する農耕に関連した歌の残りの 5 篇については、「夜雨」(石垣島大川村)を事例に、その歌謡の内容をみていきたい。

「夜雨(ゆあみ)」　　石垣島大川村　　p. 125

夜雨(ゆあみ)ぬ　降る年　世果報(ゆがふどうしい)年	夜雨の降る年は世果報＜豊作の＞年
麦(むんち)作り見りば　麦(むん)ぬ稔(のー)れえ　壁葺(くびふ)き	麦を作ってみたら 麦の稔りは　壁をつくり
粟(あー)作り見りば　粟ぬ稔れえ　なあらぎぃ	粟を作ってみたら 粟の稔りは　なーらぎ石のよう
稲(まい)作り見りば　稲ぬ稔(のー)れえ　千玉(ちだまなり)ぬ実	米を作ってみると 米の稔りは 数珠玉の実のよう
甘藷(うん)作り見りば　甘藷ぬ実入(みい)れぇ　牛ぬ角(ついぬ)	サツマイモを作ってみると　サツマイモの稔りは 牛の角のよう
黍(きん)作り見りば　黍ぬ稔(のー)れぇ　牛ぬ尾(ぶー)	黍を作ってみたら　黍の稔りは　牛の尾のよう
稔(のー)りんで　豊まれぇ	稔っていると　評判になり
出来(でいき)やんで　名取られえ	出来ていると　名が知られ

上記の歌謡は全篇で 8 節の歌謡である。歌の大意は、夜の雨が降る年は豊作の年、稔りの様子は、麦は（穴掘り屋の[48]）草で葺かれた壁のように、粟は「なあらぎぃ石」のように、米はジュズダマのように、サツマイモは牛の角のように、黍は牛の尾のように稔って、豊作だと評判になり、世間の名声を得る、といった内容である。

この歌も 3 部の内容で構成されている。冒頭部は「夜の雨が降る年は、豊作の年」

[48] 穴掘り屋、又は穴屋という。「沖縄において古代から按司時代（グスク時代）を経て戦前まで存続した掘っ立て小屋住居の呼称。」「壁はチニブ(山原竹(やんばる)を網代のように編んだもの)を二重にし、なかに藁(わら)または茅(かや)を詰め」る家（沖縄大百科事典刊行事務局 1983 上　p. 66）。

という短い詞章である。体言止めの形式をとる簡潔な一節は、作物の豊穣をもたらす予兆を説明している。「夜雨（ゆあみ）」という言葉自体、この事例が示すように作物の豊穣に欠かせない恵みの雨を表現する名詞である[49]。中間部にあたる 2 節目以降は、その「夜雨（ゆあみ）」の果報を受けた五穀が、十分な水を恵まれて良好な稔りを得た様子を謡っている。豊かな稔りを表す表現法は、作物それぞれの稔りの様を、身の周りにある形の似たものに置き換えて示している。この中で、稲の稔りをあらわすものが、ジュズダマである。そして、最終部の 2 節では稔りの果報を受けた人々の喜びを表している。「夜雨（ゆあみ）」の歌の内容は、豊穣をもたらす雨と、作物の良好な稔りの様子と、豊かな収穫を恵まれた村人の喜びを表す 3 部構成になっている。

事例にあげた「東（あがる）かーら」「夜雨（ゆあみ）」の 2 篇の歌の主要な心意は、五穀の豊かな稔りを得る願いにある。作物の稔りが何処から、何によってもたらされ、豊かな稔りを得た五穀の収穫物の状態をよく似た事物に言い換えて一つ一つ表すことで、予祝の意味を込めて謡いあげている。

② ジュズダマの登場する歌にみる作物の稔りの表現

本稿が注目するのは、五穀が豊かな稔りを得た状態を、ものに置き換えている表現についてである。「東（あがる）かーら」と「夜雨（ゆあみ）」の引用部でわかるように麦・粟・米・甘藷・黍・マメの作物の稔りを表現するために、それぞれの形状や質感の似たものを選び対応させている。そのなかに、ジュズダマは登場している。テキストから抽出したジュズダマの語を含む歌が、作物の稔りをどのようなものに置き換えて謡っているのかをみてゆきたい。

次頁の＜表１＞は、歌の中に登場する五穀と甘藷の稔りの様子を表す表現の組み合わせをまとめたものである。

[49]竹富島の「苗代田の願（なーひしゆだぬにが）い」には、「五日越（いちかぐし）、十日越（とうかぐし）ぬ 夜雨（ゆうあみ）ん（五日越し　十日越の　夜雨に）」（テキスト　p. 89）とある。また、村々の豊年祭や節祭りで歌われる「みるく節」の中にも、「弥勒世ヌシルシ　十日越ヌ 夜雨（豊年の世の徴として　十日越しの夜雨がふり）」と、「夜雨」と同じ意味の語は登場する。また、波照間島の「しぃちぃびぬしぃさりぐちぃ」では、「あみがふや　いしぃかまりん　とぅかまりん　たぼらり（雨の果報は　五日廻り　十日廻りにいただき）」（テキスト p. 101）と謡われるように、雨は果報と考えられている。

＜表１＞　ジュズダマを含む歌の五穀の稔りの表現

	歌謡名	麦	粟	米(稲)	黍	甘藷	豆
1	久場川村のまーゆんがなしぃの神詞 〈下の村〉 きらまい(キラ米)	いしい／かに	ならいしぬはな	やましだま	やまはかまらぶ	つぬいせら／ふういせら	やまとふうかたな
3	内原村の真世がなしいの神詞 〈下の村〉 きらまいしぬぐぅ(稲)	しちゃいふき（不詳）／くびふきー	ならいしばなー	やましぃだーま	やまはかまらーぶー	ふぅひせーらー	やまとうーたち
	夜雨(ゆあみ)	壁葺(くびふ)き	なあらぎぃ石	千玉(ちたま)ぬ実(なり)	牛ぬ角(ついぬ)	牛ぬ尾(おー)	－
6	たらまゆら	－	ならいしぬ花	山しぃだまなり	－	－	－
7	たらまゆらじらば	－	ならいしぬばな	やましぃだまなり	－	－	－
8	東(あがる)かーら	－	ならひしぬ花(ばな)	やますだまなり	－	－	－
9	のーりぃゆーゆんた	くびふか	ならぎぃいし	やまちいぃだま	うしぃぬぶー	うしぬちぃ	うしぃぬたん (牛に着いたダニ)
10	月出ぬ花むね	くびふき	なーい石	ちだまなり	牛ぬぶー	牛ぬ角	－
11	ふな一節	ざぁらざあぁら	黄金色(くがにいる)	しだましじ	牛(うし)ぬ角(ずう)	ぴいんてぃかんてぃ	－
12	うふな星	しいし玉	やらぶ種子(だに)	－	野馬尾(ぬんまぶ)	牝牛角(みうしぬ)	－

上記の＜表１＞にみる作物の稔りを表す主要な表現は次のとおりである。

アワ　→　なら石の花

ムギ　→　壁葺き

コメ　→　ジュズダマの実

キビ　→　ウシの尾

イモ　→　うしの角

マメ　→　大和の刀の鞘

農耕に関する歌の中では、作物の稔りを、具体的なもので表す慣用句的な表現が伝承されている。各作物に対比されているものは、いずれも生活の身近に実在するものである。

粟に対比された「なら石」は、枝サンゴが折れて打ち上げられた細長い小石状のものである。その表面には、海中でサンゴが生きていた時に褐虫藻が棲んでいたポリプの小さな穴が無数開いていて、その形状がいかにも稔ったアワの穂を連想させる。

麦の穂は、草壁と謡われている。麦が黄金色に稔った収穫期には、しっかり芒をつきだして立っている。結実の重みで穂を垂れる稲穂とは違う光景に、古来の琉球家屋の草で葺き整えられた壁を連想している。

キビがウシの尾、イモはウシの角と、作物が稔った時の形状の類似したもので捉えている。豆は、豆粒の入った鞘の全体の形状に注目して表現している。そして、コメがジュズダマの実に見立てられている。

これらの表現の中で、ムギと壁葺き、粟となら石の組み合わせなどは、見たことが

ない者にとってはわかりにくい。しかし、いずれのものとの組み合わせも、かつての生活の周辺で見慣れた物から選ばれている。八重山に暮らす人々にとっては改めて説明を加える必要もなく、直ちに共感を持って理解できる表現であったにちがいない。

「夜雨（ゆあみ）」にみる五穀の稔りの表現は、日常の暮らしの側にあるものへの行き届いた観察と想像力によって引き出された発想をもとに生み出され、成立したものである。そして、身近にあるものに置き換えられる故に、生活の環境が詞章に取り込まれ、自ずと土地固有の表現を創出している。これはこの歌謡群の五穀の稔りの表現の特徴といえるものである。

③　イネの稔りとジュズダマの実

五穀と芋の各作物の稔りを表現するために用いられるものは、＜表 1＞に添付したとおり、身近に観察でき見かけの形状の類似していることが、選択の理由になっている。それを見ると、コメ以外の作物の稔りの表現も、川平村ではほぼ慣用句化した言葉が伝承されているが、他の村では擬態語の「ぴんてぃかんてぃ」や擬音語の「ざあらざあら」が独自に用いられている場合があり、一つの作物の稔りが地域によって異なる表現がされている。それに比べると、イネの稔りをあらわすジュズダマの関係は固定的である。



米とジュズダマ

ジュズダマは、現在も琉球諸島各所に自生している植物であり、現在の都市化した那覇でも住宅街の一角に生育しているのが確認できる。歌謡の舞台となっている八重山にもジュズダマは、多く自生していたと思われる。写真で実際の米粒とジュズダマの実の対比をみると、ジュズダマの実の形状は、米粒よりかなり大きく艶やかな実であることがわかる。どんなに生育のよいイネでも、ジュズダマの実ほどに大きくなることは一般的にはおこらない。しかし、テキストの歌の世界では、よく稔った米粒に大きく艶やかなジュズダマの実を対比させていたわけである。それは、イネの稔りにおいて、少しでも実入りの大きい米粒の収穫を希求する心情が、ジュズダマの実を対象に選んだ理由と考えられるだろう。詞章の中のジュズダマの大きく艶やかな実は、単なる別の植物で言い表したというより、歌唱者達の誰もが抱く稔りの願望を象徴する具体像である。

④　八重山以外の地域におけるジュズダマに関する表現の比較

ここで、八重山以外の琉球諸島のジュズダマの登場する歌を参考までにみておきたい。充実した作物の稔りをジュズダマという具象を素材にして謡っているのは、八重山歌謡だけではなく、宮古や沖縄、奄美の歌も同様である。

宮古歌謡では、粟の稔りの表現にジュズダマが用いられ登場する[50]。八重山がイネの稔りの表現にジュズダマを用いることと異って見えるが、宮古の基本的な栽培穀物が米ではなく、粟であったことによると思われ、宮古の人々にとって身近で主要穀物の稔りがジュズダマによって表現されていることは八重山と共通すると理解できる。ジュズダマに関連する宮古歌謡の表現にみる特徴は、ジュズダマとヤラブ（テリハボク）の実が対語をつくっていることである。

「 アーピツアアゴ　＜粟摺り歌＞」　伊良部島　　（宮古篇）　p. 336

4　やらうだき　なおらばよ　　ヤラブ木の玉のように実ったならば
　すだまだき　すだらば　　数珠玉のように育ったならば

引用の冒頭の詞章にある「やらう（テリハボク）」は、「すだま（ジュズダマ）」よりさらに大粒な木の実をたくさんつける。宮古歌謡において、ヤラブの種子の登場には、あり得ないこととはいえ大きな実入りを願ってやまない歌唱者たちの心情を、より明確に捉えることができる。

また、奄美でも、同様に、稲の稔りをジュズダマの実を表現に用いて謡う事例がある。奄美には、八月踊り歌の中に、「こぅとしぃにーがなしや　ししんだまぬなりしゅんさ（今年の稲賀那志は　数珠玉＜はとむぎ＞のなりしている）」（田畑他　1979 p. 349 ）という１節がある。さらに、奄美の歌の特徴は、稲を「稲賀那志」と敬称で呼んでいる。その呼び名の背景には稲霊の信仰が窺える。八重山歌謡の「東（あがる）かーら」では、粟や稲の種子に対して謙譲語の表現が使われていたことと類似する。

---

[50] テキストの宮古篇(外間他　1978)に収載されている、稔りの表現にジュズダマが用いられている歌の事例は以下の通りである。「世乞いの大皿パヤス」、「富貴中皿」（池間島）、「雨乞いのアーグ」（池間島）、「直る世（のーいるゆー）の雨加那志」（池間島）、「大世榮え（うぷゆーばい）」、「アーピツアアゴ　粟摺り歌」（伊良部島）、「イキャー家（や）のチョラホイ」（狩俣）、「十五夜のアーグ」（狩俣）、「今蒔く種（なまままきたに）」（池間島）、「アマゴイコイチャ」（伊良部島）。

沖縄島については、琉歌に「今年作る米やすす玉のなりさめ　あぼし枕しよていらなど待ちよる(今年作る米は数珠玉のように(たくさん)なるであろう。畦を枕にするほどに実って、稲刈りの鎌を待っている。)」(作田留舞節)(外間他　1980 b　p. 11)と謡う典型的な稲の稔りの表現を含んだ歌がある。しかし、同じようにイネの稔りにジュズダマを用いて表現していても、八重山･宮古･奄美の歌謡の歌唱者達の体験的な言葉の世界から発する切実な言葉と、琉歌形式に整えられた慣用句的な言葉の世界で発する沖縄島の農耕の歌の言葉とでは、言葉の出自が異なり、同質なものと考えるかどうかは表現の問題としては考えなければならないところである。

以上から、個々の細かな差異の検討は必要だが、海を隔てた宮古、八重山、沖縄、奄美において、イネ（アワ）の稔りを、ジュズダマの実によって表現するという発想は共通していることが確認できる。

⑤　まとめ

八重山歌謡においてジュズダマの登場する歌は、農耕に関する願いや祝いの歌である。この歌謡群の心意には、言霊の信仰の下に五穀の豊穣の予祝の意が込められている。

これらの歌において注目する表現の特徴は、作物が豊かに稔った様子を、具体的なものに置き換えて表現していることである。五穀や芋は、それぞれの作物の稔りの様の特徴を捉え、類似したものに置き換えられていた。その中で稲の稔りを表すのはジュズダマであり、「稲の稔りは、ジュズダマの実のよう」という表現が慣用句となっている。少しでもたくさんの収穫を望む人々の願いを受けて、固く、大きく、艶やかなジュズダマの実であれ、という思いで歌の詞章が成立したものと考えられる。

また、作物の稔った様子を伝える表現には共通した特徴がある。それは、島の人達の身近にあるものを用いている点である。例えば、稔った粟の穂の様子を、サンゴの小石の「ならいし」を用いる例などは、亜熱帯のサンゴの海を有する島の環境の中に暮らしてこそ生まれる表現である。粟の穂をサンゴの小石が表現する関係は、自然環境と表現の関係の地域性を示唆している。また、ジュズダマの登場する歌謡群は身近にある見慣れたものを表現の素材に選ぶという特徴がある。そのように、暮らしの環境に歌の発想や言葉の基盤を置いているため、おのずと歌の表現には、島の固有性が表れる。

事例には、イネやアワの播種に際して丁寧語を使う詞章や、「稲がなし」という敬

称が使われたものがあった。後者は奄美の歌謡に使われていた敬称である。奄美には、ショッチガマにみられる様に「稲霊」の観念が文化の背景にある。農耕、稲作に関する多くの歌の機能は、予祝性を指摘されている。予祝性は、発した言葉通りに物事が実現するという言霊の信仰を背景にしており、予祝を前提に謡われている歌の詞章に含まれるイネとジュズダマの関係にも、単に形状や状態等の目に見える形を捉えるだけでなく、植物間の呪的な交感の関係を表現している事を考慮する必要がある。イネとジュズダマを結びつける発想についても、現代の語感からの修辞法としての比喩という概念におさまらない、前項で生産叙事歌に登場する植物のイネとススキ／チカラシバクサ等、他の植物の繁茂の表現の関係と同様の指摘が可能である。

（3）牧畜に関する歌謡とジュズダマ

①　ジュズダマの登場する歌謡及び内容

川平村の＜上の村＞＜下の村＞の両地域の「神詞（かんふちぃ）」は、節祭に訪れる＜神＞が、村の各家々を巡り、村人に「果報」を約束する呪詞である。唱え言に挙げられる「果報」は、年越しの夜に訪れた神の来歴に始まり、＜神＞が「世」(豊穣)を蒔き広げて村の田畑を寿ぎ、五穀等の作物の豊穣を約束し、村人の健康・長寿、子孫繁栄、貢納布の出来、そして、牧畜の繁昌等の予祝を唱えているものである。

その牧畜に関連する唱えの中にジュズダマが登場する。「久場川村のまーゆんがなしぃの神詞（かんふちぃ）＜上の村＞　うしぃ、んま、まりぱんじょー」、「内原村（うちぃばれむら）の真世（まゆん）がなしぃの神詞（かんふちぃ）＜下の村＞　ふし、んま、まりぱんじょー」の 2 篇のカンフチィである。以下、2 篇のカンフチィからジュズダマに関する表現を含む詞章部分を抜粋した。

「久場川村のまーゆんがなしぃの神詞（かんふちぃ）＜上の村＞」　石垣島川平村

うしぃ、んま、まりぱんじょー（牛、馬、生まれ繁昌）　p. 27

（前略）

いばみちぃに、おーば、しだまぬ、ゆんなーゆる、
狭い道に追ったなら、数珠玉のように揺れに揺れ

ふうぬーんで、おーばしん、まん、ういかない、
大野に出て、追ったなら、千頭万頭も追い囲むことの

すぬかふーで、かんかざるびんとぉーどう。
果報だと、こう唱えます、尊

（以下略）

「内原村（うちぃばれむら）の真世（まゆん）がなしぃの神詞（かんふちぃ）＜下の村＞　」　石垣島川平村

ふし、んま、まり、ぱんじょー（牛、馬、生まれ繁昌）　p. 34

（前略）

ふぅぬー、ぴすぬーに、んでぃおーば、
しんからーぬーでぃ、まんからーぬ
でぃ、ういかない、まーさり、おり、
たびみしょうり、とぅーりぃー、いば
みちぃに、んでおーば、むかしぃ、
しだまぬ、ゆんなーゆり、ういかない、
まーさりぃ、おーりぃ、たぼーらりぬ、
かふぅーでぃどぅ、まーゆん、がなしぃ、
てぃどぅ、しぃさーりー、とうーどぅー、
しいさりい。

大野に、広野に出て追ったなら
千頭万頭も、追い囲み取りなさって
狭い道に出て追ったなら、昔の数珠玉の
ように、揺れに揺れ、追い囲み取りなさる
果報だと、真世加那志だと申します、
尊、申します

上記の唱えの内容は、どちらもほぼ同じである。紙面の関係からここには挙げなかったが、歌全体の意図は牧場の家畜の繁昌を予祝することにある。「繁昌」は、たくさんのウシ・ウマが追われて寄り集まって牧場を移動する情景として唱えに表現されている。それが上記の引用部で、内容は、牧場に散在しているウシ・ウマを追い集め、千頭や万頭もの（たくさんの）ウシ・ウマが追われて狭い道で列をなした様子は、まるで貫連ねたジュズダマがゆらゆら揺れているようだ、と唱えているものである。並んだジュズダマの実が連なり揺れている様子というのは、野に生育している状態のジュズダマの様子というより、ジュズダマをビーズのように糸で貫いてつくる頸飾りが揺れている様子と解釈できる。

②　ジュズダマの登場する歌にみるウシ・ウマの繁昌の表現

この詞章の展開で興味深いのは、家畜の繁殖を一列に並んで移動する情景に象徴させていることと、その並んだ家畜の群れをジュズダマの頸飾りにみたてた発想である。

前者については、農耕に関する唱えで、麦・粟・米・黍・芋・豆がそれぞれ作物ごとに種播きから収穫までの経過を追って唱えられているのと比べると、牧畜に関する唱えでは、家畜の成育を叙事的に表すこともなく、ウシ・ウマが集められ移動する情景のみが唱えられている。言い換えれば、ウシ・ウマが列をなして動く場面が、家畜の繁昌を象徴する予祝的な寿ぎの意味を表し、牧畜に関する全労働のなかで重要な意味を持つ場面であると解釈できる。

では、牧場のウシ・ウマが集められて列をなすと言う場面について考えてみたい。八重山におけるウシ・ウマの食の事情については、古くは、『朝鮮王朝実録』の朝鮮漂流民の報告に、八重山諸島の島々では牛を家畜として飼い、屠殺して食べていたという見聞が残されている（池谷他 2005　p.231）。「慶来慶田城由来記」には、傍若無人を理由に慶来慶田城が討ち果たした平久保按司は、「牛馬は三、四百頭飼っていた」という記述がみられる（石垣市総務部市史編集室 1991　p.2）。これらの史料は何れも 15 世紀代の八重山の記録であり、この頃からすでに牛馬が家畜として飼育されていたことを示唆している。また、首里王府時代には、王府の牧畜の管理等に関する政策のもとに出された布達が、『参遣状』や『八重山島規模帳』・『八重山島諸村公事帳』などに残されている。布達の例には、ウシ・ウマは、農耕の効率を上げる家畜である、というほかに、「献上馬」や「牛皮」などの貢納物として、王府の役人に管理される対象であったこと、村人の生活に根付いたウシ・ウマの取り扱い方に対して、禁止・注意事項が通達されていた等の事例が窺える（石垣市総務部市史編集室 1994　pp.76-77）。そして、牧畜労働は、「牧人衆」と呼ばれる組合員によって共同で管理する組織的な労働であった(喜舎場　1970a　p.488)。これらのことから牧畜も農耕同様、村人にとって伝統ある労働の一つであったことがわかる。先に、ウシ・ウマが一列に列をなす場面が、家畜の繁昌を象徴する予祝的な寿ぎに値する場面であると推察したが、牧場の家畜が集められる場として、「牧祝（まきよい）」の風習を重ねて考えてみたい。

『八重山生活誌』(宮城　1985)には、「牧祝（まきよい）」についての記述がある。宮城によると、「牧祝（まきよい）」は「牧人衆（まきにんじゅ）」と呼ばれる牧畜の仕事に携わる組合員が、自分の家畜の繁殖を確認し、あらたに生まれた仔牛に「耳判（みんばん）」を付けたあと、ウシ･ウマの繁殖と発育を祈願し、祝宴を開く風習と伝えられている（前掲書　p.217 ）[51]。先に引用した 2 篇のカンフチィの唱えの詞章が描き出している光景は、ウシ・ウマが「狭い道にでたなら」とあるだけで、広い牧場から細い道を牛馬の群れが移動する理由についてのことわりはない。しかし、放牧している牛馬が集められる場面を「牧祝（まきよい）」の情景に重ねるとわかりやすい。「牧祝（まきよい）」は牧場の仕事の中でのハレの場である。牧畜に関するカンフチィは、＜神＞が年の暮れに村の牧畜の繁昌を予祝する唱

[51]「牧祝い」についての解説は　喜舎場による「牧祝ヌアヨウ」（石垣島宮良村）の(注)（喜舎場　1970a p.487)にも、詳しい。

えだが、そこには健康な家畜の群れが「千頭も万頭も」と願う牧畜の仕事を担う「牧人衆（まきにんじゅ）」の視線と共感が重なる。

次に、もう一つの興味深い点は、家畜の群れの並びをジュズダマの頸飾りにみたてる発想についてである。テキストには「牧祝（まきよ）いぬあよう」（石垣島宮良村）というウシの繁殖を祝う一篇のアヨーが収載されている。ここで、カンフチィと「牧祝（まきよ）いぬあよう」とを比べてみたい。

「牧祝（まきよ）いぬあよう」　石垣島宮良村　　p. 164

1	今日ぬ日（ぴ）	今日（きょう）の日
	黄金日ぬ御祝（うゆはい）	黄金日のお祝い
2	赤まれー	赤生（う）まれ牛
	綾まれーぬ御祝	綾生まれ牛のお祝い
3	生（ま）り繁昌（ばんじょう）	生まれ繁昌
	なしぃ繁昌ぬ　御祝	生み繁昌のお祝
4	中盛（なかむ）らしぃ	中盛らし
	ぱだ盛らしぬ　御祝	端を盛らしてのお祝い
5	んまんまとぅ	うまうまと
	かばかばとぅ　うやいす	香ばし香ばといただく
	ウヤキヌ世稔（ユナオ）レ　カバイヌ世稔レ	富裕の世稔れ香ばしの世稔れ
	拍子（ヒヤシ）ヨ拍子（ヒヤシ）ヨ　世バ稔レ＜囃子＞	拍子せよ拍子せよ世は稔れ

「牧祝（まきよ）いぬあよう」は5節からなり、第2節と第3節以外は慣用句的な詞章が並ぶ。第2節と第3節で、「綾」という美称的接頭語がみられるほかは、ごく普通の対語の言葉で繁盛を願う詞章が連なっている。「牧祝（まきよ）いぬあよう」の詞章とカンフチィの中の詞章とを比べると、家畜の繁昌を唱える願いごとの言葉として、並んで移動するウシ・ウマの列に、ジュズダマの頸飾りを連想するカンフチィの詞章の発想は、異質の感がある。こうした表現は、川平村のカンフチィだけにみる表現である。

③　ジュズダマの頸飾りの習俗

カンフチィでは、ジュズダマは頸飾り（の材料）として登場している。ウシ・ウマの列をジュズダマの頸飾りとみたてた発想は、この歌の固有性と言える。そこで、ウ

シ・ウマの列とジュズダマの頸飾りを繋ぐ発想が生まれた背景と考えられる八重山の習俗について簡単に触れてみたい。

八重山歌謡に見る頸飾りのモチーフは、ジュズダマだけではない。歌には九年母等他の植物でつくる頸飾りもしばしば採り上げられている。また、『八重山生活誌』（宮城　1985）には、実際に装飾品として作られたジュズダマの頸飾り他、「バラビ玉（コシダの葉柄）、ビギリャー玉（イシミカワの実）、アカ玉（トウアズキの実）、ユノーン玉（小さいフトコロ貝）」等の頸飾りの写真が掲載されている（前掲書 p. 115）。

また、八重山の頸飾りの習俗は、そうした島にある植物素材のものだけではない事は、歌を通しても知ることができる。黒島に伝わる「南風保多ふんたか」（テキスト p. 147 ）には、勾玉のことが歌われている。この歌は黒島のフンタカという人物が、宮古島まで勾玉を買いに出かけ島に戻るまでの顛末を、ゆんぐとぅらしい語り口調で面白おかしく物語る。

また、『八重山芸能文化論』で、八重山の婦人達の「玉佩き」の習俗について装飾品と呪性の視点から論じている森田は、植物素材の頸飾りの材料としてジュズダマ（チィ玉）が用いられたことを紹介している（森田　1999　p. 139）。

そして八重山における婦人達の玉佩きの流行についても述べている。森田はそうした流行の風潮に対して出されたものと思われる 1693 年の『参遣状』にある勾玉の買入れ禁止について記されている王府と八重山の往復文書を取り上げている。八重山の人々の玉佩きの流行については、伊波普猷、宮良當壮、仲原善忠等の研究者によっても論じられており[52]、それらの論文の中に同様の『参遣状』の史料が取り上げられている[53]。これらのことからも、かつて八重山の人々の頸飾りの材料は、地元にある自

---

[52]玉佩き流行の記述は以下にみられる。「琉球人の祖先について」（伊波 2000　pp. 44-45）。「八重山諸島物語」宮良當壮 1983　p. 199。『仲原善忠全集　第二巻』（仲原 1977 p. 357）

[53]口上之覚
当島往古より女上下至迄かはら玉はき申候然処至近年大和人宮古人右かはら玉過分持渡
弐拾五ツゝに二・三石にて買取申二付石物費罷成其上不考にて掛に請取代米払之時分差迫迷惑仕方も有之候右通にては永々相保申間敷与奉存候一切御法度被仰付可被下候以上
　　酉五月廿五日

頭	二人
首里大屋子	三人
与人	拾人
目差	拾四人

（以下略）　（森田 2000 p. 141）

然素材の物から、高価な対価を支払って他所から買い求める物まで、多種多様であったことがわかる。

先学の研究から見ても、玉を佩く習俗は婦人の装飾品から、儀礼における呪物まで、八重山の生活文化に広く根差していたと言える。そして、身近に自生する植物であるジュズダマをビーズにしてつくる頸飾りは、八重山の頸飾り文化の中で馴染みのある物だったと思われる。男性的な牧畜労働に関する歌の中に、一見異質な感じを受けるジュズダマの頸飾りの詞章が生まれたのは、こうした見慣れた習俗の背景があって、走るウシ･ウマの動作に頸飾りの揺れる様子が連想され、表現に用いられたものと考えられる。

④　ウシ・ウマと貝とジュズダマ

ウシ・ウマの列とジュズダマの頸飾りが取り上げられて詞章が成立する理由を考えるにあたり、首飾りの習俗と、ウシ・ウマの列と首飾りの揺れる「動き」の類似に注目して考察してきたが、もう一つ違う別の視点が残されている。両者の揺れる様の動向に注目したのならば、勾玉でも、九年母でも、そのほか八重山の植物素材の頸飾りを取り上げてもよかったはずである。また、ただ「頸飾りのように」でも意味は同じである。しかし、八重山の習俗にある多様な頸飾りの素材の中から、あえてジュズダマの首飾りが選ばれた理由についてどう考えればよいのだろうか。

カンフチィの詞章のウシ・ウマの列とジュズダマの頸飾りの喩えについて、柳田国男が「人とズズダマ」(柳田　1978)のなかで解釈を試みている。柳田は本稿の事例でとりあげた川平村〈下の村〉のカンフチの詞章にある「むかしぃ　しだまぬ　ゆんなーゆり」（昔の数珠玉の様に揺れに揺れ）という唱えの言葉に触れている。「むかしぃ」という語に注目した柳田は、川平村の唱えにある「むかしぃ　しだま」は、いわゆる植物のジュズダマにひもを通したものとは別に、小さな貝でつくる頸飾りをさしていたのではないか、と指摘している。さらに、その小さな貝は、与那国や、新城島、鳩間島等に生息しており、ウシの鳴き声が貝の命名に使われるほど、背の丸い形状やまだらの彩りがウシに似ているものだったため、ウシ･ウマの行列をそのウシを思わせる貝で作った頸飾りに喩えたと、柳田の想定を述べている（前掲書　p. 274）。それが「むかしぃ　しだま」という詞章にこだわった柳田が考えた解釈である。魅力的な指摘だが、「むかしぃ　しだま」の詞章への柳田の興味は、「人とズズダマ」の論文の前に出された「宝貝のこと」（柳田　1978）を念頭に、東アジアや東南アジア

の宝貝の交易圏や交易の興亡のこと、さらには「海上の道」の構想の一環の中でのカンフチィの詞章のジュズダマについての言及であったと思われる。

柳田の「宝貝のこと」に呼応するように、タカラガイ科の貝の名付けに家畜を連想する発想について言及した自然人類学の分野における研究者の報告がある。松井によると、タカラガイ科の貝を奄美や沖縄で、動物に、特に家畜（ウシ、ウマ、ブタ）に見立てる発想があることが、方言名の付け方などから説明されている(松井　1983 pp. 116-117)[54]。それによると、琉球諸島一般にタカラガイ科の貝は「シビ」、「スピ」と総称されるのだが、与論島では「シビ」[55]の大きな物を「ウマシビ」と呼び、沖縄本島では「シビ」系統の名が失われていることが多く、「ウシ・モーモー」と呼ばれ、奄美群島の与路(よろ)島で、ハチジョウダカラを「ウシ」と呼ぶ事例が上げられている。八重山については、『竹富方言辞典』に、タカラガイ・子安貝の方名を「ウシ・モーモー・ミナー」と示されており、貝をウシに見立てた遊びの解説も記されている（前新　2011 p. 226 ）。実際に「子供の頃に、タカラガイ科の貝を動物に見立てて遊んだことがある」と言う、石垣育ちの人の話や、名護で育ったという女性からも、同じような話しをしていただいた。そうした話も参考にすると、特定の貝を動物のウシ・ウマに見立てる発想は、八重山だけではなく琉球諸島内にみうけられるといえる。

頸飾りの素材を巡る植物のジュズダマとウシ・ウマの関係については、柳田の「むかし　しだま」の解釈は興味深い。古くは、頸飾り他の装飾品の素材には、島の海に豊かに在ったウシ・ウマによく似た美しいタカラガイが使われていた。古琉球時代の南蛮貿易等に絡んで、かつて中国で通貨として貴重であったタカラガイを巡る様々な歴史的な状況を背景にして、タカラガイによく似た植物のジュズダマが頸飾りに用いられるに至ったと考えられている。そして、かつて頸飾りに用いた貝に「ウシ・ウマ」に見立てられるものがあり、その習俗を歌の表現の中に残しているという訳である。口伝えの歌の表現にみる「むかし」の一語から、ジュズダマの頸飾りと家畜のウシ･ウマの関係について、背景に古琉球時代からのタカラガイの利用の興亡の歴史と習俗を絡めて見ることで展開した歌の解釈は、一つの仮説として興味深い。

けれども、そうした広大な歴史的背景との関わりとは別に、ウシ・ウマに見立てら

---

[54]「子安貝の琉球語を中心として-海巴と鳥セ必孫-」（伊波 1935）では、タカラガイについて、特に、言語学の面から詳しく展開している。

[55]「シビは巻き貝の総称。ウマシビ。クルシビ。キンシビ。シューシビなど」（菊千代他　2005）

れるタカラガイとよく似たジュズダマ自体が、直接、ウシ・ウマにみたてられることについての説明をするという角度からも、もう少し調べる必要を感じる。歌の言葉として、数ある植物素材の中からジュズダマを素材とする頸飾りが選ばれたのかという側面から考えれば、ジュズダマの実自体、形状や色艶の美しさ、糸を通すことができて使いやすい等の身近さがある。そして、八重山でのジュズダマの食用の利用こそ明確に示す資料に欠けるにせよ、コメの理想的な稔りをジュズダマによって表現する農耕儀礼の歌謡での用いられ方も鑑みれば、ジュズダマ自体にも、「むかし　しだま」という詞章に相応するような習俗が在るのではないかと考える。ウシ・ウマの列とジュズダマの頸飾りの詞章の出自に関しては、まだ検討の余地が残されている。

⑤　まとめ

事例に挙げた二篇の歌の牧畜に関するカンフチィが意図するところは同じで、牧場の牛馬の繁殖を予祝することにある。唱えは、牛馬の繁殖の象徴的な幻視として、たくさんのウシ・ウマが列をなす情景を、ジュズダマの頸飾りが揺れている具象で表現している。

この表現の成立には、幾つかの要素が混在している。１つめの要素としては、牧畜に関する唱えと頸飾りという一見無縁に見える組み合わせについて考察した。八重山の習俗に照らし合わせてみると、様々な素材の頸飾りの存在は、特に珍しいものではないことが先行研究で明らかにされており、身近な習俗から発想したものとして理解できる。生活の身近にある見慣れたものに置き換えて表現する方法は、農耕に関連する歌で、作物の稔りを身近にあるものを素材に用いて表現する方法等とも共通する。２つめの成立の要素として、表現として、頸飾りを具象とする選択に当たっては、移動する牛馬の列の動きを、頸飾りが揺れる動きにみたてたことである。ものの動きに注目し、ウシ･ウマの列と頸飾りは、その動きの類似性によって関係が成立していることで頷ける。特にウシ・ウマの列が俯瞰的に表現されている点も興味深い。3 つめの成立の要素は、ウシ・ウマをジュズダマに見立てる発想の出処についてである。詞章にみる植物のウシ･ウマとジュズダマを結ぶ発想は、川平村のカンフチだけにみる表現である。「むかし　しだま」という一語の中に、近隣中国や南蛮貿易の歴史と関係するタカラガイの歴史の興亡の背景をみて、ウシ･ウマの列とジュズダマの頸飾りの関係について、一つの解釈の仮説として、興味深い柳田の解釈を取り上げた。けれども、ジュズダマ自体も、タカラガイと同様に広くアジアの暮らしに関係を持つ植物

である。従って、ジュズダマとウシ･ウマを結ぶ発想については、直接、ジュズダマそのものの習俗・呪術性等との関わりについても、もう少し広く考察を必要とする課題と考える。

（４）　ジュズダマの登場する歌の表現の特徴

この項で考察してきたイネの稔り表現に用いられるジュズダマと、同時に牛馬の繁昌という唱えの表現にも用いられたジュズダマについて、総合的にみる表現の特徴をまとめてみたい。

①　ジュズダマの登場する歌にみる表現の特徴

八重山歌謡の世界には、二つのジュズダマの姿が謡われている。一つは、ジュズダマの実という植物の種子の生態的な側面であり、もう一つは、頸飾りを作るビーズの素材としての側面である。

歌の中で種子として認識されたジュズダマは、イネの稔りの理想形態と重ねられて、良好なイネの成育とたくさんの収穫を願う気持ちから、「ジュズダマの実」という表現が生まれたものである。この具象表現の持つ機能は、言葉で説明すれば「大きくて艶やかで固い実をたくさん結ぶ」と表現することになるところを、長い抽象的な形容詞を連ねることなく「ジュズダマの実」という見慣れた植物の名前で、歌の心意を包括しているところに特徴がある。そして、そのように心意を植物の種子の名前にゆだねることが出来たのは、身近に自生している見慣れたジュズダマだからこそ、簡潔な表現で歌唱者達の共感を生むことができたのである。農耕に関する歌に登場する五穀等(麦・粟・稲・黍・甘藷・豆)も、それぞれの稔りの様子を、具体的なものに置き換える表現方法をとっているが、これらも稲の稔りを表現するジュズダマと同様な発想と考えられる。

牧畜における牛馬の繁殖に関する唱えで、ウシ・ウマが列をなしている姿を、ジュズダマの頸飾りの揺れ動く様で謡うのも、具体的なものに置き換える表現方法として共通性がある。あえて、種子としてのジュズダマとビーズとしてのジュズダマの表現の認識の差を言えば、前者が種子そのもので説明するのに対して、後者は物そのものではなく、ものの動きの状態で説明しているところであろう。ジュズダマの頸飾りという、 ウシ･ウマとはまったく異なるものを用いて、たくさんの家畜が列をなし動いているイメージを表している興味深い表現である。その表現の成立には八重山の習俗

や、貝の交易等ほか歴史的な背景なども想定されるが、課題として残される。

ジュズダマは、農耕と牧畜という異なる内容を唱える 2 篇に登場している。けれども、作物の豊穣と家畜の繁昌の願いは、歌の心意から言えば、より豊かな収穫や繁殖を願うということで同じである。ジュズダマが登場する歌の 12 篇を通じて、豊かな収穫や繁殖の概念を表現するために、自然の植物の名の具象によって、象徴的な表現をとっている。これらのことから鑑みて、ジュズダマは、八重山歌謡の世界では、豊穣のイメージを表現するにふさわしい植物と意識されていたといえよう。

② 琉球歌謡のイネの稔りの表現

イネの稔りの表現についてジュズダマという植物に限定して考察をしたので、次に、琉球歌謡の中でジュズダマ以外を用いたイネの稔りの表現も含め、イネの稔りの表現を全体的に見てゆきたい。それによって、イネの稔りの表現におけるジュズダマの表現の特徴をより明確にできると考える。

八重山の島々に伝承される「稲が種子あよー」歌謡群は、八重山のイネと稲作について叙事的に謡った歌である。次の引用は、その中の黒島の「種子取りあゆう」の一部である。

「種子取りあゆう」（黒島）　　p. 178

（前略）

21	石(いし)や実(みい)り　シタリヨ	石の実入りシタリヨ
	金(かに)や実(みい)り　たぼらば	鉄(かね)の実入りをくださったなら
22	北の風(にしぬはじ)　シタリヨ	北風にシタリヨ
	なりよらば　南畔枕(はいあざまくら)し	なりなさったなら南畔を枕にし
23	南の風(はいぬはじ)　シタリヨ	南の風にシタリヨ
	なりよらば　北畔枕(にしあざまくら)し	なりなさったなら北畔を枕にして

（以下略）

ここに引用した 3 節は、全篇で 25 節の詞章の内のイネの稔りを表現した第 21～23 節の詞章である。この詞章の内容は、石や鉄(かね)のように固く重くよく稔った穂が、北の風が吹くと南の畔を枕のようにしてもたれかかり、南から風が吹くと北の畔を枕のようにしてもたれかかる様を謡っている。充分な稔りを得て頭を垂れた穂が、風に吹か

れて畔に寄りかかるようにしている田の景観を幻視する描写である。

この詞章には、イネ（黒島の場合はアワ）の稔りを表す2種類の表現が含まれている。その2種類とは、穂の実入りについて「石(いし)や実(みい)り」／「金(かに)や実(みい)り」という表現と、穂の稔りの状態を「南畔枕(はいあざまくら)し」／「北畔枕(にしあざまくら)し」という幻視の表現である。どちらもが、八重山歌謡の稲の収穫の豊穣を表わす慣用句となっている。

しかし、これらの表現は八重山歌謡の固有の表現でないことが、先行研究では明らかにされている。波照間永吉は「『おもろさうし』の比喩表現」（波照間　2007）の中で「石(いし)の実(み)・金(かね)の実(み)」を名詞句の比喩表現として取り上げて次の様に述べている。「稲などの穀物の実りが理想的である事を表現して「石(いし)の実(み)」・「金(かね)の実(み)」という。（中略）石や金の属性に着目して、その美なる属性が眼前の対象にも宿ることを願ったものである。」（前掲書　p. 227）として、「南島の呪的歌謡の根幹をなす比喩」（前掲書　p. 227）と評している。

また、「石の実・金の実」と「畔を枕にして」という表現については、小野重朗も「畔枕考」（小野　1995　pp. 203-219）で論述している。小野は、「畔枕」については、琉歌、沖縄本島・奄美・鹿児島・本土の歌謡の中から、「畔枕」または「畔を枕にし」ということばを含んだいくつかの事例を取り上げて、「畔枕」という表現の発生と変遷及び南島歌謡への伝播について、日本本土と琉球の両地域にまたがって論じている。その結果として、「南島の古歌謡で稲の稔りを表わすには、「石の実・金の実」という表現と「畔枕」という表現と二つの系統」を指摘している。（前掲書　p. 211 ）。「石の実・金の実」という表現と「畔枕」という表現と二つの系統があることは、先に取り上げた八重山歌謡の「種子取りあゆう」（黒島）をみても小野の指摘のとおりである。

本稿では、このイネの稔りの二系統の表現に加え、八重山歌謡の事例には、イネの穂の稔りをジュズダマの実と表現するもう一つのイネの稔りの表現があることを示したものである。従って、イネの稔りの表現には「石の実･金の実」・「畔を枕にして」、そして「ジュズダマの実」という三系統の表現があるということになる。

以下は、歌にみる稲穂の稔りの表現について、琉球諸島全体を視野に入れて比較し、まとめたものである。「石の実・金の実」という表現は、「石」や「金」は、固く重く実入りした穂の質感を示し、イネの充実した稔りの願望を表している言葉である。

同じ表現は、沖縄島の歌謡[56]にも見ることができる。「銀の実・黄金の実」という言葉も同様な発想に、さらに呪的美称を強調した同じ系統の語と考えられる。また、奄美の「米ぬナガネ」は、「おまりぶ　とぅらし　いしぎゃみ　いれぃてぃ(生まれ果報をとらせて〈よく実らせて〉石の実〈重く充実した実〉を入れて)」（田畑他 1979　p. 193）と謡い、稲の稔りを表す語として、「石の実･金の実」に類似した発想の表現が見られる。琉球諸島のうち沖縄・奄美・八重山の歌においては、「石の実･金の実」という表現は、充実した稔りを得た状態の稲穂の表現として共有されている。

「畔枕」は、稲穂が充実して穂が重たく垂れた状態の田の景観の幻視として、畔をイネの枕と見立てた擬人的な表現である。先述しているが、小野によれば、こうした表現は、日本本土から南島の稲作叙事歌や琉歌で共有されている表現である(小野 1995 p. 218)という。ただし、小野は、「畔枕」について宮古歌謡の事例には触れていないので、厳密に言えば、小野の言う「南島」は、宮古を除く奄美・沖縄・八重山諸島を指していることになる。筆者の見た範囲でも、宮古の歌に「畔枕」に類する表現はみあたらない。これは、稲作中心ではない宮古の地域性を反映したものであろう。「畔枕」は、北部琉球の稲作文化と強く結びついた表現であることを示唆している。

「ジュズダマの実」は、イネの稔りの表現である。充実した稔りをジュズダマという素材で表現する事例は、八重山歌謡だけではなく、奄美・沖縄・宮古でも同様にみられる。

次に、琉球歌謡におけるイネの稔りの表現として「石の実・金の実」・「畔枕」・「ジュズダマの実」の 3 種の発想の共通性と差異を確認しておきたい。

「石の実・金の実」という表現は、「石」や「金」の形状の実体ではないが、重い、固いなど、広く一般的共感をもって理解される質感をよりどころとして、充実した稲の稔りを表している。「畔枕」は、畔を枕と見立てる発想があり、イネが枕にもたれているという擬人的な発想が展開する表現である。「畔枕」の詞章には、2 重立ての比喩的な表現構造がある。小野によれば、畔を枕とみたてる発想の来歴は、「娘あぶ

---

[56]　テキスト（外間他　1980a）に収載された「石の実･金の実」を含む沖縄島の歌謡の事例。「毎年二月中、田植祝おりめの時、あむがなし御殿、並、伊是名城にてのみせぜる＜昔の神託歟＞（伊平屋島伊是名村）、「宇根真謝作物為浜おれ之時宇根のろ火之神前御たかへ言」（仲里間切宇根、真謝村）、「稲の穂祭の時の御たかへ」（首里西之平等）、「仲地祭礼之時おもろくわいにや」（具志川間切仲地村）、「五月御祭のおもろ」（久米島具志川村兼城）、「てるく口説」（田名）等。

しまくら」という小唄の世界の表現と、田植え歌などのイネが稔って畦を枕にするという表現とが、引き並べられて歌われるようになったもので、そうした文化が琉球の信仰文化に合わせ一方だけが受容されたのが、イネの「畔枕」という表現である、と説明している（小野　1995　p.219 ）。琉球歌謡の「畔枕」のイネの稔りの表現は、本土と琉球の信仰の差異による文化の歴史的事情が背景に関わっているとみえる。

そして、イネの稔りを「ジュズダマの実」であらわす表現の発想は、琉球諸島の身近な植物環境の中から捉えられている。固く、大きく、艶やかなジュズダマは、少しでも多くの収穫を願う人々にとって、理想的な稔りを象徴するものであり、その力がイネにあやかるよう謡われている。そうした具象による表現にあたって、身近によく見知ったものから選んだ素材を用いる方法は、琉球歌謡に登場するその他の作物の稔りを表す表現にも共通した特徴である。イネの稔りにジュズダマを用いて表す表現の発想は、植物の観察、利用など人々の生活実感を源に生まれた表現であり、そのため固有性がおのずと含まれる可能性が強い。

③　ジュズダマに関する表現の出自をめぐる考察

歌の詞章の出自を明らかにするとは、言い換えれば、特定の地域における文化の受容や創出の特徴を見ることでもある。

稔りを表すジュズダマの実という表現については、ジュズダマの実が大きいという、観察的発想により成立したものと説明されることも多い。宮古歌謡において、豊かな作物の稔りをジュズダマとヤラブの種子の対比で表現することなどを見ると、琉球諸島内に収穫時の種子の粒の大きさによって、豊穣を表現する発想があることが認められる。しかし、大きな実を結ぶ物は他にもたくさんあるなかで、イネの良好な生育の表現に、なぜかジュズダマが選ばれた説明としては、十分ではないと思われる。

一つの試みとしてみることができるのが、川平村の牛馬の繁昌に関するカンフチィの「むかしぃ　しだま」という詞章の背景に、かつて貝を頸飾りにした習俗があり、時を経て、貝の頸飾りの代用が、ジュズダマの頸飾りであるという展開を示した柳田の解釈がある。柳田の解釈は、アジアにまたがるタカラカイの大きな交易圏の想定に絡めて、八重山の歌の「むかし」の一語から、習俗の変容を示唆している。八重山の歌を、アジアの文化圏の一画の中に考察したことが窺える。その意味では、ジュズダマも、アジア一帯に自生する植物である。ジュズダマの実は、艶やかなうえに、中心部に穴のできる形状は糸を通しやすく、頸飾りや小物の装飾に使いやすいため、今で

もアジア各地の民俗衣装の飾りにタカラカイと並んで用いられている。こうした身近に自生するジュズダマの装身具への利用の文化・習俗は、琉球諸島においても類似している。従って、ジュズダマについても、アジアの文化圏を背景に、表現の出自を考察することも考慮される。

一方、田の栽培イネと、路傍に生えるジュズダマとを結ぶ発想の背景は、どこに求められるだろう。ジュズダマの固く、大きく、艶やかな様に、理想の米粒の様を見立てたのは、目に見えるものとしての解釈は納得できるが、豊穣を希求する呪的な行為としての儀礼歌の重要な詞章の解釈としては、少し不十分である。東南アジアでは、ジュズダマの栽培種であるハトムギの食文化が広く存在している。また、漢方薬（ヨクイニン）としても用いられている。ところが、古来の琉球諸島では、食の文化としてのジュズダマ（ハトムギ）の受容や薬草としての受容について、資料には余り見ることがない[57]。そうしたことから推測すると、歌に謡われているジュズダマは、食べるものとして意識されている背景は薄いと考えられる。むしろ、八重山の歌をとおして、稲作の儀礼の文化に伴って、イネとジュズダマの関係は受容されたということが推測できる。そう考えると、歌に謡われているイネの生育とジュズダマの関係は、八重山においては稲作の農耕文化の中に出自が求められるといえるだろう。琉球諸島において外来のものである稲作の技術と文化を遡れば、農耕の技術と共にある様々な儀礼も伝わって来ているはずである。先の項で、イネの繁茂の表現に用いられるススキ／チカラシバクサの慣用句について、ススキやチカラシバクサが、イネの理想的な繁茂の景というだけでなく、イネの生育を助ける見えない力も含めた呪術的な具象として選ばれた表現ではないかということについて考察した。それと同様に、ジュズダマも、見えない力を信じる儀礼歌の呪的な表現の世界に位置づけられた植物の一つとして考えられる。

川平村の牛馬の繁昌に関するカンフチや、農耕に関する歌で事例に挙げた「東（あがる）かーら」他は、牛馬の繁殖や作物の豊穣を希求し、予祝する目的で唱え、謡われる歌謡である。予祝的歌謡は、歌全体で言霊の信仰を受けて、詞章の一節一節が呪的な機能をはたしている。イネと稲作の予祝的歌謡に登場し慣用句化して使われるジュズダマは、水田稲作の文化の中で呪的な植物としての側面で選ばれているのであり、そこに

[57] 「農書」にも、19 世紀に、渡嘉敷雲上が中国に学んだ食療養を著したといわれる『御膳本草』（當間　編 1961）にも、ハトムギについての記述は見られない。

歌の中のイネとジュズダマを結ぶ関係性の特徴があると考える。

歌にみる植物の表現の出自の考察から、特定の地域に於ける文化の特徴が明らかになることがあるとすれば、自然科学的な調査に基づいて島の植物相が明らかになるのとは異なり、歌の世界に取り上げられた植物の姿によって、島に暮らす人々の認知の在り方が明らかになる。八重山歌謡の表現をとおしてみえる人とジュズダマの文化には、みた目の形状や、庶民の装飾品として流行した頸飾り等の実用的な利用の側面と同時に、イネの豊穣の稔りの具象として農耕の儀礼歌の慣用句をつくり、呪的な力を期待される植物という認識での関わりが認められる。

第 4 節　まとめ　–稲作歌の表現の特徴–

本稿は植物と表現の関係を中心に考察することを方法として、イネが関わる歌を抽出したところ、多くのイネに関する歌は稲作が中心的な内容を占めていることから、植物歌とは別の第 3 章を設けて稲作歌として考察した。そして、あえて植物歌の中に稲作歌という歌謡群の考察を設けた理由は、稲作歌の考察には、その他の植物を含む歌とは異なる要素があると思われるからである。稲作歌を他の植物歌から特徴づけるのは、稲作歌の歌の表現の発想の背景に、作物のイネという植物を育てる農耕の具体的な作業と、その作業経験から生まれる長年積み重ねられた思想や文化が、稲作歌の表現の重要な出自と考えられるからである。それは簡単に言えば、稲作あっての稲作歌だからである。

稲作歌の表現の特徴を述べる前に、第 3 章の構成の概要をまとめておきたい。

第 1 節では、八重山の歴史資料を取りあげて、古琉球から近世琉球の稲作事情の変遷をまとめた。稲作あっての稲作歌であれば、稲作歌の解釈に当たっては、八重山における稲作の歴史、そして、稲作を支え、稲作儀礼の伝統を継承する共同体社会の稲作を巡る諸事を、歌の背景として知ることは必要と考えた。

次に、第 2 節では、実際の稲作歌全体を通して、イネ全体の謡われ方を考察した。稲作歌は、共同体の農耕の儀礼という明確な背景をもち、多くの歌の主題が、主に作物の豊穣の希求と豊穣の感謝という文脈の中にあることは、これまでの研究で既に明らかにされてきた。そのような儀礼の文脈にある稲作歌だが、植物と表現という本稿の視点から、どのようにイネが謡われているかとする分析によって、「作物として」

「供物として」「コメとして」という 3 種の内容がある事を明らかにした。それは、稲作歌の表現にみる人とイネ・コメの関係ということもできる。

そして、第 3 節は、稲作歌の表現を考察した。先学の研究によって「生産叙事歌」というように歌全体の表現の構造が明らかにされた成果の上に、本稿は、植物を含む一節の詞章に注目して、その表現と植物の関係を中心に考察した。それが、イネの発育を謡う表現の内、ススキとチカラシバクサによる繁茂の表現やジュズダマによる稔りの表現の考察である。

稲作歌の表現の考察に当たって、信仰・民俗・歴史、また植物学等の史料や研究を援用してきたが、ここでは、稲作歌の表現の問題に関する考察を中心に、まとめとしたい。

１．稲作歌の表現の多様性

稲作歌は、農耕祭祀の主題を言葉で表現し、謡い継ぐことが主要な役割である。農耕祭祀の主題は、共同体の総意として、豊穣の希求とその実現を率直に祈ることにある。歌はその主題を謡っている。極めてシンプルでわかり易い歌のような印象を受けるが、目的を同じくする願いを表す表現様式は一通りではない。

その理由は、八重山の稲作の歴史的、社会的事情の複雑な社会状況にある。古琉球から近世への過渡期である 15 世紀〜18 世紀の八重山の史料からは、稲作歌を伝承していた島の共同体は、それ以前の穏やかさや安定から、人の構成が変化し、思想・信仰の多様化、そして、稲作技術についても「暦以前・暦以後」の言葉で象徴されるような知恵と知識の混在が生じていく。そのなかで、それらを柔軟に受容し変容していく時期とみえるのである。そのため共同体の農耕祭祀の主題のみかけのシンプルさの背後には、共同体の多様性を擁していたものと考えられる。その共同体の持つ多様さを反映させたのが、主題は同じながら稲作歌の表現様式にみる差異と思われる。

そこで、まず稲作歌の歌全体のレベルで、表現様式とその背景を支えるものを具体的に考察するために、はじめに稲作歌がどのようなイネを謡っているか考察をおこない、さらに八重山歌謡の稲作歌の中でも、作物としてのイネの豊穣を得るための歌の事例として、「稲が種子あよう」「たらまゆらじらば」「まゆんがなしぃのカンフチィ」の 3 篇の歌を取り上げ、それらの歌の表現様式の特徴の比較を行った。「稲が種子あよう」は、言霊信仰のもとに良好な稲作の全過程を叙事的に表現する様式を採っ

ている。「たらまゆら」では、東方の海の彼方にある異界の呪的な世界の信仰を背景に、異界から作物の種子を満載した船が漂流してくる光景を歌の冒頭に幻視して、その特別な由来の種子を播き育てて豊穣がもたらされるという物語を展開している。「まゆんがなしのカンフチィ」は、作物の栽培過程の全過程を叙事的に唱える形式は採っているが、その詞章を来訪神が唱えることによって豊穣が約束されるという認識の下に、成立する表現の様式である。歌の場と共にある口頭伝承の八重山歌謡としては、その性格からして発話者の違いは、表現様式の差異と考えられる。こうして歌全体として比較すると、主題は同じでも、豊穣に導く呪力の基となる信仰・思想には多様性が認められるのである。歌の心意は同じながら、その豊穣を共同体に導き入れる手段となる言葉の表現の構造には差異があることを事例をとおして確認した。

次に、歌の詞章のレベルの表現に注目すると、稲作歌には、イネの発育の各期における良好な生育を表す様々な表現がある。生育を表す言葉自体も豊かな展開を見せるが、それらの表現の様式も、主としてイネ自体の目に見える形状や色彩等を抽象的な語を用いて表すものと、イネ以外の具象を用いて、目には見えないものの属性でイネの発育を表すもの等がある。

詞章のレベルで、植物と表現の関係を考察する際、興味深い表現として取り上げたのが、イネの繁茂を表す慣用句と稲の稔りを表す慣用句である。これらの２種の慣用句は、どちらも生育過程のある時期のイネの理想的な生育を表す表現である。イネの良好な繁茂をイネ科の野草ススキ・チカラシバクサの繁茂が表し、また、イネの良好な稔りはジュズダマの実が表す等、どちらもイネ以外の植物の具象を用いる表現を取り入れた様式である。

表現様式という点から見た稲作歌は、歌全体のレベルでの表現様式と各詞章のレベルでの表現様式とで、それぞれ多様な表現様式と内容を含んでいる。表現様式の違いは、それぞれの表現の様式を支える信仰・思想・発想の違いが反映しているとすれば、稲作歌を支える背景となる、信仰･思想・発想は一様でなく、様々なものが混在していることの示唆とみることができる。

２.イネの生育の表現と農耕文化

イネの豊穣を希求する文脈を明確にもつ稲作歌全体の表現様式の考察には、一般的社会背景に加え、農耕文化の世界を付け加えることが必要である。稲作歌のイネの

生育の繁茂期と稔り期を表現する素材として、ススキとチカラシバクサ、ジュズダマが、なぜ取り上げられたのか、植物と表現という関係からみて、その発想について考察するにも、農耕の技術や文化の信仰・思想を抜きに考察できない。

まず、表現の素材の一般的な性格をみると、これらのイネ科の植物は、身近に自生する植物であること、生活上よく利用されていることなどの基本的な点で共通性がある。そして、植物学の見方には、「史前帰化植物」という植物の分類があるそうだが、この「史前帰化植物」の定義は、「文献上あきらかな渡来時期の記録はなく、有史時代以前の古い時代に渡来し、帰化したと考えられる植物」（清水　2001　p. 17）とあり、「多くの農耕地の雑草は、農耕文化の伝来とともに渡来したとみられる。」（前掲書　p. 17）ということである。そして、同類の植物には、チガヤ・メヒシバ・アキノノゲシ・エノコログサ他、多数あるが、どれも道端等に自生して、当たり前すぎて気付かない類の野草である。歌でチカラシバクサと呼んできた野草のオヒシバ、もしくはチカラシバのどちらもが農耕文化にともなって入って来た植物と考えられるわけである。「農耕文化の伝来とともに渡来した」という意味を理解するのは難しい。農耕文化と一緒にやって来たという事は、人間と人間の文化に伴って一緒に入ってきたということであろう。農耕ができる環境が人によって開かれて、農地に育ちやすい植物が生育する環境が生まれる。勿論、農耕の中に畑作も水田稲作も含まれる。イネも、オヒシバも、ススキも、ジュズダマも稲作農耕の文化が運んできた植物だと植物学上いえるとすれば、そうした植物の仲間が、稲作歌に謡われていることを併せて考えると、ただの野草どころか、ススキ・チカラシバクサ、ジュズダマの稲作歌の表現の背景は極めて興味深い。

植物学上の視点に加えて、植物と民俗の関係からみると、ススキとチカラシバクサは、八重山の生活の中でも、呪的な植物として認識されていることは、民俗事例の中に確認することができた。特に、ススキは、八重山に限らず、近隣の琉球列島諸地域、そして、日本本土、台湾他、広範な地域に、霊性を持った植物としての取り扱いがなされており、その事例は多数挙がっている。一方のチカラシバクサは、ススキと比べれば民俗の事例は少ない。しかし、呪的な認識がされているススキと対句を成しているということは、ススキと同様な認識をされた植物として、八重山歌謡の世界で数百年の間、謡い継がれてきた野草と解釈できる。先の植物学上の先史帰化植物という分類を伏線に加えるとなおさら、チカラシバクサは民俗的な事例の中でこそ、その存在

は薄れつつも、かつての農耕文化の呪的な植物の存在感を、歌の対素の形で留めているという推測的な解釈が似合う野草である。ジュズダマも稲の稔りを表現する植物として用いられている他、頸飾りや装飾品として、今もなおアジアの広い地域で身の周りを飾る植物である。ススキとチカラシバクサも、ジュズダマもこのような様々な民俗事例に鑑みて、イネの繁茂が、野草の繁茂と並列する表現様式は、イネと野草の呪的な関係性を基盤にしていると考えられる。

そして、表現の様式として、イネの繁茂を表すススキ／チカラシバクサの慣用句とイネの稔りを表すジュズダマの慣用句をみると、取り上げられたイネの良好な生育の具象となっている野草は、いずれも、これらの野草の持っている目に見えない属性や本質を捉える発想が、慣用句を成立させている。イネの繁茂や稔りの表現の本質で言えば、農耕の儀礼という文脈に添う歌の素材として、野草の呪性の認識は重要な要素である。前章までの植物歌に取り上げられている樹木や草花に言えることだが、八重山の歌唱者達は、述べたい思いや観念と同じ本質を持っている物事を、表現の素材として身の周りから見つけることに長けていた。それは、稲作歌においても同様なことが確認できるのである。

さらに、稲作歌の中に謡われる農耕儀礼そのものの中にも、これらの野草を用いる儀礼を見つけることができる。本稿では、主に、イネの播種の儀礼等の事例を取り上げた。それらには、イネの周囲に、ススキや野草を植える習俗や儀礼がみられる。八重山の事例では、播種の儀礼で、水口にススキ 3 本を植えるとあった。その他には、マレイシアや中国の事例等に、イネを丈夫に育てることを目的として、イネ以外の野草を周囲に植える、信仰とも呪術とも、技術とも考えられていたかもしれない農耕の儀礼が見られる。これらのよく似た儀礼に、伝播の関係を見ようとすると困難が生じるが、作物を育む立場の農民達が、栽培する植物に対して持つ共通の思いや発想による類似の行為と考えれば、農耕文化の本質の一端にあるとみることは妥当と思われる。

本稿では、イネの良好な生育の表現を、別の野草の生育で表す具象の表現様式の背景には、歌唱者達、同時にイネを栽培する人々の意識の中に、イネを育て守る植物を植えるという、呪術性とごく素朴な技術が一体となった農耕儀礼が窺えることを述べた。農耕文化の技術と思想という点からみると、イネを守り育てる植物という発想が、イネの繁茂とススキとチカラシバクサや、イネの稔りとジュズダマの実の表現の関係の一面に含まれるということができる。植物が植物を「育てる」とか「守る」などと

言葉に出すと、不可解と怪しさがつきまとうが、簡単に栽培者による「栽培の工夫」と言い換えれば、栽培者のなんでもない普通の思いである。歌を支える世界は、言葉の呪力はもちろんのこと、植物やものが内に持つ霊性や呪力も一面で信じられている世界である。歌唱者達が、ジュズダマを稔りの表現に用いるのは、ジュズダマのような大きく艶やかな実の収穫の予祝としてである。眼に見える形状として理想的な稔りの類似性を意識すると同時に、その大きな実に宿る力にあやかって、大きなコメ粒に育つという関係性の把握による選択の結果が、ジュズダマを具象としたのである。ススキやチカラシバクサについても、良好なイネの繁茂をただ表現する為に、田畑の側に勢いよく育つ野草の姿の形状を謡っているのではなく、野草の生命力がイネの生育に分け与えられるものと考え、言葉の呪力を介在させ、その実効性を信じた歌唱者達の認識が表現に現れていると思われる。

イネの繁茂やイネの稔りを野草の生育で表現する詞章に見る歌唱者達の発想は、眼に見える形状の類似による選択と、眼には見えない植物と植物が交感する呪力の把握との二重性で成立している。表現の修辞としてみれば、前者の眼に見える形状の類似による表現のイネと野草の関係の認識は、比喩的な表現と言える性格ももっている。比喩について、中村明によると、比喩の目的には、話し手の伝えたいことを、相手(受け手)にはっきりわからせる伝達のためのものと、相手に強く感じさせるために使う強調のためのものとがある(中村　1977　p.11)としている。その意味でいうと、イネの理想的な稔りの状態をジュズダマの形状で表現することは、受け手にわかりやすく伝える説明的な一面がある。しかし、そもそも、稲作歌における受け手とは誰かという事も考慮しなければならない。人が人の理解を求めて謡われるものではない。後者の眼には見えない植物と植物が交感する呪力の把握を基にして、植物の間におこる呪的な力の関係を表しているものである。喩辞と被喩辞という比喩的関係では言い表せない、稲作歌の特徴的な表現構造にある詞章である。

イネの生育を謡う表現がもつ2重性は、先にイネの繁茂をススキ／チカラシバクサの繁茂で表現する詞章の考察の際に、「イネの繁茂はススキ／チカラシバクサのように」という解釈と、「イネの繁茂はススキ／チカラシバクサが繁茂する」という解釈のあることを示したが、その解釈の違いも、上記のジュズダマの表現にみる2通りの発想の違いと同様の関係にある。解釈の違いは、歌の採取者と採取時期等の問題も絡むが、元々の歌の表現が二つの側面を持っており、特に呪的な内容に関しての歌唱者

達の認識の差や解釈の重点の置き方が、解釈の差異に反映される。

稲作歌は植物歌の中でも、特別に表現の奥深さを持っている。それは、歌の言葉の中の一言が、稲作の技術と文化の長い歴史を負っている場合があるからである。柳田が展開した「むかし　しだま」の解釈も、稲作歌の表現が持っているそうした性格により起こった一例といえるだろう。柳田は「人とズズダマ」(柳田　1978)で、川平村の「まゆんがなしのカンフチィ」に触れた。「ウシ・ウマの繁昌」の唱えのなかのジュズダマの「むかし　しだま」という「むかし」の一語に示した関心については、すでに述べたとおりである。稲作歌の中のススキとチカラシバクサ、ジュズダマというイネの生育に関わる植物の表現についていえば、イネの自生地ではない八重山の稲作歌という出発点からして、広汎な地域と時間にわたる稲作の歴史の記憶を、表現の背景に負っていると考えても普通であろう。それは、歌唱者達が意識しようが、しまいがそういうものだと考えざるをえない。口伝の内に受容と変容を繰り返している歌であれば、伝承する歌唱者達すら意識できなくなった表現の背景の謎は当然あるという前提で、歌の構想を検討しなければならないのだろう。八重山の稲作歌は、農耕文化の一画を占める言葉の表現として、興味深い表現を含んだ歌である。

第４章　総　括

植物歌について、どのような植物が取り上げられ、植物を素材に、どのような思いや観念をどう表現しているか考察を重ねてきた。それらを基にして、八重山歌謡の植物歌の表現にみる特徴をまとめてみたい。

第１節　植物と表現

１.植物歌の植物

八重山歌謡にどのような植物が謡われているかを知るために、テキストから植物名を抽出し、本稿の研究の対象とする 87 種の植物(海藻・菌類・植物由来産品も含む)があることを明らかにした。それらの植物を含む歌を、本稿では植物歌と呼んできた。本稿が対象とした八重山歌謡に取り上げられた植物は、第１章に添付した＜表 2＞（本稿 p.23）の草花と樹木で構成されている。ちなみに、先行研究の『八重山歌謡にみえる植物』（山里　2008）には、草本・木本合わせて 57 種の植物が抽出されている。山里と本稿とは抽出資料の対象範囲が異なり、山里はイネ等五穀、及び作物の類については割愛したとのことなので、抽出された植物の数は異なっている。いずれにしても、歌に取り上げられた植物は、八重山の人々の日常に表現の素材として意識され、歌の中に長年繰り返し謡い継がれてきたものといっていいだろう。八重山歌謡から抽出された 80 余種の植物の中には、実際に、歌・唱えの口承の歌謡の歴史と共に、数百年の時間をくぐり抜けて、現在に至るまで謡い継がれてきた八重山歌謡の世界生え抜きの植物が含まれているはずである。それらの植物は、八重山の人と植物の文化の関わりを歌に刻んで伝えているものと思われる。けれども、口承を基本としている八重山歌謡では、どの植物が、いつから歌の世界に留められているのかを明らかにすることは困難である。途中で、伝承されなくなった歌も含めれば、恐らく、人々の表現のストックとして認識にのぼりそして消えていったもっとたくさんの植物があることは想像に難くない。植物辞典では、様々な花の名が確かめられる。けれども、歌に謡われている植物は、人間の暮らしや認識と長い関わりの歴史をもった草・木の記録である。当地の人々が、どのような植物に関心を向け、その対象をどう理解して、どう思いを伝える言葉に活かしたかが、植物歌の考察では明らかにされる。

そうした植物を含む植物歌だが、取り上げられていた植物は、ほぼ島に自生又は栽培されている実在することで共通している。そして、植物歌の植物は、特別な栽培植物や大樹や霊木ばかりではない。普通に道端や浜で出会う植物もある。歌には島の人々がいかに植物の性質などを理解し、様々に身近に利用をしているかという事も謡われている。それらの植物との関わりは、歴史で言えば、特に取り上げて記述する対象にはされにくい人間のごくありふれた出来事と同じで、歌でもなければ、取り上げられないものも含まれる。たとえば、事例に挙げた歌に謡われていたなかには、ススキの原で雨宿りする姿のような、記録に残す意味もないけれども、ごく当たり前に誰もが知っている草木と人々の日常の関係を、文字のない時代から歌い継いできている。こうしたところに、口承の植物歌の表現のひとつの魅力があるといえるだろう。

以下に記したのは、第2章の第2節で、取りあげた植物歌の事例に含まれていた植物である。

ヒルギ・オキナワウラジロガシ・ハマゴウ・ビロウ・デイゴ・イヌマキ・ソテツ・アマミヒトツバハギ・ニラ・チョマ・タブノキ・オガタマノキ・ユウガオ・テリハボク・ハマユウ・バショウ・クロツグ・アダン・モンパノキ・キノコ

上記 20 種の植物のうち、下線を引いた植物は『図鑑有用列島有用樹木誌』(天野1986)を参考にして南西諸島以南に自生するとされている植物である。第 2 章の事例となる歌を選択した結果的に、歌の中に南西諸島以南の自生の植物が 8 種含まれている。これらの植物は、歌唱者達には見慣れた植物の景と思われるが、他所から見ると、謡われている植物は、八重山の風土を表現する素材としての役目をはたしている。日本列島内で、八重山の島々の自然は本土とは異なる亜熱帯の環境にあり、八重山歌謡の植物歌の表現が、観察に基づくものであればあるほどその自然の景が強く反映する。八重山歌謡が、自然に対する観察やその表現に長けてみえる特徴があるのは、歌の表現の様式と、八重山の人と自然の関係の在り方を映しているにほかならない。

2． 具象表現と列挙の様式

植物歌の考察では、主に、歌唱者達のどのような思いが、どのような植物を、どうに用いて、表現されているか、という過程を追って歌の解釈・分析をおこなった。

以下に記したのは、素材の植物とその植物が関連する歌の内容について、簡単にキーワードで整理したものである。

＜歌　名＞	＜内　容＞	＜植　物　名＞
「大川原ぬぴんに木」	人生航路	ヒルギ
「山樫木あゆう」	人生訓　　婚姻・祝儀の喜び	オキナワウラジロガシ
「やらぶ種子あゆう」	嫁ぐ娘への心情	テリハボク
「野底浜ゆんぐとぅ」	男女・夫婦の理想の訓示的	ハマゴウ・ビロウ・デイゴ イヌマキ・ソテツ・ アマミヒトツバハギ
「南さこだじらば」	女性の幸福	ハマユウ・バショウ・クロツグ
「たらまにゆんぐとぅ」	継子のいじめ	アダン・モンパノキ
「くくるだきあゆ」	航海安全、ニラと風の同質の把握	ニラ
「いきぬぶじじらば」	樹木に対する神話的思考	オキナワウラジロガシ タブノキ・オガタマノキ
「ゆびが夜ゆんぐとぅ」	男女の問答	ユウガオ・ヘチマ

上記の歌の＜内容＞は、庶民の誰もが共感を抱けるような事柄のテーマである。もちろん、具体的な内容は、八重山の歌唱者達の自然環境や社会環境が反映している。例えば、人の人生航路を表現する時に、「ぴんに木(ヒルギ)」の様子を具象とするのは、八重山の海浜の自然環境の反映であるし、孤島に流された継子がおかれた厳しい状況と心情を浜辺のアダンやモンパノキが象徴するのも、八重山諸島の自然の中から生まれるフレーズである。また、女性の幸福を得る条件と士族の身分のよい生まれが、ハマユウや、バショウの茎の白さで象徴して表されるのは、歌の物語の展開に、自然に加えて習俗や文化・社会的環境が反映している。

各テーマや、テーマに関連した内容に該当する植物の様々な属性を選び出すのは、歌唱者達が日頃に蓄積してきた経験と、先祖から伝えられた生活の知恵によっている。表現する思いや観念に適した植物の属性は、歌唱者達の日常の生活圏で充分知っている植物の特性なので、だれもがイメージとして納得しやすいのである。

ハマゴウが大きくならない木であることも、ニラの再生力の不思議や、ユウガオやヘチマが石塀に添って蔓を絡ませて延びることも、テリハボクの実がコロコロ転がることも、オキナワウラジロガシやタブノキは山の奥深くで、人知れず巨木に生長している樹木であることも、皆が十分に承知していて、植物の名が上がれば、歌唱者達は、

目に見える植物の形状も、見えない植物の力も含めて、具体的な像をその植物名によりほぼ共有できる関係性のなかにある。また、口頭伝承の歌にとって重要な歌唱の「場」に合わせたテーマの歌は、あらかじめ決まっているか、幾つかの歌の中から、その場に応じて音頭取り等によって導かれて謡うことになっている。祭りの芸能の番組が、決まっているのと同じであろう。そのようにして、「場」において歌を謡うたびごとに、歌唱者達の間の共感が再構成されるのが、植物歌にみられる基本的な表現の構造である。上記のように歌唱者達の思いや観念を植物の具体的な姿で表す表現の方法を、本稿では「具象表現」といい、そうした表現の中の植物を「具象物」「具体物」などの言葉で示してきた。

こうした具象表現は、歌の列挙の様式と結んで、さらに表現の特徴が生きる。具体的なもので表現する方法は、同じ本質をもった具体的なものをみつけだすことによって、一つの思いや観念を、なん通りもの具体物で言い表すことができるのである。それは、一見すると無関係なものが、並べられているかのように見えることもあるが、歌唱者達にとって、筋の通ったものの選択と配列であることは、各歌の事例に確かめてきた。こうした思いや観念を表現する方法は、一篇の歌の中で同じ主題を反復して謡う列挙の様式を支える基本的な表現形式である。事例に挙げた歌でいえば、「山樫木あゆう」「野底浜ゆんぐとぅ」「やらぶ種あゆう」等が具象表現による列挙の様式の歌である。

そして、八重山の歌唱者達は、列挙の表現様式を工夫して楽しんでいると思われる。事例にみた「野底浜ゆんぐとぅ」の類歌では、「具象表現と列挙の様式」に基づく歌が様々に展開していることがわかる。詳しくは、「第２章　第２節　野底浜ゆんぐとぅ」で考察した。具象を選び表現の工夫を楽しむ様子は、八重山歌謡だけに留まらず、宮古歌謡の中にも展開する。八重山歌謡が、夫婦の絆の強さを、逆説的にあらわわす素材として、船材にするほど大きくならない樹木の具象に「ハマゴウ」を用いれば、宮古歌謡の「くまらぱぎ豊見親」では、「ハマゴウ」によく似た「アマミヒトツバハギ」を用いて、同じ構造でよく似た内容の歌を謡い継いでいる。口頭伝承の歌である故に、その伝承関係は明らかにはならないとはいえ、それでも、ほぼ同じ構造の歌であることは、誰が見ても否定できない様式を両歌は維持している。そのうえ、よく似たテーマの同じ構造の歌は、小動物の具象によっても展開されている。もちろん、それらも伝承関係を明確にすることはできないだろう。けれども、そうした列挙の表現

の様式が、様々な島の歌唱者達によって共有されていたことは、各島に残されている歌の存在が十分に物語っている。それが同時代の共有なのか、それとも数百年の間のどこかでの共有なのかは知る事はできないのだが、口頭伝承の歌謡が、基本的には人の記憶を頼りに、「場」を得た場合の表出であることから鑑みれば、島々に残されて伝わっているという事実に、ことの成り行きが詰まっている。

具象表現による列挙の様式でもう一つ重要な点は、具象表現ではさまざまな具体物を用いるが、歌の最終的な心意は、ほぼ人が主格となる内容に展開する。人についての思いを謡うのである。上記で歌と「内容」と「植物」との関係を記したが、テーマの多くが共同体の人々の身近な関心事の内容であったのは、これまで取り上げた事例で見た通りである。様々な植物（或いは「もの」や動物の場合もあるが）の具体像によって、最終的に伝えたい心意は人の出来事であり、その表現のために、＜植物→人事＞を基本とし、場合によっては＜植物→もの→こと→人事＞という、いずれかの定型化が窺える。

本論では、具体物を以って抽象的な概念を表す表現が、日本の古代の「和語」の表現から続くものという点も考察したが、その共通性は「古さ」というより、具象表現を可能とする環境が整うか、そうでないか、ということにあると考える。先には3つの要素として記したが、簡単にまとめれば、言葉以前の環境がしっかり共有され、具体的な実像をもった言葉で通じ合う共同体の環境が、具象表現と列挙の様式を容易にさせる要素である。

植物歌にみた具象表現と列挙の様式の歌の特徴と重要さは、身の回りの具体的なものや体験に繋がる確かな言葉と表現にある。そして、その様式の成立の背景には、超自然や＜神＞や、目に見えない言葉の呪力を取り込み、言葉の列挙や反復によって共同体の人と人の間に共感を取り込む発想や認識等々の歌の言葉の本質的な在り方がある。

３．稲作歌の植物と表現

本稿の考察の対象として取り上げた植物歌は、植物という範疇で抽出している歌である。イネも植物なので植物歌の一つである。けれども、イネの関わる歌は、イネ以外の植物を表現に用いる歌の日常性の濃厚さと一線を画する特徴がある。イネが関わる歌には、普通の日常のイネやコメの民俗を謡う生活がテーマの歌も一部含まれるが、

イネの豊穣を謡う歌やイネが供物として登場する歌が主であり、その特徴は、稲作に関わる歌に顕著にみられる。稲作に関わる歌の多くは、共同体のいわゆる祭祀儀礼に関係を持つ歌である。そして、イネに関する歌の中心が稲作と関わりがあることをあえて強調する意味から、植物歌のなかでも稲作に関わる歌を稲作歌とした。

また、稲作に関わる祭祀儀礼とは、ほかでもない農耕儀礼のことであり、稲作歌の表現の考察には、一般的な歴史・民俗・信仰等の他に、農耕の技術と思想を背景に加えて考察した。

本稿の方法である植物と表現という視点からみると、稲作歌全体の中に、イネ等五穀以外で登場する植物はごく限られていて、ススキ、チカラシバクサと、ジュズダマ、テリハボクの種子である。テリハボクは黒島の「うふな星」に、粟の稔りをあらわすの歌に登場するので、ここでは除外した。本稿では主として、稲作歌の中に登場するススキ、チカラシバクサと、ジュズダマを用いた表現を中心に考察した。

ススキとチカラシバクサは、「稲が種子あよう」や「まゆんがなしのカンフチ」等のイネの豊穣を希求する歌の中で、繁茂期のイネの良好な生育を表現する植物である。また、ジュズダマは、ほぼイネの稔りを表す表現に使われる特徴的な素材である。興味深いことに、これらのイネの生育をあらわす植物はイネ科の野草である。これらの野草は、島の人々の生活圏の中に普通に自生する植物であり、その形状も生態もよく知られており、生活上の実用にも、また、厄よけなどの呪的な信仰にも関わる植物で、これらの植物が関わる数々の民俗がみられる。しかし、ここでは、そうした生活の民俗とともに、農耕文化の儀礼の民俗の中において、イネとススキとチカラシバクサとジュズダマが用いられた詞章を考察し、どのような農耕文化の技術と儀礼との関係を表す表現なのかという点に注目し、次のような表現の特徴をみた。

それは、イネの繁茂をススキとチカラシバクサの繁茂によって表現する詞章には、現代語では解釈しにくい構造があったことである。イネの繁茂とススキやチカラシバクサの関係を、「農耕の技術と儀礼」の文脈のなかで解釈すると、修辞的な比喩の表現の関係を越えて、イネとイネ科の野草たちとの、ある呪的な関係がうかがわれたのである。そして、八重山以外の地域や、マレーシアや中国における農耕儀礼のなかにもイネを育て守る植物を、イネとともに植えるという農耕の技術と儀礼の一体となった農耕思想の影をみたことから、八重山歌謡にみるススキやチカラシバクサも、イネを育て守る野草という思想・信仰を背景に生まれた慣用句ではないかと考えた。

さらにそうした稲作歌の表現様式の多様性についても考察した。稲作歌について、先学によって明らかにされ、よく知られている表現様式が、生産叙事歌の叙事表現である。小野重朗の指摘で周知されているので、あらためてここで小野の論述を取り上げるまでもないだろう。結論から言えば、小野の述べている生産叙事歌の様式が成立する背後には2種の文脈がある。一つは、本稿も幾度となく記してきたが、言霊の信仰の文脈の下に、イネの生長と稲作の作業過程を、現実通りの経過で、尚かつ、良好な作物の理想的な生育状態を謡うというものである。そして、もう一つの文脈は、生産叙事歌は「本来、創造神が稲を作り始めた神話」（小野 1995　p.186）という指摘である。稲の生産叙事歌は、言霊信仰と稲作神話のもとに、イネの生育の叙事的な表現様式が成立しているとされている。

では、本稿が取り上げたススキとチカラシバクサの繁茂が表現しているイネの生育の表現の文脈はどうだろう。イネの繁茂を表すススキとチカラシバクサの繁茂の慣用句も、稲作の生産叙事歌の一節にある。従って、全体の詞章の流れのなかでみれば、この一節も言霊信仰の文脈の中において解釈することができ、イネの繁茂期の良好な生育の姿を他の植物の姿でより解りやすく謡ったものという解釈も成立する。しかし、稲作歌である「稲が種子あよう」「まゆんがなしぃのカンフチィ」を、「稲作の技術と儀礼」の農耕思想の文脈の中に置いて、ススキとチカラシバクサの繁茂の慣用句の詞章をみると、イネの生育を助ける野草を植えるという農耕思想が、ススキとチカラシバクサの繁茂を謡う詞章の成立の背後にみることも可能にみえる。

全体に対して一部をみるという同じような方法で、小野も稲作の歌を考察している。小野は、同じ生産叙事歌の中の１節であるイネの稔りを表す表現の「畔枕」について「畔枕考」（前掲書　pp.203-219）を著している。そこでは、南島の稲作の歌謡の「畔枕」の表現が、近世日本の小唄の抒情世界の伝統を一部受け継ぐものだと指摘している。「畔枕考」（小野　1995 ）については、本稿の「3.イネの稔りの表現-ジュズダマ-」の項で記したのでここでは割愛するが、小野の指摘を総合的にみると、生産叙事歌の詞章を成立させている背景の文脈として、歌の全体で見れば、言霊信仰の下の叙事的表現であり、同時に、イネの神話の物語の叙事であり、また、詞章のレベルで見ると、近世小唄の抒情の世界観もあり、そのような文脈の混在と多様性を指摘しているものといえる。

では、その多様性の文脈に加える一つとして、本稿が稲作歌にみた「稲作の技術と

儀礼」の一体化した農耕思想を考えることができる。イネの生育を助ける野草を植えるという、耕作者である農民のもつある種の農耕思想を背景に、ススキとチカラシバクサの慣用句が成立しているといえる。ジュズダマを用いた慣用句についても同様なことがいえる。農耕思想をひもときながら、稲作歌の表現の一節、一語を関係づけていくことによって、さらにさまざまな文脈の解釈が出てくるはずである。稲作歌の詞章は農耕文化を背景にした多様性を含んでいると思わせる奥深さがある。

4. 口頭伝承の歌謡の表現と解釈

最後に、一つの歌の成立に多様な文脈を見ることができる八重山歌謡の歌の表現と解釈について、口頭伝承の歌という点から考えてみたい。

小野の生産叙事歌の指摘の中に、次の言葉がある。「日本本土の神話は古史書の中に眠っているが、南島では神話は生産をめぐる人々の生活のなかに生きて機能している。また、ここに見た神話は語られるのではなく、定型定律の長編叙事歌として歌われている。」（小野　1995　p. 186）と記している。小野は、本土と南島の神話の違いを「古史書の中に眠っている」「生活の中に生きて機能している」という言葉で表現して、稲作等の神話に関して、記された史書と謡われている歌の違いを指摘しているのである。そこからくみ取って言い換えるとすれば、書かれた言葉の文字史料と人の記憶で伝達される歌などの非文字史料の理解や解釈の方法の差異の指摘と言ってもいいのではないだろうか。

本来、八重山歌謡は、口頭伝承の歌である。第１章の歌謡の研究史についてのまとめで、近代以降、歌謡は本来の現場である祭祀・行事の「場」、そして作業の「場」で参加者によって謡い継がれる歌の伝承の一方で、歌謡集という記された歌という流れができた、と記した。後者は、伝承というより記録的である。「場」の環境が変われば、歌謡集の中にしか残らない歌というのも、今後充分考えられ、あえて、研究の立場に限れば、歌が記録されていくことは重要である。本稿がテキストとした『南島歌謡大成　Ⅳ　八重山篇』（外間他 1979）は、個人の採取した歌謡及び近代以降に発刊された多くの書籍の中に採取された歌謡等から編集され、1979 年に刊行された八重山歌謡集である。その意味で、歌謡集全体の編者の意図や、1979 年という研究史上の時間の位置が明確である。そうしたテキストに多くを頼りながら口頭伝承の歌の解釈の方法ということを考える。

一つは、歌の持つ文脈の解釈である。稲作歌でいえば、イネの生産叙事歌には、「言霊信仰」「神話の観念」「近世小唄の抒情の世界」「稲作の技術と儀礼が一体化した農耕思想」等々、様々な文脈を見ることができる。稲作歌は、稲作という人類史に繋がるような大きなテーマを背景にしているだけに、一つや二つの文脈で構成されているはずがない。おそらく多様な文脈で出来ており、口伝のうちにそれらの受容と変容を繰り返して歌の詞章に引き込んでいる。同じように一篇の歌のなかに幾つもの文脈を持つのは稲作歌に限らない。これは、植物歌で取り上げた「いきぬぶしじらば」にもいうことができる。本稿では、「いきぬぶしじらば」は、造船と樹木の伐採とそれにまつわる歌唱者達の思考を、「死体植物化生」のモチーフという文脈をとおして考察することができた。けれども、先学の砂川は、「いきぬぶしじらば」を「祝女の山ごもり」と「セジ」の文脈の中で考察している。どちらも、現代の様式に形を留める同じ歌に、異なる文脈からアプローチをしたということになる。

こうして見てくると、明らかな作者と名指しする人は存在せず、歌い出された時を特定することもままならない歌謡は、人々の記憶が伝える詞章が今に続いてある口伝の歌である。それらの歌全体や詞章一節の関係のなかに混在するどの文脈を、どのように整理して、同時代の「生活の中に生きて機能している」歌の文脈に解釈するのかということが、植物歌・稲作歌等の口頭伝承を基本とする歌の表現の解釈の課題と考えられる。

歌謡の研究の究極は、歌の心意を明らかにすることと考えるが、これは、歌から何を受け取れるかということでもある。本稿では八重山歌謡の表現の特徴として、八重山歌謡の具象表現に注目して考察をおこなってきた。そして、八重山歌謡の植物歌の具象表現が、島の自然をよく熟知し、その知恵を歌の言葉のストックに持ち、巧みに歌の表現に取り入れている特徴を知ることができた。八重山歌謡が自然を多く取り入れ謡っている印象は、この具象表現という表現の様式の構造によるものと考えられる。そして、こうした具象表現の言葉の構造の本質をみると、具体的で、島の経験や知恵に基づく確かな実体を伴う言葉による表現とコミュニケーションの環境が、八重山歌謡の植物歌の言葉以前に、共同体に整っていたことが考えられる。

島の植物の環境は、気候変動や人間の活動によって変わってきたとしても、基本的には亜熱帯の島の特徴を少なからず持続しているはずである。その土台の上で、古来人々が積み上げてきた植物と人をめぐる文化と風土は、記された史書以上に、島の生

活の具体の中で使われる言葉や、それらを背景に持って表現する口頭伝承の歌の言葉の中に色濃く伝えられている。植物歌における「口頭伝承の歌謡の表現と解釈」という課題は、歌が持つ一見過去と見える多様な文脈を、今とは途切れた別のものとして解釈するのではなく、今現在の生活のもとにある拠り所として、口頭伝承の歌の言葉とその前提にある共同体の合意の世界をうけとることが、歌謡の言葉の研究の意義と繋がるものと考える。

添　付　資　料

参考文献　(50 音順)

新井恒易 1981『農と田遊びの研究　上下』明治書院

天野鉄雄 1976『琉球列島植物方言集』新星図書出版

天野鉄夫 1989 『図鑑琉球列島有用樹木誌』沖縄出版

伊藤幹治 1977「日本神話と琉球神話」講座日本の神話編集部『日本神話と琉球』有精堂出版

池谷望子・内田昌子・髙瀬恭子篇　2005『朝鮮王朝実録琉球資料集　原文篇／訳注篇』榕樹書林

石垣市総務部市史編集室　1991「慶来慶田城由来記・富川親方八重山島規模帳」『石垣市史叢書１』石垣市

石垣市総務部市史編集室 1992a「与世山親方八重山島規模帳」『石垣市史叢書 2』石垣市

石垣市総務部市史編集室 1992b「富川親方八重山島諸村公事帳」『石垣市史叢書 3』石垣市

石垣市総務部市史編集室 1994「翁長親方八重山島規模帳」『石垣市史叢書 7』石垣市

石垣市総務部市史編集室 1995a「参遣状抜書（上)」『石垣市史叢書 8』石垣市

石垣市総務部市史編集室 1995b「参遣状抜書（下)」『石垣市史叢書 9』石垣市

石垣市総務部市史編集室 2004「冨川親方八重山島規模帳」『石垣市史叢書 14』石垣市役所

石垣市総務部市史編集室 2015「参遣状(喜舎場永珣旧蔵史料) 1」『石垣市史叢書 21』 石垣市教育委員会

石垣　繁 1976「八重山地方の稲作儀礼　その 1 播種儀礼について」八重山文化研究会

池宮正治 1976『琉球文学論』沖縄タイムス社

池宮正治 1982『琉球文学論の方法』三一書房

伊藤幹治 1974『稲作儀礼の研究−日琉同祖論の再検討−』而立書房

伊波普猷 1973「朝鮮人の漂流記に現れた 15 世紀末の南島」『をなり神の島１』　東洋文庫　平凡社

伊波普猷 1973「南島の稲作行事について」『をなり神の島　その１』東洋文庫 平凡社

伊波普猷 1975「子安貝の琉球語を中心として−海巴と鳥セ必孫−」『伊波普猷全集　第 8 巻』平凡社

伊波普猷 2000「琉球人の祖先について」『古琉球』岩波文庫

上江洲均 1986『伊平屋島民俗散歩』ひるぎ社

宇野圓空 1941『マライシアにおける稲米儀禮』東洋文庫

大竹有子 2011『南島歌謡にみる“もの”と表現の研究：『おもろさうし』を中心に』沖縄県立芸術大学　芸術文化学研究科　博士論文

大林太良 1973『稲作の神話』弘文堂

沖縄大百科事典刊行事務局 1983a『沖縄大百科　上』沖縄タイムス社

沖縄大百科事典刊行事務局 1983b『沖縄大百科　中』沖縄タイムス社

沖縄大百科事典刊行事務局 1983c『沖縄大百科　下』沖縄タイムス社

沖縄古語大辞典編集委員会 1995『沖縄古語大辞典』角川書店

小野重朗 1977 『南島歌謡』日本放送出版協会

小野重朗 1995a「生産叙事歌をめぐって」『増補 南島の古歌謡』小野重朗著作集　第一書房

小野重朗 1995b「畔枕考」『増補 南島の古歌謡』小野重朗著作集　第一書房

小野重朗 1994「民俗に見る隼人像」『薩隅民俗誌』小野重朗著作集 第一書房
嘉味田宗栄 1966『琉球文学序説』沖縄教育図書
嘉味田宗栄 1968『琉球文学発想論』糸洲安剛
嘉味田宗栄 1977『琉球文学表現論』沖縄タイムス社
嘉味田宗栄 1982『琉球文学小見　言葉の本源をさぐる』沖縄時事出版
川野和昭 2008「タブノミハ　ムギヲ　イッピュ　クイダス−タブノキと人との交渉をめぐって−」『黎明館調査報告書　第21集』　鹿児島県歴史資料センター
川野和昭 2009「竹の焼畑と稲作儀礼−竹林文化論への試み−」『黎明館調査研究報告第22集 』鹿児島県歴史資料センター
川平村の歴史編纂委員会 1976『川平村の歴史』川平公民館
狩俣恵一 1999 『南島歌謡の研究』瑞木書房
菊千代･高橋俊三 2005『世論方言辞典』武蔵野書院
喜舎場永珣 1967『八重山民謡誌』沖縄タイムス社
喜舎場永珣 1970a『八重山古謡　上』沖縄タイムス社
喜舎場永珣 1970b『八重山古謡　下』沖縄タイムス社
喜舎場永珣 1977a『八重山民俗誌　上巻』沖縄タイムス社
喜舎場永珣 1977b『八重山民俗誌　下巻』沖縄タイムス社
北原保雄　2003 『日本国語大辞典　第２版』小学館　デジタル版　　http://japanknowledge.com
芸能史研究会編 1975『日本庶民文化史料集成　第11巻　南島芸能』三一書房
高教組教育資料センター『新編　沖縄の文学』編集委員会　波照間永吉(監) 2008 『新篇　沖縄の文学』沖縄時事出版
斉藤茂吉 1938『万葉秀歌　上』岩波書店
佐喜真興英 1925「シマの話」郷土研究社 1974『日本民俗誌大系　第１巻　沖縄』角川書店
佐々木高明 1984「南島の伝統的稲作農耕技術」『南島の稲作文化　与那国島を中心に』法政大学出版
笹森儀助 1893『南嶋探験１』東洋文庫　平凡社
島袋源七 1929「山原の土俗」郷土研究社 1974『日本民俗誌大系　第１巻　沖縄』角川書店
清水建美 2001『図説植物用語辞典』八坂書房
白川 静　2003『常用辞解』平凡社
新里幸昭 2003『宮古の歌謡』沖縄タイムス社
新城利男 2014『首里王府と八重山』岩田書院
砂川哲雄 1976「南島歌謡における祝女の山ごもりと造船」『八重山文化論集』八重山文化研究会
竹富町史編集委員会 2013『竹富町史　第５巻　新城島』竹富町役場
田畑英勝・亀井勝信・外間守善　1979『南島歌謡大成Ⅴ　奄美篇』角川書店
谷川健一他 編 1981「李朝実録抄」『日本庶民生活史料集成　第27巻　三国交流誌』三一書房
玉置和夫 1979「沖縄の植物と民俗」玉置和夫遺稿集刊行会
玉城政美 2010『琉球歌謡論』砂小屋書房
多和田真淳 大田文子 1985『沖縄の薬草百科』新星図書
次田真幸 1977『古事記（上）全訳注』講談社学術文庫
当間清弘 編 1960『御膳本草』当間清弘

得能壽美 2007『近世八重山の民衆生活史　石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク』榕樹書林
中須賀常雄 1995「沖縄のマングローブ」『植物の自然誌　プランタ第 40 号』研成社
中鉢良護 1933「王府の暦をめぐる諸問題」『沖縄文化』77 号『沖縄文化』編集所
名護市史編纂室 1997『山原の祭りと神歌』名護市教育委員会
仲原善忠 1977『仲原善忠全集　第二巻』沖縄タイムス社
中村　明 1977『比喩表現辞典』角川書店
名越左源太　国分直一、恵良宏校注 1984 『南島雑話　1　幕末奄美民俗誌』『南島雑話　2　幕末奄 美民俗誌』平凡社
中西弘樹 1994『種子はひろがる　種子散布 の生態学』平凡社
西岡敏『波照間方言のことわざ集−『波照間島の歴史・伝説考−仲本伸幸遺稿集−』を元にしての音声記号の試み−』
野本寛一 1989『軒端の民俗学』講談社学術文庫
熱帯植物研究会編 1984『熱帯植物要覧』大日本山林会
日本放送協会編 1993『日本民謡大観（沖縄　奄美）』NHK 出版
波照間永吉 1982「八重山歌謡の歌形の諸相」法政大学沖縄文化研究所
http://hdl.handle.net/10114/1236
波照間永吉　1999「第 3 章第 1 節　八重山歌謡の形態」『南島祭祀歌謡の研究』砂小屋書房
波照間永吉編 2007『琉球の歴史と文化『おもろさうし』の世界』角川学芸出版
波照間永吉 2013「「世ば稔れ」考」『沖縄文化』114 号−115 号　沖縄文化協会
比嘉　実 1982『古琉球の世界』三一書房
藤井貞和 1980『古日本文学発生論　記紀歌謡前史』思潮社
外間守善編 1971『日本庶民生活史料集成　第 19 巻　南島古謡』三一書房
外間守善・新里幸昭 1978『南島歌謡大成Ⅲ　宮古篇』角川書店
外間守善・宮良安彦 1979『南島歌謡大成　Ⅳ　八重山篇』角川書店
外間守善・玉城政美 1980a『南島歌謡大成Ⅰ　沖縄篇 上』角川書店
外間守善・比嘉実・中程昌徳 1980b『南島歌謡大成Ⅰ　沖縄篇 下』角川書店
細見末尾 1992『古典の植物を探る』八坂書房
前新透　波照間永吉･高嶺方裕･入里照男 編　2011 『竹富方言辞典』南山社
牧野富太郎 1982『原色牧野植物大図鑑』北隆館
満久崇磨 1985 『仏典の植物』八坂書房
松井　健 1983「タカラガイの修辞学」『自然認識の人類学』どうぶつ社
松村　明 監修 2012「デジタル大辞泉」小学館　http://japanknowledge.com
宮城　文 1985『八重山生活誌』私家版
宮城信勇 2003『石垣方言辞典』沖縄タイムス社
宮良當壮 1980『宮良當壮全集８　八重山語彙　甲篇』第一書房
宮良當壮 1983「八重山諸島物語」『宮良當壮全集 18』第一書房
盛口満・安渓貴子 編 2009『聞き書き・島の生活誌②　ソテツは恩人　奄美の暮らし』ボーダイング社
森田孫榮 1999『八重山芸能文化論』森田孫榮先生論文集刊行事業委員会
森田勇造 2001 『アジア稲作文化紀行』雄山閣出版

柳田国男 1978「海上の道」『海上の道』岩波文庫　　*初出　1952 年『心』5 巻 10･11･12 号
柳田国男 1978「人とズズダマ」『海上の道』岩波文庫　　*初出　1952 年『自然と文化』3 号
柳田国男 1978「宝貝のこと」『海上の道』岩波文庫　*初出　1957 年『文化沖縄』2 巻 7 号沖縄文化協会
柳田国男 1986『民間伝承論』第三書館
柳田国男 1990「民謡の今と昔」『柳田国男全集 18』ちくま文庫　*初出 1926 年「詩歌時代」
柳田国男 2011『野草雑記・野鳥雑記』岩波文庫　　＊初出　昭和 11 年（1936 年）「野草雑記」『短歌研究』改造社
山里純一 2000「八重山歌謡に見える動物」『日本東洋文化論集６』琉球大学法文学部紀要
山里純一 2008「八重山歌謡に見える植物」『日本東洋文化論集 14』琉球大学法文学部紀要
山城　浩 1972 『小浜島誌』小浜島郷友
山田孝子 2012『南島の自然誌−変わりゆく人　植物関係』昭和堂
山田龍雄・飯沼二郎・岡光夫　1983『農務帳･耕作下知方並諸物作節附帳・寒水川村金城筑登之親雲上耕作方相試田地奉行所へ申出之條々・安里村高良筑登之親雲上田方幷芋野菜類養生方大概之心得・西村外間筑登之親雲上農書・八重山嶋農務帳・農業法・椎葉山内農業稼方其外品々書付』日本農書全集　34　農産漁村文化協会
屋比久壮実 2008『海岸植物の本』アクアコーラル企画
湯浅浩史 1933『植物と行事』朝日新聞
湯浅浩史 2000『瀬川孝吉　台湾先住民写真誌　ツオウ篇』南天書局有限公司
吉山口徹・小林隆太編 2016『石垣島の景観史研究(1)−名蔵地区の浅層ボーリングと低地発掘調査−』慶應義塾大学民族岳考古学研究室小報 14
吉本隆明 1994『初期歌謡論』ちくま学芸文庫　筑摩書房
H&A モルデンゲ　奥本裕昭　編訳 1981『聖書の植物』八坂書房
DVD 資料
波照間永吉監修・執筆　大城学、山城直吉執筆 2012a『沖縄の古謡　八重山諸島編　中巻　−西表・波照間・新城−　』(公財)沖縄文化振興会
波照間永吉監修・執筆　大城学、山城直吉執筆 2012b『沖縄の古謡　八重山諸島編　下巻　−竹富島・黒島・小浜島・鳩間島・与那国島−　』(公財)沖縄文化振興会

八重山歌謡の植物歌資料

凡　　例

＜表の目的＞

＊「八重山歌謡の植物歌資料」は『南島歌謡大成　Ⅳ　八重山篇』（外間他　1979）より、植物を含む歌謡を抽出して作成した一覧表である。一覧表は八重山歌謡に用いられている植物と歌謡名とその植物を含む詞章を示し、本稿の基礎的な資料にすることを目的としたものである。以下の文中では、『南島歌謡大成　Ⅳ　八重山篇』は「テキスト」と記し、「八重山歌謡の植物歌資料」は「表」と記す。

＊ 第１章 第３節 「2. 抽出した植物の概要」で示した＜表２　テキストから抽出した植物と出現数＞（本稿 p.23）は、この植物歌資料を基に、謡われている植物を簡単にまとめたものである。

＜表の内容について＞

＊ 表の内容は、基本的資料（テキストの記載から抽出して転記した）と、参考事項（筆者の分析のための覚え書き）とが含まれる。

＊ 基本的資料の項目と内容は、テキストから考察に必要な事項を転記している。

- 「出現数」･･･テキストに用いられている件数
- 「植物名（和名）」･･･歌にみる植物の和名。植物方言辞典、方言辞典、『八重山歌謡』（喜舎場 1970a・b）、『宮良當壮全集 ８ 八重山語彙　甲篇』（宮良　1980）、『八重山生活誌』（宮城　1985）等々他、テキストに記された歌の訳語、 歌の内容等により判断したものである。
- 「テキスト語形（方言名）」･･･歌にみる島や村の言葉による植物の呼称。接頭語･接尾語をともなって歌われているものがある。そのため、接頭語･接尾語には（ ）を付して記載している。
- 「歌謡名」･･･植物名を含む歌謡のタイトル
- 「地域」･･･歌を伝承している地域名
- 「テキスト記載頁」･･･歌の冒頭が記載されている頁
- 「ジャンル」･･･テキストによる歌謡の分類名。テキスト内のジャンルの呼称は、目次・ 本文・解説の各記述で異なるものがあるが、表内では「カンフチィ」、「ユングトゥ」と記載する。
- 「植物の詞章」･･･ 植物を含む詞章を転記した。
  漢字、ひらがな･カタカナ等の仮名遣いの記載は、テキストに準じている。

囃子は省略したものがある。歌の詞章の記載方法は、始めに原歌を記載して、その後に、：を付した「」内に訳文を記している。紙面の関係上、振り仮名は、漢字の後に( )で記し、句の改行は適宜おこなっているので、テキストの記載とは異なる。また、テキストでは、漢数字による＜節番号＞が記されているが、表内では算用数字を使用している。

〈記載例〉　　「節じらば」石垣島川平村　p189 より

3　だでふ茎玉水①（ふきたまみぢ）　ふきたまる玉水　ふきたまる玉水三①（みい）なでさびら　ヨンナ②：「タデフ〈植物名〉の茎に溜まる玉水茎に溜まる玉水　茎に溜まる玉水で　身撫でしようヨンナ」

上記の①はふりがな、②は歌の訳。

＊ 参考事項の項目の内容は、筆者の考察の覚書として記したものである。

- 「植物の表現」･･･項目に挙げた植物と関係のある事項について記した。
- 「キーワード」･･･歌全体を対象に、内容・背景他関連する特記事項を記した。

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	1	オオハマボウ	よなかじ	ざんとぅりぃゆんた	新城島	450	220	ユンタ	2　しるび山　まりやあらぎ　あだに山　まりやあらぎ：「しるび<未詳>の山を廻り歩き　アダン<植物名>の山を廻り歩き」 3　あだなしば　きりとぅし　よなかじぱ　ばきぃとぅし：「（アダンの気根を）切り　（オーハマボウの）表皮を剥ぎ」	＊対語　あだなし(アダンの気根)／よなかじ(オオハマボウ) *漁労の叙事のモチーフ 「山入り→植物から繊維を取る→網を作る→漁に出る→豊漁」	実用・漁労道具(漁網作り)の民俗・叙事展開・ジュゴン漁・漁労儀礼＋滑稽譚
2	1	オガダマノキ	どぅすぬき	いきぬぼうじぃゆんた	石垣島平得村	365	100	ユンタ	24　片目（かたみ）から　どぅすぬ木　片耳から　とぅむぬ木：「片目からはドゥスヌ木が　片耳からはトゥムヌ木が（生え）」 26　かいしゃ生（む）いたる　どぅすぬ木　ちゅらささすだる　とぅむぬ木：「美しく生えたドゥスヌ木　美しく差したトゥムヌ木」 27　取りはだぬ　どぅすぬ木　生りはだぬ　とぅむぬ木：「伐り時期のドゥスヌ木　生まれ時期のトゥムヌ木」	＊対語　どぅすぬき（オガタマノキ）／とぅむぬき（タブノキ） ＊霊性（死体植物化生） ＊有用　船材	実用・船材・植生・樹木の霊性（死体植物化生）・婚姻と死・女性の山ごもり
3	1	カキノキ	かき	ぎさまじらば	波照間島	283	125	ジラバ	6　かきとらば　ぎざまや　ヨーホ　あはまむから　ぶりやわりよ：「柿をとるなら　義佐真はヨーホ　あまいものから折っていらっしゃい」	＊対語　むん（ヤマモモ）／かき（柿） ＊食の民俗・山入りと木の実の採取 cf. →p423-181	実用・食用・採取の民俗・男女の問答
4	1	ガジュマル	がじまる木（きー）	びんに木ぬゆんた	竹富島	425	184	ユンタ	4　がじまる木（きー）ぬ　むいやよー　石（いし）ぬ上（うい）　たゆりどぅ　むいやんせー：「ガジマル木の生えは　石の上を辿って生えているよ」	＊列挙　びんに木（ヒルギ）・まがり木・すんむとぅ木（オオタニワタリ）・がじまる木 ＊具象表現「植物の生態（曲がり）→人の曲がり」	概念的・ことわざ・「曲がり」の具象表現・樹木の生態→人
5	1	キノコ	なば	んめーまゆんた	石垣島平得村	367	102	ユンタ	6　馬ぬふしゆ　やりばどぅ　なばば生（む）や　うらりる：「馬の糞であれば、きのこが生えても居れる」	＊物語り ＊対句　ばな（コウジカビ）/なば（キノコ） ＊具象「行き遅れ」→「菌類（味噌にコウジカビがはえる）	概念的・具象「菌類→人」・婚姻の民俗
6	1	クチナシ	むろんぎ	豊年祭の時の神歌 （5）赤また・黒またのそれぞれの一団が家々を訪れる時の歌	小浜島	414	167 (5)	ユンタ	3　むろんぎや　はなさかち　ちゅらさあしが　さちちゅらさ　あしが　なりやねーぬ：「クチナシは花を咲かせ美しくあるが　咲き清らさあるが　果実はない」	＊対比　むろんぎ（クチナシ）／うにてー（ダイコン） ＊具象表現「花は咲いても実がならない」植物の生態→人の有り様」	概念的・教訓・神歌・「花は咲いても実がならない」の具象表現・「植物生態→人」
7	1	クロヨナ	うかば木（うかばきー）	金杖ぬ老人	石垣島大川村	128	17	ユングトゥ	うかば木（きー）ぬ　梢端（すらばんた）に　実（なりい）や青（あう）　花（ばな）や白（しる）くぬみ：「ウカバ木の梢端に　実は青く　花は白く咲き」	＊物語り ＊植物の慣用句的表現「青い実と白い花」 ＊滑稽譚（ゆんぐとぅの語り）	植物表現の慣用句・老人・揶揄・滑稽・木と鳥
8	1	グンバイヒルガオ	はまはざ	南風保多ふんたか	竹富島	147	59	ユングトゥ	浜はざ　とうるにん　とんなき：「浜かずらを　手繰るようにとり」（p149）	＊物語り ＊「手繰る」動作の具体事例→植物(蔓を手繰る動作)	物語り・造船・航海・交易・頸飾り・勾玉・神との問答
9	1	ゲットウ	かさ	米のらばぬゆんぐとぅ	西表島祖納村	136	34	ユングトゥ	6　はるいどぅば　はるいどぅばぬよ　はるぬいでぃすや　ばさぬば　かさぬば　とぅちき　ぶなりたみす：「野原に出るなら　野原に出るなら　芭蕉の葉　月桃の葉を取って姉妹の為をする」	＊対語　ばさぬば（バショウの葉）/かさぬば（ゲットウの葉） ＊山入りの姉妹への土産物	実用・農耕作物と野生植物の採取生活の豊穣・山入りと採取の民俗・擬態や擬音の愁りの表現
10	1	コシダ（又はタケ）	ばらびんだま（巌玉）	あんがろーまあよう	石垣島宮良村	164	23	アヨー	4　ばらびん玉　ふだじぃばし：「巌玉を踏み石にして」 5　ふにぶん玉　びしい（礎石）ばし：「九年母を礎石にして」	＊家の建築の叙事 ＊対語　ばらびん玉(巌玉)／ふにぶん玉（九年母玉) ＊柱の「土台」の美称辞表現 頭飾りの植物素材→（霊性）→礎石の美称	概念的・建築・叙事的な儀礼歌・霊性・美称・頭飾りの素材
11	1	サトイモ	むじぃ	ばーれー唄 （ハ）ベンサー	黒島	604	22	豊年祭	2　んまがらぬ　色だぎぃ　なじぃむじぃぬ　むよだきべんさ：「黒次（植物名）の色のように　夏の里芋の模様のように　ベンサー」	＊対句　んまがら(黒次)/むじぃ（里芋）　出現は、クロツグとの対句のみ ＊植物の色彩（黒次と里芋の色は同じ）→爬竜船の色	概念的・ハーリー行事・豊穣祈願

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
12	1	シマミサオノキ	だしきゃ木	うんだまり〈ゆんた〉	竹富島	431	192	ユンタ	8　だしきゃ木（きー）や　叔母（ぶばま）しょうり　巻や来（く）うで：「ダシキャ〈植物名＞木は叔母が巻いて来いと」	＊対句　あでふ(アデク）／だしちゃ（シマミサオノキ） ＊山仕事で採取、「あでふ」・「ダシチャ（シマミサオノキ）」の樹木の切り出し。 ＊2種とも有用植物。沖縄では、霊性を持つとされる植物。	概念的・象徴・継子・婚姻
13	1	シュロ(金)	しゅるん（がに）	家造りじらば やーすくりじらば	波照間島	283	126	ジラバ	11　ゆちぃるでぃそうや　なうばし　しゅるんがにば　ゆちぃるし：「桟というのはどうして　棕櫚（しゅろ）金を桟にして」	＊新築の家褒め ＊列挙　建築順に各部の材を美称「叙事的表現」「美称」を連ねた祝の意を込めた呪的歌謡。	実用・建築材・叙事と美称・予祝・建築の民俗
14	1	ダイコン	うにてーー	豊年祭の時の神歌 （5）赤また・黒またのそれぞれの一団が家々を訪れる時の歌	小浜島	414	167 (5)	ユンタ	4　うにてーぬ　うには　ういていん　ふあなさちゅるめーひんど　さちる:「大根の根は　老いても　花は咲くもっと咲く」	＊列挙 ＊具象表現「植物の生態（根と花）→人の理想の様／子孫繁栄 ＊クチナシ(花は咲くが実がならない）との比較	概念的・象徴「生態と「子孫繁栄」」
15	1	ダンチク	タデフ	節じらば	石垣島川平村	189	4	ジラバ	3　だでふ茎玉水（ふきたまみち）　ふきたまる玉水　ふきたまる玉水　三（みい）なでさびら　ヨンナ：「タデフ〈植物＞　の茎に溜まる玉水　茎に溜まる玉水　茎に溜まる玉水で　身撫でしよう　ヨンナ」	＊「たでふ」（ダンチク）の霊性。霊性のある植物に溜まった水で、身を清める　ご主人様の果報を表現する。褒め歌。 ＊「霊性の植物」「水で清める」	霊性・身を清める・寿歌
16	2	茶	茶	慶田盛ぬこんちゃーまゆんた きだむるぬこんちゃーまゆんた	竹富島	426	186	ユンタ	14　中ぬ屋（やー）べーり　茶飲（ちゃーぬ）み　あしばよー：「14中（なか）の家（やー）に入り　茶を飲んで　遊ぼうよ 15　茶（ちゃー）てぃそーや　慶田盛（きだむる）ぬ生い草（むいくさ）よー　：「茶というのは慶田盛（けだもり）家の　生え草よ」	＊対語　茶／タバコ ＊男性を誘う嗜好品	実用・食用・採取の民俗・男女の習俗（誘惑）
17	1	ツタ(未詳)	いしやらむとぅ	野底ばまあゆ ぬすくばまあゆ	波照間島	184	71	アヨー	2　古見（くん）あがいしに　むいたる　いしゃらむとぅぬ　うやばしぃぬ　うどぅとぅらりるまでぃん　んぞとぅばんとぅや　ぬがらるぬ：「古見（こみ）村の赤い石に生えた　イシャラムトゥ〈蔦〉が公用船の竜骨材にとれるまでも　あなたとわたしとははなれられない」	*列挙　（デイゴ・いしゃらむとぅ・イヌマキ） ＊具象　植物（ツタが船の竜骨材に成長する＝「あり得ないこと」）→男女の中が離れられない。	概念的・「あり得ない」の具象
18	1	テリハノブドウ	かにふ葛（かざ）	松金じらば まつんがねーじらば	石垣島川平村	193	9	ジラバ	4　桁（きいた）でぃすや　かにふ蔓（かざ）やだそうぬ:「桁というのはカニフ〈植物名＞葛であったそうな」	＊建築材の列挙　カニフ（テリハノブドウ）の桟他6種の植物名 ＊建築資材の対比で物語る出世物語り。 穴堀屋／七貫家 ＊カニフ（テリハノブドウ）の桟	実用・建築材・身分・出世譚・美称無し
19	1	ノブドウ (又はエビヅル)	（うん）かにふん	しやがむやー	石垣島石垣村	337	59	ユンタ	14　目ゆ見りば　くれなう：「目をみるとこれこそ」 15　うんかにふん　かわらぬ：「野葡萄に似ている」	＊具象　人の目→野葡萄・その他アワ・ふがら(クロツグの毛）等。 ＊「人体の各部→植物・昆虫他＜もの＞の形質」。ここでは、特に性の描写がされている。	概念的・具象「女性の目」
20	1	パパイア	まんじゅまい	盆和物献上祝詞 ぶんぬーすぬちきどうき	石垣島大川村	44	29	ニガイフチィ	6しちぬなりむぬ、さかいぬ、まんじゅまい：「季節の実り物　栄えのパパイア」	＊列挙　供物の次第、名挙げ。イボグサ・ボタンニンジン・ウミミズナ・ツノマタ・オゴノリ・パパイア・モヤシ・ニンニク ＊霊性、「神の和物」	実用・供物(野菜・海藻・魚等季節の生り物他）・霊性
21	1	ハリツルマサキ	まく	たからくぢゆんぐと	小浜島	140	44	ユングトゥ	まくぬなり　あかすたんだり　なりぶり　うりふぉんで：「まくが熟れており　赤く熟れており　それを食べようと」	＊物語り・滑稽譚 ＊鳥と木と老人 ＊ハリツルマサキ（方言名「まくう」）の赤い実	概念的・老人の表象「杖の材」・鳥と木と老人の滑稽譚
22	1	ホソバワダン	んがな	山崎ぬじらば	石垣島白保村	234	58	ジラバ	12いかぬ　ちにやんど　しかさりだ：「いかなるわけで賺された」 13「んがな　ふきぬ　ゆやんど　とんな　ふきぬ　ちにやんど：「にが菜の茎のゆえに　ノカラシの茎のゆえに」	＊和え物	実用・和え物・習俗

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
23	1	ヤマブドウ	しぶりかにん	だとだき〈その１〉	与那国島	113	8	ヤータカビ	13 しぶりかにんば いとにし：「ヤマブドウ（の蔓）を糸にして」	＊列挙 建築資材。 ＊美称	実用・建築材・叙事と美称・予祝・建築の民俗
24	1	ヨモギ(未詳)	ふちふき	山かしぬあよう	小浜島	168	33	アヨー	3 ふちふきぬ 根うりや 石ぬ上にと 根うりす：「フチンの茎の根下りは 石の上に根がおりる」	*列挙 「根下り」山樫・アサングル・ヨモギ・ツル瓶・人。 *様式 「植物→物→人」	概念・具象表現「根下り」
25	1	ラッキョウ	いらっきょう	まかるせーぬじらば	小浜島	248	80	ジラバ	4 いらっきょう畑 ばりいで：「ラッキョウ畠に行き出て」	*物語り（畑仕事と男女の出会い）	実用・畠の作物・民俗
26	1	リュウキュウコクタン（山地性）＊別名 ヤワラケガキ	だまきだ	ながなん〈どんた〉	与那国島	459	232	ユンタ	6 だまきだし はでふに すがるきし うきんに：「山キダ〈植物名〉で造った船 スガル木で造った船」	＊対句 だまきだ（山きだ）／すがるき（スガル木） 船の材	実用・船材
27	1	ウミミズナ	いんみずな	盆和物献上祝詞 ぶんぬーすちきどうき	石垣島大川村	44	29	ニガイフチィ	4 海（うみ）ばた、島（しま）ばたなんが、かんぬまいぬつくりとーれーり、むたいさかいしょーる、いんみずな、かんずーういずー：「海端、島端、神の前が作りなさった もたえ栄えなさる ウミミズナ＜植物名＞神の和物 上の和物」	＊列挙 供物となる和え物の素材。イボグサ・ボタンニンジン・ウミミズナ・ツノマタ・オゴノリ・パパイア・モヤシ・ニンニク ＊素材の神聖。「神が育てる／もたる・え・竜宮の神が撫で育てる等々。 ＊「食と供物の民俗」。	実用・食用・供物の民俗・霊性
28	1	オゴノリ	かーな	盆和物献上祝詞 ぶんぬーすちきどうき	石垣島大川村	44	29	ニガイフチィ	5 りゅうぐうぬ神ぬ、なでぃすだてーしとーれーり、むたいさかいぬいし、かーな：「竜宮の神が なで育てしなさり もたえ栄えのイーシー〈ツノマタ＝海藻〉カーナ〈オゴノリ〉	＊列挙 供物となる和え物の素材。イボグサ・ボタンニンジン・ウミミズナ・ツノマタ・オゴノリ・パパイア・モヤシ・ニンニク ＊素材の神聖。「神が育てる／もたる・え・竜宮の神が撫で育てる等々。 ＊「食と供物の民俗」。	実用・食用・供物の民俗・霊性
29	1	ツノマタ	いーしー	盆和物献上祝詞 ぶんぬーすちきどうき	石垣島大川村	44	29	ニガイフチィ	5 りゅうぐうぬ神ぬ、なでぃすだてーしとーれーり、むたいさかいぬいし、かーな：「竜宮の神が なで育てしなさり もたえ栄えのイーシー〈ツノマタ＝海藻〉 カーナ〈オゴノリ〉」	＊列挙 供物となる和え物の素材。イボグサ・ボタンニンジン・ウミミズナ・ツノマタ・オゴノリ・パパイア・モヤシ・ニンニク ＊素材の神聖。「神が育てる／もたる・え・竜宮の神が撫で育てる等々。 ＊「食と供物の民俗」。	実用・食用・供物の民俗・霊性
30	1	酒粕	さきぃばな	かどぅかーれゆんた	石垣島新川村	311	27	ユンタ	3 みしゅこーじぃーぬ むゆるけん さきぃばなぬ ばだるけん サー たーかいどぅぬけよ：「味噌麹が生えるまで 酒糀の渡る〈できる〉まで サー 誰に退けるね」	＊物語り ＊対句 みしゅこーじ（味噌麹）/さきぃばな（酒麹） ＊具象「行き遅れ」→菌類（麹・酒粕ができる＝発酵する）	概念的・具象「菌類→人」・婚姻の民俗
31	1	ジンコウ(沈香)	じんきやら(沈香、伽羅)	すゆるぎ	与那国島	457	231	ユンタ	4 かぬさす にほひや じんきやらぬ かだどす：「いとしい者の匂いは 沈香 伽羅の匂いがする」	＊具象「産褥妊婦の香り／沈香・モロコシソウ」。妻と賄い女との比較を、香りで表現。。	概念的・植物の匂い・「乙女の匂い」の象徴

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	植物方言名(テキスト語形)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	2	アキノノゲシ	とぅの一菜	兄と妹 びぎりやとぶなりや	石垣島大川村	127	14	ユングトゥ	真地這（まーぢーべー）入り　とぅの一菜茎（なーふきい）　選（いら）び摘（つ）み：「真地（まーじい）＜地名＞に行って、トゥノーナ＜植物名＞の茎を選んで摘み	＊対語　いしゃぬめーの根／トゥノー菜の茎 ＊食の利用　摘み菜と和え物 ＊有用	日常の景・食の景・和え物・
2	2	アキノノゲシ	とんな	山崎ぬじらば	石垣島白保村	234	58	ジラバ	12　なゆぬ　ゆやんど　だまさりだ　いかぬちにやんどしかさりだ：「何のゆえに騙された　如何なるわけで　賺（すか）された） 13　んがな　ふきぬ　ゆやんど　とんな　ふきぬちにやんど：「苦菜（にがな）の茎のゆえに　ノカラシの茎のゆえに」	＊対語　とんな／んがな ＊有用　和物の材	男女の習俗・夜這い・食の景・和え物・問答
3	2	アブラナ	なーろーだに/ほーだに	物種の神口＜穀類の神詞。願い口＞ むねだにぬかんふち	竹富島	80	122	ニガイフチィ	5　長呂種（なーろだに）　穂種（ほーだに）　丸呂種（まろーだに）種袋（たにぶくろ）：「菜種　菜穂種　粟種　種粟」	＊作物の種子の名挙げ。種子の名前を唱えて敬意を伝える呪的表現。 ＊有用・栽培作物の種子	作物の豊穣・農耕儀礼・名挙げ（種子名）呪的唱え・美称・尊称「真」「白」「香
4	2	アブラナ	なーぬ花	松金真ゆんた まつがねまゆんた	竹富島	429	190	ユンタ	28　黄色（きる）いちゅや　なーぬ花（はな）たらし：「黄色絹は　菜の花のように	＊具象。植物の「色彩」の鮮やかさ→（名声）抽象（黄色絹＝ナノハナの色彩）→抽象（名声） ＊列挙　華やか・名声等 ＊→芽の花/クワズイモの山/なの花	立身出世・貧→冨・住居の変化、概念・具象「色彩」の鮮やかさ→（名声）抽象・美称無し
5	2	イボグサ	いしゃーぬめー	盆和物献上祝詞 ぶんぬーすーぬちきどうき	石垣島大川村	44	29	ニガイフチィ	2　たばるはたぎなんが、神ぬまいぬつくりとーれーり、地（じ）ーぬ神（かん）ぬむたいさかいぬ、　いしゃぬめーかんずー　ういずー：「田原畠で　神の前が作りなさった　土の神がもたえ栄え＜繁茂＞させたイボタグサ＜植物名>神の和物　上の和物」	＊列挙　イボグサ・ボタンニンジン・ウミミズナ・ツノマタ・オゴノリ・パパイア・モヤシ・ニンニク等 ＊供物（和え物）の素材の神聖を讃える。「神が育てる／もたえる・竜宮の神が撫で育てる等々。	有用・食用・儀礼歌（新築落成の祝詞）・霊性の根拠・食と供物の民俗
6	2	イボグサ	いしゃーぬめー	兄と妹 びぎりやとぶなりや	石垣島大川村	127	14	ユングトゥ	長間（なーま）出でえ　いしゃぬめー本（むと）選（いら）び引き：「長間＜地名＞に出て　イシャヌメー＜植物名＞の根を選んで引き」	＊料理して食べる。 ＊日常生活を謡っている。 ＊対句　いしゃぬめー（イボクサ）／とぅの一菜（アキノノゲシ）	有用・食用・
7	2	ウラジロエノキ	山ふくん	まんのーまくあゆー>	竹富島	172	43	アヨー	3　山（やま）ふくんに　ぬいてぃ生（ま）り　まんのーま：「山福木（やまふくぎ）のようにぬきんでた生まれマンノーマ」	＊「やまふくん」=（ぬきんでた）の具象→「人（ぬきんでた人）」マンノーマの出自を表す。 ＊対句　やまふくん／野の槇	概念・具象「ぬきんでた」・役人の誉め歌・親と子の在り方の教訓（親と子の在り方）
8	2	ウラジロエノキ	やまぶくん	松金じらば まつんがねーじらば	石垣島川平村	193	9	ジラバ	9　桁（きいた）でぃすや　山福木（やまぶくん）取（とう）り出（だ）し：「桁というのは山福木を取り出し」	＊列挙 ＊建築材　→アダン・（カニフ）葛・アシ・ヤマイクギ・山福木・槇木 ＊建築材が身分を表す	有用・穴掘り屋／貫屋・身分・社会的価値（高）・立身出世譚
9	2	クワズイモ	びゆる	さしにがんあゆう	黒島	180	62		4　青ぼんに　シタリヨウホ　びゆる山　たらしようりヨウホ：「青苧麻に　シタリヨウホ　ビユリヤマ（のように）垂らせなさり」	＊列挙　赤チョマ・デイゴ／青チョマ・ビユル山（慣用句的）：cf.びゆる「松金真ユンタ」　びーる（p429 190 ） ＊植物＝（女性の手仕事）→　（家に根付く）	概念的・具象「家に根づく」・教訓（嫁の在り方）

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	植物方言名 (テキスト語形)	歌謡名	地域	ページ ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
10	2	クワズイモ	びーる	松金真ゆんた まつがねまゆんた	竹富島	429	190		27　青（あう）いちゅや　びーる山（やま）たらし：「青絹は　くわずいもの山のように	＊列挙　家の材による身分の対比 ＊（白絹・赤絹・青絹・黄色絹） 青絹＝クワズ芋の山（艶のある緑の葉が繁茂する様子）=象徴→（松金が）評判になる。 ＊白絹＝茅の花・赤絹＝梯梧の花・黄色絹＝菜の花	概念的・穴掘り屋／貫屋・身分・社会的価値・立身出世譚
11	2	トウツルモドキ	くうじ	南風保多ふんたか	黒島	147	59	ユングトゥ	余（あま）ぬ嬉（さにや）ん　家（や）な上（ぬー）り来（き）　割（ばる）くうじにん　腹上（ばたうい）なり：「余りの嬉しさに　家に帰ってきて、割ったトウツルモドキ<植物名>のように腹を上にして」	＊長編物語・滑稽譚 ＊具象「植物（利用の）形態→人の寝姿）」 ＊ハマカズラも。植物だけではなく、ナマコや蛸も同様な表現法	概念・具象（寝姿）・神と対話・八重山と宮古の交易・勾玉の交易
12	2	トウツルモドキ	くちぃ	家造りじらば やーすくりじらば	波照間島	283	126	ジラバ	12　くちぃでぃそうや　なうばし　かきんがにば　くちぃばし：「葛というのはどうして　掛け金を葛にして	＊列挙　家の材の誉め歌・美称	新築儀礼・家の構造・列挙
13	2	ハマユウ（ハマオモト）	はまさき	南さこだじらば	小浜島	249	81	ジラバ	13　はまさきぶ　さびしかぬ　生りやだそ：「浜木綿のような　真白い　生まれであったよ」	＊具象表現　ハマユウ（の茎）の白さ→人の生まれの清らかさ ＊<植物→人> ＊対句　浜木綿／烏賊の鞘(甲)	生まれ・身分・賄い女・物語
14	2	ハマユウ（ハマオモト）	さでぃふきゃ	んざとうらじるくぶしゆんた	黒島	445	215	ユンタ	21　さでぃふきゃば　かぶしぃめば　あきゆ取り：「ハマユウをかぶしぃ（頭上運搬具）目を的（まと）にして」 22　さでぃふきゃや　かぶしぃみぬ　ぱしから：「ハマユウのかぶしぃ目の端から」	＊有用 ＊実景　道具	私生児・嫁求め・道具の民俗・物語
15	2	フカノキ	あさんぐる木（きー）	山かしぬあよう	小浜島	168	33	アヨー	2　あさんぐる木ぬ　根うりや　山ぬ頂にと　根うりす」：「アサングル木の根下りは　山の頂に根が下りる」	＊列挙 ＊具象表現　生態（頂に生える）→適地に根下りする	具象の列挙・根下り・人生訓
16	2	フカノキ	あさんぐる木	山樫木あゆー（結婚祝いの歌） やまかちにあゆー	竹富島	171	40	アヨー	2　アサングル木（きー）や　山頂（やまちじ）にどぅ　根下（にーう）りる：「アサングル木や　山頂に根が下りる」	＊列挙 ＊具象表現　生態（根下り）→適地に根下りする	具象の列挙・根下り・人生訓
17	2	ヘチマ	なべら	ゆびが夜ゆんぐどぅ ゆびがゆゆんぐどぅ	波照間島	152	66	ユングトゥ	9　しぶるにし　ふくたどぅり　なべらしに　ましぃたどぅり　おれらば：「夕顔のようにでこぼこを辿って　へちまのように垣を辿っておいでになったなら」	＊具象表現　生態（蔓が石垣を伝う）→石垣を辿ってでも来て欲しい、女性の気持ち ＊対句　ヘチマ／ユウガオの蔓	男女の問答歌・生態・風土の景(石垣)・自家栽培
18	2	ヘチマ	なべら	ばがたるまゆんた	石垣島白保村	383	127	ユンタ	3　ちぶるてに　ぱいなぱいな　ばや行き：「夕顔の蔓のように　進みに進み　進み行き」 4　なべらてに　ゆりなゆりな　ゆり行き：「ヘチマの蔓のように　寄って寄って　寄って行き	＊具象表現（蔓が石垣を伝う）→のぞき見行動　石垣沿いにのぞく ＊対句　ヘチマ／ユウガオの蔓	男女の問答歌・生態・風土の景
19	2	モヤシ	まみな	盆和物献上祝詞 ぶんぬーすぬちきどうき	石垣島大川村	44	29	ニガイフチィ	7　まりむぬ　まりまみな：「生まれもの　モヤシ」	＊列挙　イボグサ・ボタンニンジン・ウミミズナ・ツノマタ・オゴノリ・パパイア・モヤシ・ニンニク ＊霊性　供物に供える和え物になる	有用・食用・供物

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	植物方言名(テキスト語形)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
20	2	モヤシ	まみな	なーしなむらじらば	石垣島大浜村	215	32	ジラバ	17　ゆーすい　まみなーぬ　生（む）いるんな：「湯をかけた　もやしが　生えるものか」	＊植物=（モヤシの生育）→教訓的具象。「湯を掛けたモヤシは生えない」夫婦の仲はもどらない。 ＊逆接的仮定語	概念的・教訓・食用・和え物
21	2	モロコシソウ	すりばんだ	すゆるぎ	与那国島	457	231	ユンタ	3　みやらびぬ　かだや　すりばんだ　かだどす：「乙女の匂いは　すりばんだ（モロコシ草）のにおいがする」 4かぬさす　にほひや　じんきやらぬ　かだどず：「愛しい者の匂いは、沈香　伽羅の匂いがする」	対句　a.すりばんだ／沈香・伽羅 b.愛しい者／家の妻 c.＜すりばんだ／沈香・伽羅＞／産褥妊婦の匂い *対句と対語の構造	概念的・植物の匂い・「乙女の匂い」の表象
22	2	モロコシソウ	そよりまんた	すゆりでぃぬどぅんた	与那国島	461	236	ユンタ	4　うみやすぬ　かだいや　そよりまんた　かだいどぅす：「思っている者のにおいは（モロコシ草）の匂いがする」	対句　産褥妊婦の匂い／そよりまんた（モロコシソウ）	概念的・植物の匂い・「乙女の匂い」の表象
23	2	ヤマイモ（山芋）	ぬよん	なかまいじらば	波照間島	280	121	ジラバ	14　ぴぎりやまや　かよんぷる　あしやらぐ：「兄は　山芋を掘りに　こう歩く」	ぬよん／かよん ＊男の山仕事、採取生活。	有用・採取
24	2	ヤマイモ（野芋）	かよん	なかまいじらば	波照間島	280	121	ジラバ	15　かぬしゃそや　ぬよんぷるんで　あしやらぐ：「愛しい人は　野芋を掘ると　こう歩く」	ぬよん／かよん	有用・採取
25	2	葦（網代）	しぬふ(葦を材とした建具名)	まちんがにゆんた	石垣島白保村	393	138	ユンタ	6 ぴたてでそ　しぬふひだて　やだら：「隔て（壁）というには　しぬふ（葦網代）の壁であったね」	＊列挙　建築材	有用・家の建築材
26	2	葦網代（カヤの筵）	ちにふ(葦を材とした建具名)	はいきだゆんた	新城島	452	223		5　なかやどぅや　ちぃにふやどぅば　あみたて：「中雨戸は　ちぃにふ（葦網）代雨戸を編みたてて」	＊列挙　建築材	有用・家の建築材
27	1	麹	こーじぃ	かどぅかーれゆんた	石垣島新川村	311	27		3　みしゅこーじぃーぬ　むゆるけん　さきぃばなぬ　ばだるけん　サー　たーかいどぅぬけよ：「味噌麹（こうじ）が生えるまで　酒糀の渡る（できる）まで　サー　誰に退けるね」 ＊「退ける」：嫁ぐの意。	＊物語り ＊対句　みしゅこーじ（味噌麹）/さきぃばな（酒麹） ＊具象「行き遅れ」→菌類（麹・酒粕ができる＝発酵する）	概念的・具象「菌類→人」・婚姻の民俗
28	1	コウジカビ	ばな	んめーまゆんた	石垣島平得村	367	102		5　むんすむん　やりばどぅ　ばなばむや　うらりる：「下味噌であれば、麹がびが生えても居れる」	＊物語り ＊対句　ばな（コウジカビ）/なば（キノコ） ＊具象「行き遅れ」→「菌類（味噌にコウジカビがはえる）	概念的・具象「菌類→人」・婚姻の民俗

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ	no.	ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	3	アデク	あでふーきー	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞<上の村> いぬちぃがふ（命果報）	石垣島川平村	27	1	カンフチィ	あでふーき、こーでーき、かーばたきー、ちきすぬ、かふーで、かんかざる、びんとぉーどう：「アデフ木、コーデ-木、カーバタ木（の杖）をつくことの果報だと、こう唱えます、」	＊列挙　あでふ・こーでーき・かーばたき ＊植物＝(杖・霊木）→長寿 ＊「こーでーき」「かーばたき」は未詳。	概念的・・杖の材・霊木・長寿の象徴
2	3	アデク	あでふぢー（き）	内原村の真世加那志の神詞<下の村> 御年新年（ふうどしぃみいどしぃ）	石垣島川平村	33	2	カンフチィ	あでふぢーちき、こーでぃぢーちき　しーおりたぼらりーぬ　かふでど、：「アデフ木（の杖を）、コーデ-木（の杖を）尽きなさる果報だと」	*植物＝(杖・霊木）→長寿 ＊列挙　あでふ・こーでーき・かーばたき	概念的・杖の材・霊木・長寿の象徴
3	3	アデク	あでふ木	うんだまりくゆんた>	竹富島	431	192	ユンタ	7　あでふ木（きー）や　叔父（ぶじやさ）しょうり　巻（ま）きや来（く）うで：「アデフ木は　叔父が採ってこいと」	＊山仕事	有用・継子の仕事・祝儀
4	3	オオタニワタリ	すんなー	あーば石ゆんぐとぅ	竹富島	144	52	ユングトゥ	穴（あな）ぬ　穴（あな）まがりゃー　すんなーぬ　すんまがりゃー：「穴の穴曲がり　大谷ワタリの寸曲がり」	＊語呂合わせの対語的表現。 ＊列挙の表現と最終節によって、それ以前の列挙を,心意の表現に結ビ付ける	語呂合わせ的対語
5	3	オオタニワタリ	スンムトゥ木	山樫木あゆー（結婚祝いの歌） やまかちにあゆー	竹富島	171	40	アヨー	3　スンムトゥ木（きー）や　石(いし）ぬ上（うい）にどぅ　根下（にーう）りる：「スンムトゥ木は石の上に　根が下りる」	*列挙 ＊「植物(＝根下り）→人(根付く）・祝の場	概念的・具象(根下り）・祝歌
6	3	オオタニワタリ	すんむとう木	びんに木ぬゆんた	竹富島	425	184	ユンタ	3　すんむとぅ木（きー）ぬ　むいやよー　木（きー）ぬはんた　たゆりどぅ　むいやんせー：「曲がり木の生えは　山の端を辿って生えているよ」	＊列挙 ＊植物(木の曲がり）→諺(人ノ曲がりは直せない）・　心意の説明の強化	諺の典拠
7	3	ボタンボウフウ（テキストの訳は「ボタンニンジン」）	さふな	盆和物献上祝詞 ぶんぬーすぬちきどうき	石垣島大川村	44	29	ニガイフチィ	３山ばた、きちばな、石ぬちじんが　かんぬまいぬすだてーとれーり、むたいさかいぬ　さふなかんずー　ういずー：「山端、崖上、石の頂に神の前が育てなさった　もたえ栄えのボタンニンジン　神の和物　上の和物」	＊列挙　供え物（イボグサ・ボタンニンジン・ウミミズナ・ツノマタ・オゴノリ・パパイア・モヤシ・ニンニク） ＊霊性	概念的・［繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼
8	3	ボタンボウフウ	チョウミグサ（長命草）	精進祓い そーじはらい	竹富島	78	116	ニガイフチィ	大畠（うふはて）一ぬ　石の上（いしぬうい）に　長命草（ちょうみぐ）ゆとり：「大畠の石の上の長命草を取り」	＊食材・儀礼用（お産の精進祝）	有用・食物・儀礼
9	3	ボタンボウフウ	長命草（ちょうみぐさ）	高盆ぬ願い口 たかぶんぬにがいふち	竹富島	90	153	ニガイフチィ	元石（むとういし）ぬ　上（うい）ぬ　長命草（ちょうみぐさ）ぬ九（くぬ）ちぬ　しゅないぬ盆（ぶん）　調（とうとうな）い：「元石の上の長命草の九つのあえものの盆を整え」	＊供物列挙	有用・食物・儀礼
10	3	マツ（リュウキュウマツ）	松	家よーたか	小浜島	112	6	ヤータカビ	14 松ぬ葉ば　かやばし：「松の葉を茅にして」	*家の屋根材として「よい」茅、誉め言葉	有用・家褒めの際の屋根の材・
11	3	マツ（リュウキュウマツ）	松	岡ぬ親方誦言 むるぬうやかたゆんぐとぅ	西表島祖納村	137	37	ユングトゥ	2　池ぬぱたぱたに　松うびてぃ　松ぬ枝にたかびしてぃ：「池の端々に松を植えて　松の枝に鷹を坐らせて」	＊鷹が来る松　の歌の場設定のモチーフ	物語りの景・マツと鷹の慣用

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ	no.	ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
12	3	マツ（リュウキュウマツ）	しん木松	出船の歌	西表島	610	7	節祭り	3：「滑車（しべ）　ふばな木ど　しべでござる：「滑車は　ふばな木＜樹木名＞が　滑車でございます」	＊列挙　船材	有用・船の材
13	3	モンパノキ	そうぎ木	たらまにゆんぐとぅ	石垣島石垣村	124	7	ユングトゥ	筵（むしい）でぃすや　そうぎ木（きー）ぬ枝（ゆだ）筵（むしる）ばし：「筵というのは、ソーキ木の枝を筵にして」	＊対句　モンパノキ/アダン ＊植物＝（モンパ木の岸辺の景）→心象風景 ＊実用　筵の代用	概念的・岸辺の景・継子の心象 有用・筵・生活の民俗
14	3	モンパノキ（orクサトベラ）	そーぎ	まかるせーぬじらば	小浜島	248	80	ジラバ	14　そーぎぬゆだ　ぶりうとーし：「フダンソウの枝を折り落とし」 15　むすぬかたわ　しくりって：「筵の形を作って」	＊有用　筵代わりに使う。 「生活具の民俗」	有用・生活習俗・男女の習俗
15	3	モンパノキ	はまきゆだ　/そうぎ木ゆだ	まへらつ	石垣島石垣村	321	40	ユンタ	15　はまきゆだ　そうぎ木ゆだ　ぶりむち：「浜木の枝を　ソウギ木の枝を折って持ち」	＊対語　はまきゆだ（枝）/そうぎ木ゆだ（枝）	有用・生活習俗・男女の習俗
16	3	ユリ	ゆり	作方じらま	小浜島	245	75	ジラバ	5　ゆりぬぱな　しるささき　さきゆりば：「百合の花　白く咲いて　咲いていたら」	＊季語　初夏/若夏の実景 ＊対句　デイゴ/ゆり	叙景（実景）・予祝
17	3	ユリ	ゆり	うろんつんぬじらば	小浜島	246	77	ジラバ	5　ゆりぬ花　しるさかいしゃ　さきばし：「百合の花　白く美しく　咲いて」	＊季語　初夏/若夏の実景 ＊対句　デイゴ/ゆり	叙景（実景）・予祝
18	3	ユリ	ゆり	うろんつんぬゆんた	小浜島	411	163	ユンタ	5　ゆりぬ花　しるさかい　さきばし：「ユリの花は　白く美しく咲き」	＊対句　デイゴ/ゆり ＊デイゴとユリは、確かに同じ時期に開花している。実景をそのまま写している。	叙景（実景）・予祝
19	3	ささ草(未詳)	ささ草	ぱーれー唄	黒島	604	22	豊年祭	6 海ぬささ草や　浦々どぅ　寄ゆる　くまかぬさあてぃどぅ　くまに寄ゆる：「海のささ草は浦々に寄る　（我々は）ここがいとしくてここに寄る」	慣用句・「ささ草が浦々に寄る） ＊列挙　「寄る物」 ＊海藻「寄る」→人が「寄る」	＊概念的・人が「寄り集う」慣用句
20	3	ささ草(未詳)	すさふさ	巻踊り歌	黒島東筋村	607	31	豊年祭	6 サア　うふどたつなみや　ぱまいきばむどるいんぬすさふさや　ううううにどゆうる：「大海の荒波は　浜で戻る　海のささ草は　浦々にぞ止まる」	慣用句・「ささ草が浦々に止まる） ＊列挙　「寄る物」 ＊海藻「寄る」→人が「寄る」	＊概念的・人が「寄り集う」慣用句
21	3	ささ草(未詳)	ささふさ	御前風	西表島	609	4	節祭り	4 海(いん）のささ草や　浦々ど寄よる　：「海のささ草は浦々に寄る」	慣用句・「ささ草が浦々による）	＊概念的・人が「寄り集う」慣用句

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名（和名）	テキスト語形（方言名）	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	4	ソテツ	すでぃち（蘇鉄）	いだふん〈ゆんぐとぅ〉	竹富島	144	50	ユングトゥ	畠（はてー）んじてぃ　雨ぬ降（ふ）りたらーどぅ　薄（ゆしき）ぬかたんが　蘇鉄（すでぃち）ぬかたんが　居（ぶ）りてぬ思（うむ）いぬどぅ：「畠に出て雨が降ったので　ススキの側に　ソテツの側にいての思いが」	＊対句　蘇鉄/ススキ ＊実景・用途。（畠の景観・雨宿りの場という日常のちょっとしたソテツの利用形態）。 ＊気持ちの表象（ソテツの下で雨宿りする継子）	＊概念的・継子の気持ちの表象 ＊有用性、植物の生態・景観とその利用
2	4	ソテツ	しとち（蘇鉄）	島廻りじらば	黒島	263	100	ジラバ	21　焼蘇鉄（やきしとち）生（まり）ばしヨホ黒（ふう）びしきやは　仕出（しで）ばしヨ：「焼け蘇鉄のような生まれであり　黒こげの生まれであり」	＊列挙 ＊植物→具体表現／「女性の特徴の表象」ソテツの場合は「焼け焦た黒い」ソテツの状態をうたっている。	概念的・「色の黒い女性」の表象物
3	4	ソテツ	（焼）しぃとぅち	竹富ぬぎらいちぇーま たきどうん	竹富島	441	210	ユンタ	7　（前略）焼きしぃとぅち　生（ま）りばし黒（ふふ）びちぃきゃぬ　産（す）でぃばし：「焼け蘇鉄のような生まれをして　黒こげの生まれをして」	＊列挙 ＊植物→具体表現／「女性の特徴の表象」ソテツの場合は「焼け焦た黒い」ソテツの状態をうたっている。	概念的・「色の黒い女性」の表象物
4	4	ソテツ	（焼）しとぅちぃ （蘇鉄）	竹富ぬぎらいちぇーまゆんた	黒島	444	214	ユンタ	21 焼かり　蘇鉄（しぃとうちい）ぬ焼き蘇鉄、生（ま）りばし：「焼かれた蘇鉄の　焼け祖テルのような生まれをし」 22 焼き蘇鉄ぬ　生りばし　黒（ふふ）びちぃきやぬ　産でぃばし：「焼け蘇鉄のような生まれをして　黒こげの生まれをして	＊列挙 ＊植物→具体表現／「女性の特徴の表象」ソテツの場合は「焼け焦た黒い」ソテツの状態をうたっている。	概念的・「色の黒い女性」の表象物
5	4	テリハボク	やらぶ（ばだす）	世果報（豊年） よがほ	石垣島大川村	126	11	ユングトゥ	やらぶばだすん　出（い）だし飾（かざ）りょうり：「ヤラブ＜テリハボク＞製のぼだす＜酒器名＞も出して飾り＜供え＞なさり」	＊列挙　ヤラブ製の酒器・耳ばえ盃・7sai 7歳になる女童	有用・酒器の材・特別な指物材
6	4	テリハボク	やらぶ（皿）	網取ゆんぐとぅ あんとぅりゆんぐとぅ	西表島網取村	139	40	ユングトゥ	10　台ぬ皿　やらぶ皿ゆ　出（い）だしょうり：「台の皿　テリハボクの皿を出しなさり」	＊対句　台の皿／ヤラブの皿	有用・酒器の材・特別な指物材
7	4	テリハボク	やらぶ（種子）	やらぶ種子あゆう	黒島	181	65	アヨー	1　やらぶ種子（だに）にん　転（くる）び来（くう）　一人（ぴすりふわ）：「テリハボクの種子のように転がって来なさい　一人子よ」	＊列挙　「転がる」・戻ってくるもの	概念的・具体表現「転がる」・婚姻
8	4	テリハボク	やらぶ（種子）	うふな星	黒島	443	213	ユンタ	4　粟作（あわしく）りみりばど　粟ぬ実（みい）りや　やらぶ種子（だに）とん　例（たとい）らり：「アワを作ってみたら　粟の稔りはヤラブの種子とたといらり」	＊列挙　麦・粟・黍・サツマイモ ＊植物=大きな粒の稔り→「アワの実り」	概念的・具体表現粟の「稔り」・農耕
9	4	ヒルギ	ぴんにき	かでぃかるじらば	石垣島大浜村	213	30	ジラバ	2　生（む）いでぃたる　木ぬ種子（たに）：「生え出た木の種」 3さしでぃたる　木ぬ種子（たに）：「差し出た木の種」	＊物語り的 *植物=生態→抽象「人生感」、諷喩的	概念的・抽象観念「自然感」→「人生観」
10	4	ヒルギ	ぴんに木	ぴんに木ぬゆんた	竹富島	425	184	ユンタ	1　ぴんに木（ぎ）ぬ　むいやよー　川原（かーら）ぬ端（はた）たゆりどぅ　むいやんせー：「ヒルギの生えは　川原の端を頼って　はえているよ」 注）「たゆりどぅ」は「頼って」と記されているが、次節からは「辿って」である。	＊叙景から叙心へ　　教訓歌の手法。 ＊列挙。 ＊諺からの典拠「木の曲がりは直せても、人の曲がりはなおせない」	概念的・教訓歌・（人の曲がりはなおせない）・典拠・列挙の用法
11	4	ヒルギ	ぴんに木	大川原ぬぴんに木 うふんがーらぬぴんにき	新城島	451	221	ユンタ	1　大川原ぬ　ぴんに木　ぴんに木ぬ　生（む）いや　みなとぅばた　生（む）いさ　やらざばた 生（む）いさ：「大川原のヒルギ＜植物名＞ヒルギの生えるのは　湊の端に生えるよ」	＊叙事表現 *植物=生態→抽象「人生感」、諷喩的	概念的・抽象観念「人生観」

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ	no.	ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
12	4	ヒルギ	ぷしき	井戸ぬぱたぬ小蛙誦言 かあーぬぱたぬあぶだーまゆんぐとぅ	西表島祖納村	136	35	ユングトゥ	5　ぷし木ぬ　下（しいた）らぬ　きぞがまぴーに下（う）り　ぎらなるけ　ぱがけらぬ生命　島とぅとぅみ　あらしょうり：「ヒルギの下方の二枚貝が　干瀬に下りてシャコ貝になるまで　我等皆の生命は　島と一緒であらせてください」	小動物の生きる自然環境（ヒルギの群落）の叙景	有用・歌の舞台（自然環境）
13	4	ハマゴウ	かねーら木	野底浜ゆんぐどぅ ぬすくはまゆんぐとぅ	石垣島大浜村	134	32	ユングトゥ	1　野底ぬ浜に　生いたる　かねーら木ぬ　船ぬゆむ胴　取らりとぅんよーな　夫婦（みゆとう）ぬき　かなさぬき　しらるぬ：「野底の浜に生えた浜ゴウの木が、船の船体にとられても夫婦の別れは　愛（いと）しい者の別れはできない」	列挙事項→　かねーら木・クバ・（かかん・ふんどし）・青葉の和え物・泥水 ＊浜に生える低木が、船の材になるようなことはない、「あり得ないこと」の具体表現。「あり得ないこと」「苦難」を示して、「永久」の意を表しれいる。	概念的・具体表現「あり得ないこと」・習俗・景観
14	4	ハマゴウ	かねん（叢）	あかんにゆんた	石垣島登野城村	350	80	ユンタ	8　ゆしぃきぃむらしぃ　かねんむらしぃぬ　側（すば）なんが：「ススキ叢　ハマゴー叢の側に」 15　馬ぬぐじぃ　かねんぐじぃ　切るんでよ：「馬の鞭　ハマゴーの鞭を切ろうと」	＊対句　ススキ叢／ハマゴー叢、浜の景観 ＊浜の密会の場になる景観描写。 ＊鞭に利用　民俗描写	有用・習俗・景観
15	4	ハマゴウ	かにんきー	あかんに田ゆんた	石垣島登野城村	358	90	ユンタ	8　ゆすきむらし　かにんきーぬ　そばなんがー：「薄（すすき）叢の　ハマゴウの側に」 12　んまぬぐじぃ　かにんぐじぃ　きすんでヨー：「馬の鞭を　ハマゴウの鞭を切ると」	＊対句　ゆしきぃむら／かにんきー ＊浜の密会の場になる景観描写。。 ＊鞭に利用　民俗描写	有用・習俗・景観
16	4	ハマゴウ	かねーら木	野底浜ゆんた	石垣島大浜村	374	112	ユンタ	1　ぬすく浜に　むいだる　かねーら木ぬ　舟（ふに）ぬ胴（どう）とぅらんりとぅむよー：「野底の浜に生えた浜ゴーの木が　船の胴体にとられてもよ」	列挙事項→　かねーら木・クバ（・かかん・ふんどし）・青葉の和え物・泥水 ＊浜に生える低木が、船の材になるようなことはない、「あり得ないこと」「苦難」の具体表現。	概念的・具体表現「あり得ないこと」
17	4	ヒョウタン（ユウガオ）	しぶる	ゆぴが夜ゆんぐとぅ	波照間島	152	66	ユングトゥ	9　しぶるにし　ふくたどぅり　なべらしに　ましぃたどぅり　おれらば：「夕顔のようにでこぼこを辿って　へちまのように垣を辿っておいでになったら」	＊対句しぶる／なべら ＊植物=石垣に添って→具象（行動）「石垣沿いに来る」	概念的・具体表現「夜道でも石垣沿いに来訪して」・生態・風土の景
18	4	ヒョウタン（ユウガオ）	しぶり	ぱがたろまじらば	石垣島大浜村	214	31	ジラバ	8　なべらてぃぬ　はいなはいな　はりやいき：「へチマの蔓のように　這（は）いに這い　這っていき」 9　しぶりやてぃぬ　ゆりなゆりな　ゆりやいき：「ユウガオの蔓のように　寄りに寄りよっていき」	＊植物=石垣に添って→具象「のぞき見」 ＊対句しぶる／なべら	概念的・具体表現「のぞきみ」・生態・風土の景
19	4	ヒョウタン（ユウガオ）	しぶる	ゆぴが夜じらば	波照間島	274	116	ジラバ	21 しぶる水　なかにくみ　くみやむち：「夕顔製の柄杓の水を中に入れ　入れて持ち」	＊しぶる水／しなば水 ＊実景・水入れ用具	実用・民俗・草取り
20	4	ヒョウタン（ユウガオ）	ちぶる	ぱがたるまゆんた	石垣島白保村	383	127	ユンタ	3　ちぶるてに　ぱいなぱいな　ぱや行き：「夕顔の蔓のように　進みに進み　進み行き」 4　なべらてに　ゆりなゆりな　ゆり行き：「へチマの蔓のように　寄って寄って　寄って行き」	＊植物=石垣に添って→具象「のぞき見」 ＊対句ちぶる／なべら」	概念的・具体表現「のぞきみ」・生態・風土の景

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ	no.	ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	5	タバコ	煙草	慶田盛ぬくんちぇーまゆんた	石垣島新川村	304	20	ユンタ	14 煙草(たばこ)ふき 煙(きぶしい)飲み 女童:「煙草を吸え 煙を呑め 乙女」 15 ばん女童 年幼少(とうしちいなさ)あゆりば:「私 乙女は年が幼く あるので」 16 煙草です 煙です 知らぬす「煙草というものは 煙というものは知らぬす」	*物語 *問答 *煙草は、縁を取り持つ道具	有用・タバコ・男女の民俗
2	5	タバコ	たばく	あろざてー	石垣島石垣村	332	52	ユンタ	18 内(うち)に入り 縁(えん)に入り 乙女:「内に入れ 縁側に入れ 乙女」 19 たばくふき きぶしぬみ 乙女:「煙草を吸え 煙を飲め 乙女」	*物語 *問答 *煙草で誘い入れる	有用・タバコ・男女の民俗・機織りの命令
3	5	タバコ	かぎぐさ	きだむりゆんた	石垣島登野城村	356	87	ユンタ	11 きぶしでいるすや かーぬはたぬ かぎぐさよー:「煙というのは 井戸端のカギ草よ」	*物語 *問答 *煙草と茶	有用・タバコ・男女の民俗
4	5	タバコ	たかぶ	ありざてゆんた	石垣島白保村	390	133	ユンタ	8 だかぶ吹き けむりぬみ 語りよら「煙草を吸え 煙を飲め 語りましょう	*物語 *問答 *煙草で誘い入れる	有用・タバコ・男女の民俗・機織りの命令
5	5	煙草	生い草	慶田盛ぬこんちゃーまゆんた きだむるぬこんちゃーまゆんた	竹富島	426	186	ユンタ	12 仮屋(かりや)ぺーり 煙草吹(たばぐふ)き 遊(あし)ばよー 13 煙草(たばぐ)てぃそー 井戸(かー)ぬ端(はた)ぬ 生(む)い草(くさ)よー:「12 仮屋にはいり 煙草を吸って 遊ぼうよ 13 煙草と言うのは 井戸の端の生え草よ」	*物語 *問答 *煙草は、縁を取り持つ道具	有用・タバコ・女性に声を掛ける切かけ

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	6	デイゴ	じぐぬばな	さしにがんあゆう	黒島	180	62	アヨー	3　赤ぼんに　シタリヨウホ　でいごの花　たらしよりヨウホ：「赤苧麻に　シタリヨウホ　梯梧の花（のように）たらせなさり　ヨウホ」	*列挙　赤チョマ・デイゴ・青チョマ・ビユル山（慣用句的）：cf. びゆる「松金真ユンタ」びーる（p429 190 ） *植物＝（女性の手仕事）→　（家に根付く））	概念的・具体的表現「家に根づく」・嫁の教訓
2	6	デイゴ	じぃく	野底ばまあゆ ぬすくばまあゆ	波照間島	184	71	アヨー	1　ぬすく浜むいたる　じぃくば　かちゃば三（みー）ば　とぅらりるまでぃん　んぞとぅばんとぅ　ぬがらるぬ：「野底村の浜に生えている　デイゴを角材三本がとれるまでも　あなたと私は　はなれられない」	植物=（大木にはならない）→抽象的（あり得ない程長い時間） *列挙　デイゴ・ツタ（いしゃらむとぅ）・イヌマキ	概念的・具体的表現「あり得ない時間」・有用・材木
3	6	デイゴ	ずりぬ花	作方じらま さくほうじらま	小浜島	245	75	ジラバ	4　ずりぬ花　あかるかいしゃ　さきゆりば：「梯梧（でいご）の花　明るく美しく　咲いており」 5　ゆりぬばな　しるささき　さきゆりば：「百合の花白く咲いて　咲いていたら」	*対句　デイゴ/ゆり *デイゴとユリは、八重山では同じ時期に開花している。実景をそのまま写している。	概念的・時候の表現
4	6	デイゴ	ずくぬ花	うろんつんぬじらば	小浜島	246	77	ジラバ	4　ずくや花（ばな）　あかるかいしゃ　さきばし：「梯梧（でいご）の花　明るく美しく　咲いて」 5　ゆりぬばな　しるさかいしゃ　さきばし：「百合の花　白く美しく　咲いて」	*対句　デイゴ/ゆり *デイゴとユリは、やいまでは同じ時期に開花している。実景をそのまま写している。	概念的・時候の表現
5	6	デイゴ	ずくい	うろんつんぬゆんた	小浜島	411	163	ユンタ	4　ずくいの花　あかるかけ　さきばし：「デイゴの花は　明るく　咲き」	*対句　デイゴ/ゆり　実景慣用句 。	概念的・時候の表現
6	6	デイゴ	ずぐ	松金真ゆんた まつがねま	竹富島	429	190	ユンタ	4　中柱（なかばらー）や　ずぐ柱（ばらー）　取（よう）り立（た）てー：「中柱はデイゴの柱を取り立て」	*建築材の列挙（良質の材木で建築する家。 *建築材で身分を表す	有用・材木 概念的「身分」
7	6	ビロウ	くば	野底浜ゆんぐどぅ ぬすくはま	石垣島大浜村	134	32	ユングトゥ	2　野底ぬ頂（ちじい）に　生（む）いたるくばぬ　船ぬ体（どう）なるとんよーい　夫婦ぬき　かなさぬきしらるぬ：「野底の村の頂上に生えた葵蒲に木が　船体になっても　夫婦の別れ　愛しい者の別れはできない」	*植物＝（船の材にはなり得ない）→概念的「あり得ない」という具象によって、夫婦の別れはあり得ない。 *列挙　「あり得ない」もの *逆説的な比喩	概念的・「（夫婦の別れは）あり得ない」
8	6	ビロウ	くば（葵蒲）	宮良屋あよう めーらやーあよう	石垣島川平村	158	7	アヨー	1　ひさしばれー　くいしばれー　イヨーホー　杜（むり）に生（む）いる　高（たか）は葵蒲：「ひさしばれー　くいしばれーイヨーホー　杜に生える高い葵蒲」	*実景か？	霊性
9	6	ビロウ	くばー笠	麦ぐるくばー笠ゆんた むんぐるじゅばーさゆんた	石垣島登野城村	347	77	ユンタ	1　麦（むん）ぐるくばー笠（さ）　なゆしゃるむぬやりゃどぅ　童女真頂（みやらびまちいじい）　隠（かく）しようる：「麦藁クバ笠は　如何なるものだから乙女の頭をかくしなさる」	*問答形式の列挙 *クバの笠をうらやましがる。擬人的。	有用・笠の材
10	6	ビロウ	くば	野底浜ゆんた	石垣島大浜村	374	112	ユンタ	2　ぬすくちぢに　むいたる　ぴとぅむとぅくばぬ　船の胴　とぅらんりとぅむよー：「野底頂に生えた一本の葵蒲の木が　船の胴体に取られてもよ」	*植物＝（船の材にはなり得ない）→概念的「あり得ない」という具象によって、夫婦の別れはあり得ない。 *逆説的な比喩	概念的・「あり得ない」・
11	6	ビロウ	くば	鳩間ゆんた	鳩間島	403	154	ユンタ	1　ぱとぅま中むり　ぱり登ぶり　くばぬしぃたに　ぱり登ぶり：「鳩間（はとま）島の中岡（なかもり）に走り登り　葵蒲の下に走り登り」	*対句　岡のクバ／頂のクバ *クバの生育の様子（自慢）	実景を基にした幻想的風景

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
12	6	ビロウ	くば	くばぬ葉ゆんた くばぬはゆんた	竹富島	421	178	ユンタ	1　風（かじ）ぬ　すぶ夜（ゆ）やよう　くば葉がどぅふるふる　すんどう　くば葉がどぅ　ふるふるすんどう：「風のそよぐ夜はね　くばの葉がフルフルと鳴るよ　くばの葉がフルフルと鳴るよ」	*列挙　島の夜の風情を表す物の一つとして。 *擬音のものづくし	実景・擬音のものづくし

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	7	ニラ	にーびら/もとうびら	建願い〈新築願い〉 たていにがい	竹富島	83	129	ニガイフチィ	「根韮（にーびら）にん如（ぐとう）　本韮（もとうびら）にん如（ぐとう）　島とぅとぅみ　国（ふん）とぅとぅみ　動（うい）ぎん　たいぎん　有（あ）らし給（たぼう）うらん事に：「根韮のように本韮のように　島と共に　国とともに動きも揺らぎもないように」	＊植物=（根が強い）→具象（家の土台がしっかりしている） *対句　根韮（にびら）／本韮（むとぅびら）	概念的・具体表現「よく根付く」・呪的認識（新築祝の歌）
2	7	ニラ	にーびら/もとうびら	屋の祝 やーぬよい	竹富島	83	130	ニガイフチィ	根韮（にーびら）　本韮（むとうびら）にん如（ぐとう）　根強（にーじゅー）さ　本強（むとうじゅー）さ　大家（ふーやー）　新家（みーやー）荒らし給うり　うーとうとぅ：「根韮　本韮のように　根が強く元が強く　大家屋　新家屋はあらせてください　ああ尊」	＊植物=（根が強い）→具象（家の土台がしっかりしている） *対句　根韮（にびら）／本韮（むとぅびら）	概念的・具体表現「よく根付く」・呪的認識（新築落成祝の歌）
3	7	ニラ	にーびら/もとうびら	十月祟びの祭り	竹富島	86	139	ニガイフチィ	元韮（むとうびら）似如（にんぐとう）　本強（むとうじゅー）さ　根韮（にーびら）似如（にんぐとう）根強（にーじゅう）さ　有らし給うりていり：「元韮のように　本が強く　根韮のように　根が強く　あらせてくださって」	＊植物=（根が強い）→具象 *対句　根韮（にびら）／本韮（むとぅびら）	概念的・具体表現「よく根付く」・呪的認識（災害厄除け行事）
4	7	ニラ	まびら	くくる嶽あよう	小浜島	169	36	アヨー	4　なしやるあぶぬ　やといべる　まびら嶽によー　本んんぞさ　根んんぞさ　ま南風（はいかぜ）によー：「生みの母親の移植した真韮のように　本が強い　根が強い　真南風に」	＊植物=（次々に葉が伸びる）→具象（航海の風が吹き続ける） ＊対句　真苧麻/真韮	概念的・具体表現「かってもかっても葉が伸びる」・呪的認識（航海の祈り）
5	7	ニラ	びら	くくるだきあゆ	波照間島	182	67	アヨー	4　なしゃるあぶぬ　やとぃいある　びらだき：「生みの親が移植してある　韮のように」	＊植物=（次々に葉が伸びる→根が強い）→具象（航海の風が吹き続ける） ＊対句　真苧麻/真韮	概念的・具体表現「かってもかっても葉が伸びる」・呪的認識（航海の祈り）
6	7	ニラ	びら	いらぶまかなしじらば	波照間島	279	120	ジラバ	5　びらばたぎん　んじちより　やしぬばば　かきやとぅり：「韮畑に出なさり　野菜のはを掻き取り」	1日の叙事	有用・畑作物
7	7	ニラ	びら	とぐるだぎでらば	与那国	284	128	ジラバ	5　うびてある　さしてある　びらだき：「植えてある差してある　韮のように」	＊植物ニラ=（次々に葉が伸びる→根が強い）→具象（航海の風が吹き続ける）	概念的・具体表現「かってもかっても葉が伸びる」・呪的認識（航海の祈り）
8	7	ニンニク（大蒜）	ぴん	盆和物献上祝詞 ぶんぬーすーぬちきどうき	石垣島大川村	44	29	ニガイフチィ	8　五日（いちか）まいからぬ、みしゅかにじ　ぴんかにじ、ばりくだきぬ、あいずー　ぶんぬすー：「五日前からの　味噌あじつけ　ヒル〈大蒜〉味つけ　割りくだいた和物　盆の和物」	＊列挙 イボグサ・ボタンニンジン・ウミミズナ・ツノマタ・オゴノリ・パパイア・モヤシ・ニンニク ＊霊性　供物に供える和え物になる	有用・供物となる和え物・霊性
9	7	ニンニク	ぱがぴん（若蒜）	世ぬすでぃ果報 ゆぬすでぃがふう	石垣島平得村	51	48	ニガイフチィ	おおこばん　ぱがぴん　しるまあしゅうけえ：「大供撰　若蒜　白塩を供え」	供物の1つ	有用・供物となる和え物
10	7	ニンニク	ぱがぴん	穂折りぬ願い ぶうりぃぬにがい	石垣島平得村	52	50	ニガイフチィ	おおこばん　ぱがぴん　しるまあしゅうけ：「大供撰若蒜　白塩を」	供物の1つ	有用・供物となる和え物
11	7	ニンニク	ぱがぴん	芋ぬ初 あこんぬぱちい	石垣島平得村	52	51	ニガイフチィ	おおこばん　ぱがぴん　しるまあしゅうけ：「大供撰若蒜　白塩を供え」	供物の1つ	有用・供物となる和え物

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
12	7	ニンニク	ばがびん	年ぬしぃでぃ果報	石垣島平得村	53	52	ニガイフチィ	おおこばん　ばがびん　しるまあしゅうけえ：「大供撰　若蒜　白塩を供え」	供物の1つ	有用・供物となる和え物
13	7	ニンニク	びる	まにむりぃぬいちぃけーまゆんた	石垣島宮良村	376	116	ユンタ	4　麦（むん）ぬ飯（んぼん）ば　なりむみ　芋（あこん）ぬ飯（んぼん）ば　盛りくみ：「麦のご飯にし芋のご飯を盛り込み」 5　麦ぬ飯ぬ　かてぃむぬ　びるかにじぃ　かてぃむぬ：「麦のご飯のおかずは　蒜の味噌和えがおかず」	日常の景 ＊季語　初夏/若夏 ＊対句 行楽の弁当のおかず。食物として	有用・食物・和え物・生活の実景
14	7	ニンニク	びる	まにむるぬいしきまゆんた	波照間島	456	230	ユンタ	10　むぎぬんぼんぬ　かちむぬ　びるかちぃどぅ　かちむぬ：「麦のご飯のおかずは　蒜漬けがおかず」	日常の景 行楽の弁当のおかず。食物として ＊蒜付け/味噌漬け　御飯のおかず	有用・食物・和え物

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	8	アコウ	あかぼうき	山樫のあゆう	黒島	180	60	アヨー	2　あかぼう木（き）の　ヨホイシタリヨホ　根下や　ヨホ　シタリヨホ　石（いし）や上（ばな）んど　根（に）や下（う）る：「赤ぼうきの根下りは　石の上に根が下りる」	*列挙　（山樫・アコウ・吾等） *植物＝「根下り」→人事「根付く」「集まる」	概念的・具体表現「根下り」・
2	8	アコウ	あつこー	いらさにーさじらば	石垣島大浜村	213	29	ジラバ	4　うふあつこーぬ　むやりーどぅ　なりあつこーぬ　根（に）さしりーどぅ：「大アコウ<樹木名>が生えており　実アコウが根差しており」	*「鷲とアコウ」という風土の表象的表現	歌の舞台・風土の表象物・語りの導入
3	8	アコウ	あこー	ぱしぃゆんた	石垣島川平村	292	1	ユンタ	2　大（ふう）あこーぬ　むより　実（な）るあこーぬ　さしよおり：「大アコウが生えていて　実りあこうがはえていて」 3　大あこーぬ　根差（にざし）に　実るあこーぬ　本（むとう）ばいに：「大アコウの根っこに　実りアコウの根っこに」	*「鷲とアコウ」　風土の表象的表現	歌の舞台・風土の表象物・語りの導入
4	8	アコウ	大あこう/なりあこう	ばしぬ鳥ゆんた	石垣島石垣村	337	60	ユンタ	2　大あこうぬ　植（む）よりど　なりあこうぬ　さしよりど：「大アコウが生えて　実りアコウが生えて」	*「鷲とアコウ」　風土の表象的表現	歌の舞台・風土の表象物・語りの導入
5	8	アコウ	赤秀木（あこー）	こいなーゆんた	石垣島大川村	341	67	ユンタ	1大岳（うふだき）ぬ　上（うい）なが：「大岳の上に」 2大赤秀（うふあこー）木ぬ　萌（む）やりば：「大アコウ木が生えていると」 3実赤秀木ぬ　差しゅりば：「実りアコウ木が生えていると」	*歌謡の物語りの入部「木と鳥」 *慣用句的表現　時候の句と白い花／青い実	歌の舞台・物語りの導入・慣用句
6	8	アコウ	大あこう　/なりあこう	鷲ゆんた ばすうゆんた	石垣島・大川村	347	76	ユンタ	2　大あこうぬ　むやあり　なりあこうぬ　さしよりど：「大あこう木が生えており　実りあこう木が生えており」	*「鷲とアコウ」　風土の表象的表現	歌の舞台・風土の表象物・語りの導入
7	8	アコウ	大あこう/実りあこう	鷲ゆんた	石垣島白保村	381	124	ユンタ	2　大あこうぬ　うむやあり　なりあこうぬ　さしやうり：「大アコウが生えており　実りアコウが生えており」	*「鷲とアコウ」　風土の表象的表現	歌の舞台・風土の表象物・語りの導入
8	8	アコウ	おおあこう/なりあこう	ばしぬ鳥ゆんた ばしぬとうりゆんた	竹富島	440	208	ユンタ	2　大（うふ）あこうぬ　生（む）ようりどぅ　なりあこうぬ　差（さ）しょうりどぅ：「大アコゥがはえており　実りアコウが生えており」	*「鷲とアコウ」　風土の表象的表現	歌の舞台・風土の表象物・語りの導入
9	8	アダン	あだんちいる	たらまにゆんぐとぅ	石垣島石垣村	124	7	ユングトゥ	枕（まふあ）でぃすや　阿壇蔓（あだにちいる）　枕（まふあ）ばし：「枕というのは　阿壇の蔓を枕にし」	*対句　そうぎ木/あだん *植物＝（アダンの岸辺の景）→心象風景 *実用　枕の代用	概念的・岸辺の景・継子の心象筵・生活の民俗

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ	no.	ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
10	8	アダン	あだん	松金じらば まつんがねーじらば	石垣島川平村	193	9	ジラバ	3　柱（ばら-）でぃすや阿壇柱（あだんばらー）やだそうぬ：「柱というのはアダン柱であったそうな」	＊建築材の列挙 ＊庶民的建築材・出世	有用・庶民の建築資材・社会的価値
11	8	アダン	あざに	松金ゆんた まちんがにゆんた	石垣島大浜村	373	111	ユンタ	3　柱（ばら）ですや　あざにばら 柱（ばら）たて：「柱というのは　アダンの柱で　柱を立て」	＊建築材の列挙 ＊庶民的建築材・出世	有用・庶民の建築資材・社会的価値
12	8	アダン	あだに（柱）	まちんがにゆんた	石垣島白保村	393	138	ユンタ	4　はらでそー　あだに柱やだそ：「柱というのは　アダン〈植物名〉の柱であったよ」	＊建築材の列挙 ＊庶民的建築材・出世	有用・庶民の建築資材・社会的価値
13	8	アダン	あだに（柱）	松金ゆんた	小浜島	405	158	ユンタ	5　柱ですや　あだに柱ばし：「柱というのは　アダンを柱にして」	＊建築材の列挙 ＊庶民的建築材・出世	有用・庶民の建築資材・社会的価値
14	8	アダン	阿壇	松金真ゆんた まつがねま	竹富島	429	190	ユンタ	5　角柱（すぬばらー）や　あだん柱（ばらー）　取り立てー：「角柱はアダンの柱を取り立て」	＊建築材の列挙 ＊庶民的建築材・出世	有用・庶民の建築資材・社会的価値
15	8	アダン	あだに	ざんとぅりぃゆんた	新城島	450	220	ユンタ	2　しるび山　まりゃあらぎ　あだに山まりゃあらぎ：「しるびの山を　廻り歩き　アダンの山を廻り歩き」 3　あだなしば　きりとぅし　よなかじば　ぱきぃとぅし：「アダンの気根を切り　オーハマボウの表皮を剥ぎ」	＊対語　あだなし（アダンの気根）／よなかじ（オオハマボウの皮９： ＊漁の叙事・慣用句的　山に入る→植物採取→繊維を取る→漁網の製作→漁にでる→豊漁→賑わい（本島北部歌謡他） ＊実用　漁網の材（習俗）	漁の叙事・慣用句・有用・道具の資材
16	8	アダン	阿壇葉	巻踊り歌	黒島東筋村	607	31	豊年祭	7　ばがしまぬなれや　あたにばぬむしる　サア　うりゆしかば　いりみそりかなしさとめ：「我が島の慣いは阿壇葉でつくった筵に座るのだ　これを敷けば坐って下され　愛する方よ」	＊筵の材　習俗（アダンの筵を敷く）	有用・道具の資材
17	8	クロツグ(未詳)	くんぴぴる？	あーぱーれの歌	鳩間島	110	5	ヤータカビ	16　くんぴぴるば　かきなーし：「黒次縄をかけ縄にして」	＊列挙　建築材 ＊美称	有用・縄の材・美称／予祝
18	8	クロツグ	くるじ	だーとだき〈その２〉	与那国島	113	9	ヤータカビ	8くるじなば　ちなばし：「黒次縄を綱にして」 9草ぬ葉ば　かやばし：「草の葉を茅にして」	＊列挙　「やーたかび」・美称 パショウ・烏賊の甲羅　336-57 ＊対句／夏のサトイモの模様 ＊相聞　225-46	実用・建築材
19	8	クロツグ	まーに	ばそーやぴちじらば	石垣島大浜村	220	38	ジラバ	１ばそーやぴち　しるさ生（ま）りば：「芭蕉の新芽(色)は　白い生まれをし 2まーにーやぴち　やふわさまりばし：「マーニ（くろつぐ）の新芽はやわらかい生まれをし」	対句　バショウ/クロツグ 植物（クロツグの茎の芯）＝「軟らかい，白いもの」→具体表現「身分の良い」	概念的・具体表現・「白い　柔らかい」・身分

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
20	8	クロツグ	ふがら	ゆうねんぶしじらば	石垣島大浜村	225	46	ジラバ	20　ふがらむとぅ、むやうり：「ふがら（黒次か）元が生えている。 21　ふがら山ぬ、なかなんが：「ふがら山（草叢）の中に	＊植物＝（形態）→人体の形状	概念的・具体表現→人体
21	8	クロツグ	ふがら	二月じらば にんぐわつじらば	新城島	269	110	ジラバ	24　ひや　ふがらじぃな　んにばり：「さあ　クロツグ縄を(船の）胸に張り」	＊叙事的物語り ＊実用　引き綱	有用・綱材・船漕ぎ
22	8	クロツグ	まーに	いんだれゆんた	石垣島石垣村	336	57	ユンタ	3　烏賊（いか）ぬさやぬ　白るさ産（しい)で　まーにぬ茎（ふきい）ぬやふぁらさ生まれ：「烏賊の甲羅のように白い生まれで　黒次の茎のような柔らかい生まれで」	列挙　（バショウの茎・烏賊の甲羅・クロツグの茎） ＊植物＝（様態　芯が柔らかい）→ひと（肌が白くて柔らかい）→身分がよい	概念的・「身分がよい」の具象
23	8	クロツグ	ふがら	しやがむやー	石垣島石垣村	337	59	ユンタ	27　ふがら山ぬ　ありばー：「フガラ山がある」 28　ふがら山ぬ　中なんが：「フガラ山の中に」	＊植物＝（形態）→人体の形状	概念的・具体表現→人体
24	8	クロツグ	んまがら	ばーれー唄(ハ)ベンサー	黒島	604	22	豊年祭	2　んまがらぬ　色だきい　なじぃむじぃぬ　むよだき　べんさ　：「黒次の色のように　夏の里芋の模様のように	＊対句　んまがら(黒次）/むじぃ（里芋）出現は、クロツグとの対句のみ ＊植物（黒次と里芋の色は同じ）＝「そのように心をひとつにして」	概念的・模様に注目・「心を一つ」の表象物

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形 (方言名)	歌謡名	地域	ページ ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	9	シマクワ	こーな木	仲本あやぐ なかんとうあやぐ	黒島	176	53	アヨー	2　こーな木ぬ　むいりば　なねーじ木ぬ　差しょうりば：「桑の木が生えたら　桑の木が　はえなさったら」	＊対句　こーな木/なねーじ木　同義 ＊慣用句的表現(白い花・青い実) ＊鳥(霊鳥)とシマクワ	実の生る木・霊長の飛来する木「木と鳥（霊鳥）」・島のシンボル・トーテム
2	9	シマクワ	なねーじ木	仲本あやぐ なかんとうあやぐ	黒島	176	53	アヨー	2　こーな木ぬ　むいりば　なねーじ木ぬ　差しょうりば：「桑の木が生えたら　桑の木が　はえなさったら」	＊対句　こーな木/なねーじ木　同義 ＊慣用句的表現(白い花・青い実) ＊鳥(霊鳥)とシマクワ	実の生る木・霊長の飛来する木「木と鳥（霊鳥）」・島のシンボル・トーテム
3	9	シマクワ	くわなき(桑木)	仲本あゆう なかんとうあゆう	黒島仲本村	182	66	アヨー	2　桑木ぬ　むゆるよ　シタリヨウホ　なるちゃ木ぬむよる：「桑の木がはえている　実る横がはえている」	＊対句　くわなき/なるちゃ木 ＊鳥(霊鳥)とシマクワ	実の生る木・霊長の飛来する木「木と鳥（霊鳥）」・島のシンボル・トーテム
4	9	シマグワ	ばなばき	うらやーつゆんた	石垣島平得村	370	106	ユンタ	3　ばなばきぬ　むやおーり：「桑の木がはえなさり」 4　なねーじぃきぬ　さしゃおーり：「桑の木が生えなさり 11　ばなぎなり　ふぁゆんで：「桑の果実をたべようと」 12　なねじぃなりふぁゆんで：「桑の果実を食べようと」	＊対句　ばなばき／なねじぃき（シマグワ）　同義 ＊慣用句的表現(白い花・青い実)	鳥と木
5	9	シマグワ	なねじぃき	うらやーつゆんた	石垣島平得村	370	106	ユンタ	3　ばなばきぬ　むやおーり：「桑の木がはえなさり」 4　なねーじぃきぬ　さしゃおーり：「桑の木が生えなさり 11　ばなぎなり　ふぁゆんで：「桑の果実をたべようと」 13　なねじぃなりふぁゆんで：「桑の果実を食べようと」	＊対句　ばなばき／なねじぃき（シマグワ）　同義 ＊慣用句的表現(白い花・青い実)	鳥と木
6	9	シマグワ	こんぎ木	くいなゆんた	石垣島白保村	395	139	ユンタ	5　こんぎ木ぬ　下いき　なれじ木ぬ　下いき：「桑の木の下に行き　なねーず木<桑>の木の下に行き」	＊対句　こんぎ木／なれじき　同義 ＊「家の妻と妾」笑いのモチーフ	霊長と木
7	9	シマグワ	なれじ木	くいなゆんた	石垣島白保村	395	139	ユンタ	5　こんぎ木ぬ　下いき　なれじ木ぬ　下いき：「桑の木の下に行き　なねーず木<桑>の木の下に行き」	＊対句　こんぎ木／なれじき ＊「家の妻と妾」笑いのモチーフ	霊長と木
8	9	シマグワ	くわんぎ(木)	ままらまゆんた	竹富島	433	196	ユンタ	3　くわん木（ぎ）くら　打ちかき：「桑木の鞍を打ちかけ」 11　くわん木（ぎ）くら　打ちうらし：「桑木に鞍をうちおろし」 12　くわんき木くらや　枕ばし：「桑木の鞍を枕にし」	＊実用、馬の鞍の材として使われる。	実用・馬の鞍
9	9	シマグワ	はぬてき	かんたゆ＜どんた＞	与那国島	460	235	ユンタ	10　どぐてすば　とんでむゆたるはぬてき：「門の側らに　とび出て生えた桑の木」	＊太鼓の生産叙事 ＊実用・太鼓の材として使われる。 ＊鳴動する太鼓の霊性	神代の再現、実用・太鼓の材、
10	9	バショウ（イトバショウ）	ばそー（山）	獅子の願い言	石垣島川平村	35	4	ニガイフチィ	くしゃーぬ、たれぬばそーやまはら、んでおった、うーしし　くうししふかなつぬ：「唐の後方の寺の芭蕉山から出てこられた大獅子　小獅子加那志の」	＊植物=霊性を持ったバショウの群落→具象（聖域）（獅子の住処）	概念的・具体表現猪の去来する場所・霊性・厄払いの祭祀（獅子舞）
11	9	バショウ	ばそー山	獅子への願詞	石垣島大浜村	54	54	ニガイフチィ	しぃしぃがなしぬ前や、唐ぬ　くさんぬ寺ぬ　ばそー山からおーり：「獅子加那志前は　唐の後方の寺の芭蕉山から来られ」	＊植物=霊性を持ったバショウの群落→具象（聖域）（獅子の住処）	猪の去来する場所・霊性

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形 (方言名)	歌謡名	地域	ページ ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
12	9	バショウ	ばさ	米のらばぬゆんぐとぅ まいのらばぬゆんぐとぅ	西表島祖納村	136	34	ユングトゥ	6　はるいどぅば　　はるいどぅばぬよ　はるぬいでぃすや　ばさぬば　かさぬば　とぅちき　ぶなりたみす：「野原に出るなら　野原に出るなら　野原に出るのは芭蕉（バショウ）の葉　月桃（ゲットウ）の葉を取って姉妹の為をする」	*対句　ばさぬば／かさぬば 実用・民俗	有用・綱の材・山仕事で採取する植物
13	9	バショウ	ばそー（やびち）	ばそーやびちじらば	石垣島大浜村	220	38	ジラバ	1　ばそーやびち　しるさ生（ま）りばし　ヨーホン：「芭蕉の新芽(色)は　白い生まれをし」 2　まーにーやびち　やふわさまりばし：「マーニ（黒次）の新芽は柔らかいい生まれをし」	*対句　バショウの新芽／黒ツグの新芽 ＊植物＝（芯が白い）→具象「色白の美しい女性」	概念的・具体表現「白さ」
14	9	バショウ	ばそう（芭蕉）	まやゆんた	石垣島新川村	302	17	ユンタ	19　芭蕉縄（ばそーじいな）さーり　かいふぶられ：「芭蕉の綱で掻きしばられ」 20　ばら縄（じいな）さーり　ふんたばられ：「藁の綱で組縛られ」	＊擬人化 ＊実用・	有用・綱の材・擬人化
15	9	バショウ	ばそう（つな）	猫ゆんた	石垣島石垣村	331	49	ユンタ	14　ばそうつなし　かいふぶられ：「芭蕉の綱で掻き縛られ」	実用・民俗	有用・綱の材・擬人化
16	9	バショウ	ばそう（芭蕉）	いんだれゆんた	石垣島石垣村	336	57	ユンタ	2　いんだれぬ　生（ま）りや　芭蕉（ばそう）ぬふきぃ　白さ生り：「インダレの生まれは　芭蕉の茎のような白い生まれ」	＊植物＝（芯が白い）→具象「色白の美しい女性」	概念的・具体表現「白さ」す」
17	9	バショウ	ばそうふに（芭蕉船）	いんしがーぬ金盛ゆんた	黒島	447	216	ユンタ	25　芭蕉船（ばそうふに）ば　造（つく）りよ　虫（むしい）ぬ船　ばいばし：「芭蕉の船を造り　虫送りの船を造り」	*対句　芭蕉の船／虫送りの船 ＊物語りの場面	虫送りの船の材・厄払いの祭祀
18	9	バショウ	芭蕉本	いんしがーぬ金盛ゆんた	黒島	447	216	ユンタ	33　芭蕉本（もと）にないばし　じぶた竹に切りばし：「芭蕉本のように　薙ぎ　　次太竹のように切り」	＊対句　　芭蕉本／地太竹（薙ぎ／切り） ＊植物＝（薙ぎ倒す）→具象「敵を薙ぎ倒す」 ＊物語り	概念的・具体表現「薙ぎ倒す」

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	10	モクコク	赤金（イク木）	家ぬかざい やーぬかざい	竹富島	112	7	ヤータカビ	6　白金（しるがに）や柱（ばら）ばし　赤金（あかがに）や桁（きた）うき：「白金（槇木）は柱にし　赤金（イク木）は桁におき」 10　ましぬ茅（がや）ふきてし　引き金（がね）やうすいてし：「よい茅を葺いて　引き金はおさえにして」	＊対句　白金(槇木)／赤金(いく木) ＊建築資材として、良質の木材 ＊美称（白身・赤身） 日撰り・新築行事	有用・良質な建築資材・身分・名声
2	10	モクコク	（赤味）いーじょう	ふかいばなかーばなちくどぅん	石垣島登野城村	133	29	ユングトゥ	赤味いーじょう　五きざんけーらし　白味きゃーん木　七きざん　きざんけーらし：：「赤身のイージョウ＜樹木名＞イ登り　五削に伐り」	＊対句　赤味いじょう／白美きゃーん木 ＊建築資材として、良質の木材 ＊美称（白身・赤身） 日撰り・建築叙事・新築行事	有用・良質な建築資材・身分・名声
3	10	モクコク	（赤身）いじょう	桴海ぬ高ばんかーばん誦言 ふつかいぬたかばんかばんゆんぐとう	石垣島宮良村	135	33	ユングトゥ	赤（あか）み照（てい）らしい　登ぶてい　赤みいじょう　七ぎじゃん　きじ下（う）るし：「赤身のイク木　七きじゃを　伐りおろし」	対句　白みきゃん木／赤身いじょう ＊建築資材として、良質の木材 ＊美称（白身・赤身） 日撰り・建築叙事・新築行事	有用・良質な建築資材・身分・名声・美称
4	10	モクコク	やまいーじょう	松金じらば まつんがねーじらば	石垣島川平村	193	9	ジラバ	8　柱（ばら）でぃすや　やまいーじょうば　取（とう）り出（だ）し：「柱というのはヤマイクギ＜植物名＞を取り出して」	＊列挙　家誉めの意 ＊建築材（有用植物）としての価値	有用・建築材・社会的身分・価値の創出・名声・美称無し
5	10	モクコク	いじょき	家たかぴのじらば＜その１＞ やーたかぴのじらば	西表島租内村	239	64	ジラバ	5　きゃんぎ柱　取り出し：「槇木柱を取り出して」 6　いじょき柱　取り出し：「イジョキ柱を取り出して」	＊対句　きゃんぎ柱／いじょき柱（モクコク）：繰り返し言い換え、家誉めの意 ＊建築材（有用植物）の列挙、儀礼歌	有用・建築材・儀礼・美称なし
6	10	モクコク	（白身）いじょう	松金ゆんた まちいんがにゆんた	石垣島大川村	342	69	ユンタ	8　きゃん木柱（ぎばら）　白（しる）みいじょうば　取（とう）りぃ出（だ）し：「白身のイク木を取り出して」 13　内やどぅや　槇木戸（きゃんぎやどぅ）ばい立て：「内屋戸は　槇戸を　接ぎ立て」	*対句　きやん木柱／白みいじょう(モクコク)：繰り返し言い換え、家誉めの意 ＊建築材（有用植物）としての価値	有用・建築材・身分・価値の創出・美称無し
7	10	モクコク	（白身）いじよう	松金ゆんた まちんがにゆんた	石垣島大浜村	373	111	ユンタ	10　きゃんぎ木ば　しるみいじょうば　きりだし：「槇木を　白身のイク木を切り出して」	＊対句　きやん木／しるみいじょう　：繰り返し言い換え、家誉めの意 ＊建築材（有用植物）としての価値	有用・建築材・身分・価値の創出
8	10	モクコク	（白身）いく木/赤みいく木	まちんがにゆんた	石垣島白保村	393	138	ユンタ	11　白みいじよ　赤みいじよ　あたりより：「白身のイク木に　赤身のいく木に　あたりなさり」	*対句　白身いじょ／赤味いじよ *有用　建築資材	有用・建築材・身分・出世譚・美称無し
9	10	モクコク	いじよう	松金ゆんた	小浜島	405	158	ユンタ	10　きゃんぎや木や　しるさかいしゃ　とるんだし：「槇の木は　白く美しく取り出して」 11　いんじょ木や　あかるかいしゃ　とるんだし：「イク木は　赤く美しく　とりだして」	＊対句　きゃん木　白く美しい／いんじょ木　赤くうつくしい：繰り返し言い換え、家誉めの意 ＊建築材（有用植物）としての価値	有用・建築材・身分・価値の創出
10	10	モクコク	いざぐ？/赤身イク木	松金真ゆんた まつがねまゆんた	竹富島	429	190	ユンタ	10　きゃんぎ柱（ばらー）白（しる）みいぞゆ　取（とう）りい出（だ）し：「槇木柱を　白身イク木を　取り出して」 11　いざぐ柱（ばらー）　赤みいぞゆ　取（とう）りい出（だ）し：「いざぐ(不詳)柱を　赤身イク木を　取り出して」	＊対句　きゃんぎ／しろみいぞ ＊建築材（有用植物）としての価値	有用・建築材・身分・価値の創出

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
11	10	ヤマモモ	むん	とぅむる岬じらば とぅむるざきじらば	石垣島大浜村	219	37	ジラバ	4 家（や）ぬとぅじぬ むんぶらば 山はたぬ石むんよ：「家の妻の桃を折るなら 山端の石桃よ」 5みやらびぬ むんぶらば 山すくぬ 水むんよ：「乙女の桃をおるならば 山底の水桃よ」	＊＜妻と妾＞の形式歌謡 ＊対語 反語的 対比的意味から生まれる対語「おいし／おいしくない」	有用・実の採取・山仕事とみやげ 概念的・＜妻と妾＞の形式・
12	10	ヤマモモ	いしむん	とぅむる岬じらば とぅむるざきじらば	石垣島大浜村	219	37	ジラバ	4 家（や）ぬとぅじぬ むんぶらば 山はたぬ石むんよ：「家の妻の桃を折るなら 山端の石桃よ」 5みやらびぬ むんぶらば 山すくぬ 水むんよ：「乙女の桃をおるならば 山底の水桃よ」	＊＜妻と妾＞の形式歌謡 ＊対語 石桃／水桃 「おいし／おいしくない」、反語的 対比的意味から生まれる対語	有用・実の採取・山仕事とみやげ 概念的・＜妻と妾＞の形式・
13	10	ヤマモモ	みずむん	とぅむる岬じらば とぅむるざきじらば	石垣島大浜村	219	37	ジラバ	4 家（や）ぬとぅじぬ むんぶらば 山はたぬ石むんよ：「家の妻の桃を折るなら 山端の石桃よ」 5 みやらびぬ むんぶらば 山すくぬ 水むんよ：「乙女の桃をおるならば 山底の水桃よ」	＊＜妻と妾＞の形式歌謡 ＊対語 反語的 対比的意味から生まれる対語「おいし／おいしくない」	有用・実の採取・山仕事とみやげ 概念的・＜妻と妾＞の形式・
14	10	ヤマモモ	いしむん	たなとりじらば	石垣島白保村	237	61	ジラバ	15 やぬ妻むん むんぶらば 山ばたぬいしむん：「家の妻の桃 桃をおるなら山端の石桃を」 16 ふかどみぬむん むんぶらば 山すくぬ 水むん：「外求め＜妾＞の桃を 桃を折るなら 山底（奥）の水桃を」	＊＜妻と妾＞の形式歌謡 ＊対語 いしむん／みずむん・反語的 対比的意味から生まれる対語「おいし／おいしくない」	有用・実の採取・山仕事とみやげ 概念的・＜妻と妾＞の形式・
14	10	ヤマモモ	いしむん・みずむん	たなとりじらば	石垣島白保村	237	61	ジラバ	15 やぬ妻むん むんぶらば 山ばたぬいしむん：「家の妻の桃 桃をおるなら山端の石桃を」 16 ふかどみぬむん むんぶらば 山すくぬ 水むん：「外求め＜妾＞の桃を 桃を折るなら 山底（奥）の水桃を」	＊＜妻と妾＞の形式歌謡 ＊対語 いしむん／みずむん・反語的 対比的意味から生まれる対語「おいし／おいしくない」	有用・実の採取・山仕事とみやげ 概念的・＜妻と妾＞の形式・
15	10	ヤマモモ	むん	ぎさまじらば	波照間島	283	125	ジラバ	5 むんぶらば ぎざまや ヨーホ あはあむからぶりやわりよ：「桃をおるなら 義佐真はヨーホあまいものから折っていらっしゃい」	＊問答 母と ＊対語 反語的 対比的意味から生まれる対語「おいし／おいしくない」 ＊桃／カキ	有用・実の採取・
16	10	ヤマモモ	むん/水むん	いぐじやーま	石垣島石垣村	312	29	ユンタ	3 むんからば いぐじやーま みずむん ぶりよーりーよ：「桃を刈るならイグジャーマ 水桃を折ってください」	対句 水むん／タブ蔓 ＊船材の伐り出しの叙事 ＊山仕事と木の実の採取	有用・実の採取・山仕事とみやげ
17	10	ヤマモモ	むん	いぐじゃーまゆんた	石垣島石垣村	339	63	ユンタ	5 樟（たぶ）折（ぶ）らば いさまにヨホー 青蔓（あうちいる）ゆ 折（ぶ）りょーり：「樟（タブ）＜植物名＞を折るならイサマニ 青蔓を折ってください」 7 同本（ゆぬむとう）に 実（な）り樟ヨホー 同枝（ゆぬゆだ）に 実（な）り樟ヨホー：「同じ木に実れよ樟 同じ枝に実れよ樟」	*対句 山桃(水桃）／タブ(蔓) *擬人化 樹木に呼びかける(呪文的) ＊採取をうたう	有用・実景 ＊採取の歌
18	10	ヤマモモ	石むん/水むん	いぐじゃーまゆんた	石垣島登野城村	357	88	ユンタ	7 やーぬとぅじぃぬ むんちぃとやー 山ふちぃぬ 石むんよー：「家の妻へのみやげの桃は 山の入り口の石の桃 8 ふかどぅみぬ むんちぃとやー 山うくぬ みじぃむんよー：「妾へのみやげの桃は 山奥の水桃を」	1＊＜妻と妾＞の形式歌謡 ＊対語 反語的 対比的意味から生まれる石桃／水桃	有用・山仕事とみやげ・ヤマモモ採取

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
19	10	ヤマモモ	やまむん・水むん・甘むん	うーぬざきぃゆんた	石垣島平得村	367	103	ユンタ	15　たな山ぬ　帰りやよ　山桃（やまむん）ぬありっか　折（ぶ）りょうり：「棚の山の帰りはねヤマモモがあるなら折りなされよ」 16　水桃から　折りょうり　甘桃から折りょうり：「水桃からおりなされよ　うまい桃から折りなされよ」	*対語　水桃／甘桃　反語的　対比的意味から生まれる	有用・山仕事とみやげ・ヤマモモ採取
20	10	ヤマモモ	桃/水桃	ぎざまにー〈ゆんた〉	竹富島	423	181	ユンタ	4　むん山ぬ　故（ゆい）どぅよー　またぶ山ぬ故（ゆい）んどぅよー：「桃山の故に　真タブ＜植物名＞山の故に」 5　桃折（むんぶ）らば　ぎさまに　水桃（みじむん）ゆ　折（ぶ）りょうりよー：「桃を折るなら儀佐真よ　水桃をおりなされよ」	*むん山／またぶ山 *毎年実のなる木	有用・実の採取・子のみやげ

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ	no.	ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	11	アズキ	あかまみい	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞<上の村> あかまみい（赤豆）	石垣島川平村	26	1	カンフチィ	ふうあかまみいゆ、あかまみい、ですーや：「大赤豆を、アズキというのを」	＊有用・作物	有用・作物
2	11	アズキ	ふうはかまみー	内原村の真世加那志の神詞<下の村> はかまみ(赤豆)	石垣島川平村	33	2	カンフチィ	ふぅあかまみ、たちぃあかまみ、でーすーどぅ：「大赤豆、立赤豆というのを」	＊有用・作物	有用・作物
3	11	アズキ	たちはかまみ	内原村の真世加那志の神詞<下の村> はかまみ(赤豆)	石垣島川平村	33	2	カンフチィ	ふぅあかまみ、たちぃあかまみ、でーすーどぅ：「大赤豆、立赤豆というのを」	＊有用・作物	有用・作物
4	11	アズキ	あかまみ/はるざや	物種の神口<穀類の神詞。願い口> むねだにぬかんふち	竹富島	80	122	ニガイフチィ	8　赤豆（あかまみ）春莢（はるざや）：「アズキ　春ザヤ」	＊対句　赤豆／春莢 ＊有用・作物・作物の種子の1つ	有用・作物
5	11	アズキ	あかまみ	まんのーまくあゆー>	竹富島	172	43	アヨー	9　親（うや）ぬ子（ふぁー）とぅ　赤豆（あかまみ）とぅ　なりどぅていゆむ：「親の子と小豆とは実ってこそ評判になる」	＊植物＝（稔り）→子供の出世＝子育て論	概念的・子供の出世の具体表現
6	11	アズキ	あかまみ	浦船<あゆー>	竹富島	173	45	アヨー	19　赤豆（あかまみ）ぬ　くる枯（か）りる　うぬ風（かじ）：「あずきの黒く枯れる　その風（の時においで）」 20　大豆ぬ　花咲く　うぬ風：「大豆の花咲く　その風（の時においで）」	対句　小豆黒く枯れる／大豆ノ花咲く　時候 ＊植物＝（稔りの時期）→船旅の時期	概念的・時候の具体表現
7	11	アズキ	あかまーみ	ゆうねんぶしじらば	石垣島大浜村	225	46	ジラバ	24　あかまーみぬ、　ぴりうん：「赤豆が座っている」	＊列挙 *植物(マメ）→女体の陰部	概念的・陰部の具体表現
8	11	アズキ	赤豆	旅かろいぬじらま	小浜島	250	83	ジラバ	12　うつだー豆ぬ　花ざかりぃんが　旅しょんな：「うつだー豆の　花盛りに　旅をしなさるな」 13　赤豆ぬさやさかりぃんが　旅しようり　：「小豆の莢の盛りに旅をしてください」	＊対句　うつだー豆（未詳）／赤豆 ＊植物＝（稔りの時期）→船旅の時期	概念的・時候の具体表現
9	11	アズキ	赤豆	旅うさいぬじらば	波照間島	271	113	ジラバ	15　豆が花盛り（ばなざかり）旅しょうり：「豆の花盛りに　旅をなされよ」 17　赤豆ぬ　花盛り（ばなざかり）　旅しょうり：「小豆の花盛りに　旅をなされよ」	＊対句　豆／赤豆 ＊植物＝（稔りの時期）→船旅の時期	概念的・時候の具体表現
10	11	アズキ	まみ	のーりぃゆーゆんた	石垣島石垣村	338	61	ユンタ	8　まみのーれ　うしぃぬたん　あっこんぬみいれーうしぃぬちぃぬ：「豆の稔りは牛に付いダニのよう　芋の稔りは牛の角のようだ」	＊列挙　「稔り」 ＊有用・作物	有用・作物
11	11	アズキ	あかまみぃ	ばなりちぃちぃやーみゆんた	黒島	449	218	ユンタ	19　あかまみぃとぅん　かひひり　大豆とぅん　くりひり：「小豆（アズキ）と替えてくれ　大豆（ダイズ）と換えてくれ」	＊対句　小豆／大豆 ＊有用・商品作物・物々交換	有用・作物

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	12	イヌマキ	白金（槇木美称）	家ぬかざい	竹富島	112	7	ヤータカビ	6　白金（しるがに）や柱（ばら）ばし　赤金（あかがに）や桁（きた）うき：「白金<槇木木 >は　柱にし　赤金<イク木>は桁におき」	＊対句　白金(槇木）／赤金(いく木) ＊建築資材として、良質の木材 ＊美称（白身・赤身） 日撰り・新築行事	有用・良質な建築資材・身分・名声
2	12	イヌマキ	（白味）きゃーん木	ふかいばなかーばなちくどぅん	石垣島登野城村	133	29	ユングトゥ	白味きゃーん木　七きざん　きざんけーらし：「白身の槇木　七削に削り倒し」	対句　白みきゃん木／赤身いじょう ＊建築資材として、良質の木材 ＊美称（白身・赤身） 日撰り・建築叙事・新築行事	有用・良質な建築資材・身分・名声・美称
3	12	イヌマキ	（白身）きゃん木	桴海ぬ高ばんかーばん誦言 ふつかいぬたかばんかーばんゆんぐどう	石垣島宮良村	135	33	ユングトゥ	白（しる）み大本（うむとう）　登りょうり　白みきゃん木　五（いちい）きじゃん　きじゃってぃ赤み照（てい）らしぃ　登ぶてぃ：「白い大本（おもと）山に　登りなさり　白身の槇木　五（いつ）きじゃを　伐って　赤み照らすに　登って」	＊物語り　長詞形 ＊対句　白身イク木／赤身イク木	有用・建築材・社会的身分・価値の創出・名声
4	12	イヌマキ （＊テキスト訳　「野の槇」）	ぬゆぬきだ	まんのーまくあゆーン	竹富島	172	43	アヨー	3　山ふくんに　ぬいてぃ生り　まんのーま」：「山福木のようにぬきんでた生まれの　マンノーマ」 4　野（ぬゆ）ぬきだ　本々し　栄いし：「野の槇のように　もともと二栄え」	＊対語　山ふくぎ(山のふくぎ）／ぬゆぬきだ（野のまき） ＊植物=（栄える）→人（名声を得る・栄える	概念的・具体的表現「栄える」
5	12	イヌマキ	（なる）ちゃき	仲本あゆう なかんとあゆう	黒島仲本村	182	66	アヨー	3　桑木（くわなき）ぬ　むゆるよ　シタリヨウホなるちゃ木ぬ　むよる：「桑の木が生えている　実る槇木が生えている」	＊対句　くわなき(シマクワ）／なるちゃき ＊植物の象徴性・実のなる木・霊鳥の来る木	実の生る木・霊長の飛来する木「木と鳥（霊鳥）」・島のシンボル・トーテム
6	12	イヌマキ	うぶきゃんぎ	野底ばまあゆ ぬすくばまあゆ	波照間島	184	71	アヨー	3　南（ばい）ざらに　むいたる　うぶきゃんぎぬうやばしぃぬ　うどぅとぅらりるまでぃん：「南サラ（地名）に生えている　大槇の木が公用船の　竜骨材にとれるまでも」	*列挙　デイゴ　いしゃらむとぅ・イヌマキイヌマキ ＊植物＝（舟の竜骨材になるまでの時間・永遠に待つ時間＝本当はありえないけど）→（夫婦は永遠）	夫婦が離れられない・「悠久の時間」の象徴
7	12	イヌマキ	きゃんぎ	松金じらば まつんがねーじらば	石垣島川平村	193	9	ジラバ	10　屋戸（やどぅ）でぃすや　槇木屋戸（きゃんぎやどう）　ばい立（た）てー：「雨戸というのは槇木の雨戸を接ぎ立て」	＊列挙　家誉めの意 ＊建築材（有用植物）としての価値	有用・建築材・社会的身分・価値の創出・名声・美称なし
8	12	イヌマキ	きゃんぎ	家たかびのじらばくその１>やー	西表島租内村	239	64	ジラバ	5　きゃんぎ柱　取り出し：「槙木柱を取り出して」 6　いじょき柱　取り出し：「イジョキ柱を取り出して」	＊対句　きゃんぎ柱／いじょき柱（モクコク）　：繰り返し言い換え、家誉めの意 ＊建築材（有用植物）の列挙、儀礼歌	有用・建築材・儀礼・美称なし
9	12	イヌマキ	きゃん木(槇)	松金ゆんた まちいんがにゆんた	石垣島大川村	342	69	ユンタ	8　きゃん木柱（ぎばら）　白（しる）みいじょうば取（とう）りぃ出だし：「槇柱　白身イク木を取り出して」 13　内やどぅや　槇木戸（きゃんぎやどう）　ばい立て：「内屋戸は　槇戸を　接ぎ立て」	*対句　きやん木柱／白みいじょう(モクコク）：繰り返し言い換え、家誉めの意 ＊建築材（有用植物）としての価値	有用・建築材・身分・価値の創出・美称無し
10	12	イヌマキ	きゃんぎ/白身いじょう	松金ゆんた まちんがにゆんた	石垣島大浜村	373	111	ユンタ	10　きゃんぎ木ば　しるみいじょうば　きりだし：「槇木を　白身のイク木を伐り出して	＊対句　きやん木／しるみいじょう　：繰り返し言い換え、家誉めの意 ＊建築材（有用植物）としての価値	有用・建築材・身分・価値の創出
11	12	イヌマキ	きゃんぎ	松金ゆんた	小浜島	405	158	ユンタ	10　きゃんぎや木や　しるさかいしゃ　とるんだし：「槇の木は　白く美しく取り出して」 11　いんじょ木や　あかるかいしゃ　とるんだし：「イク木は　赤く美しく　とりだして」	＊対句　きやん木　白く美しい／いんじょ木　赤くうつくしい；繰り返し言い換え、家誉めの意 ＊建築材（有用植物）としての価値	有用・建築材・身分・価値の創出

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
12	12	イヌマキ	槇木	松金真ゆんた まつがねまゆんた	竹富島	429	190	ユンタ	10 きゃんぎ柱（ばらー） 白（しる）みいぞゆ 取り出（いだ）しー：「槇木柱を白身イク木を取り出して」 11 いざぐ柱（ばらー） 赤みいぞゆ 取りいだしー：「いざぐ<未詳>柱を 赤身イク木を取り出して」	*対句 きゃんぎ／しろみいぞ ＊建築材（有用植物）としての価値	有用・建築材・身分・価値の創出
13	12	ジュズダマ	やましだま	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞<上の村> きらまい（キラ米）	石垣島川平村	23	1	カンフチィ	ふうぶー 、だりぶー、ですーや、やましだまぬんぐと、ゆでまーり、びきまーりし、：「大穂、垂れ穂ろ言うのは山数珠玉の実のように、たれまがり、引き曲がりし、		
14	12	ジュズダマ	しだま	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞<上の村> うし、んま、まりばんじょー	石垣島川平村	27	1	カンフチィ	1 いばみちぃにおーば しだまぬ、ゆんなーゆる：「狭い道に追ったなら、数珠玉のように揺れに揺れ」		
15	12	ジュズダマ	やましだま	内原村の真世加那志の神詞<下の村> きらまいしぬぐぅ（稲）	石垣島川平村	31	2	カンフチィ	なりぃぼーれ、みぃいりぃぼーれぬ、なり、たびみしょう、らば、やましぃだーま、なりぃぬんぐとぅに、なぅーりぃ、みぃりい、しおーり、たび、みしょうり、とぅりぃ：「稔る時節、実入り時節になりなさったら、山数珠玉の実のように稔り、実入り<結実>なさって下さり」		
16	12	ジュズダマ	しだま	内原村の真世加那志の神詞<下の村> ふし、んま、まり，ばんじょう	石垣島川平村	34	2	カンフチィ	いばみちぃに んでおーば むかしぃ しだまぬ ゆんなーゆり：「狭い道に出て追ったなら、昔の数珠玉のように、揺れに揺れ」		
17	12	ジュズダマ	ちだま（千玉）	夜雨 ゆあみ	石垣島大川村	125	10	ユングトゥ	稲（まい）作りみれば 稲ぬ稔（のー）れぇ 千玉（ちだま）ぬ実（なり）：「米を作ってみると 米の稔りは数珠玉のよう」		
18	12	ジュズダマ	山しぃだま	たらまゆら	石垣島川平村	155	1	アヨー	8 米（まい）ぬ穂ゆ ちくりてゆ 拝みばどぅ山しぃだま なりぬんぐとぅ うがまり：「米の穂を作って拝見すると 山数珠玉（やますだま）の果実のように拝見できる」		
19	12	ジュズダマ	やましぃだま	たらまゆらじらば	石垣島川平村	190	5	ジラバ	7 まぎでぃすぬ ぷゆちぃくり うがみばどぅ やましぃだま なりぃんぐとぅ うがまり：「米というものの 穂を作り 拝めば 山数珠玉の 実の如く 拝まれる」		
20	12	ジュズダマ	やますだま	東かーら あがるかーら	石垣島川平村	292	2	ユンタ	10 米（まい）ぬ穂（ぶー）ゆ 作（ちく）りてぃ拝みばどぅ 山すだま 実（なり）ぬんぐと うがまり：「米の穂を作って拝むと 山数珠玉のように拝まれる」		
21	12	ジュズダマ	やまちぃだま	のーりぃゆーゆんた	石垣島石垣村	338	61	ユンタ	4 まいのーれ やまちぃだま（ユイサ） あーヌのーれ ならぎぃいし：「米の稔りは山数珠玉のように 粟の稔りは長小石のように」		
22	12	ジュズダマ	ちだま	月出ぬ花むぬ	石垣島大川村	344	71	ユンタ	2 米（まい）作りみりばど 米（まい）ぬのーれーちだまなり：「米を作ってみたら 米の稔りは数珠玉の実のようだ」		
23	12	ジュズダマ	すすだま	ふなー節	石垣島大浜村	372	110	ユンタ	8 稲稔（くみなぐ）り しだましじ 我が島どよお島ぬ本（むとよ） ないらじ：「米の稔りは 数珠玉（すすだま）の粒のよう 我が島が島の元」		
24	12	ジュズダマ	しいし玉	うふな星	黒島	443	213	ユンタ	3 麦作（むんしく）り 見みりばど 麦の（むんぬ）なうりや しいし玉とん 例（たとい）らり：「麦を作って見たら 麦の稔りは数珠玉のように例えられ」		

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
25	12	タブノキ（テキストにはヤマモモの訳　　表記の混乱か））	たぶ	米のらばぬゆんぐとぅ	西表島祖納村	136	34	ユングトゥ	5　たぶのらば　たぶのらばよ　たぶぬのうりすや枝どぅびきまいる：「山桃が稔るなら　山桃が稔るなら　山桃が稔るのは　枝が撓んでいる」		豊穣の予祝・栽培植物+採取の木の実
26	12	タブノキ	とぅむぬ木	いきぬぶしじらば	石垣島大浜村	224	44	ジラバ	18　片耳（かたみん）から　とぅむぬ木：「片耳からトゥムヌ木<植物名>（が生え）」 19　片耳（かたみん）から　樫に木（が生え）：「片耳から樫の木がはえ」 20　とぅむぬ木や　どぅうとぅり：「トゥムヌ木は（船の）胴体にとり」	＊対句　（片耳）から）とぅむぬ木／（片耳）から）樫に木	賄い女・死体化生・造船・樹木の霊性
27	12	タブノキ	とむぬきー	いきぬぶす	石垣島宮良村	226	48	ジラバ	23　かたちから　かすにきー：「片乳から樫の木」 24　かたちから　たむぬきー：「片乳からタブの木（が生え） 25　かすにきーや　たなとり：「樫の木は棚（船板）に取り 26　とむぬきーや　とゆとり：「タブの木は胴（船体）に取り 29　とむぬきーや　どゆびに：「とぅむぬきは竜骨にし」 31　かすぬきーや　たなうき：「樫の木は棚にし」	＊対句　（片乳から）とぅむぬ木／（片乳から）樫に木	賄い女・死体化生・造船・樹木の霊性
28	12	タブノキ	たむぬきー	んでぃみやーぼーすぬじらば	小浜島	251	84	ジラバ	31かしゅきや　たなとり：「樫の木は棚にとり」 33とむぬきや　どむとり：「トムの木は船体に」	＊対句　とぅむぬ木／樫に木 ＊「死体化生」なし	賄い女・死体化生・造船・樹木の霊性
29	12	タブノキ	とぅむぬ木	ぱいさきよだじらば	波照間島	277	118	ジラバ	23　かたみんや　とぅむぬ木ぬ　むやぶり：「片目からは　たぶの木が生えており」 24　くぬみんや　まとぅむぬ木ぬ　むやぶり：「この目からは　真とぅむぬの木が生えており」	＊対句　（耳から）とぅむぬ木／（目から）真とぅむぬ木	賄い女・死体化生・造船・樹木の霊性
30	12	タブノキ	まとぅむぬ木	ぱいさきよだじらば	波照間島	277	118	ジラバ	23　かたみんや　とぅむぬ木ぬ　むやぶり：「片目からは　たぶの木が生えており」 24　くぬみんや　まとぅむぬ木ぬ　むやぶり：「この目からは　真とぅむぬの木が生えており」	＊対句　（耳から）とぅむぬ木／（目から）真とぅむぬ木	賄い女・死体化生・造船・樹木の霊性
31	12	タブノキ	たぶ	いぐじやーま	石垣島石垣村	312	29	ユンタ	4　たぶぶらば　ふわーぬびげーよ　あらつるゆ　ぶりおーりよ：「タブ<植物名>を折るなら子の父よ新蔓を折ってください」	*対句　タブ／ヤマモモ	有用・造船材・実の採取・山仕事の土産
32	12	タブノキ	たぶ（樟）	いぐじゃーまゆんた	石垣島石垣村	339	63	ユンタ	5　樟折（ぶ）らば　いさまにヨホー　青蔓（あうちいる）ゆ　折（ぶ）りょーりニヨー：「樟<植物名>を折るならイサマニ　青蔓を折ってください」 7　同本（ゆぬむとう）に　実（な）り樟ヨホー　同枝（ゆぬゆだ）に　実（な）り樟：「同じ木にみのれよ樟　同じ枝に実れよ樟」	＊対句　山桃／タブ ＊擬人化　命令形呪言的 ＊生活民俗 ＊「死体化生」なし	有用・実景 採取の歌・擬人化「呪言」・時候
33	12	タブノキ	とぅむぬき	いきぬぼうじぃゆんた	石垣島平得村	365	100	ユンタ	24　片目からどぅすぬ木　片耳から　とぅむぬ木：「片目からはドゥヌ木　片耳からはトゥムヌ木（が生え）」 26　かいしゃ生（む）いたる　どぅすぬ木　ちゅらささすだる　とぅむぬ木：「美しく生えたドゥスヌ木　美しく差したトゥムヌ木」 28　取りはだぬ　どぅすぬ木　生りはだぬ　とぅむぬ木：「伐り時期のドゥスノ木　生まれ時期のトゥムヌ木」	＊対句　とうむぬき／どぅすぬき（オガタマノキ） ＊死体化生の樹木・船材 ＊霊性を持つ樹木。	賄い女・死体化生・造船・樹木の霊性

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
34	12	タブノキ	とむぬ（木）	出でみゃ節ゆんた	小浜島	412	165	ユンタ	31　とむぬ木や　どむとり：「トゥムヌ木は船材に	＊対句　とうむぬき／樫木（オキナワウラジロガシ） ＊樹木・船材	賄い女・船材・植生・
35	12	タブノキ	またぶ／たぶ	ぎざまにー〈ゆんた〉	竹富島	423	181	ユンタ	4　むん山（やま）ぬ　故（ゆい）んどぅよー　またぶ山（やま）ぬ　故（ゆい）んどぅよー：「桃山の故に　真タブ＜植物名＞山の故に」 6　たぶぶらば　子（ふぁー）ぬ父（ぴぱー）　青（あう）つるゆ　折（ぶ）りょうりよー：「たぶを折るなら子の父よ　青蔓を折りなされよ」	＊対句　山桃／真タブ ＊男女の問答歌、山の実がなったら、又同じ場所で会えるという願いの表出 ＊「死体化生」なし	有用・実景・造船 採取の歌・時候・再開の願い
36	12	タブノキ	とむぬき	いとぅぬぶでぃ（どぅんた）	与那国島	463	237	ユンタ	19　かたみんがら　とむぬき　くぬみんがら　かちんぎきむい：「片耳からトゥムヌ木が　この耳から樫の木が生え」 21　かちんぎきや　からばし　とぅむぬきや　たなばし：「樫の木は竜骨に　トゥムヌ木は　船棚に」	*対句　（片耳から）とむぬき／（片耳から）かちんぎ ＊死体化生の樹木・船材 とうむぬきと樫木とは対句。霊性を持つ樹木。	賄い女・死体化生・造船・樹木の霊性
37	12	マツリカ（テキスト訳には、もうりん花）	むりくばな	南風が星むりく花ゆんぐとぅ	黒島	150	62	ユングトゥ	南風（ぱいかじ）が星（ぶし）　むりく花（ばな）かくしうち　白（しる）さの美（はい）ぬ　乙女（みやらび）：「南の星　もうりん花　かくし内白く美しい乙女」	＊対句　南風の星／むりく花　（美しい） ＊植物=（白い花）→具象「色白の美しい女性」	概念的・具体表現「白く美しい少女」
38	12	マツリカ	むりくばいはな	なさま屋じらば	石垣島川平村	191	6	ジラバ	1なさま屋（やー）ぬ　門口（ぞう）なんが　むりくばい花（ばな）　植(い)ぴゃとうし：「ナサマ屋の門口にモウリン花を植えて」	＊対句　むりくばい花／香ばし木 ＊庭木・香り・男女の出会いの口実となる	実用・樹木と習俗・風土・情緒
39	12	マツリカ	むりく花	なさまやじらば	石垣島大浜村	218	35	ジラバ	1なさまやぬよ　じょういなが　エシターレ　むりく花　いべとぅし　ユバナウレー：「なさま屋の門口に　エシターレ　むりく花を植えていて　ユバナウレー」	＊対句　むりくばい花／香ばし木 ＊庭木・香り・男女の出会いの口実となる	実用・樹木と習俗・風土・情緒
40	12	マツリカ	むるんく花	なさまやぬとんでじらば	小浜島	254	87	ジラバ	1　なさまやぬ　とんでなか　むるんく花　いびとおし：「なさま家の門口に　ムルクン花＜茉莉花＞を植えておき」	＊対句　むりく花／かばさ木 ＊庭木・香り・（他欠如）	実用・樹木と習俗・風土・情緒
41	12	マツリカ	むりむり木／かばしき（対）	なさまやじらば	黒島	265	103	ジラバ	2 むりむり木ば　植（いび）とり：「まつり木を植えていて」 3　香木（かばし木）ば　差（さ）しとり：「香ばしい木を差していて」	＊対句　むりむり木／香木（十九年母） ＊庭木・香り・男女の出会いの口実となる	実用・樹木と習俗・風土・情緒
42	12	マツリカ	むりくはな	なさまやゆんた	石垣島新川村	309	23	ユンタ	13　ぴらま家（や）ぬ　東（あん）たんが　むりく花（はな）ぬ　咲（さ）きうんちょー：「愛しい人の東方に　茉莉花が咲いているとよ」 14　花折（はなぶ）りば　名付（なちきぃ）し　ぴらまゆ　見舞（みいま）いな：「花折にかこつけて愛しい人を見舞いに」	＊むりくはな｛出会いの木） ＊庭木・香り・男女の出会いの口実となる	実用・樹木と習俗・風土・情緒
43	12	マツリカ	むーりーく木	なさまやー	石垣島石垣村	317	34	ユンタ	1　なさまーややーぬーよー　シタリヨーイサ　ぞーなんが　むーりーく木ば　いびとーし　ヨーバナオリ：「なさまやの門口に　シタリヨーイサ　茉莉木を植えて　ヨーバナオリ」 2　かぬしやぬ　とんでに　かばし木ば　さしとし：「愛しい人＜女＞の家の門口に　香ばしい木を植えて」	＊対句　むーりーく木／かばし木 ＊庭木・香り・男女の出会いの口実となる	実用・樹木と習俗・風土・情緒
44	12	マツリカ	むりくはな	なさま屋ゆんた	石垣島登野城村	348	78	ユンタ	7　ぴらま屋ぬ　東（あん）たんが　むりく花ぬ　さかりんちょ：「いとしい人の家の東方に　茉莉花が咲いているそうな」	＊むりくはな ＊庭木・香り・男女の出会いの口実となる	実用・樹木と習俗・風土・情緒

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
45	12	マツリカ	むりくはな	なさまやーゆんた	石垣島宮良村	379	119	ユンタ	1　なさまやーぬ　ぞうなんが　エーシターハリイー　むりくはなば　　アブヤハリヨイ　いびとうし：「なさま家の門口に　茉莉花を植えて」	＊対句　むりくはな／かばすきぃ ＊庭木・香り・男女の出会いの口実となる	実用・樹木と習俗・風土・情緒
46	12	マツリカ	むるく花	なさまやゆんた	石垣島白保村	383	126	ユンタ	1　なさまやや　とんでひに　むるく花ば　いびとうし：「なさま家の門口に　茉莉花を植ええて」	＊対句　むるくはな／かばさ木（出会いの木） ＊庭木・香り・男女の出会いの口実となる	実用・樹木と習俗・風土・情緒
47	12	マツリカ	むるんく花	なさまやぬとんでゆんた	小浜島	411	164	ユンタ	1　なさ、まやぬ　とんでなか　むるんく花　いびとおし：「ナサマ家の門口に　茉莉花を植えて」	＊庭木・香り・男女の出会いの口実となる	実用・樹木と習俗・風土・情緒
48	12	マツリカ	むらくばな	名佐真屋くゆんた〉 なさまやーゆんた	竹富島	422	179	ユンタ	1 名佐真屋（なさまやー）ぬ　御門（うじょう）に　むらく花（ばな）ゆ　咲（さ）かしょうり：「なさま家の御門に　茉莉花をさかしなさり」	＊庭木・香り・男女の出会いの口実となる	実用・樹木と習俗・風土・情緒

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	14	タケ	うむとぅ竹	猪願いの祝詞 しい	石垣島大川村	45	30	ニガイフチィ	うむとぅ竹し　きじゃ　ぬかりりゃ：「オモト竹で踏をぬかれろ」	*唱え（呪い） *よびかけ *呪物	猪垣・呪文・霊性・呪物
2	14	タケ	うむとぅだき竹	山留の時　山当りの口上	石垣島登野城村	47	35	ニガイフチィ	うむとぅやまぬ　うむとぅだきし　きじゃぬかりんどう、くやーならぬどう　：「オモト山のオモト竹で踏をぬかれるぞ　越えてはいけないぞ	*唱え（呪い） *よびかけ *呪物	猪垣・呪文・霊性・呪物
3	14	タケ	（やーっから）だき	あーばーれの歌	鳩間島	110	5	ヤータカビ	9　やーっからだきば　きちばしー　やーば　すくりあんてぃすー：「強い竹を垂木にし　家をつくってあるという」	*列挙　建築材 *美称	新築儀礼・家誉め・美称
4	14	タケ	（だでぃく）だき	あーばーれの歌	鳩間島	110	5	ヤータカビ	14　だでぃくだきば　あむぬばしー　やーば　すくりあんてぃすー：「ダディク竹を　編み物にし　家をつくってあるという」	*列挙　建築材 *美称	新築儀礼・家誉め・美称
5	14	タケ	（ちんどり）だき	だとだき<その１>	与那国島	113	8	ヤータカビ	8　ちんどりだきば　どいちにし：「チンドリ竹を桟にし」	*列挙　建築材 *美称	新築儀礼・家誉め・美称
6	14	タケ	あし竹	我が島 ばがしま	石垣島大川村	127	13	ユングトゥ	あし竹ぬ　萌やんせ　から竹に萌やんせ：「アシダケが生えているよ　カラダケがはえているよ」	*対句　あしだけ／からだけ *タケ→「豊穣」（稔る世　弥勒世）の親念を表す。 *語り言葉（ゆんぐとぅ）の中の呪的象徴	儀礼・豊作祈願
7	14	タケ	から竹	我が島 ばがしま	石垣島大川村	127	13	ユングトゥ	あした竹ぬ　萌やんせ　から竹に萌やんせ：「アシダケが生えているよ　カラダケがはえているよ」	*対句　あしだけ／からだけ *語り言葉（ゆんぐとぅ）の中の呪的象徴	儀礼・豊作祈願
8	14	タケ	竹（だき）	竹富ぬ一本竹ゆんぐとぅ たきどぅんぬいつぶんだきゆんぐとぅ	竹富島	143	48	ユングトゥ	1　吾（ばん）どぅ　竹富（たきどぅん）ぬ　仲立（なかだて）ぬ　一本竹（いつぶんだき）よばー：「私が竹富島　仲立（島）の一本竹ですよ	*植物＝擬人化 *生態→「子孫繁栄」　人の在り方の表象	擬人化・竹が主格・竹の生態・観念「子孫繁栄」
9	14	タケ	竹床（たきふんちゃ）	島廻りじらば	黒島	262	100	ジラバ	6　竹床（たきふんちゃ）生（まり）ばし　ヨホ　うふ平（なだ）ば　生（まり）ばしヨ：「竹床のような生まれであり　うふなだば（未詳）の生まれであり」	*具体表現／「女性評」	
10	14	タケ	大本竹（うむとうだき）	古見や頂<くゆんた> くんやらいじ<くゆんた>	石垣島川平村	301	16	ユンタ	4　大本竹（うむとうだき）　節並（ふしいな）み　はみとうし：「おもと竹の節並めを　はめとおし」 5　大本竹（うむとうだき）　節並（ふしいな）みぬ上なか：「オモト竹の節並めの　上に」 6 備後畳（びんぐだたみ）ぬ　美ら畳んば　敷きとうし：「備後畳を美しい畳を敷いて置き」	*建築の叙事	家の建築・役人の家・
11	14	タケ	一本竹	竹のゆんた	竹富島	418	170	ユンタ	1　我んど　竹富仲立てぬ　一本竹よばー：「私が竹富の仲立の一本竹ですよ」	*植物＝擬人化 *生態→「子孫繁栄」　人の在り方の表象	擬人化・竹が主格・竹の生態・観念「子孫繁栄」
12	14	タケ	竹（ふんちゃ）	竹富ぬぎらいちぇーまく<ゆんた> たきうどぅんぬぎらいてぇーまゆんた	竹富島	441	210	ユンタ	2　（前略）　竹（たき）ふんちゃ　生（ま）りばし　うぶなだが　　産（す）でぃばし：「竹の床の様な生まれをして同じ高さの生まれをして	*具体表現／「女性評」	女性評
13	14	タケ	竹（ふんちゃ）	竹富ぬぎらいちぇーまゆんた	黒島	444	214	ユンタ	2　（前略）　竹ふんちゃ　まりばし　うぶなだがすでぃばし：「竹の床の様な生まれをして同じ高さの生まれをして	*具体表現／「女性評」	女性評
14	14	タケ	（じぶた）竹	いんしがーぬ金盛ゆんた	黒島	447	216	ユンタ	33　芭蕉本に　ないばし　じぶた竹に　切りばし：「芭蕉本のように薙ぎ　地太竹のように切り」	*物語り　叙事 *対句　芭蕉本／じぶ竹 *具体表現／「薙ぎ倒す	歴史叙事・*具体表現／「薙ぎ倒す

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
15	14	マメ（ダイズ）	ふうまみ・ふうだな	物種の神口<穀類の神詞。願い口> むねだにぬかんふち	竹富島	80	122	ニガイフチィ	6　小豆（くまみ）ぬ　小真粒（くまーしじ） 8　赤豆（あかまみ）春萸（はるさや） 9　大豆（ふうまみ）大棚（ふーだな） 10 打豆（うちまみ）打粒（うちしじ）	＊神名挙げ　種子の名前を読み上げる。願い口	有用・儀礼の作物・
16	14	マメ（ダイズ）	ふうまみ（大豆）	浦船<あゆー>	竹富島	173	45	アヨー	20　大豆（ふうまみ）ぬ花咲く　うぬ風（かじ）：「大豆の花咲くその風（のときに）おいで」	＊植物「時候の指標」→航海の季節の象徴	植物・時候の指標・
17	14	マメ(類)	まめ	節じらば<おーばんや>	石垣島川平村	189	3	ジラバ	2〜4　まみぬしいた　みやらび　うらばんぬ　みゆとみゆとぬけ　ならぬ：「豆の下の乙女　あなたと私との夫婦　夫婦の別れはできない」	*列挙 ＊植物／動物→　具象「「夫婦の別れはあり得ない事」	概念・具象 ・夫婦の別れはない
18	14	マメ(類)	まみ	なーしなむらじらば	石垣島大浜村	215	32	ジラバ	14　まみなずね　あまみしやぐ　ちくみようり：「豆の和物を　甘い神酒を仕込んで」	*物語	有用・和え物
19	14	マメ(類)	豆	旅うさいぬじらば	波照間島	271	113	ジラバ	15　豆が　花盛り（ばなざかり）旅しょうり：「豆の花盛りに旅をなされよ」 16　赤豆ぬ　花盛り　旅しょうり：「アズキの花盛りに旅をなされよ」	＊対句　豆の花盛り／小豆の花盛り　時候＊植物「時候の指標」→航海の季節の象徴	植物・時候の指標・
20	14	マメ（ダイズ）	うぶまみぃ	ばなりちぃちぃやーみゆんた	黒島	449	218	ユンタ	19　あかまみぃとぅん　かひひり　大豆（うぶまみ）とぅん　くりひり：「小豆と替えてくれ　大豆と替えてくれ」	＊ばなり焼きとの、物々交換の交換所品	有用・物々交換商品
21	14	マメ(類)	豆	ばるまみちぃだかゆんた	波照間島	455	228	ユンタ	15　かにく地ぬ　豆だきや：「兼久地の豆を抱き」 16　ゆなご地ぬ　豆だきや：「砂州値の豆を抱き」	*対句　兼久地ノ豆を抱き／砂州地の豆を抱き ＊擬人化　豊作	有用：作物・雨乞い
22	14	マメ(類)	豆かざ	雨乞い歌	鳩間島	583	9	雨乞い	21　豆かざぬ命や：「豆蔓の命は」 22　うて水ど命やる：「落水が命である」	＊対句　豆蔓／芋蔓　「雨が命」・雨乞いの慣用句	有用：作物・雨乞い
23	14	マメ(類)	豆かざ	雨乞い歌	小浜島	583	10	雨乞い	15　豆かざん　枯りどす：「豆蔓も枯れ」 16芋かざん　枯りどす：「芋蔓も枯れる」	＊対句　豆蔓／芋蔓　「雨が命」・雨乞いの慣用句	有用：作物・雨乞い
24	14	マメ(類)	豆	雨乞い歌	黒島	587	15	雨乞い	9　五日旱魃（いしかぺーり）　芋のはざ枯（はり）るん　七日旱魃（なんかぺーり）　豆のはざ切（きし）るん：「五日の日照り芋の葛が枯れる　七日の日照りで豆の葛が枯れる」	＊対句　豆蔓／芋蔓　「雨が命」・雨乞いの慣用句	有用：作物・雨乞い
25	14	マメ(類)	豆かずら	雨乞い歌	黒島	587	16	雨乞い	6　豆かずら　枯りるん：「豆蔓も枯れる」	＊対句　豆蔓／芋蔓　「雨が命」・雨乞いの慣用句	有用：作物・雨乞い
26	14	マメ(類)	豆草（まみくさ）	阿須久御嶽の雨乞	波照間島	594	22	雨乞い	29　豆草（まみくさ）ぬ　たみんしおうり　はりぬよんがなし：「マメ草の為にしてください　ハリヌヨンガナシ」	＊対句　豆蔓／芋蔓　「雨が命」・雨乞いの慣用句	有用：作物・雨乞い
27	14	マメ(類)	まみ	巻踊り歌	石垣島石垣村	595	1	豊年祭	7　まみつくり　のうらし：「豆を作り稔らして」	＊列挙　五穀の稔り　米・粟・黍・麦・豆	有用：作物・豊作祈願
28	14	マメ(類)	豆	巻踊り歌	竹富島仲筋村	602	20	豊年祭	8　くぬゆあんがまや　なちあぐるたらし　わみやまみなゆて　うしゆまきとらな　ヨオンナ　わみやまみなとて：「この世のあんがまは　夏栗の殻（切株）のようだ　わたしは豆になって　押し巻きろう　ヨオンナ　わたしは豆になって」		

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	15	オキナワウラジロガシ	やまかしいに（山樫木）	山樫木あよう やまかしいにあよう	石垣島川平村	157	6	アヨー	1山樫木（やまかしいに）ぬヨーイ　根下（にう）りおうる　ヨイヨイ　山（やま）とうにどぅ根下（にう）りょうる：「山樫木のヨーイ　根下りなさる　山底に　根下りなさる」	＊列挙 ＊植物＝（生態）「根下り」→人の「根下り」具体表現（「山かしあゆう」系）	概念的・「根下り」の具象・祝儀
2	15	オキナワウラジロガシ	山かしぃ	山かしぃにあよう	石垣島新川村	158	8	アヨー	1山（やま）かしぃに　根下（にう）りや　山どぅにどぅ　根下りする：「山樫木の根下りは山底に根下りする」	＊列挙 ＊植物＝（生態）「根下り」→人の「根下り」具体表現（「山かしあゆう」系）	概念的・「根下り」の具象・祝儀
3	15	オキナワウラジロカシ	やまかしに（山樫木）	山樫木あよう	石垣島大川村	160	14	アヨー	1　山樫木（やまかしいに）ぬ　根下（にう）りや山どうにどぅ　根うりしょうる：「山樫木の根下りは山の底に根下りなさる」	＊列挙 ＊植物＝（生態）「根下り」→人の「根下り」具体表現（「山かしあゆう」系）	概念的・「根下り」の具象・祝儀
4	15	オキナワウラジロカシ	山かし	山かしぬあよう	小浜島	168	33	アヨー	1　やまかしぬ　根うりや　山ぬとーにと　根うりす：「山樫木（かしき）の根下（お）りは　山の底に根が下りる」	＊列挙 ＊植物＝（生態）「根下り」→人の「根下り」具体表現（「山かしあゆう」系）	概念的・「根下り」の具象・祝儀
5	15	オキナワウラジロガシ	やまかちに（山樫木）	山樫木あゆー（結婚祝いの歌） やまかちにあゆー	竹富島	171	40	アヨー	1　山樫木（やまかちに）や　山（やま）とんにどぅ　根下（にーう）りる：「山樫木は山底に根が下りる」	＊列挙 ＊植物＝（生態）「根下り」→人の「根下り」具体表現（「山かしあゆう」系）	概念的・「根下り」の具象・祝儀
6	15	オキナワウラジロカシ	やまかしに（山樫根）	山樫のあゆう	黒島	180	60	アヨー	1山樫根(やまかしに）の　ヨホイシタリヨホ　根下（にう）りや　ヨホシタリヨホ　山底（やまだう）にど　根（に）や下（う）りる：「山樫木の根下りは山底に根は下りる」	＊列挙 ＊植物＝（生態）「根下り」→人の「根下り」具体表現（「山かしあゆう」系）	概念的・「根下り」の具象・祝儀
7	15	オキナワウラジロカシ	かしいに木	いきぬぶししじらば	石垣島大浜村	224	44	ジラバ	19　片耳（かたみん）から　かしいに木：「片耳から樫の木（がはえ）」 21　かしに木や　かじぃとうり：「かしの木は（船の）舵とり」	＊対句　オキナワウラジロガシ／タブノキ・「船材」 ＊物語り　（「いけぬぶししじらば」系）	賄い女・死体化生・造船・樹木の霊性
8	15	オキナワウラジロカシ	かすにきーー	いきぬぶす	石垣島宮良村	226	48	ジラバ	23　かたちから　かすにきーー：「片乳から樫の木」 24　かたちから　たむぬきーー：「片乳からタブの木（が生え） 25　かすにきーーや　たなとり：「樫の木は棚（船板）に取り 26　とむぬきーーや　どゆとり：「タブの木は胴（船体）に取り 29　とむぬきーーや　どゆびし：「とぅむぬきは竜骨にし」 30　かすぬきーーや　たなうき：「樫の木は棚にし」	＊対句　（片乳から）とぅむぬ木／（片乳から）樫に木	賄い女・死体化生・造船・樹木の霊性
9	15	オキナワウラジロガシ	かしに木	たなとりじらば	石垣島白保村	237	61	ジラバ	10　かしに木に　あたりようり　みゆとたな　あたりようり：「樫の木にあたりなさり　夫婦棚（船材）にあたりなさり」	＊対句　樫に木／夫婦棚（船材） 石桃／水桃　（反意語）	有用・フナ材・妻と妾
10	15	オキナワウラジロガシ	かしゅき	んでぃみやーぼ-すぬじらば	小浜島	251	84	ジラバ	31　かしゅきや　たなとり：「樫の木は棚＜船材＞に取り」 32とむぬきや　どむとり：「トムの木は船体に取り」	＊対句　樫に木／タブノキ（船材） ＊物語り	賄い女・造船・
11	15	オキナワウラジロガシ（の花枝）	かちぃに木	ぱいさきよだじらば	波照間島	277	118	ジラバ	8　かちぃに木ぬ　やしぃ枝とぅん　なみられ：「樫の木のハナ枝とも言われて」	＊対句　山の木の百枝／樫の木のハナ枝 ＊＊物語り ＊植物=生態（花のついた枝=たぶらかす）悪い評価	概念的・具象「たぶらかす」

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
12	15	オキナワウラジロガシ（の実)	あでぃんが一ぬぐる(樫の実)	鳩間ゆんた	鳩間島	403	154	ユンタ	13　ふのうら人（びとう）ぬ　走（ば）りくーば　あでぃんが一ぬぐるに　みきぬまし：「船浦人がやって来たなら　樫の実の殻で神酒をのませよ」 14　上原人ぬ　ゆりくうば　はもうるぬぐるにちよん　酒（さき）ぬまさ：「上原人が寄って来たなら　蛤の殻で酒を飲まそう」	＊対句　あでぃんが一ぬぐる（樫の実の殻）／はもうるぬぐる（蛤の殻）	概念的・具象表現「嫌い」
13	15	オキナワウラジロガシ	かしに木	出でみゃ節ゆんた	小浜島	412	165	ユンタ	30　かしに木や　たなとり：「樫の木は棚<船材>に取り」	＊対句　樫に木／タブノキ（船材） *物語り	賄い女・死体化生・造船・樹木の霊性
14	15	オキナワウラジロガシ	かちんぎき	いとぅぬぶでぃ（どぅんた）	与那国島	463	237	ユンタ	19　かたみんがら　とむぬき　くぬみんがら　かちんぎきむい：「片耳からトゥムヌ木　この耳から樫の木が生え」 21　かちんぎきや　からばし　とぅむぬきや　たなばし：「樫の木は竜骨に　トゥムヌ木は　船棚に」	＊対句　樫に木／タブノキ（船材） ＊物語り	賄い女・死体化生・造船・樹木の霊性
15	15	オキナワウラジロガシ	樫の木	出船の歌	西表島	610	7	節祭り	1船　ヒャーイ　樫の木ど　スーリー　船でござる：「船は樫の木でございます」	＊列挙　船の構造 祭祀	有用・フナ材・美称・祭り
16	15	シークヮーサー（ヒラミレモン)	ふにぶんだま（九年母)	あんがろーまあよう	石垣島宮良村	164	23	アヨー	4　ばらぴん玉　ふだじぃばし：「ワラビ玉を踏み石にして」 5　ふにぶん玉　礎（びしい）ばし：「九年母を礎石にして」	＊建築の土台の霊性を示す。 ＊相聞部	習俗・風土
17	15	シークヮーサー（ヒラミレモン)	山くにぶ	ひゃんだんだきあよう	小浜島	169	34	アヨー	4　山みやらびぬ　かんざや　山くにぶぬ　かんざとす：「山乙女の　匂いは　山九年母の匂いがする」 5　いしゅみやらびぬ　かんざや　いしゅもぬ　かんざとす：「磯乙女の匂いは　磯もの匂いがする」	＊対句　山九年母／磯藻・　女性の臭い	概念・具象「村の女性の香り」・習俗
18	15	シークヮーサー（ヒラミレモン)	ふぬびゃ木／かばさ木	浦船じらば	石垣島登野城村	199	17	ジラバ	ハ）８うるじぃんぬ　ふぬびゃ木ぬ　ばいたれ：「初夏の九年母の芽のように」 ハ）９若夏の　かばさ木ぬ　ふきぃたれ：「若夏の香ばしい木の茎のように」	＊対句　九年母の木／香ばしい木・初夏／若夏・芽が出て／茎がでて ＊植物＝（芽や茎が出る）→具象「航海の風がよくふく」	概念的・（芽や茎のようにでる・航海の風の具象。
19	15	シークヮーサー（ヒラミレモン)	くにぶ木／かばさ木	古見や辻じらば	石垣島大浜村	221	40	ジラバ	2九年母木（くにぶんき）ばよー　かばさ木ばいべとぅしよー：「九年母を　香しい木を植えて」	*対句　九年母／かばさ木 ＊庭木に植える。香り、出会いをつくる。	有用・習俗
20	15	シークヮーサー（ヒラミレモン)	ふにぶんきー	むすびぬだんごまくじらば>	竹富島	257	91	ジラバ	2　九年母木（ふにぶんきー）ゆ　植（う）びとうし　かぶさん木ーば　並（な）み通（とう）し：「九年母の木を植え、香ばしい木を並べ」 11　九年母玉（ふにぶだま）故（ゆい）んどぅ　かばさ玉　故（ゆい）んどぅ　ばかしょうる：「九年母玉の故に　香ばしい玉の故に」	*対句　九年母／かばさ木 ＊庭木に植える。香り、出会いをつくる。	有用・習俗
21	15	シークヮーサー（ヒラミレモン)	くにぶ玉	島廻りじらば	黒島	262	100	ジラバ	12　くにぶ玉　生ばし　ヨホ　貫目美（ぬきみはいい）う産ばし　ヨ：「九年母のような生まれであり　貫（ぬ）いて美しい生まれであり」	＊列挙 ＊植物＝（頭飾りが美しい）→具象「美しい人」	概念・具象「美しい人
22	15	シークヮーサー（ヒラミレモン)	くにぶき（九年母木)	なさまやじらば	黒島	265	103	ジラバ	11　九年母木（くにぶき）ば　いび(植え）とうり：「九年母木を植えていて」	*対句　まつり木／九年母 ＊庭木に植える。香り、出会いをつくる。	有用・習俗

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
23	15	シークヮーサー（ヒラミレモン）	くにぶき（九年母木）／かばしゃき	なさまやゆんた	石垣島新川村	309	23	ユンタ	2　九年母木（くにぶき）ば　いびやんどぅ　香（か）ばしゃ木ば　差（さ）ちゃんどぅ：「九年母の木を植えてある　香ばしい木をさしてある」	*対句　九年母／かばさ木 ＊庭木に植える。香り、出会いをつくる。	
24	15	シークヮーサー（ヒラミレモン）	くにぶ木／かばさ木	あがろうざ（東里）	石垣島石垣村	315	32	ユンタ	2　くにぶ木ば　いびとうし　かばさ木ば　さしとうし：「九年母木を植えて　香ばしい木を差しておき」 3　くにぶ木ぬ　すたなんが　かばさ木ぬ　すたなんか：「九年母の木の下に　香ばしい木の下に」	＊対句 九年母／かばさ木 ＊習俗の実景	有用・人の集まるゆんたく場所・
25	15	シークヮーサー（ヒラミレモン）	くにぶ木／かばさ木	くんぬてーず	石垣島石垣村	317	35	ユンタ	3　くにぶ木ぬ　かばさ木ぬ　したなんが：「九年母木の　香ばしい木の下に」	*対句　九年母／かばさ木 ＊庭木に植える。香り、出会いをつくる。	有用・習俗
26	15	シークヮーサー（ヒラミレモン）	九年母（くにぶぎー）	なさま屋ゆんた	石垣島登野城村	348	78	ユンタ	2　九年母木（くにぶぎー）ば　植（い）べとぅし香（か）ばしゃ木ば　差（さ）しとうし：「九年母の木を植え　香ばしいきを植え」	＊対句　くにぶ木／かばさ木 ＊庭木に植える。香り、出会いをつくる。	有用・習俗
27	15	シークヮーサー（ヒラミレモン）	九年母（くにぶ）	北夫婦ぬふにぶ木ゆんた にしいみゆとうぬふにぶきゆんた	石垣島宮良村	375	115	ユンタ	1北夫婦（にしいみゆとう）ぬ　九年母（くにぶ）ゆ　みむぬし：「北の夫婦＜一対＞九年母を見ものにして」 2大原山（うはらやま）ぬ　香ばしゃ木　ゆみーむぬし：「大原山の香ばしい木を　見物にして」	＊対句　九年母／かばしゃ木 ＊庭木に植える。香り、出会いをつくる。	有用・習俗
28	15	シークヮーサー（ヒラミレモン）	くにぶき	くんやちぢゆんた	石垣島宮良村	378	118	ユンタ	2　くにぶきばよ　かばすきばよ　いびとうし：「九年母（くねんぼ）木を　香ばしい木を　植え」	*対句　くにぶき／かばすき ＊庭木に植える。香り、出会いをつくる。	有用・習俗
29	15	シークヮーサー（ヒラミレモン）	九年母玉（くにぶだま）	竹富ぬぎらいちぇーま たきどぅんぬぎらいちぇーま	竹富島	441	210	ユンタ	4（前略）九年母玉（くにぶだま）　生（ま）りばし　ぬきみはい　産（す）でぃばし：「九年母のようなうまれをして　貰いてみたい生まれをして」	＊列挙 ＊植物＝（頸飾りが美しい）→具象「美しい人」	概念・具象「美しい人
30	15	シークヮーサー（ヒラミレモン）	九年母玉（くにぶだま）	はいきだ<でらば>	新城島	452	223	ユンタ	14　九年母玉（くにぶだま）　かばし玉　さゆかば：「九年母の玉を　かばしい玉を　置いておくから」	*対句　九年母玉／かばし玉 ＊習俗の実景	有用・習俗

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	16	キビ	きぃん	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞<上の村> きぃん（黍）	石垣島川平村	24	1	カンフチィ	1　ふーきぃん、ようーきぃん　ですーや　：「大黍、大事な黍というのは」	＊対句　ふーきぃん／ようーきぃん ＊叙事	実用・農作物・豊穣の予祝概念的・美称
2	16	キビ	きぃん	内原村の真世加那志の神詞<下の村> きぃん（黍）	石垣島川平村	32	2	カンフチィ	1ふぅきぃん　まーきぃん　でぃすーど：「大黍、真黍というのは」	＊対句　ふーきぃん／まーきぃん ＊叙事	実用・農作物・豊穣の予祝概念的・美称
3	16	キビ	きん（黍）	夜雨 ゆあみ	石垣島大川村	125	10	ユングトゥ	黍（きん）作（ちく）り見りば　黍（きん）ぬ稔（のー）れー　牛ぬ尾（ぶー）：「キビをつくってみたら　キビのみのりはうしの尾のよう」	＊列挙	実用・農作物・豊穣の予祝概念的・
4	16	キビ	きぃん	米のらばぬゆんぐとぅ	西表島祖納村	136	34	ユングトゥ	4　きぃんのうらば　きぃんのらばぬよ　きぃんぬのうりすや　ざらざらし：「黍が稔るなら　黍が稔るなら　黍が稔るのは　ざらざらと稔り」	*列挙　まい・うむ・あわ・きぃんの稔りの表現 *山仕事　採取　タブのみ・バショウ・ゲットウの採取、みやげ	実用・農作物・豊穣の予祝概念的・
5	16	キビ	きん	島廻りじらば	黒島	262	100	ジラバ	19　きんぬふき　生（まり）ばし　だるだるし　仕出ばしヨ：「黍の茎のような生まれであり　だらりだらりとした生まれであり」	*列挙　各島の女性の評	女性の比喩表現
6	16	キビ	黍	ふなー星ゆんた	石垣島新川村	310	24	ユンタ	5　黍作り　見りばど　黍のなおりすや　牛ぬ尾にし：「黍を作ってみたら　黍の稔っているのは　牛の尾のように」	＊列挙	実用・農作物・豊穣の予祝概念的・
7	16	キビ	きぃん	のーりぃゆーゆんた	石垣島石垣村	338	61	ユンタ	6　むんのーれ　くびふかし　きぃんぬのーれ　うしーぃぬぶー：「麦の稔りは壁のよう　黍の稔りは牛の尾のよう」	＊列挙	実用・農作物・豊穣の予祝概念的・
8	16	キビ	きび(黍)	ふなー星ゆんた	石垣島大川村	342	68	ユンタ	6　きぃん作り　のうらしどぅ　ばが島どぅ　島ぬ本：「黍を作って稔らせて　我が島こそしまのもと」	＊列挙	実用・農作物・豊穣の予祝概念的・星見
9	16	キビ	きん	月出ぬ花むね	石垣島大川村	344	71	ユンタ	4　きん作り　見りばど　きんぬのーれー　牛ぬぶー：「キビを作ってみたら　キビの稔りは牛の尾のようだ」	＊列挙	実用・農作物・豊穣の予祝概念的・
10	16	キビ	きん	ふなー節	石垣島大浜村	372	110	ユンタ	9　稗（きん）作り　稔し　我島どよお島ぬ本よ　ならいじ：「黍を作って稔らして　我が島が　島の元」 10　稗（きん）稔（な）ぐり　牛（うし）ぬ尾（ずう）ぬぐとし　我島どよお島ぬ本よ　ならいじ：「キビの稔りは牛の尾のよう我が島が島の元」 ＊「稗」を（きん）としているのは、テキストの記載による。	＊列挙	実用・農作物・豊穣の予祝概念的・星見
11	16	キビ	きん(黍)	竹富ぬぎらいちぇーま たきどぅんぬぎらいちぇーま	竹富島	441	210	ユンタ	6　（前略）きんぬふき　生（ま）りばし　だるだるさ　産（す）でぃばし：「黍の茎のような生まれをして　だらだらした生まれをして」	*列挙　各島の女性の評	女性の比喩表現
12	16	キビ	黍	船越ゆんた	黒島	443	212	ユンタ	15　粟作（あわしく）り　なうらしよ　きんしくりできらしよ：「粟を作って　稔らせて　黍を作って稔らせ」	＊列挙	実用・農作物・豊穣の予祝概念的・星見
13	16	キビ	きん	うふな星	黒島	443	213	ユンタ	5　きん作（しく）り見りばど　きんのなうりや　野馬尾（ぬんまぶ）とん　たといらり：「キビを作って見たら　キビの稔りは野馬の尾と　たとえられ」	＊列挙	実用・農作物・豊穣の予祝概念的・星見
14	16	キビ	きぃん	竹富ぬぎらいちぇーまゆんた	黒島	444	214	ユンタ	6　（前略）きぃんぬふきぃ　生（ま）りばし　だらだらさ　産（す）でぃばし：「黍の茎のような生まれをして　だらだらした生まれをして」	*列挙　各島の女性の評	女性の比喩表現

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
15	16	キビ	くん	巻踊り歌	石垣島石垣村	595	1	豊年祭	5　くんつくり　のうらし　：「きびを作り稔らして」		実用・農作物・豊穣の予祝概念的・星見
16	16	チカラシバクサ	いばいだき	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞＜上の村＞ むん　(麦)	石垣島川平村	20	1	カンフチィ	3　ゆすき、いばいだき、ぬんぐとに、むとい、さかいし：「ススキ、力芝草のように、繁茂したら」	＊対語　ススキ／チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物＝(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼
17	16	チカラシバクサ	いばいたき	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞＜上の村＞ あわ（粟）	石垣島川平村	22	1	カンフチィ	3　ゆすきぃ　いばいたきぬん、ぐとむとさかい:「ススキ、チカラシバクサのように繁茂したなら」	＊対語　ススキ／チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物＝(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼
18	16	チカラシバクサ	いばいだき	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞＜上の村＞ きらまい（キラ米）	石垣島川平村	23	1	カンフチィ	3　ゆすきたき　ぬんぐと、いばいだき、ぬんぐと　むとい、さかい：「ススキのように、チカラシバクサのように　繁茂する」	＊対語　ススキ／チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物＝(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼
19	16	チカラシバクサ	いばいたき	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞＜上の村＞ きいん（黍）	石垣島川平村	24	1	カンフチィ	2　ゆすきぃたき、いばいたきぬぐと　むとい、さかい、しーぬ：「ススキ、チカラシバクサもように繁茂する」	＊対語　ススキ／チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物＝(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼
20	16	チカラシバクサ	いばいだき	内原村の真世加那志の神詞く下の村> きらまいしぬぐ（稲）	石垣島川平村	31	2	カンフチィ	ゆしきぃ　さとい、いばいだきぬん、ぐとぅーにむとい、さかい　しおーり：「ススキのように栄え、力芝草のように繁茂しなさってください」	＊対語　ススキ／チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物＝(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼
21	16	チカラシバクサ	いばんだき（力芝草）	種取いの願い たなどぅいぬにがい	竹富島	86	140	ニガイフチィ	根降（にーう）い　元降（むとうう）いぬ　上（うい）や　力草（いばん）だき　薄（ゆしき）だきに栄（さかい）し給（たぼう）り：「根降り　元降りの上は　力芝草のように　薄のように栄えさせてください」	＊対語　ススキ／チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物＝(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼
22	16	チカラシバクサ	さとばいん	うらふねくゆんぐどぅ>	石垣島登野城村	131	26	ユングトゥ	6　やまゆしき　さとばいんや　さかいより　くなつゆや　みりくゆば　たぼらる：「山薄（やますすき）力芝草のように栄えてください　来夏(来年)の世は弥勒世をいただきましょう」	＊対語　ススキ／チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物＝(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼
23	16	チカラシバクサ	さとばい	稲が種子あよう いにがだにあよう	石垣島大浜村	162	19	アヨー	12　やまゆしき　さとばいぬ　さといしょーり　いでば　ふぴたがいしょうり：「山薄（やますすき）力芝草のように　栄えてくださり　出穂したなら首をだかせてくださり」	＊対語　ススキ／チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物＝(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼
24	16	チカラシバクサ	さとばい	種子どりあよう たにどりあよう	石垣島宮良村	163	21	アヨー	14　山はたぬ　ゆしきに　みちはたぬ　さとばいに：「山端のすすきのように　道端の力芝草のように」	＊対語　ススキ／チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物＝(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼
25	16	チカラシバクサ	いばん本	種子どりのあよー たにどうりのあよー	石垣島白保村	165	24	アヨー	16　いばん本　山ゆすき　むてい栄い：「力芝草　山薄のように生え茂り」	＊対語　ススキ／チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物＝(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼
26	16	チカラシバクサ	いばいふさ	稲が種子あよう いにがだにあよう	西表島租納村	167	29	アヨー	13　ゆしぃきぃだき　いばい草（ふさ）　むとぅようり：「ススキのように　力芝草のように　分蘖してください」	＊対語　ススキ／チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物＝(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼
27	16	チカラシバクサ	いばん本	種子取りあゆう	黒島	178	57	アヨー	15　山（やま）ゆすき　いばん本（むと）　たといらり：「山薄　力芝草の本にたとえられ」	＊対語　ススキ／チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物＝(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
28	16	チカラシバクサ	いひやだき	いにがだにあゆ	与那国島	186	77	アヨー	14 どしきだぎ できらしようり いひやだき できらしようり:「薄(すすき)のように稔らせてください 力芝草のように 稔らせてください」	＊対語 ススキ/チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物=(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼
29	16	チカラシバクサ	いばいふさ	田植びじらば たうびじらば	西表島租内村	240	66	ジラバ	7 ゆしぃきぃだき いばい草(ふさ) むとぅりょうり:「ススキのように力芝草のように 分蘖してください」	＊対語 ススキ/チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物=(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼
30	16	チカラシバクサ	ばん(芝)	にーういぬゆんた	竹富島	420	175	ユンタ	2 薄程(ゆしきだき)栄(さか)りょうりが 芝程(ばんだき)元(むとう)りょり:「薄の様に栄えよ力芝草の様に栄えよ」	＊対語 ススキ/チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物=(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼
31	16	チカラシバクサ	いばん竹	銭太鼓	竹富島	617	8	蟷螂の斧	3 ゆしき竹 さかりょうり いばん竹 むとりょうり:「薄竹のように 栄えなさり 力芝草のように繁茂しなさり」	＊対語 ススキ/チカラシバクサの対語でのみ出現する。(五穀に共通する)。 ＊植物=(繁茂)→「稲の繁茂」の具体表現、及び、呪性 ＊予祝	概念的・「[繁茂」の表象・薄の対語のみ・呪性・儀礼

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	21	ムギ	ふうむん・ぱつたに	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞<上の村> むん　(麦)	石垣島川平村	20	1	カンフチィ	1ふーむん、ぱつたに、ですーや：「大麦、初種というのは」	*対句　ふーむん/ぱつたに *叙事 *豊穣の予祝	有用・作物・豊穣予祝 御飯・ムギ神酒・笠の材。
2	21	ムギ	むい	内原村の真世加那志の神詞<下の村> むい（麦）	石垣島川平村	28	2	カンフチィ	ふうむい　ぱちぃだに、で、すーど：「大ムギ、初種というのは」	*対句　ふーむん/ぱつたに *叙事 *豊穣の予祝	有用・作物・豊穣予祝 御飯・ムギ神酒・笠の材。
3	21	ムギ	むん	三月崇び さんぐわずたかび	石垣島平得村	51	46	ニガイフチィ	さんぐわずつきぬ　むんぬ　しゅうかくゆ　うけー：「三月の麦の収穫を受け」	呪詞	有用・作物・収穫物
4	21	ムギ	むるかだに/はつんだに	物種の神口<穀類の神詞。願い口> むぬだにぬかんふち	竹富島	80	122	ニガイフチィ	丸嘉種（むるかだに）　初種（はつんだに）：「麦種　初種」	*呪詞名　列挙 *対句　丸嘉種　初種：「「麦種　初種」 *種の名挙げ	名挙げ・
5	21	ムギ	ぱちぃむぬ（初物）	麦すくまんの祈り	波照間島	99	166	ニガイフチィ	すくまんぬ　ぱちぃむぬぬ　うごんあがおらば：「すくまの初物の祈願をお上げしますから」	*呪詞	作物・豊穣感謝
6	21	ムギ	むん（麦）	夜雨 ゆあみ	石垣島大川村	125	10	ユングトゥ	麦（むん）作（ち）きり見りば　麦（むん）ぬ稔（の）れえ　壁葺（くびふき）き：「麦を作ってみたら　麦の稔りは　壁をつくり」	*列挙　麦・アワ・コメ・サツマイモ・黍	
7	21	ムギ	むん（麦）	物作り誦言 むぬちぃくゆんぐとぅ	石垣島大川村	128	19	ユングトゥ	5　寒露（かんる）ぬ節ねー　麦（むん）作り：「寒露の時節に　麦を作り」	*列挙 *暦と節句に添った農耕	作物
8	21	ムギ	麦	ふなー星ゆんた	石垣島新川村	310	24	ユンタ	3　麦作り　見りばど　麦のなおりすや　壁ふきし：「麦を作ってみたら　麦の稔っているのは壁をふくほどに」	*列挙　麦・きび・イネ・アワ・サツマイモ	作物・稔りの表現・列挙・星見
9	21	ムギ	むぎわら（笠）	むんぐる久葉笠	石垣島石垣村	332	51	ユンタ	1むんぐる久葉笠（くばがさ）　なゆしやる者やりやど：「麦藁くば笠は如何なるものだから」	10	
10	21	ムギ	むん	のーりぃゆーゆんた	石垣島石垣村	338	61	ユンタ	6　むんぬのーれ　くびふかし　きぃんぬのーれ　うしーぃぬぶ：「麦の稔りは壁のよう　黍の稔りは　牛の尾のよう」	*列挙　麦・きび・イネ・アワ・サツマイモ	作物・稔りの表現・列挙・
11	21	ムギ	むん（麦）	ふなー星ゆんた	石垣島大川村	342	68	ユンタ	3　麦作（むんつく）り　稔（の）うらしどぅ　ばが島どぅ　島の本：「麦を作って稔らせて　わがしまこそ島のもと」	*列挙　麦・きび・イネ・アワ・サツマイモ	作物・稔りの表現・列挙・
12	21	ムギ	むん	月出ぬ花むね	石垣島大川村	344	71	ユンタ	1　麦（むん）作りみりばど　麦（むん）ぬのーれー　くびふき：「ムギを作ってみたら　麦の稔りは壁葺きのよう」	*列挙　麦・きび・イネ・アワ・サツマイモ	作物・稔りの表現・列挙・
13	21	ムギ	むん	ふなー節	石垣島大浜村	372	110	ユンタ	4　麦作（むんつく）り　稔（の）うらし　我島どよお島ぬ本（もと）よ　ならいじ：「麦を作って稔らして我が島が島の元」 5　麦稔（むんなぐ）り　ざぁらざぁらし　我島どよお島ぬ本（もと）よ　ならいじ：「麦の稔りはザラザラと我が島が島の元」	*列挙　麦・きび・イネ・アワ・サツマイモ	作物・稔りの表現・列挙・

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
14	21	ムギ	むん	まにむりぃぬいちぃけーまゆんた	石垣島宮良村	376	116	ユンタ	4 麦（むん）ぬ飯（んぼん）ば なりむみ 芋（あこん）ぬ飯（んぼん）ば 盛りくみ：「麦のご飯にし芋のご飯を盛り込み」 5 麦ぬ飯ぬ かてぃむぬ ぴるかにじぃ かてぃむぬ：「麦のご飯のおかずは 蒜の味噌和えがおかず」	*対句 むんぬんぼん／あこんぬんぼん	食物・ごはん・おかず
15	21	ムギ	麦	まにむるぅゆんた	石垣島宮良村	381	122	ユンタ	4 むんぬいーば なるくみ あっこんぬいーば むるくみ：「麦の飯を握り 芋の飯を握り」	*対句 むんぬいー／あこんぬいー	食物・ごはん・おかず
16	21	ムギ	むん	うふな星	黒島	443	213	ユンタ	3 麦作（むんしく）り 見（み）りばど 麦（むん）のなうりや しいし玉とん 例（たとい）らり：「ムギを作ってみたら ムギの稔りはジュズダマの様にたとえられ」	*列挙 麦・きび・アワ・サツマイモ	作物・稔りの表現・列挙・ 星見
17	21	ムギ	麦	まにむるぬいしきまゆんた	波照間島	457	230	ユンタ	9 むぎぬんぼんば なりむち あこんぬんぼんば なりむち：「麦のご飯を盛り持ち 芋のご飯を 盛り持ち」	*対句 むんぬんぼん／あこんぬんぼん	食物・ごはん・おかず
18	21	ムギ	むん	巻踊り歌	石垣島石垣村	595	1	豊年祭	6 むんつくり のうらし ：「米を作り稔らして」	*列挙 麦・きび・イネ・アワ・まめ	作物・稔りの表現・列挙・
19	21	ムギ	むぎ	巻踊り歌	黒島東筋村	607	30	豊年祭	3 麦粟（むぎあわ）ぬ稔（な）りや 二十頃（はたちぐる）乙女（みやらび）：「麦粟の稔りは20才頃の乙女のようだ」	＊対語 ムギ 粟 ＊物語・抒情的	作物・稔りの 喩え
20	21	ムギ	むぎ	巻踊り歌	黒島東筋村	607	31	豊年祭	2 むぎあわぬいるや みるくゆがふ：「麦 粟の色は弥勒世果報だ」 3 むぎあわぬいるや はたちぐるみやらび：「麦粟の色は20才頃の乙女のようだ」	＊対語 ムギ 粟 ＊物語・抒情的	作物・稔りの 喩え

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	頁	no.	ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	31	サツマイモ	はぁこん	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞<上の村> はあこん（甘藷）	石垣島川平村	25	1	カンフティ	1　はんし、ゆーむちゃい、はぁこんで、すーや：「蕃薯芋　世持ちサツマイモというのは」	*対句　はしい／はあこん *豊穣を希求される作物・主語 *「蕃」（署預の間違い？）	有用・作物・豊穣予祝・神口
2	31	サツマイモ	はっこん	内原村の真世加那志の神詞く下の村> はっこん（甘藷）	石垣島川平村	33	2	カンフティ	1　はっしい、ゆーむちゃい、はっこんで、すーや：「蕃薯芋　世持ちサツマイモというのは」	*対句　はっしい／はっこん *豊穣を希求される作物・主語 *「蕃」（署の間違い？）	有用・作物・豊穣予祝・神口
3	31	サツマイモ	あこん	芋ぬ初 あこんぬぱちぃ	石垣島平得村	52	51	ニガイフチィ	あっつぁぬ　くんぐわつくにつぇー　おじこのかたぜんぶ　あこんぬううはつゆ　あげーき　りっぱなる　あこんぬううばつぬ　うがん　にがいつけ　しさりるんゆ：「明日の九月九日は　氏子の方は全員　芋のお初の祈願をお願いもうしあげます。」	*供物の列挙　芋のお初	供物
4	31	サツマイモ	うむかざ	すばんがに節 すばんがにふち	石垣島平得村	53	53	ニガイフチィ	46･47　すくるむぬ　たみしようり　うむかざぬ　たみしようり：「農作物の為をしてください　芋葛の為をしてください」	*対句　すくるむぬ／うむかざ	雨乞い
5	31	サツマイモ	うやはんつめー/かばはんつめー	物種の神口く穀類の神詞。願い口> むぬだにぬかんふち	竹富島	80	122	ニガイフチィ	2　親蕃藷（うやはんつめー）香蕃藷（かばはんつめー）：「親芋蕃藷前　香蕃藷前」	*対句　うやはんつめー／かばはんつめー（さつまいもの言い換え） *種子名だけの読み上げ	栽培作物種子・読み上げ・尊称、美称
6	31	サツマイモ	はんつぼう/うやはんつめーー/香はんつめー	九日願い<九月九日の願い> くにちにがい	竹富島	83	131	ニガイフチィ	はんつぼう　千人（しんにん）そーぬ　願（にが）い立（た）てぃおーたる：「芋王　千人草の願い立てなさった」 はんつぼうぬ　うや(親）はんつめー　かば（香）はんつめー　作（すく）り始（はじ）みおーたる　願（にが）い：「芋親の　親蕃藷の前　香ばしい蕃藷の前を作り始めなさった願い」	*対句　芋王／千人草・芋王／親蕃藷	菊酒・芋の豊作の祈願・尊称、美称
7	31	サツマイモ	うん（甘藷）	夜雨 ゆあみ	石垣島大川村	125	10	ユングトゥ	うん（甘藷）作（ちく）り見（み）りば　甘藷ぬ実入（みい）れぇ　牛ぬ角〔ついぬ）：「サツマイモを作ってみると　サツマイモの稔りは　牛の角のよう」	*列挙　アワ・イネ・芋・キビ｛「稔り」 *各「稔り」の表現の比喩	有用・作物・豊穣・名を馳せる・予祝
8	31	サツマイモ	あこんかざ	章魚ゆんぐどぅ たくゆんぐとぅ	石垣島真栄里村	134	31	ユングトゥ	やーらぎて見りばどぅ　大章魚ぬどぅ　おーり　芋葛（あこんかざ）ば　とぅりうる：「たたいてみたところ　大蛸が来ていて　芋の蔓をとっている」	*物語り *笑い	蛸・作物荒らし
9	31	サツマイモ	芋	米のらばぬゆんぐとぅ	西表島祖納村	136	34	ユングトゥ	2　うむみらば　うむみらばぬよ　うむぬみりすや　ぴんてぃかんてぃし：「芋が稔るなら　芋が稔るなら　芋が稔るのは　ぴんてぃかんてぃ」	*列挙　作物　コメ・芋・アワ・キビ	五穀の稔り・採取
10	31	サツマイモ	芋づる	雨乞いのじらば	石垣島川平村	188	1	ジラバ	3大野芋ん無いうりば：「大野の茅も萎えているから」 5芋づるん無いうりば：「芋蔓も萎えているから」	*対句　大野の茅／芋づる *大神に祈願	作物／いもづる　雨を待つ植物
11	31	サツマイモ	うんまー	やーつくりじらば	黒島	269	109	ジラバ	<囃子>　粟(あわー)や実（なう）り　甘(うん）まー実（みいー）入り：「粟は稔れ　さつまいもは稔れ」	*囃子部　アワ／サツマイモ　の実り	作物・豊作・「富裕の世」の象徴 囃子部、新築儀礼・美称
12	31	サツマイモ	うむかづら（芋葛）	雨乞いのゆんた	石垣島川平村	293	4	ユンタ	5　大野芋（ふうぬがや）ん　枯りよりば：「大野の芋も　枯れているから」 7　芋葛ん　なよぅりば：「芋葛も萎えているから」	*対句　大野の茅／芋づる *大神に祈願	作物／いもづる　雨を待つ植物
13	31	サツマイモ	芋	ふなー星ゆんた	石垣島新川村	310	24	ユンタ	7　芋つくり　見りばど　芋の実入りすや　牛ぬ角にし：「サツマイモを作ってみたら　サツマイモの稔っているのは　牛の角のように」	*列挙　ムギ・イネ・キビ・アワ・芋（五穀）	作物、稔りの期待(牛の角) 星暦・農耕・作物の稔り（aタイプ植物ともの）

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	頁	no.	ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
14	31	サツマイモ	うむ(芋藷)	ふなー星ゆんた	石垣島大川村	342	68	ユンタ	7　芋藷（うむ）作り　のうらしどぅ　ばが島どぅ　島ぬ本：「芋藷を作って稔らせて　我が島こそ　島の本」	*列挙　ムギ・イネ・キビ・アワ・芋（五穀）	作物 星暦・五穀の稔り
15	31	サツマイモ	あっこん	月出ぬ花むね	石垣島大川村	344	71	ユンタ	5　あっこん作り見りばど　あっこんぬみーれー　牛ぬ角：「芋を作ってみたら　芋の実入りは牛の角のようだ」	*列挙　ムギ・マイ・アワ・キビ・芋（五穀）	作物、稔り（牛の角） 昔世・神の世・稔りの喩え（パターンa）
16	31	サツマイモ	うむ	ふなー節	石垣島大浜村	372	110	ユンタ	11　芋（うむ）作り　実（みい）らし　我島どよお　島ぬ本よ　ならいじ：「芋を作って稔らして　我が島が島の本」 12　芋（うむ）ぬ実入りや　ぴんてぃかんてぃし　しまぬ本（むと）よ　ならいじ：「芋の稔りは見え隠れして　我が島が島の元」	*列挙　ムギ・マイ・アワ・キビ・芋（五穀）	作物 星暦・作物の実り、祈願
17	31	サツマイモ	あこん	まにむりぃぬいちぃけーまゆんた	石垣島宮良村	376	116	ユンタ	4　麦（むん）ぬ飯（んぼん）ば　なりむみ　芋（あこん）ぬ飯（んぼん）ば　盛りくみ：「麦のご飯にし芋のご飯を盛りこみ」 5　麦ぬ飯ぬ　かていむぬ　ぴるかにじぃ　かてぃむぬ：「麦のご飯のおかずは　蒜の味噌和えがおかず」	*対句　芋／むぎ *食の風景	食物・作物 行楽
18	31	サツマイモ	あっこん	まにむるぅゆんた	石垣島宮良村	381	122	ユンタ	5　むんぬいーば　なるくみ　あっこんぬいーば　むるくみ：「麦の飯を握り　芋の飯を握り」	*対句　芋／むぎ *食の風景	食物・作物 ピクニック
19	31	サツマイモ	うん	鳩間ゆんた	鳩間島	403	154	ユンタ	10　栗ば作り　なうらし　うんば作り　みーらし：「栗を作り稔らせ　芋を作り稔らせ」	*対句　アワ／ムギ（船につまれている） *神酒作りの材	作物、御酒の材料 お国自慢
20	31	サツマイモ	うん	うふな星	黒島	443	213	ユンタ	6　「芋作（うんしく）り見りばど　芋（うん）ぬ実（みい）りや　牝牛角（みうしぬしぬ）とん　たといらり：「サツマイモを作って見たら　サツマイモの稔りは　牝牛の角と　たとえられ」	*列挙　ムギ・マイ・アワ・キビ・芋（五穀）	作物・豊作の願い（牝牛の角のよう） 星暦・作物の実り、祈願
21	31	サツマイモ	あこん	まにむるぬいしきまゆんた	波照間島	456	230	ユンタ	10 むぎぬんぼんば　なりむち　あこんぬんぼんば　なりむち：「麦のご飯を盛り持ち　芋のご飯を　盛り持ち 11　あこんぬんぼんぬ　かちむぬ　みしゅますどぅかちむぬ：「芋のご飯のおかずは　味噌と塩がおかず」	*対句　芋／むぎ *食の風景	ご飯 ピクニック
22	31	サツマイモ	うむかじら	1　雨乞 あまふち	石垣島大浜村	577	②ー1	雨乞い	22　うむかじらぬ　たみしようり：「芋ヅルの為をしてください」	*対句　作物／うむかずら *旱魃で　枯れる作物の象徴	作物／いもづる　雨を待つ植物
23	31	サツマイモ	うむかじら	2　雨乞 あまふち	石垣島大浜村	577	②ー2	雨乞い	22　うむかじらぬ　たみしようり：「芋ヅルの為をしてください」	*対句　作物／うむかずら *旱魃で　枯れる作物の象徴	作物／いもづる　雨を待つ植物
24	31	サツマイモ	芋づる	4　雨乞い歌	石垣島大浜村	580	4	雨乞い	14　芋づるん　すらしょうり：「芋蔓も生気づけてください	*対句　稲粟／芋づるん *旱魃で　枯れる作物の象徴	作物／いもづる　雨を待つ植物
25	31	サツマイモ	うんかざ	9　雨乞い歌	鳩間島	583	9	雨乞い	18　うんかざど命やる：「芋蔓が命である」 19　うんかざぬ　命や　かき水ど命やる：「芋蔓の命は掛ける水が命である	*対句　豆かざん／うんかざん *旱魃で　枯れる作物の象徴	いもづる・うまんちゆぬ命
26	31	サツマイモ	芋かざ	10 雨乞い歌	小浜島	583	10	雨乞い	15　芋かざん　枯りどす：「芋蔓もかれる」	*対句　豆かざん／うんかざん *旱魃で　枯れる作物の象徴	豆ヅル／いもづる　雨を待つ植物
27	31	サツマイモ	芋づる	雨乞い歌	黒島	587	16	雨乞い	3　五日ぺえり　しいば：「五日日照りがすると 4 芋づるん　枯りるん：「芋づるも枯れる」	*対句　芋かづら／豆かずら *旱魃で　枯れる作物の象徴	いもづるん　枯れる

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	頁	no.	ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
28	31	サツマイモ	あがくさ（芋草）	阿須久御嶽の雨乞	波照間島	594	22	雨乞い	28　芋草（あがくさ）ぬ　たみんしおうり　はりぬよんがなし：「芋草のためにしてください　ハリヌヨンガナシ」	*対句　芋草／豆草	イモ草／豆草　雨を待つ植物

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ	no.	ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	29	茅（の精霊）	ぬぬかん	家の新築落成の時の願い言葉	石垣島川平村	37	9	ニガイフチィ	やまぬかんややまへ　ぬぬかんやぬうへ　おーりとうろーりでり：「山の神＜木＞は山へ　野の神＜茅＞は野原へおいでになり」	＊対句　山の神（木）／野の神（カヤ） ＊「やーたかび」の美称 ＊「やーたかび」の叙事的展開 ＊	新築儀礼・茅の景・野の神／山の神
2	29	カヤ	うふぬがや	すばんがーにかんふちぃ〈願詞〉	石垣島宮良村	56	60	ニガイフチィ	うふぬがやんかりどふぅ　すくるかざん　びぢりどふぅ：「大野の茅も枯れるよ　作物の葛（かづら）も萎えるよ」	＊対語　うふぬがや／すくるがざん｛旱魃の景の象徴） ＊雨乞いの呪詞	雨乞い・旱魃の景・雨の由来・神への依願・雨の自然観
3	29	カヤ	がやー	あーばーれの歌	鳩間島	110	5	ヤータカビ	12 とぅるばにば　がやーばー　やーば　すくり　あんてぃすー：「鳥の羽を茅にして」	*列挙　新築家屋の構造物を順に誉める。＊美称辞、	美称辞・新築儀礼
4	29	カヤ	かや	家よーたか	小浜島	112	6	ヤータカビ	14 松ぬ葉ば　かやばし：「松の葉を茅にして」	*列挙　新築家屋の構造物を順に誉める。＊美称辞、	美称辞・新築儀礼
5	29	カヤ	がや	家ぬかざい やーぬかざい	竹富島	112	7	ヤータカビ	10ましぬ茅（がや）ふきてし　引き金（がね）やうすいてし：「よい茅を葺いて　引き金はおさえて」	*列挙　新築家屋の構造物を順に誉める。カヤは屋根。 ＊美称辞、	美称辞・新築儀礼
6	29	カヤ	かや	だーとだき〈その二〉	与那国島	113	9	ヤータカビ	9草ぬ葉ば　かやばし：「草の葉を茅にして」	*列挙　新築家屋の構造物を順に誉める。カヤは屋根。 ＊美称辞、	美称辞・新築儀礼
7	29	カヤ（の笠）	ちぃとぅべー	ちぃとぅべー誦言 ちぃとぅべーゆんぐどぅ	石垣島大川村	129	20	ユングトゥ	雨ぬふいやん　ちぃとぅべー：「雨が降っても　チィトゥべー」		作業衣裳
8	29	カヤ	がや	大野がや誦言	西表島祖納村	137	38	ユングトゥ	1　大野茅（うふぬがや）　しばゆい　すりまらぎ　しばゆい：「大野の茅の標（しめ）結い　刈って葺った標を結い」 2　みやらびば　しばゆい　肝（きいむ）ばみり　しばゆい：「乙女に標をゆい　心を見て標結い」 参考）「締め込む」　思う女を自分のものにすること　〈デジタル大辞典〉	＊対句　大野茅　しばゆい／すりまらぎ　しばゆい　（契りの印し）	シバ結い（標縄）・呪いの習俗・男女の仲の物語り
9	29	カヤ	がや（茅）	あんがろーまあよう	石垣島宮良村	164	23	アヨー	11　あやばに（綾羽）　がや（茅）ばうけ：「綾羽のような茅をうけ」	＊列挙　新築家屋の構造物を順に誉める。＊美称辞、	美称辞・新築儀礼
10	29	カヤ	かりがや（枯れ茅）	ばなりー焼きあよー	竹富島	176	51	アヨー	4　枯茅（かりがや）し　微温（ぬふぁ）び　枯薄（かりすすき）し　焼きすけ：「枯れ茅で微温火して　枯れ薄で焼きつけ」	*対句　枯れ茅／枯れ薄　（燃焼材） *叙事｛短い）	ばなり焼き・燃料
11	29	カヤ	かや（みな）	まやしくまやびらあゆ	波照間島	183	69	アヨー	3　冬なりば　かやみなぬ　帯（うびい）しめ：「冬になると茅縄の帯を締め」	*対句　冬に茅縄の帯／夏に藁縄の鉢巻き｛庶民の労働着）	象徴的・庶民の労働着・村立て・愛しい者のために働く庶民
12	29	カヤ	かや	雨乞いのじらば	石垣島川平村	188	1	ジラバ	3大野茅ん無いうりば：「大野の茅も萎えているから」 4芋づるん無いうりば：「芋蔓もなえているから」	＊対句　大野茅／芋づるん　（雨が降らずに萎えている）	雨乞い・旱魃の景・雨の由来・神への依願・雨の自然観
13	29	カヤ	がや（茅）	ゆうねんぶしじらば	石垣島大浜村	225	46	ジラバ	16　ゆすきたいん　うつすむぬ：「薄の松明も　うつすもの」 18　がやたいん　うつすむぬ：「茅の松明もうつすもの」	＊対句　ゆすきたい／がやたい｛松明の材） ＊日常の物語	夜這いの習俗・体部の比喩
14	29	カヤ	がや（茅）	二月じらば	石垣島宮良村	226	47	ジラバ	3　大野茅（うふぬがや）しぃじぃ調び　調びょうり：「大野の茅（のように）筋を調べ　調べなさり」	＊対句　大野茅／藁の芯｛筋のよいもの）	造船・沖縄旅の準備｛貢納）

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
15	29	カヤ	ちばた（茅端）	山崎ぬじらば	石垣島白保村	234	58	ジラバ	10　下から　ちばたぬ　我ばしきば　上からや　あぶじやまぬ　我ぬしきば：「下からは茅端が私を突くので　上からは叔父さんが私を突くので	＊対句　茅端（ちばた）／あぶじやま（おじさん）　（性描写） ＊物語	男女の習俗
16	29	カヤ	みどりかや	家たかびのじらば〈その二〉	西表島租内村	239	65	ジラバ	10　みどりかやば　羽ばし　ふきかぶし　あんでそ：「緑の茅を羽根にし　葺きかぶせてあるという」	＊列挙　家の構造部　屋根葺き	新築儀礼・構造部
17	29	カヤ	はね	やーつくりじらば	黒島	269	109	ジラバ	6　あふがにば　羽ばし：「青金を茅にし」 *→ｐ110・5参照	＊列挙　家の構造部　屋根葺き	新築儀礼・構造部
18	29	カヤ	かや	なかまいじらば	波照間島	280	121	ジラバ	26　かやぬしぃた　ゆしきぃしぃた　ありどぅし：「茅の下、薄の下もあるのだ」 27　かやぬしぃた　ゆしきぃしぃた　たまはんちよ：「茅の下、薄の下は　たまはんちよ(未詳)」	*対句　かやのしぃた／すすきのしぃた（密会の場） *問答	日常の男女の習俗
19	29	カヤ	がや(大野の茅)	雨乞いのゆんた	石垣島川平村	293	4	ユンタ	5　大野茅（うふぬがや）ん　枯（んか）りよりば：「大野の茅も　枯れているから」 6　芋葛ん　なよぅりば：「芋葛も萎えているから」	＊対句　大野茅／芋かづら　（雨が降らずに萎えている）	雨乞い・旱魃の景・雨の由来・神への依願・雨の自然観
20	29	カヤ	がやぶき（茅葺き）	網張りぬ目高蟹＜ゆんた＞ あんばりいぬみだがーゆんた	石垣島川平村	295	8	ユンタ	5　愛（かぬ）し上（うい）ぬ屋（やー）や　茅葺（がやぶ）きでぃんとぅる：「愛し上の家は　茅葺きである」	＊対句　瓦葺／茅葺（屋根） ＊擬人法	蟹が主人公・擬人法
21	29	カヤ	がや	くんぬてーず	石垣島石垣村	317	35	ユンタ	3　くにぶ木ぬ　かばさ木ぬ　したなんが：「九年母木ぬ　かばさ木ぬ　したなんか：「九年母木の　香ばしい木の下に」 4　がやしやーば　とましやーば　ちくりよぅり：「茅の家を　苫の家を造りなさり」	＊対句　茅の家／苫の家（屋根） ＊物語 *「苫」カヤなどを編んだ筵など。	役人を迎える・習俗
22	29	カヤ	かや	多良間ゆんた	石垣島石垣村	328	45	ユンタ	15　うきばむし　かやばむし　泣きやうるけん：「うき（未詳）をむしり　茅をむしり　泣いていると」	*対句　かや／うき（未詳語）｛悔しくて草をむしる） *問答	結ばれない恋・
23	29	カヤ	がや	しやがむやー	石垣島石垣村	337	59	ユンタ	5　がやたいん　してぃむぬ：「茅の炉火もすてるほどある」 6　がやたいんが　うきぃりぃくめ：「茅の炉火におき火をこめて」	＊対句　ゆしきぃたい（すすきのかがり火）／がやたい｛茅のかがり火）（明かり） ＊歌の景	＊夜這いの習俗
24	29	カヤ	茅（葺き）	あんばりぬみだごーまゆんた	石垣島登野城村	362	95	ユンタ	5　ういぬやーや　がやぶきでんどー：「上の家は茅葺きである」	＊対句　瓦葺／茅葺（屋根） ＊擬人法	蟹が主人公・擬人法
25	29	カヤ	かや（茅の上）	あらぐしくゆんた	石垣島登野城村	365	99	ユンタ	1　あらぐしく　かやぬ上ぬ　まぶなりぃ：「新城の茅の上のマープナル＜女名＞」	＊歌の導入　舞台の景	女性版出世譚・機織り社会的価値
26	29	カヤ	ばらとまー（原苫）	松金ゆんた	小浜島	405	158	ユンタ	6　雨やんどや　ばらとまーば　あみさり：「雨戸は原苫を編んで下げ」	*「苫」カヤなどを編んだ筵など	
27	29	カヤ	茅（の花）	松金真ゆんた まつがねまゆんた	竹富島	429	190	ユンタ	26　白いちゅや　がやぬ花たらし：「白絹は　茅の花のように」	＊列挙　白絹・青絹・赤絹・黄色絹ー茅の花・クワズ芋の山・デイゴの花・なの花｛華やか=名声が鳴響む）	出世譚・家の建築材・庶民と役人の表現

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
28	29	カヤ	がや	うんだまり<ゆんた>	竹富島	431	192	ユンタ	9　ずりがやや　仲立(なかだ)てぃし　巻（ま）きや来（くう）で：「削った茅は仲立<仲介人>が採ってこいと	*列挙　叔父･叔母・仲人ーあでふ・だしきゃ・茅	
29	29	カヤ	すぬふ（葦網代）	松金真ゆんた まつがねまゆんた	竹富島	429	190	ユンタ	7　中やどぅや　すぬふやどぅ　ふみ立てー：「中雨戸は　すぬふ　<葦網代>屋戸を作り立て	*「すぬふ」カヤなどを編んだ筵など	
1	29	ススキ	ゆすきだき	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞<上の村> むん　（麦）	石垣島川平村	20	1	カンフティ	2　ゆすきだきぬんぐと、いぱいだき、ぬんぐとに、むとい、さかい　すぬかふーで：「ススキ、チカラシバクサのように繁茂する　果報で」	*対句　ゆすきたき／いぱいだき｛繁茂｝ *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
2	29	ススキ	薄	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞<上の村> あわ（栗）	石垣島川平村	22	1	カンフティ	2　ゆすきぃたき、ぬんぐと、いぱいだき、ぬんぐと、むとい、さかい　すぬかふーで、：「ススキのように、チカラシバクサのように繁茂する　その果報」	*対句　ゆすきぃ／いぱいだき｛繁茂｝ *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
3	29	ススキ	ゆすきたき	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞<上の村> きらまい（キラ米）	石垣島川平村	23	1	カンフティ	3　ゆすきたき　ぬんぐと、いぱいたき、ぬんぐと、むとい、さかい、すぬかふーで：「ススキのように、チカラシバクサのようにはんもする果報だ」	*対句　ゆすきたき／いぱいだき｛繁茂｝ *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
4	29	ススキ	ゆすきたき	九場川村のまーゆんがなしぃの神詞<上の村> きいん（黍）	石垣島川平村	24	1	カンフティ	2　ゆすきぃたき、ぬぐと、いぱいたきぬぐと　むとい、さかい、しーぬかふーで、：「ススキ、チカラシバクサもように繁茂する果報だ」	*対句　ゆすき／いぱいだき｛繁茂｝ *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
5	29	ススキ	ゆすきたき	内原村の真世加那志の神詞<下の村> きらまいしぬぐぅ(稲)	石垣島川平村	31	2	カンフティ	ゆしきぃ、さとい、いぱいだきぬん、ぐとぅーに、むとい　さかい　しおーり、たびみしょうり：「ススキのように栄え、力芝草のように繁茂しなさって下さり、」	*対句　ゆしきぃ／いぱいだき｛繁茂｝ *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
6	29	ススキ	ゆしいく	種取りぃぬ神願い たにどぅりぃぬかんにがい	石垣島平得村	49	41	ニガイフチィ	薄本（ゆしいくむとぅ）んやー　盛（さか）らしめ給（たぼ）うり：「ススキのもとのように栄えさせてください」	*ゆしき本｛繁茂｝ *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
7	29	ススキ	ゆしきだき（薄）	種取いの願い たなどういぬにがい	竹富島	86	140	ニガイフチィ	力草（いばん）だき　薄（ゆしき）だぎに　栄（さか）いし給（たぼ）うり：「力芝草のように　薄のように栄えさせてください」	*対句　力草だき／ゆしきだき｛繁茂｝ *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
8	29	ススキ	薄	種子まきの呪文	竹富島	120	33	ジンムヌ	注）「畠に種子を蒔いた後、ススキの葉を結んで畑に立て、息を3回吹き、この呪文を唱える。そうすると、鳩やカラス、スズメなどが畑にくることがなく、種子は全部発芽するという。」		厄除け呪文・呪物
9	29	ススキ	薄	猪の呪文	竹富島	120	34	ジンムヌ	注）「7本のススキを一束にして、先の方を5合結ぶに結び、2本は頭、2本は前足、2本は後足、1本は尾として犬の形をつくる。これを猪のよく通る道に置いて、呪文を一息でとなえ、息を3回吹きかけておくと、田に猪は来なくなり、存分に米が収穫出来るという。」		厄除け呪文・呪物

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ	no.	ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
10	29	ススキ	山薄	我びぎりゃくわが夫〉 ばーびぎりゃ	石垣島大川村	127	15	ユングトゥ	山薄　鹽酢*（あいずー）なし　飲（の）まさばん　我ぬ夫婦ぬき　しらるぬ：「山薄を和物の酢にして飲ませても　私達夫婦の別れはできない」 *鹽　読み：なます		
11	29	ススキ	やまゆしき	うらふねくゆんぐとぅ〉	石垣島登野城村	131	26	ユングトゥ	5　やまゆしき　さとばいんや　さかいより　くなつゆや　みりくゆば　たばらる：「山薄　力芝草のようにさかえてください　来夏(来年)の世は弥勒世をいただきましょう」	*対句　やまゆしき／さとばい｛繁茂｝ *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
12	29	ススキ	ゆしき	いだふんくゆんぐとぅ〉	竹富島	144	50	ユングトゥ	畠（はてー）んじてぃ　雨（あみ）ぬ降（ふ）りたらーどぅ　薄（ゆしき）ぬかたんが　蘇鉄（すでいち）ぬかたんが　居（ぶ）りてぬ思（うむ）いぬどぅ：「畠に出て雨が降ったので　ススキの側に　ソテツの側にいての思いが」	*対句　ゆしきぬかたん／すでいち（蘇鉄）ぬかたん（雨をしのぐ場）	実景・継子
13	29	ススキ	やまばゆしいき	稲が種あよう いにがだにあよう	石垣島平得村	161	18	アヨー	10　うるじぃんや　やまば薄（ゆしいき）に　むとぅようり：「初夏には山葉薄にむとぅようり」	*「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
14	29	ススキ	やまゆしき	稲が種子あよう いにがだにあよう	石垣島大浜村	162	19	アヨー	12　やまゆしき　さとばいぬさといしょーり　いでばふびだがい　しょうりよ：「山薄　力芝草のように栄えてくださり　出穂したなら首を抱かせてくださり」	*対句　やまゆしき／さとばい｛繁茂｝ *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
15	29	ススキ	やまゆしき	種子どりあよう たにどりあよう	石垣島宮良村	163	21	アヨー	14　やまはたぬ　ゆしきに　みちはたぬ　さとばいに：「山端のすすきのように　道端の力芝草のように」	*対句　ゆしき／さとばい｛繁茂｝ *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
16	29	ススキ	山ゆすき	種子どりのあよー たにどぅりのあよー	石垣島白保村	165	24	アヨー	16　いばん本　山ゆすきに　むてい栄い：「力芝草　山薄のように生え茂り」	*対句　いばん本／山ゆすき｛繁茂｝ *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
17	29	ススキ	ゆしぃだき	稲が種子あよう いにがだにあよう	西表島租納村	167	29	アヨー	13　ゆしぃきぃだき　いばい草（ふさ）　むとぅようり：「ススキのように　力芝草のように　分蘖してください」	*対句　ゆしぃきだき／いばいふさ（繁茂） *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
18	29	ススキ	かりがや（枯茅）	ばなりー焼きあよー	竹富島	176	51		5　枯茅（かりがや）し　微温（ぬふぁ）び　枯薄（かりすすき）し　焼きすけ：「枯れ茅で微温火して　枯れ薄で焼きつけ」	*対句　枯れ茅／枯れ薄　（燃焼材） *叙事｛短い｝	ばなり焼き・燃焼材
19	29	ススキ	山ゆすき	種子取りあゆう	黒島	178	57	アヨー	15　山（やま）ゆすき　いばん本（むと）　例（たと）いらり：「山薄　力芝草の本にたとえられ」	*対句　やまゆすき／いばん本｛繁茂｝ *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
20	29	ススキ	どしきだき	いにがだにあゆ	与那国島	186	77	アヨー	14　どしきだぎ　できらしょうり　いひやだぎ　できらしょうり：「薄（すすき）のように稔らせてください　力芝草のようにみのらせてください」	*対句　やまゆすき／いばん本｛繁茂｝ *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
21	29	ススキ	ゆすき（たいん）	ゆうねんぶしじらば	石垣島大浜村	225	46	ジラバ	16　ゆすきたいん　うつすむぬ：「薄の松明も　うつすもの」 17　がやたいん　うつすむぬ：「茅の松明もうつすもの」	*対句　ゆすきたい／がやたい｛松明の材｝ *日常の物語	夜這いの習俗・体部の比喩

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
22	29	ススキ	ゆしぃきぃだき	田植びじらば	西表島租内村	240	66	ジラバ	7　ゆしぃきぃだき　いばい草（ふさ）　むとぅようり：「ススキのように力芝草のように　分蘖してください」	*対句　やまゆすき／いばん本｛繁茂｝ *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
23	29	ススキ	ゆしぃきぃ	なかまいじらば	波照間島	280	121	ジラバ	26　かやぬしぃた　ゆしきぃしぃた　ありどぅし：「茅の下、薄の下もあるのだ」 27　かやぬしぃた　ゆしきぃしぃた　たまはんちよ：「茅の下、薄の下は　たまはんちよ＜未詳＞」	*対句　かやぬしぃた／ゆしきぃぬしぃた（密会の場） *問答	日常の男女の習俗
24	29	ススキ	ゆしぃき（たい）	しやがむやー	石垣島石垣村	337	59	ユンタ	4　ゆしぃきたい　あるむね：「薄（すすき）の炉火はないのでどうする」	*対句　ゆしきぃたい（すすきのかがり火）／がやたい｛茅のかがり火）（明かり） *歌の景	夜這いの習俗
25	29	ススキ	ゆしぃきぃ（むら）	あかんにゆんた	石垣島登野城村	350	80	ユンタ	8　ゆしぃきぃむらしい　かねんむらしぃぬ　側（すば）なんが：「ススキ叢　ハマゴー叢の側に」	*対句　ゆしきぃむら／かねんむら	日常の男女の習俗
26	29	ススキ	ゆすき（むら）	あかんに田ゆんた	石垣島登野城村	358	90	ユンタ	8　ゆすきむらし　かにんきーぬ　そばなんが：「薄叢の　ハマゴウの側に」	*対句　ゆしきぃむら／かにんきー	日常の男女の習俗
27	29	ススキ	ゆすき	にーういぬゆんた	竹富島	420	175	ユンタ	2　薄程（ゆしきだき）栄（さか）りょうりが　芝程（ばんだき）元（むとう）りょり：「薄の様に栄えよ力芝草の様に栄えよ」	*対句　ゆしきだき／　ばんだき｛繁茂） *「作物の繁茂」祈願 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
28	29	ススキ	ゆしき竹	銭太鼓	竹富島	617	8	蝶蝶の斧	2ゆしき竹　さかりょうり　いばん竹　さかりょうし：「薄竹のように栄えなさり　力芝草のように　繁茂しなさり」	*対句　ゆしき竹　／　いばん竹｛繁茂） *「作物の繁茂」・予祝・呪術性 *叙事	概念的・具体表現「作物の繁茂」・呪術性
29	29	ススキ	どしき	ゆなははら	与那国島	618	12	与那国島誌	17　どしきたいんで　ありどす:」ススキの松明もあるよ 18　ばらたいんで　ありどす：「藁の松明もあるよ」	*対句　どしきたい／ばらたい｛松明の材） *日常の物語	夜這いの習俗

総番号	出現箇所数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	35	チョマ（カラムシ）	ぶー	屋敷願の祝詞	石垣島新川村	41	23	ニガイフチィ	ちぃちぃまちりむぬ、ぬぬたん九（きゅう）たんぶーまる九（くくぬ）まる：「土祭りのものに布反　（物）九反　苧丸を九まる」	＊列挙　供物の次第	有用・織物・綱の材・ 概念的・具体表現「作物の繁茂」［強く根付く」「成長が早い」・供物 ・霊性（舟の材）
2	35	チョマ（カラムシ）	ぶーむとぅ（苧麻の本）	火の神の前の祈り	波照間島	97	164	ニガイフチィ	ぶーむとぅ　さえおり　ながむとぅ　さかえ　たぼらおり：「苧麻の本のように　栄えなさり　長本のように　栄えなさり」	*対句　苧麻のよう栄え／長本に栄え｛繁茂）	火之神祈願・作物の豊穣
3	35	チョマ（カラムシ）	ながむとぅ（長本）	火の神の前の祈り	波照間島	97	164	ニガイフチィ	ぶーむとぅ　さえおり　ながむとぅ　さかえ：「苧麻の本のように　栄えなさり　長本のように栄えなさり」	*対句　苧麻のよう栄え／長本に栄え｛繁茂）	火之神祈願・作物の豊穣
4	35	チョマ（カラムシ）	ぶうむとぅ（苧麻本）	山蜘蛛子	石垣島大川村	128	16	ユングトゥ	我びぃぎりゃ　苧麻有るびぎりゃぬ　大目綱　八十目綱　くぬみようり：「私の兄（あに）　苧麻本のある兄さまが　大目綱八十目綱を作りなさり」	＊対句　蜘蛛／吾がびぎりゃ（夫）の行動（（得物／女性）を捕まえる。） ＊対比的構造	蜘蛛の生態・人の行動
5	35	チョマ（カラムシ）	ぶう（苧麻）	目ばぎばだーら誦言	石垣島登野城村	130	24	ユングトゥ	親（うや）のばぎだまで　ひょった苧麻本（ぶうむとう）一本（びとうむとう）　くれーのうどぅしぃ：「親の分け前として与えなさった苧麻一本これはどうすｓる」	＊物語りの導入「苧麻一本」 ＊笑いの語り	笑い・縄の材
6	35	チョマ（カラムシ）	（はい）ぶ	南風が星むりく花ゆんぐとぅ	黒島	150	62	ユングトゥ	おしかぶり　あみあみかぶり見りばど、ぶなれまや　はいぶば　うみ居（び）りよる：「おしかぶり　浴みかぶってみれば　プナレーマは　美しい苧麻を績みすわっている」	＊対句　夫は藁縄を編む／妻は苧麻を績む｛夫婦の景） ＊物語り ＊相聞	恋の不審・男女の問答・機織りの景・女性の仕事・ 言い聞かせ
7	35	チョマ（カラムシ）	（しる）ぶ	いみしゃからぬゆんぐとぅ	波照間島	153	67	ユングトゥ	7　ゆむとぅずやー　しるぶむとぅー　かつみよーり　：「いやな妻は白苧麻のもとをつかんであり	＊対句　夫は藁縄／妻は苧麻（（夫婦）の仕事景） ＊物語り ＊男女の問答	恋の不審・機織りの景・女性の仕事・ 恨み述べる
8	35	チョマ（カラムシ）	あかぶ（赤苧）	大本嶽あよう うむとうだき	石垣島新川村	158	10	アヨー	1　赤苧布（あかぶぬぬ）二十桝（はたゆみ）ぬ御用布（ぐいふ）：「赤苧麻の布　二十読＜極細上＞の御用布	＊物語り ＊問答	御用布・布の等級・庶民と役人の問答
9	35	チョマ（カラムシ）	あぶ	くくる嶽あよう	小浜島	169	36	アヨー	3　わんが親ぬ　いびわぬよ　あぶ嶽によー：「私の親の　植えてある真苧麻のように」 ＊「嶽」テキストのママ 4　なしやるあぶぬ　やといべる　まびら嶽によー：「産みの母親の　移植した真ニラのように」	＊対句　あぶ嶽（真苧麻）／まびら嶽（真ニラ） ＊（次々に葉が伸びる）→具象（航海の風が吹き続ける）	概念的・具体表現「かってもかっても葉が伸びる」・呪的認識（航海の祈り）
10	35	チョマ（カラムシ）	赤ぼん	さしにがんあゆう	黒島	180	62	アヨー	3　赤ぼんに　じくぬぼな（でいごの花）　たらしより：「赤苧麻に　梯梧の花（のように）垂らせなさり」	*列挙　婚姻の教訓的言葉 *物→人へ	蟹の擬人化・根付く・婚姻・嫁の教訓
11	35	チョマ（カラムシ）	青ぼん	さしにがんあゆう	黒島	180	62	アヨー	4　青ぼんに　びゆる山（やま）　たらしようり：「青苧麻に　びゆり山（のように）垂らせなさり」	*列挙　婚姻の教訓的言葉 *物→人へ	蟹の擬人化・根付く・婚姻・嫁の教訓
12	35	チョマ（カラムシ）	まぶん	くくるだきあゆ	波照間島	182	67	アヨー	3　我が親ぬ　いびやる　まぶんだき：「わたしの親が植えてある　真苧麻のように」	＊対句　まぶんだき／びらだき｛風のもと） ＊植物=（次々に葉が伸びる）→具象（航海の風が吹き続ける）	概念的・具体表現「かってもかっても葉が伸びる」・呪的認識（航海の祈り）

総番号	出現箇所数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
13	35	チョマ（カラムシ）	（しる）ぶー	なーしなむじらば	石垣島大浜村	215	32	ジラバ	9　白（しる）ぶーむとぅ　しぃににかけ　びりばし：「白い真苧を脛（すね）に掛けて坐り」 10　ながぶーむとぅ　うでぃにかけ　びりばし：「長い真苧を腕に掛けて坐り」	＊対句　しるぶーむとう／ながぶーむとぅ	概念的・教訓・食用・和え物
14	35	チョマ（カラムシ）	しらみぶー（白身苧）	崎山じらば	石垣島大浜村	218	36	ジラバ	6・7　うるじん＜初夏＞ぬ　真肌（まはだ）ぶーば　若夏ぬ白身（しらみ）ぶーば　みやらびんやうましょうり　やーぬとぅじんや　しなしょうり：「うるじんの真肌苧を　若夏の白身苧を　乙女に紡がせなさり　家の妻につむがせなさり」	*対句　真肌ぶー／しらみ〔白身〕ぶー	村たて・小魚漁・チョマの漁網・男女の習俗
15	35	チョマ（カラムシ）	まはだぶー（真肌苧）	崎山じらば	石垣島大浜村	218	36	ジラバ	6・7　うるじん＜初夏＞ぬ　真肌（まはだ）ぶーば　若夏ぬ白身（しらみ）ぶーば　みやらびんやうましょうり　やーぬとぅじんや　しなしょうり：「うるじんの真肌苧を　若夏の白身苧を　乙女に紡がせなさり　家の妻につむがせなさり」	*対句　真肌ぶー／しらみ〔白身〕ぶー	村たて・小魚漁・チョマの漁網・男女の習俗
16	35	チョマ（カラムシ）	あじぃらぶー	豆どうまじらば まみどうまじらば	石垣島大浜村	223	43	ジラバ	9　あじぃらぶーぬ　むいそーんや　かたがぶーぬむいそーんや：「アジィラブー＜植物名＞が生える様に　カタガブー＜植物名＞が生える様に」 10　たちはいしやん　あだそーんや　あらぐはいしやん　あだそーんや：「立つのが早くあったそうだ　歩くのが早くあったそうだ」	*対句　あじぃらぶー／かたがぶー（立つのが早いの具象）	子守りの歌
17	35	チョマ（カラムシ）	かたかぶー	豆どうまじらば まみどうまじらば	石垣島大浜村	223	43	ジラバ	9　あじぃらぶーぬ　むいそーんや　かたがぶーぬむいそーんや：「アジィラブー＜植物名＞が生える様に　カタガブー＜植物名＞が生える様に」 10　たちはいしやん　あだそーんや　あらぐはいしやん　あだそーんや：「立つのが早くあったそうだ　歩くのが早くあったそうだ」	*対句　あじぃらぶー／かたがぶー（立つのが早いの具象）	子守りの歌
18	35	チョマ（カラムシ）	白みぶ	なしなむらじらば	石垣島白保村	230	52	ジラバ	11　白みぶむと　かいぶーむと　うみかけ：「白身苧麻を糸　美しい苧麻糸を績みかけては」	＊対句　白みぶむと／かいぶーむと〔言い換え	概念的・教訓・食用・和え物
19	35	チョマ（カラムシ）	かいぶー	なしなむらじらば	石垣島白保村	230	52	ジラバ	11　白みぶむと　かいぶーむと　うみかけ：「白身苧麻を糸　美しい苧麻糸を績みかけては」	＊対句　白みぶむと／かいぶーむと〔言い換え	概念的・教訓・食用・和え物
20	35	チョマ（カラムシ）	ぶー	まみどうまじらば	石垣島白保村	231	53	ジラバ	12　うるじんぶーぬ　とんでそんね　若夏のぶーぬ　とんでそんね：「初夏の苧麻の飛び出るよう若夏の苧麻のとびでるように」	*対句　うるじんぶー／若夏ぶー〔立つのが早い）	子守りの歌
21	35	チョマ（カラムシ）	しるぶ	なしぃな村うにぬやじらば	波照間島	272	114	ジラバ	8　ちぃくいとぅり　びりぃどぅしぃ　しるぶむとぅ　かつみどぅしぃ：「麻笥（おけ）を取って坐るのだ　白苧麻を紡ぐのだ」	＊対句　しるぶむとぅ／かいぶーむとぅ（白苧麻/きれいな苧麻・言い換え）	許嫁・船の親・実家に戻る
22	35	チョマ（カラムシ）	ぶばに（苧羽）	んざとうらゆんた	石垣島新川村	305	21	ユンタ	13　苧羽（ぶばに）取り　さはに割（さ）き坐るりば：「苧麻を取り　さはに（苧麻）割き　坐っていると」	＊対句　しるぶむとぅ／かいぶーむとぅ〔言い換え）	許嫁・船の親・実家に戻る
23	35	チョマ（カラムシ）	ぶうばに（苧羽）	まへらちぃゆんた	石垣島新川村	307	22	ユンタ	17　すくい取り　苧（ぶう）ばにさきで　いろるそ：「麻笥（おけ）を取り　苧麻（ちょま）を割けと言いなさるよ」 18　すくい取り　苧ばにさきぬ　まどぅんや：「麻笥（おけ）を取り　苧麻を割いての　暇には」	*女の仕事	許嫁・船の親・実家に戻る

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現箇所数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
24	35	チョマ（カラムシ）	ぶ 「まはだぶ　しるかひぶ」	崎山ゆんた	石垣島石垣村	313	31	ユンタ	6　うるずんぬ　まはだぶし　ばが夏ぬ　しるかひぶし：「初夏の真肌苧麻　若夏の白く美しい苧麻で」	*対句　　まはだぶー／しるかひぶ	村たて・小魚漁・チョマの漁網・男女の習俗
25	35	チョマ（カラムシ）	ぶう（ばに）	うにぬや	石垣島石垣村	321	39	ユンタ	10　ゆちぬだぎん　びりどし　ぶうばにさしんびりどし：「四角（ゆちぬ）く　麻笥（おけ）>を抱いても坐るよ　苧麻を割いても坐るよ」	*女の仕事	許嫁・船の親・実家に戻る
26	35	チョマ（カラムシ）	ぶー（ばに）	まへらっ	石垣島石垣村	321	40	ユンタ	5　四つぬだぎ　ぶーばにさーし　まへらつ：「四角筒（ゆつぬ）<麻笥（おけ）>を抱け　苧麻を割き　まへらつ」	*継子の物語り *継子の仕事の列挙	継子・継子の仕事
27	35	チョマ（カラムシ）	ぶー（うんめ）	あらぐしくゆんた	石垣島登野城村	365	99	ユンタ	3　いみしゃから　苧（ぶー）うん女（め）が生りやとぅり：「幼少の時から苧麻績（ちょまう）み女が生まれなさり」	*歌の導入　舞台の景	女性版出世譚・機織り社会的価値
28	35	チョマ（カラムシ）	ぶー	船の親 ふねのやー	石垣島宮良村	377	117	ユンタ	10　ぶーむととり　びりようりば　さばにさきびりようりば：「麻を取って坐っていると　麻を割いて坐っていると」 11　ぶーうむきむ　ねぬそ　さばにさく　なかねぬ：「麻を績ぐ気持ちがないよ　麻を割くきもちがないよ」	*物語り	許嫁・船の親・実家に戻る
29	35	チョマ（カラムシ）	ぶー	みなとゆんた	石垣島白保村	390	134	ユンタ	6　うるじんぬ　まはだぶーし　若夏ぬ　白かいぶうし：「初夏の真肌苧麻で　若夏の白く美しい苧麻で」	*対句　　まはだぶーぅ／白かいぶー	村たて・小魚漁・チョマの漁網・男女の習俗
30	35	チョマ（カラムシ）	ぶー	んざとうらゆんた	小浜島	407	160	ユンタ	13　ぶばねとり　さばねさし　びゆりば：「苧麻をとり　苧麻を割いて　坐っていると」	*物語り　長編	許嫁・船の親・実家に戻る
31	35	チョマ（カラムシ）	ぶー	はらだてぃぬまぶなりょうまく ゆんた>	竹富島	434	199	ユンタ	3　五歳（いちち）んなよー　ぶーばんーみ　名取（なーとう）らりよー：「5才のときには苧麻を紡いで　名が取られ」	*物語り *問答	御用布・布の等級・庶民と役人の問答
32	35	チョマ（カラムシ）	まはだぶー（真肌苧）	新村ゆんた あらむらゆんた	黒島	448	217	ユンタ	6　うるじぃんぬ　真肌苧（まはだぶー）ば　若夏ぬ　白かいぶーば：「初夏の真肌苧麻を　若夏の白肌苧麻を」	*対句　　まはだぶーぅ／白かいぶー	村たて・小魚漁・チョマの漁網・男女の習俗
33	35	チョマ（カラムシ）	しろかいぶー（白肌苧）	新村ゆんた あらむらゆんた	黒島	448	217	ユンタ	6　うるじぃんぬ　真肌苧（まはだぶー）ば　若夏ぬ　白かいぶーば：「初夏の真肌苧麻を　若夏の白肌苧麻を」	*対句　　まはだぶーぅ／白かいぶー	村たて・小魚漁・チョマの漁網・男女の習俗
34	35	チョマ（カラムシ）	しるぶ(白ぶ)	まへらちぃゆんた	波照間島	455	229	ユンタ	12　しぃくいとぅりよ　白（しる）ぶむとぅ　かちゃみょうり：「麻笥（おけ）をとれ　白苧麻を抓（つか）まえ<紡ぎ>なさい」	*継子の物語り *継子の仕事の列挙	継子・継子の仕事
35	35	チョマ（カラムシ）	麻の苧	出船の歌	西表島	610	7	節祭り	4　美縄（みなあ）　麻（あさ）の苧（ぶ）どみ縄でござる：「御縄は　麻の苧が御縄でございます」	：列挙　ハーレー船の誉めうた	儀礼歌･美称

総番号	出現箇所数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
1	55	アワ	あわ	九場川村のまーゆんがなしぃの	石垣島川平村	22	1	カンフチィ	くぬとぬつ、ふうしゆーまい、ぐすたれーまいぬ、まるあわーで、すーや、：「この殿内の大主前、グスタレー前の丸粟と言うのは」	農耕・作物・豊作祈願	農耕
2	55	アワ	あわ	内原村の真世加那志の神詞<下の	石垣島川平村	30	2	カンフチィ	くぬとぬち、ふぅしゅはんせーまいぬ、ふーかーちぃあわーで、すーど：「この殿内の大主、大姥前のフカーツ粟（あわ）と言うのは」	農耕・作物・豊作祈願	農耕・畑作
3	55	アワ	にうすい（根うすい）	幸本御嶽願い願い<神口> こんとぅ	竹富島	61	72	ニガイフチィ	11 根（に）うすい 降（う）りみそーる 大（うー）やん主（しゅ）やん：「根（にー）うすい（粟）に降りなさる大親 主親」	粟魂 →P62-72 訳比較	名挙げ
4	55	アワ	まろーだに・たにぶく	物種の神口<穀類の神詞。願い口	竹富島	80	122	ニガイフチィ	5 長呂種（なろーだに） 穂種（ほーだに） 丸呂種（まろーだに） 種袋（たにぶくろ）：「菜種 菜穂種 粟種 種粟」	植物の種子	農耕
5	55	アワ	みーあー（新粟）	穂利願い<豊年祭> ぶいにがい	竹富島	80	123	ニガイフチィ	御調（うとうとうな）い 新米（みーまい） 新粟（みーあー）の九番飯（くばんぐ） 御五水（みぐし） 新花米（みーはなぐみ） 神御酒（かんみさぐ） 御飾（うかざ）い：「神への供え物を整えて新米 新粟の九番飯 お酒 新花米 神酒を供え」	供物の粟御飯	農耕
6	55	アワ	かんくばな（神穂花）	粟すくまんの祈り あーすくまんぬ	波照間島	99	167	ニガイフチィ	きゅーや かんくばな ういくばなぬ かんよい ういよいぬ あたりおらば：「今日は神穂花 上穂花の神祝い 上祝いにあたりますから」	対句 かんくばな（神穂花）／ういくばな（上穂花）	農耕(アワ)
7	55	アワ	ういくばな（上穂花）	粟すくまんの祈り あー	波照間島	99	167	ニガイフチィ	きゅーや かんくばな ういくばなぬ かんよい ういよいぬ あたりおらば：「今日は神穂花 上穂花の神祝い 上祝いにあたりますから」	対句 かんくばな（神穂花）／ういくばな（上穂花）	農耕(アワ)
8	55	アワ	にうすい（粟）	みしゃぐばーしぃ	石垣島石垣村	103	6	フミシャギィ	8 給仕 さり 根うすいぬ 御神酒 上（あ）ぐなーらさり：「もし 根ウスイ（粟）の御神酒を差し上げましょう もし」	御神酒、米・粟の豊作の祝いと喜び	農耕
9	55	アワ	にうすい（粟）	みしゃぐばーしぃ	石垣島登野城村	104	7	フミシャギィ	6 給仕 にうすいぬ うみしゃぐ んまさかばさ よんな ：「根ウスイの<粟>の御神酒 おいしく 香ばしく」	御神酒、米・粟の豊作の祝いと喜び	農耕
10	55	アワ	みゆさ(粟)	御神酒 ふみしゃぐ	石垣島平得村	104	8	フミシャギィ	6 山人衆の歌 みゆさいぬ 御神酒（うみしゃぎい）はやしばどぅ 世ばなうりぃ うやぎみゆさ なゆはやしばどぅ 世ば 稔うりぃ：「みゆさい<粟か>の御神酒を囃せば世ば稔る 富裕のみゆさ<粟酒>をなお囃せば世ば稔る」	御神酒、米・粟の豊作の祝いと喜び	農耕
11	55	アワ	にうすういい	角ぬ皿節 すぬざらふちー	石垣島大浜村	105	9	フミシャギィ	2 にうすいぬ うみしゃぐ ゆうはやしばど ゆうやなうり：「根ウスイ<粟>の御神酒をよく囃したなら世は稔る」	御神酒、米・粟の豊作の祝いと喜び	農耕
12	55	アワ	根うすい	うふみしょうく長月祝（なーきよい）の時の歌>	竹富島	106	13	フミシャギィ	2 根（に）うすいぬ うみしゃく むとぅばしどぅ世（ゆ）や稔（なう）る うやきしやが 世（ゆ）は稔（なお）る：「根ウスイ<粟>の御神酒をもとにして 世は稔る 富裕になって 世は稔る」	御神酒、粟の豊作の祝いと喜び	農耕
13	55	アワ	におそい	みしゃぐばあし	黒島	107	15	フミシャギィ	におそいぬ そらひろきどめさてい もとおそいぬ さかいどめさてい ：「粟もそらひろきどめさてい<未詳> 元おそいのさかいどめさてい<未詳>	対句 におそい／もとそい 御神酒、米・粟の豊作の祝いと喜び	農耕
14	55	アワ	もとそい	みしゃぐばあし	黒島	107	15	フミシャギィ	におそいぬ そらひろきどめさてい もとそいぬ さかいどめさてい：「粟のそらひろきどめさてい 元おそいのさかいどめさてい<未詳>」	対句 におそい／もとそい 御神酒、米・粟の豊作の祝いと喜び	農耕
15	55	アワ	にうすい	中皿	波照間島	107	17	フミシャギィ	にうすいぬ うふみしゃぐ むとうばしどぅ ゆわなうる：「根うすいの<アワ>の大神酒を もとにしたら世は稔る」	御神酒、粟の豊作の祝いと喜び	農耕
16	55	アワ	あー（粟）	夜雨 ゆあみ	石垣島大川村	125	10	ユングトゥ	*粟(あー) 作り見りば 粟(あー) ぬ稔れぇ なあらぎぃ石	列挙・五穀の稔り 具象	農耕

総番号	出現箇所数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
17	55	アワ	あー（粟）	物作り誦言 むぬちいくゆんぐとぅ	石垣島大川村	128	19	ユングトゥ	6　冬至ぬ節ねー　粟（あー）作り：「冬至の時節に粟を作り」	豊作予祝（米・粟・麦） 子孫繁栄 貢布	物語
18	55	アワ	あー（粟）	ふかいばなかーばなちくどぅん	石垣島登野城村	133	29	ユングトゥ	粟（あー）ちくてぃん　てゆまぬ　米ちくてぃん　てゆまぬ：「粟を作っても　鳴響ない　米を作っても鳴響ない」	豊作感謝の祭 鳴響まれる	物語
19	55	アワ	あー（粟）	桴海ぬ高ばんかーばん誦言 ふつかいぬたかばーんゆんぐとぅ	石垣島宮良村	135	33	ユングトゥ	粟（あー）ちぃか造くてぃん　豊まらん：「粟束を造っても　鳴響まれない」		物語
20	55	アワ	あわ（粟）	米のらばぬゆんぐとぅ まいのらばゆんぐとぅ	西表島祖納村	136	34	ユングトゥ	3　粟（あわ）のらば　粟のらばんぬよ　粟ぬのうりすや　だりまりし：「粟が稔るなら　粟が稔るなら　粟が稔るのは　垂れ垂れの生まれをして」	列挙、 豊穣予祝（米・芋・粟・黍、 採取　（山桃・芭蕉・月桃）	教訓
21	55	アワ	粟	ばが島ゆんぐとぅ	西表島祖納村	137	36	ユングトゥ	3　米盛り（まいむり）どぅ　粟むりどぅやゆる　米盛りや前門（まいきどう）にとぅりちぃきぃ　粟盛や後門（しーきどう）に取りちぃきぃ：「米の稲積み粟の粟積みである　米も稲摘みは前の門にとりつけ粟の粟積みは　後の門にとりつけ」	豊作感謝の祭・収穫作物	豊穣と繁栄
22	55	アワ	粟	網取ゆんぐとぅ あんとぅりゆんぐとぅ	西表島網取村	139	40	ユングトゥ	3　まいむりどぅ　粟むりどぅ　やれりちょ：「米の稲積で　粟の粟積みであったそうだ」 4　米盛りや米御酒（まいみしゃぐ）造りょうり：「米の稲摘みは米御酒を造りなさり 5　粟盛りや　粟盛酒ゆ　まらしょうり：「粟の粟積みは　粟盛り酒を造りなさり」	豊作感謝の祭・収穫作物・神酒の材料	共同体の繁栄
23	55	アワ	粟	ちぃどうりやーまゆんぐど	小浜島	139	41	ユングトゥ	6　くみぬみしぃば　つくりおうり　粟酒ば　まらしょうり：「米の神酒を造りなさり　粟酒をつくりなさり」	豊作感謝の祭・神酒の材料	共同体の繁栄
24	55	アワ	うぶあーだに/まるあー	南の浦南崎 はいのうらばいさけ	黒島	152	64	ユングトゥ	昼間（ぴすま）大粟種（うぶあーだに）　うとんに丸粟種（まるあーだに）蒔（ま）くにん　まきぼうりしきぼうり　しかはで　まぶい：「昼間の大粟種を下ろすように　丸粟種子をまくよに　蒔き放り　敷ほうりおこうとかわいい娘よ」	対語　うぶあーだに/まるあーだに 美称辞　うぶ・まる 航海 大切なものを扱う比喩「種子蒔き」	物語
25	55	アワ	あわ	たらまゆら	石垣島川平村	155	1	アヨー	5　片くびや　粟じらど　ちみゃおーる：「片方は粟叢（あわむら）を積んで来られる」 6　粟（あわ）ですや　真地地（まちちん）区に近いしょり：「粟というのは　真地（まーじ）＜地区＞に招請しなさり」 8　粟ぬ穂ゆ　作りてゆ　うがみばどぅ　なら石ぬ花たらし　うがまり：「粟の穂を作って拝見すると　なら石の花のように拝見される」 9　粟しにや　粟酒ゆ　生らしょうり：「粟では粟酒を造りなさり」		農耕
26	55	アワ	にゆすい	中皿のあよう なかざらのあよう	西表島祖納村	166	28	アヨー	1　にゆすいの御美（うみ）しゃぐ　はやしばど　世（ゆ）なをる（囃子）：「根ウスイ（粟）のお神酒（みき）を　囃したなら世は稔る	豊作の祝　神酒の材料	農耕
27	55	アワ	あーまい（粟米）	稲が種子あよう	小浜島	168	32	アヨー	2　苗代田（なそれだ）に　積（ちむる）田に　おろいしより　よこてぃそな　石名子粟米（いしなこあーまい）：「苗代田に　積る田に下ろしなさり　よっこてぃそな＜未詳＞石ナコ＜米＞粟米は」		農耕
28	55	アワ	白粟種子	稲が種子	竹富島	170	39	アヨー	5　イラヨーマヌ　白粟ダニ：「イラヨーマニ　白粟種」　＜囃子＞	ナガヒンダニ・ムルカダニ・白粟ダニ	農耕
29	55	アワ	うふあーだに（大粟種	種子取りあゆう	黒島	178	57	アヨー	3　大粟種子（うふあーだに）ばシタリヨ　丸粟種子（まるあーだに）　取り（とり）や持（む）ち　シタリヨ：「大粟種子をシタリヨ　丸粟種子を取り持ち」	対語　大粟種子／丸粟種子 粟の種取祭	農耕

総番号	出現箇所数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
30	55	アワ	まるあーだに（丸粟種	種子取りあゆう	黒島	178	57	アヨー	3　大粟種子（うふあーだに）ばシタリヨ　丸粟種子（まるあーだに）　取り（とり）や持（む）ち　シタリヨ：「大粟種子をシタリヨ　丸粟種子を取り持ち」	対語　大粟種子／丸粟種子 粟の種取祭	農耕
31	55	アワ	あわ	いにがだにあゆ	与那国島	186	77	アヨー	4　まいといしか　ゆみやうるし　あわといしか　どみやうるし：「米を十束数え下ろし　粟を十束数え下ろして」		農耕
32	55	アワ	あわ	たらまゆらじらば	石垣島川平村	190	5	ジラバ	8　あわでぃすぬ　ぷゆちぃくり　うがみばどぅ　ならいしぬ　ばなぬぐとぅ　うがまり：「粟というものの穂を作り　拝めば　なら石の　花の如く拝まれる」		農耕
33	55	アワ	あー（粟）	とぅんぎゃーら	石垣島新川村	194	11	ジラバ	7　粟（あー）つくどん　まいつくどん　世ば稔り　世ば稔り：「アワを作っても　米を作っても世は稔れ　世は稔れ」		農耕
34	55	アワ	あわぐさ（粟草）	今日が日じらば きゆがびじらば	石垣島登野城村	198	16	ジラバ	3　粟草（あわぐさ）ゆ　春草ゆ　とぅゆんでぃ：「粟の草を　春の草を取ろうと」		教訓（嫁選び）
35	55	アワ	あわ（粟）	古見の浦じらば くんぬうらじらば	石垣島大浜村	217	34	ジラバ	12　粟束（あわちか）ぬ　七（なな）すくん：「粟束の7束を」 13　米束（くみちか）ぬ　七（なな）ちか：「米束の7束を」	大和人と崎田人の贈り物の対比→簪・粟束／米束	男女
36	55	アワ	あわ	ちんだ入りぬじらば	小浜島	247	79	ジラバ	7　くみとだき　あわとだき　ふさぬなよ：「米のように　粟のように　欲しいよ」	女性への思居の表現・大切なものの比喩	男女
37	55	アワ	粟	みんだかはらまいぬじらま	小浜島	254	88	ジラバ	4　米ぬ穂（ぼー）ば　食（ふあ）いむちうりき：「米の穂を食い持ち降り来て」 5　粟ぬ穂ば　食いむちうりき：「粟の穂を食いもち降り来」 6　米ぬ穂や　みしゃくばまらひ：「米の穂はお神酒を作り」 8　粟ぬ穂や　あわむるまらひ：「粟の穂は泡盛を作り」		祭りの習俗
38	55	アワ	あー（粟）	やーつくりじらば	黒島	269	109	ジラバ	囃子　粟（あー）や稔れ　甘（うん）まー実（みー）入り　実（なう）り実（なう）り　実入り（みい）実入り（みい）：「粟は稔れ　サツマイモは稔れ稔れ　稔れ　稔れ　稔れ」	家造りの後節に囃子風	新築
39	55	アワ	あわ（粟）	東かーら あがるかーら	石垣島川平村	292	2	ユンタ	4　片くびや　粟じらどぅぬしゃおーる：「片壁は　粟叢を乗せて来なさる」 6　粟でぃすや　まじぃしくに　ちかいしより：「粟というのは　真地底（まーじしいく）〈地名〉にお招きして（植えて）」 8　粟（あわ）ぬ穂（ぶう）ゆ　作（ちく）りてぃ　拝（うが）みばどぅ　ならひしぬ　花（ばな）たらしうがまり：「粟の穂を作って拝むと　なら石の花のように　拝まれる」 10　粟しにや　粟酒ゆ　まらしょうり：「粟では粟酒を造りなさり」	幻視・・「東」から来る種子 特別な種子によって得る豊作 豊作の祝の様子	農耕・神話的種子の来歴と豊作
40	55	アワ	粟	ちくいでぬはちむぬ	石垣島川平村	293	3	ユンタ	7　粟酒　生らしょうり：「粟酒を造りなさり」	豊作祝い、粟酒の材料	農耕（貢納）
41	55	アワ	粟	ふなー星ゆんた	石垣島新川村	310	24	ユンタ	6　粟作り　みりばど　粟のなおりすや　なあら石にし：「粟を作ってみたら　粟の稔っているのは　なーら石のように」	星見と農耕 列挙、麦・稲・黍・粟・芋の稔りの具象	農耕
42	55	アワ	あー	のーりぃゆーゆんた	石垣島石垣村	338	61	ユンタ	4　まいのーれ　やまちぃだま　あーぬのーれ　ならぎぃいし：「米の稔りは山数珠玉のよう　粟の稔りは長小石のよう」	列挙、米・粟・麦・黍・豆・芋の稔りの具象	農耕

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現箇所数	植物名(和名)	テキスト語形(方言名)	歌謡名	地域	ページ/no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現	キーワード
43	55	アワ	あー（粟）	網張るの目高蟹ゆんた あんばりぬみだがーまゆんた	石垣島大川村	341	66	ユンタ	13　粟の（あーぬ）穂（ぶー）ば　取り持ち：「粟の穂を(畠から）取り持ち」	蟹の豊年祭　擬人	豊作・村祭り
44	55	アワ	あー（粟）	ふなー星ゆんた	石垣島大川村	342	68	ユンタ	5　粟作（あーつく）り　のうらしどぅ：「粟を作って稔らせて」	星見と農耕 列挙、麦・米・黍・粟の稔り	農耕
45	55	アワ	あ（粟）	月出ぬ花むね	石垣島大川村	344	71	ユンタ	3　粟（あ）作りみりばど　あーぬのーれー　なーい石：「アワを作ってみたら　アワの稔りはなーい石のようだ」	農耕 列挙、米・粟・黍・芋の稔り	世の変化＋農耕
46	55	アワ	あーだら（粟俵）	東節 あがりぶし	石垣島大浜村	372	109	ユンタ	7　粟俵（あーだら）どのせおる　ばがういぬ　すんけーら　：「粟俵を乗せて来なさる　吾が上の　すんけーら」	星見と農耕 列挙、麦・粟・稲・黍・芋の稔りの具象	農耕・問答 神話的種子の来歴と豊作
47	55	アワ	あー	ふなー節	石垣島大浜村	372	110	ユンタ	6　粟（あー））作り　稔し　我島どよお　島ぬ本（むと）よ　ならいじ：「アワを造って稔らして　我が島が島の元」 7　粟稔り（あーなぐ）り　黄金色（くがにいる）我島どよお　島ぬ本（むと）よ　ならいじ：「アワの稔りは　黄金色　我が島が島の元」	星見と農耕 列挙、　麦・粟・稲・黍・芋の稔りの具象	農耕・星座
48	55	アワ	粟草	うるじんゆんた	石垣島白保村	382	125	ユンタ	3　粟草ど　米草ど　ぎばりよる：「粟の草を　米の草を頑張りなさる」	粟草／米草	農耕・問答
49	55	アワ	にうすい	ままりぬゆんた	西表島古見村	401	151	ユンタ	1　にうすいぬ　うんさぐ　ばゆしばどぅ　ゆわなうる：「根ウスイ＜粟＞のお神酒を囃すと世は稔る」	神酒の材料	農耕・
50	55	アワ	あわ	鳩間ゆんた	鳩間島	403	154	ユンタ	4　まいばしみしき　うむしるや　あわば　しみしきさてぃみぐとぅ：「米を積んで　おもしろいことよ　粟をつんで　さて見事」 10　粟ば作り　なうらし　うんば作り　みーらし：「粟を作り稔らせ　芋を作り稔らせ」		物語・土地誉め
51	55	アワ	あわ	ちんだいらばゆんた	小浜島	410	162	ユンタ	8　くみとたき　あわとたき　ふさぬなよ：「米のように　粟のように　欲しいのよ」	大事なものの比喩	情話･問答歌
52	55	アワ	粟	船越ゆんた	黒島	443	212	ユンタ	14　粟作（あわしく）り　なうらしよ　きんしくりできらしよ：「粟を作って　稔らせて　黍を作って稔らせて」	作物の豊作	村立て
53	55	アワ	あー	うふな星	黒島	443	213	ユンタ	4　粟作（あはしく）り見りばど　粟の（あわぬ）実（みい）りや　やらぶ種子（だに）とん　例（たと）いらり：「アワを作ってみたら　アワの稔りは　ヤラブの種子とたとえられ」	星見と農耕 列挙、麦・黍・粟・芋の稔りの具象 粟　ヤラブ種子のよう	農耕・豊作の願い
54	55	アワ	あー	ばるまみちぃだかゆんた	波照間島	455	228	ユンタ	12　粟（あー）ぬぷーば　あちぃみょうり：「粟の穂を集めなさり」		
55	55	アワ	ねうすい	ねうすい	石垣島白保村	596	2	豊年祭	1　ねうすいぬ　うみしやぐー　本ばしど　世やうなる：「根うすい〈粟〉のお神酒を　もとにしてこそ世はうなる」	神酒の材料	農耕・豊作の願い

総番号	出現数	植物名	テキスト語形（方言名）	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現（歌謡の主題）	キーワード
1	151	イネ	きらまい	内原村の真世加那志の神詞<下の村> きらまいしぬぐぅ（稲）	石垣島川平村	31	2	カンフティ	うーとーどー、くぬとぬちぃ、ふうしゆ、はんせーまいぬ、きらまい、しぬぐ、で、すーど、：「ああ尊、この殿内の大主、大姥前の、キラ米、シヌグ米<稲の品種>と言うのを」	農耕、水田・豊作祈願	作物・農耕、畑作・農耕叙事（播種～収穫・鳴響む）・来訪神・予祝
2	151	イネ	しぬぐ	内原村の真世加那志の神詞<下の村> きらまいしぬぐぅ（稲）	石垣島川平村	31	2	カンフティ	うーとーどー、くぬとぬちぃ、ふうしゆ、はんせーまいぬ、きらまい、しぬぐ、で、すーど、：「ああ尊、この殿内の大主、大姥前の、キラ米、シヌグ米<稲の品種>と言うのを」	農耕、水田・豊作祈願	作物・農耕、畑作・農耕叙事（播種～収穫・鳴響む）・来訪神・予祝
3	151	イネ	きらまい	豊年祭願詞 ぶーる	石垣島川平村	35	1	ニガイフチィ	あちやぬ　なんじゃひー　くがにひーに　なーすだーぶねーだーにけらまいしぬぐんかるとどないき：「キラ米　シヌグ米<稲の品種>を刈り終わって来て」	農耕、水田・豊作希求	作物・結願・豊作祈願・対語
4	151	イネ	しぬぐ	豊年祭願詞 ぶーる	石垣島川平村	35	1	ニガイフチィ	けらまいしぬぐんかるとどないき：「明日の銀日（なんじゃひ）　黄金日（くがにひ）キラ米　シヌグ米<稲の品種>を刈り終わって来て」	農耕・豊作希求	作物・結願・豊作祈願・対語
5	151	イネ	きらまい	あかつきぴの願い	石垣島川平村	38	12	ニガイフチィ	あちやぬ　なんじゃひー　くがにひーに　なーすだーぶねーだーになーすだー　ぶねーだーに　きらまいしぬぐまい　うっぽうるまきば：「明日の銀日（なんじゃひ）　黄金日（くがにひ）苗代田　母親田に　キラ米　シヌグ米<イネの品種>を打ち放り蒔くので	農耕・豊作希求	作物・早苗の生長・播種・水田・成長祈願・豊作祈願・対語・火の神・民俗（おなり）
6	151	イネ	しぬぐまい	あかつきぴの願い	石垣島川平村	38	12	ニガイフチィ	あちやぬ　なんじゃひー　くがにひーに　なーすだーぶねーだーになーすだー　ぶねーだーに　きらまいしぬぐまい　うっぽうるまきば：「明日の銀日（なんじゃひ）　黄金日（くがにひ）苗代田　母親田に　キラ米　シヌグ米<イネの品種>を打ち放り蒔くので	農耕・豊作希求	作物・早苗の生長・播種・成長祈願・豊作祈願・対語
7	151	イネ（米）	ちかんばな	屋敷願の祝詞	石垣島新川村	41	23	ニガイフチィ	しんぐく　まんぐくから　ちじいらび　ぴてぃじんしらびせーり　ちかんばな　しらびばな　ぴとぅかざり：「千石　万石から粒選び　一つ選びをした掴み米調べ米を一飾り」	家敷ねがい・家内安全希求	供物 ・個人儀礼・家内安全、家内繁昌、健康長寿・厄払い・対語
8	151	イネ（米）	しらびばな	屋敷願の祝詞	石垣島新川村	41	23	ニガイフチィ	しんぐく　まんぐくから　ちじいらび　ぴてぃじんしらびせーり　ちかんばな　しらびばな　ぴとぅかざり：「千石　万石から粒選び　一つ選びをした掴み米調べ米を一飾り」	家敷ねがい・家内安全希求	供物 ・個人儀礼・家内安全、家内繁昌、健康長寿・厄払い・対語
9	151	イネ（米）	まいだーら	屋敷願の祝詞	石垣島新川村	41	23	ニガイフチィ	まいだーら九たーらかざーれんゆー：「米俵を九俵を飾って供えてございます」	家敷ねがい・家内安全希求	供物 ・個人儀礼・家内安全、家内繁昌、健康長寿・厄払い・対語
10	151	イネ	ばな（米）	盆和物献上祝詞 ぶんぬーすーぬちきどうき	石垣島大川村	44	29	ニガイフチィ	18　くんごーばなぴとぅかざり：「九合の米一飾り」	盆・家内繁昌	供物・食・おなり・家行事・供物の目録・祖先崇拝
11	151	イネ	しらぶばな/うきばな	胴肌願の日待ち願の祝詞 どうはだにがいのびまちにがいふちかざり	石垣島登野城村	46	33	ニガイフチィ	どぅし、きょうだい、とぅなり、きんじゅぬ、けーらーねーからぬ、しらびばな　うきばなかざり：「友達兄弟　隣近所の　みんなからの　調べ米　献米を供え」	健康祈願	供物・美称・健康祈願・人生行事・生まれ年
12	151	イネ	みがきばな/あらいばな	胴肌願の日待ち願の祝詞 どうはだにがいのびまちにがいふちかざり	石垣島登野城村	46	33	ニガイフチィ	みがきばな／あらいばな　いっつぃー：「磨き米　洗い米　一対	健康祈願	供物・美称・健康祈願・人生行事・生まれ年
13	151	イネ	しらびばな/ちかんばな	胴肌願の日待ち願の祝詞 どうはだにがいのびまちにがいふちかざり	石垣島登野城村	46	33	ニガイフチィ	しらびばな　ちかんばなぴとぅかざり：「調び米　掴み米　一飾り」	健康祈願	供物・美称・健康祈願・人生行事・生まれ年

総番号	出現数	植物名	テキスト語形（方言名）	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現（歌謡の主題）	キーワード
14	151	イネ	いに	山留みぬ願い やまどぅみぬにがいー	石垣島登野城村	47	36	ニガイフチィ	かじ　いにぬ　みーから　とうしとうり：「風を稲の間から通してください」	農耕・厄払い	作物・ 台風被害よけ
15	151	イネ	まい	山留みぬ願い やまどぅみぬにがいー	石垣島登野城村	47	36	ニガイフチィ	まいかい　かからしとうらんように：「米にかからせてくださらないように　」	農耕・厄払い	供物・農耕・厄払い・台風被害よけ祈願
16	151	イネ	ふうだに	種取りぃ＜その１＞ たにどぅりぃ	石垣島平得村	49	42	ニガイフチィ	ふうだにうらす　たにどぅりぃぬぴ　ぃにちぃ：「穂種子をおろす種取りの日」	農耕・豊作希求	作物・播種・美称・イネの発芽の願い・豊作表現
17	151	イネ	（ぐしゃーく）まい	二月祭び にんぐわじたかび	石垣島平得村	50	44	ニガイフチィ	まみぬぐしゃーくまい　ななちぃかがらういぬ　ぐしゃーくまい：「マメの五勺米　七歳から五勺米　」	農耕・豊作感謝	慣習・供出米（供物用に集める米）、信仰・神への上納／税金
18	151	イネ（稲叢）	しゅらんがふ（しら果報）	草葉願い ふしゃばにがい	石垣島平得村	50	45	ニガイフチィ	しゅらんがふ　みりくぬゆうば　うきしめーたばおり：「しら（稲叢）果報　弥勒の世を　受けさせてください」	農耕･豊作希求	豊作の象徴・対語／彌勒世 豊作の予祝・願い・本田・成長促進
19	151	イネ	（ぐしゃーく）まい	三月祭び さんぐわずたかび	石垣島平得村	51	46	ニガイフチィ	ななつがらういぬ　ぐしゃーくまい：「七歳から上の五勺米」	農耕･豊作感謝	供物・供出米・神への上納／税金・豊作感謝
20	151	イネ	まいぬぷー	穂ぬ願い ぶうぬにがい	石垣島平得村	51	47	ニガイフチィ	まいぬぷーぬ　まれーおーるかー：「イネの穂が出てきましたら（生まれ）ましたら」	農耕・豊作希求	作物・稔りの願い
21	151	イネ	しら（稲叢）	穂ぬ願い ぶうぬにがい	石垣島平得村	51	47	ニガイフチィ	ぶうぬにがい　しゅらんがふぬにがい　にがいつきるんゆ：「穂の願い　しら（稲叢）果報の願いを願っておきます」	農耕・豊作希求	作物・豊作の象徴表現・豊作希求」
22	151	イネ	まんがなす（米加那志）	穂ぬ願い ぶうぬにがい	石垣島平得村	51	47	ニガイフチィ	まんがなす　のおりぃゆう　みいりぃゆうば　うけしめーとおり：「米加那志　稔る世　実入りの世〈豊年の世〉をうけさせてください」	農耕・豊作希求	作物・イネの美称・豊作希求
23	151	イネ	のおりいゆぅ／みいりゆぅ	穂ぬ願い ぶうぬにがい	石垣島平得村	51	47	ニガイフチィ	まんがなす　のおりぃゆう　みいりぃゆうばうけしめーとおり：「米加那志　稔る世　稔る世　実入りの世〈豊年の世〉を受けさせてください」	農耕・豊作希求	作物・豊作の象徴表現・対語（稔る世・実入り世）・豊作希求
24	151	イネ	あらいばな/みがきばな	世ぬすでぃ果報 ゆぬすでぃがふう	石垣島平得村	51	48	ニガイフチィ	あらいばな　みがきばなぬいっち：「洗い米　磨き米の一対」	農耕・豊作感謝	供物・神への豊作感謝（豊作は神かr受けたものという観念）
25	151	イネ(花米)	ばな(花米)	世ぬすでぃ果報 ゆぬすでぃがふう	石垣島平得村	51	48	ニガイフチィ	あらいばな　みがきばなぬいっち：「洗い米　磨き米の一対」	農耕・豊作感謝	供物 神への豊作感謝（豊作は神から受けたものという観念）
26	151	イネ	ぷばな	六月祭び	石垣島平得村	52	49	ニガイフチィ	ぷばなあぎるんゆ：「お初米を御供えします」	農耕・豊作感謝	作物・供物・初物・神への初穂感謝、御嶽祈願
27	151	イネ	あらいばな/みがきばな	穂祈りぬ願い ぶうりぃぬにがい	石垣島平得村	52	50	ニガイフチィ	あらいばな　みがきばないっち：「洗い米　磨き米の一対」	農耕	供物・神への初穂感謝、御嶽祈願

総番号	出現数	植物名	テキスト語形（方言名）	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現（歌謡の主題）	キーワード
28	151	イネ	ばな	穂祈りぬ願い ぶうりいぬにがい	石垣島平得村	52	50	ニガイフチィ	きゅーごーぬ　ばなゆあげ：「九合の華米を供え」	農耕	供物・神への初穂感謝、御嶽祈願
29	151	イネ	ぶばな	穂祈りぬ願い ぶうりいぬにがい	石垣島平得村	52	50	ニガイフチィ	ぶばなあげんしさりるんゆ：「お初米を供えて申し上げます」	農耕	供物・神への初穂感謝、御嶽祈願
30	151	イネ	あらいばな/みがきばな	芋ぬ初 あこんぬばちい	石垣島平得村	52	51	ニガイフチィ	あらいばなぬ　みがきばないっち：「洗い米　磨き米の一対」	農耕	供物・神への初穂感謝、御嶽祈願
31	151	イネ	ばな	芋ぬ初 あこんぬばちい	石垣島平得村	52	51	ニガイフチィ	きゅーごーぬばなゆあげ：「九合の花米を供え」	農耕	供物・神への初穂感謝、御嶽祈願
32	151	イネ	あらいばな/みがきばな	年ぬしぃでぃ果報 にんぬしぃでぃがふう	石垣島平得村	53	52	ニガイフチィ	あらいばな　みがきばなぬいっち：「洗い米　磨き米の一対」	節	供物・一年の無事の感謝・節
33	151	イネ	ばな	年ぬしぃでぃ果報 にんぬしぃでぃがふう	石垣島平得村	53	52	ニガイフチィ	きゅーごーぬ　ばなゆあげ：「九合の華米を供え」	節	供物・一年の無事の感謝・節
34	151	イネ	ふうばな	穂花捧げ願詞 ふうばなあぎけ願詞	石垣島宮良村	56	59	ニガイフチィ	まぐくるがら　すだいけーるふうばなばうきとりたぼり：「真心から育ててきた御初穂を受けとってください」	農耕	供物・初物・豊作感謝
35	151	イネ（概）	作り物（つくりむぬ）	作り願 つくりにんげー	石垣島白保村	58	63	ニガイフチィ	きゅうぬ　いーぴる　けーびるな　一かねんぬ　びぎりぬ　ぶ　作り物（つくりむぬ）せるむぬ：「今日の良い日撰り　清らかな日撰りに　一カ年の　兄弟の作り物＜稲植＞をして	農耕	作物 豊穣祈願
36	151	イネ	ぶばなぐみ	年頭願い＜元旦の願＞ にんとうにがい	竹富島	74	105	ニガイフチィ	大花米（ぶばなぐみ）：「花米」	年中行事　家族	供物・年頭の家族の嘉例願い・年中行事
37	151	イネ	ふーばな（大花）	命名祝 しちよい	竹富島	78	117	ニガイフチィ	大花　うーかざい：「大花（米）の御飾り	出産	供物・出産の祝、命名
38	151	イネ	しるゆに/かばいに	物種の神口＜穀類の神詞。願い口＞ むねだにぬかんふち	竹富島	80	122	ニガイフチィ	4　白米　香米（しるゆに　かばいに）：「白米　香ばしい稲」	農耕	作物の種子・種子名あげ・豊作祈願
39	151	イネ	みーまい（新米）	穂利願い＜豊年祭＞ ぶいにがい	竹富島	80	123	ニガイフチィ	新米（みまい）　新粟（みーあー）九番飯（くばんぐ）　御五水（みぐし）　新花米（みーはなぐみ）神御酒（かんみさぐ）　御飾い（うかざい）：「新米　新粟の九番飯　お酒　新花米　神酒を供え」	農耕・豊年祭	供物・豊年祭 ＊九番飯（「神饌」（くばん）の誤字か）
40	151	イネ	みはなぐみ（御花米）	穂利願い＜豊年祭＞ ぶいにがい	竹富島	80	123	ニガイフチィ	新米（みまい）　新粟（みーあー）九番飯（くばんぐ）　御五水（みぐし）　新花米（みーはなぐみ）神御酒（かんみさぐ）　御飾い（うかざい）：「新米　新粟の九番飯　お酒　新花米　神酒を供え」	農耕・豊年祭	供物・豊年祭
41	151	イネ	みはなぐみ/つかんばな	供物の神口＜願い口＞ くむちぬかんふち	竹富島	84	133	ニガイフチィ	御花米（みはなぐみ）　掴ん花（つかんばな）：「御花米　掴み花」		供物・供物の受け取り願
42	151	イネ	あらいばな/しらびばな	供物の神口＜願い口＞ くむちぬかんふち	竹富島	84	133	ニガイフチィ	洗い花（あらいばな）　調び花（しらびばな）：「洗い花　調べ花」		供物・供物の受け取り願
43	151	イネ	みはなぐみ	通門の願い とうじぬにがい	竹富島	85	135	ニガイフチィ	御花米（みはなぐみ）　御飾（うかざい）いし：「お花米をおかざりし」	屋敷	供物・屋敷の守りの祈願
44	151	イネ	かんぬみはなぐみ（神の御花米）/うふはち（御初）	種取いの願い たなどういぬにがい	竹富島	86	140	ニガイフチィ	神（かん）ぬ　御花米（みはなぐみ）　御初（うふはち）　上（あ）ぎしみていり： 「神の御花米　御初穂を　あげさせてください」	農耕	供物・農耕・播種の祈願
45	151	イネ	しるゆに（白米）/かばゆに（香米）	苗代田の願い なーひしゆだーぬにがい	竹富島	89	149	ニガイフチィ	白米（しるゆに）　香米（かばゆに）や「白米　香ばしい米」	農耕	供物・農耕・播種の祈願

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名	テキスト語形（方言名）	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現（歌謡の主題）	キーワード
46	151	イネ	しるゆに（白米）/かばゆに（香米）	苗代田の願い なーひしゆだーぬにがい	竹富島	89	149	ニガイフチィ	白米　香米や「しるゆに　香ばしい稲」	農耕	供物・農耕・播種の祈願
47	151	イネ	まいだに	苗代田の願い なーひしゆだーぬにがい	竹富島	89	149	ニガイフチィ	米種	農耕	供物・農耕・播種の祈願
48	151	イネ	はなくみ	しぃちぃびぬしぃさりぐち	波照間島	101	171	ニガイフチィ	はなくみぬ　くんごうばな：「花米の九合」	節	供物・農耕・節の祝い
49	151	イネ	きらまい	豊年祭のふみしゃぎぃ	石垣島川平村	102	1	フミシャギィ	1きらまいぬ　のうりぬよう　うゆわい　いしなぐぬ　みいりぃぬ　うゆわい：「キラ米の　稔りのね　お祝い　石ナグ＜米＞の実入りの御祝い」	農耕	供物・農耕・豊年祭
50	151	イネ	いしなぐ	豊年祭のふみしゃぎぃ	石垣島川平村	102	1	フミシャギィ	2きらまいぬ　のうりぬよう　うゆわい　いしなぐぬ　みいりぃぬ　うゆわい　：「キラ米の　稔りのね　御祝い　石ナグの実入りの御祝い」	農耕	供物・農耕・豊年祭
51	151	イネ	しらまみ	豊年祭のふみしゃぎぃ	石垣島川平村	102	1	フミシャギィ	2　くらはんでぃ　しらまみぬ　うゆわい　：「蔵満ちあふれ　白豆の御祝い」	農耕	供物・農耕・豊年祭 ＊「しら豆」は「しら米」の誤記か
52	151	イネ	きらまい	種子取り祭のふみしゃぎぃ	石垣島川平村	102	2	フミシャギィ	1きらまいぬ　ぱちゅりかい　うゆわい：「キラ米の発芽の美しいお祝」	農耕	供物・農耕・播種の祈願
53	151	イネ	いしにぐ	種子取り祭のふみしゃぎぃ	石垣島川平村	102	2	フミシャギィ	2　いしにぐぬ　にきくいりぃ　うゆわい：「石ナグの実入りの御祝い」	農耕	供物・農耕・播種の祈願
54	151	イネ	けらまい	種子取の御神酒 たなどいのうーみしゃぐ	石垣島川平村	102	3	フミシャギィ	1きらまいぬ　ぱちゅりかいぬ　うゆわい：「キラ米の発芽の美しいお祝」	農耕	供物・農耕・播種の祈願
55	151	イネ	いしにぐ	種子取の御神酒 たなどいのうーみしゃぐ	石垣島川平村	102	3	フミシャギィ	2　いしぬぐぬ　にぎくいるぬ　うゆわい：「石ナグの実入りの御祝い」	農耕	供物・農耕・播種の祈願
56	151	イネ	けーらまい	豊年祭の男神酒 ぶりぬうみしやぐ	石垣島川平村	102	4	フミシャギィ	1　けーらまいぬ　なうりかいぬ　うゆわい：「キラ米の稔りの美しい御祝い」	農耕	供物・農耕・豊年祭
57	151	イネ	いしぬぐ	豊年祭の男神酒 ぶりぬうみしやぐ	石垣島川平村	102	4	フミシャギィ	2しぬぐぬ　実入（みいい）りぃぬ　うゆわい：「シヌグ米の実入りの御祝い」	農耕	供物・農耕・豊年祭
58	151	イネ	けーらまい	豊年祭の女仕神酒 ぶりぬみしみしゃぐ	石垣島川平村	103	5	フミシャギィ	1　けーらまいぬ　なうりかいぬ　うゆわい：「キラ米の稔りの美しい御祝い」	農耕	供物・農耕・豊年祭
59	151	イネ	いしぬぐ	豊年祭の女仕神酒 ぶりみしみしゃぐ	石垣島川平村	103	5	フミシャギィ	2しぬぐぬ　実入（みいい）りぃぬ　うゆわい　：「シヌグ米の実入りの御祝い」	農耕	供物・農耕・豊年祭
60	151	イネ	けーらまい	みしゃぐばーしぃ	石垣島登野城村	104	7	フミシャギィ	1　けーらまいぬ　いしなぐぬよ　うにがい：「キラ米が石ナグが(稔る)御願い」	農耕	供物・農耕・豊年祭
61	151	イネ	いしなぐ	みしゃぐばーしぃ	石垣島登野城村	104	7	フミシャギィ	1　けーらまいぬ　いしなぐぬよ　うにがい：「キラ米が石ナグが(稔る)御願い」	農耕	供物・農耕・豊年祭
62	151	イネ	かんふばな(神ふばな)	角ぬ皿鉢 すぬざらふちー	石垣島大浜村	105	9	フミシャギィ	1　神（かん）ふばな　おいす　御初（うはち）みようや　おいす：「神穂花　差し上げる　お初みようく御神酒>を差し上げる」	農耕	供物・農耕・豊年祭

総番号	出現数	植物名	テキスト語形（方言名）	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現（歌謡の主題）	キーワード
63	151	イネ	いしなぐ	角ぬ皿節 すぬざらふちー	石垣島大浜村	105	9	フミシャギィ	1　いしなくぬ　むとすういぬ　うみしやぐ：「石ナグの　元すういの御神酒	農耕	供物・農耕・豊年祭
64	151	イネ	けらまい	角ぬ皿節 すぬざらふちー	石垣島大浜村	105	9	フミシャギィ	1　けらまいぬ　すらすういぬ　うみしやぐ：「キラ米の末すういの御神酒」	農耕	供物・農耕・豊年祭
65	151	イネ	いに	後産の呪文 あとざんぬじんむぬ	竹富島	118	22	ジンムヌ	みどぅゆり作（すく）れる稲（いに）に：「みどりゆり作った稲は」	出産・呪い	呪物・妊婦・出産・守護
66	151	イネ	まい(稲)	夜雨 ゆあみ	石垣島大川村	125	10	ユングトゥ	稲（まい）作り見（み）りば　稲ぬ稔（のー）れぇ千玉’ちだま（ぬ）実（なり）：「米を作ってみると米の稔りは数珠玉のよう」	農耕・豊作	作物・豊作の願い 予祝・<とよむ>
67	151	イネ	まい（稲）	世果報（豊年） よがほ	石垣島大川村	126	11	ユングトゥ	うよんだー(親襲田）ぬ稲（まい）ん　あんなむれ：「親譲りの田の米もあるよ」 若月田（ばかつきだー）ぬ稲（まい)ん　あんなむれ：「若月田の米もあるよ」	農耕・豊作感謝	作物・神酒の材料 民俗・おなり、
68	151	イネ	まい	西ぬ山から いんぬやまから	石垣島大川村	126	12	ユングトゥ	踏んたりぃ　蹴んたり　植（い）びたる稲（まい）：「踏みつけ　蹴りつけ植えた米は」	農耕・豊作感謝	作物・豊作表現・家内繁栄 踏耕
69	151	イネ	米	物作り誦言 むぬちいくゆんぐとぅ	石垣島大川村	128	19	ユングトゥ	2　立冬(りっとう）ぬ節（しいちい）ねー　米種子（稲種子）下（う）るし：「立冬の時節には米種を下ろし 3　立春雨水（うーしー）ぬ節に　米植（まいい）べー：「立春　雨水の時節に米を植え」 4　芒種夏至（ぼうしゅかーちー）ぬ節に　米（まい）刈り入れ：「芒種の時節に米を刈り」	情話・教訓	作物・耕作法 二十四節気・農耕と陰暦、対比表現（人と農耕「つくる」）
70	151	イネ	米（まい）	いーましぃ田誦言	石垣島登野城村	130	23	ユングトゥ	1　いーましぃ田（だー）ぬ　米（まい）やよー　刈りばん刈りばん　刈らるぬよー：「いーましたの米はね刈ってもかっても　刈り尽くせない」	情話・繁栄	作物・豊作表現
71	151	イネ	まい	きゆがぴー<ゆんぐとぅ>	石垣島登野城村	131	25	ユングトゥ	5　まいつくり　さにしゃる　さにまきど　さにしゃる：「米を作って嬉しい　種子を蒔いて嬉しい」	農耕・豊作希求	作物・神酒の材 種子取り祭、をなり信仰、日選り
72	151	イネ	まい	まいみしぃぬゆんぐとぅ	石垣島登野城村	132	28	ユングトゥ	4　うよんだーぬ　まいやりどぅ　んまさかばさ　あるむぬよ：「親譲りの田の米だから　おいしく　香ばしくあるのだよ」	教訓・人とものの出自	神酒の材 対比表現（人ともの・植物）
73	151	イネ	米	ふかいばなかーばなちくどぅん	石垣島登野城村	133	29	ユングトゥ	粟ちくてぃん　てゆまぬ　米ちくてぃん　てゆまぬ」（粟を作っても　鳴響ない　米を作っても鳴響ない	情話・世情	作物・神酒の材・ 成功譚・祭りの民俗・「とよむ」
74	151	イネ	米（まい）	桴海ぬ高ばんかーばん誦言 ふつかいぬたかばんかーばんゆんぐどぅ	石垣島宮良村	135	33	ユングトゥ	米（まい）ちか造くてぃん　豊（とうゆま）らん：「米束を造っても　鳴響まれない」	情話・世情	作物・ 成功譚・「とよむ」
75	151	イネ	米（まい）	米のらばぬゆんぐとぅ	西表島祖納村	136	34	ユングトゥ	1　米（まい）のらば　米（まい）のらばよ　米（まい）ぬのうりすや　ゆりしまりし：「米が稔るなら米が稔るなら　米が稔るのは　揺れの生まれをして」	農耕・豊作希求	作物・播種の祭り・稔りの表現 豊作・予祝・生活習俗

総番号	出現数	植物名	テキスト語形（方言名）	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現（歌謡の主題）	キーワード
76	151	イネ	米（まい）	ばが島ゆんぐとぅ	西表島祖納村	137	36	ユングトゥ	3　米盛（まいむり）どぅ　栗むりどぅやゆる　米盛りや前文（まいきどう）にとぅりちぃきぃ　栗盛や　後門（しーきどぅ）に取りちぃきぃ：「米の稲積み　栗の栗積みである　米も稲摘みは前の門にとりつけ　栗の栗積みは　後の門にとりつけ」	農耕・豊穣と繁栄希求	作物・豊作の願い・神酒の材 予祝・をなり信仰・祭りの民俗・<とよむ>
77	151	イネ	稲がなし（まいがなし）	岡ぬ親方誦言 むるぬうやかたゆんぐとぅ	西表島祖納村	137	37	ユングトゥ	3　たかぬまなくに　田ば掘（ぶ）りてぃ　すぬ田うびたる　稲（まい）がなし：「鷹の目に田を掘って　その田に植えた米加那志	情話・農耕・世情・	作物・水田耕作の田拵え・修辞（丁寧呼称） 田拵え、説話的、豊作表現・対比表現（「ありえない」ことの列挙）
78	151	イネ	米（まい）	網取ゆんぐとぅ あんとぅりいゆんぐとぅ	西表島網取村	139	40	ユングトゥ	3　米盛（まいむり）どぅ　栗むりどぅやれりちょ：「米の稲積で　栗の栗積みであったそうだ　」 4　米盛りや　米御酒　造りょうり：「米の稲摘みは米御酒（みき）を造りなさり	農耕・豊作希求（種子の根付き）	作物・豊作・種子の由来・ニライカナイ信仰・神酒の材 祭祀民俗、種子取り祭
79	151	イネ	米	ちぃどりやーまゆんぐど	小浜島	139	41	ユングトゥ	5　くみぬ　みしぃば　つくりおうり　栗酒ば　まらしょうり：「米の神酒を造りなさり　栗酒をつくりなさり」	農耕・豊作希求（種子の根付き）	神酒の材 祭祀民俗、対比表現（人と鳥）、
80	151	イネ	米（まい）	まいぬゆんぐとぅ	竹富島	145	55	ユングトゥ	作（しく）たる米（まい）や　北風（にしかじ）ぬすびばー　南（ぱい）ぬあぶしば　枕（まくら）ばし：「造った米は　北風がそよげば　南の畦を枕にして」	農耕・豊作	作物・豊作表現・踏耕 予祝
81	151	イネ	稲（まい）	南風が星むりく花ゆんぐとぅ	黒島	150	62	ユングトゥ	苗代田（なすーだ）ぬ　しむる田（だ）の稲（まい）ざあぎどうてぃ　時期（じぶん）や　同（ゆぬ）ましに　うとさり　植（いび）る時分（じぶん）になるかましましに移（うつ）さり　：「苗代田の　積もる米でさえ　落ちる時節は同じ桝に落とされ　植える時節になったら　桝ごとに移され」	小話・許嫁（離反）・教訓（男女）	寓話的・概念表現（人とイネ「時期がある」） 許嫁・悲恋・・問答、語り言葉
82	151	イネ	まや	ちしゃどぅんゆんぐとぅ	与那国島	154	69	ユングトゥ	4　あがばがにや　まやしくんで　しくりやぶで　わるんでぬ：「アガバカ<地名か>で米を作ると　作り人がおいでになる」 5　作（しく）りやふでぃどぅ　ば良人（ぶどう）やるうばんてぃすや　むちぐみぬ：「作り人が私の夫である　ご飯というのは餅米の」	情話・生活風景	作物 畑仕事・日常の食の風景
83	151	イネ	白ぐみ	ちしゃどぅゆんぐとぅ	与那国島	154	69	ユングトゥ	6　白米（しるぐみ）ぬ　うばんどぅやる：「白米の御飯である」	情話・生活風景	食物 畑仕事・日常の食・満ち足りた庶民の風景
84	151	イネ	いにぬたに／きらまい	いにがたにあよう	石垣島川平村	157	5	アヨー	1　いにぬたに　きらまいぬ：「稲の種きら米（イネの品種）の」	農耕・豊作希求（種子の根付き）	作物・・播種の願い・早苗の成長 農耕、苗代・予祝・日選り
85	151	イネ	稲が種子	稲が種子あよう いにがたにあよう	石垣島新川村	159	12	アヨー	1　稲（いに）が種子（たに）　今日（きゆ）ぬ日（び）　黄金日（くがにび）ばむとぅいしょうり：「稲の種（播きは）今日の日　黄金の日をもとにしなさり」	農耕・豊作希求（種子の根付き）	作物・・播種の願い・早苗の成長 祭祀民俗、日選り、苗代・予祝
86	151	イネ	稲が種／きゃらまい	稲が種あよう いにがだねあよう	石垣島石垣村	159	13	アヨー	1　稲が種（だに）ぬ　今日（きゆう）いでぃる　きゃらまい：「稲の種の今日出るキラ米{稲の品種）」	農耕・豊作希求（種子の根付き）	作物・・播種の願い・早苗の成長 祭祀民俗、日選り、苗代・予祝
87	151	イネ	稲が種子	稲が種あよう いにがたにあよう	石垣島石垣村	160	16	アヨー	1　稲が種子　今日（きゆ）が日（び）に　出（い）でぃ立ちょうり：「稲の種（の植え付け）は今日の日にいで立ちなさり」	農耕・豊作希求（種子の根付き）	作物・播種の願い・早苗の成長 祭祀民俗、日選り、苗代・作業の時候・予祝
88	151	イネ	稲が種子	稲が種あよう いにがたねーあよう	石垣島平得村	161	18	アヨー	1　稲が種（いにがたねー）　今日（きゆ）が日（び）に　いりだす：「稲の種子は今日の日に出たのは」	農耕・豊作希求（播種～稔り）	作物・播種の願い・早苗の成長 祭祀民俗、日選り、苗代・田植え・稔り・予祝

総番号	出現数	植物名	テキスト語形（方言名）	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現（歌謡の主題）	キーワード
89	151	イネ	稲が種子	稲が種子あよう いにがだにあよう	石垣島大浜村	162	19	アヨー	1　稲が種子生（だにい）くですよー　きら稲ばじょうり　かいしゃ石な子（いしなく）ふうよ：「稲の種生き生きとする　キラ米（稲の品種）発芽の美しいしいイシナグ＜稲の品種＞よ」	農耕・豊作希求（播種～収穫）	作物・播種の願い・早苗の成長・品種 祭祀民俗、日選り、苗代・田植え・繁茂・稔り・収穫・先祖と火の神信仰。予祝
90	151	イネ	きら稲	稲が種子あよう いにがだにあよう	石垣島大浜村	162	19	アヨー	1　稲が種子生（だにい）くですよー　きら稲ばじょうり　かいしゃ石な子（いしなく）ふうよ：「稲の種生き生きとする　キラ米（稲の品種）発芽の美しいしいイシナグ＜稲の品種＞よ」	農耕・豊作希求（播種～収穫）	作物・豊作の願い・品種・ 祭祀民俗、日選り、苗代・田植え・繁茂・稔り・収穫・先祖と火の神信仰。予祝
91	151	イネ	石な子（イシナグ）	稲が種子あよう いにがだにあよう	石垣島大浜村	162	19	アヨー	1　稲が種子生（だにい）くですよー　きら稲ばじょうり　かいしゃ石な子（いしなく）ふうよ：「稲の種生き生きとする　キラ米（稲の品種）発芽の美しいしいイシナグ＜稲の品種＞よ」	農耕・豊作希求（播種～収穫）	作物・豊作の願い・品種・ 祭祀民俗、日選り、苗代・田植え・繁茂・稔り・収穫・先祖と火の神信仰。予祝
92	151	イネ	種子	種子取り道あよー たにとりみちあよー	石垣島大浜村	163	20	アヨー	1　種取（たにと）りぬ根下り（にうり）や　じまじまどにいうりる　：「種の根下りは　どこどこに根がおりる」 2　苗代田（なしるだ）に根（ね）うりる　たのるだどにうりる　：「苗代田に根が降りる　種下ろす田に根が下りる」	情話・「根下り」	苗代に「根下り」する 「根下り」の列挙
93	151	イネ	いにがだに	種子どりあよう たにどりあよう	石垣島宮良村	163	21	アヨー	2　いにがだに　ちむりんだーに　うるしよーり：「稲の種を　積る田に下ろしなさり」	農耕・豊作希求（播種～収穫）	作物・豊作の願い・品種・ 祭祀民俗、日選り、苗代・田植え・占い鳥・繁茂・稔り・収穫、予祝
94	151	イネ	ゆすぬ種	種子どりのあよー たにどうりのあよー	石垣島白保村	165	24	アヨー	2　いにがだね　ゆすぬ種（だに）　うるしより：「稲の種　米の種を下ろしなさり」	農耕・豊作希求（播種～収穫）	作物・豊作の願い・品種・ 祭祀民俗、日選り、苗代・をなり信仰・田植え・・繁茂・稔り・収穫、祭り・予祝
95	151	イネ	神ぶばな	豊年祭のあよー	石垣島白保村	165	25	アヨー	1　神ぶばな　上ぶばな　うやいすー：「神への穂花上への穂花をさしあげる」	農耕・豊作希求	供物（神へ）・美称 祭祀民俗・
96	151	イネ	上ぶばな	豊年祭のあよー	石垣島白保村	165	25	アヨー	2　神ぶばな　上ぶばな　うやいすー：「神への穂花上への穂花をさしあげる」	農耕・豊作希求	供物（神へ）・美称 祭祀民俗・
97	151	イネ	稲が種子	稲が種子あよう いにがたにあよう	西表島租納村	167	29	アヨー	1　稲が種子（たに）　生（い）きでそ　けら米（まい）：「稲の種　生（い）きいでそ　けら米（まい）〈稲の品種〉」	農耕・豊作希求（播種～稔り）	作物・豊作の願い・品種・ 祭祀民俗、日選り、苗代・をなり信仰・田植え・・繁茂・稔り・収穫、祭り・予祝
98	151	イネ	稲	稲が種あよう	小浜島	168	32	アヨー	1　稲がえー　種子（たに）こてぃそや　けーらーえ米（まい）：「稲の種子　こてぃそ（未詳）は　キラ米よ」	農耕・豊作希求（播種）	作物・豊作の願い・品種・対語 祭祀民俗、日選り、苗代予祝
99	151	イネ	けーらーえ米（まい）	稲が種子あよう いにがだにあよう	小浜島	168	32	アヨー	1稲がえー　種子こてぃそや　けーらーえ米：「稲の種子　こてぃそ〈未詳〉は　キラ米よ」	農耕・豊作希求（播種）	作物・豊作の願い・品種・対語 祭祀民俗、日選り、苗代予祝
100	151	イネ	いなぬばな	ぶばなあゆ	波照間島	183	70	アヨー	2　いなぬばな　すりぬばな　いでやおり：「稲花　すりの花出なさり」	農耕・豊作感謝	作物・稔りの象徴 祭祀の民俗・
101	151	イネ	すりぬばな	ぶばなあゆ	波照間島	183	70	アヨー	2　いなぬばな　すりぬばな　いでやおり：「稲花　すりの花出なさり」	農耕・豊作感謝	作物・稔りの象徴 祭祀の民俗（日選り・供物各種・をなりの呪詛・祖先崇拝・神前感謝）
102	151	イネ	ばな	ぶばなあゆ	波照間島	183	70	アヨー	4　九合ぬばな　かじやら　わるよ：「九合のはな米を供えなさるよ」	農耕・豊作感謝	供物 祭祀の民俗祭祀の民俗（日選り・供物各種・をなりの呪詛・祖先崇拝・神前感謝）・
103	151	イネ	稲	ふなー星ゆんた	石垣島新川村	310	24	ユンタ	4　稲作り　見りばど　稲のなおりすや　ち玉にやし：「稲を作ってみたら　稲の稔っているのは　数珠玉のように」	農耕・豊作希求（稔り）	作物、稔りの期待(ジュズダマ) 星ごよみ・農耕・作物の稔り（aタイプ　植物ともの）・
104	151	イネ	米（まい）	猫ゆんた	石垣島石垣村	331	49	ユンタ	17　米（まい）ぬんぼん　食（ふあ）しよーたら：「米のご飯をたべさせなさると」	情話・世情	米のご飯、役人の家のご飯、 物語・猫（擬人）・親子の情愛・賄い女・狩猟・コメ飯

総番号	出現数	植物名	テキスト語形（方言名）	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現（歌謡の主題）	キーワード
105	151	イネ	まい	のーりぃゆーゆんた	石垣島石垣村	338	61	ユンタ	5　まいのーれ　やまちぃだま　あーぬのーれ　ならぎぃいし：「米の稔りは山数珠玉のよう　栗の実りは長小石のよう」	農耕・豊作希求（稔り）	作物，稔り（山ジュズダマのよう） イネ･アワ農耕・稔りの喩え（パターンa）・畔枕
106	151	イネ	稲（まい）	網張るの目高蟹ゆんた あんばりいぬみだがーまゆんた	石垣島大川村	341	66	ユンタ	11　稲（まい）の穂（ぶー）ば　取（とう）り持（む）ち：「稲の穂を取り持ち」	村祭り	作物 村行事･蟹（擬人化）・観察眼
107	151	イネ	まい(米)	ふなー星ゆんた	石垣島大川村	342	68	ユンタ	4　米（まい）作り　のうらしどぅ　場が島どぅ　島ぬ本：「米を作って稔らせて　我が島こそ島の本」	農耕・豊作希求（稔り）	作物 星暦・五穀の稔り
108	151	イネ	まい	月出ぬ花むね	石垣島大川村	344	71	ユンタ	2　米（まい）作り見りばど　米（まい）ぬのーれーちだまなり：「米を作ってみたら　米の稔りは数珠玉の実のよう」	農耕・「遊び」	作物、稔り（ジュズダマ） 昔世・神の世・稔りの喩え（パターンa）
109	151	イネ	しるごめ/むちごめ	生りや竹富	石垣島登野城村	355	86	ユンタ	4　しる米（ごめ）ぬ　むち米（ごめ）よー　ゆやんどー：「白米の　餅米の故に」	情話・問答・村分け	食物・作物 村分け、望郷、山の白雲
110	151	イネ	あらばな／あまいばな	きゆがびーゆんた	石垣島登野城村	363	96	ユンタ	2　ヤーあらばなぬ　イーあまいばな　すらゆでいヨホナハ：「新花が　稲の花が　咲き揃って」	農耕・作業歌(草取り)	作物(繁茂) 草取り、作業歌
111	151	イネ	まい（つくり）	むり星ゆんた	石垣島平得村	366	101	ユンタ	10　稲（まい）作り　作りょうり　稲（いに）ぬさ種子（さに）　うらしょうり：「米をつくりなされよ 稲の種子をおろしなされよ」	農耕、星暦	作物 田小屋(苗代小屋）星見、天体
112	151	イネ	いに（ぬさに）	むり星ゆんた	石垣島平得村	366	101	ユンタ	10　稲（まい）作り　作りょうり　稲（いに）ぬさ種子（さに）　うらしょうり：「米をつくりなされよ 稲の種子をおろしなされよ」	農耕、星暦	作物 田小屋(苗代小屋）星見、
113	151	イネ	くみーだら（米俵）	東節 あがりぶし	石垣島大浜村	372	109	ユンタ	8　米俵（くみだーら）ど乗（の）せおる　ばがういぬすんけーら：「米だ藁をのせて来なさる　我が上のスンケーラ」	農耕・問答	船に乗ってくる（米俵） にらいかない信仰、
114	151	イネ	くみ(稲)	ふなー節	石垣島大浜村	372	110	ユンタ	8　稲作（くみちく）り　稔（のお）らし　我島どよお島ぬ本（むと）よ　ならいじ：「米を造って稔らして我が島が島の元」 7　稲稔（くみなぐ）り　しだましじ　我島どよお　島ぬ本（むと）よ　ならいじ　：「米の稔りはジュズダマの粒のよう我が島が島の元」	農耕・星座	作物 星暦・作物の実り、祈願
115	151	イネ	まい	鳩間ゆんた	鳩間島	403	154	ユンタ	3　まいばしみしき　うむしるや　あわば　しみしき　うむしるや：「米を積んで　面白いことよ　栗をつんで　さて見事」	情話・土地誉め	作物、積荷（豊穣の象徴） お国自慢
116	151	イネ	くみ	ちんだいらばゆんた	小浜島	410	162	ユンタ	8　くみとたき　あわとたき　ふさぬなよ：「米のように　アワのように　欲しいのよ」	情話･恋話、相聞歌	必要なものの象徴 （烏賊・蛸）
117	151	イネ	いなむら(稲叢)	にーういぬゆんた	竹富島	420	175	ユンタ	9　囲地（かくち）なみしら　並（な）みしら並（な）みぬ　残（ぬく）るや：「屋敷に稲叢（しら）を並べ稲叢を並べの残りは」	農耕・豊作希求（繁茂から収穫、祭りまで）	作物、御酒の材料 好天の願い、稔りの願い、をなり、予祝
118	151	イネ	むちぐみ／しるぐみ	真栄ゆんた まさかいゆんた	竹富島	422	180	ユンタ	5　餅米（むちぐみ）ぬ　白米（しるぐみ）ぬ　くりふしゃんど：「餅米が　白米が　これが欲しくて」	情話・村立て	食物、作物 村立て、別れ、白い雲，望郷
119	151	イネ	むちぐみ／さぐぐみ	古見浦ぬぶなりょうま〈ゆんた〉引羽 くんのうらぬぶなりょうまゆんたひくば	竹富島	436	202	ユンタ	5　餅米（むちぐみ）ん　七升（ななしゆ）　さぐ米（ぐみ）ん　七升（ななしゆ）：「持ち米も七升　粳米も七升」	貢納布	織り物の対価

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名	テキスト語形（方言名）	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現（歌謡の主題）	キーワード
120	151	イネ	まい	ばるまみちぃだかゆんた	波照間島	455	228	ユンタ	11　粟（あー）ぬぷーば　あちみようり：「粟の穂をあつめなさり」 12　米（まい）ぬぷーばあちぃみようり：「米の穂をあつめなさり」	情話・世情・擬人	作物 祭り行事の擬人化、観察、
121	151	イネ	まい	巻踊り歌	石垣島石垣村	595	1	豊年祭	3　まいつくり　のうらし　：「米を作り稔らして」	農耕	作物　五穀（米粟黍麦豆） 星見
122	151	イネ	神ぶばな（神への穂花）上ぶばな（上への穂花）	まきおどりの歌	石垣島白保村	597	6	豊年祭	2　神ぶばな　上ぶばな　うやいす：「神への穂花　上への穂花　さしあげます」	農耕	
123	151	イネ	稲俵	ありぬ渡からの歌	石垣島白保村	597	7	豊年祭	5　米俵ど　ましやおーる：「米俵を積んで来られる」	農耕	
124	151	イネ	まい	豊年祭雛踊唄	黒島仲本村	606	24	豊年祭	2　黒島主の前のうやは田のまいや　今日やまいはりざるざあるすりびし　見りば嬉さどす：「黒島の主に前の役田の米は　今日は米を刈り　ザルザルと摺り据えて　見ればうれしい」	農耕・豊年祭	
125	151	イネ	神花米	願いの盃の歌 久間原御嶽の神歌	竹富島	615	5-(4)		2　神花米（みはなぐみ）かざり　御五水（みぐし）かざり　しかさきょうらてぃずりび　みふどぅ付（す）きゆる：「御花米を飾り　御酒を飾り　司皆手摺り部に　御果報がつく」	農耕・豊年祭	
126	151	イネ（アワ？）	銀種子/黄金種子	銭太鼓	竹富島	617	8	蝗蟲の祭	2　銀種子（なんじゃだに）蒔き入り　くがにだに（黄金）種子蒔き入り：「銀種子　を蒔き入れ　黄金種子を　蒔き入れ」	農耕	
127	151	イネ（アワ）	イネ・アワ	雨乞い歌	石垣島大浜村	580	4	雨乞い	13　稲粟ぬ　為しょうり　：「稲粟のためにしてください」	雨乞い	
128	151	イネ（米）	大御飯（赤飯）	命名祝 しらよい	竹富島	78	117	ニガイフチィ	大御飯御調うーくばんぐうーとうとうない：「大御飯〈赤飯〉を整えて」	出産	供物 出産の祝、命名
129	151	イネ？	かんくばな・ういうふばち	角皿	波照間島	107	16	フミシャギイ	かんくばな　ういうふばち　にげゆる：「神饌米　上お初をを願う」	農耕	供物・収穫
130	151	イネ？	かんくばな・ういうふばち	角皿	波照間島	107	16	フミシャギイ	かんくばな　ういうふばち　にげゆる：「神饌米　上お初を願う」	農耕	供物・収穫
131	151	イネ（米）	まい（米）	内原ほーちゃ うちばるほーちゃ	石垣島川平村	123	3	ユングトゥ	ちくでる米（めい）や　誰が米（まい）　私の米：「作った米は誰の米？　私の米」	農耕・情話（艶談）	作物・踏耕・収穫・豊作表現・問答歌・民俗（夜這い）
132	151	イネ（コメ）	まい	たらまゆら	石垣島川平村	155	1	アヨー	5　片くびや　米じらど　ぬしゃおーる：「片方は米震を乗せてこられる」 6　まいですや　田原地区　うはらし：「米というのは田原＜地名＞地区に招きなさる」 8　米（まい）ぬ穂ゆ　ちくりてゆ　拝みばど　山しいだま　なりぬんぐとぅ　うがまり：「米の穂を作って拝見すると　山数珠玉の果実のように拝見できる」 9　米（まい）しにや　米（まい）みしゃぐ　きいらしょうり：「米では米神酒をつくりなされよ」 11　米（まい）みしゃぐ　ふうきぃばなや「米神酒の沸くころは	農耕・豊作希求	作物・豊作・種子の由来・ニライカナイ信仰・神酒の材 祭祀民俗、
133	151	イネ（コメ）	きゃらまい	山かしぃにあよう	石垣島新川村	158	8	アヨー	4　きゃら米ぬ　根下りや　田のよる田に　根下りしょうる：「キラマイ（米）の根下（お）りは　苗代田に根下（お）りしなさる」	情話・「栄える」	「栄える」する樹木例・対比表現 「人と植物」（豊作）」 「栄える」の列挙
134	151	イネ（マイ）	まいみきい（米神酒）	米神酒ぬあよう まいみきいあよう	西表島租納村	167	30	アヨー	1米御酒（まいみきい）ぬ　ふくざりどぅ　んちばな：「米神酒の沸くときが飲むとき」	農耕・豊作感謝	神酒の材 豊作祝の民俗・信仰

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名	テキスト語形（方言名）	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現（歌謡の主題）	キーワード
135	151	イネ（マイ）	まい（米神酒）	米神酒しやーぬあよう まいみきいしやーぬあよう	西表島租納村	168	31	アヨー	1米御酒（まいみき）しやぬ　んまさや　苗代田（なつしすだ）どぅ　んまさる：「米神酒のおいしいのは苗代田によっておいしさが（ちがう）」	情話・世情	神酒の材 祭祀民俗、対比表現（もの・動物・人・食物「おいしい・かわいい・出自」）、
136	151	イネ（コメ）	稲が種子	稲が種子	竹富島	170	39	アヨー	1ちちぬ子ぬ　佳よか）る日ぬ　種子取る：「つちのえねの日の　吉かる日の種子取る」	農耕・豊作希求（播種）	作物・豊作の願い・品種・ 祭祀民俗、日選り、恵みの雨・発芽・予祝
137	151	イネ（コメ）	ナガヒン種子・	稲が種子	竹富島	170	39	アヨー	粟種子	農耕・豊作希求（播種）	作物・豊作の願い・品種・ 祭祀民俗、日選り、恵みの雨・発芽・予祝
138	151	イネ（コメ）	ムルカ種子	稲が種子	竹富島	170	39	アヨー	粟種子	農耕・豊作希求（播種）	作物・豊作の願い・品種・ 祭祀民俗、日選り、恵みの雨・発芽・予祝
139	151	イネ（コメ）	うはちまい（御初米）	かびらぶりーくあゆー〉	竹富島	175	49	アヨー	11八重山例船（やいまりーしん）　御初米（うはちまい）　持（む）ちゃる：「八重山例船（りーせん）御初米を積んだ〔船）」	情話・航海	貢納米 貢納旅
140	151	イネ（コメ）	ばな	くばなあよう	波照間島	186	76	アヨー	3　かきむぬば　さやわり　くんぐばな　かちゃりより：「軸物を掛けなされよ　九合花米（はなごめ）を供えなされよ」	農耕・豊作感謝	供物 祭祀の民俗祭祀の民俗（日選り・供物各種）
141	151	イネ（コメ）	まい	いにがだにあゆ	与那国島	186	77	アヨー	4　まいといしか　ゆみやうるし　あわといしか　どむやうるし：「米を十束数え下ろして　粟を十束数え下ろして」	農耕	作物・豊作の願い・品種・ 祭祀民俗、日選・種子選び・をなり・播種・発芽・繁茂・稔り・予祝
142	151	イネ（米）	まぎぃ	たらまゆらじらば	石垣島川平村	190	5	ジラバ	6 まぎでぃすや　たばりしく　おはらしよう　あわでぃすや　まじしくにちぃかいし：「米というのは田原底（たばるすく）のお連れして粟というのは　真地底（まーじすく９にお招きして」 7 まぎぃでぃすぬ　ぶゆちぃくり　うがみばどぅ　やましぃだま　なりぬんぐとぅ　うがまり：「米というものの　穂を作り　拝めば　山数珠玉の　実の如く拝まれる」	農耕・豊作希求	作物・豊作・種子の由来・ニライカナイ信仰・神酒の材 多良間と石垣の関係の伝承・祭祀民俗供物・をなり・豊年祝）、
143	151	イネ（米）	米（まい）	とぅんぎゃーら	石垣島新川村	194	11	ジラバ	8　粟（あー）つくどん　米（まい）つくどん　世（ゆ）ば稔（なう）り　世ば稔り：「アワを作っても米を作っても世は稔れ　世は稔れ」	農耕・豊作感謝	「世」の稔り 豊作の感謝・にらいかない・漂着する船・「世」の由来
144	151	イネ（米）	米束（くみちか）	古見の浦じらば くんぬうらじらば	石垣島大浜村	217	34	ジラバ	12　粟束（あわちか）ぬ　七（なな）すくん：「粟束の七束を」 13ｎ米束（くみちか）ぬ　七束（ななちか）：「米束の七束を」	情話・布織り	換金作物 機織り、貢納、
145	151	イネ（こめ）	くみ	ちんだ入りぬじらば	小浜島	247	79	ジラバ	7　くみとだき　あわとだき　ふさぬなよ：「米のように　粟のように　欲しいよ」	情話・恋話・片思い	必要なものの（水と米／アワ）
146	151	イネ(コメ)	米	みんだかはらまいぬじらま	小浜島	254	88	ジラバ	4　米ぬ穂（ぼー）ば　ふあ（食）いむちうりき：「米の穂を食い持ち降り来て」 5　粟ぬ穂ば　食いむちうりき：「粟の穂を食いもち降り来」 6　米ぬ穂や　みしゃくばまらひ：「米の穂はお神酒を作り」 7　粟ぬ穂や　あわむるまらひ：「粟の穂は泡盛を作り」	情話・習俗	御酒の材 行事の擬人化（人と魚・蟹）、祭りの習俗、自然観察

八重山歌謡の植物歌資料

総番号	出現数	植物名	テキスト語形（方言名）	歌謡名	地域	ページ／no.		ジャンル	植物の詞章	植物の表現（歌謡の主題）	キーワード
147	151	イネ（コメ）	米（まい）	東かーら あがるかーら	石垣島川平村	292	2	ユンタ	5　片くびや　米じらどぅ　ちみゃおーる：「片壁は米叢を積んで来なさる」 7　米ですや　田原しくに　うはらし：「米というのは田原底（地名）にご案内して」 9　米（まい）ぬ穂（ぶー）ゆ　作りてぃ　拝みばどぅ山すだま　実（なり）ぬんぐと　うがまり：「米の穂を作って拝むと　山数珠玉のように　拝まれる」 11　米しにや　米みしゃぐ　きぃらしより：「米では米神酒を作りなさり」	農耕・豊作希求（播種～稔り）	作物 ニライカナイ信仰・種子の来訪（アワ叢／コメ叢が船に乗って来る）・イネへの敬語・稔りの喩え・神酒・豊作の祝い・
148	151	イネ（コメ）	米	ちくいでぬはちむぬ	石垣島川平村	292	3	ユンタ	8　米神酒（まいみしゃぐ）きぃらしょうり：「米神酒を造りなさり」	農耕（貢納）	作物、初物、御酒の材 日選り・貢納・神酒・刈り入れの祝い・国王賛美
149	151	稲粟	稲粟	ばーれー唄	黒島	604	22	豊年祭	2うふぬ　原登ぶてぃ　うしくだしみりば　稲粟ぬなほり　みるく世果報：「大野原に登って押し下し見ると稲粟の稔りは弥勒世果報（豊年）」	農耕	
150	151	稲粟	稲・粟	くいちゃ踊＜仲羽＞	竹富島	616	7		2　今年作たる　稲粟や　やらぶぬ実だぎ　のーりょーり：「今年作った稲粟や　ヤラブ（樹木名テリハボク）の実のように稔って下さい。	農耕	
151	151	米倉	米倉	ばーれー唄	黒島	604	22	豊年祭	4　ふしぃまぬなりや　果報ぬしまやりば　米倉ばくさでぃ　うみ子まいなし：「黒島の習慣は果報（豊年）の島だから　米倉を腰当てに、思子＜子孫＞を前にして	農耕	作物 倉

八重山歌謡の植物写真資料(50 音順)

凡　　例

＊植物写真は、沖縄本島、周辺離島、八重山等で筆者が撮影したものである。

＊筆者が見つけられなかった植物と、歌で特定できない植物の写真は空欄とした。

＊各植物写真には、和名と学名を記した。

＊学名は、主に、天野鉄夫の『琉球列島植物方言集』(天野　1976) に記載され学名を用いている。そして、上記に掲載が無い植物については、『図鑑琉球列島有用樹木誌』(天野　1989)、『沖縄植物野外活動図鑑＜海辺の植物とシダ植物＞第 4 巻』(多和田 監修　1981)、『原色牧野植物大圖鑑』(牧野　1982) から学名を転記している。

各学名の出処は、植物名の欄の右端に以下の記号で記載した。

＜例＞　天　　p.～　　→『琉球列島植物方言集』　記載頁

て　　p.～　　→『図鑑琉球列島有用樹木誌』　記載頁

沖-4　p.～　　→『沖縄植物野外活動図鑑＜海辺の植物とシダ植物＞第 4 巻』　記載頁

牧　　p.～　　→『原色牧野植物大圖鑑』　記載頁

八重山歌謡の植物写真資料（和名50音順）

1

アキノノゲシ　天 p. 166
Lactuca indica L.



2

アコウ　て p. 61
Ficus superba var. Miq. japonica Miq.
Ficuscaulocarpa. Miq. オオバアコウも同じ方名



3

アシ(ヨシ)　天 p. 182
Phragmites communis Trin



4

アズキ　天 p. 61
Phaseolus angularis



5

アダン　天 p. 170
Pandanus odoratissimus W. F. Wight



6

アデク　天 p. 111
Syzygium buxifolium Hook. & Arn.



7

アブラナ　天 p. 44
Brassica rapa L. var. nippooleifera Kitamura



8

アワ　天 p. 185
Setaria italica Beauv.



9

イヌマキ　天p. 9
Podocarpus macrophyllus D. Don.



10

イネ　天p. 180
Oryza sativa L.



八重山歌謡の植物写真資料（和名50音順）

11 イボグサ　沖-4　p.265
Aneirema kasisak Hassk.



12 ウラジロエノキ　天 p.17
Trema orientalis BI.



13 オオタニワタリ
Asplenium antiauum Makino　天 p.7
Asplenium　nidus L（シマオオタニワタリ）



14 オオハマボウ（ユーナ）　天 p.97
Hibiscus tiliaceus L.



15 オガタマノキ
Michelia compre
-ssa Sarg.　て p.73



16 オキナワウラジロガシ　天 p.15
Quercus miyagi koidz



17 リュウキュウガキDiospyros maritima BI.左）
リュウキュウマメガキDiospyros japonica（右）
天p.124



18 ガジュマル　天 p.20
Ficus microcarpa　L.



19 カヤ
*「カヤ」はチガヤやススキ等、屋根を葺くなどの特に有用植物の総称である。



20 キノコ

no phot

八重山歌謡の植物写真資料（和名50音順）

21 キビ　天 p.180
Panicum miliaceum L.var. contractum Alefeld
ムギ→
アワ→
←キビ


22 クチナシ　天 p.146
Gardenia jasminoides Ellis f.grandiflora Makiko


23 クロツグ　天 p.192
Arenga tremula Becc. Var.engleri


24 クロヨナ　天p.62
Pongamia pinnata Pierre


25 クワズイモ　天 p.194
Alocasia odora Spach


26 グンバイヒルガオ　天 p.133
Ipomoea pes-caprae R.Br.


27 ゲットウ　天 p.213
Alpinia intermedia Gagnep.


28 コシダ　天p.4
Dicranopteris dichotoma Bernh.


29 サツマイモ　天 p.132
Ipomoea batatas Lam.


30 サトイモ　天 p.196
Colocasia esculentum Schott


八重山歌謡の植物写真資料（和名50音順）

31 ヒラミレモン（シークヮシャー） 天 p. 66
Citrus depressa Hayata



32 シマクワ 天 p. 23
Morus oustralis Poir.



33 シマミサオノキ 天 p. 149
Randia canthioides Champ.

no phot

34 ジュズダマ 天 p. 174
Coix lacryma-jobi L.



35 シュロ 天 p. 193
Trachycarpus fortunei H. Wendl



36 ススキ 天 p. 178
Miscanthus sinensis Anders.

ススキとチガヤ ↓



37 ソテツ 天 p. 178
Cycas revoluta Thunb



38 ダイコン 天 p. 45
Raphanus sativus L. var. hortensis Backer





ダイコンの花

39 タケ類



40 タブノキ 天 p. 42
Persea thunbergii Kosterm.



八重山歌謡の植物写真資料（和名50音順）

41 ダンチク　天 p.172
Arundo donax　L.



42 チカラグサ（オヒシバ）　天 p.176
Eleusine indica Gaertn.



43 チャ

no phot

44 カラムシ（マオ）　天 p.24
Boehmeria nivea Gaudich.



45 デイゴ　天 p.57
Erythrina variegata　L.var.
orientalis Merr.



46 テリハノブドウ　天　p.92
Ampelopsis brevipededunculata Trautv.
var. hancei Rehd





47 テリハボク　天 p.102
Calophyllum inophyllum L.





↑テリハボクの実

48 トウツルモド　天 p.198
Flagellari indica L.



49 ニラ　天 p.203
Allium tuberosum　Rottler





ニラの花（蕾み）

50 ニンニク　天 p.203
Allium tubreosum Rottler



八重山歌謡の植物写真資料（和名50音順）

51 野芋

no phot

52 ノブドウ　牧 p. 323
Ampelopsis brevipedunculata Trautv.



53 バショウ（イトバショウ）　天 p. 211
Musa balbisiana Colla



54 パパイア　天 p. 105
Carica papaya L.



55 ハマオモト　天 p. 208
Crinum asiaticum L.



56 ハマゴウ　天 p. 138
Vitex rotundifolia L. f.



57 ハリツルマサキ　天 p. 87
Maytenus diversifolia Ding Hou



58 ヒルギ科　天 p. 108
Rhizophoraceae



↑ヒルギの種子

59 ビロウ　天 p. 192
Livistona chinensis R. Br var. subglobosa Becc.



60 フカノキ　天 p. 114
Scheffera octophylla Harms



八重山歌謡の植物写真資料（和名50音順）

61 ヘチマ　天 p. 156
Luffa cylindrica M. Roen.



66 マメ類



左はダイズ

62 ホソバワダン　天 p. 165
Crepidiastrum lanceolatum



67 ムギ　牧 p. 638
Triticum aestiunm L.（コムギ）



63 ボタンボウフウ　天 p. 117
Peucedanum japonicum Thunb.



68 モクコク　天 p. 102
Ternsteoemia japonica Thunb.

no phot

64 マツ（リュウキュウマツ）　天 p. 10
Pinus luchuensis Mayr



69 モヤシ



65 マツリカ　天 p. 127
Jasminum sambac Ait.



70 モロコシソウ　天 p. 122
Lysimachia sikokiana Miq.

no phot

八重山歌謡の植物写真資料（和名50音順）

71 モンパノキ 天 p. 135
Messerschmidia argentea Johnst.



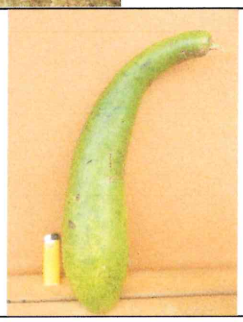
72 ヤマブドウ
Vitis coignetiae

no phot

73 ヤマモモ 天 p. 14
Myrica rubra S. & Z.



74 ユウガオ 天 P. 155
Lagenaria siceraria
Standl. cv. Hispida



75 ユリ 天 p. 201
Liliaceae(ユリ科)



76 ヨモギ 天 p. 159
Artemisia princeps Pamp. Var. orientalis Hara



77 ラッキョウ 天 p. 201
Allium cepa L.

no phot

78 リュウキュウコクタン 天 p. 123
Diospyros ferrea Bakh.



アマミヒトツバハギ 天 p. 81
Securinega suffruticosa Rehd. Var. amamiensis Hatusima



宮古歌謡関係